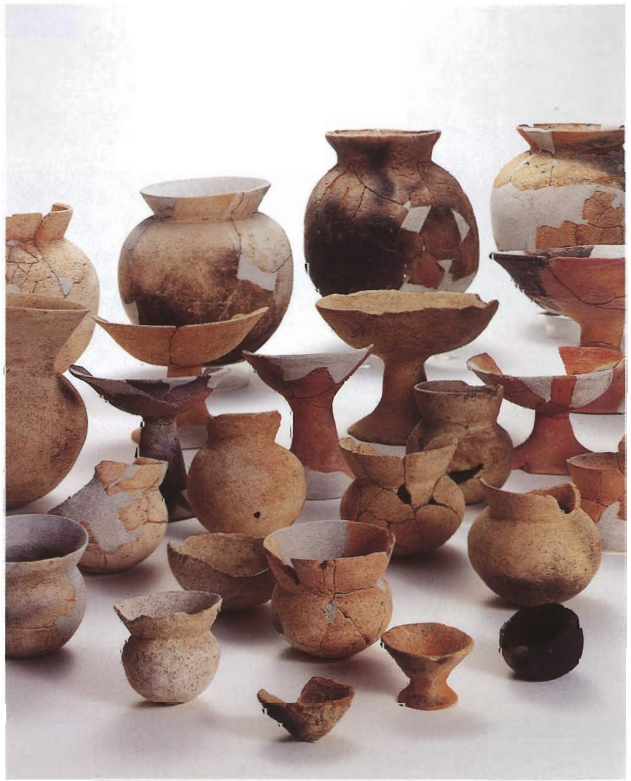
九景川遺跡

一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I

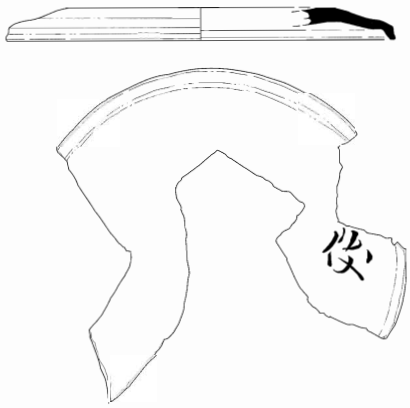
2008年3月

島根県教育委員会



九景川（くけがわ）遺跡

一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ



Ⅲ区SR04出土「伎」墨書土器

2008年3月

島根県教育委員会

1．九景川遺跡上空から日本海・神西湖（旧神門水海）方向を望む

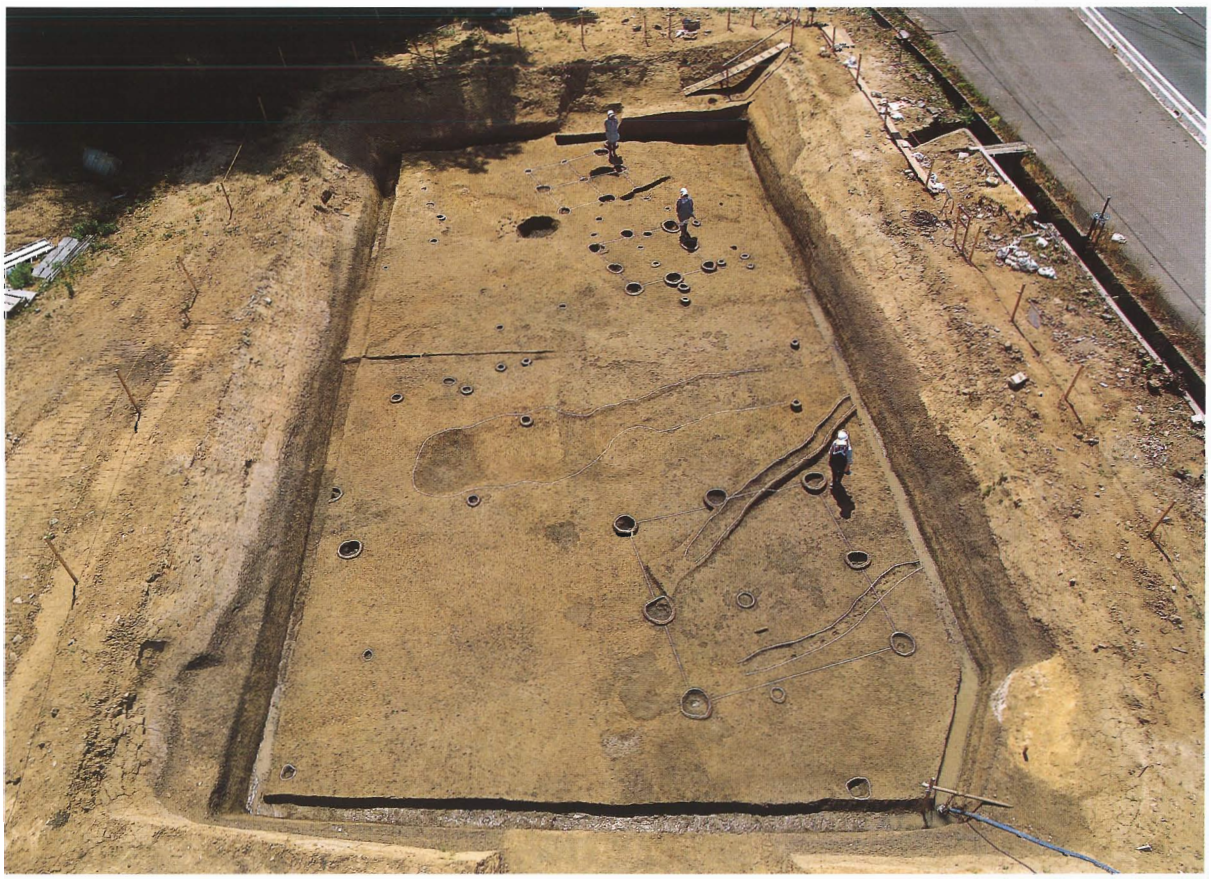
2．九景川遺跡上空から出雲平野方面を望む

巻頭図版２

１．Ⅲ・Ⅳ区完掘時（北から）

２．Ⅲ区古墳時代・古代遺構面（北から）

１．Ⅳ区完掘時（東から）



２．Ⅰ区５層上面遺構群（東から）

1．Ⅰ区 SK01 古銭検出時

2．Ⅲ区 SX02（北から）

1．Ⅲ区古代建物群（北東から）

2．Ⅲ区 SB08（西から）

1．Ⅲ区 SB10（北から）

2．Ⅲ区 SR03 古墳時代中期土師器出土状況（北から）

序

本書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて、平成17年度に実施した一般県道出雲インター線建設予定地内に所在する九景川遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

九景川遺跡は出雲市東神西町に所在し、出雲平野南端の谷部に立地する集落遺跡です。周辺には古墳時代前・中期では出雲部最大級の前方後円墳である北光寺古墳や戦国時代の尼子氏・毛利氏の合戦の舞台となった神西城跡など重要な遺跡が存在し、神門水海（現在の神西湖）に面する交通要衝の地として出雲部でも注目される地域の一つです。

本遺跡からは、主として古墳時代中期、奈良・平安時代、鎌倉時代の集落が折り重なるような状態で発見されました。古墳時代中期の集落は出雲平野においては珍しく、掘立柱建物の柱材が遺存するなど残存状況が良好な点が特筆されます。さらに、谷を流れる小川では多量の土師器が投棄された状態で出土し、水辺において執り行われた祭祀跡と考えられ、当時の集落内における祭祀のあり方を考える上で興味深い発見となりました。また、奈良・平安時代の集落跡からは多数の掘立柱建物が検出され、『出雲国風土記』に記載される滑狭郷を構成する集落の一つであったと考えられます。鎌倉時代の集落跡からは建物跡とともに小規模な貝塚が検出され、鯨骨や漁撈具など、当時の人々の日々の営みを彷彿とさせる遺構・遺物を多数検出することができました。

これらの調査成果は島根県の歴史を明らかにするうえで欠くことのできない貴重な成果であるといえます。本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を深める一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査と報告書の作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や、出雲市並びに島根県土木部をはじめとする関係機関の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成20年3月

島根県教育委員会
教育長　　藤　原　義　光

例　言

1．本書は、島根県土木部道路建設課からの委託を受けて、島根県教育委員会が平成17年度に実施した一般県道出雲インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査地は下記のとおりである。

出雲市東神西町257-2外　九景川遺跡

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

平成17年度　現地調査

［事　務　局］　卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（総務課長）、川原和人（調査第1グループ課長）

［調　査　員］　池淵俊一（同文化財保護主事）、田中玲子（同臨時職員）、糸賀伸文（同）

［調査指導］　田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、蓮岡法暲（同）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）

平成18年度　報告書作成

［事　務　局］　卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、坂本憲一（総務グループ課長）、川原和人（調査第1グループ課長）

［調　査　員］　池淵俊一（同文化財保護主任）、田中玲子（同臨時職員）

4．発掘調査ならびに報告書作成にあたっては以下の方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して謝意を表させていただく。

西本豊弘（国立歴史民俗博物館教授）、小笠原善治（松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財調査センター調査員）、川上稔、景山真二（出雲市文化財課）、米田克彦（岡山県古代吉備文化財センター）、大賀克彦（島根県古代文化センター特任研究員）、中村唯史（三瓶自然館指導員）、平尾政幸（㈶京都市埋蔵文化財研究所）

5．挿図で使用した方位は、測量法による第3座標系X軸方向を指し、平面直角座標系XY座標は日本測地系による。また、レベル高は海抜高を示す。

6．本書で使用した第2図は国土地理院発行の1/25,000地図、第3・209図は出雲市都市計画平面図を使用して作成したものである。

7．本調査に伴って行った自然科学的分析は、次の機関に委託して実施し、その成果の一部は第7章にまとめて掲載した。

柱材の放射性炭素年代測定、出土木製品の樹種同定分析、中世貝塚貝類分析、花粉分析及びプラントオパール分析（以上、文化財調査コンサルタント）、鍛冶関連遺物分析（九州テクノリサーチ）

8．本書に掲載した写真は、空中写真を除き松山智弘の協力を得て池淵が撮影した。

9．本書に掲載した遺物実測図の作成は、各調査員のほか、飯塚由起、内田律雄、陶山佳代、田中裕貴、守屋かおるが行った。遺物・遺構の浄書は池淵、飯塚、陶山、田中玲子が行った。

10. 本書の編集は池淵が行った。
11. 注は各章ごとに連番を振り当該頁下に配置した。参考文献は各章末にまとめて示したが、第3章～7章は第7章巻末にまとめて掲げた。また挿図番号は第8章は各節ごとに番号を振り、第8章を除く各章は通し番号により表示した。
12. 本文・図版中の表記に用いた遺構略号は次のとおりである。
    SI：竪穴住居、SB：掘立柱建物、SD：溝、SK：土坑、SR：自然河道、SX：その他の遺構
13.. 遺物実測図の断面は、縄文土器、弥生土器、土師器を白ヌキ、須恵器を黒塗り、陶磁器を50%スミで示している。赤色または▲印は赤彩土師器の赤彩範囲を示す。
14. 本書の仕様は巻末に示した。
15. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターにて保管している。

本文目次

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　九景川遺跡の位置と環境 …… 2

第３章　調査の経過状況と概要 …… 7
　第１節　調査の方法
　第２節　調査の経過

第４章　Ⅰ区の調査 …… 13
　第１節　基本層位
　第２節　２層上面検出遺構の調査
　第３節　４層上面検出遺構の調査
　第４節　５層上面検出遺構の調査

第５章　Ⅱ区の調査 …… 40
　第１節　基本層位
　第２節　３層上面検出遺構の調査
　第３節　４・５層上面検出遺構の調査

第６章　Ⅲ区の調査 …… 57
　第１節　基本層位
　第２節　南西部４層上面検出遺構の調査
　第３節　６層上面検出遺構の調査
　第４節　縄文時代遺構面の調査
　第５節　その他の遺物

第７章　Ⅳ区の調査 ……163
　第１節　基本層位
　第２節　４層上面検出遺構の調査
　第３節　５層上面検出遺構の調査
　第４節　６層上面検出遺構の調査
　第５節　その他の遺物

第８章　自然科学的分析 ……226
第１節　九景川遺跡出土椀形鍛冶滓の金属学的調査
九州テクノリサーチ・TAC センター　大澤正己・鈴木瑞穂
第２節　九景川遺跡発掘調査に伴う自然科学分析
文化財調査コンサルタント株式会社　渡辺正巳
第３節　九景川遺跡出土柱材の樹種同定及びＡＭＳ年代測定
文化財調査コンサルタント株式会社　渡辺正巳・古野毅
第４節　九景川遺跡発掘調査に伴う貝類分析
財団法人島根県環境保健公社　田中秀典
文化財調査コンサルタント株式会社　渡辺正巳
第５節　九景川遺跡の動物遺体・植物遺体
国立歴史民俗博物館　西本　豊弘
第６節　九景川遺跡から出土した土器の胎土について
島根県埋蔵文化財調査センター　柴崎晶子

第９章　総括 ……284
第１節　九景川遺跡の変遷
第２節　古墳時代中期前半の遺構・遺物に関する諸問題
第３節　古代の建物群について

挿図目次

第1図　九景川遺跡の位置……2
第2図　九景川遺跡の位置と周辺の遺跡……3
第3図　調査区の配置……7
第4図　調査区地区割り図……8
第5図　九景川遺跡Ⅰ区土層図……14
第6図　九景川遺跡Ⅰ区2層上面遺構配置図……15
第7図　九景川遺跡Ⅰ区SK01実測図……16
第8図　九景川遺跡Ⅰ区SK01銭貨出土状況……16
第9図　九景川遺跡Ⅰ区SK01出土遺物実測図(1)……17
第10図　九景川遺跡Ⅰ区SK01出土遺物実測図(2)……18
第11図　九景川遺跡Ⅰ区SD01実測図……19
第12図　九景川遺跡Ⅰ区4層上面平面図……20
第13図　九景川遺跡Ⅰ区SB01・SA01実測図……21
第14図　九景川遺跡Ⅰ区SK02・03実測図……22
第15図　九景川遺跡Ⅰ区SK02遺物出土状況……23
第16図　九景川遺跡Ⅰ区SK03遺物出土状況……23
第17図　九景川遺跡Ⅰ区SK02・03・SD05・06・P85出土遺物実測図……24
第18図　九景川遺跡Ⅰ区SD02・03実測図……25
第19図　九景川遺跡Ⅰ区SD04・05実測図……25
第20図　九景川遺跡Ⅰ区3層出土遺物実測図(1)……26
第21図　九景川遺跡Ⅰ区3層出土遺物実測図(2)……27
第22図　九景川遺跡Ⅰ区5層上面平面図……29
第23図　九景川遺跡Ⅰ区SB02実測図……30
第24図　九景川遺跡Ⅰ区SB03実測図……31
第25図　九景川遺跡Ⅰ区SB04実測図……32
第26図　九景川遺跡Ⅰ区SD06・08実測図……33
第27図　九景川遺跡Ⅰ区SD07実測図……34
第28図　九景川遺跡Ⅰ区SD07遺物出土状況……35
第29図　九景川遺跡Ⅰ区SD07出土遺物実測図……36
第30図　九景川遺跡Ⅰ区SX01実測図……37
第31図　九景川遺跡Ⅰ区4・5層出土遺物実測図……38
第32図　九景川遺跡Ⅰ区遺構外出土遺物実測図……39
第33図　九景川遺跡Ⅱ区3層上面平面図……40
第34図　九景川遺跡Ⅱ区土層図……41
第35図　九景川遺跡Ⅱ区2層出土遺物実測図……42

第 36 図　九景川遺跡Ⅱ区 5 層上面平面図 …… 43
第 37 図　九景川遺跡Ⅱ区 SA02・03 実測図 …… 44
第 38 図　九景川遺跡Ⅱ区 SK04・06 実測図 …… 44
第 39 図　九景川遺跡Ⅱ区 SK05 実測図 …… 45
第 40 図　九景川遺跡Ⅱ区 SK05 出土遺物実測図 …… 45
第 41 図　九景川遺跡Ⅱ区 SD09 実測図 …… 46
第 42 図　九景川遺跡Ⅱ区 SD10 実測図 …… 47
第 43 図　九景川遺跡Ⅱ区 SD09・10 出土遺物実測図 …… 47
第 44 図　九景川遺跡Ⅱ区杭列 2 実測図 …… 48
第 45 図　九景川遺跡Ⅱ区杭列 3 実測図 …… 48
第 46 図　九景川遺跡Ⅱ区 SR02 実測図 …… 49
第 47 図　九景川遺跡Ⅱ区 SR02 遺物出土状況 …… 50
第 48 図　九景川遺跡Ⅱ区 SR02 出土遺物実測図 …… 51
第 49 図　九景川遺跡Ⅱ区 3 層遺物出土状況 …… 52
第 50 図　九景川遺跡Ⅱ区 3 層出土遺物実測図 (1) …… 53
第 51 図　九景川遺跡Ⅱ区 3 層出土遺物実測図 (2) …… 54
第 52 図　九景川遺跡Ⅱ区 4・5 層出土遺物実測図 …… 55
第 53 図　九景川遺跡Ⅱ区遺構外出土遺物実測図 …… 56
第 54 図　九景川遺跡Ⅲ区遺構配置図（古墳～古代遺構面） …… 58
第 55 図　九景川遺跡Ⅲ区西壁土層図 …… 59
第 56 図　九景川遺跡Ⅲ区北壁土層図 …… 60
第 57 図　九景川遺跡Ⅲ区中世遺構面平面図 …… 61
第 58 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB09 実測図 …… 62
第 59 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD18・SK08 実測図 …… 63
第 60 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK09 実測図 …… 63
第 61 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD17・18・21・24・26 出土遺物実測図 …… 64
第 62 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD16・17 実測図 …… 65
第 63 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD21 実測図 …… 66
第 64 図　九景川遺跡Ⅲ区 SX02 実測図 …… 67
第 65 図　九景川遺跡Ⅲ区 SX02 遺物出土状況 …… 68
第 66 図　九景川遺跡Ⅲ区 SX02 出土遺物実測図 …… 69
第 67 図　九景川遺跡Ⅲ区南西部中世遺構面遺物出土状況 …… 70
第 68 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB05 実測図 …… 72
第 69 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB06 実測図 …… 73
第 70 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB07 実測図 …… 74
第 71 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB05 ～ 08 付近ピット内遺物出土状況 …… 75
第 72 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB08 実測図 …… 76
第 73 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB05 ～ 08 出土遺物実測図 …… 77

第 74 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB10 実測図 …… 78
第 75 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB11 実測図 …… 80
第 76 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB12 実測図 …… 81
第 77 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB13 実測図 …… 82
第 78 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB14 実測図 …… 83
第 79 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB15 実測図 …… 84
第 80 図　九景川遺跡Ⅲ区ピット出土遺物実測図 …… 85
第 81 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 1 実測図 …… 86
第 82 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 2 実測図 …… 87
第 83 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 2 遺物出土状況 …… 88
第 84 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 2 出土遺物実測図 (1) …… 89
第 85 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 2 出土遺物実測図 (2) …… 90
第 86 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 3・4 実測図 …… 91
第 87 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 3・4 遺物出土状況 …… 92
第 88 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 3・4 出土遺物実測図 (1) …… 94
第 89 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 3・4 出土遺物実測図 (2) …… 95
第 90 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK07 実測図 …… 96
第 91 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK07・10・12 出土遺物実測図 …… 97
第 92 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK10 実測図 …… 98
第 93 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK11 実測図 …… 98
第 94 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK12 実測図 …… 99
第 95 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK13・SD29 実測図 …… 99
第 96 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK14 実測図 …… 100
第 97 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK14 遺物出土状況 …… 100
第 98 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK14 出土遺物実測図 …… 101
第 99 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK15 実測図 …… 102
第 100 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK16 実測図 …… 102
第 101 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK19 ～ 28 遺構配置図 …… 103
第 102 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK19 ～ 25 実測図 …… 104
第 103 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK26 ～ 28 実測図 …… 105
第 104 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD11 実測図 …… 106
第 105 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD11 出土遺物実測図 …… 106
第 106 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD15 実測図 …… 107
第 107 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD15 遺物出土状況 …… 108
第 108 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD15 出土遺物実測図 …… 109
第 109 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD24 実測図 …… 110
第 110 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD24 遺物出土状況 …… 111
第 111 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD24 出土遺物実測図 …… 112

第 112 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD26 実測図 …… 112
第 113 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD27・31 実測図 …… 113
第 114 図　九景川遺跡Ⅲ区土器だまり実測図 …… 114
第 115 図　九景川遺跡Ⅲ区土器だまり遺物出土状況 …… 115
第 116 図　九景川遺跡Ⅲ区土器だまり出土遺物実測図 (1) …… 116
第 117 図　九景川遺跡Ⅲ区土器だまり出土遺物実測図 (2) …… 117
第 118 図　九景川遺跡Ⅲ区土器だまり出土遺物実測図 (3) …… 118
第 119 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 実測図 …… 119
第 120 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 遺物出土状況（G5 グリッド付近）…… 120
第 121 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 遺物出土状況（F4・G4 グリッド付近）…… 121
第 122 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (1) …… 122
第 123 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (2) …… 123
第 124 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (3) …… 124
第 125 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (4) …… 127
第 126 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (5) …… 128
第 127 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (6) …… 129
第 128 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 遺物出土状況 (1) …… 131
第 129 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 遺物出土状況 (2) …… 132
第 130 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 遺物出土状況 (3) …… 133
第 131 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 遺物出土状況 (4) …… 134
第 132 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 遺物出土状況 (5) …… 135
第 133 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 出土遺物実測図 (1) …… 136
第 134 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 出土遺物実測図 (2) …… 137
第 135 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 出土遺物実測図 (3) …… 138
第 136 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 出土遺物実測図 (4) …… 140
第 137 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 出土遺物実測図 (5) …… 142
第 138 図　九景川遺跡Ⅲ区包含層遺物出土状況（南西部中世遺構面を除く）…… 143
第 139 図　九景川遺跡Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物実測図 (1) …… 145
第 140 図　九景川遺跡Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物実測図 (2) …… 146
第 141 図　九景川遺跡Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物実測図 (3) …… 148
第 142 図　九景川遺跡Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物実測図 (4) …… 149
第 143 図　九景川遺跡Ⅲ区 3 層出土遺物実測図 (1) …… 150
第 144 図　九景川遺跡Ⅲ区 3 層出土遺物実測図 (2) …… 152
第 145 図　九景川遺跡Ⅲ区 3 層出土遺物実測図 (3) …… 154
第 146 図　九景川遺跡Ⅲ区 3 層出土遺物実測図 (4) …… 155
第 147 図　九景川遺跡Ⅲ区 4 ～ 5 層出土遺物実測図 …… 156
第 148 図　九景川遺跡Ⅲ区縄文時代遺構面調査区配置図 …… 157
第 149 図　九景川遺跡Ⅲ区縄文時代遺構面平面図 …… 158

第 150 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR05 実測図 …… 159
第 151 図　九景川遺跡Ⅲ区縄文時代遺構面調査区付近土層図 …… 159
第 152 図　九景川遺跡Ⅲ区 6 ～ 7 層出土遺物 …… 160
第 153 図　九景川遺跡Ⅲ区遺構外出土遺物実測図 …… 161
第 154 図　九景川遺跡Ⅳ区 4 層上面（中世遺構面）遺構配置図 …… 163
第 155 図　九景川遺跡Ⅳ区東壁土層図 …… 164
第 156 図　九景川遺跡Ⅳ区北壁土層図 …… 165
第 157 図　九景川遺跡Ⅳ区 4 層上面ピット・溝遺物出土状況 …… 166
第 158 図　九景川遺跡Ⅳ区 SB16 実測図 …… 167
第 159 図　九景川遺跡Ⅳ区 SB17 実測図 …… 168
第 160 図　九景川遺跡Ⅳ区 SB18 実測図 …… 169
第 161 図　九景川遺跡Ⅳ区 P1133 実測図 …… 169
第 162 図　九景川遺跡Ⅳ区ピット・溝出土遺物実測図 …… 170
第 163 図　九景川遺跡Ⅳ区 SK17 実測図 …… 171
第 164 図　九景川遺跡Ⅳ区 SK17 遺物出土状況 …… 171
第 165 図　九景川遺跡Ⅳ区 SK17 出土遺物実測図 …… 172
第 166 図　九景川遺跡Ⅳ区 SD32 ～ 37・39・40 実測図 …… 173
第 167 図　九景川遺跡Ⅳ区貝層 3 ～ 7 実測図 …… 174
第 168 図　九景川遺跡Ⅳ区 2 ～ 3 層遺物出土状況 …… 175
第 169 図　九景川遺跡Ⅳ区 2 ～ 3 層出土遺物実測図 (1) …… 176
第 170 図　九景川遺跡Ⅳ区 2 ～ 3 層出土遺物実測図 (2) …… 177
第 171 図　九景川遺跡Ⅳ区 5 層上面遺構配置図 …… 178
第 172 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI01 実測図 …… 179
第 173 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI01 遺物出土状況 …… 180
第 174 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI01 出土遺物実測図 …… 181
第 175 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI02 実測図 …… 182
第 176 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI02 遺物出土状況 …… 183
第 177 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI02 出土遺物実測図 …… 185
第 178 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI03 実測図 …… 186
第 179 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI03 遺物出土状況 …… 187
第 180 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI03 出土遺物実測図 (1) …… 188
第 181 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI03 出土遺物実測図 (2) …… 189
第 182 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI03 出土遺物実測図 (3) …… 191
第 183 図　九景川遺跡Ⅳ区 SB19 実測図 …… 192
第 184 図　九景川遺跡Ⅳ区 SK18、SD41、43 実測図 …… 193
第 185 図　九景川遺跡Ⅳ区 4 層・4 層上面ピット遺物出土状況 …… 194
第 186 図　九景川遺跡Ⅳ区 4 層出土遺物実測図 (1) …… 195
第 187 図　九景川遺跡Ⅳ区 4 層出土遺物実測図 (2) …… 196

第 188 図　九景川遺跡Ⅳ区北側 6 層上面平面図・5 層遺物出土状況 …… 197
第 189 図　九景川遺跡Ⅳ区 5 層出土遺物実測図 …… 198
第 190 図　九景川遺跡Ⅳ区遺構外出土遺物実測図 …… 199
第 191 図　九景川遺跡 縄文時代後・晩期の様相 …… 286
第 192 図　九景川遺跡 弥生時代の様相 …… 287
第 193 図　九景川遺跡 古墳時代中期前半の様相 …… 288
第 194 図　九景川遺跡 古墳時代中期後葉～後期の様相 …… 290
第 195 図　九景川遺跡 奈良時代～平安時代前期の様相 …… 291
第 196 図　九景川遺跡 中世前半期の様相 …… 293
第 197 図　古墳時代前期末～中期土師器の分類 …… 295
第 198 図　高坏 Ba 類の分類 …… 296
第 199 図　出雲平野における古墳時代前期末～中期の土師器各型式の共伴関係 …… 298・299
第 200 図　出雲平野における古墳時代前期末～中期土師器の変遷（1） …… 300
第 201 図　出雲平野における古墳時代前期末～中期土師器の変遷（2） …… 301
第 202 図　器種・型式別の胎土類型構成 …… 304
第 203 図　高坏の型式別組成比（様相 2・3 期） …… 307
第 204 図　椀形高坏（高坏D）の地域性（様相 4 ～ 6 期） …… 307
第 205 図　高坏 Bb・Db 類関連資料 …… 309
第 206 図　出雲平野における須恵器模倣土師器 …… 310
第 207 図　SR03・SI01 ～ 03 の器種構成 …… 312
第 208 図　出雲における古墳時代中期集落出土土師器の器種構成 …… 312
第 209 図　旧山陰道と九景川遺跡古代建物群との関係 …… 315

表目次

表 1　一般県道出雲インター線建設予定地内遺跡一覧 …… 1
表 2　九景川遺跡Ⅰ区 SK01 銭貨計測表 …… 19
表 3　SD21 出土銭貨計測表 …… 64
表 4　九景川遺跡Ⅲ区 SK19 ～ 28 一覧表 …… 105
表 5　SD24 出土銭貨計測表 …… 112
表 6　九景川遺跡Ⅲ区 1 ～ 2 層出土銭貨計測表 …… 149
表 7　九景川遺跡Ⅳ区 P1133 出土銭貨計測表 …… 170
表 8　九景川遺跡出土遺物観察表 …… 200
表 9　九景川遺跡検出遺構一覧 …… 285
表 10　九景川遺跡古代建物一覧 …… 314

本文写真目次

写真１　神西城本丸から神西湖方面を望む …… 5
写真２　調査参加者 …… 6
写真３　バックフォーによる表土除去（Ⅲ区） …… 7
写真４　遺物包含層の掘削（Ⅰ区） …… 8
写真５　遺構面の精査（Ⅲ区） …… 8
写真６　祭祀土坑（SK01）検出時…… 9
写真７　Ⅰ区調査風景 …… 9
写真８　Ⅱ区 SR02 実測風景 …… 9
写真９　Ⅱ区調査風景 …… 9
写真 10　Ⅲ区貝塚（SX02）の調査 …… 10
写真 11　中学生による発掘体験（Ⅲ区）…… 10
写真 12　貝の洗浄作業 …… 10
写真 13　土器群の実測（Ⅲ区）…… 10
写真 14　調査指導風景（Ⅲ区）…… 11
写真 15　現地説明会（Ⅲ区）…… 11
写真 16　現地説明会での遺物展示 …… 11
写真 17　竪穴住居の検出（Ⅳ区 SI03）…… 11
写真 18　竪穴住居の調査（Ⅳ区 SI03）…… 12
写真 19　雪に覆われた現場（Ⅲ区）…… 12
写真 20　雪中での現場作業（Ⅳ区）…… 12
写真 21　室内での整理作業 …… 12
写真 22　Ⅰ区北壁西側土層 …… 13
写真 23　SK01 発見時 …… 16
写真 24　SK01 発見時（横方向から） …… 17
写真 25　Ⅰ区４層上面遺構面（東から）…… 19
写真 26　SK02 遺物出土状況 …… 23
写真 27　SK03 検出時 …… 24
写真 28　SK03 土層断面 …… 24
写真 29　SB02 …… 31
写真 30　SB03・04 …… 32
写真 31　SD07 土層断面 …… 34
写真 32　SD07 上面遺物出土状況 …… 35
写真 33　Ⅰ区４層弥生土器出土状況 …… 37
写真 34　Ⅱ区調査風景 …… 41
写真 35　Ⅱ区５層上面遺構面（北から）…… 43

写真 36　Ⅱ区 SK05 土器出土状況 …… 45
写真 37　SD09（SD09 － A）…… 47
写真 38　SR02 獣骨出土状況 …… 50
写真 39　Ⅲ区遠景（玉泉寺裏遺跡から）…… 57
写真 40　Ⅲ区西壁土層（北から）…… 57
写真 41　Ⅲ区南西部 4 層上面遺構面（東から）…… 60
写真 42　SB09 と SX02（南から）…… 61
写真 43　SD18・SK08（西から）…… 62
写真 44　SK09 …… 62
写真 45　SD21（北から）…… 65
写真 46　SX02 貝層検出時 …… 68
写真 47　SX02 床面付近板材出土状況 …… 70
写真 48　SX02 貝層堆積状況 …… 71
写真 49　SX02 貝層検出時近景 …… 71
写真 50　Ⅲ区北東部古代建物群（北東から）…… 74
写真 51　SB08 …… 77
写真 52　SB10 …… 78
写真 53　SB11 …… 79
写真 54　SB10 柱材 …… 79
写真 55　SB14 …… 83
写真 56　Ⅲ区ピット内遺物出土状況 …… 85
写真 57　加工段 2 遺物出土状況 …… 90
写真 58　加工段 3・4 遺物出土状況 …… 93
写真 59　SK07 検出時 …… 96
写真 60　SK07 土師器甕出土状況 …… 97
写真 61　SK10 土師器甕出土状況 …… 97
写真 62　SK12 …… 99
写真 63　SK14 遺物出土状況 …… 101
写真 64　SD24 馬中手骨出土状況 …… 112
写真 65　SR03 土器出土状況（G5 グリッド付近）…… 121
写真 66　Ⅲ区縄文時代遺構面 …… 158
写真 67　Ⅲ区縄文時代包含層堆積状況 …… 158
写真 68　Ⅲ区縄文時代遺構面ピット群 …… 160
写真 69　Ⅳ区中世遺構面（北から）…… 166
写真 70　SB16・17（南東から）…… 169
写真 71　Ⅳ区 P1133 銭貨出土状況 …… 169
写真 72　SK17 遺物出土状況 …… 171
写真 73　SI01 検出時 …… 180

写真 74　SI02 土層堆積状況 …… 184
写真 75　SI02 遺物出土状況 …… 184
写真 76　SI03 土器だまり検出状況 …… 187
写真 77　SI03 調査風景 …… 190
写真 78　土師器の胎土及び調整技法細部 …… 304

写真図版目次

図版１　遺跡周辺から東方向を望む
上空から見た九景川遺跡（北から）
図版２　九景川遺跡遠景（北西から；中央の橋脚の位置する谷）
Ⅰ区２層上面遺構完掘時（南から）
図版３　Ⅰ区２層上面杭列１・SD01（南から）
Ⅰ区北壁西側土層（南から）
Ⅰ区北壁西側土層（南から）
図版４　Ⅰ区 SK01 検出時
Ⅰ区 SK01 銭貨検出時 (1)
図版５　Ⅰ区 SK01 銭貨検出時 (2)
Ⅰ区 SK01 銭貨検出時拡大
図版６　Ⅰ区 SK01 銭貨出土状況 (3)
Ⅰ区 SK01 土師質土器取り上げ時
Ⅰ区 SK01 完掘時
図版７　Ⅰ区４層上面遺構（東から）
Ⅰ区４層上面遺構（西から）
図版８　Ⅰ区４層上面 SB01･SA01 付近（東から）
Ⅰ区４層上面 SB01･SA01 付近（南西から）
図版９　Ⅰ区４層上面 SK02･SK03 付近（東から）
Ⅰ区４層上面 SK02･SK03 付近（南から）
図版 10　Ⅰ区 SK02 プラン検出時
Ⅰ区 SK02 セクション（南から）
Ⅰ区 SK02 完掘時（南から）
図版 11　Ⅰ区 SK03 プラン検出時（北から）
Ⅰ区 SK03 南北土層（西から）
Ⅰ区 SK03 完掘時（南から）
図版 12　Ⅰ区５層上面遺構（東から）
Ⅰ区５層上面 SB03・04（北東から）
図版 13　Ⅰ区５層上面 SB02（西から）
Ⅰ区５層上面 SD07（南西から）
図版 14　Ⅰ区 SD07 上面遺物出土状況
Ⅰ区 SD07 土層堆積状況（西から）
図版 15　Ⅰ区 SD08（北から）
Ⅰ区 SX01（北から）
Ⅰ区４層弥生土器出土状況
図版 16　Ⅱ区５層上面遺構（北から）
Ⅱ区５層上面 SA02･03･SD09（北から）
図版 17　Ⅱ区 SD09・SA02・03（東から）
Ⅱ区 SD09 上層検出時（北から）
Ⅱ区 SD09 遺物出土状況（南から）
図版 18　Ⅱ区 SD09 土層（北から）
Ⅱ区 SK04
Ⅱ区 SK05 セクション
図版 19　Ⅱ区 SK05（真上から）
Ⅱ区 SK05（横方向から）
図版 20　Ⅱ区杭列２（東から）
Ⅱ区杭列２拡大（東から）
Ⅱ区杭列３（西から）
図版 21　Ⅱ区 SR02 遺物出土状況（北から）
Ⅱ区 SR02 遺物出土状況拡大（北から）
図版 22　Ⅱ区 SR02（北から）
Ⅱ区 SR02（北東から）
Ⅱ区 SR02 遺物出土状況（北から）
図版 23　Ⅱ区 SR02 獣骨出土状況
Ⅱ区 SR02 高坏出土状況
SR02 セクション（南から）
図版 24　Ⅲ区調査風景（北西から）
Ⅲ区西壁セクション（北から）
Ⅲ区北壁西側セクション（南から）
図版 25　Ⅲ区南西部中世遺構面（東から）
Ⅲ区 SB09・SX02（北から）
図版 26　Ⅲ区 SB09（北から）
Ⅲ区 SK08・SD18（南から）
図版 27　Ⅲ区 SK08（西から）
Ⅲ区南壁（西から）
Ⅲ区 SD18（西から）

図版 28 Ⅲ区 SK09 土層（南から）
Ⅲ区 SK09 床面検出時（西から）
Ⅲ区 SD21（北から）
図版 29 Ⅲ区 SX02 貝層上面検出時（北から）
図版 30 Ⅲ区 SX02 貝層上面細部（東から）
Ⅲ区 SX02 セクション（北から）
Ⅲ区 SX02 セクション（西から）
図版 31 Ⅲ区 SX02 完掘時（北から）
Ⅲ区 SX02 床面木材検出状況（東から）
図版 32 Ⅲ区北東部古代建物群（北東から）
Ⅲ区北東部古代建物群拡大（北東から）
図版 33 Ⅲ区北東部古代建物群（東から）
Ⅲ区 SB05（東から）
図版 34 Ⅲ区 SB06（東から）
Ⅲ区 SB07・SB15（東から）
図版 35 Ⅲ区 SB08（東から）
図版 36 Ⅲ区 SB10・SD27（北から）
Ⅲ区 SB10（北から）
図版 37 Ⅲ区 SB10（P812）柱根検出状況
Ⅲ区 SB10（P820）柱根検出状況
Ⅲ区 SB06 柱穴（P361）遺物出土状況
図版 38 Ⅲ区 SB11（北から）
同柱穴（P826）セクション
図版 39 Ⅲ区 SB12（北から）
Ⅲ区 SB14（北東から）
図版 40 Ⅲ区ピット（P415）セクション
Ⅲ区ピット（P323）遺物出土状況
Ⅲ区ピット（P508）遺物出土状況
図版 41 Ⅲ区加工段 1（東から）
Ⅲ区加工段 1 セクション（東から）
Ⅲ区加工段 2 セクション（北西から）
図版 42 Ⅲ区加工段 2 遺物出土状況（北から）
図版 43 Ⅲ区加工段 3･4（北から）
Ⅲ区加工段 3･4 遺物出土状況（北から）
図版 44 Ⅲ区加工段 4 セクション（南から）
Ⅲ区加工段遺物出土状況（北から）
Ⅲ区加工段 3 遺物出土状況（南から）
図版 45 Ⅲ区 SK07 検出時（西から）
Ⅲ区 SK07 床面検出時（東から）
図版 46 Ⅲ区 SK07 完掘時（東から）
Ⅲ区 SK07 セクション（南から）
Ⅲ区 SK10 検出時（西から）
図版 47 Ⅲ区 SK10 セクション（北から）
Ⅲ区 SK10 遺物出土状況（北から）
Ⅲ区 SK11 セクション（北から）
図版 48 Ⅲ区 SK11 完掘時（北から）
Ⅲ区 SK12 遺物出土状況（西から）
Ⅲ区 SK13 セクション（北から）
図版 49 Ⅲ区 SK14 遺物出土状況（東から）
Ⅲ区 SK14 遺物出土状況拡大（北から）
図版 50 Ⅲ区 SK14 セクション（南から）
Ⅲ区 SK14 完掘時（東から）
Ⅲ区 SK15（南から）
図版 51 Ⅲ区 SK16 完掘時（南から）
Ⅲ区 SD11・P420 遺物出土状況
Ⅲ区 SD15 遺物出土状況（西から）
図版 52 Ⅲ区 SD24（北から）
Ⅲ区 SD24 獣骨出土状況
図版 53 Ⅲ区 SD24 セクション（北から）
Ⅲ区 SD25（西から）
Ⅲ区 SD26（西から）
図版 54 Ⅲ区 SD27 付近（北から）
Ⅲ区土器だまり（東から）
図版 55 Ⅲ区土器だまり部分（北から）
Ⅲ区土器だまり部分（東から）
図版 56 Ⅲ区 SR03（G５グリッド）遺物出土状況（北から）
Ⅲ区 SR03（G５グリッド）遺物出土状況（北から）
図版 57 Ⅲ区 SR03 遺物出土状況（北から）
Ⅲ区 SR03 セクション（南から）
Ⅲ区 SR03（F4・G4 グリッド付近）（北西から）
図版 58 Ⅲ区 SR03（F4・G4 グリッド付近）（北から）
Ⅲ区 SR03 G5 グリッド付近遺物出土状

況（北から）
図版 59 Ⅲ区 SR04（東から）
Ⅲ区 SR04（西から）
図版 60 Ⅲ区 SR04 セクション（南東から）
Ⅲ区 SR04 西端付近（西から）
Ⅲ区 SR04（I4 グリッド付近）遺物出土状況（南から）
図版 61 Ⅲ区縄文時代遺構面（東から）
Ⅲ区縄文時代遺構面ピット群（東から）
図版 62 Ⅲ区縄文時代遺構面 SR05（南東から）
Ⅲ区縄文時代遺構面 5 ラインセクション
Ⅳ区 4 層上面遺構（北から）
図版 63 Ⅳ区 SB16･17 付近ピット群（北東から）
Ⅳ区 SB16･17 付近ピット群（南東から）
図版 64 Ⅳ区 4 層上面遺構南東部（北から）
Ⅳ区 4 層上面 SB18・SD32 ～ 37・39 付近（北から）
図版 65 Ⅳ区 4 層上面遺構 E6 グリッド付近（北東から）
Ⅳ区 4 層上面貝層 3 ～ 6（北から）
図版 66 Ⅳ区 P1133 銭貨出土状況（北から）
Ⅳ区 4 層上面貝層 3（西から）
Ⅳ区 4 層上面貝層 4・5（西から）
図版 67 Ⅳ区 4 層上面貝層 5 セクション
Ⅳ区 4 層上面 SK17 検出時（北から）
Ⅳ区 4 層上面 SK17 完掘時（北から）
図版 68 Ⅳ区 5 層上面遺構（東から）
Ⅳ区 5 層上面遺構（北から）
図版 69 Ⅳ区 SI01 プラン検出時（北から）
Ⅳ区 SI01 床面付近遺物出土状況（南から）
図版 70 Ⅳ区 SI01 床面付近出土土器拡大（南から）
Ⅳ区 SI01 床面検出時（東から）
図版 71 Ⅳ区 SI01 床面検出時（北東から）
Ⅳ区 SI01 完掘時（東から）
図版 72 Ⅳ区 SI02 プラン検出時（北東から）
Ⅳ区 SI02 セクション（南東から）
図版 73 Ⅳ区 SI02 遺物出土状況（北東から）
Ⅳ区 SI02 完掘時（北東から）
図版 74 Ⅳ区 SI03 プラン検出時（南東から）
Ⅳ区 SI03 遺物出土状況（北西から）
図版 75 Ⅳ区 SI03 遺物出土状況（西から）
Ⅳ区 SI03 セクション（南東から）
図版 76 Ⅳ区 SI03 完掘時（北西から）
Ⅳ区 SI03 壁際土坑セクション（南西から）
図版 77 Ⅰ区 SK01 出土遺物
図版 78 Ⅰ区 SK02・03・SD05・06・P85 出土遺物
Ⅰ区 3 層出土遺物
図版 79 Ⅰ区 3 層出土遺物
図版 80 Ⅰ区 3 層出土遺物
Ⅰ区 SD07 出土遺物
図版 81 Ⅰ区 SD07 4・5 層出土遺物
図版 82 Ⅰ区 4・5 層出土遺物
Ⅰ区 4・5 層、遺構外、Ⅱ区 2 層出土遺物
図版 83 Ⅰ区遺構外、Ⅱ区 2 層出土遺物
Ⅱ区 SK05、SD09・10 出土遺物
図版 84 Ⅱ区 SR02 出土遺物
図版 85 Ⅱ区 3 層出土遺物
図版 86 Ⅱ区 3 層、4・5 層出土遺物
図版 87 Ⅱ区遺構外、Ⅲ区 SD17 出土遺物
Ⅱ区遺構外、Ⅲ区 SD18・21・24 出土遺物
図版 88 Ⅲ区 SD21・24 出土遺物
Ⅲ区 SD26・SX02 出土遺物
図版 89 Ⅲ区 SX02 出土遺物
Ⅲ区 SX02・SR03・1 ～ 3 層出土遺物
図版 90 Ⅲ区 SB06・08・ピット・加工段 2 出土遺物
図版 91 Ⅲ区 SX02・SB05 ～ 08 出土遺物
Ⅲ区ピット出土遺物
図版 92 加工段 2 出土遺物

図版 93 Ⅲ区加工段 2・3・4 出土遺物
図版 94 Ⅲ区加工段 2・SK07・12 出土遺物
Ⅲ区加工段 3・4 出土遺物
図版 95 Ⅲ区 SK07・12・14・SD11・15 出土遺物
Ⅲ区 SK10・14・SD11・15 出土遺物
図版 96 Ⅲ区 SD15 出土遺物
Ⅲ区 SD15・土器だまり出土遺物
図版 97 Ⅲ区土器だまり出土遺物
図版 98 Ⅲ区土器だまり出土遺物
図版 99 Ⅲ区土器だまり・SR03 出土遺物
図版 100 Ⅲ区 SR03 出土遺物
図版 101 Ⅲ区 SR03 出土遺物
図版 102 Ⅲ区 SR03 出土遺物
図版 103 Ⅲ区 SR03 出土遺物
図版 104 Ⅲ区 SR03 出土遺物
図版 105 Ⅲ区 SR03 出土遺物
図版 106 Ⅲ区 SR03 出土遺物
図版 107 Ⅲ区 SR04 出土遺物
図版 108 Ⅲ区 SR04 出土遺物
図版 109 Ⅲ区 SR04 出土遺物
図版 110 Ⅲ区 SR04 出土遺物
図版 111 Ⅲ区 SR04 出土遺物
図版 112 Ⅲ区 SR04 出土遺物
図版 113 Ⅲ区 SR04 出土遺物
Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物
図版 114 Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物
図版 115 Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物
図版 116 Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物
図版 117 Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物
図版 118 Ⅲ区 1 ～ 3 層出土遺物
図版 119 Ⅲ区 3 層出土遺物
図版 120 Ⅲ区 3 層出土遺物
図版 121 Ⅲ区 3 層出土遺物
図版 122 Ⅲ区 3 層出土遺物
図版 123 Ⅲ区 4 ～ 5 層出土遺物
図版 124 Ⅲ区 4 ～ 5 層・遺構外出土遺物
図版 125 Ⅲ区 6 ～ 7 層出土遺物
図版 126 Ⅲ区遺構外・Ⅳ区ピット・SD48・SK17 出土遺物
Ⅳ区ピット・SD42・SK17 出土遺物
図版 127 Ⅳ区 SK17 出土遺物
Ⅳ区 SK17・2 ～ 3 層出土遺物
図版 128 Ⅳ区 2 ～ 3 層出土遺物
図版 129 Ⅳ区 2 ～ 3 層出土遺物
図版 130 Ⅳ区 SI01・02 出土遺物
図版 131 Ⅳ区 SI02 出土遺物
図版 132 Ⅳ区 SI02・03・4 層出土遺物
Ⅳ区 SI02・03 出土遺物
図版 133 Ⅳ区 SI03 出土遺物
図版 134 Ⅳ区 SI03 出土遺物
図版 135 Ⅳ区 SI03 出土遺物
図版 136 Ⅳ区 SI03・4 層出土遺物
図版 137 Ⅳ区 4 層出土遺物
図版 138 Ⅳ区 SI03・4 ～ 5 層・遺構外出土遺物
図版 139 Ⅳ区ピット・2 ～ 4 層・遺構外出土遺物
Ⅳ区 4・5 層出土遺物
図版 140 Ⅰ区出土陶磁器
Ⅲ区出土陶磁器
図版 141 Ⅲ区 SR04 出土赤彩土師器
図版 142 Ⅲ区出土陶磁器
図版 143 Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区出土遺物
図版 144 Ⅲ・Ⅳ区出土陶磁器
Ⅰ・Ⅳ区出土石器・石製品

第１章　調査に至る経緯

一般県道出雲インター線は、山陰自動車道「鳥取益田線」の出雲インターチェンジ（仮称）と一般国道９号及び一般国道431号を直接結ぶ道路であるとともに、出雲インターチェンジ（仮称）を起点とした宍道湖・中海都市圏の連携を強化する地域高規格道路「境港出雲道路」の重要な部分を担う道路として計画されものである。

平成15年４月14日、島根県出雲土木建築事務所より出雲市教育委員会に対して、当道路予定地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。出雲市教育委員会では、事業予定地の周辺には大規模な前方後円墳である北光寺古墳や周知の遺跡である浜井場古墳が所在することから、確認調査が必要な旨を回答した。さらに同市教委では同年及び翌年にかけて試掘確認調査を実施し、新発見遺跡について島根県教育委員会あて10月23日付けで遺跡発見の通知を行い、同日及び翌年５月11日付で島根県出雲土木建築事務所から島根県教育委員会教育長あてに周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事の通知が提出されるに至った。これを受けて島根県教育委員会では平成16年５月13日付で工事着手前に発掘調査が必要な旨を回答した。なお、早急に工事着手が必要な浜井場２号墳については、出雲市教育委員会により平成15年11月から本発掘調査が行われ、平成17年２月には報告書が刊行されている。

当時、出雲市教育委員会は多数の事業を抱えている関係から、試掘調査の結果確認されたその他の遺跡について平成16年度以降の調査対応は出雲市教育委員会単独では困難な状況であった。このため、出雲市教育委員会では島根県教育委員会及び島根県出雲土木建築事務所との間で協議を重ねた結果、平成16年度の工期上調査が急がれる九景川遺跡橋脚部分（Ｉ区）については、県教育委員会が出雲市内の東林木バイパス関係の調査班１班を派遣して応急的に対応することとし、平成17年度以降については、県と市からそれぞれ調査員１名を派遣し２パーティ編成により、九景川遺跡・玉泉寺裏遺跡の２遺跡の調査を実施する運びとなった。

表１　一般県道出雲インター線建設予定地内遺跡一覧（平成18年度分まで）

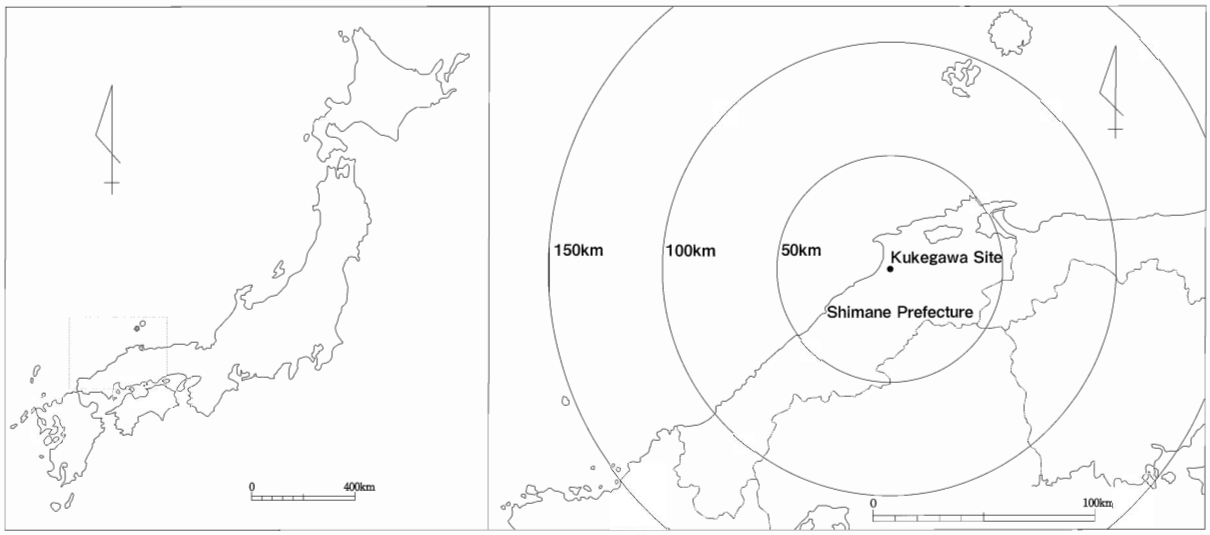
番号	調査年度	遺跡名	報告書刊行年	遺跡の内容
1	平成15年度	浜井場２号墳	2005年２月	古墳時代中期の小規模な方墳１基を調査 ２段掘の墓壙に石列区画溝と想定される落ち込み 鉄刀片ほか鉄片出土
2	平成17年度	九景川遺跡	2008年３月（本書）	縄文時代～中世の集落遺跡。古墳時代中期、８～９世紀の建物跡を多数検出。古墳時代中期の自然河道における土器祭祀、中世の小規模貝塚など
3	平成17年度	玉泉寺裏遺跡	2008年３月（予定）	弥生時代終末～古墳時代前期の木棺墓、丘陵頂部に立地する古墳時代中期の竪穴住居、古代の集落など
4	平成18年度	御崎谷遺跡	未定	弥生時代後期から奈良時代の建物跡及び多量の土器群
5	平成18年度	浜井場古墳群（４号墳）	2008年３月（予定）	
6	平成18年度	間谷東遺跡	未定	土師器、須恵器、土師質土器出土
7	平成18年度	間谷東古墳	2008年３月（予定）	奥才型木棺を有する古墳時代中期初頭の小規模古墳 刀子出土

第２章　九景川遺跡の位置と環境

九景川遺跡は出雲平野の南西、出雲市東神西町に所在する。この周辺一帯は『出雲国風土記』に「神門水海」と記載され、現在神西湖にその面影を残す入海の南岸地域にあたる。当地域の歴史的展開においては、古来より良好な港湾として利用され、常に外界との接点であった入海地帯という地理的特性が大きく作用していたことは論を俟たない。以下、こうした観点から当地の歴史的展開について祖述しておきたい。

縄文時代　旧石器時代の遺跡は出雲平野では、まだ確認されていない。縄文時代早期になると菱根遺跡や上長浜貝塚などの遺跡が確認されるようになる。後者は九景川遺跡にほど近い、日本海と神戸川との間に位置する砂丘上に立地する遺跡で、後述するように中世には大規模な貝塚が形成されている。縄文時代の遺物はその下層から検出されており、菱根式に近い早期末の繊維土器群が比較的まとまって検出されている（出雲市教育委員会 1996）。また神西湖南岸の御領田遺跡では縁帯文期の方形竪穴住居が検出されている（湖陵町教育委員会 1994）。当該期の住居址は出雲山間部では近年のダム関連の調査により明らかにされつつあるが、平野部では稀有な事例に属する。縄文時代晩期になると、出雲平野南部の小支谷では遺構そのものは検出されていないものの、土器や打製石斧など当該期の遺物が多数確認されるようになり、出雲平野においては当該期に初期農耕集落が成立していたことを物語る。代表的な事例としては三田谷Ⅰ遺跡（島根県教育委員会 2000）、当地域周辺では保知石遺跡（島根県教育委員会 2005）があり、当遺跡でも当該期の遺物が出土している。

弥生時代　出雲平野における弥生時代前期の遺跡としては、原山遺跡、矢野遺跡、三田谷Ⅰ遺跡などがある。遺跡の性格が判明する事例は乏しいが、原山遺跡では前期の配石墓が確認されており、出雲部における砂丘立地の弥生初期墓制として注目される（村上・川原 1979）。当地域周辺では当遺跡や保知石遺跡などで当該期の遺物が散発的に検出されてはいるものの、集落全体の様相は不明と言わざるを得ない。この地域で遺跡が増加するのは弥生時代中期中葉以降であり、著名な例としては古志本郷遺跡、下古志遺跡、田畑遺跡、知井宮多聞院遺跡等があり、当地で古墳時代前期初頭まで継続的に営まれる大規模集落は当該期に開始される例が多い（藤永 2005・米田 2006）。弥生時代後期に入ると出雲平野中央部・北部では姫原西遺跡、山持遺跡、青木遺跡など大規模な遺跡が増



第１図　九景川遺跡の位置

加する傾向にある。入海南岸地域周辺では明確な集落は確認できていないものの、調査された遺跡の大半からは当該期の遺物がそれぞれまとまって出土していることから、この時期集落の増加傾向にあったことはほぼ間違いないことと思われる。当該期の墳墓は玉泉寺裏遺跡で弥生時代終末期から古墳時代初頭の木棺墓が若干検出されているのみであり、出雲平野中央部・北部のような四隅突出墓は現在のところ確認できていない。

古墳時代　出雲平野の遺跡は弥生時代中期中葉以降順調な発展を続けてきたが、こうした様相が大きな変化を見せるのは古墳時代前期段階である。従来から指摘されているとおり、当地域においては西谷９号墓に後続する前期前半の有力首長墓を現状では確認できない状況にある（渡辺 1986）。９号墓に隣接する７号墳は近年の確認調査で四隅を削り出す特異な構造が注目されたが（出雲市教育委員会 2006）、規模的には９号墓と比較すると遙かに見劣りし、かつ築造時期も出土土器から前

1. 九景川遺跡　2. 玉泉寺裏遺跡　3. 北光寺古墳　4. 御崎谷遺跡　5. 浜井場古墳群　6. 間谷東古墳　7. 間谷東遺跡　8. 浅柄Ⅱ遺跡　9. 保知石遺跡　10. 神門横穴墓群　11. 神待山横穴墓群　12. 神西城跡　13. 田中谷貝塚　14. 九景横穴墓群　15. 正久寺横穴墓群　16. 湖東屋山横穴墓群　17. 山地古墳　18. 知井宮多聞院遺跡　19. 宝塚古墳　20. 妙蓮寺山古墳　21. 下古志遺跡　22. 田畑遺跡　23. 古志本郷遺跡　24. 小畑遺跡　25. 上長浜遺跡　26. 浅柄遺跡

第２図　九景川遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50,000）

期後葉まで降る可能性が高い。その他の前期古墳としては、山地古墳、大寺１号墳、浅柄Ⅱ古墳、権現山古墳などが知られるが、時期不明の権現山古墳を除き、いずれも前期後葉（集成編年３期以降）に降るものである。

一方、集落遺跡は、従前は古墳時代前期になると収束方向へ向かうと理解されていたが、古志本郷遺跡や中野清水遺跡のように前期中葉頃まで継続的に集落が営まれる事例も存在し、墳墓の動向とは単純にはリンクしないようである（松山 2002）。しかし、小谷式後半期には集落数が減少する傾向は認められるようであり、如何なる要因に基づくものか、その背景が注目される。

古墳時代前期末から中期にかけても出雲平野の様相は今ひとつ不明確であるが、当地域周辺ではいくつか重要な様相が確認できる。一つは、山地古墳、浅柄Ⅱ古墳、間谷東１号墳のような礫床を備える古墳の出現である。山地古墳は小規模な円墳でありながら筒形銅器や銅鏡を備える、当地域では豊富な副葬品を有する古墳として位置づけられる。さらに間谷東１号墳は奥才型木棺（鹿島町教育委員会 2002）と称される棺内礫敷組合式木棺の埋葬施設を備える中期初頭の古墳である。同タイプの埋葬施設は北部九州から北近畿にかけて分布し、当時の海浜部に立地する中小古墳被葬者層に広域的な地域間交渉が存在していたことを物語る。こうした特異な古墳群の出現は対外交渉の結節点としての良好な内海地帯という当地域の地理的特性を雄弁に物語るものと言えよう。九景川遺跡の古墳時代集落もこれらの特異な古墳の出現とほぼ軌を一にして出現する点はその性格を考える上で極めて重要である。

古墳時代中期中葉には大形前方後円墳である北光寺古墳が営まれる。当古墳は出土遺物や石棺残片から中期前～中葉に編年され、同時期としては出雲部最大の古墳であり、その突発的な出現の背景の解明は出雲平野の地域史を再構成する上で大きな課題である（島根県古代文化センター 2007）。

古墳時代後期になると、出雲平野では大念寺古墳や上塩冶築山古墳など、全国的にも著名な巨石墳が相次いで築かれ、山代二子塚古墳、山代方墳に代表される出雲東部勢力と拮抗関係にあった出雲西部の大首長の奥津城と理解されている（渡辺 1986）。当地域に程近い神戸川左岸地域でも豊富な副葬品が出土した前方後円墳である妙蓮寺山古墳、圭頭大刀が出土し精美な切石づくりの横穴式石室を有する放れ山古墳などが点在する神門古墳群が存在し、大念寺古墳・上塩冶築山古墳等の大首長層を補佐する第２クラスの首長墓域として位置づけられている（大谷 1997）。こうした巨石墳の背景には当然平野の開発の進展が想定されようが、今のところ当該期における大規模な集落は出雲平野では確認できず、生産遺跡の断片を知り得るのみである（角田 2006）。こうした大形古墳の築造が停止されるのとほぼ軌を一にして平野南部の丘陵には上塩冶横穴墓群や神門横穴墓群などの大規模な横穴墓群が営まれるようになる。

奈良時代　九景川遺跡の位置する神門水海南岸地域は奈良時代の神門郡滑狭郷に属する。出雲平野における官衙関連遺跡は近年の発掘調査の進展によりその解明が飛躍的に進み、神門郡家は出雲市古志本郷遺跡（島根県教育委員会 2003）が、出雲郡家の関連施設として斐川町後谷Ⅴ遺跡（斐川町教育委員会 1996）が比定されており、その他に神門郡内では天神遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、小山遺跡、古志遺跡などが官衙関連遺跡である可能性が指摘されている。九景川遺跡では奈良時代から平安時代初期の建物跡や遺物が多数確認されており、なかに桁行 14 mを測る大形の掘立柱建物や漆付着土器なども確認されており、その性格が注目されるところである。なお、当遺跡の約 500 m東

には7～8世紀にかけての多数の掘立柱建物が検出された浅柄遺跡（出雲市教育委員会2000）が所在する。当遺跡及び浅柄Ⅱ遺跡の所在する出雲平野南縁部には古代山陰道が通じていたと想定されることから、その関係の解明も今後の調査研究の課題の一つである。

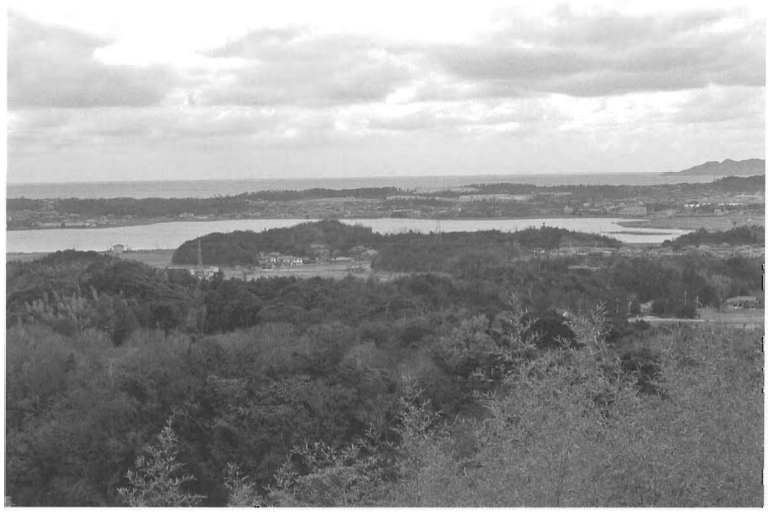


写真1　神西城本丸から神西湖方面を望む

官衙遺跡以外では、寺院跡として神門寺境内廃寺、長者原廃寺が古くから知られているほか、墳墓遺跡としては、西日本では稀な蕨手刀が出土した小坂古墳石櫃、方形マウンドを備え石櫃が出土した光明寺3号墓、石製骨蔵器が使用されていた菅沢古墓や朝山古墓などが知られている。

中世　神門水海周辺の中世の遺跡としては、冒頭に述べた上長浜貝塚が特筆される。中世の貝塚としては全国屈指の規模を備え、土錘や鉄製釣針など多数の漁撈具の出土から専業的な漁撈集団の存在が想定される。上長浜貝塚の他にも神門水海周辺では当遺跡をはじめ当該期に属する小規模な貝塚が幾つか知られており、その成立要因の一つに当該期における神門水海の拡大といった自然環境変化の要因も今後検討課題として俎上にのせる必要があろう。

出雲平野における主要な中世集落遺跡としては蔵小路西遺跡で検出された居館跡があげられる。これは一町四方の大溝に囲まれた中に多数の建物を配置する方形居館跡で、出土した陶磁器類から12世紀後半から15世紀にかけてのものと考えられ、朝山氏または塩冶氏の居館である可能性が指摘されている（島根県教育委員会1999a）。そのほかの中世集落としては、ミニチュア五輪塔が出土した渡橋沖遺跡（島根県教育委員会1999b）、鍛冶炉などが検出された築山遺跡（出雲市教育委員会2007）などがあげられる。墳墓例としては、青磁の優品を出土した荻杼古墓（近藤1969）があり、当該期の木棺墓は余小路遺跡や姫原西遺跡、蔵小路西遺跡などで多数確認されている。

室町時代から戦国時代にかけて、出雲平野においても多数の山城が築かれるようになる。神門水海南岸の代表的な山城としては神西氏代々の居城であり出雲十旗に数えられた神西城があげられ、最近の分布調査によって以前の想定より遙かに広域的な縄張りを有する山城であることが明らかになりつつある。

以上、出雲平野南麓を中心とした当遺跡周辺の歴史的環境について他の出雲平野地域と比較しつつその素描を試みた。冒頭に述べたとおり当地の歴史的展開には神門水海縁辺部という地理的特性が大きく作用しており、それは古墳時代前期末～中期初頭の特徴的な古墳の出現や中世初期の貝塚の形成などにその一端を垣間見ることができ、今後のさらなる調査・研究の進展が期待されるところである。

引用・参考文献

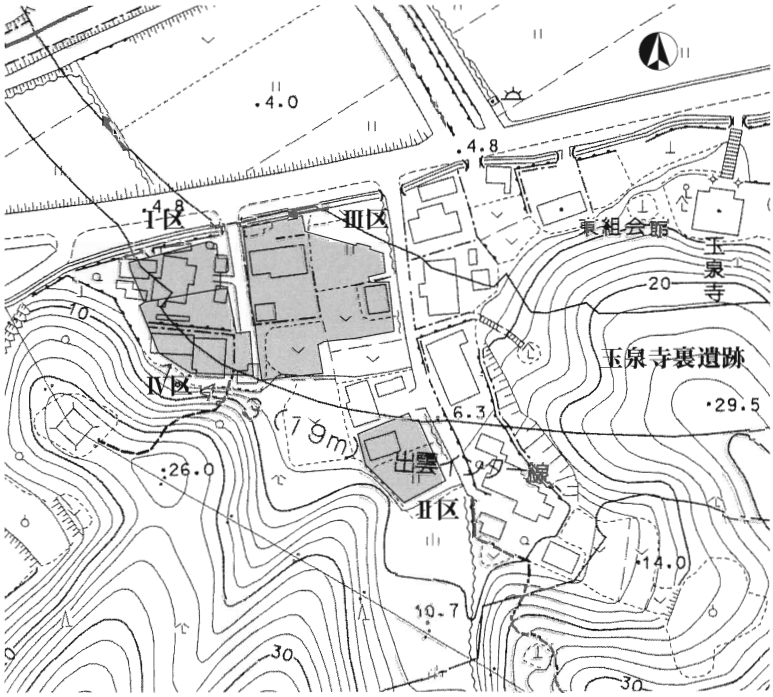
池田満雄・足立克己 1987「出雲市矢野遺跡出土の縄文土器」『島根考古学会誌』第 4 集
出雲市教育委員会 1996『上長浜貝塚』
出雲市教育委員会 2000『浅柄遺跡』
出雲市教育委員会 2006『西谷墳墓群－平成 14 ～ 16 年度発掘調査報告書－』
出雲市教育委員会 2007『築山遺跡Ⅱ』
内田律雄 2006「出雲の神社遺構と神祇制度」『古代の信仰と社会』国士舘大学考古学会
大谷晃二 1997「出雲の大首長」『古代出雲文化展（図録)』朝日新聞社・島根県教育委員会
角田徳幸 2004「三瓶火山の噴出物と縄文時代遺跡」『島根考古学会誌』第 20・21 集
角田徳幸 2006「白枝本郷遺跡の調査」『中野清水遺跡 (3)・白枝本郷遺跡 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 7』
鹿島町教育委員会 2002『奥才古墳群第 8 支群』
加藤義成 1957『出雲国風土記参究』今井書店
湖陵町教育委員会 1994『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』
近藤　正 1969「出雲市荻杼発見の骨蔵器について」『考古学雑誌』第 54 巻 3 号
佐藤　信 2004「出土文字資料が語るあたらしい古代史像」『出土文字資料が語る古代の出雲平野 平成 15 年度島根県埋蔵文化財調査センター講演会資料』島根県埋蔵文化財調査センター
島根県教育委員会 1999a『蔵小路西遺跡 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 2』
島根県教育委員会 1999b『渡橋沖遺跡』
島根県教育委員会 2000『三田谷Ⅰ遺跡 Vol.3』
島根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡Ⅴ 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅥ』
島根県教育委員会 2005『畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡』
島根県教育委員会 2004a『中野美保遺跡 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 4』
島根県古代文化センター 2007『北光寺古墳発掘調査報告』
島根大学法文学部考古学研究室 1992『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』
斐川町教育委員会 1996『後谷Ⅴ遺跡』
藤永照隆 2005「遺跡の分布からみた出雲平野の古地理再考」『八雲立つ風土記の丘館報』№ 182
松山智弘 2002「古志本郷遺跡の調査について」『八雲立つ風土記の丘館報』No.170
村上　勇・川原和人 1979「出雲・原山遺跡の再検討」『島根県立博物館調査報告』第 2 冊
米田美江子 2006「遺跡分布から見た出雲平野の形成史」『島根考古学会誌』第 23 集
渡辺貞幸 1986「古代出雲の栄光と挫折」『王権の争奪』集英社

写真 2　調査参加者

第３章　調査の経過状況と概要

第１節　調査の方法

調査区の設定　九景川遺跡の調査は、県出雲土木建築事務所との協議の上、最も工事が急がれる橋脚部分の調査から着手することとし、ここをⅠ区として調査を進めた。その後調査範囲の広い谷の中心部を調査する際の排土置場を確保するため、谷奥部をⅡ区として調査を進め、次いで最も広いⅢ区、橋脚部のⅠ区南に隣接する箇所をⅣ区として順次調査を行った。それぞれの調査区の面積は、Ⅰ区が500㎡、Ⅱ区が520㎡、Ⅲ区が1,800㎡、Ⅳ区が770㎡である。それぞれの調査区には、第Ⅲ座標軸系に基づき10ｍ四方のグリッドを設定し、北西部を原点として、東へ向けてアルファベット順、南へ向けてアラビア数字順に呼称し、それぞれの区画は北西杭の名称をグリッド名とし、これに基づいて遺物の取り上げ等を行った（第４図）。



第３図　調査区の配置（S=1/2,500）

表土掘削　調査予定地の現況は水田、畑、宅地跡であり、表土の除去はバケットに平爪を装着したバックフォーを用いて実施した。

包含層掘削・遺構の精査・掘り下げ　遺物包含層の掘削は主として鍬・スコップを用いて人力により掘り下げたが、遺物が集中する箇所については草削り・移植ゴテにより掘り下げた。遺構の検出はいったん鋤簾（じょれん）により大雑把に精査した後、遺構面を草削りを用いて丁寧に削り、遺構検出に努めた。地山付近での遺構検出は比較的容易な状況であったが、中世遺構面（4層上面）などの精査はやや判別しにくい状況であった。遺構の掘り下げは主として草削りにより実施した。遺構内の調査は大型の土坑や竪穴住居跡等は十字にベルトを設置し、ピットなど小規模な遺構は半裁し、土層断面図を作成した。

写真３　バックフォーによる表土除去（Ⅲ区）

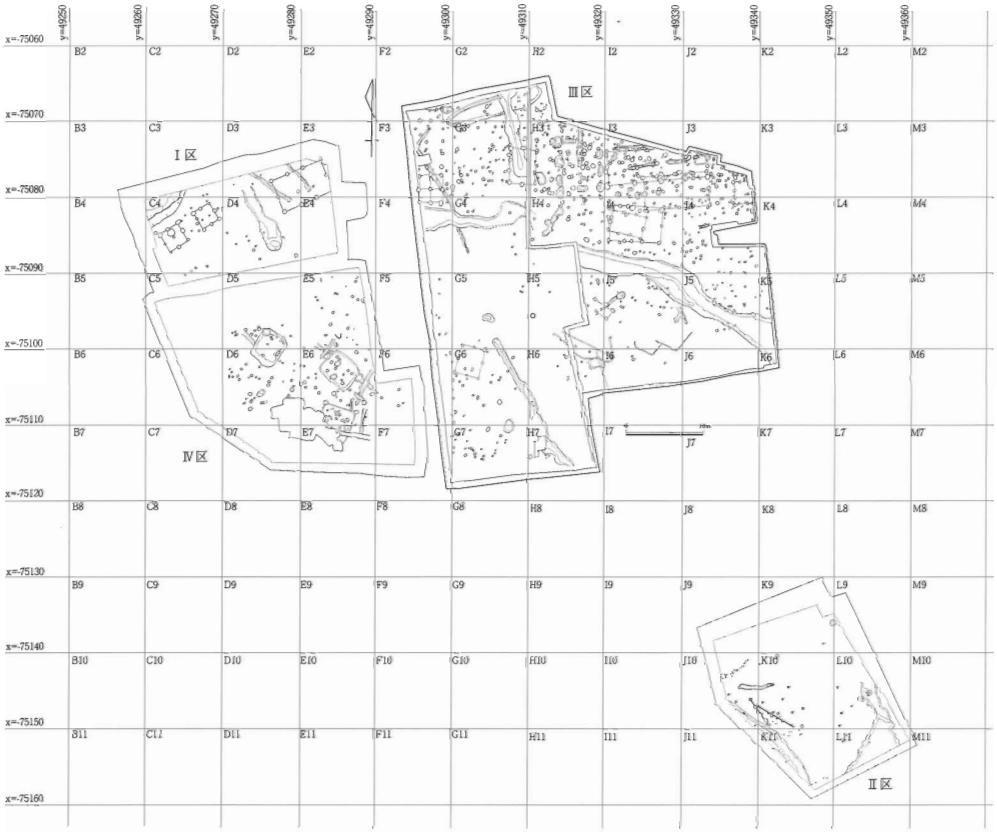
記録の作成　遺構の平面図は（株）

コンピュータシステムによる遺跡調査システム「サイト」を使用して測量を行い、出力後補正を行った。土層図は手測りにより縮尺1/20・1/10により作成した。有意な遺物出土状況については手測りにより縮尺1/10で平面図・立面図の図化を必要に応じて行い、報告書掲載が見込まれる遺物については基本的に出土位置を「サイト」を用いて記録した上取り上げた。

遺構の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものについては6×7判フィルムによる撮影を行い、メモ・素図作成用、またはピット断面写真などは主としてデジタルカメラを使用した。また、全体写真については調査工程の都合上撮影不可能であったため、各調査区における各遺構面調査の終了ごとに高所作業車により全体写真撮影を行ったうえ、調査終了時にⅢ・Ⅳ区を対象としてラジコンヘリにより空中写真撮影を実施した。

写真4　遺物包含層の掘削（Ⅰ区）

写真5　遺構面の精査（Ⅲ区）



第4図　調査区地区割り図

第２節　調査の経過

Ⅰ区の調査

第１章で述べたとおり、緊急性を要する橋脚部のⅠ区の調査は、事業者との当初の協議では平成16年11月から着手の予定であった。しかし、工事予定地内の家屋移転が大幅に遅れ、年内に着手することは極めて困難な状況となった。このため、出雲土木建築事務所と再度協議を行った結果、家屋移転が終了後速やかに基礎除去、表土掘削を終えた後、平成17年４月当初から前年度繰越事業として対応することとなった。

調査は平成17年４月26日から着手した。Ⅰ区では中世から古代にかけての遺構面を３面検出した。上層遺構面は中世の造成土上に営まれた遺構面で、表土掘削の際に土師質土器がまとまっている状況を確認した。精査したところ、土師質土器を花弁状に配置して内部に古銭を入れ、さらに土師質土器により蓋をした地鎮と考えられる祭祀遺構を検出した。中層遺構面では12～13世紀に属する掘立柱建物や柵列、水溜用と思われる土坑やこれに伴う溝などを検出した。最下層の遺構面では奈良時代に属する掘立柱建物３棟と自然河道を検出した。掘立柱建物跡は２棟が総柱建物で東西に主軸を揃えて並んでおり、倉庫２棟と側柱建物と考えられる。

Ⅰ区は緊急を要する工事のため調査期間が１ヶ月と短期間ではあったが、好天にも恵まれ調査は順調に進行し、６月６日に全体写真撮影を行い調査を終了した。

Ⅱ区の調査

Ⅱ区はⅠ区の調査と併行して表土掘削を行い、６月６日より調査を開始した。Ⅱ区は試掘調査時に古墳時代後期の遺物が比較的まとまって出土し、多数の遺構の存在が予測されたものの、遺構の密度は薄く、古墳時代中～後期の自然河道や杭列、弥生時代後期の溝や土坑群が検出されたにとどまった。ただ、土坑の中でもSK05からは弥生時代前期の壺が倒立した状態で検出された。安来市柳Ⅱ遺跡例のような

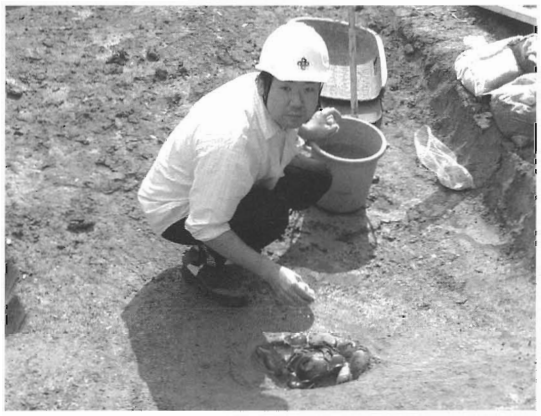


写真６　祭祀土坑（SK01）検出時

写真７　Ⅰ区調査風景

写真８　Ⅱ区SR02実測風景

写真９　Ⅱ区調査風景

乳幼児用の壺棺と考えられ、当地域における弥生時代前期の墓制研究上貴重な資料を提供した。なお、古墳時代中～後期の自然河道からは量的には多くないものの朱塗の土師器や手捏ね土器がまとまって出土し、さらにウシの上腕骨が含まれている点が注意を引いた。こうした調査成果を得てⅡ区の調査は7月1日に終了した。

写真10　Ⅲ区貝塚（SX02）の調査

Ⅲ区の調査

Ⅲ区はⅡ区の調査と併行しつつ、6月27日から着手した。Ⅲ区については、谷間に位置することや調査前に宅地であったことから遺構はさほどないものと想定していたが、調査が進むにつれ、宅地造成による攪乱箇所を除くとほぼ全面に濃密に遺構が分布することが明らかとなった。上層の中世遺構面では掘立柱建物跡1、貝塚、溝等を検出した。貝塚は長径約5m程の浅い土坑内にシジミを中心に構成された小規模な貝塚であるが、土錘等の漁撈具や鯨骨等が出土し、中世における神門水海付近の生業及び環境を知る上で貴重な資料を得ることができた。貝塚出土の貝についてはすべて取り上げて現地で洗浄し、持ち帰って検討を行った。またSD24とした中世の溝からは大型馬の中手骨が出土し、当屋敷主の性格を知る上で注目される資料となった。

写真11　中学生による発掘体験（Ⅲ区）

古代の遺構としては、掘立柱建物跡7棟をはじめ土坑・溝を多数検出した。古代の遺構は調査区北半部に集中し、南東から北西へ流れる当該期の自然河道であるSR04がその南限を区画するかのような状況で検出された。掘立柱建物跡の大半は側柱建物で居住用と推測されるが、調査区西端で検出したSB10とSB13は総柱建物で倉庫である可能性が高い。当集落は墨書土器など官衙的な遺物は乏しいものの、桁行14.5mに及ぶ大型建物も含まれることから、神門水海南岸部における中核的な集落の一つであった可能性が高い。

写真12　貝の洗浄作業

古墳時代の遺構は中期初頭のものが大半で、掘立柱建物跡3棟、加工段状遺構3基及び自然河道（SR03）を検出した。掘立柱建物跡はいずれもⅣ区で検出した竪穴住居群とほぼ同時期のものと想定される。特

写真13　土器群の実測（Ⅲ区）

にSB11は柱材が良好に残存していて注目された。これらの遺構は古代の遺構群とは対照的に調査区南側に集中しており、その間を東西に分割するように自然河道であるSR03が南流している。このSR03からは当該期の土器が一括投棄された状態で出土し、完形品が多い点、高坏や小形丸底壺の占める比率が極めて高く、水辺の祭祀に関わる土器群と理解される。なかには一箇所から6個体以上の小形丸底壺が検出された状況も確認された。同様な自然河道への祭祀的な土器投棄行為はⅡ区の古墳時代後期に属するSR02においても認められ、各時代を越えて認められる当遺跡の大きな特徴となっている。

Ⅲ区では弥生時代の遺構は乏しく、調査区南側で井戸と考えられる土坑（SK14）を検出したのみである。SK14は中世の貝塚（SX02）の底面で検出した土坑で、内部から刳物桶が出土しており、当木製品の使用法を知る上での貴重な発見となった。

Ⅲ区の大要が明らかになった11月5日には現地説明会を開催した。好天に恵まれたこともあって約120名の見学者の参加を得た。その後補足調査を進めていたところ、それまで地山と認識していた層から縄文晩期の遺物が出土することが判明した。このため縄文時代の遺物が出土する調査区東側についてはⅣ区の調査が終了した後、部分的に面的調査を実施し、溝やピット群を検出し、翌年の1月19日にⅢ区の調査を終了した。

Ⅳ区の調査

このように、Ⅲ区において予想以上の遺構を検出したため、Ⅳ区の調査に着手したのは現地説明会終了後の11月7日からであった。当調査区はⅠ区の南側に隣接することから複数の遺構面が存在することが予測されていたものの、小面積であるため12月中までには予定どおり調査が終了するものと見込んでいた。ところがこの年の晩秋から冬にかけては大荒れで12月にはいると連日みぞれ交じりの雨の日が続き、遺跡が谷間に位置することから遺構精査もままならず、当初の予定より調査は大幅に遅延することとなった。中世の遺構面では掘立柱建物跡3棟をはじめ、貝だまり、

写真14　調査指導風景（Ⅲ区）

写真15　現地説明会（Ⅲ区）

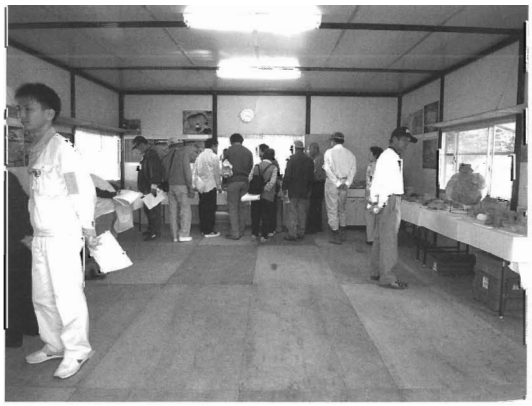


写真16　現地説明会での遺物展示

写真17　竪穴住居の検出（Ⅳ区SI03）

土坑、溝、ピット多数を検出した。ピットの中には底部から古銭が出土したものもあり、Ⅰ区SK01と同様な地鎮祭祀によるものと考えられる。

下層遺構面ではⅠ区のような古代の建物は確認できなかったものの、Ⅲ区の古墳時代集落とほぼ同時期の竪穴住居3棟をはじめ多数の土坑、溝、ピットを検出した。竪穴住居群は当該期に通有のものであるが、玉作関連遺物や土製勾玉未製品が出土した点が注目された。また、SI03内には多量の土師器が一括投棄された状態で出土し、当該期の土器編年研究上の貴重な資料を得ることができた。

年末の大荒れの天気は年が明けてからも続き、工期上の制約から雪掻きしながら遺構精査を進めるという劣悪な条件下の中での調査であったが、1月13日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、上述のⅢ区の補足調査を行った後、1月19日にすべての調査を終了した。

遺物整理・報告書作成作業

遺物の洗浄・注記の一部は現地調査と併行して実施し、平成18年度から埋蔵文化財調査センターにて本格的な報告書作成作業を他事業の報告書作成と併行して実施した。平成18年度は他事業の整理作業を優先したため、主として遺物の復元、実測を中心に行い、一部遺構及び遺物のトレース作業を行った。

翌平成19年度は他事業の発掘調査と併行しつつ整理作業を進め、主として遺構・遺物のトレース、遺物写真撮影、割付、原稿執筆を行った。なお、遺構・遺物のトレースはAdobe社のIllustratorを使用し、遺物・遺構ごとにIllustratorにより図版を作成した後、Adobe社のInDesignを用いて割付作業及び原稿執筆を行った。

写真18　竪穴住居の調査（Ⅳ区SI03）

写真19　雪に覆われた現場（Ⅲ区）

写真20　雪中での現場作業（Ⅳ区）

写真21　室内での整理作業
（Illustratorによるトレース作業）

第４章　Ⅰ区の調査

Ⅰ区では弥生時代前期から中世に至る遺構・遺物を確認した。上層では13世紀頃の地鎮用と思われる祭祀土坑を検出し、中層の遺構面では12～13世紀に属する掘立柱建物、柵列、土坑等を検出した。下層遺構面では奈良時代に属する総柱建物２棟を含む３棟の建物跡、自然河道等を検出した。上層の祭祀土坑は土師質土器内に銭貨を納めて土師質土器により入念に蓋をした遺構で県内では例がなく注目される。また、古代の掘立柱建物跡群はⅢ区の古代建物群とともに当該期の出雲平野では数少ない一般集落構造のわかる良好な事例となった。

第１節　基本層位

第５図に九景川遺跡Ⅰ区の土層を掲載した。Ⅰ区は遺跡が立地する谷部西側の平野部への出口にあたる場所で、丘陵に近い南側は比較的浅い位置で地山に達し、北へ向けて徐々に深くなっている。１層は近現代の造成土及び耕作土である。このうち下層の１－２層からは近世陶磁器が出土しており、江戸時代に堆積した層と考えられる。

２層は中世の造成土と考えられる黄灰褐色系の土で、一見地山に似る堅く締まった土であり、人為的に突き固められた土層と思われる。２層は調査区西部でしか認められないが、西壁付近では厚さ約50cm前後に達している。この土層の上面から、後述する祭祀土坑であるSK01が掘り込まれている。重機で除去したため遺物相は不明だが、重機掘削中に龍泉窯系の青磁が１点出土した。

３層は黒褐色系の粘質土で中世の包含層である。この層は隣接するⅢ・Ⅳ区でも広く認められる鍵層で、土師質土器や白磁が比較的まとまって出土している。出土遺物から12世紀頃を中心に形成された層と考えられる。

４層は黒～茶褐色系の粘質土で、地山ブロックを含む比較的よく締まった層である。この上面から中世前半期の遺構が掘り込まれている。遺物は多くはないが縄文時代後期から奈良時代の遺物が出土している。４層も幾つかに細分され、特に調査区北西側では後述するように大形の溝または自然河道であるSD07を黄褐色系の砂質土で人為的に埋め立てており、その上面に奈良時代の遺構面が形成されている様相を確認した。

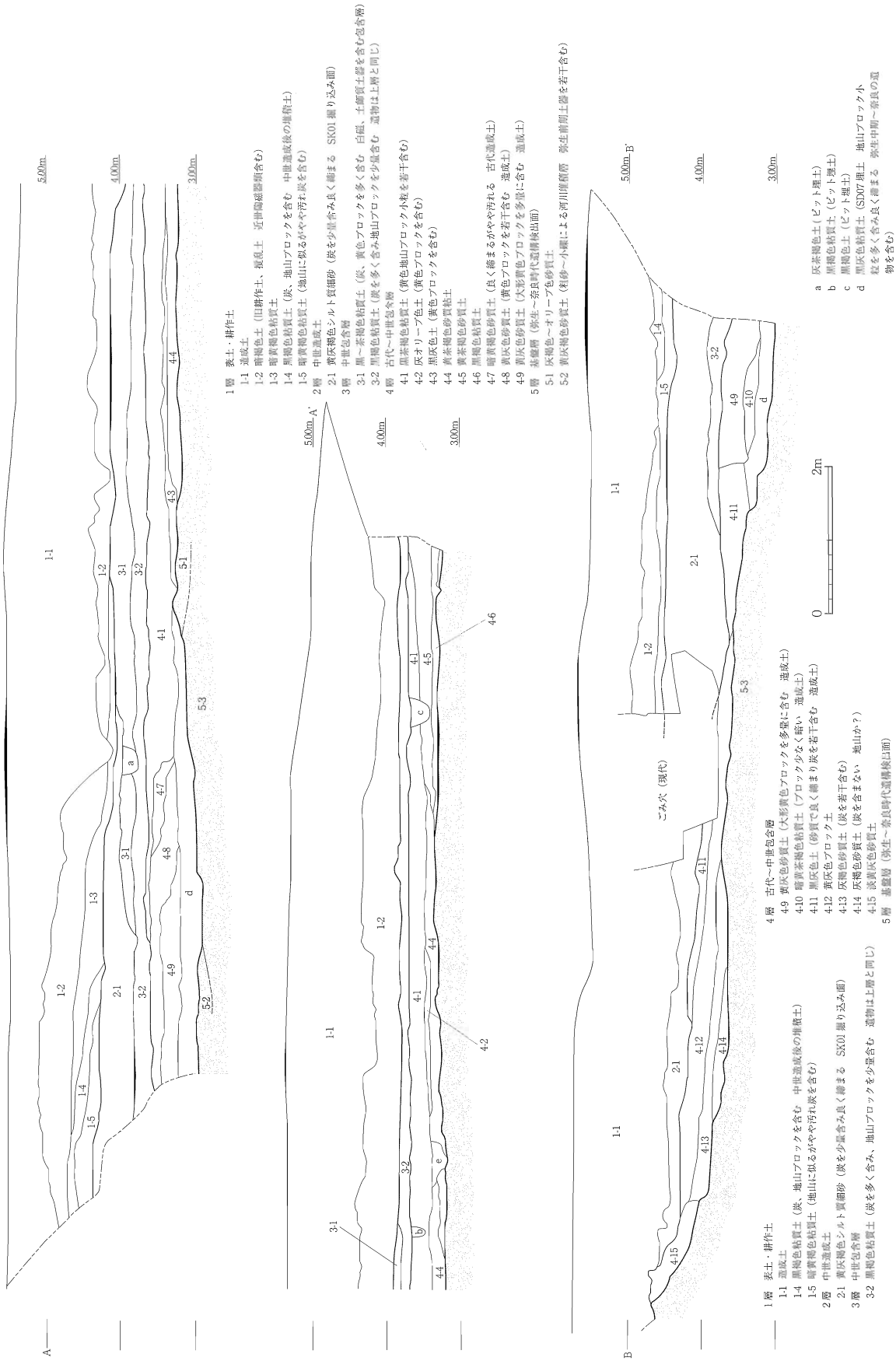
５層は黄～灰褐色系の粘質土・砂質土により構成される層である。わずかに弥生時代前期土器が出土したが、僅少であり全面的な掘り下げは実施していない。弥生時代～古代の遺構はこの層の上面において検出している。

写真22　Ⅰ区北壁西側土層

第２節　２層上面検出遺構の調査

(1) 遺構の分布と概要（第６図）

２層上面は中世の造成土により形成された遺構面であるが、先述のようにこの造成土は調査区西側においてのみ分布しており、調査区東側では確認できていない。これは東側は中世包含層である３層上面が遺構面となっていたのか、後世の削平により中世造成土が削り取られてしまったものなのかは、にわ



第５図　九景川遺跡Ⅰ区土層図　S=1/80

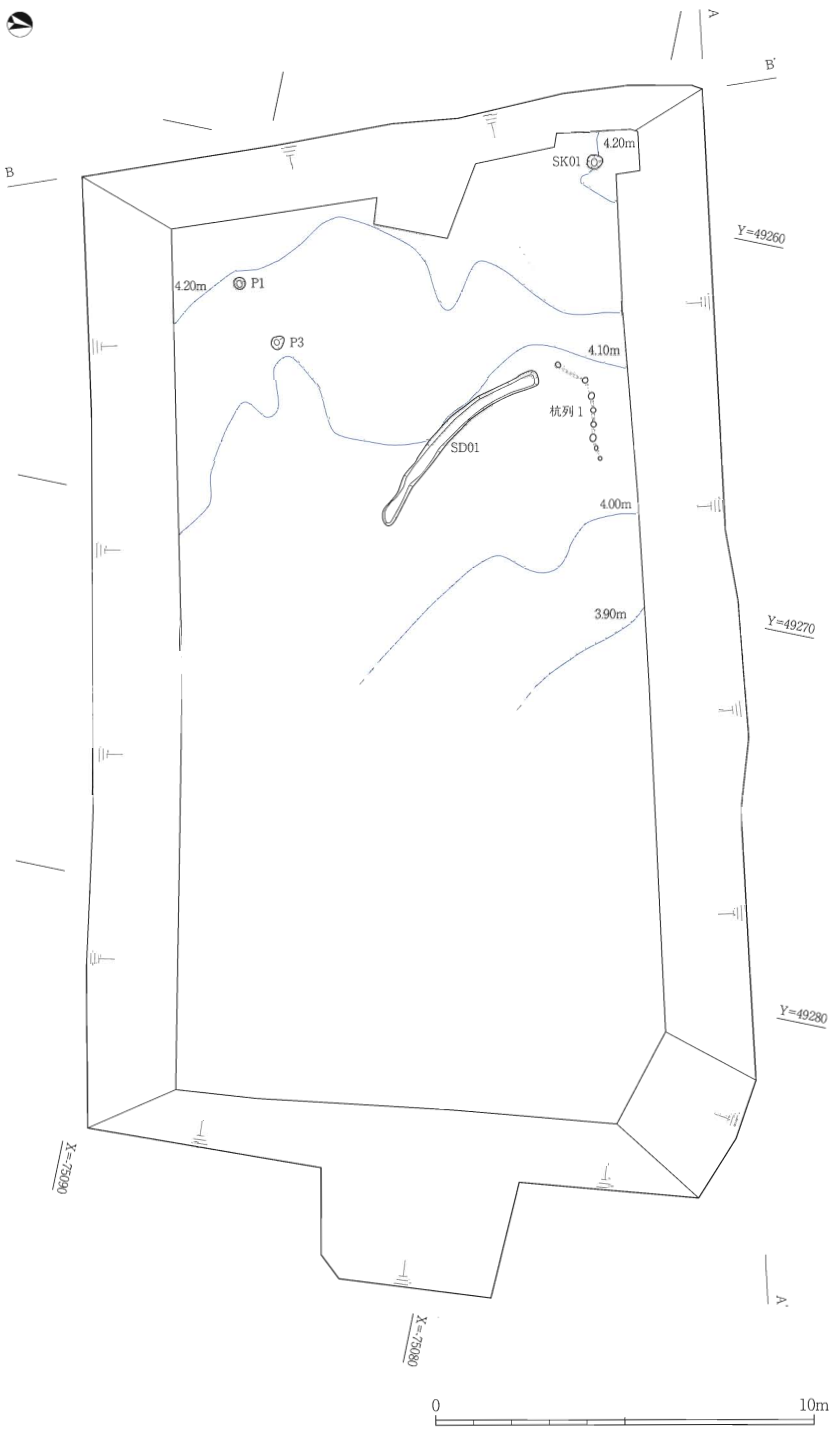
かには判断し難いが、後述するように地鎮用と思われる祭祀土坑があるにもかかわらず建物等が隣接する東側の３層上面で確認できなかったことからみて、後者であった可能性が高い。

遺構面は南西から北東に向けて緩やかに傾斜しており、土坑１、溝状遺構１、ピット、杭列等を検出したが、建物等は確認できていない。

(2) 土坑

SK01（第７・８図）

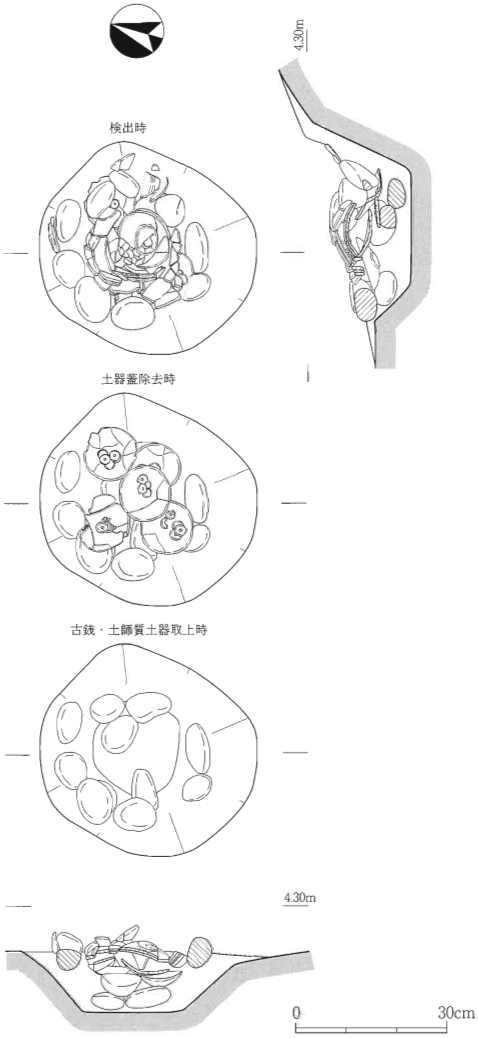
規模と形態　調査区北西隅で検出した遺構で、遺跡が位置する谷の西端、丘陵裾付近に位置する。径43cm前後の小規模な土坑で、断面形は台形状を呈している。現状での深さは12cmであるが、重機掘削中に発見した関係で上方は削平されており、正確な深さは不明である。内部には灰褐色系の土が堆積していた。



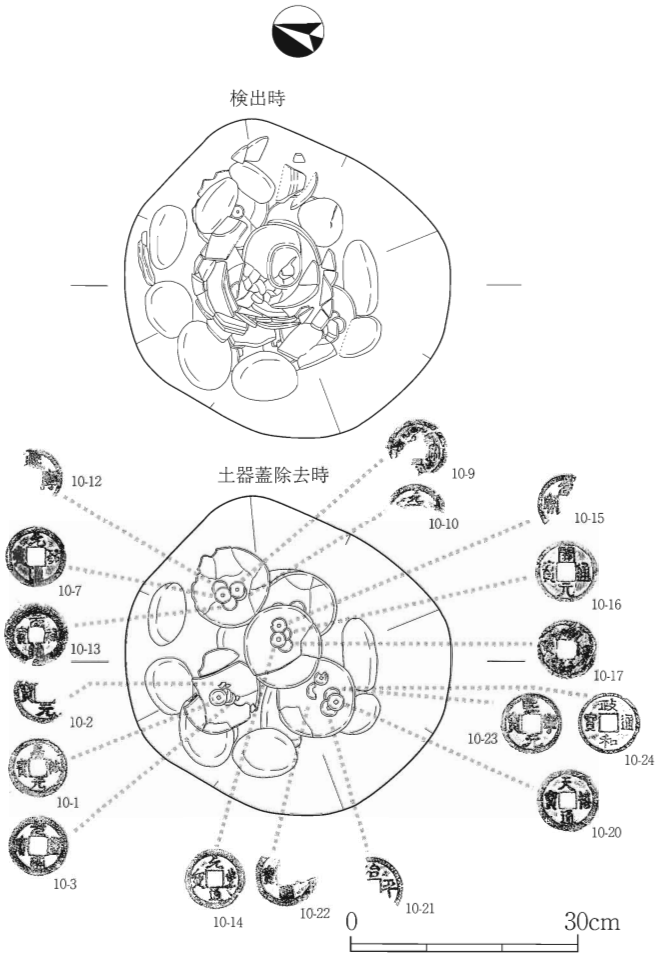
第６図　九景川遺跡Ⅰ区２層上面遺構配置図　S=1/200

当遺構の構造を調査所見により復元すると、まず①径50cm前後の比較的浅い土坑を掘り込み、②その底部に長さ10cm前後の円礫を敷き詰め、③敷き詰めた円礫上に５個の土師質土器小皿を花弁状に配置し、④その中にそれぞれ銭貨を複数枚配し、⑤再び土師質土器小皿を伏せて蓋をし、埋め戻すといった、一連の工程が復元できる。土師質土器小皿による蓋は複数枚によって幾重にも行われていたものと思われるが、当遺構は重機掘削時にその上方部を破壊してしまったため、その正確な上部構造は不明である。

小皿内に配置されていた銭貨は４枚のものと５枚のものがあるが、ブロンズ病による崩壊が進行



第7図　九景川遺跡Ⅰ区SK01実測図
S=1/15



第8図　九景川遺跡Ⅰ区SK01銭貨出土状況
遺構：S=1/10、遺物：S=1/3

している個体が多いため、正確な枚数は確認できていない。また、調査した範囲内では炭化物や骨等は確認できなかった。

SK01出土遺物（第9・10図）　第9図はSK01から出土した土師質土器小皿で、古銭埋納用の容器及びその蓋として使用されたものである。

いずれもほぼ同形同大の小皿で、口径10.1～11.0cm、器高3.0～3.6cm、底径5cm前後を測るが、全体的にやや歪みの顕著な資料が多い。

写真23　SK01発見時

器形はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はやや内湾気味で丸く収めている。底部はやや風化が進んでいるが、確認できる資料ではいずれも回転糸切痕が認められる。

第10図は土師質土器小皿内から出土した銭貨である。個々の釈読及び詳細な計測値は表2に掲げた。

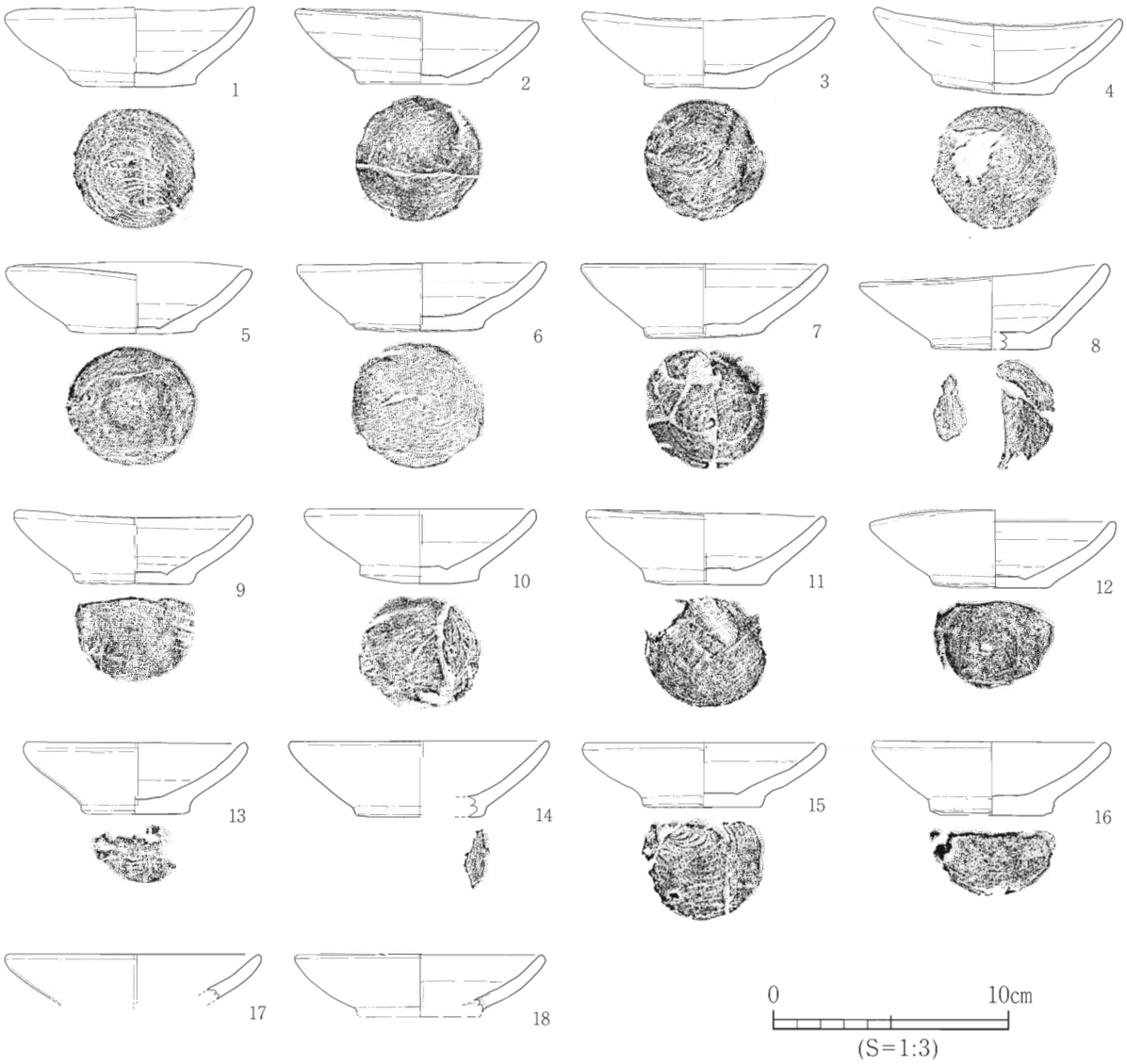
SK01出土古銭は、先述のように全般に遺存状況が悪く、文字の判別が困難な資料が多い。文字の判読できる資料は第10図16の開元通寶（621年初鋳）を

除くと、いずれも北宋代の資料に限定され、明代の資料は認められないようである。

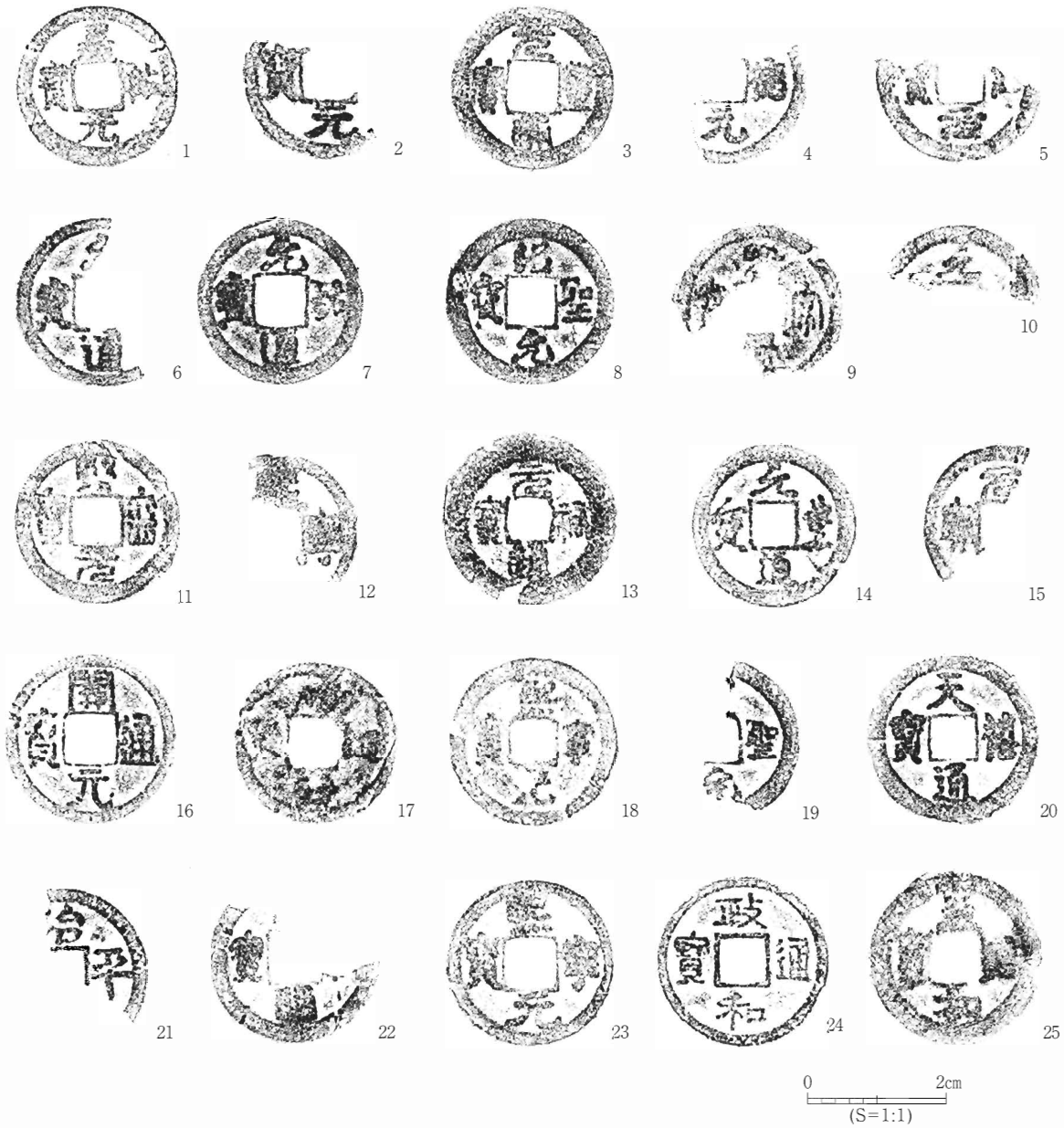
遺構の性格と年代　既に述べたように、当遺構はその形態や特異な古銭出土状況から、中世期によく見られる地鎮のための祭祀遺構と判断される。残念ながら検出した箇所が調査区隅であり、本来付近に存在したと思われる建物群との空間的配置関係は不明である。

写真 24　SK01 発見時（横方向から）

県内における中世期の銭貨を用いた地鎮遺構は 9 例が知られており、①銭貨のみが単独で出土するもの、②銭貨と皿がセットで出土するもの、③鍋もしくは釜＋皿に銭貨が伴う事例に分類されている（西尾 2002）。当例は②に該当するが、他の事例が柱穴であるのに対し当例は明らかに祭祀用の土坑であり、かつその丁寧な作りは他事例とその様相を大きく異にする。比較的類似する例としては、



第 9 図　九景川遺跡 I 区 SK01 出土遺物実測図 (1)　S=1/3



第10図　九景川遺跡Ⅰ区SK01出土遺物実測図(2)　S=1/1

広島県三次市山崎遺跡SK09例などが比較的似た事例であるが、底面に円礫を敷く事例は稀なようである。

遺構の年代については、層位的関係から12世紀以降であることは確実である。銭貨は明代の銭を含まず、14世紀以前のものである可能性が高い。土師質土器からの年代比定は困難だが、やや厚手のつくりは松江市黒田畦遺跡土居第Ⅳ調査区例（広江1992）に類似している点から、現段階では13世紀代を中心とする時期のものと考えておきたい。

SD01（第11図）

規模と形態　調査区西側で検出した小規模な溝で、長さ5.6ｍ、幅40㎝、深さ5㎝前後を測り、やや弧状を呈する小規模な溝である。本来は東の方へさらに延びていたと思われるが、遺構検出時に掘り下げすぎたため失われている。溝内には黒褐色粘質土が堆積していた。

遺構の性格と年代　遺物は出土していないが、層位的関係からみてSK01とほぼ同時期の遺構と考

表2　九景川遺跡Ⅰ区SK01銭貨計測表

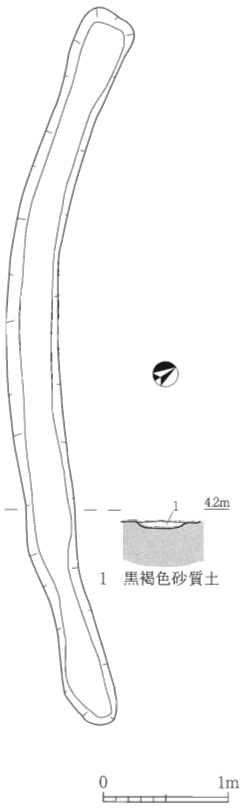
図版番号	名称	初鋳年	銭径（A）/銭径（B）	内径（C）/内径（D）	銭厚	量目
第10図1	嘉祐元寶（北宋）	1056年（暦）	23.60㎜　23.75㎜	5.90㎜　5.90㎜	1.30～1.45㎜	1.60g
第10図2	□□元寶				1.20～1.30㎜	1.11g
第10図3	元豊通寶（北宋）	1078年（暦）	38.00㎜　39.00㎜	7.00㎜　6.40㎜	1.10～1.30㎜	2.92g
第10図4	景徳元寶（北宋）	1004年（暦）			1.10㎜	1.03g
第10図5	□□元寶				1.20～1.25㎜	0.75g
第10図6	□□通寶（北宋）		24.50㎜		1.15～1.20㎜	0.77g
第10図7	元祐通寶（北宋）	1086年（暦）	24.20㎜　24.10㎜	7.00㎜　6.70㎜	1.25～1.30㎜	1.52g
第10図8	紹聖元寶（北宋）	1094年（暦）	24.30㎜　24.45㎜	6.60㎜　6.50㎜	1.45～1.55㎜	3.81g
第10図9	聖宋元寶（北宋）	1101年（暦）	24.20㎜		1.40～1.50㎜	0.93g
第10図10	元□□□				1.30～1.45㎜	0.96g
第10図11	熙寧元寶（北宋）	1068年（暦）	24.05㎜　24.00㎜	6.95㎜　6.95㎜	1.25～1.45㎜	2.57g
第10図12	熙寧元寶（北宋）	1068年（暦）			1.15～1.20㎜	1.04g
第10図13	元祐通寶（北宋）	1086年（暦）	25.05㎜　25.75㎜	5.90㎜　5.80㎜	1.05～1.20㎜	1.80g
第10図14	元豊通寶（北宋）	1078年（暦）	23.80㎜　23.80㎜	6.20㎜　5.75㎜	1.35～1.40㎜	2.25g
第10図15	元□通寶				1.40㎜	0.83g
第10図16	開元通寶（唐）	621年（暦）	24.70㎜　24.75㎜	7.20㎜　7.10㎜	0.90～1.10㎜	2.56g
第10図17	不明		23.80㎜　23.60㎜	7.20㎜　6.90㎜	1.10～1.20㎜	1.64g
第10図18	熙寧元寶（北宋）	1068年（暦）	24.40㎜　24.40㎜	5.50㎜　5.90㎜	1.20～1.30㎜	1.85g
第10図19	□聖元寶				1.20㎜	0.63g
第10図20	天禧通寶（北宋）	1017年（暦）	24.60㎜　24.95㎜	5.90㎜　6.10㎜	1.40～1.50㎜	2.44g
第10図21	治平元寶（北宋）	1064年（暦）			1.20㎜	1.14g
第10図22	□□通寶				1.40～1.50㎜	0.71g
第10図23	熙寧元寶（北宋）	1068年（暦）	24.15㎜　24.20㎜	7.00㎜　6.70㎜	1.10～1.20㎜	2.88g
第10図24	政和通寶（北宋）	1111年（暦）	24.55㎜　24.70㎜	6.10㎜　6.25㎜	1.15～1.30㎜	2.61g
第10図25	至和通寶（北宋）	1054年（暦）	24.75㎜　24.85㎜	7.10㎜　7.10㎜	1.35～1.40㎜	2.11g

えられる。遺構の性格は不明である。

杭列1（第6図）

規模と形態　SD01の北側で検出した杭列で、杭自体は腐食して残っていないが、土壌化した痕跡により杭の跡と判断された。現状では2.8ｍ程が残存していており、Ｓ字状に蛇行している。

遺構の性格と時期　打ち込み面が確認できないため年代は不明である。性格についても不明と言わざるを得ないが、その位置と方向が後述する下層のSD07の護岸付近にほぼ対応している点が注意される。



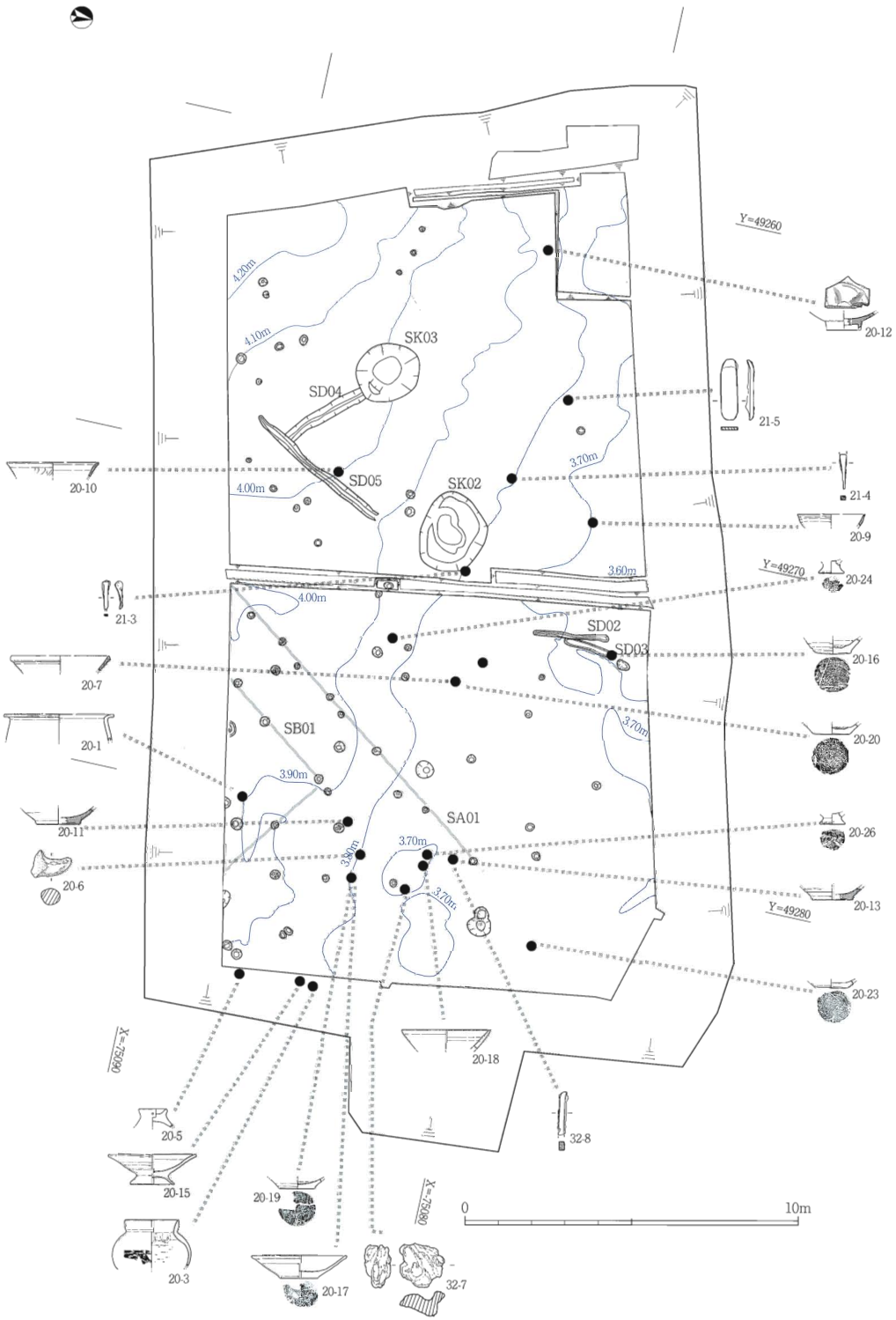
第11図　九景川遺跡Ⅰ区SD01
実測図　S=1/60

写真25　Ⅰ区4層上面遺構面（東から）

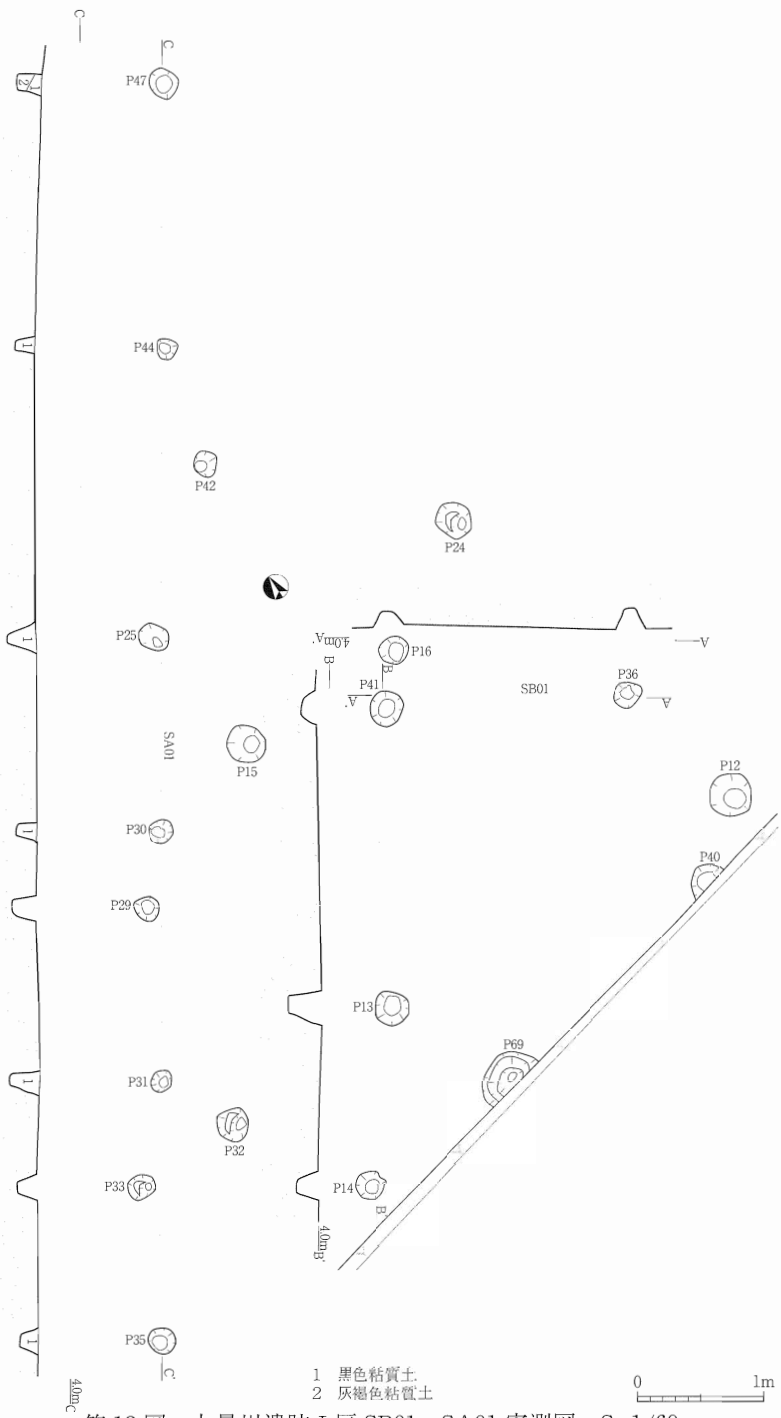
第３節　４層上面検出遺構の調査

(1) 遺構の分布と概要（第 12 図）

４層上面は中世前半期の包含層である３層を除去した茶褐色系の粘質土上面で検出した遺構群で、遺構覆土は概ね３層と同じ黒褐色粘質土系の土が堆積しており、概ね 11 世紀末～ 13 世紀の遺構と考えられる。



第 12 図　九景川遺跡Ⅰ区４層上面平面図　遺構：S=1/200、遺物：S=1/12、1/8



第 13 図　九景川遺跡Ⅰ区 SB01・SA01 実測図　S=1/60

遺構面は標高 3.7 ～ 4.2 m で南西から北東へ向けて緩やかに傾斜している。SB01 などをはじめとする居住関連遺構は調査区南東部に位置し、SK03 等の、おそらく耕作関連と想定される土坑、溝群は柵列 SA01 を境界として西側に分布している。

(2) 掘立柱建物跡

SB01（第 13 図）

規模と形態　調査区東南に位置する掘立柱建物跡で、後述する SA01 とほぼ主軸を同じくしている。建物は北東隅の一部しか確認できていないが、梁間 2 間以上、桁行 3 間以上あったものと推測される。柱穴間はかなりばらつきが認められる。

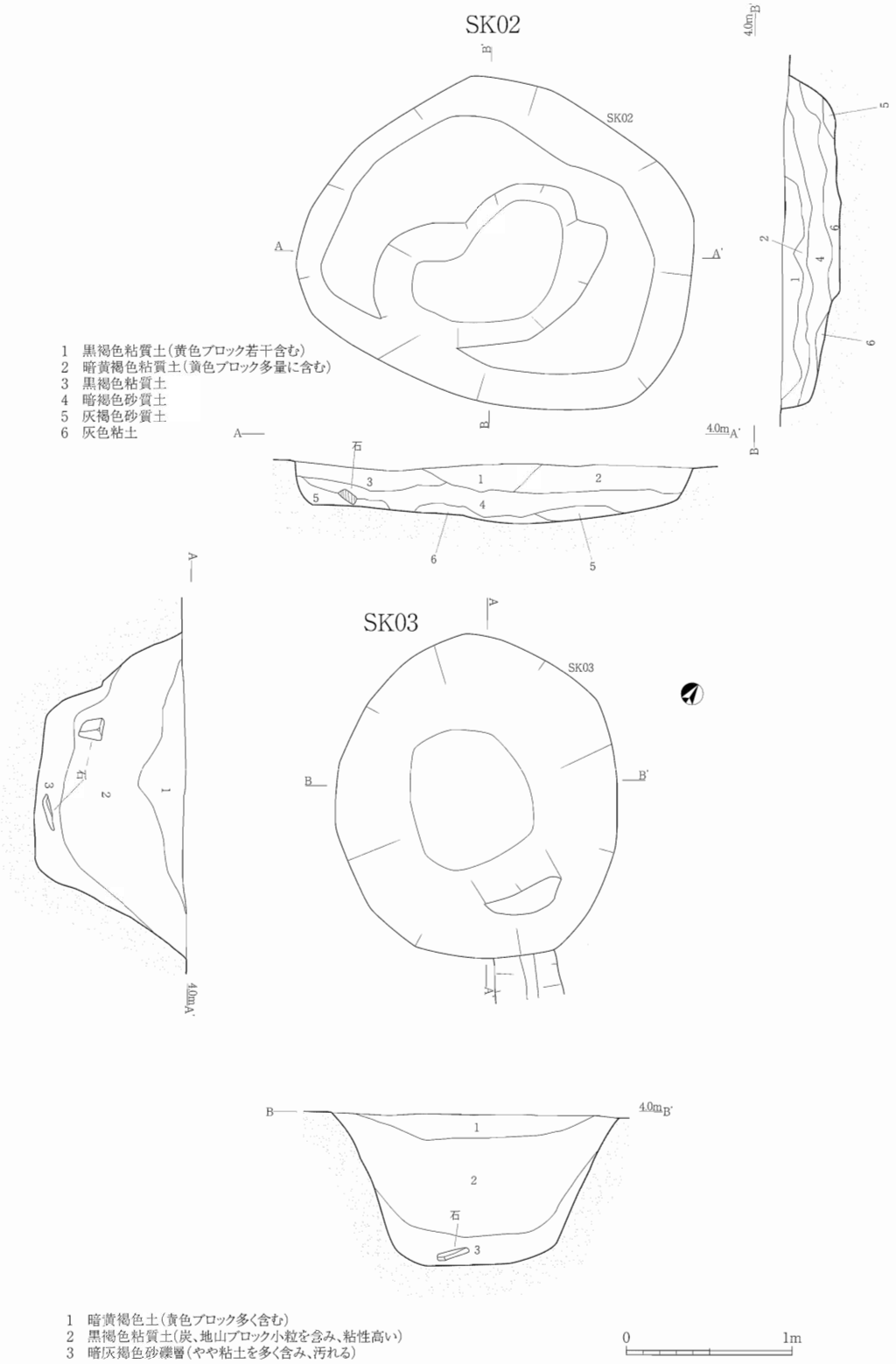
なお、この南側に隣接するⅣ区でも同じ 4 層上面で掘立柱建物跡を数棟確認しているが、この建物の続きと思われる柱穴は確認できなかった。おそらく調査区天地返しの関係で調査できなかったⅠ区とⅣ区の間で収まる規模の建物と推測される。

柱穴は比較的小規模で径 20 ～ 30cm、深さ 20cm前後のものが多く、3 層と同じ黒褐色系の粘質土が堆積していた。

遺構の性格と時期　柱穴内からの遺物は出土していないが、層位的所見から 3 層包含層の時期、12 世紀頃の建物跡と考えられる。建物の性格・構造は部分的にしか確認できていないため、不明といわざるを得ない。

SA01（第 13 図）

規模と形態　SB01 の北西側に約 170cm離れて SB01 桁方向とほぼ平行して位置する柱穴群で、検出した範囲での長さは 9.9 m を測る。柱穴間の間隔はまちまちで、長い箇所で 2.3 m、短い箇所で 1.5

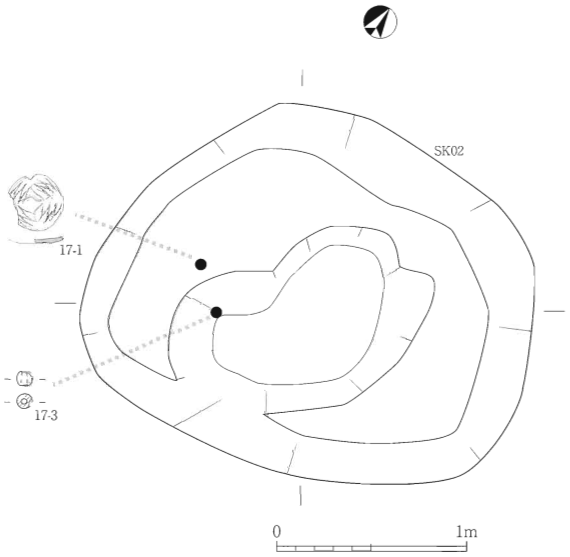


第 14 図　九景川遺跡 I 区 SK02・03 実測図　S=1/40

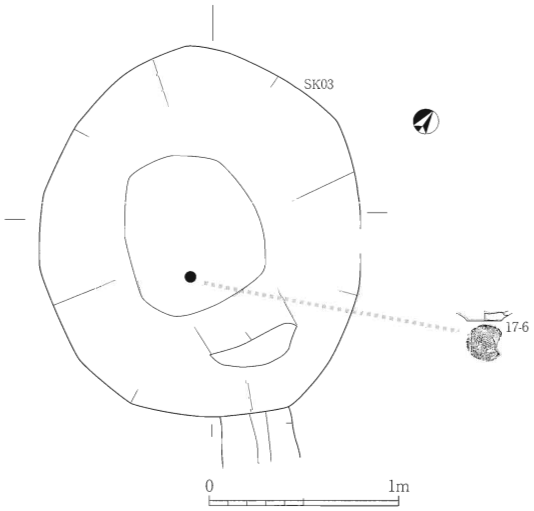
m である。柱穴は SB01 とほぼ同規模で、覆土は黒色～灰褐色系の粘質土が堆積していた。

遺構の性格と時期　SB01 の桁行と主軸を同じくすることから、SB01 と同時期かつその付属施設である可能性が高い。当遺構の西側では溜井状遺構である SK03 や廃棄土坑である SK02 が位置する点からみて、居住域とその外部を区画する柵列的な遺構と想定される。

なお、当遺構の北西側にも、これとほぼ平行するピット列があるようにも観察されたが、柱穴間



第 15 図　九景川遺跡Ⅰ区 SK02 遺物出土状況
遺構：S=1/40、遺物：S=1/12



第 16 図　九景川遺跡Ⅰ区 SK03 遺物出土状況
遺構：S=1/40、遺物：S=1/12

写真 26　SK02 遺物出土状況

の距離がかなり不揃いになることから遺構としては取り扱っていない。

(3) 土坑

SK02（第 14 図）

規模と形態　調査区のほぼ中央で検出した土坑で、平面形は長楕円形を呈する。規模は、長径 2.4 m、短径 1.9 m、深さ 35 cm前後を測る。底部は中央付近が若干窪み、浅い二段掘状を呈している。覆土は底面付近に灰褐色系の粘土、砂質土が堆積し、その上に暗褐色砂質土、最上層に黒褐色・暗黄褐色系の地山ブロックを含む粘質土が堆積していた。水平に近い堆積状況や地山ブロックを多量に含む土が堆積している点などからみて、人為的に埋め戻した土である可能性が高い。

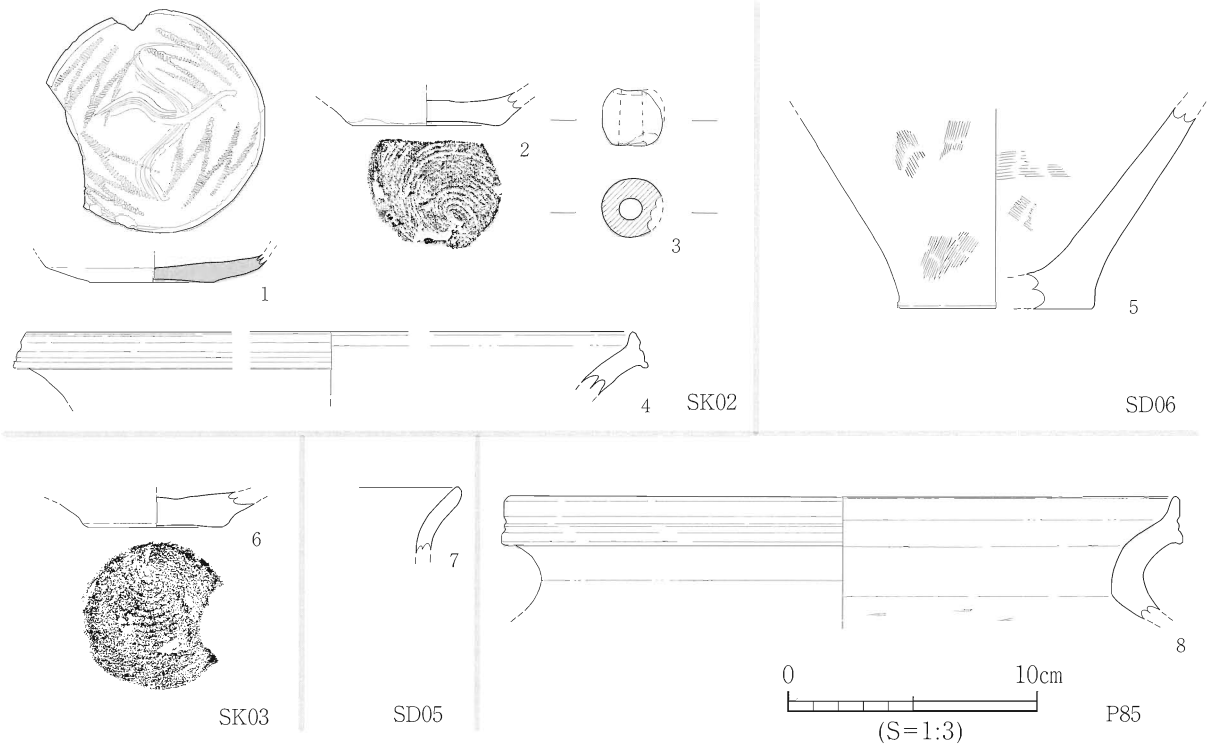
SK02 遺物出土状況（第 15 図）　床面付近から青磁が 1 点、包含層中より土錘、土師質土器、弥生土器等が出土している（写真 26）。

SK02 出土遺物（第 17 図）　1 は同安窯系の青磁皿Ⅰ－1ｂに属する資料で、底径 4.9 cmを測る。内外面とも施釉され、見込み部に櫛または篦状工具により花文が描かれている（太宰府市教育委員会 2000）[1]。

2 は土師質土器坏で、底部に回転糸切痕を残す。3 は小型の土錘で平面形は寸詰まりの楕円形状を呈し、重さ 10.5 g を測る。4 は弥生土器広口壺の口縁部で、口縁端部を上下に拡張し、2 条の凹線文を施している。下層からの混入品と考えられる。

遺構の性格と時期　1 の同安窯系青磁から 12 世紀中頃から後半の遺構と想定される。埋土の様相からみて、廃棄土坑的な性格である可能性が考えられるが、定かではない。

(1)　当遺跡出土の陶磁器類については、島根県埋蔵文化財調査センター西尾克己・守岡正司氏にご教示いただいた。



第 17 図　九景川遺跡Ⅰ区 SK02・03・SD05・06・P85 出土遺物実測図　S=1/3

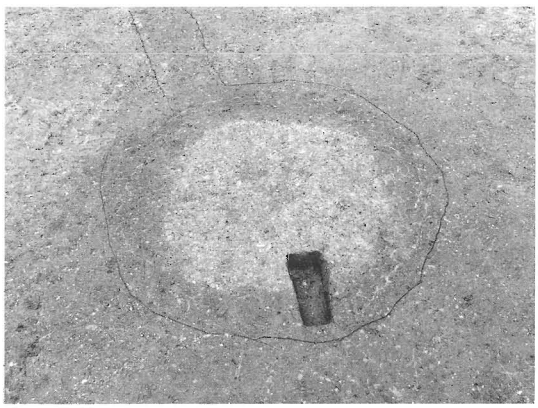


写真 27　SK03 検出時

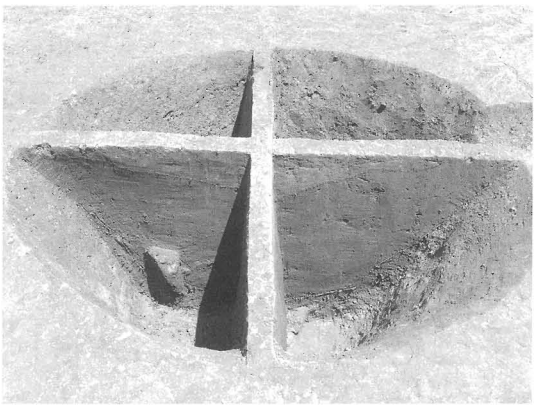


写真 28　SK03 土層断面

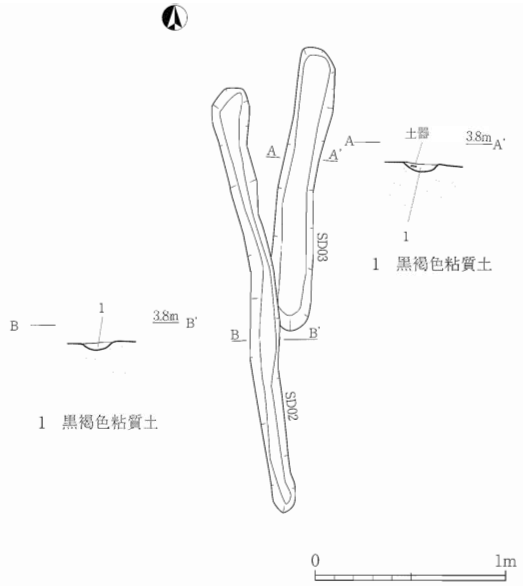
SK03（第 14 図）

規模と形態　調査区西側、SK02 の南西約 5 m付近で検出した土坑である。平面形は長楕円形を呈し、長径 2.0 m、短径 1.7 m、深さ約 90cmを測る。底部はほぼ平坦で、斜面に一ヶ所ステップ状の平坦面が削り出されている。土坑の南東側には SD04 が取り付いており、SD05 とともに SK03 に付随する施設であった可能性が高い。

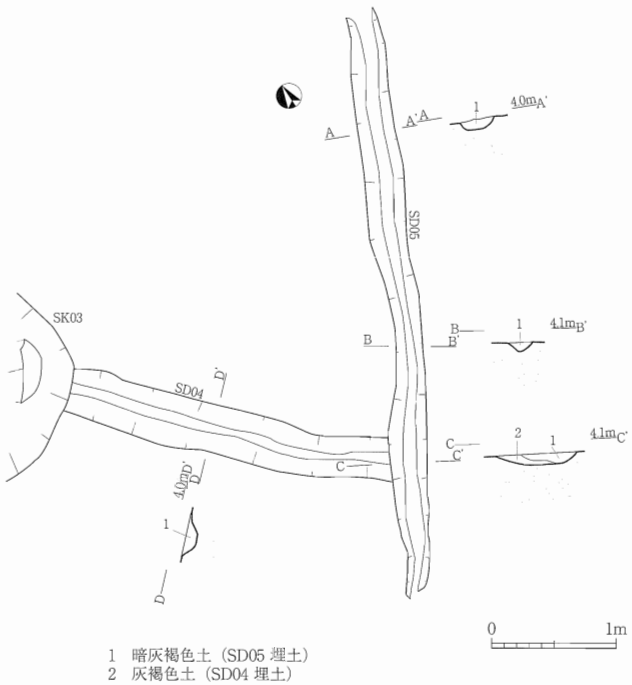
埋土は上層から暗黄褐色土、黒褐色粘質土、暗灰褐色砂礫の順で凹状に堆積しており、自然堆積であると判断される（写真 27・28）。

SK03 出土遺物（第 17 図 6）　第 17 図 6 は 3 層から出土した土師質土器坏の底部である。底径 5.4cmを測り、不明瞭ながら底面に回転糸切痕を残している。

遺構の性格と時期　当遺構の年代は、出土遺物や層位的関係から、12 世紀頃の遺構であると考えられる。性格については断言できないものの、埋土が明らかに自然堆積状を呈している点や、土坑の形態及びステップ状の平坦面を有する点、小溝が取り付いている点からみて、畑地などにおける溜井状の施設であった可能性も一案としては想定されよう。



第 18 図　九景川遺跡Ⅰ区 SD02・03 実測図　S=1/40



第 19 図　九景川遺跡Ⅰ区 SD04・05 実測図　S=1/60

(4) 溝

SD02（第 18 図）

規模と形態　調査区中央北側で検出した小溝で SD03 と一部接し、コンターラインとほぼ直交して主軸を南北方向に向けて位置している。検出した範囲での規模は、長さ 2.3 m、幅 16cm、深さ 5cm前後を測る浅い溝である。覆土は 3 層と同じ黒褐色系の土が堆積していた。

SD02 出土遺物　土師質土器が若干出土しているが、細片のため図化し得なかった。

遺構の性格と時期　僅少であるが、出土遺物から 12 世紀頃の遺構と想定される。性格については不明である。

SD03（第 18 図）

規模と形態　調査区中央北側で検出した小溝で、先述のように SD02 と一部接し、ほぼ同一方向に主軸をとって位置している。規模は、長さ 1.5 m、幅 20cm前後、深さ 5 cm前後で、SD02 と同様な黒褐色系の土が堆積していた。

SD03 出土遺物　土師器・土師質土器片が出土しているが、細片のため図化していない。

遺構の性格と時期　細片ではあるが、出土遺物や層位的関係から SD02 とほぼ同時期の遺構と判断される。

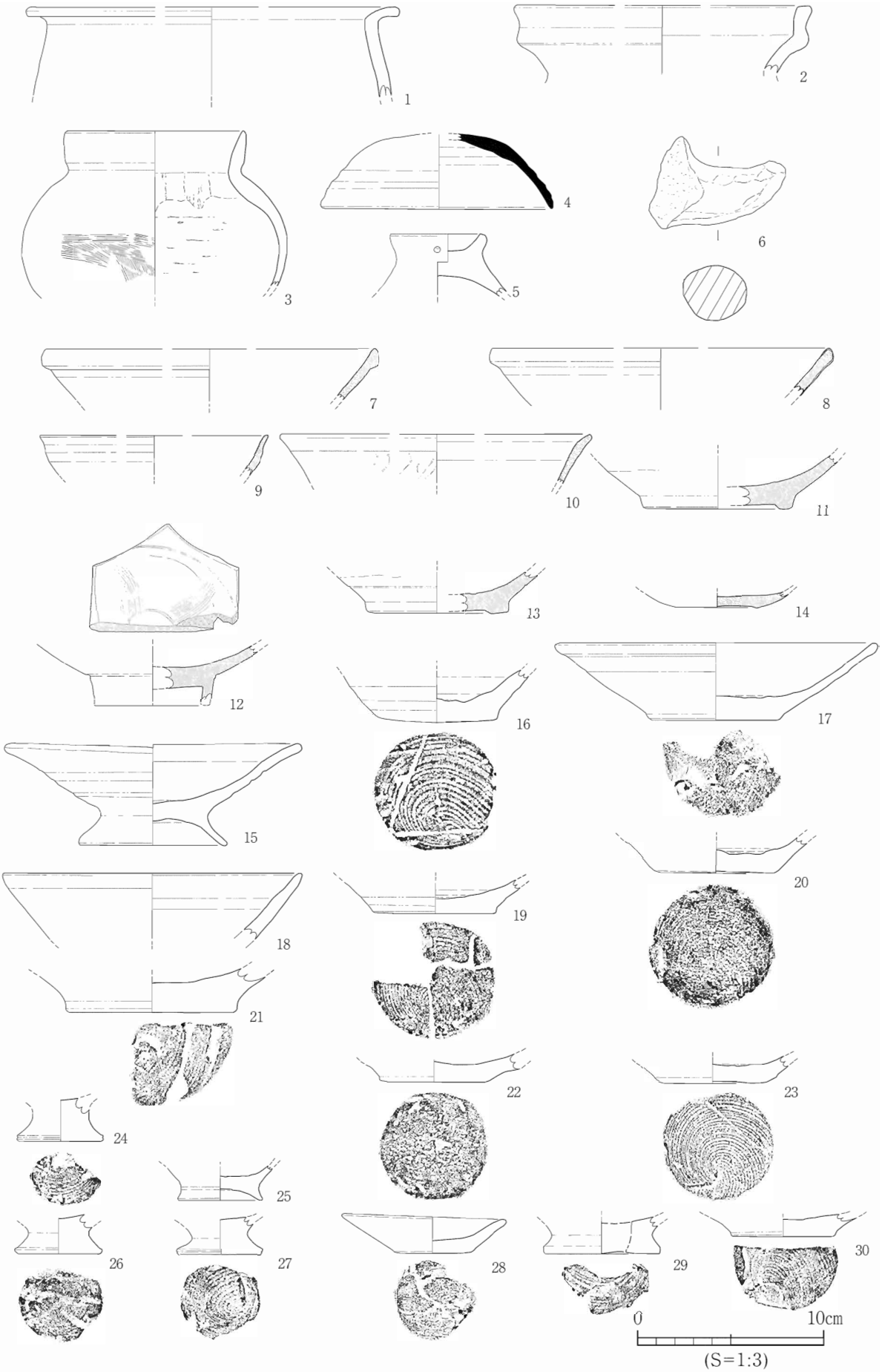
SD04（第 19 図）

規模と形態　調査区西側で検出した溝で、先述の SK03 南側に取り付き、南端は SD05 と切り合っている。土層観察から SD04 が先行すると思われるが、一連の遺構である可能性が高い。遺構の規模は、長さ 5.2 m、幅約 80cm、深さ 15cm前後で、溝内には灰褐色土が堆積していた。遺物は出土していない。

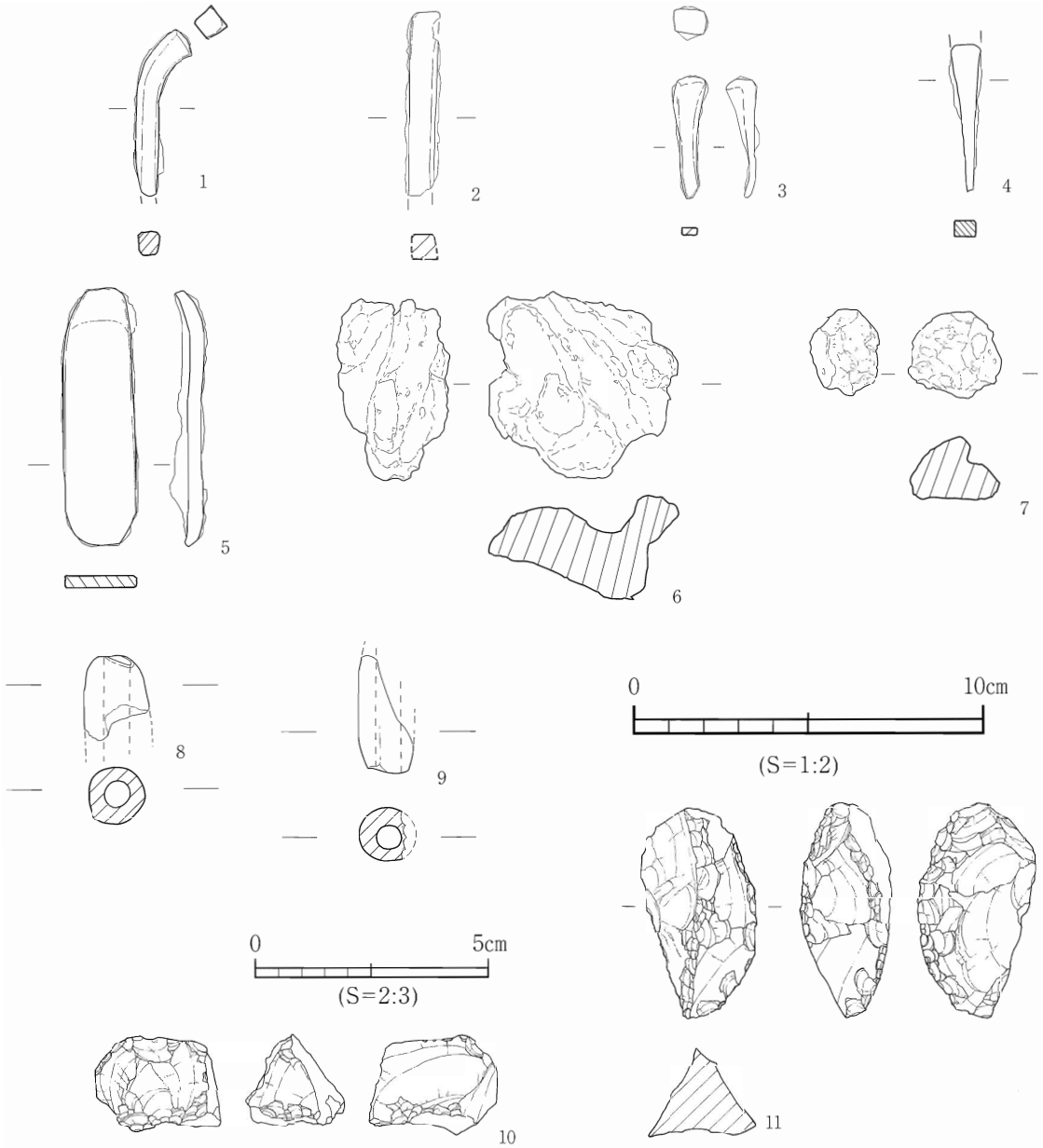
遺構の性格と時期　遺構の年代を示す明確な遺物は出土していないが、SK03 と密接な関連を持つ遺構であることから、中世前半期の遺構である可能性が高い。その機能としては、その配置関係からみて SK03 に雨水を導くための溝であったと想定される。

SD05（第 19 図）

規模と形態　調査区西側に位置し、南西から北東へ延びる小規模な溝で、先述のとおり SD04 の南を切っている。検出した範囲での規模は、長さ 9.3 m、幅 60cm前後、深さ 18cmを測る。溝内には暗灰褐色系の土が堆積していた。



第 20 図　九景川遺跡 I 区 3 層出土遺物実測図 (1)　S=1/3



第21図　九景川遺跡Ⅰ区3層出土遺物実測図(2)　S=1/2、2/3

SD05出土遺物（第17図7） SD05内からは弥生土器または土師器の細片が若干出土している。第17図7は甕口縁部の細片である。緩やかに外反する形状を呈し、端部は丸く収めている。口縁部端部に刻みなどは認められないが、やや大形の石英・長石を多く含む胎土からみて、弥生時代前期に属する資料である可能性が高い。その他、弥生時代終末期前後の甕片も若干出土している。

遺構の性格と時期　切り合い関係からSD04より後出することは明らかであり、SK03及びSD04とほぼ同時期の遺構と想定される。溝内の出土遺物は下層からの混入品であろう。遺構の性格については、SD04と同じく導水的性格の施設であった可能性が高い。

(5) Ⅰ区3層出土遺物（第20・21図）　第12図に主な3層出土遺物の分布状況を示した。遺物はそれほど多くはないが、その多くはSB01・SA01の位置する調査区東側を中心に分布しており、遺構の散漫な調査区南西部からはほとんど出土していない。

第20・21図には3層出土遺物を示した。第20図1は弥生土器の甕である。口縁部は強く屈曲し

端部を丸く収めている。胴部は内外面ともナデ調整により仕上げている。Ⅲ－1前後の資料と思われる。2は土師器甕の口縁部で復元口径16.0cmを測る。口縁部は段部が丸みを帯びてほぼ直立する形状を呈し、全体的に厚手である。後述するⅣ区SI01～03とほぼ同時期に属する資料と想定される。3は小形丸底壺で、口縁部はほぼ直立し、頸部を強くなでることにより複合口縁状に仕上げている。胴部は中央部に最大径を持ち、外面にヨコハケが認められる。やはりSI01～03とほぼ同時期の資料と考えられる。5は弥生土器蓋と思われる資料で、二方向に円孔が認められる。大型の砂粒を多く含む胎土からみて弥生時代前期に属する可能性が高い。

4は須恵器坏蓋で、小片ではあるが復元径12.3cmを測る。天井部はヘラ切りのちナデにより仕上げている。大谷5期（大谷1994）に属する資料であろう。6は甑の取手で外面を粗いナデにより仕上げている。1～6は基本的に下層からの混入品と考えられる。

7～14は白磁・青白磁である。7・8は玉縁状口縁部の太宰府分類椀Ⅳ類（横田・森田1978）の白磁で、緑かかった厚い釉薬がかかっている。9はⅢⅤ～Ⅶ類、10は椀Ⅴ類に属する。10の外面には櫛描文状のモチーフが描かれている。11は椀Ⅳ類の底部で外面下半部及び底面には釉が及ばない。12は高い高台を備える椀Ⅴ類の底部で、見込みに円圏を巡らせその内部に櫛描文によるモチーフを充填している。13は白磁Ⅳ類椀の底部、14は青白磁Ⅲの底部である。15～30は土師質土器である。15はハの字状に開く足高の高台を備える坏で、体部もほぼ直線的に開く形状をなす。17は無高台の坏であるが、体部の形状は15に近い形状を呈する。18の坏も直線的に開くが、若干内湾気味に立ち上がっている。24、26、27は高台付坏の資料であるが、脚部のみで坏部の形状は不明である。底部にはいずれも回転糸切痕を残す。

第21図には3層出土の鉄器、土製品、鉄器等を掲載した。1～5は鉄器で、うち1～4は釘と想定される資料である。1は現存長4.7cmを測り、先端部を欠損している。頭部はやや折り曲げられているが打面は形成されていない。2は1とほぼ同規模の釘ないしは棒状鉄片で、やはり先端部を欠損している。3は小形の釘で長さ3.5cmを測る。頭部は折り曲げられ打面が形成されている。4は3とほぼ同タイプの釘であるが、頭部を欠損しており、現存長4.2cmを測る。これらの釘はいずれも断面形は方形ないしは矩形を呈する。5は長さ8.3cm、幅2.0cmを測るヘラ状の鉄片で、先端部は丸みを帯びやや外反している。

6・7は鉄滓である。6は椀形鍛冶滓で断面2段状を呈するようにも見える。中央部に溝状の窪みがあり、炭の噛み込みは比較的少ない緻密な滓である。分析の結果、砂鉄起源の鍛錬鍛冶滓と判定されている（第8章大澤・鈴木論文参照）。7は径2.7cm前後の球形の小形滓で、気泡が多く炭の噛み込みが少ない。分析の結果、鍛錬鍛冶滓片と判定されている。

8・9は土錘で、いずれも円柱状の小形タイプである。8は半分以上を欠損し、現存長2.4cm、重量4.25gを測る。9も約半分が欠損しており、現存長3.4cm、重量4.77gを測る。

10はチャートまたは玉髄製の石核または楔形石器と考えられる資料で、長さ2.0cm、幅2.6cm、厚さ2.0cmを測る。上下面に潰れ状の細かな剥離が認められる。11は珪質岩製の剥片で、長さ4.3cm、幅2.2cm、厚さ1.6cmを測り、断面は三角形状を呈する。各辺には細かな剥離痕が観察されるが、その剥離角度からみて縄文時代以前の剥片剥離技術とは考え難く、鉄製工具等を用いて石材加工を行った玉作関連資料である可能性が高い[(2)]。

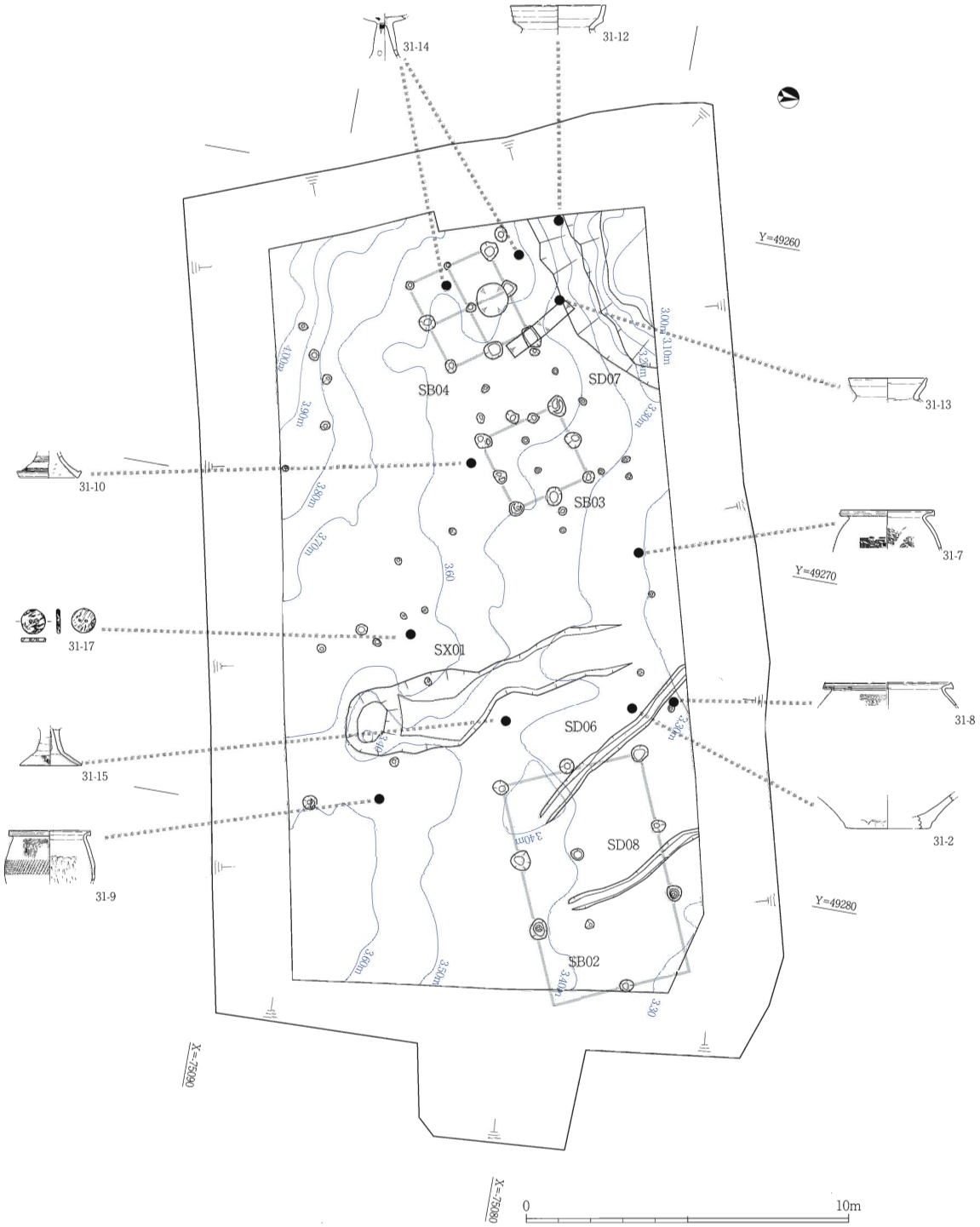
(2) 島根県埋蔵文化財調査センター　稲田陽介氏のご教示による。

第４節　５層上面検出遺構の調査

(1) 遺構の分布と概要（第 22 図）

５層上面遺構群は、中世遺構面が掘り込まれた４層を除去し、基盤層である灰褐色系砂質土上面で検出した遺構群で、弥生時代から奈良時代の遺構が含まれるが、中心となる遺構は奈良時代の建物群である。

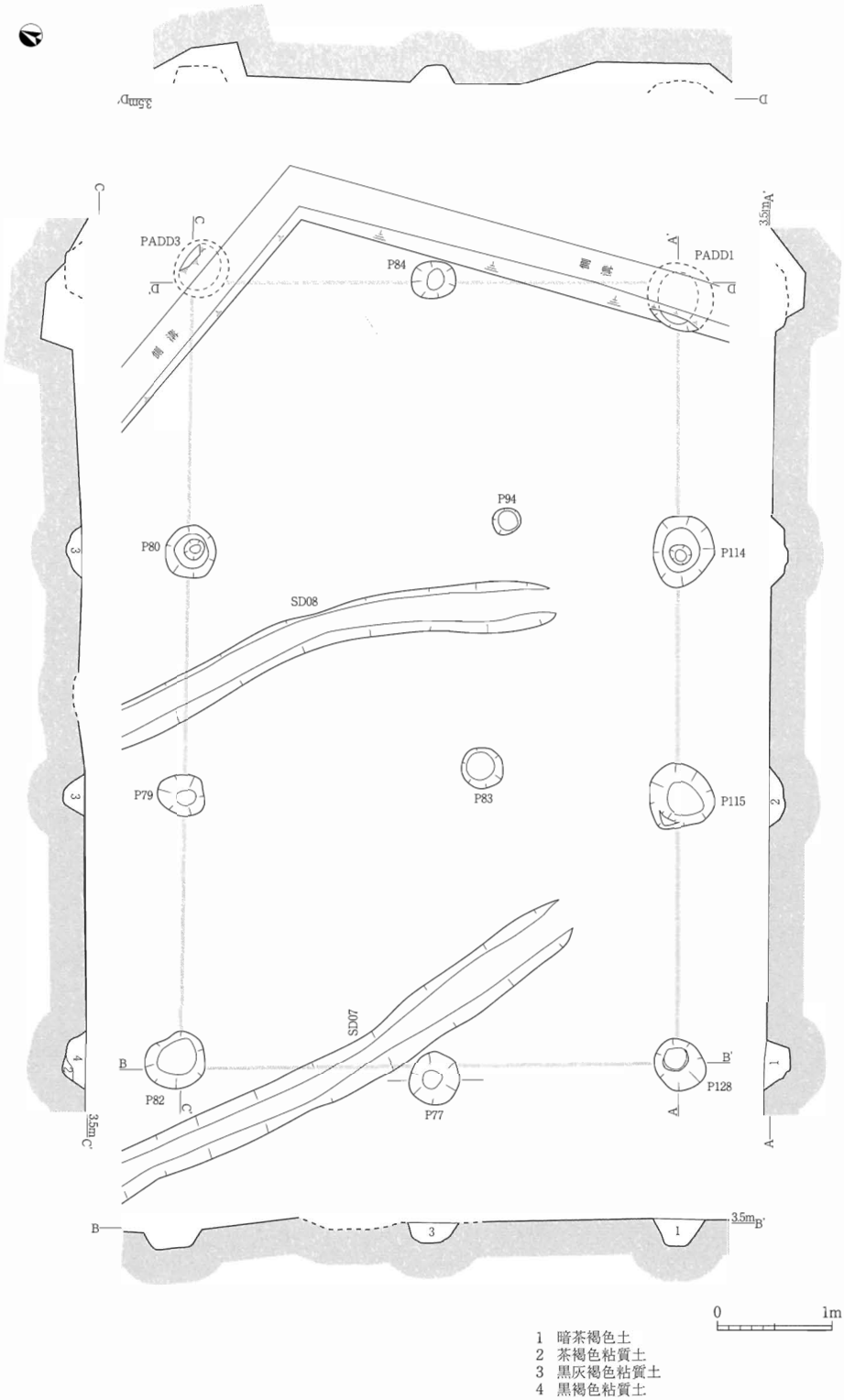
遺構面は南西から北東へ傾斜する標高 3.3 ～ 4.0 ｍの緩やかな斜面に位置している。北西隅は後



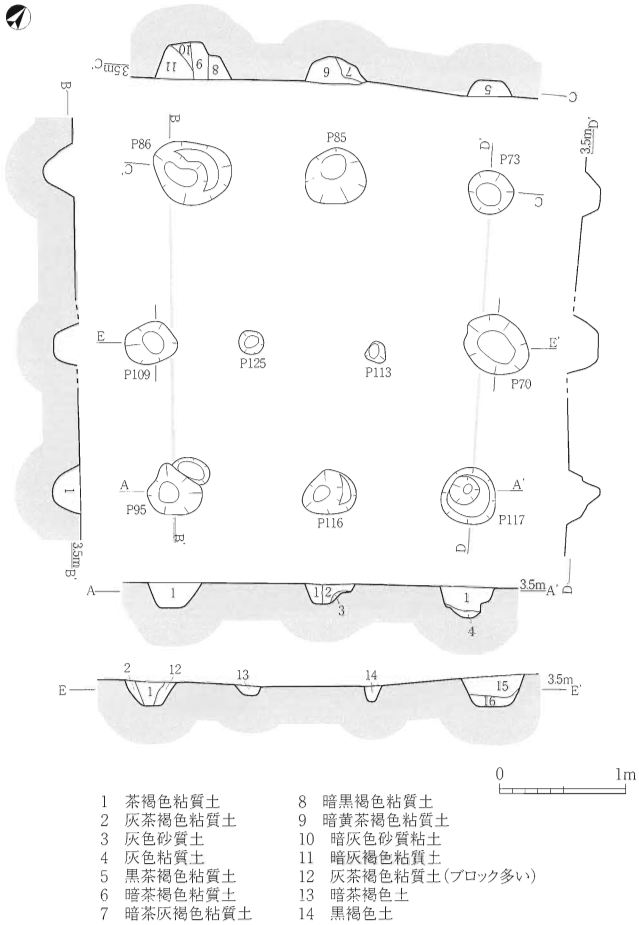
第 22 図　九景川遺跡Ⅰ区５層上面平面図　遺構：S=1/200、遺物：S=1/12、1/8

述するSD07が存在するが、おそらく旧河道に相当するものと思われ、その上面、すなわちSB03・04とほぼ同一面に奈良時代の遺物がまとまって認められた。このことから、奈良時代に旧河道であるSD07を埋め立て、その整地面に掘立柱建物群を営んだものと推測される。

遺構は調査区西側で先述のSD07のすぐ南にSB03・04がほぼ軸を同じくして東西に並んでいる。この2棟はその配置関係や主軸方向からみて同一時期に併存していた可能性が高い。調査区南側には2×3間の掘立柱建物跡であるSB02が、やはり東西主軸で位置するが、SB03・04とは主軸方



第23図　九景川遺跡Ⅰ区SB02実測図　S=1/60



第24図　九景川遺跡Ⅰ区SB03実測図　S=1/60

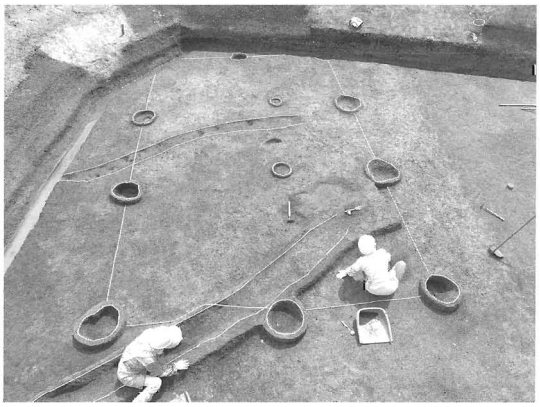


写真29　SB02

向が若干ずれており、SB03・04と同一併存していたかどうかは不明である。

調査区中央部には不定形な落ち込みであるSX01が存在するが、層位的関係からみて古墳時代以前の遺構である可能性が高い。

(2) 掘立柱建物

SB02（第23図）

規模と形態　調査区東側で検出した掘立柱建物跡である。

一部は調査区外へと延びており全容は不明であるが、東側梁間中央の位置する柱穴の存在や、調査区側溝の断面において当建物と思われる柱穴存在が確認できたことから、2×3間の構造である可能性が高い。規模は梁間4.3 m、桁行6.7 mを測る。柱穴の深さは約15cm前後と浅いことから、4層中から掘り込まれていたか、中世以降に削平されてしまった可能性が高い。覆土は黒～茶褐色系の粘質土が堆積していた。また、P80およびP114は二段堀状を呈し、下段の直径は約18cm前後を測り、柱材の大きさを一定程度反映しているものと考えられる。

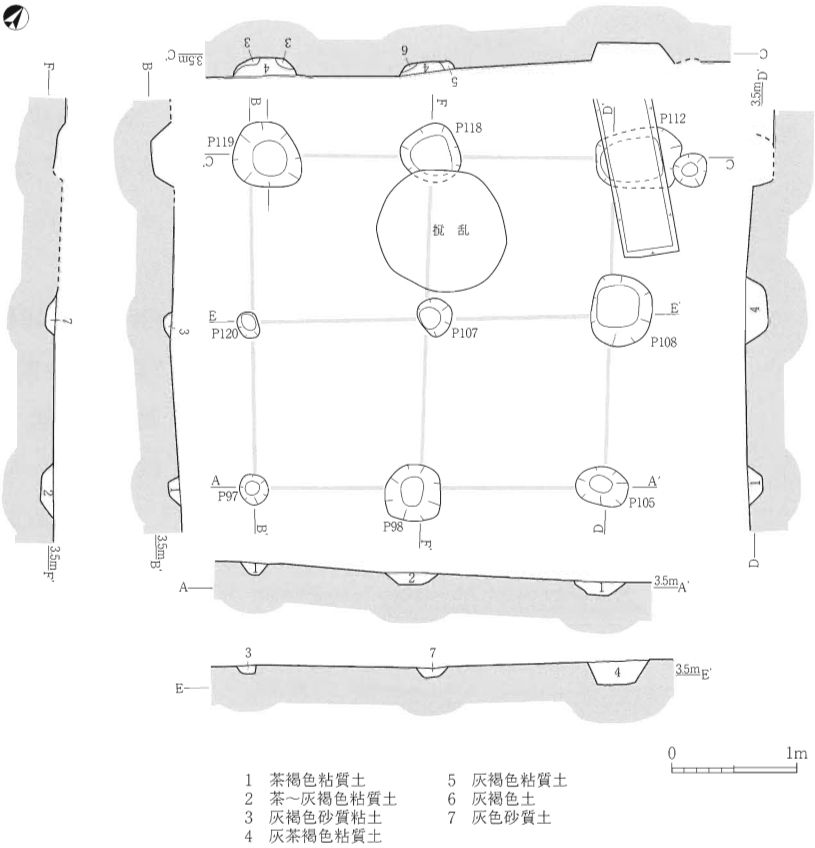
遺構の性格と時期　柱穴内から遺物は出土していないが、層位的所見から古墳時代中期～奈良時代に属する建物跡と考えられる。後述するSB03・04との関係や、Ⅲ区で検出した古代の掘立柱建物群と構造的に類似することから古代に属するものと考えているが、古墳時代中期まで遡る可能性も否定できない。性格については特定できないが、後述するように倉庫と想定されるSB03・04に隣接することから、同時代の建物であれば、それに関連する施設である可能性も考慮される。

SB03（第24図）

規模と形態　調査区東側で検出した掘立柱建物で、後述するSB04と主軸を同じする。2間×2間の構造で、規模は2.6 m×2.7 mと平面形がほぼ正方形状を呈する建物である。両梁間とも中央の柱穴が若干棟持柱状に外側に張り出している。柱穴の規模は径40～60cm前後で、深さはSB02と同様30cm弱と浅い。

当建物で注目される点は、建物中央には他の柱穴と同様な規模の柱穴は存在せず、その代わりに径18cm前後の小形の柱穴が桁行方向に並んで認められる点である。その位置関係からみて束柱状のものであった可能性が高い。

遺構の性格と時期　柱穴内から遺物は出土していないが、隣接するSD07上面で検出した土器群との関係からみて奈良時代に属する可能性が高い。性格については、特異な束柱及び棟持柱状にやや張り出した柱穴の存在から、やや特異な建物であった可能性も想定されるものの、後述するSB04との関係から考えて、倉庫であった可能性が最も高いと考えている。



第25図　九景川遺跡Ⅰ区SB04実測図　S=1/60

SB04（第25図）

規模と形態　SB03西側で検出した掘立柱建物で、先述のとおりSB03と建物主軸を同じくする。建物の構造は2間×2間の総柱建物で、規模は2.8 m×2.6 mを測る。柱穴の配置はやや歪みが認められるが、SB03のような棟持柱状の張り出しはない。柱穴の規模は径25～50cm前後とかなりのばらつきが認められるが、深さが20cm弱とかなり浅いことから、上部は相当部分が削平されていたものと推測される。柱穴内には主として茶褐色～灰褐色系の粘質土が堆積していた。

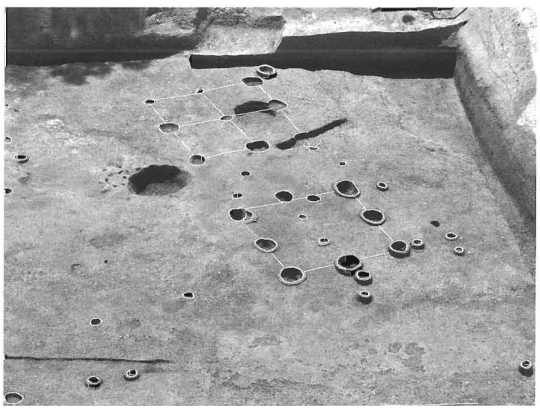


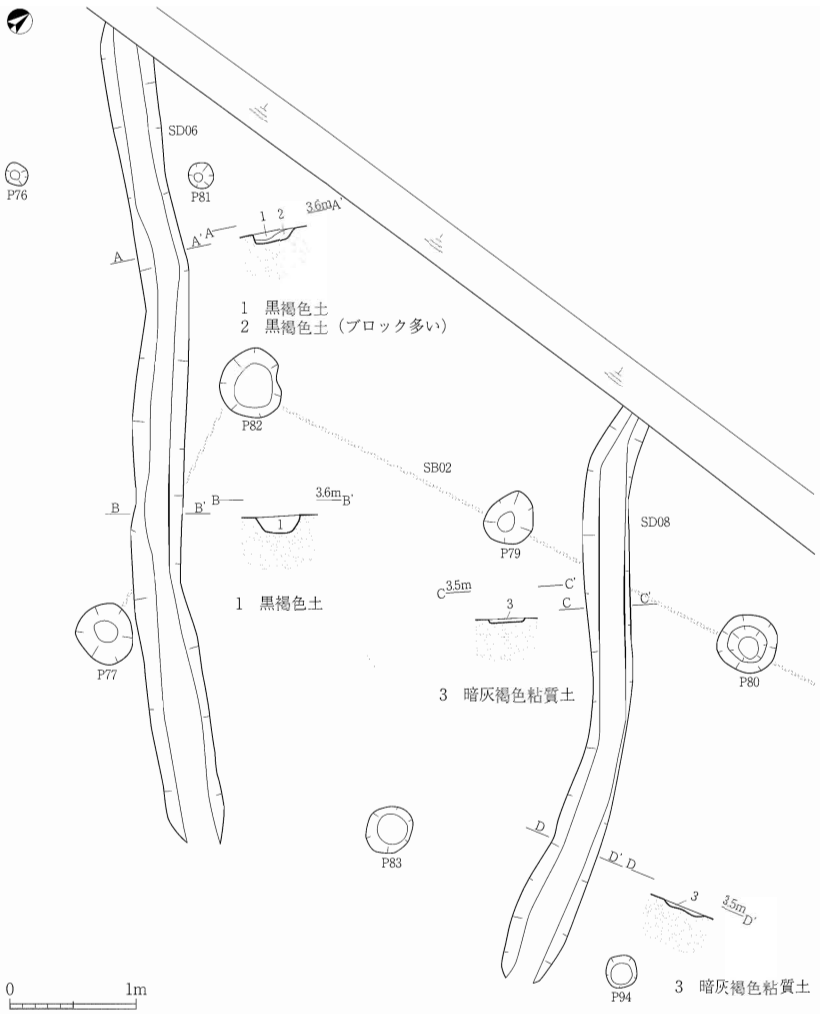
写真30　SB03・04

遺構の性格と時期　柱穴内から遺物は出土していないが、先に述べたようにSD07上面土器群との関係から奈良時代の遺構である可能性が高い。性格については総柱建物という構造からみて、倉庫であった可能性が最も高いと考えている。

(3) 溝等

SD06（第26図）

規模と形態　調査区東側で検出した小溝である。南東から北西方向へ延び、SB02と一部重複しているものの、直接的な切り合い関係はない。調査区内で検出した範囲での規模は、長さ6.4 m、幅



第 26 図　九景川遺跡Ⅰ区 SD06・08 実測図　遺構：S=1/60

約 40cm、深さ 10cm前後を測る。溝内には黒褐色土が堆積していた。

SD06 出土遺物（第 17 図 5）　第 17 図 5 は SD06 から出土した弥生土器の底部である。しっかりした平底状を呈し、底径 7.3cmを測る。内外面はハケにより仕上げており、石英・長石などの大形砂粒を多く含む点から弥生時代前期に属する可能性が高い。

遺構の性格と時期　出土遺物から弥生時代前期の溝である可能性が考えられるが、混入品である可能性も否定できない。性格については不明である。

SD08（第 26 図）

規模と形態　調査区東側で検出した小溝で、先に述べた SD06 とほぼ平行するように北西にＳ字状に蛇行して延びている。規模は現存長で 4.6 m、幅 35cm前後、深さ 5cm前後を測る。溝内の覆土は暗灰褐色粘質土が堆積していた。

遺構の性格と時期　遺物は出土していないが、SD06 と隣接し、かつほぼ平行して位置することから、これと同時期の遺構と思われる。

SD07（第 27 図）

規模と形態　調査区北西隅で検出した遺構で、その規模や屈曲する平面形態からみて、溝というよりもむしろ自然河道であった可能性が高い。南岸を検出したのみで溝幅などは不明であるが、現状での深さは約 60cmを測り、断面は比較的緩やかな傾斜をなしている。溝内の覆土は、底面付近に

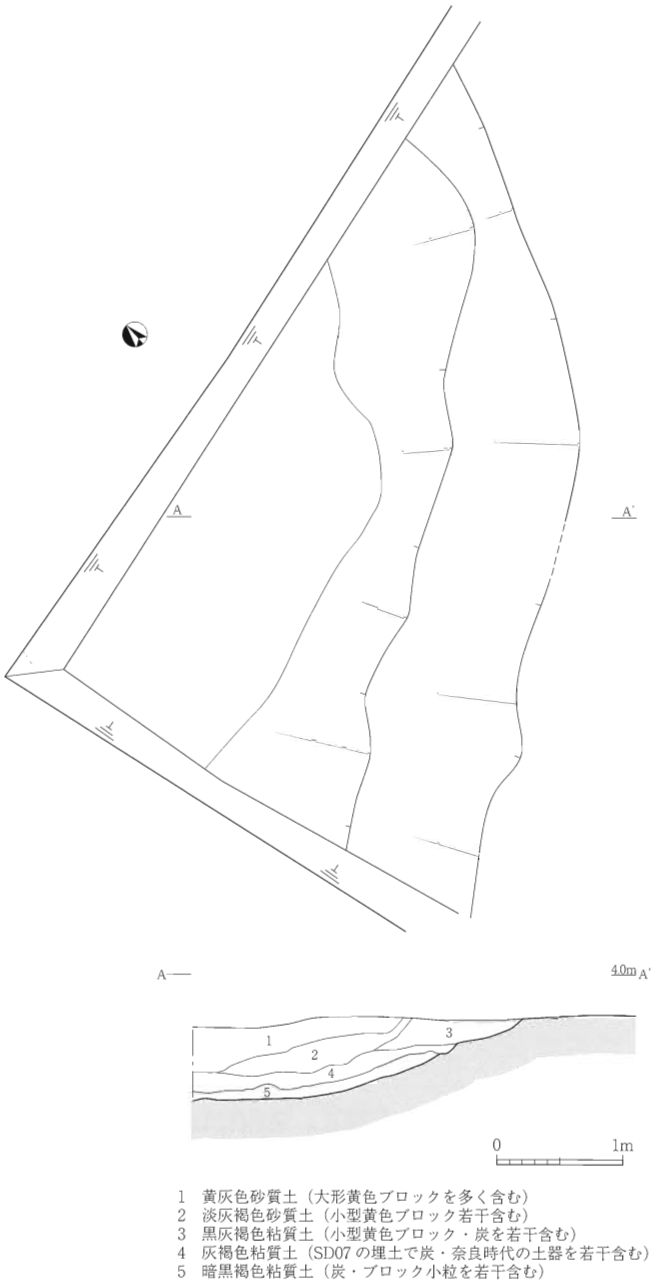
暗黒褐色粘質土が堆積し、その上層に灰褐色系の粘質土が凹状に堆積した後、大形の黄色地山ブロックを含む黄灰色砂質土が30cm近くの厚さで堆積していた。この黄灰色砂質土は堅く締まっており、人為的に造成した土である可能性が高い（写真31）。

遺物の出土状況（第28図）　遺物は主として1層の黄灰色砂質土の上面でまとまって出土したほか、下層の4層からも古代を中心とした遺物が出土している。また、古代の遺物の多くはSD07東側の溝肩付近の上面に比較的まとまって認められた（写真32）。

このことから、SD07は奈良時代のある段階まで自然堆積したのち、人為的に造成・整地され、その上面にSB03･04等の掘立柱建物が営まれたものと理解できる。

SD07出土遺物（第29図）　第29図1は弥生時代中期の甕で、口径33.4cmを測る。口縁部はやや内傾気味に上下に拡張し、3条の凹線文を施す。頸部には刻目突帯を貼り付けている。Ⅳ－1～2式にに属する（松本1992）。2は土師器甕で口縁部はゆるやかに外反し、端部はやや先細り状に収めている。内面は頸部以下ヘラケズリを施すが器壁は厚い。古墳時代後期以降の資料であろう。3も同様に古墳時代後期以降の甕である。口縁部の外反度は鈍く、肩の張りも弱い。

4は退化した複合口縁状を呈する甕で器壁はかなり厚く口縁部外面にヨコナデによる凹面を顕著に残す。古墳時代中期の資料であろう。5は古墳時代後期以降に属する大形の甕で、口縁部は強く外反し端部は丸く収める。6は頸部の張りの弱い小型甕で、口径16.8cmを測る。口縁



第27図　九景川遺跡Ⅰ区SD07実測図　S=1/60

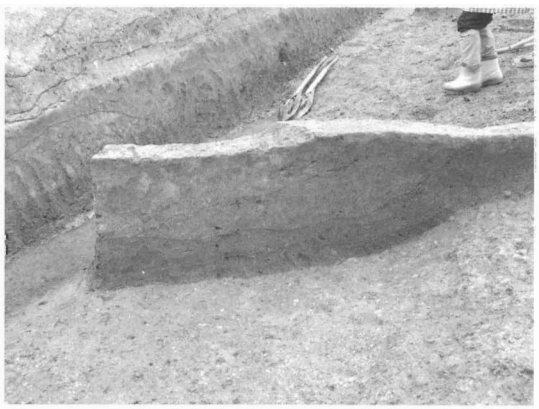
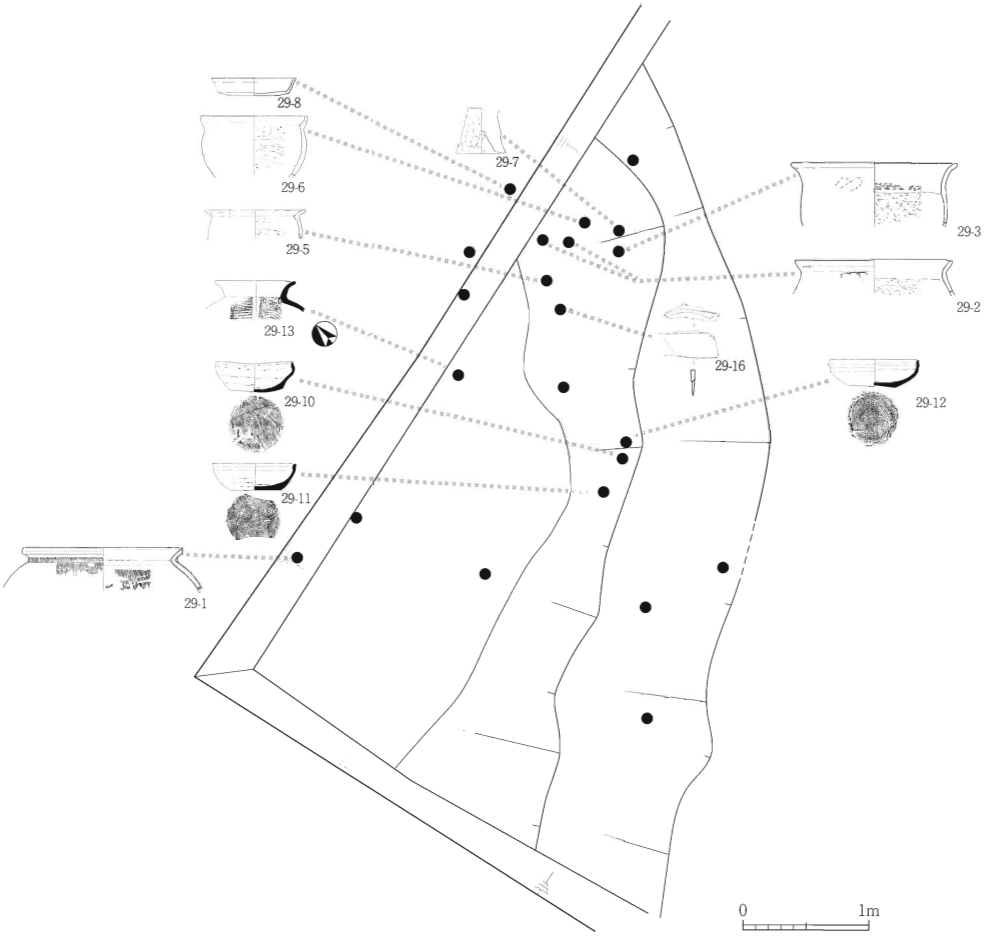


写真31　SD07土層断面



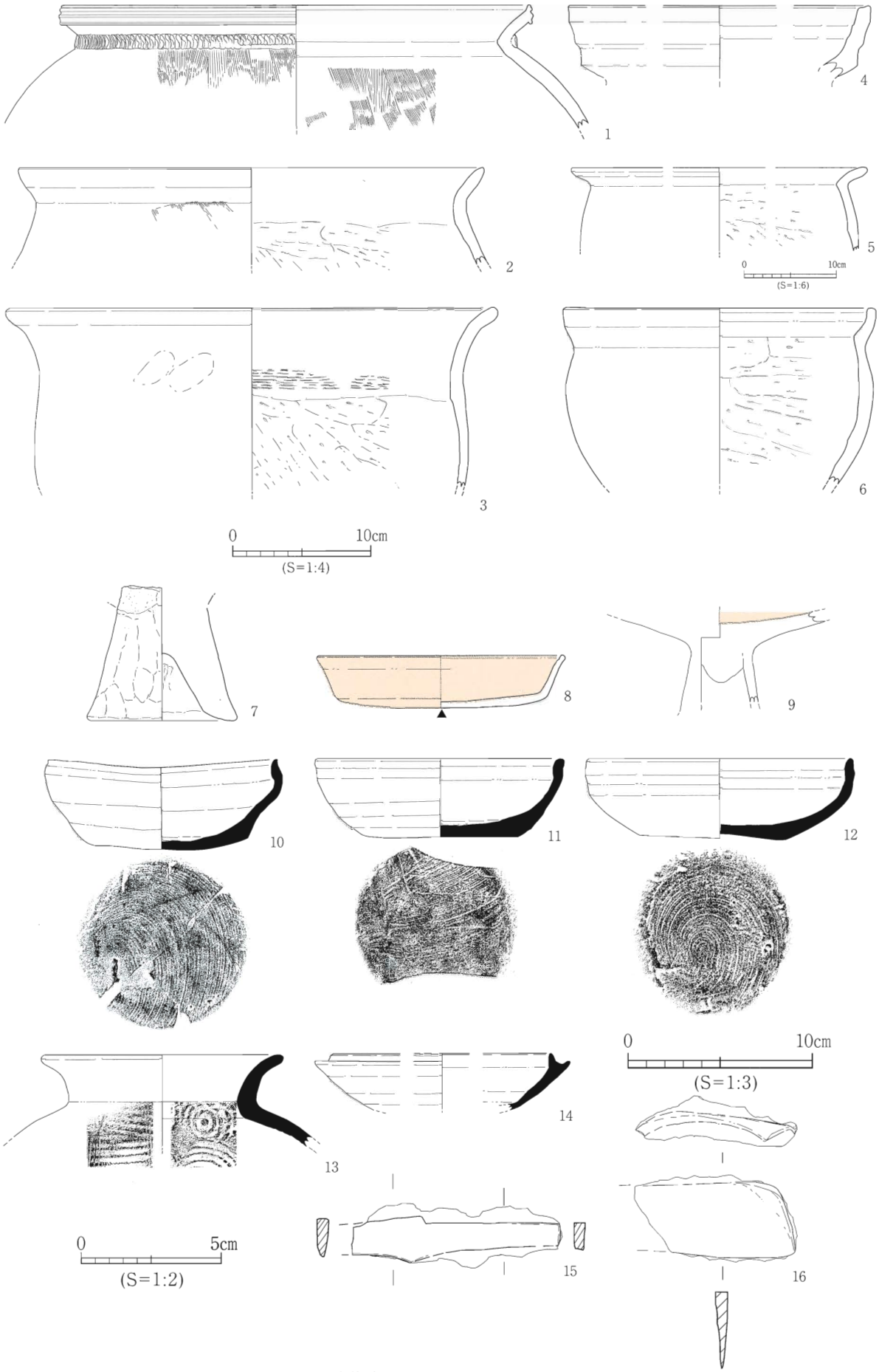
第 28 図　九景川遺跡Ⅰ区 SD07 遺物出土状況　遺構：S=1/60、遺物：S=1/12、1/8

部は内湾気味の退化した複合口縁状を呈し、胴部の張りは弱い。古墳時代中期のものであろうか。7 は土製支脚の脚部で、内面は中実ではなく上げ底状を呈し、外面を縦方向のユビナデ・オサエによって仕上げている。8 は土師器皿で内外面及び底面に一部赤彩痕を残している。底部の調整は風化のため不明。9 は土師器高坏で、脚部内面に坏部と脚部を接合する際の顕著な肥厚が認められ、接続法 β（松山 1991）によるものである。

写真 32　SD07 上面遺物出土状況

10 ～ 12 は無高台の須恵器坏である。いずれも底部が比較的小さな平底で口縁部がやや内湾し屈曲するタイプで、青木編年Ⅰ～Ⅱ期（松尾 2006）に属するものと考えられる。11 の底部は一見静止糸切にも見えるが定かではない。13 は外面には平行タタキのち縦方向にカキメを巡らしている点から横瓶と思われる。口径 13.0cmを測り、口縁部は強く外反し、端部は丸く収めている。14 は坏で受部立ち上がりは低い。底部を欠くが、口径や立ち上がりの形状からみて、大谷 5 期前後の資料であろう（大谷 1994）。

15・16 は鉄器である。15 は刀子で刃部の大半を欠くが、現存長で 7.5cm、茎長 5.1cm、刃部幅 1.8 cmを測る。両関で刃部は内湾が顕著な形態をなす。16 は鎌と思われる資料で刃部の大半は欠損し



第29図　九景川遺跡Ⅰ区SD07出土遺物実測図　1～3 S=1/4、4・6～14 S=1/3、15・16 S=1/2、5 S=1/6

ている。現存長5.5cm、幅2.7cmを測り、一隅を柄の装着用に折り曲げているが顕著ではない。

遺構の性格と時期　遺構の性格については、部分的な検出のため断言できないが、その不整形な形状から人工的な溝ではなく自然河道であった可能性が高い。覆土内の出土遺物は弥生時代中期～奈良時代と幅があるが、造成土中及びその上面の遺物は青木編年Ⅰ～Ⅱ期の遺物にほぼ限定されることから、8世紀前半に人為的に埋め立てられるに至ったものと解釈される。

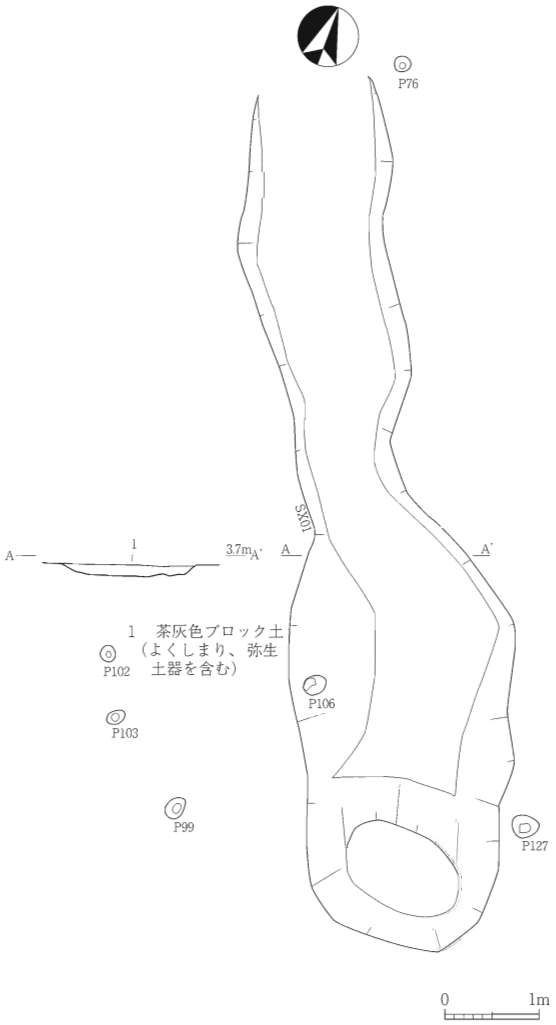
SX01（第30図）

規模と形態　調査区中央やや東寄りで検出した不整形な溝状の落ち込みで、長さ9.3ｍ、幅は広い箇所で2.4ｍを測る。断面は浅い皿状を呈し、よくしまった茶灰色土が堆積していた。

遺構の性格と年代　遺構内からは弥生土器細片が若干出土しているが、小片でありかつ風化が著しいため図化していない。よって年代の特定は困難だが、埋土の様相や周辺からの出土遺物からみて弥生時代中期の遺構である可能性が高い。

(4) Ⅰ区4・5層出土遺物（第31図）

第31図はⅠ区4･5層から出土した遺物である。1は縄文土器片である。色調は灰黄褐色を呈し、口縁部外面をやや肥厚させ斜格子状のモチーフを充填する。津雲Ａ式・彦崎ＫⅠ式に類する縁帯文土器と考えられる。

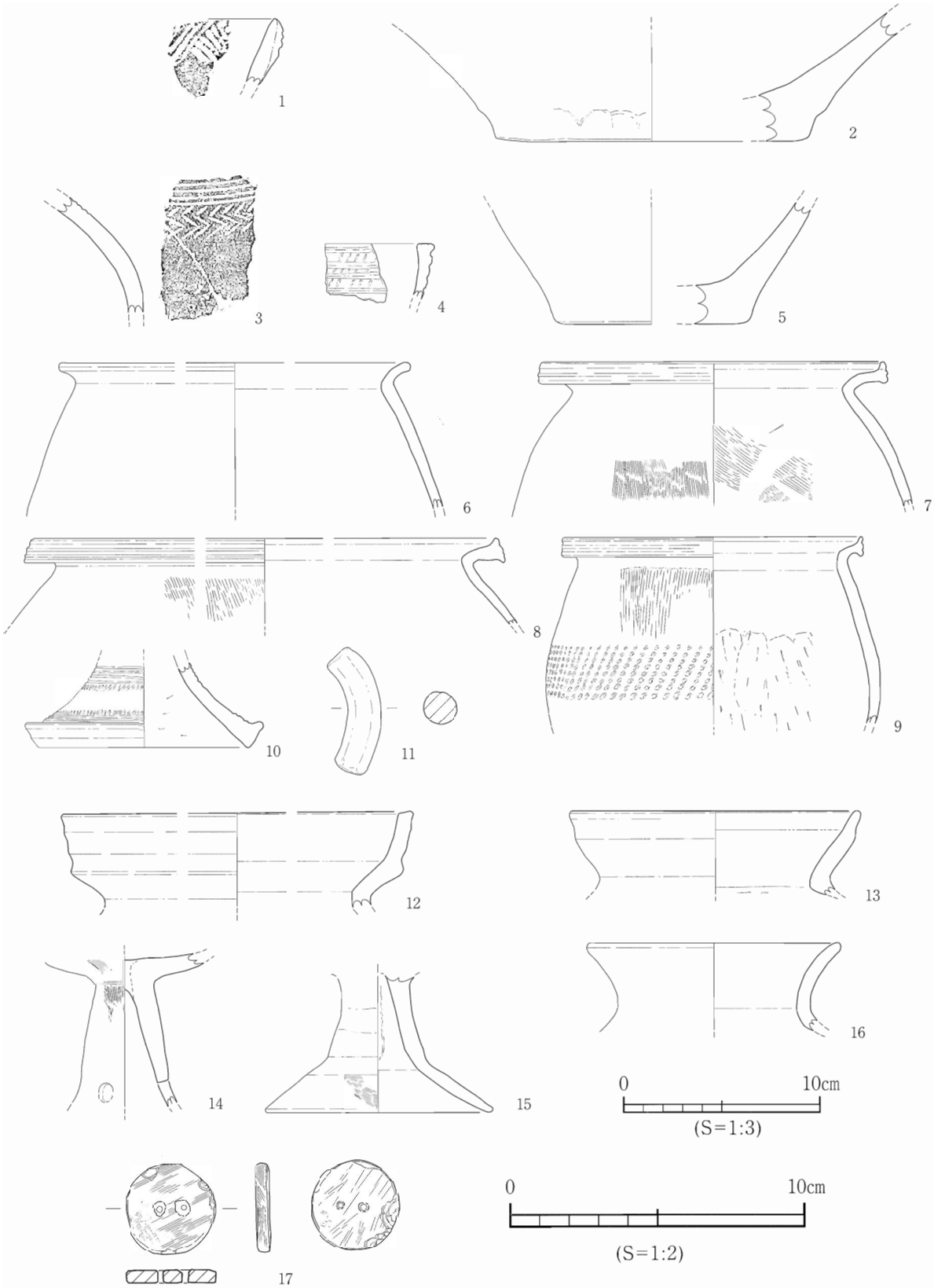


第30図　九景川遺跡Ⅰ区SX01実測図　S=1/80

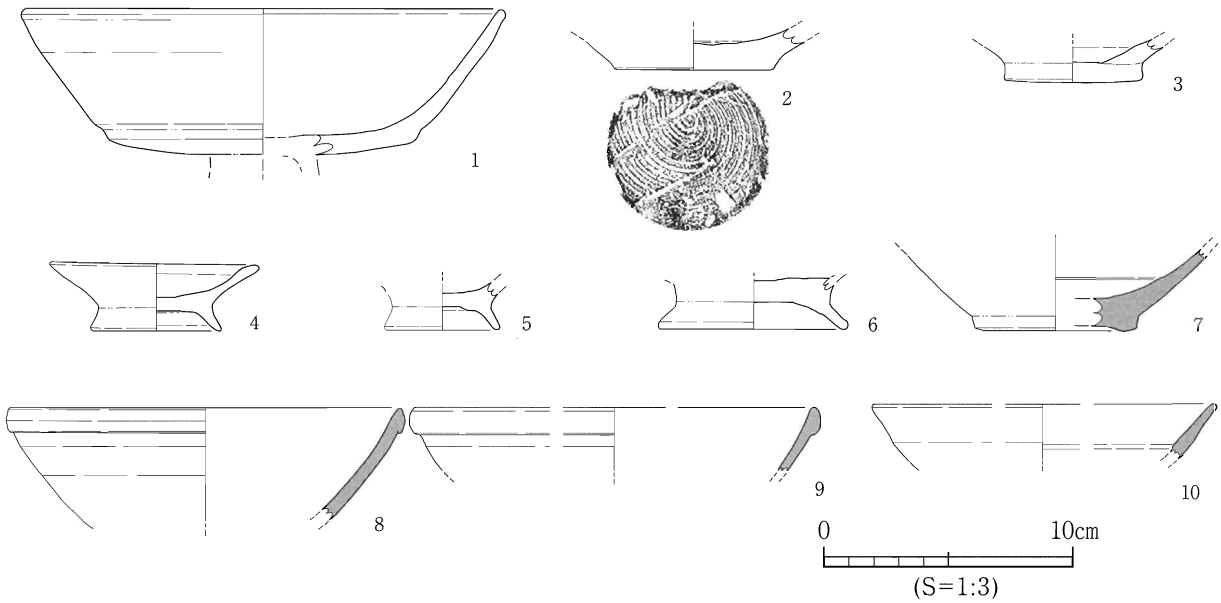
2～11は弥生土器である。2は大形の弥生土器底部である。しっかりした平底を有し、底部外面に指頭圧痕を残す。摩滅により調整は不明だが、大形砂粒を多く含む特徴的な胎土からみて弥生時代前期に属する資料と考えられる。3は弥生前期の壺肩部の資料である。4条によるヘラ描沈線文の直下に羽状文を施文している。Ⅰ－4式に属する資料と思われる（松本1992）。

4は鉢口縁部の小片で、口縁部外面には凹線文を施文後刻みを施している。Ⅲ-2～Ⅳ-1に属する資料で同様の資料はⅢ区SR04においても出土している。5は2と同じく弥生時代前期

写真33　Ⅰ区4層弥生土器出土状況



第 31 図　九景川遺跡Ⅰ区 4・5 層出土遺物実測図　S=1/3、1/2



第 32 図　九景川遺跡Ⅰ区遺構外出土遺物実測図　S=1/3

に属すると思われる甕底部である。これのみが５層中から出土している。

6 は風化が著しいが口縁部形態からみてⅢ－１式の甕と考えられる。9 は小型の甕で口径 15.2cm を測る。口縁部はわずかに内傾する複合口縁状を呈し、外面に２条の凹線文を施文する。胴部中央部付近に櫛歯状工具による刺突文を施す。内面には縦方向のヘラケズリが施されるが胴部上半部には至っていない。Ⅳ－２式に属する。

10 は高坏の脚部で脚端部を断面三角形状に肥厚させ、脚部外面を沈線及び刺突文により飾る。9 とほぼ同時期に属すると考えられる。11 は半円形の取手であるが器種は不明。

12 ～ 15 は土師器で概ね古墳時代中期に属する資料と思われる。12 は口径 17.7cm を測る甕である。口縁部は複合口縁を呈するが段部は鈍く、また器壁もかなり厚い。13 も複合口縁甕だが、より口縁部段部の退化が顕著である。14・15 は高坏で、14 は脚部屈曲部付近に３方向の円形スカシが認められる。16 は口縁部が緩やかに外反する単純口縁の壺で、厳密な年代比定は難しい。

17 は絹雲母製[3] の有孔円盤で SX01 の西側付近から出土した。径 3.1cm、厚さ 4.5mm を測るほぼ正円形の円盤で中央部に片面穿孔による双孔が認められ、全面にわたり研磨による擦痕が認められる。周辺出土の遺物から勘案して古墳時代中期のものと考えられる。通常の集落出土資料としては県内では非常に稀な事例になると思われる。

(5) Ⅰ区遺構外出土遺物（第 32 図）

第 32 図は表土掘削中または壁面清掃や側溝掘削中に出土した遺物である。1 は有段の坏部を有する高坏である。2 ～ 6 は土師質土器である。4 は高台付小皿で口径 8.2cm、器高 2.8cm を測る。

7 ～ 10 は白磁である。7 は太宰府分類Ⅳ類椀の底部、8・9 はⅣ類椀の口縁部で、8 は比較的釉が薄い。10 はⅡ－ 1a 類の皿と思われる。

(3)　当遺跡出土の石器の石材鑑定は三瓶自然館の中村唯史氏にご教示いただいた。

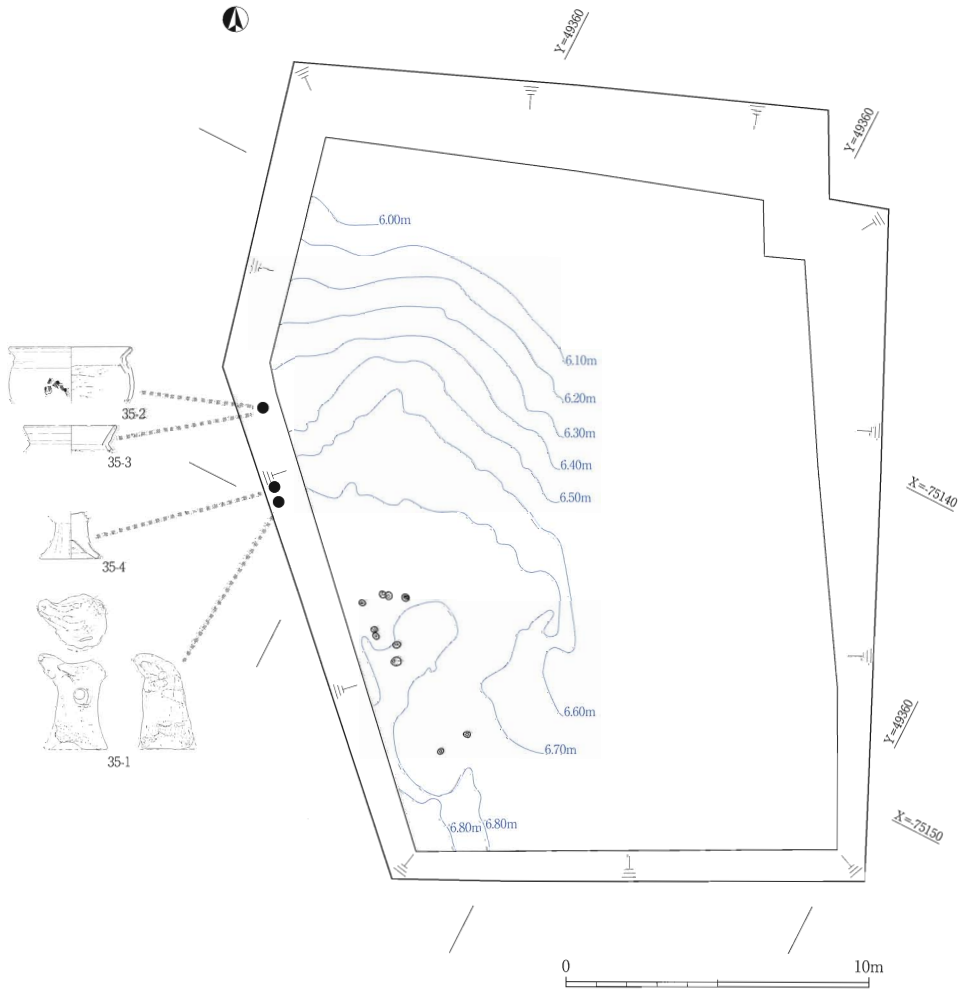
第5章　Ⅱ区の調査

Ⅱ区は、谷間に立地する当遺跡の最奥部に位置する調査区であり、縄文時代から古墳時代に至る遺構・遺物を確認した。居住関連施設は確認できなかったが、溝、土坑、杭列、自然河道等を検出している。特に弥生時代前期に属するSK07では土坑内から壺が倒立した状態で検出され、当地域では珍しい弥生時代前期の壺棺である可能性がある。また自然河道であるSR02からは量的には多くないものの古墳時代中期～後期に至る遺物が出土し、なかには赤彩土器や獣骨等も含まれることから、Ⅲ区SR03とともに水辺の祭祀に関連する遺構である可能性も考慮される。

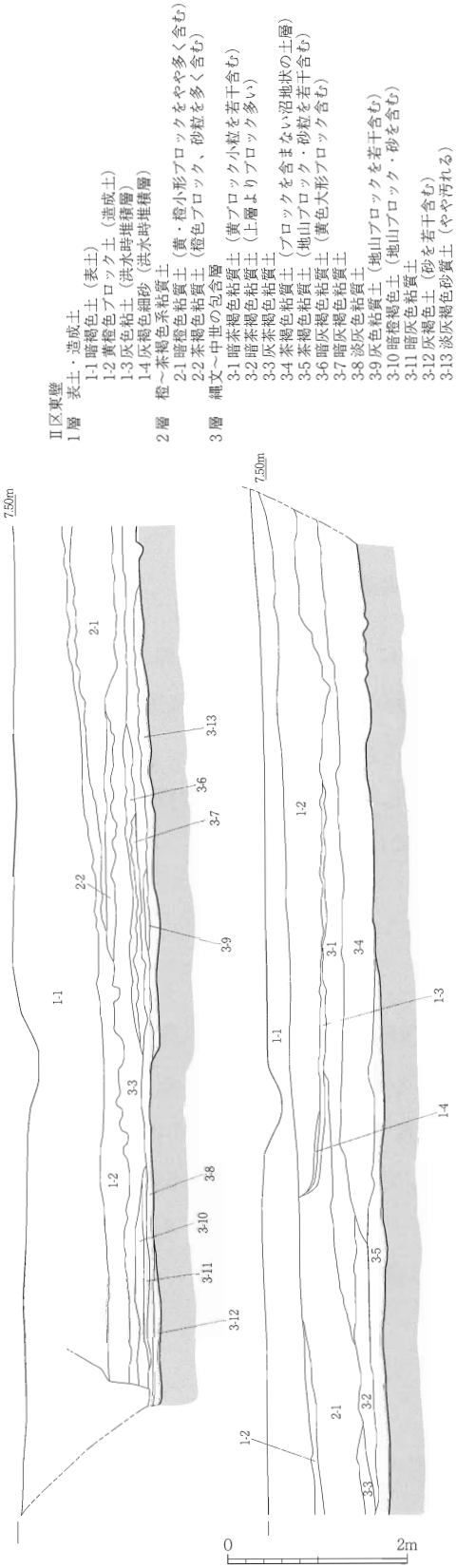
第1節　基本層位

Ⅱ区は谷間に立地する当遺跡でも最も最奥部に立地する調査区である。当初は調査対象外の区域であったが、Ⅲ区の表土掘削残土置場として利用するに先立って試掘調査を実施したところ、遺物を多数確認したため急遽調査対象とした区域で、調査面積は約520㎡である。

第34図にⅡ区東壁の土層図を示した。1層は表土ないしは近代の造成土で約60～80cmと厚く堆積していた。2層は橙～茶褐色系粘質土で部分的に堆積しており、近世以降の造成土と思われる。3層が古墳時代中～後期の遺物を含む包含層で茶～灰褐色系の粘質土が50cm前後堆積していた。細



第33図　九景川遺跡Ⅱ区3層上面平面図　遺構：S=1/250、遺物：S=1/12



第34図　九景川遺跡Ⅱ区土層図　S=1/80

かく細分可能であるが、層位的な整合性は認められない。4層は土層図には図示していないが、灰色系の砂質土で、山裾に近い調査区西側にのみ認められた層であり、弥生時代中期～古墳時代中期の遺物が若干ではあるが出土している。その下は灰色系の砂利層である5層があり、この上面で遺構検出を行った。なお、この5層からも後述するように側溝掘削時に縄文晩期土器が若干出土したものの量的には僅少であったため面的調査は実施していない。

第2節　3層上面検出遺構の調査

(1) 遺構の分布と概要（第33図）

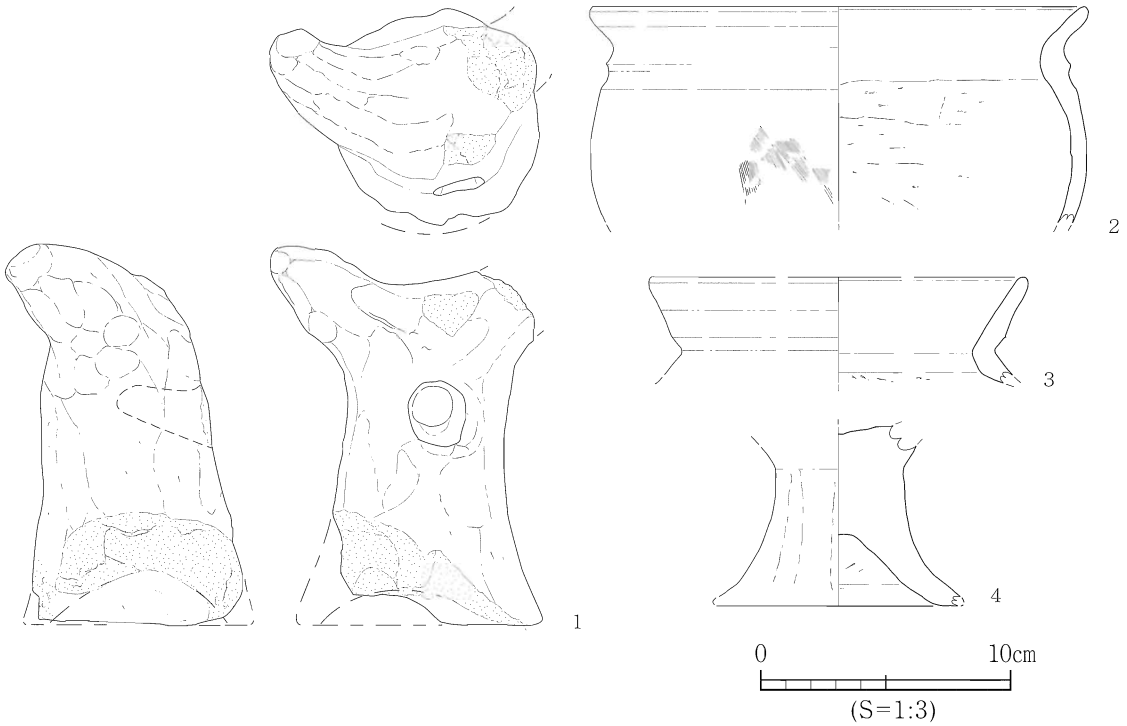
Ⅱ区では近世造成土である2層を除去した時点で一旦面的精査を行った。精査した範囲は調査区西側のみである。調査区内は南西から北東に向けて緩やかに傾斜している。遺構は南西部から若干のピットを検出したのみで、特に規則的な配置は認められない。

2層出土遺物（第35図）　遺物は調査区西側の調査区側溝中より若干出土している。2層出土資料としているが、当該箇所は丘陵に近い地山が浅い場所で層位的にはやや混乱しており、実際出土遺物の様相も3層と違わない。

1は土製支脚である。脚部など一部欠くものの、おおよその規模はわかる資料である。背面に貫通しない円孔を設け、脚部は上げ底状に窪んでいる。

2は土師器甕で口径19.5cmを測る。口縁部下から頸部にかけては強いヨコナデにより形成された2条の

写真34　Ⅱ区調査風景



第 35 図　九景川遺跡Ⅱ区 2 層出土遺物実測図　S=1/3

稜が認められ、外面をタテハケ、内面を横方向のヘラケズリにより仕上げる。1 の土製支脚とほぼ同時期の資料と思われる。3 は古墳時代中期の土師器甕の口縁部で、復元口径 14.9cmを測る。厚手の作りで口縁部外面にわずかに複合口縁段部の退化した稜線を残す。

4 は土製支脚の脚部である。中実であるが、高い上げ底状となっている。外面は縦方向の粗いユビナデにより仕上げ、内面には横方向のヘラケズリを施している。

第 3 節　4・5 層上面検出遺構の調査

(1) 遺構の分布と概要（第 36 図）

古墳時代中～後期の遺物包含層である 3 層を除去して SD09 最終掘削時の溝（SD09 － A）や若干のピットを検出した後、さらに 4 層を除去し基盤層である 5 層上面で面的精査を行い、当初掘削時の SD09 等の遺構を検出した。第 36 図には 5 層上面段階で検出した遺構群を掲載している。5 層上面は 3 層上面と同じく北から南へむけて緩やかに傾斜しており、標高 5.7 ～ 6.7 m を測る。

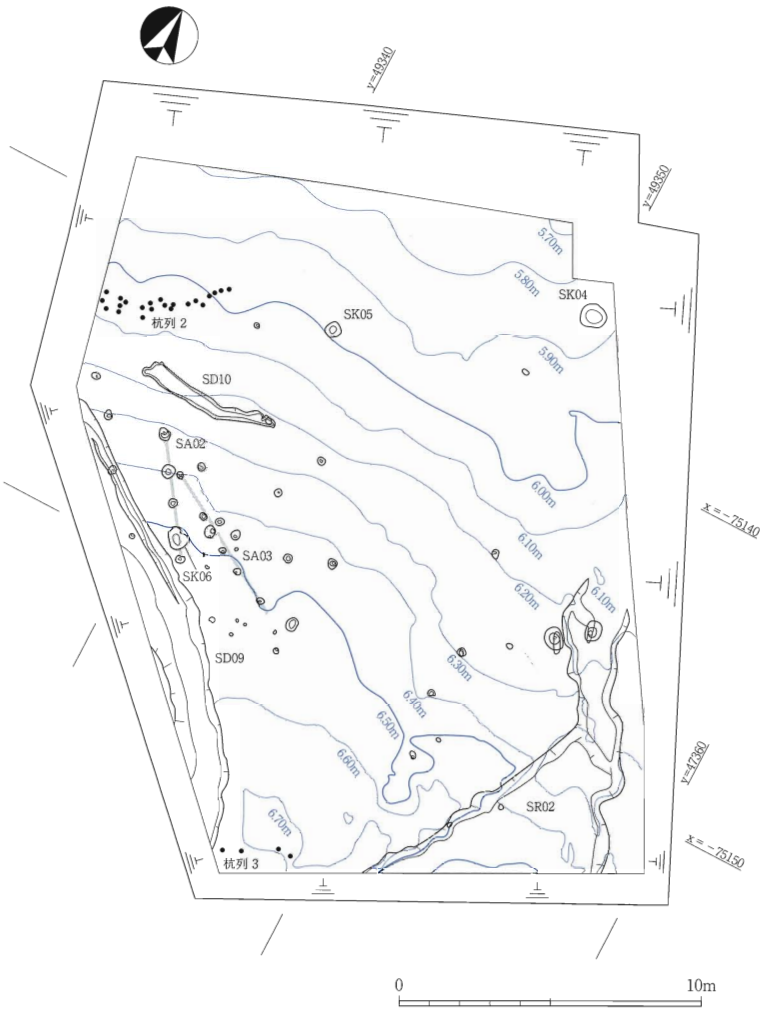
遺構の分布は散漫だが、丘陵に近い西側では溝群、柵列、ピット群を検出し、谷に近い調査区東側においては自然河道である SR02 を検出している。土坑は調査区各所に散在し、その分布に規則性は認められない。

(2) 建物等（第 37 図）

SA02（第 37 図）

規模と形態　調査区西側で検出した柵列跡で、北西から南東の方向へ、長さ 4.5 m分程を検出した。柱間距離は 60 ～ 120cmとばらつきがあるが、ピットは一つを除いて径 40cm前後で比較的まとまっており、柱根を残す柱穴も存在する。

遺構の性格と年代　柱穴からの遺物は出土していないが、周辺ピット出土柱根の AMS 年代を勘



第 36 図　九景川遺跡Ⅱ区 5 層上面平面図　S=1/250

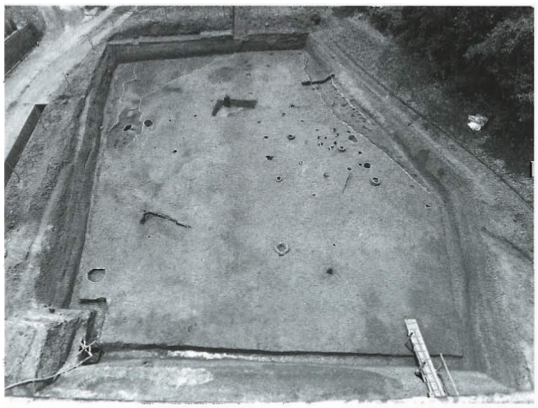


写真 35　Ⅱ区 5 層上面遺構面（北から）

案すれば 5 ～ 6 世紀前半の遺構である可能性が高い（第 8 章第 3 節）。性格については SD09 との位置関係から区画的な施設であった可能性も考慮されるが定かではない。

SA03（第 37 図）

規模と形態　SA02 のすぐ東側で検出した柵列状遺構で、SA02 からかなり西へ主軸を振っており、長さ 5.0 m程を検出した。柱間距離は 90 ～ 150 cm程度で、柱穴の規模は径 20 cm前後と SA02 より小振りなものが多い。覆土は灰褐色系の粘質土が堆積していた。また、SA02 と同様に柱根が残存している資料も認められた。

遺構の性格と年代　柱穴からの遺物は出土していないが、SA02 と同様に AMS 年代測定値から SR02 とほぼ同時期の遺構と推察される。性格もにわかには決し難いが、SD09 に隣接しかつほぼ平行して位置していることからみて、SD09 と密接な関係を持ちつつ機能していた遺構である可能性が考えられる。

(3) 土坑

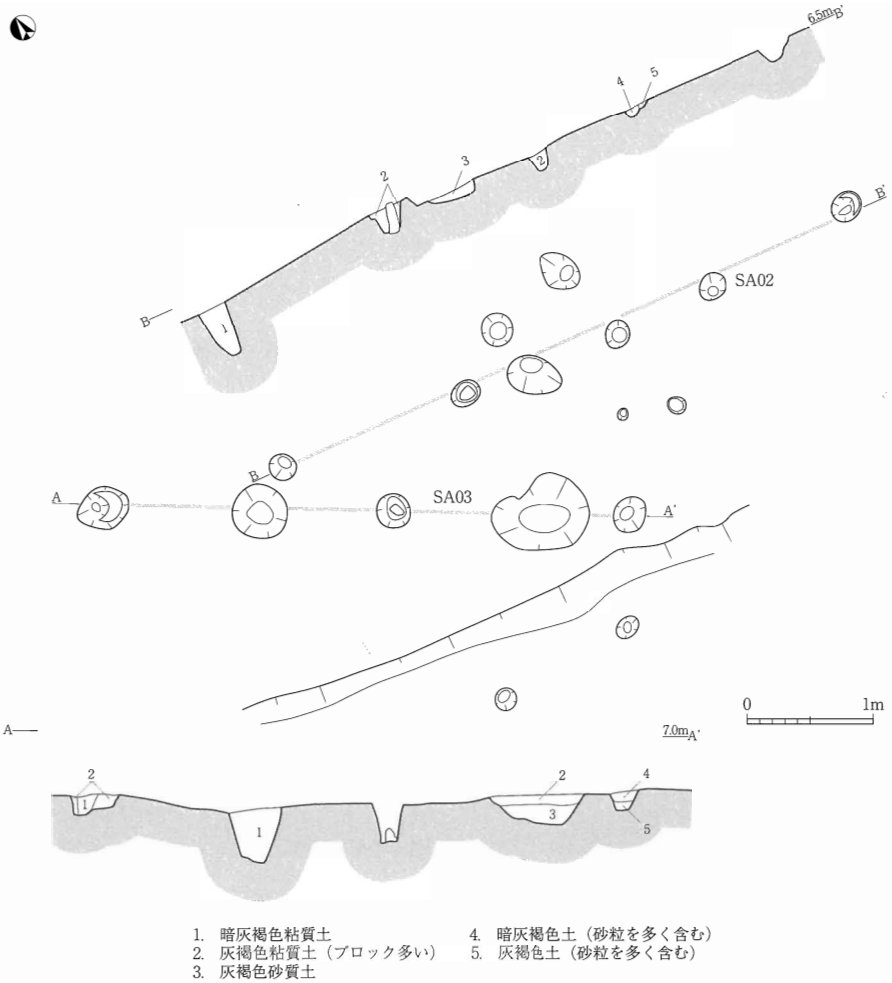
SK04（第 38 図）

規模と形態　調査区北東隅で検出した土坑である。平面形は不整形な楕円状を呈し、長径 84cm、短径 72cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さ 25cmを測る。

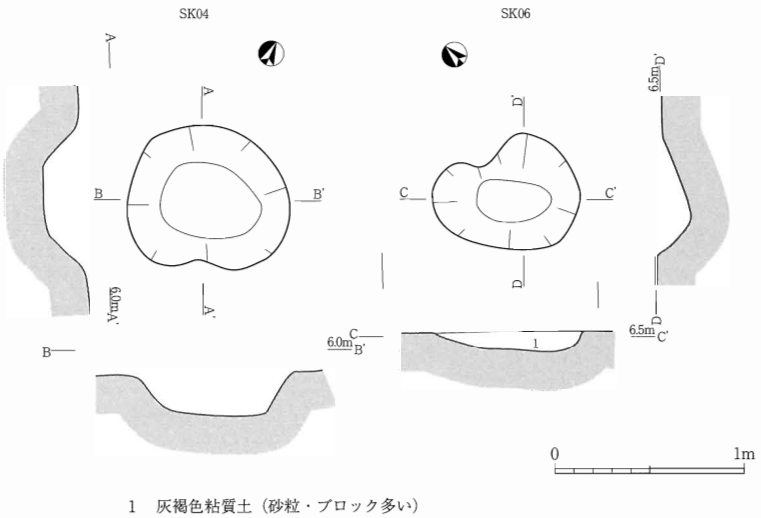
遺構の性格と年代　土坑内からは遺物は出土しておらず、年代・性格ともに不明である。

SK06（第 38 図）

規模と形態　調査区西側で検出した土坑で、SA02 と重複している。平面形は不整形な楕円状を呈し、平面規模は 78cm × 60cmを測る。



第 37 図　九景川遺跡Ⅱ区 SA02・03 実測図　S=1/60

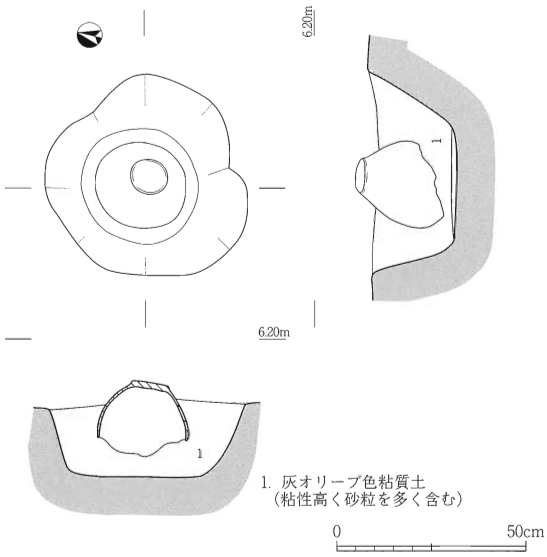


第 38 図　九景川遺跡Ⅱ区 SK04・06 実測図　S=1/40

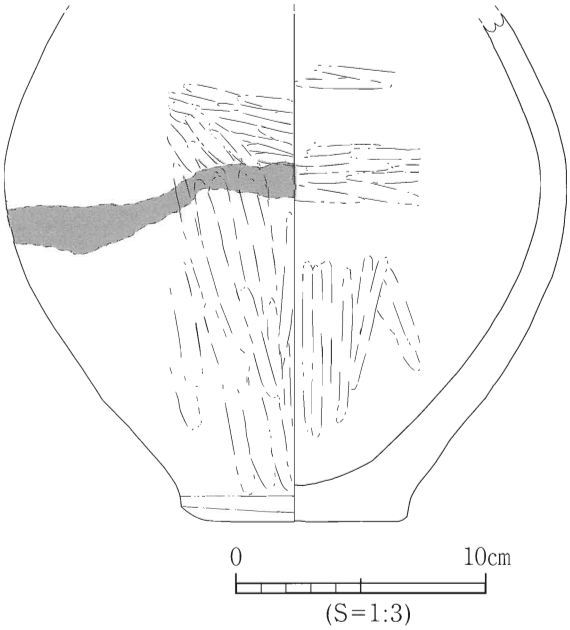
断面形は浅い皿状を呈し、深さ 10cm前後である。覆土は砂粒等を多く含む灰褐色粘質土が堆積していた。

遺構の性格と年代　遺物が出土しておらず、性格・年代とも不明であるが、遺構配置からみて SD09 や SA02・03 と比較的近い時期に営まれたものである可能性が高い。

SK05（第 39 図）



第39図　九景川遺跡Ⅱ区SK05実測図　S=1/20



第40図　九景川遺跡Ⅱ区SK05出土遺物実測図　S=1/3
（網掛けは漆状付着物の範囲）

写真36　Ⅱ区SK05土器出土状況

規模と形態　調査区北側中央の緩斜面上で検出した土坑で、平面形はほぼ円形を呈する。検出時にやや掘りすぎたため本来の規模は不明であるが、現状での大きさは径54cm、深さ20cm程を測る。出土した土器の大きさからみて、本来の深さは30cm以上はあったものと推測される。土坑内の埋土は灰オリーブ色粘質土が充填していた。

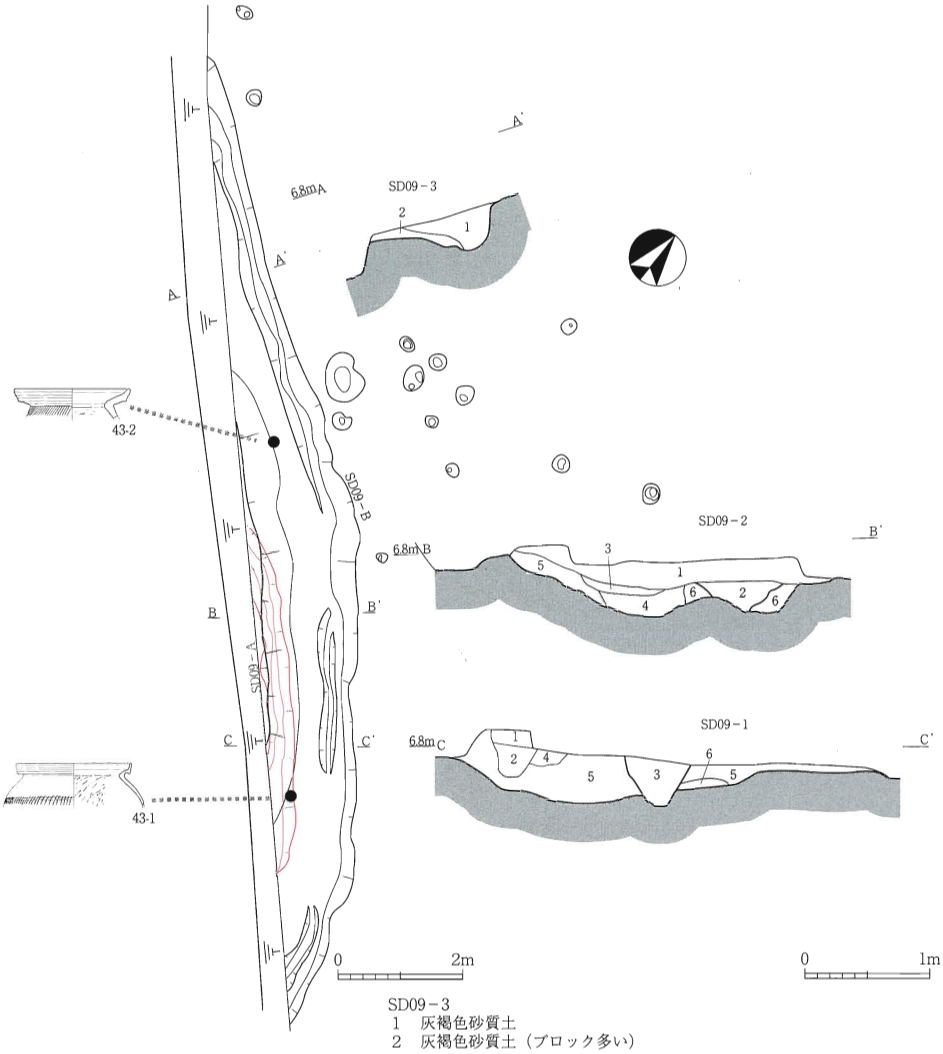
SK05出土遺物（第40図）　SK05内からは、ほぼ中央付近から、頸部以上を欠く弥生土器壺が倒立した状態で出土した（第39図・写真36）。土器は先述のとおり頸部以上を欠くが、胴部以下はほぼ全周が残り残存高20.1cmを測る。

やや間延びした器高の高い壺で、胴部最大径はほぼ胴部中位付近に位置する。肩部には現状では段及び沈線は認められない。調整は、外面は縦方向、内面は下半部が縦、胴部以上が横方向のヘラミガキ調整が認められる。器壁は1cm前後と厚く、胎土は石英・長石等の大形砂粒を多く含んでいる。また、胴部最大径付近には漆状の黒色物質が付着した痕跡が帯状に認められる。

なお、土器内からは遺物は一切出土しなかった。

遺構の性格と年代　出土土器は、文様等を欠くため明確な位置づけは難しいが、胎土や器形、調整からみて弥生時代前期末～中期初頭、Ⅰ－4様式～Ⅱ－1様式（松本1992）前後に位置づけられる資料と考えられる。

遺構の性格については、遺構の一部を欠くため断言はできないが、壺が倒立して出土した状況は、人為的に意図的に据えられたと考えてよい。こうした弥生前期壺の倒立出土例としては、安来市柳Ⅱ遺跡SK01



SD09－3
1　灰褐色砂質土
2　灰褐色砂質土（ブロック多い）

SD09－2
1　灰茶褐色粘質土
2　暗灰褐色粘質土
3　灰褐色粘土
4　灰オリーブ色ブロック土
5　オリーブ色砂質土
6　灰褐色砂質土

SD09－1
1　黒茶褐色粘質土（SD09－A 覆土）
2　黒灰褐色粘質土（ブロック小粒を含む　SD09－A 覆土）
3　暗灰褐色粘質土（最終掘削時覆土）
4　黒灰褐色粘質土
5　灰オリーブ色ブロック土（やや粘性あり SD09－B 覆土 底面から弥生後期土器出土）
6　灰色粘質土

第 41 図　九景川遺跡Ⅱ区 SD09 実測図　遺構：S=1/120、1/60、遺物：S=1/12

があり、当地の縄文時代後晩期の埋甕の系譜を引く土器棺であると報告されている（島根県教育委員会 1996）。当例も人骨・副葬品出土などの決め手を欠くものの、柳Ⅱ遺跡 SK01 と同様な弥生時代前期の壺棺であった可能性を想定したい。なお、胴部付近の漆状の付着物も、壺の下には既に腐朽してしまった木製等による何らかの容器があり、それとの接着のための痕跡であった可能性も、一案としては想定される。

(4) 溝

SD09（第 41 図）

規模と形態　調査区西端で検出した溝で、西側に位置する丘陵の下端部分で検出した溝である。溝は丘陵下端部を取り巻くように弧状をなしている。

土層観察から 3 回以上の掘削が認められ、最終段階の溝（SD09 － A）は 4 層上面で検出した溝

で、調査区内ではごく一部を検出したに過ぎないが、検出した範囲での規模は長さ5.5 m、幅約60cm、深さ20cm前後を測る。埋土は灰褐色砂質土が堆積していた。

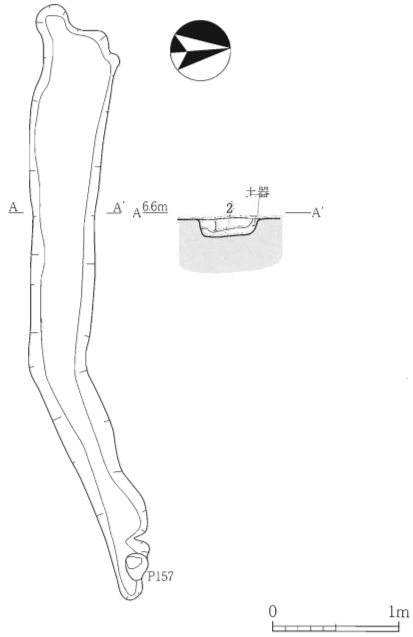
もう一つの最終段階の溝はプラン検出時には確認できず、土層観察段階で確認できたものである（第41図SD09－1・3層）。溝の規模は幅35cm前後、深さ25cm前後で暗灰褐色粘質土が堆積しており、溝の床面にはこの掘削時による小溝の痕跡が部分的に認められた。直接的な切り合いがなく、前後関係は不明であるが、この二つの溝はほぼ平行して丘陵裾を巡っており、最終段階には二条の溝が並走していた可能性が高い。

最初に掘削されたSD09－Bは検出した範囲で長さ15.4 m、幅1.6 m、深さ40cm前後を測り、やはり丘陵裾を巡るように弧状を呈する。覆土はいくつかに分層されるが、灰褐色・灰オリーブ色系の粘質土が堆積していた。

SD09出土遺物（第43図） 溝の底面付近から弥生土器片が出土しており、出土状況からみて最初に掘削された段階の溝に伴うものと考えられる。

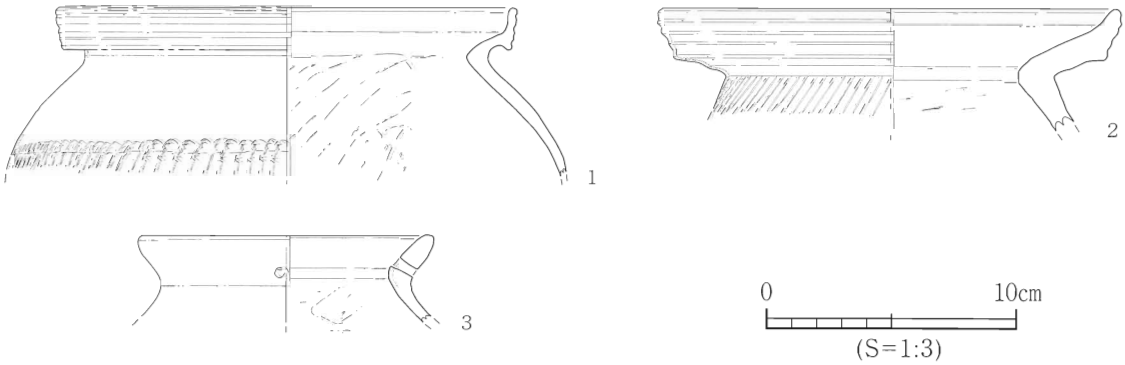
第43図1は口径18.0cmを測る甕で、口縁部は短く直立し、外面に3条の凹線文を施す。肩部にはやや幅広の原体によるノ字刺突文が認められる。弥生後期前葉に属する資料であろう。2は口縁部は拡張が顕著でなく短く外傾し、3条の凹線文を施文する。頸部付近に幅広で鋭利な原体による連続刺突文を施している。1より若干後出的であるが、九重式以前、門

写真37　SD09（SD09－A）



1　暗茶褐色粘質土（黄色ブロック小粒含む）
2　黒褐色粘質土

第42図　九景川遺跡Ⅱ区SD10実測図　S=1/60



第43図　九景川遺跡Ⅱ区SD09・10出土遺物実測図　S=1/3

生Ⅱ期前後の資料と考えられる（島根県教育委員会1998）。

遺構の性格と年代　底面出土遺物から、溝（SD09 － B）の掘削年代は弥生時代後期前葉と考えられるが、最終掘削時のSD09 － Aは4層上面で検出したことから、古墳時代後期以降の遺構と想定されるものの、溝内出土遺物がないため、それ以上の特定は困難である。

遺構の性格としてはSA02・03等柵列との関連から区画溝的な機能が想定されるが、溝内の様相が判明しないため、詳細は不明である。

SD10（第42図）

規模と形態　調査区西側で検出したもので、等高線とほぼ平行してほぼ東西方向に走る溝である。規模は、長さ4.7 m、幅40～60cm、深さ15cm前後を測る。

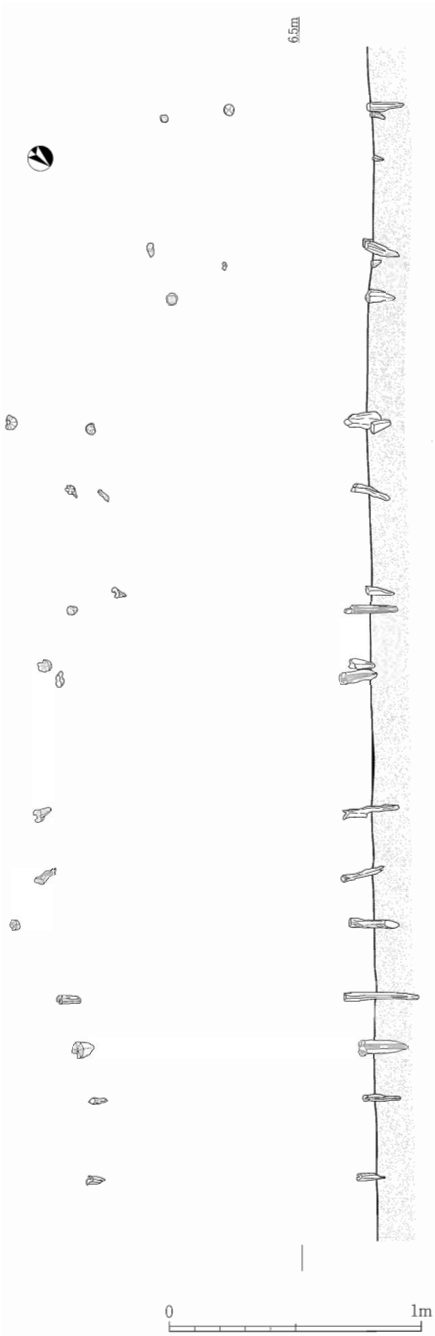
覆土は上層に暗茶褐色粘質土、下層に黒褐色系の粘質土が堆積していた。

SD10出土遺物（第43図）　溝内からは弥生土器が1点出土している。第43図3は口径11.6cmを測る小壺で、口縁部は短くハの字状に開く単純口縁で、紐通用の小孔が認められる。外面はヨコナデ調整、内面は頸部以下に時計回りのヘラケズリを施す。類例が乏しいため正確な位置づけは困難だが、弥生時代後期に属する資料と考えられる。

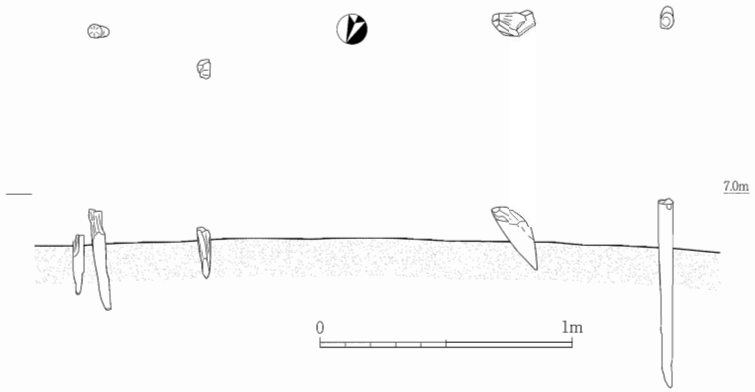
遺構の性格と年代　出土遺物から弥生時代後期段階の溝と考えられる。

(5) 杭列

杭列2（第44図）



第44図　九景川遺跡Ⅱ区 杭列2実測図　S=1/30



第45図　九景川遺跡Ⅱ区 杭列3実測図　S=1/30

第46図　九景川遺跡Ⅱ区 SR02 実測図　S=1/80

規模と形態　調査区北西部で検出した遺構で、東西に方向にやや蛇行しながら延びている。杭列の長さは4.3 mを測り、径5～10cmの杭が雑然と20cm前後の深さで打ち込まれていた。杭に絡めた横木などは確認できていない。

遺構の性格と年代　杭を打ち込んだ面が確認できないため、時期を特定することは困難であるが、周辺の遺物相からみて古墳時代以前の遺構である可能性が高い。付近に河道らしき落ち込みもなく、性格は不明である。

杭列3（第45図）

規模と形態　調査区南西で検出した杭列であるが、杭5本分、長さにして2.4 m分を検出したにす

ぎない。杭列の方向はSD09とほぼ直交する東西方向である。使用された杭材は径6cm前後の細い材で、浅いもので15cm、深いもので50cm前後打ち込まれていた。

遺構の性格と年代　杭の打ち込み面が確認できないため詳細は不明であるが、周辺の遺物相から古墳時代後期以前の遺構である可能性が高い。

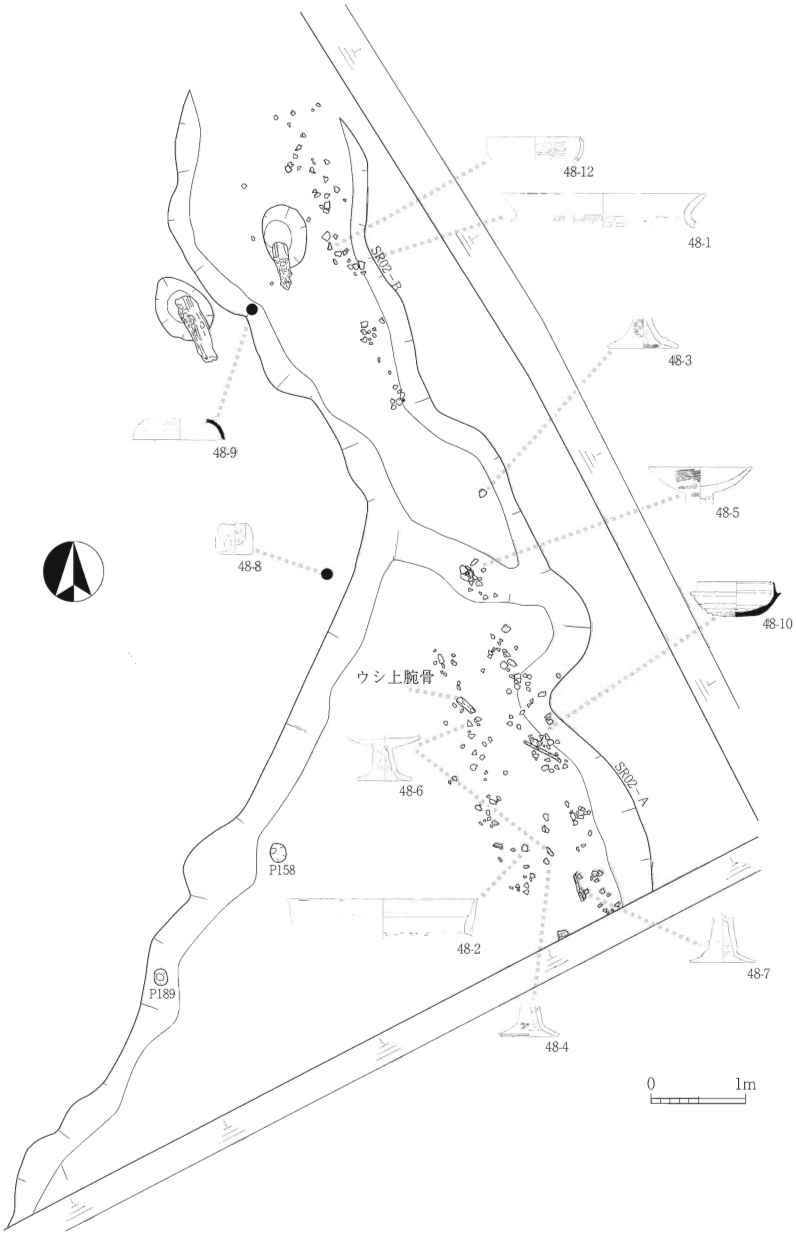
(6) 自然河道

SR02（第46図）

規模と形態　谷部中央に近い調査区東側に位置する自然河道である。流路というよりも淀み状の落ち込みに近い形状で、肩部は明確ではない。調査区内では長さ20 m程を検出し、調査区南側は約9.8 mと非常に幅広くなっているが、北に向けて急激に幅を狭め、狭い箇所では2.2 m程度となっている。深さは深い箇所で40cm前後と比較的浅く、埋土は下層に灰色砂質土、上層に茶褐色砂質粘土が堆積していた。なお、河道北側付近には比較的大形の柱根を残す柱穴が2基認められたが、切り合い関係から河道埋没後に営まれた遺構であると考えられる。

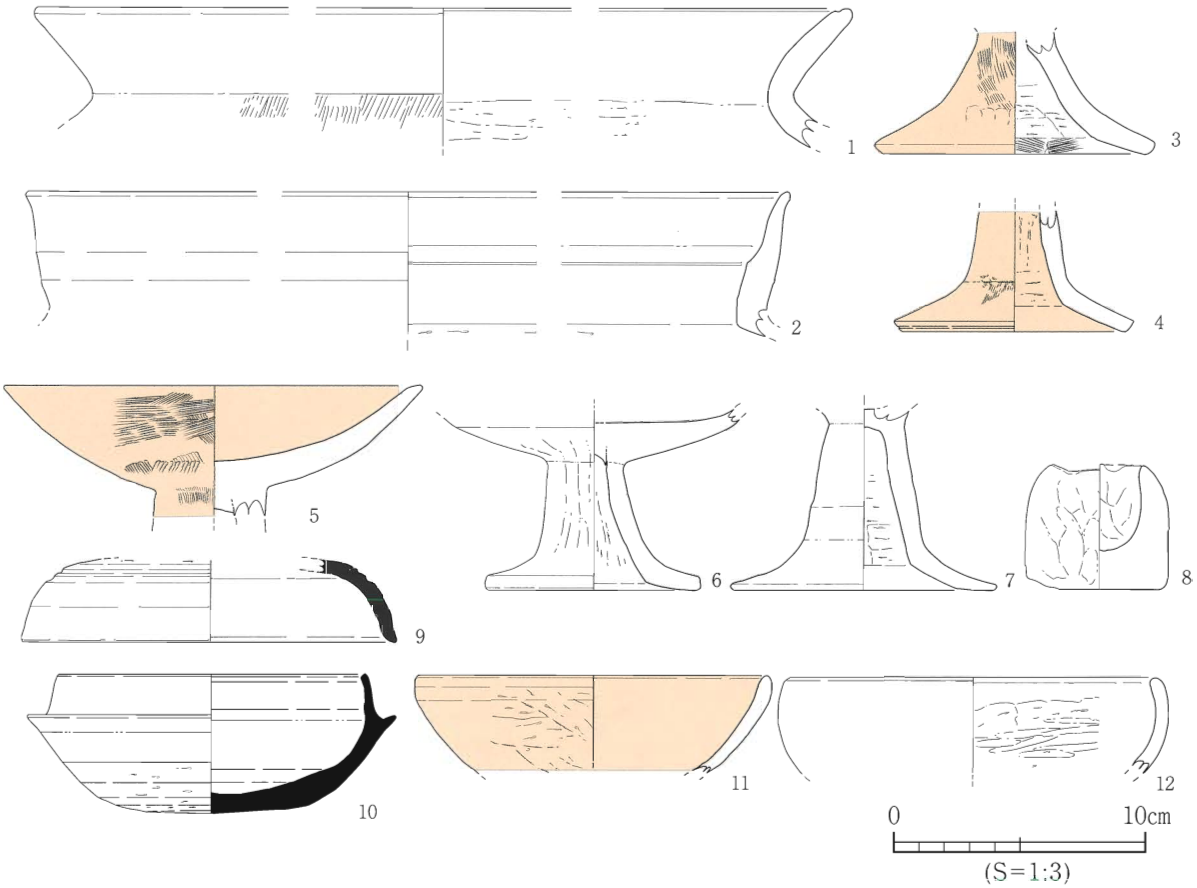
SR02遺物出土状況（第47図）

SR02からは比較的まとまって遺物が出土しているが、完形品は乏しい。その多くは河床に近いレベルでまとまっており、また河道東側に集中している。遺物は大きく見て北側と南側にグループ



第47図　九景川遺跡Ⅱ区SR02遺物出土状況
遺構：S=1/80、遺物：S=1/12

写真38　SR02獣骨出土状況



第 48 図　九景川遺跡Ⅱ区 SR02 出土遺物実測図　S=1/3

に分かれる。遺物は古墳時代中期後葉～後期前半とやや幅が認められるが、層位的または平面的なグルーピングにおいて明確な時期差は確認できない。

また、出土遺物の中には、丹塗の高坏などに混じってウシの上腕骨が出土しており（写真 38）、土器群の性格を考える上で示唆的であるとともにその所属年代が注目される。

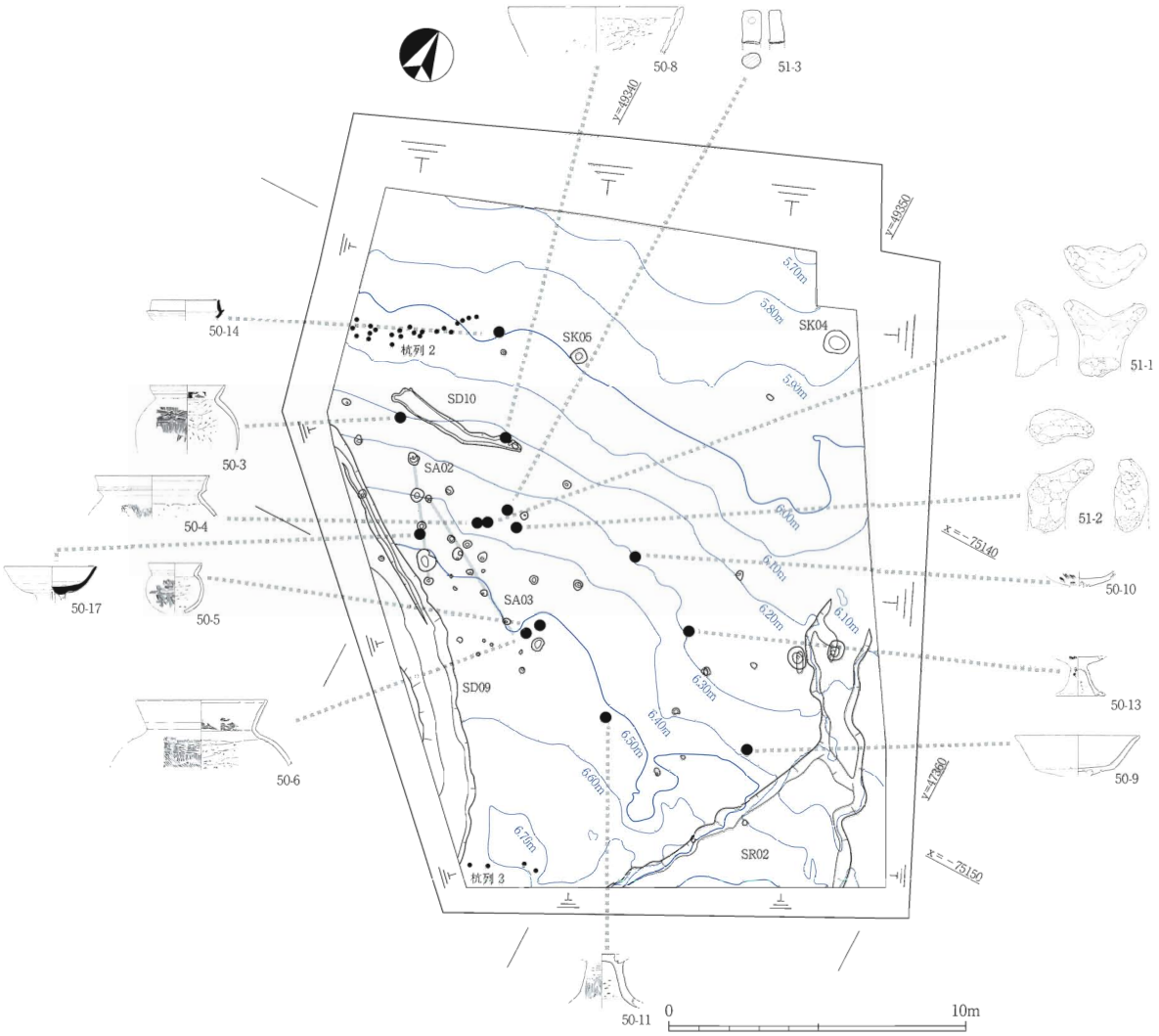
SR02 出土遺物（第 48 図）

1 は土師器甕の口縁部である。頸部はよくしまり、口縁部は強く屈曲して直線的に開く。口縁部の形状は古墳時代後期的だが、頸部がよくしまり稜をなす点はやや古い様相を残している。2 は退化した複合口縁を有する甕で、口縁端部は丸く収めやや外方へ突出する。口縁部外面には痕跡的な稜を残すのみだが、内面には明確な段部を形成している。

3 は高坏脚部で坏部との接合部から大きくハの字状に開く形状をなし、外面に赤彩痕を一部残している。4 は同じく高坏脚部である。脚部は途中で屈曲し大きく開く形状をなす。外面のほか、内面にも一部赤彩痕が認められる。

5 は高坏の坏部である。坏部の形状は浅い皿状を呈し、器壁が非常に厚いのが特徴である。外面はハケ、内面はナデ調整により仕上げた後、内外面ともに赤彩を施している。6 は高坏脚部で、脚部下方に屈曲点が認められる資料である。赤彩は確認できない。8 は手捏ね土器で、口径 5.4cm、器高 5.0cmを測る。内外面とも指頭圧痕が顕著な粗雑なつくりのものである。

9 は須恵器蓋で口径 14.7cmを測る。天井部には丁寧な回転ヘラケズリを施し、段部を 2 条の沈線により表現している。口縁部端部はやや嘴状を呈するが明確な段を形成しない。口径からみて大谷



第 49 図　九景川遺跡Ⅱ区 3 層遺物出土状況　遺構：S=1/250、遺物：S=1/12、1/8

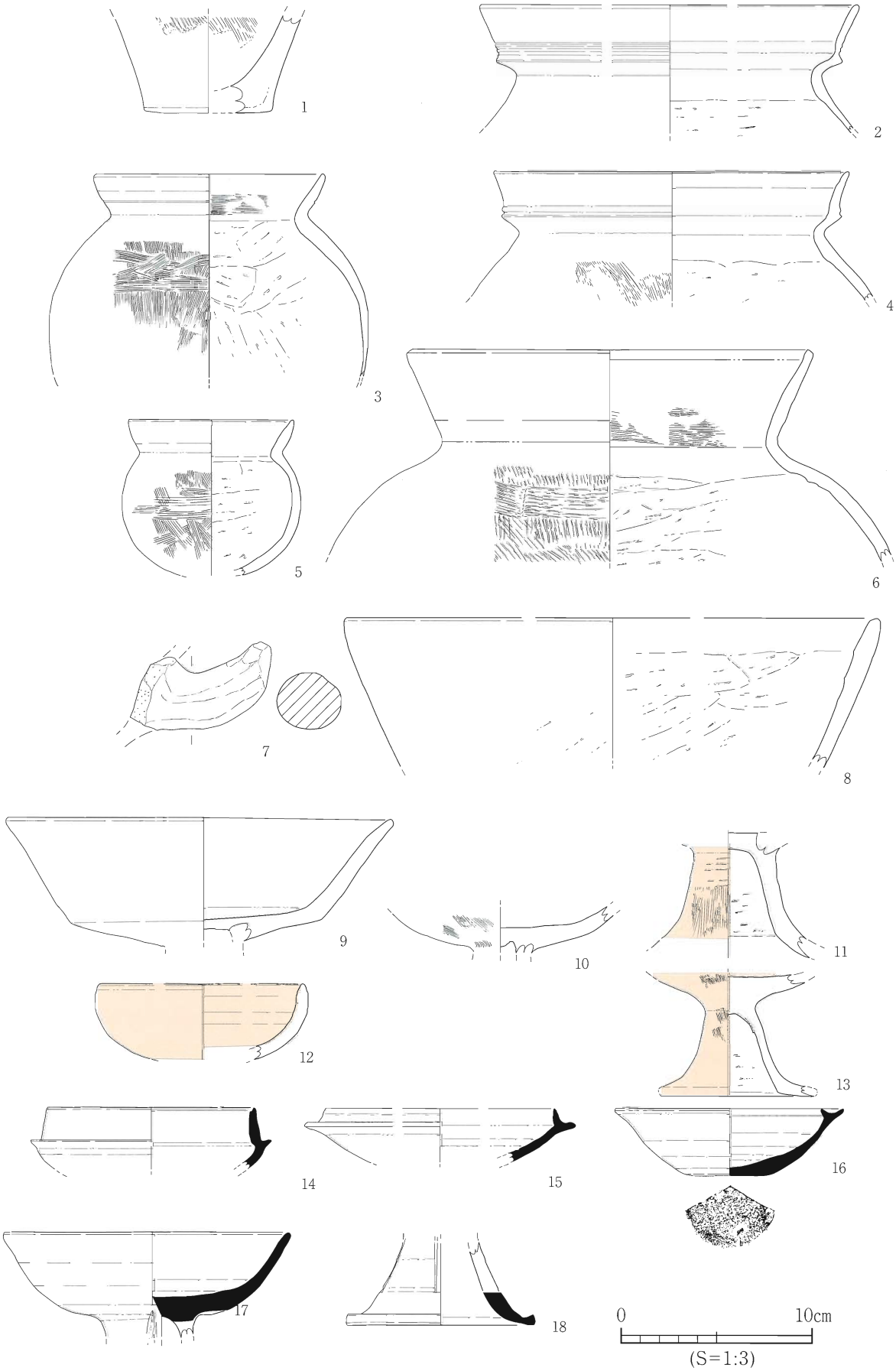
2 期～ 3 期古相の資料であろうか（大谷 1994）。10 はほぼ完形の須恵器坏で、口径 12.1cmを測る。立ち上がりは高く、端部はやや丸いが面取りを行っている。やはり大谷 2 期前後の資料と思われる。

11・12 は土師器坏である。11 は口径 14.0cmで口縁部は大きく開いて端部がやや肥厚させつつ丸く収め、外面を軽いヘラケズリで仕上げたのち、内外面に赤彩を施す。12 は内湾するタイプの坏で、古墳中期後半的な坏である。赤彩痕は確認できない。

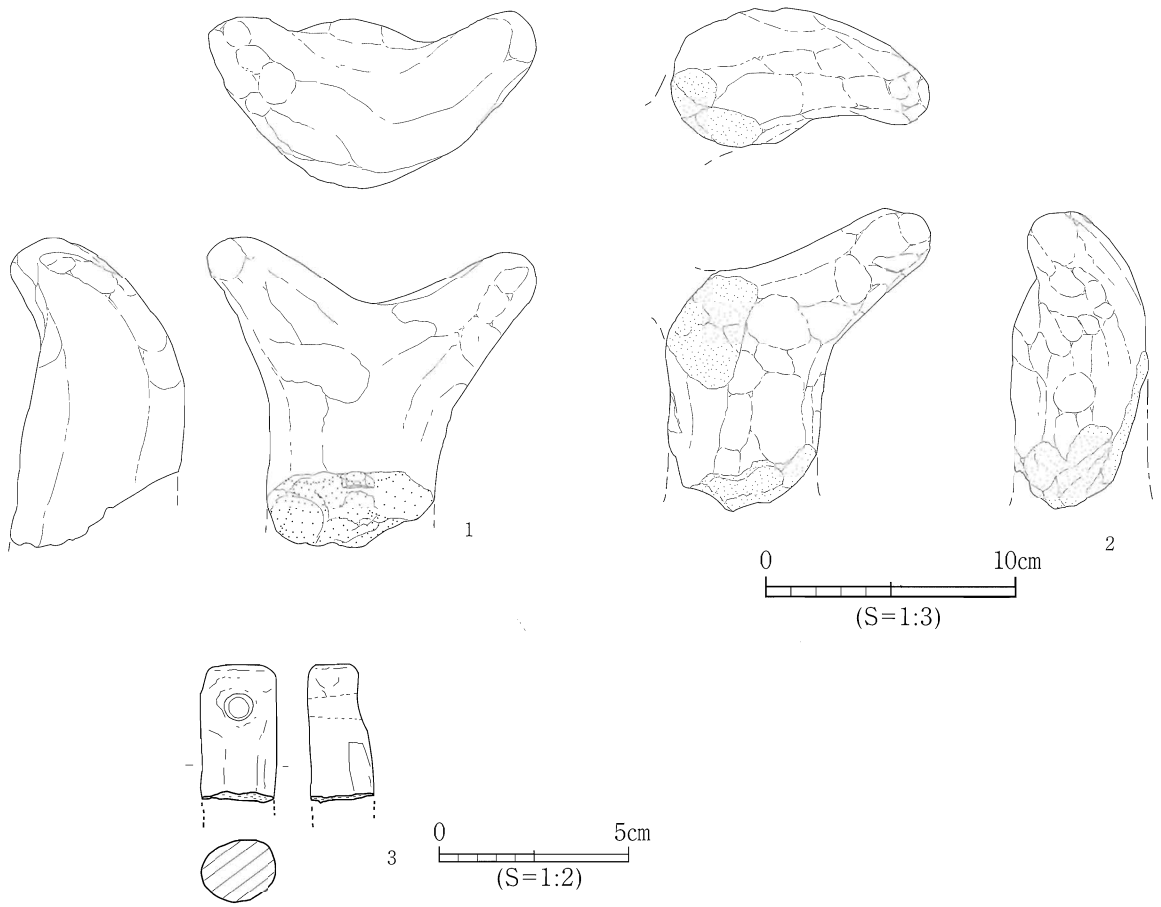
遺構の性格と年代　SR02 はその形状からみて人工的な遺構とは考えにくく、その立地からも自然河道と理解するのが適切である。出土遺物の年代はやや不明な点が残るものの、その中心は古墳時代後期前葉にあると言える。SR02 出土遺物群で注目されるのは、赤彩高坏の比率が高く、手捏ね土器や獣骨が出土している点であり、後述する SR03 と同様に水辺における祭祀的な土器群であった可能性も十分に考慮されよう。

(7) Ⅱ区 3 層出土遺物（第 49・50 図）

第 49 図に 3 層出土遺物の分布状況を示した。3 層は主として古墳時代中～後期を中心とした遺物包含層である。特に集中箇所は見出し難いが、調査区北側からは弥生時代後期以降の遺物はほとんど出土しておらず、当該期の遺物はより丘陵部に近い調査区西側に偏る傾向が認められる。



第 50 図　九景川遺跡Ⅱ区 3 層出土遺物実測図 (1)　S=1/3

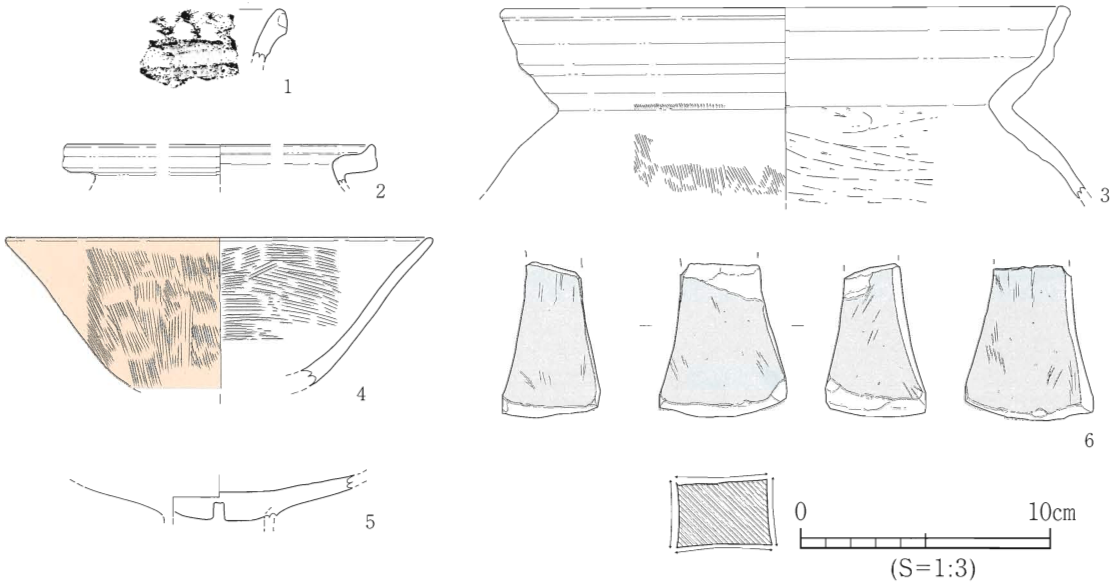


第51図　九景川遺跡Ⅱ区3層出土遺物実測図(2)　1・2：S=1/3、3：S=1/2

第50図1は弥生土器甕または壺の底部である。しっかりとした平底を呈し、内外面をハケ調整が認められる。器壁の様子や胎土からみて弥生時代前期と考えられる。2は複合口縁甕で口径19.5cmを測る。比較的薄手のつくりで、口縁部外面下半に沈線が認められるが、いわゆる擬凹線文とは異なる。3は胴部まで残る小形甕で、口縁部外面には段部を表現する痕跡的な細い沈線が認められ、肩部にはヨコハケのほかヘラ状工具による刺突文が認められる。古墳時代中期でも前半に属する資料であろうか。4はやや退化した複合口縁を有する甕である。口縁端部は丸く収めているが、まだ器壁は厚くなってはいない。口縁部段部は1条の沈線により表現している。内面ヘラケズリの始端位置は頸部屈曲部からかなり下がっている。古墳時代前期末の資料であろう。

5は小形丸底壺である。口縁部は比較的短く、口縁部外面に痕跡的な複合口縁状の稜を残す。胴部最大径付近にはヨコハケを施している。6は大型の甕で、口縁部はやや上方に長く立ち上がり、端部は内面に若干肥厚する。頸部は比較的よくしまり、肩部には縦方向の後横方向へ比較的粗いハケを施している。5・6ともに古墳時代中期前半頃の資料と思われる。

7は甑の取手、8は山陰型甑の脚（口縁）部と思われる。8は内面だけでなく外面にも軽いヘラケズリ痕が認められる。9は土師器高坏の坏部である。有段タイプの資料で、坏部は比較的深く、口縁部は長く直線的に立ち上がる。風化により調整は不明であり、赤彩痕も残存していない。10も高坏坏部で接合部付近しか残っておらず坏部下半の接合部は突出している。11は高坏脚部だが、脚径が比較的太く、当該期では珍しい資料である。脚部外面にはタテハケ痕が顕著に残り、外面に



第52図　九景川遺跡Ⅱ区4・5層出土遺物実測図　S=1/3

赤彩が認められる。12は坏で内湾する形状を呈し、内外面をヨコナデにより仕上げている。13は高坏脚部で、比較的短脚タイプの資料である。坏部と脚部との接合部には底から粘土を貼り、なでつけたかのような痕跡が認められる。

14～18は須恵器である。14は坏で口径10.7cmを測る。立ち上がり部は上方へ長く立ち上がり、端面には段部を設ける。大谷1期に属する資料である（大谷1994）。15の坏は口径11.8cmを測り、立ち上がりは低く斜め上方に立ち上がる。底部調整は不明だが、大谷5期に属する資料と思われる。16はさらに口径が縮小し、立ち上がり部の退化が進んだ坏である。底部調整はヘラ切り未調整で大谷6期に属する。

17は須恵器高坏で一部脚部が残る。坏部は単純に内湾しつつ開く椀形を呈し、脚部には切れ込み状の2方向スカシが認められる。大谷4～6期に属する資料であろう。18は須恵器高坏脚部で、脚端部は短く直立した平坦面を有し、4方向に切れ込み状の方形スカシが認められる。

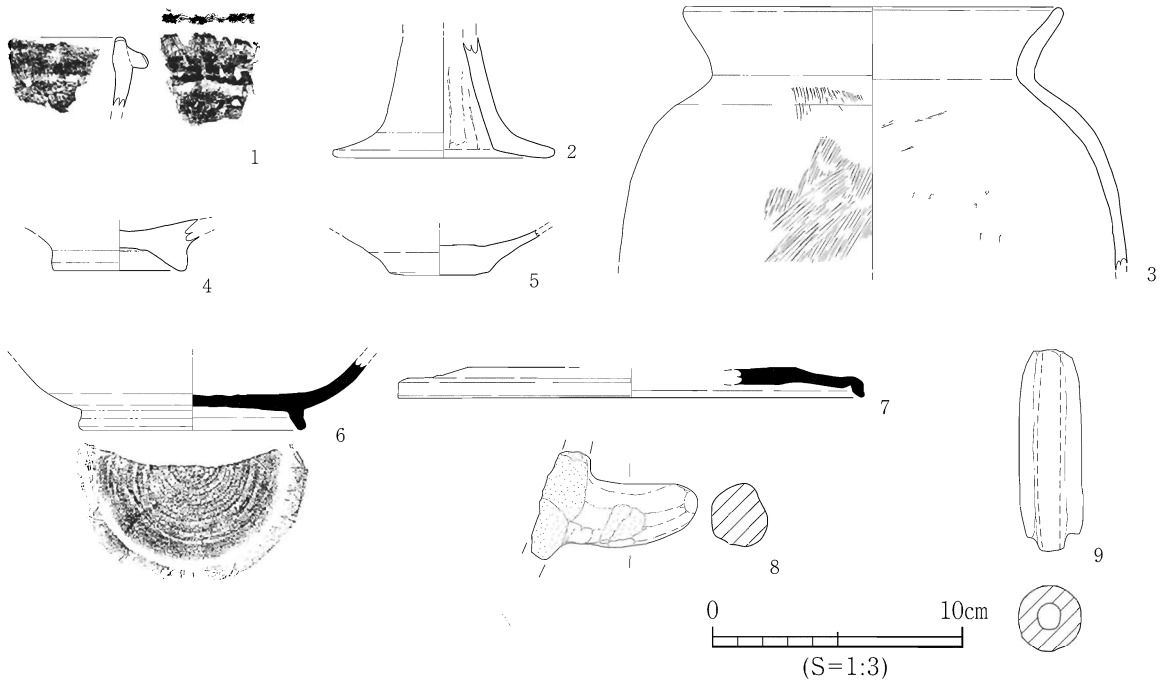
第51図1・2は土製支脚で、SA02・03付近から出土した。1は脚部の大半を欠くが、背面の円孔の一部がわずかに残っている。2は脚部と角部の一端を欠き、背面の円孔は現存する部分では確認できない。3は双孔棒状土錘である。一端を欠くが、現存長3.5cm、重量14.03 gを測る。断面はほぼ円形で一端に径5mm前後の円孔を穿つ。

(8) Ⅱ区4・5層出土遺物（第52図）

第52図は4・5層から出土した遺物を掲載した。1が調査区側溝掘削時に5層中から出土した遺物であるほかは4層出土の遺物である。

1は縄文晩期土器深鉢口縁部の小片で、口縁部端部に水平方向からの刺突痕が認められる。2は弥生土器甕口縁部である。口縁部は頸部から強く水平方向に屈曲しほぼ直立する端面を形成している。Ⅳ-1前後の資料と思われる。

3は土師器甕で口径22.0cmを測る。口縁部は退化した複合口縁状を呈し、端部はやや肥厚する。古墳中期前半頃の資料であろうか。4は土師器高坏で、古墳時代前期の坏部外面に稜を有さず緩や



第 53 図　九景川遺跡Ⅱ区遺構外出土遺物実測図　S=1/3

かに外反する高坏の系譜を引くタイプであるが、口径が縮小し、坏部が著しく深くなっている点からみて中期以降に降る資料であろう。5 は高坏坏部で円盤充填タイプで刺突痕 a を有するタイプである（松山 1991）。6 は砂岩製の砥石である。一部を欠くが平面鼓状の比較的整った形状を呈する砥石で、現存長 6.1cm、幅 5.0cm、厚さ 3.9cmを測る。使用面は 4 面あり、いずれの面にも鉄器刃先痕と想定される傷が認められる。

(9) Ⅱ区遺構外出土遺物（第 53 図）

第 53 図 1 は調査区北側溝中から出土した縄文土器で、おそらく 5 層出土と思われる。口縁部端部付近に刻目突帯を有し、口縁部端部上面も刻むタイプの突帯文土器である。

2 は土師器高坏の脚部で脚下半が強く屈曲し脚端内面に幅広の平坦面を有するタイプの高坏である。赤彩は確認できない。3 は単純口縁タイプの土師器甕で、頸部の屈曲は比較的甘い。肩部がやや張り、胴部外面に粗いタテハケを施すが肩部ヨコハケは認められない。4・5 は土師質土器坏の底部で、4 は若干高台状を呈するタイプで、5 は底部に回転糸切痕が認められる。

6 は表土から出土した須恵器坏底部で、底径 8.6cmを測る。坏部下半の立ち上がりは直線的ではなく丸みを帯びて内湾気味に立ち上がる。7 は須恵器蓋の口縁部である。体部は非常に扁平でつまみを欠く。口縁部端部は下方に短く屈折しほぼ垂直な平坦面を形成する。青木Ⅲ期前後の資料であろう（松尾 2006）。8 は甑の取手で断面形は不整円形を呈し、外面は粗いナデにより仕上げている。9 は大型の管状土錘で調査区北側側溝から出土した。ほぼ完形で、長さ 8.0cm、幅 2.5cm、厚さ 2.7cm、重量 50.62g を測る。

第６章　Ⅲ区の調査

Ⅲ区は、今回の調査区では最も遺構・遺物が集中していた調査区である。検出された遺構は弥生時代後期から近世までの各時期にわたるが、主たる遺構は古墳時代中期、奈良～平安時代、中世前半期の３時期のものである。古墳時代中期では柱根が良好に残存する掘立柱建物跡を検出したほか、自然河道において水辺の祭祀に関わる土器群を検出した。古代の遺構では多数の掘立柱建物跡を検出し、なかには桁行 14.5 mにも及ぶ大形建物や倉庫と想定される総柱建物等が含まれる。中世遺構面では小規模ではあるが貝塚を検出している。

第１節　基本層位

Ⅲ区の調査前の現況は大半が水田であったが、西側の一部は宅地となっており、この部分は攪乱が著しく（Ｇ４・Ｇ５グリッド付近）、遺構・遺物も断片的にしか検出できていない。それ以外の箇所においても攪乱はかなり激しかったが、調査区南西部は比較的遺存状況が良好で、中世遺構面と古墳時代遺構面とを重層的に検出することが可能な状況であった。

Ⅲ区の土層を第 55・56 図に示す。１層は表土・耕作土・攪乱土である。２層は暗褐色～灰褐色系の粘質土で中世以降の堆積による層である。この１・２層は重機により除去した。３層は黒褐色粘質土で、白磁などを含む中世前半期の遺物包含層であり、Ⅰ・Ⅳ区と共通する。特に調査区南西部では堆積が厚く、遺物も比較的まとまって出土した。

写真 39　Ⅲ区遠景（玉泉寺裏遺跡から）

４層は茶褐色系の粘質土で、地山ブロックを多く含み、この上面から中世の遺構が掘り込まれている。遺物は少ないが中世土器を若干含むことから当該期の造成土である可能性も考えられる。５層は黒褐色系粘質土の遺物包含層で、弥生時代後期～奈良時代の遺物を含んでいる。中世以前の遺構はこの層を除去した灰オリーブ色～黒灰褐色土である６層上面で検出している。この６層の一部からは縄文時代の遺構を若干検出したが、これについては節を改めて後述する。

写真 40　Ⅲ区西壁土層（北から）

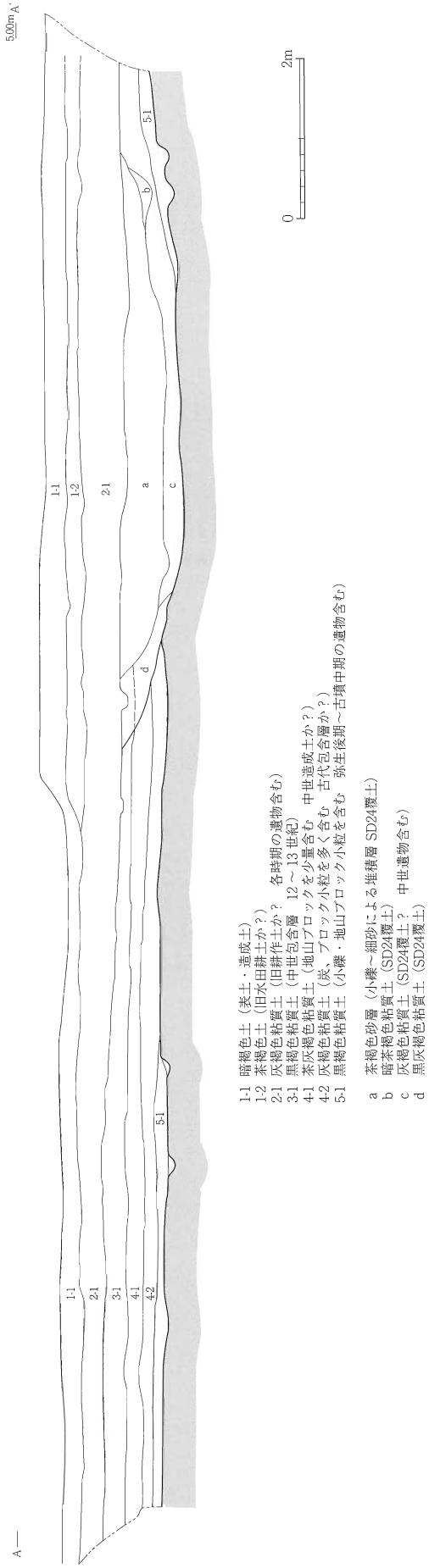
これらのうち、３～５層は調査区西側でしか検出し得ていない。奈良時代の遺構・遺物が密集した調査区北側中央及び北東部においては、表土を除去すると薄い黒色土を若干挟んだ後、遺構面に達している。この黒色土は調査段階では３層と類似していたが中世の遺物はほとんど含まず、その大半が古代の遺物で占

められていたことから、3層とは区別し便宜的に2層としてして取り扱った。第139～141図で1～2層出土遺物として掲載した遺物はほとんどがこの区域からの出土遺物である。おそらくこの区域は中世段階以降に削平を受けたか、もしくは中世期のあまり遺構が営まれなかった区域であったと想定される。

一方、調査区南西部は先に述べたとおり中世遺構面とそれ以前の遺構面とが層位的に分離可能な状況であった。このため、本章では、まず調査区南西部の4層上面で検出された遺構・遺物を報告し、次いでⅢ区全体において6層上面で検出された弥生時代後期～中世にかけての遺構を検出順にその概要を述べ、さらにⅢ区6層の一部について実施した断ち割り調査時において検出した縄文時代の遺構・遺物の順で、順次報告することとしたい。

第54図　九景川遺跡Ⅲ区遺構配置図（古墳～古代遺構面）　S=1/400

第55図　九景川遺跡Ⅲ区西壁土層図　S=1/100



第56図　九景川遺跡Ⅲ区北壁土層図　S=1/80

写真41　Ⅲ区南西部4層上面遺構面（東から）

第2節　南西部4層上面検出遺構の調査

(1) 遺構の分布と概要（第57図）

Ⅲ区南西部は約300㎡程の範囲で、北側は近世以降の削平により大きく削り取られ、段状を呈しており、南及び東側は宅地造成により完全に破壊されていた。調査区内は南から北へ降る緩やかな緩斜面となっており、標高4.6～5.4ｍを測る。

当該地区の4層上面は3層の中世前半期の遺物包含層により安定的に覆われており、後述するSD18やSK08などの一部の遺構を除くと、その大部分の遺構はほぼ12～13世紀頃の遺構であると考えて大過ない。

調査区の中央には中世の小規模な貝塚であるSX02が位置し、その北側の一部切って小規模な掘立柱建物跡であるSB09が位置している。またSX02以外にも貝層1のような小規模な貝だまりが存在した。調査区の西壁付近及び南壁付近にはSD21、SD18、SK08といった溝や土坑が存在するが、これらは近世以降の遺構である。

その他、調査区東側にはSD16・17のような小規模な溝や比較的規模の小さい柱穴が散在しているが、明確な建物を復元するに至っていない。

また、他の時期の遺構面で確認されたような、調査区の位置する谷を南流する当該期の自然河道は検出されず、当時はより東側を南流していたものと考えられる。

(2) 掘立柱建物

SB09（第58図）

規模と形態　SX02の北側で検出した建物で、SX02及び貝層1と重複している。SX02及び貝層1を除去した段階で検出したことから、これらより先行する建物と考えられる。

建物構造及び規模は、2×1間で梁間3.5ｍ、桁行3.5ｍのほぼ正方形を呈しているが、全体的にやや歪みのある印象を受け、また梁間の柱間が著しく広い。なお、西側柱列の南側延長線上に幾つかの柱穴が並んでいる状況が確認されたが（写真42）、柱間が不均等である点や東側では対応する柱穴は確認できなかった。

柱穴は40×70cmの楕円形状を呈するものが多いが、幾つかのものについては抜き取り時によるものである可能性も考えられる。柱穴の深さは30cm前後で主として黒色・黒灰色の土が堆積していた。また、貝層1と重複していた南西隅の柱穴では柱根が残っており、径約20cm程度の柱を使用していたものと想定される。

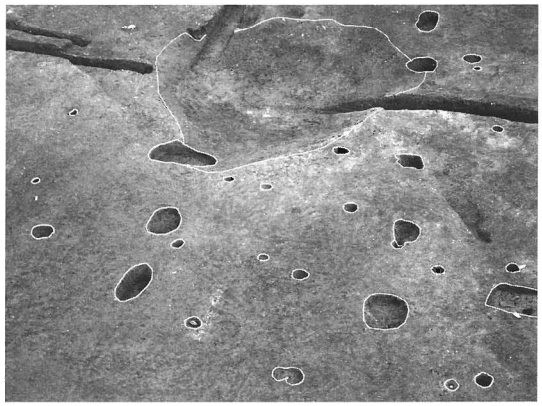
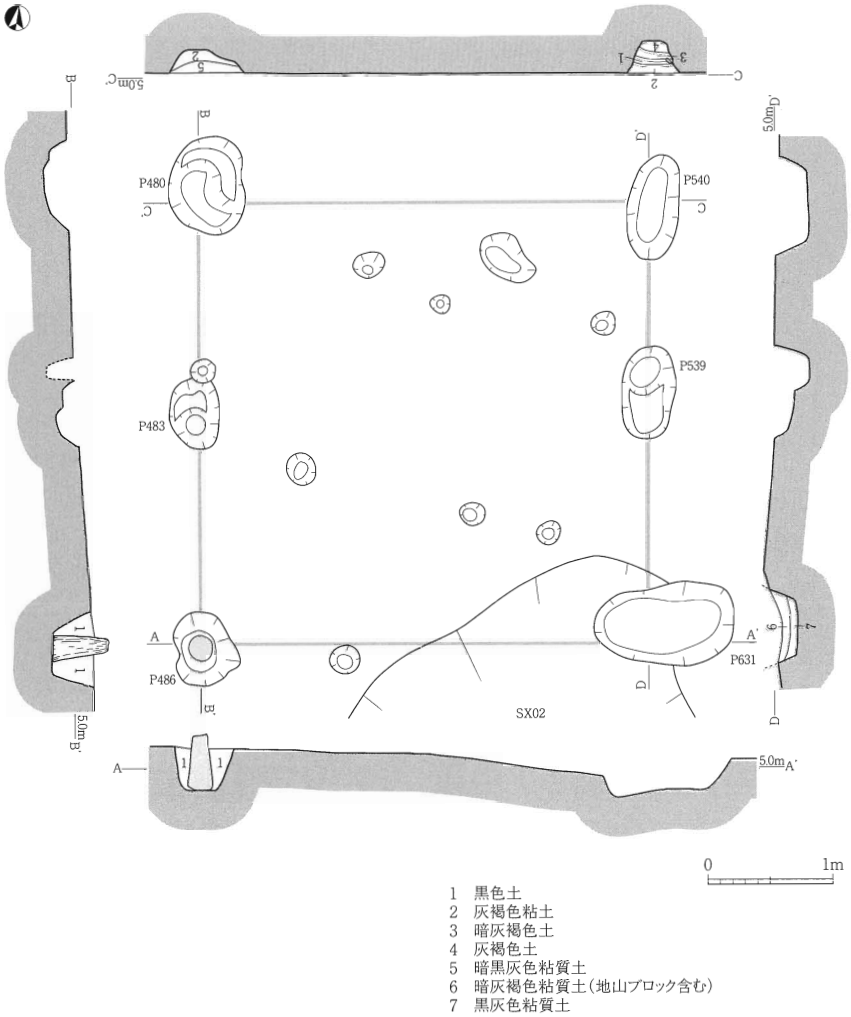


写真42　SB09とSX02（南から）

遺構の性格と時期　層位的関係から貝層1や小規模な貝塚であるSX02に先行するが、4層上面から掘り込まれていることからほぼ同時期、12～13世紀頃

第57図　九景川遺跡Ⅲ区中世遺構面平面図　S=1/150



第58図　九景川遺跡Ⅲ区SB09実測図　S=1/60

写真43　SD18・SK08（西から）

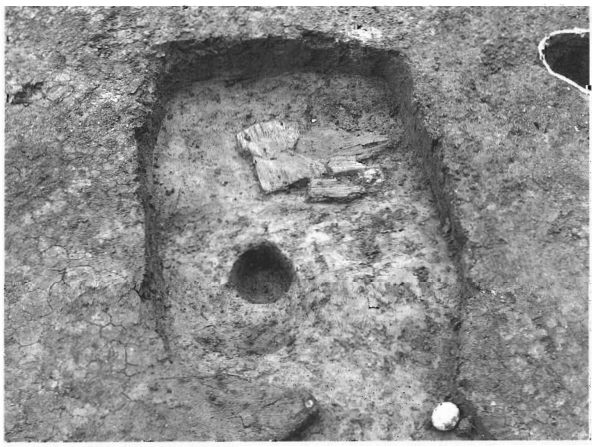


写真44　SK09

の建物跡と考えて大過ない。

性格は不明だが、当建物周辺は建物廃絶後に貝塚が形成されていることから、貝塚の機能とは無関係の建物であったことは疑いない。

(3) 土坑

SK08（第59図）

規模と形態　調査区南端で検出した土坑で南半は調査区側溝掘削時に失われている。平面形は長方形状を呈し、現状での規模は、長さ2.2 m、深さ20cm前後を測る。

遺構の性格と時期　遺物は出土していないが、後述するSD18との関係から近世以降の遺構である蓋然性が高い。

SK09（60図）

規模と形態　SB09の西側で検出した土坑で、西隅を別のピットにより切られている。平面形は比較的整った長方形状を呈し、長さ85cm、幅57cm、深さ12cm前後を測る。

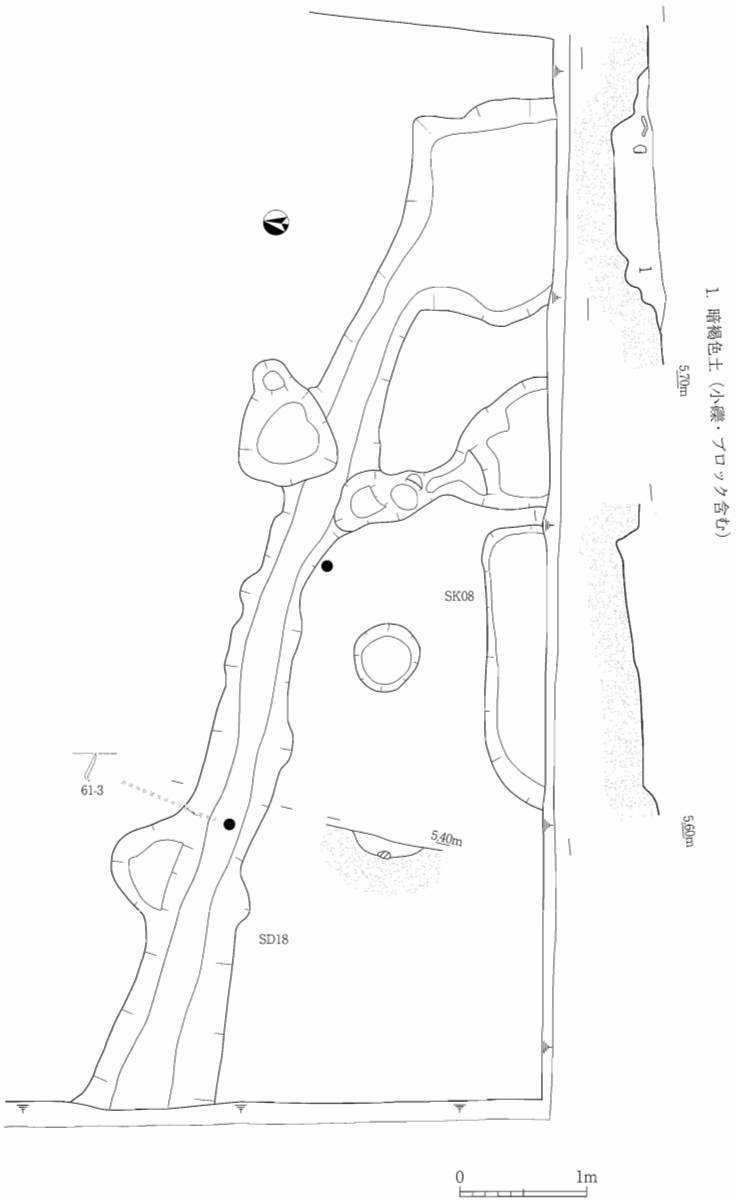
土坑内埋土は暗褐色粘質土が堆積していた。また床面には板材が部分的に敷かれていたが（写真44）、製品ではなく、その性格も不明といわざるを得ない。

遺構の性格と年代　先述の板材以外は遺物は出土していないが、4層上面から掘り込まれていることから12～13世紀頃の遺構と考えられる。その平面形態から墓である可能性も考慮されようが、現状ではそれを積極的に裏付ける根拠はない。

(4) 溝

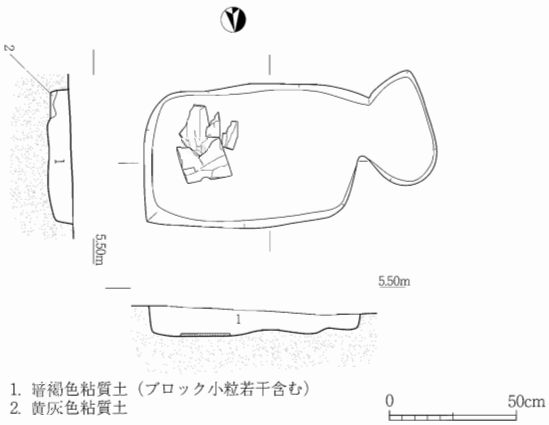
SD18（第59図）

規模と形態　調査区南西隅で検出した溝で、西側及び南側は調査区外へと続いている。形状はほぼ直線状をなすが、東側は幅を広げて南側へ向けて屈曲しており、また不明瞭ながら中途で

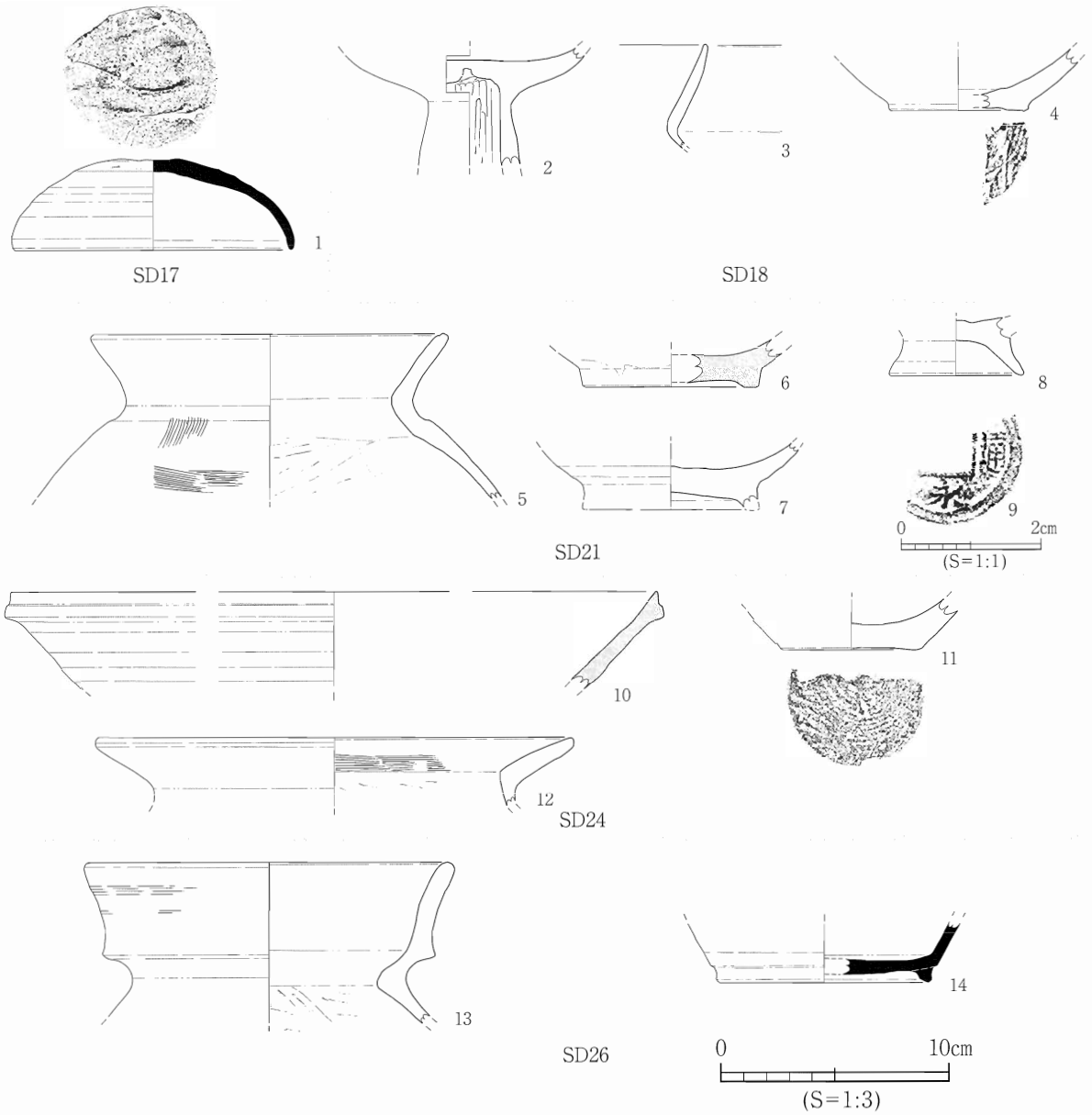


第59図　九景川遺跡Ⅲ区SD18・SK08実測図

遺構：S=1/60、遺物：S=1/12



第60図　九景川遺跡Ⅲ区SK09実測図　S=1/30



第 61 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD17・18・21・24・26 出土遺物実測図　S=1/3

表 3　SD21 出土銭貨計測表

図版番号	名称	初鋳年	銭径（A）/ 銭径（B）内径（C）/ 内径（D）	銭厚	量目
第 61 図 9	寛永通寶（江戸）	1636 年（暦）		0.80 ～ 0.90㎜	0.92 g

二股状に分かれており、その西側には先述の SK08 が隣接している。

現状での規模は長さ 8.9 m、幅 50cm～ 160cm、深さ 30cm前後を測る。溝内の埋土はしまりのない暗褐色土が堆積していた。

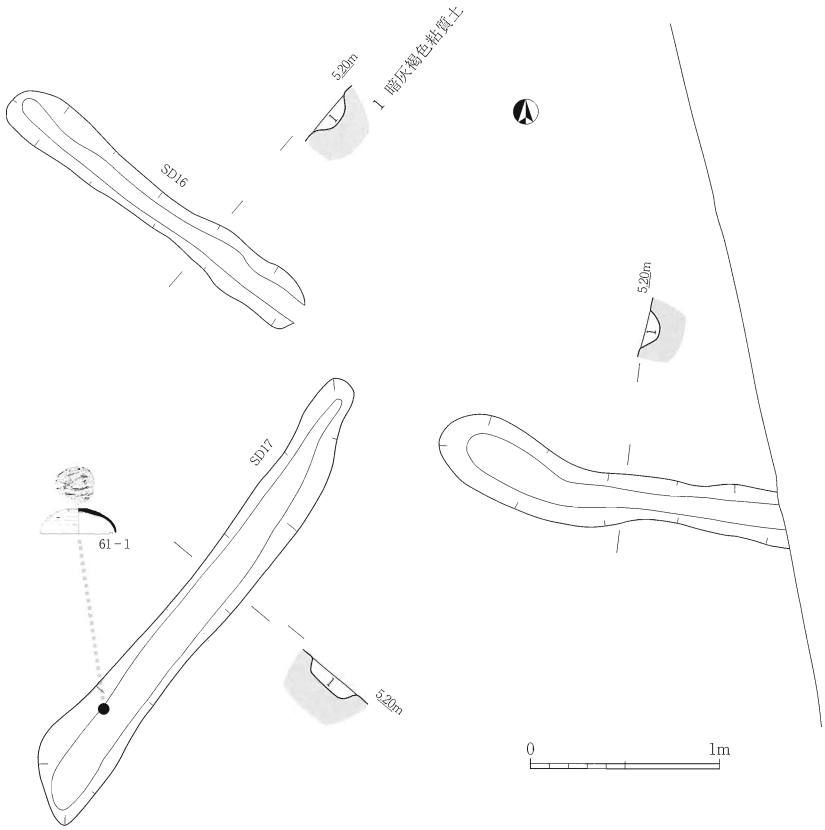
SD18 出土遺物（第 61 図）　第 61 図 2 は土師器高坏である。脚部内面の絞り目が顕著に残る。3 は土師器甕口縁部の小片である。口縁部は比較的薄手の単純口縁でやや内湾気味に立ち上がり口縁部端部はやや先細り状に収めている。2・3 は古墳時代中期前半に属する資料である。4 は土師質土器坏の底部小片で、内外面をヨコナデで仕上げ、底面に回転糸切痕が認められる。

なお、図示していないが、これ以外にも当遺構からは近世陶磁器片が多数出土している。

遺構の性格と年代　当遺構の年代は近世陶磁器の出土から近世以降に属するものと考えられ、古墳時代中期の土師器や中世の土師質土器は混入品であろう。

SD16（第62図）

規模と形態　SB09の東側で検出した、南東から北西に向けて延びる小溝で、東側は調査区外へ延びている。中央付近が途切れているが、検出した範囲での規模は、長さ4.7 m、幅40cm、深さ8cm前後を測る。溝内の埋土は当遺構面のピット埋土と共通する暗灰褐色系の粘質土が堆積していた。



第62図　九景川遺跡Ⅲ区SD16・17実測図　遺構：S=1/40、遺物：S=1/12

遺構の性格と年代　遺物がなく時期の特定はできないが、埋土の特徴から12～13世紀の遺構である可能性が高い。

SD17（第62図）

規模と形態　SD16に隣接して検出した溝で、SD16とほぼ直交するように南西から北東へ延びている。現状での規模は、長さ2.8 m、幅30cm、深さ8cm前後を測る。覆土はSD16と同様な土が堆積していた。

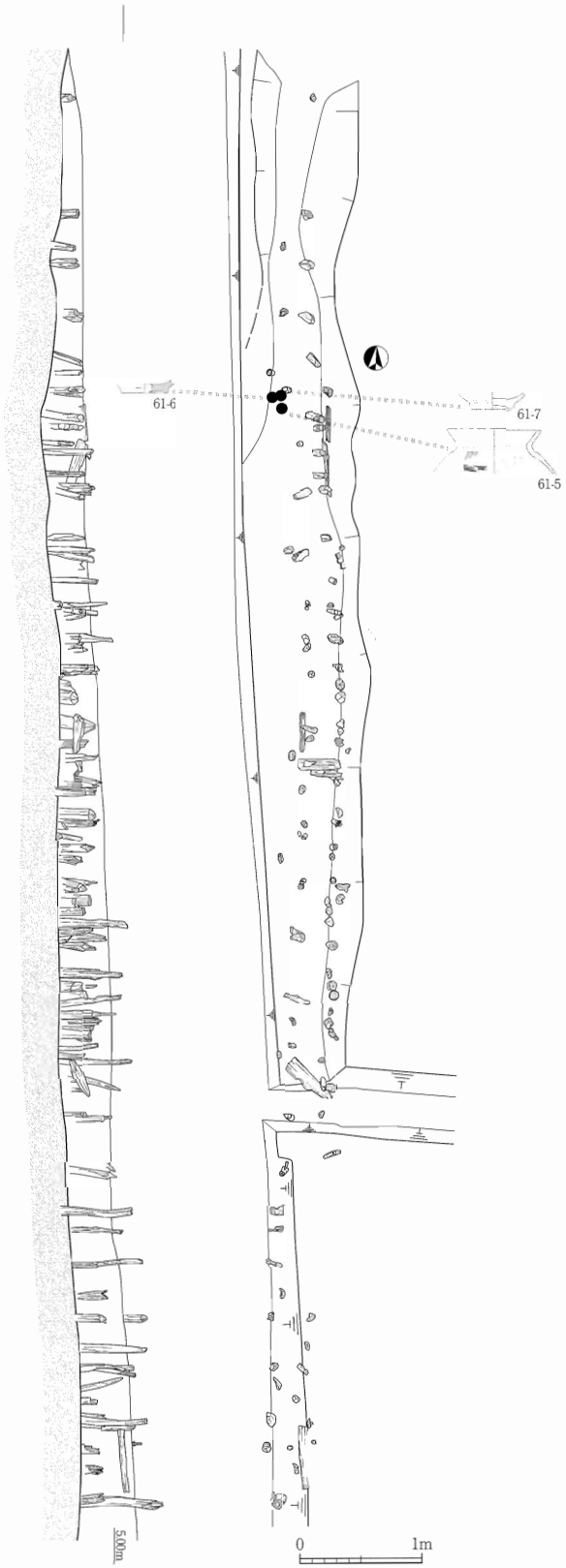
写真45　SD21（北から）

SD17出土遺物（第61図）　第61図1はSD17から出土した須恵器蓋である。口径12.0cmを測り、口縁部と天井部との段はほぼ消失しており、口縁部は丸く収め内面の沈線はない。天井部は周辺に回転ヘラケズリを行うが、中央部はナデのみで終わっている。口径や調整の特徴からみて大谷5期に位置づけられる。

遺構の性格と時期　出土遺物から判断すれば、7世紀の遺構と想定されるものの、当該期の遺構は他には見当たらず積極的に首肯し難い。むしろ、層位的関係や埋土の特徴からみて中世前半期の遺構である可能性が高い。

SD21（第63図）

規模と形態　調査区西際で検出した遺構で北側は攪乱により削られ、また溝東側の肩部は調査区側溝掘削時に失われている。溝底面には溝の主軸に沿って杭列が南北に延びており、南側は調査区西



第63図　九景川遺跡Ⅲ区SD21実測図　遺構：S=1/60、遺物：S=1/12

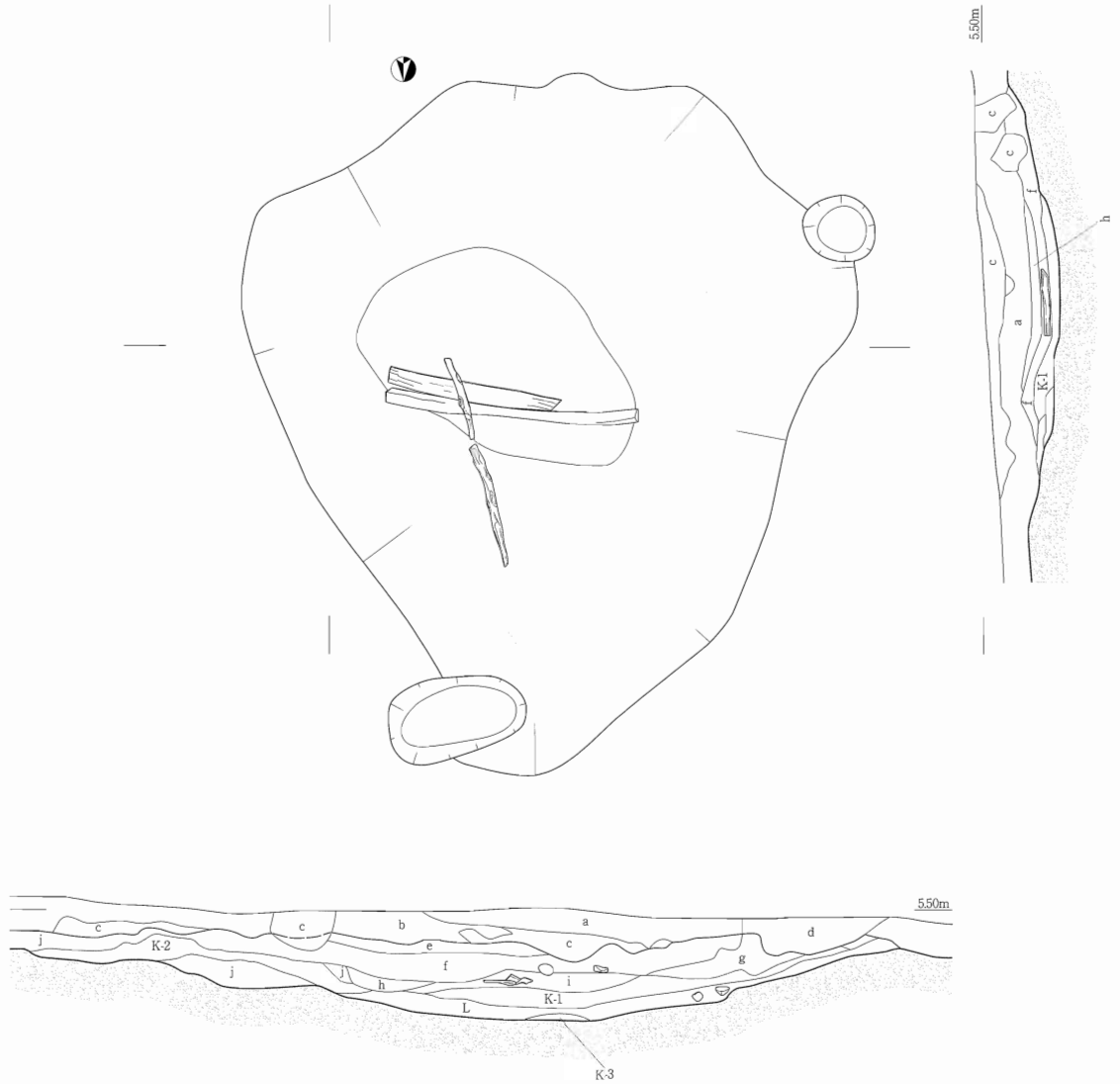
側へと続いている。現状での規模は、長さ12m、幅80～90cm、深さ40cm前後を測る。杭列はやや雑然としているがほぼ2列状をなし、比較的密に打ち込まれており、部分的には横架材状の部材も認められた。

SD21出土遺物（第61図）

第61図5～9はSD21出土遺物である。5は土師器甕で口径16.1cmを測る。口縁部はやや厚みを帯び、ほぼ直線的に開く単純口縁で、口縁部端部内面にわずかに段を備える。頸部には強い横ナデを施し肩部に稜を形成している。肩部外面には一部ヨコハケを残す。古墳時代中期前半に属すると考えられる。

6は白磁の底部で底径7.6cmを測る。7は土師質土器坏で高台を備えるタイプである。8も土師質土器坏でやや高い高台を備えるタイプで、高台は小形のものでハの字状に大きく開き、やや先細り状に収めている。9は寛永通宝で半分近くを欠いているため詳細な年代は不明である。

遺構の性格と年代　SD21は3層を切り込んで形成されており、層位的には中世以降の遺構であることは間違いない。出土遺物も5～8等の古墳時代中期や中世の遺物を含んでいるがこれらは混入品と考えられ、9の寛永通宝の出土からみて近世



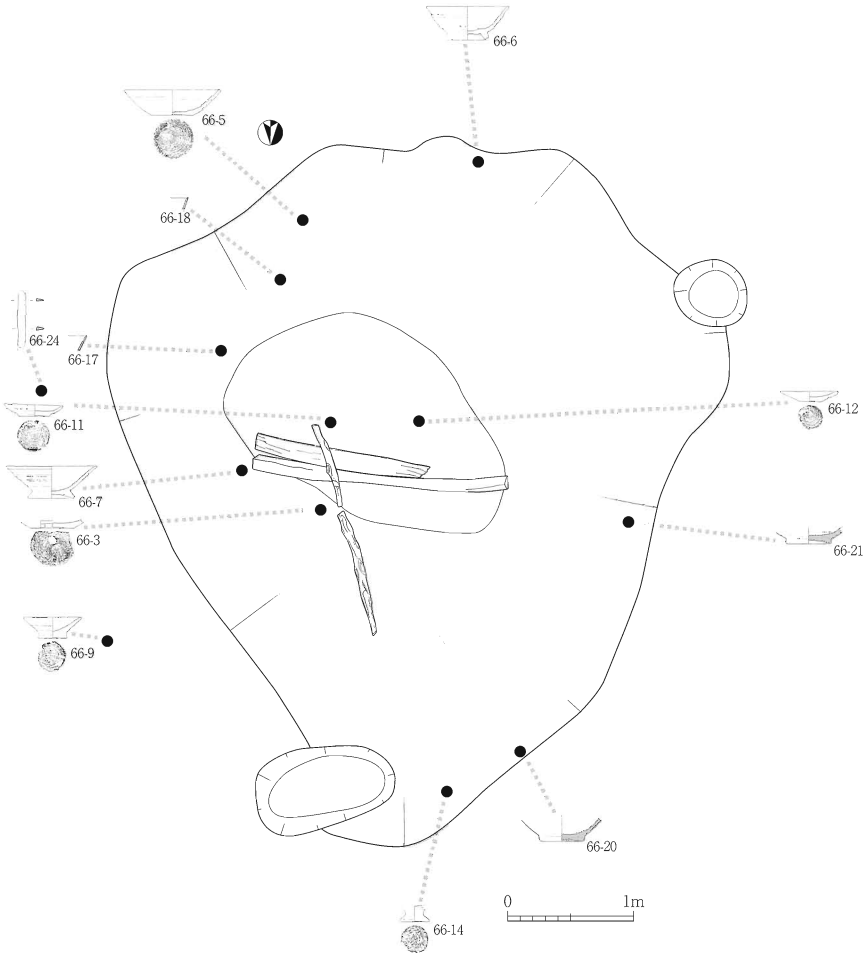
第 64 図　九景川遺跡Ⅲ区 SX02 実測図　S=1/60

まで降る遺構と考えられる。性格については明確にし得ないが、横架材を伴う杭列の存在からみて、排水溝的な性格の溝であった可能性が高いと考える。

(5) その他の遺構

SX02（第 64 図）

規模と形態　調査区南西部のほぼ中央で検出した土坑ないしは浅い落ち込み状の遺構である。平面形態は不整形な楕円形状を呈し、長径 5.6 m、短径 4.9 m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは 60㎝前後である。貝層は全部で 3 層認められたが、土坑全域を被覆するような状況ではない。床面付近は黒褐色粘質土が堆積し、床面中央付近に小規模な貝だまりを形成している。床面付近は湧水が多く湿潤であり、後述する弥生時代後期の井戸状遺構である SK14 は SX02 の床面で検出した。



第 65 図　九景川遺跡Ⅲ区 SX02 遺物出土状況　遺構：S=1/60、遺物：S=1/12、1/8

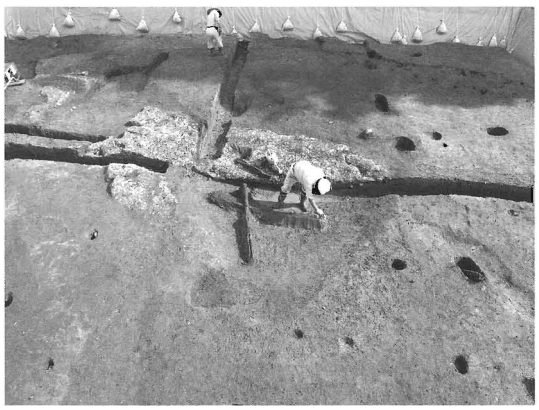


写真 46　SX02 貝層検出時

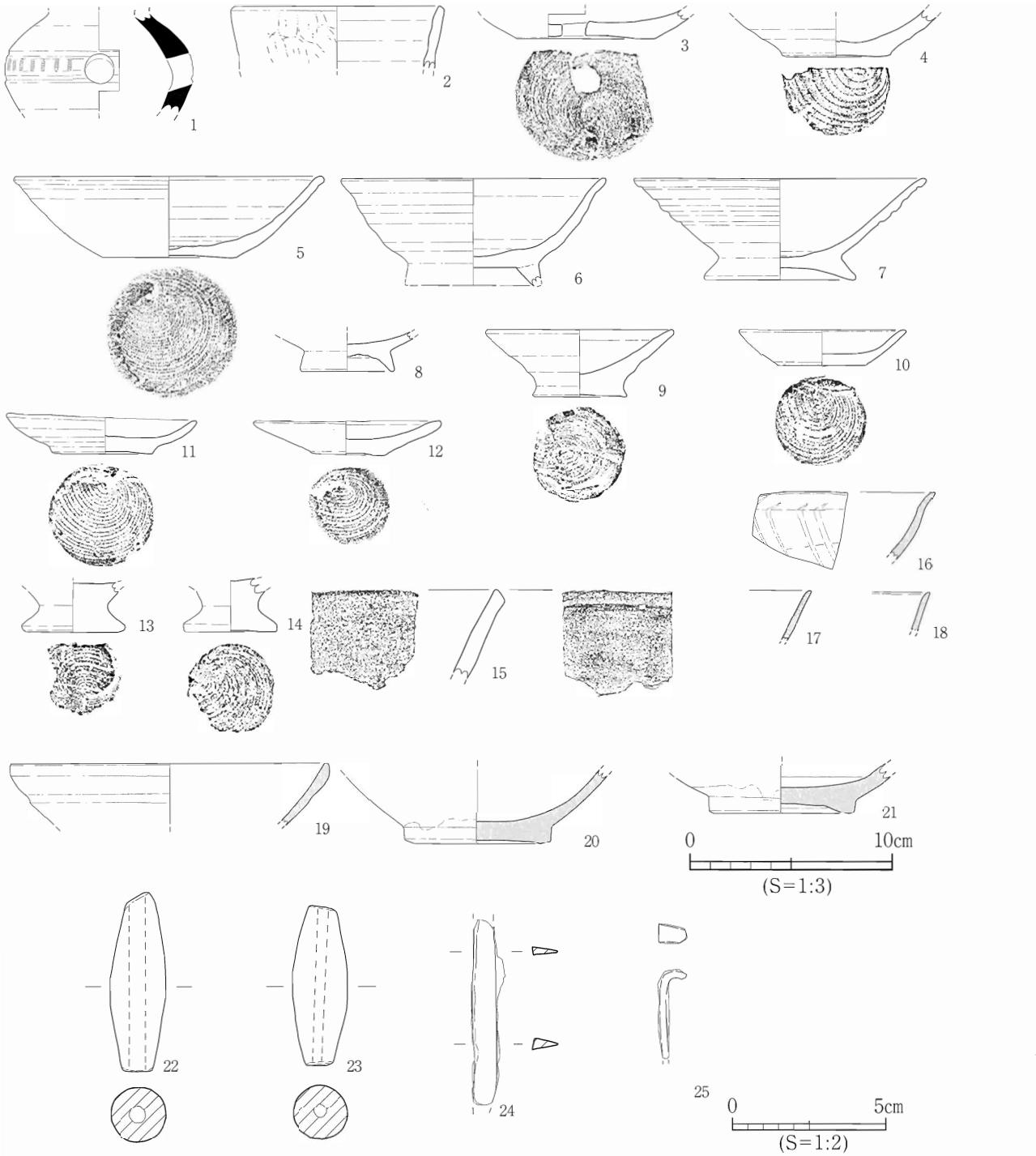
この黒褐色粘質土上に 15 ～ 20cm前後の厚さで黒灰色混貝土が堆積しており、その上層にはやはり黒褐色系の粘質土が堆積していた。

貝層中の土はすべて全量を洗浄・ふるいにかけて自然遺物の採取を実施したところ、貝の 99％以上は鹹水産のヤマトシジミであり、一部牡蠣、サザエなどが含まれていた。またヤマトシジミの成長線の分析から夏から秋にかけて採取された可能性が指摘されている。（第 8 章第 4 節参照）。

洗浄中には貝以外にも後述するように土錘等の漁撈具が若干見つかっているほか、獣骨などの自然遺物も若干出土している。特に、鯨骨の出土は当時の神門水海の様相を考える上で興味深い（第 8 章第 5 節参照）。

SX02 遺物出土状況（第 65 図）

土坑内からは貝類など自然遺物が大半で人工遺物の出土は少ないが、陶磁器、土師質土器、鉄器等が若干出土している。出土状況に特に偏りはなく、貝層以外の層序からも遺物が一定量出土している。また、土坑中央部床面付近からは板材及び枝材が出土しているが、何らかの構造物の痕跡とは考えにくい。

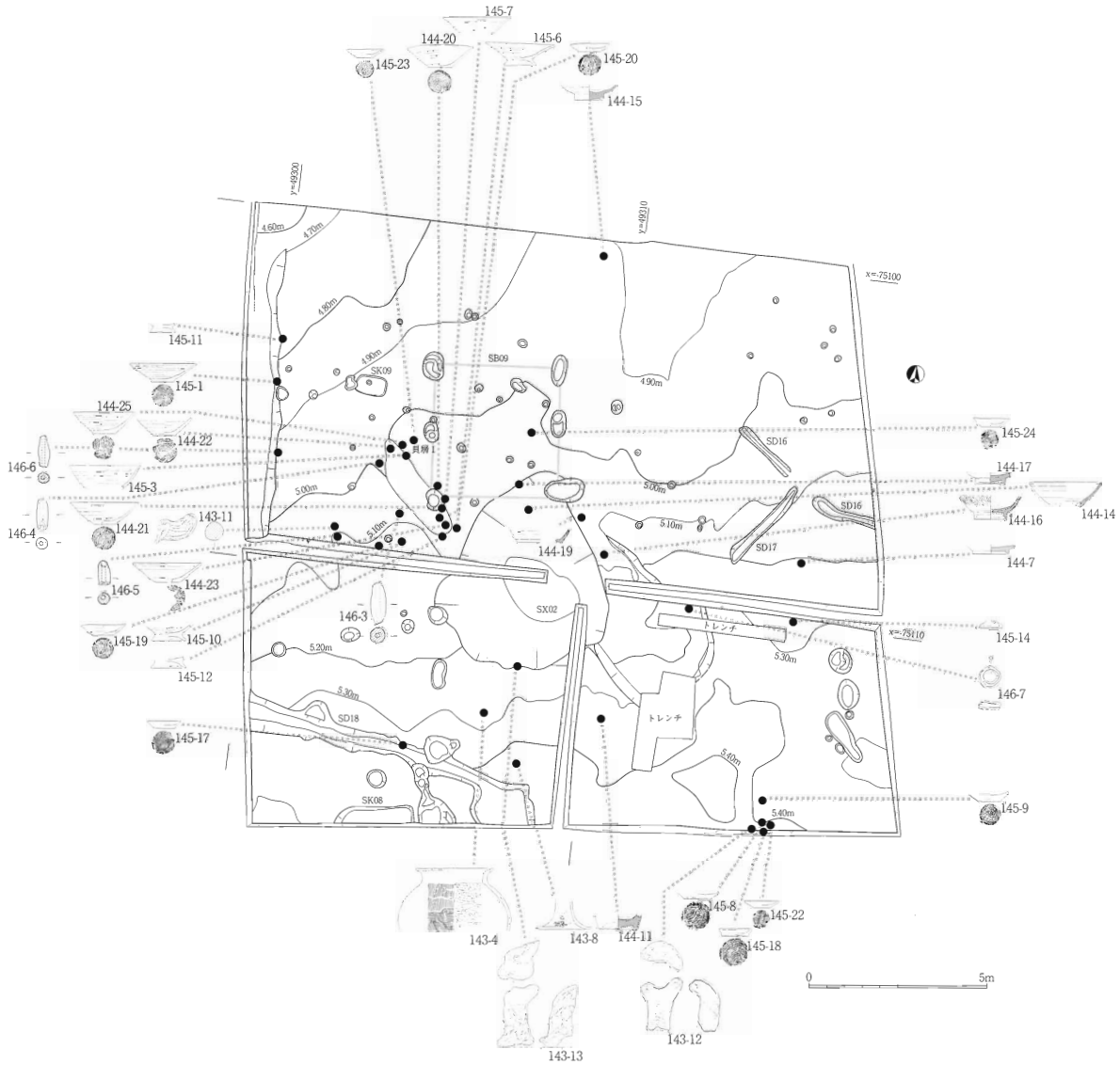


第 66 図　九景川遺跡Ⅲ区 SX02 出土遺物実測図　1 ～ 21：S=1/3、22 ～ 25：S=1/2

SX02 出土遺物（第 66 図）

第 66 図 1 は瑾である。胴部中央部を円孔を挟んで沈線で区画し、その内部に櫛状工具による刺突文を充填する。2 は製塩土器で内外面の指頭圧痕が顕著に残る。

3 ～ 14 は土師質土器である。3 は坏部底部で、底面に径 15㎜程の焼成前穿孔が認められる。5 は口径 15.2㎝、底径 6.4㎝を測り、底部からやや内湾気味に体部が立ち上がり、口縁端部は若干外にくびれる形状を呈する。6 は高台の付く坏で、体部は内湾気味に立ち上がった後、口縁部でやや外反する形状を呈する。7 は同じく高台の付く坏であるが、高台部、体部ともハの字状に大きく開



第 67 図　九景川遺跡Ⅲ区南西部中世遺構面遺物出土状況　遺構：S=1/200、遺物：S=1/16 他

写真 47　SX02 床面付近板材出土状況

く形状をなし、外面はヨコナデによる凹凸が著しい。9 ～ 12 は小皿に類するものであるが、ややバリエーションがある。9 は比較的径が小さくて厚い底部で器高が高いタイプのもので、小形の坏状の形状を呈するものである。10 ～ 12 は通常の小皿であるが、器形はそれぞれ若干異なっている。13・14 は高台付杯であるが、全体の形状は不明である。

15 ～ 21 は陶磁器である。15 は器形や胎土からみて、東播系須恵器鉢と考えられる。16 ～ 21 は白磁である。16 は太宰府分類のⅩⅡ類に属する椀で、体部が内湾しつつ口縁部が外反し、外面に縦篦花弁文が認められる。17・18 は白磁椀・皿の口縁部小片であるが同定は難しい。

19 はⅣ類椀で内外面に明緑灰色の釉が認められる。20・21 は底部資料で、高台の特徴からⅣ類椀と思われる。外面は明オリーブ色の釉が高台付近まで及んでいる。

22・23 は土錘で、ほぼ同形同大のものである。平面形は紡錘形をなし、長さ 5.3 ～ 5.9cm、幅 1.8 cm前後、重量 14.3 ～ 14.9 g を測るやや大型の土錘である。

24・25は鉄器である。24は切先及び茎を欠損しているが刀子片と考えられ、現状での長さ6.0cm、幅0.8cm、厚さ4mmを測り、断面は長三角形を呈する。25は小型の釘で先端部を欠損している。現状での長さ2.9cm、幅0.8cm、厚さ4mmを測り、断面は矩形を呈している。頭部はL字状に折り曲げられ、平坦面を形成している。

写真48　SX02貝層堆積状況

遺構の性格と年代　遺構の年代は、出土した陶磁器や土師質土器の年代観から12～13世紀頃と推定される。

当遺構の性格については、貝層の存在から小規模な貝塚であることは間違いないものの、貝の出土量は必ずしも多くはない。今回、SX02出土貝の全量を回収し分析し、4万個のヤマトシジミを確認したが、そのカロリーは成人男性の7日分、タンパク質の25日分にしかすぎないという（第8章第4節）。こうした点からみて、当遺構内の貝層の形成は、上長浜貝塚のような専業的なシジミの採取活動により形成されたものとは到底考え難い。当遺跡の場合、当遺構以外にも、貝層または貝だまりはⅣ区を中心に幾つか散見される。こうした貝層の点的な分布状況は、貝殻の投棄が当遺跡の場合には特定の廃棄場所を占有して集中的な廃棄行為を行っていたのではなく、一定期間の間に散発的な廃棄行為を行っていた結果によるものと考えた方が理解しやすい。SX02付近は、その下層に井戸（SK14）が存在することからもわかるように、もともとやや窪地で湿潤な環境であることから、比較的まとまって貝層が残ったものと理解される。

写真49　SX02貝層検出時近景

こうした点からみて、これらの貝層は、日常における消費活動による廃棄行為がかなりのウエイトを占めていたものと理解されるものの、土錘や刀子などの漁撈具の出土からみて、それにある程度の漁撈行為による廃棄分が含まれていた可能性も全く否定はできない。

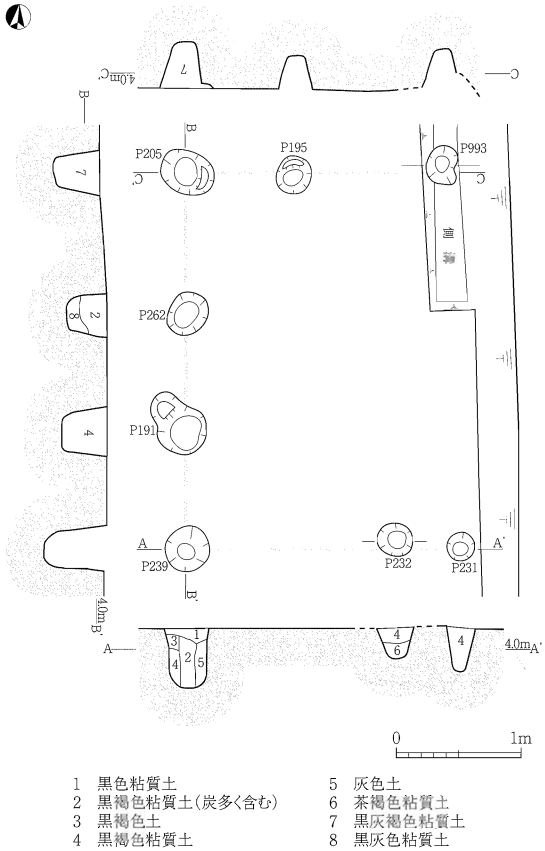
貝層1（第57図）

規模と形態　SX02の北西で検出した貝だまりで、貝層の範囲は3.0 m × 0.8 mを測る。SB09の南西隅柱穴を被覆した状態で検出した。

遺構の性格と年代　位置的関係からみて、SX02と一連の廃棄行為により形成された貝層と考えられることから、12～13世紀頃のものと想定される。

(6) Ⅲ区南西部3層遺物出土状況（第67図）

第67図にⅢ区南西部からの遺物出土状況を示した。白磁、土師質土器等、12世紀を中心とする遺物が中心であるが、古墳時代の遺物も一定量出土している。



第68図　九景川遺跡Ⅲ区SB05実測図　S=1/60

中世に属する遺物の大半はSB09やSX02などの位置する南西部調査区中央部付近、特にSB09南西部付近から比較的まとまって出土しているのに対し、古墳時代に属する遺物は調査区南半部にほぼ限定される傾向が認められた。個々の遺物の詳細については後述する。

第3節　6層上面検出遺構の調査

ここで報告する遺構群はⅢ区全域の6層上面で検出された遺構群であり、そのほとんどは古墳時代中期及び古代に属するが、Ⅲ区南西部以外の箇所については6層より上層から掘り込まれた遺構、すなわち中世に属する遺構も若干含まれる。以下、所属する時代を問わず遺構の種別・検出順に順次報告する。

(1) 掘立柱建物

SB05（第68図）

規模と形態　Ⅲ区東端で検出した建物で、東側は調査区外へと続いている。検出した範囲での構造は、梁間3間、桁行2間以上で、梁間3.0 m、桁行2.2 m分を測る。なお、桁行は柱穴間の距離が南北で大きく異なっていることから、中間に位置する柱穴は異なる建物に属する可能性もある。柱穴は径25～40cmの円形のもので、大きさにややばらつきがある。柱穴の深さは深いもので45cm前後を測り、覆土は黒褐色～黒灰色系の粘質土が堆積しており、P239では柱痕跡が土層観察で確認できた。

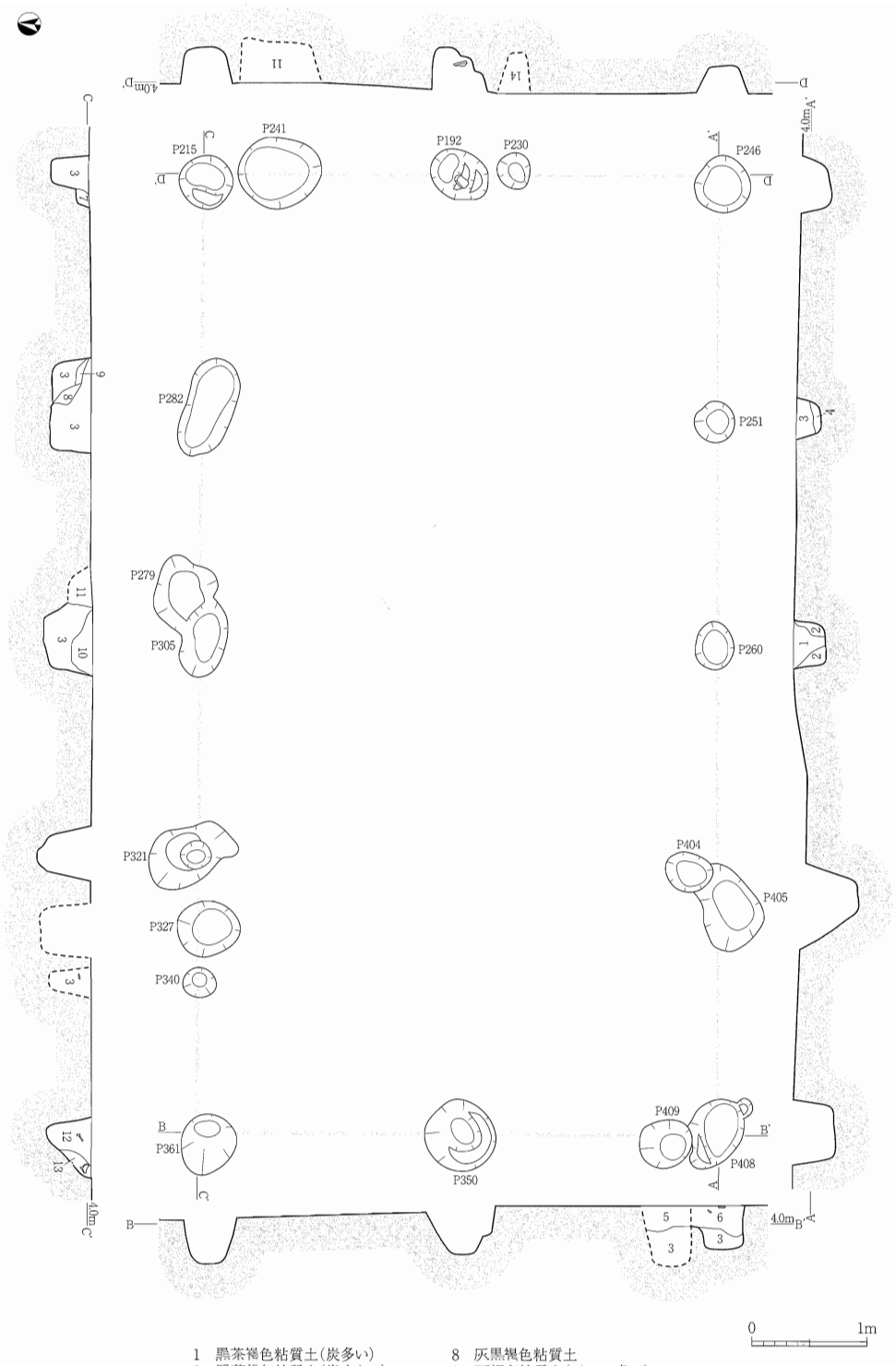
SB05出土遺物（第73図）

第73図1はSB05のうち、P195から出土した須恵器蓋である（第68･71図）。復元径17.8cmを測り、天井部を欠いている。扁平な器形を呈し、口縁部はわずかに下方へ痕跡的に屈曲し、その内面に沈線が認められる。青木編年Ⅲ期末～Ⅳ期に属する資料と思われる。

遺構の性格と年代　遺構の年代については出土した須恵器から8世紀末～9世紀前半の年代が想定されるが、先に述べたように、この遺物は当建物に伴わない可能性もあり、断言はできない。しかし当建物の周辺で検出された他の建物群とほぼ同一主軸を指向している点からみて、他の建物とほぼ同様な年代、すなわち先に述べた時期に比定して大きな問題はないと考える。

SB06（第69図）

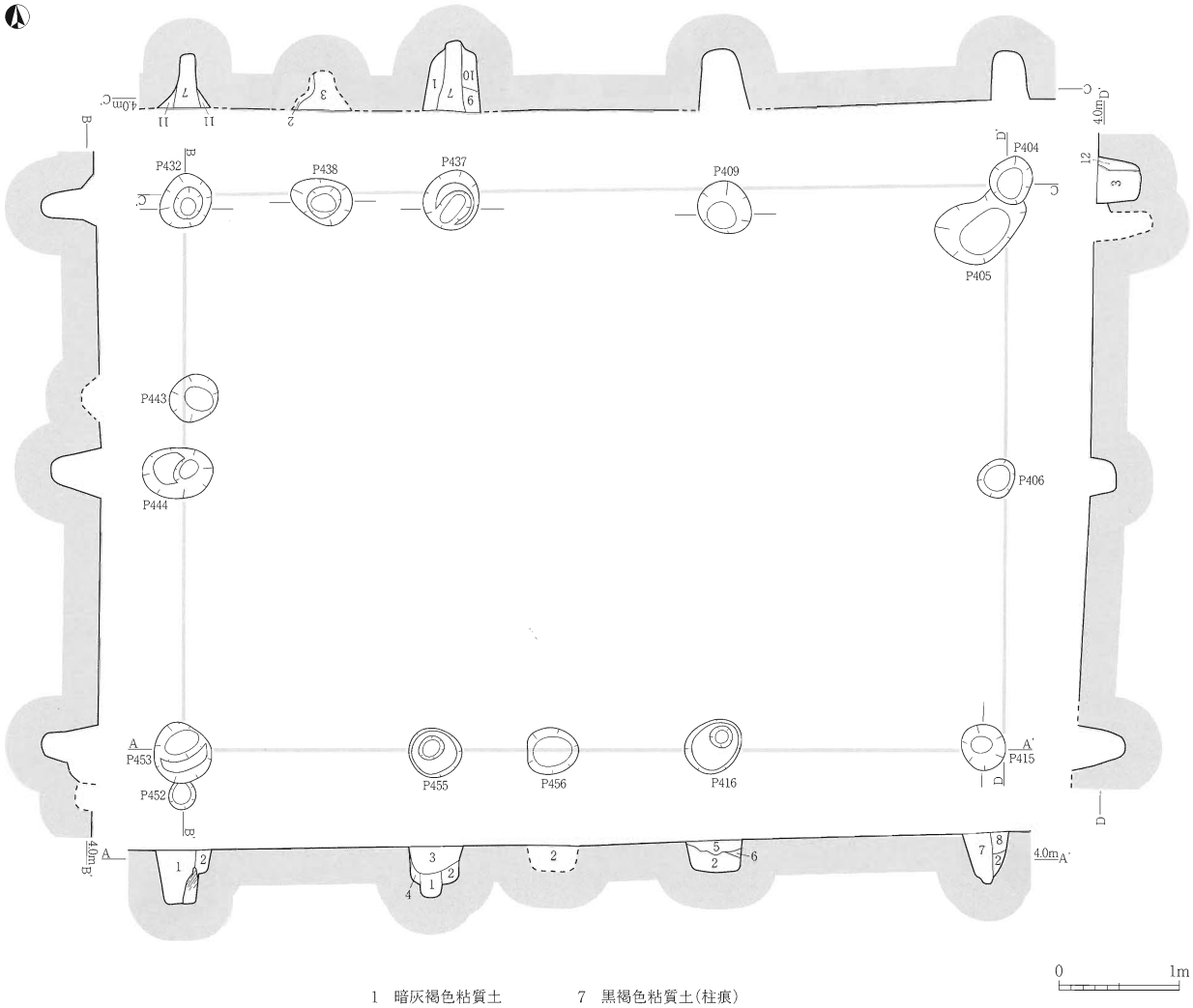
規模と形態　Ⅲ区北東部で検出した掘立柱建物で、今回の調査ではSB08に次ぐ規模を測る建物である。ほぼ東西に主軸をとり、梁間2間、桁行4間の構造で、建物の規模は、梁間4.5 m、桁行8.2 mを測る。柱間の距離は梁間・桁行ともで2.1 m前後のものが多く比較的均等で、先述のSB05の様相とは大きく異なる。柱穴は円形または楕円形を呈し、径40～60cmとやや幅が認められる。柱穴の深さは30～40cm前後のものが大半を占める。柱穴の覆土は黒褐色～灰褐色系の粘質土が堆積していたが柱痕跡は土層では確認できていない。



第69図　九景川遺跡Ⅲ区SB06実測図　S=1/60

SB06出土遺物（第73図）

SB06は柱穴内から遺物が幾つか出土している。遺物は、P350、P321、P405、P361等のピットから出土した（第69・71図）。第73図2は口径10.3cmのやや小型の坏である。体部はほぼ直線的に立ち上がり、高台は底部縁辺部付近に取り付く。底部はヘラ切りのちなでている。3は長く立ち上がる坏で、口縁部は緩やかに外反する。4は2とほぼ同形の坏で口縁部を欠く。5は皿で口縁部



1 暗灰褐色粘質土
2 灰褐色粘質土
3 黒褐色粘質土
4 灰褐色土
5 灰色粘土(しまりない)
6 暗灰褐色土
7 黒褐色粘質土(柱痕)
8 黒灰色粘質土
9 暗黄灰色粘質土
10 暗オリーブ色粘質土
11 暗褐色粘質土
12 黒褐色粘質土(橙色ブロック含む)

第70図　九景川遺跡Ⅲ区SB07実測図　S=1/60

はS字状に緩やかに外反する。8は坏部が深い大形の坏で、高台が低く、底部外縁付近に取り付いている。9は土師器皿であるが、現状では内外面に赤彩は確認できない。

遺構の年代　SB06出土土器は、高台付坏の直線的な器形や高台の貼り付け位置、外反する皿の形態的特徴からみて、概ね青木編年Ⅳ期、9世紀前葉を中心とする時期と考えられ、この時期までには廃棄された建物と考えられる。

SB07（第70図）

規模と形態　SB06の南西部で検出した建物で、一部SB06と重複しており、特にP409はSB06のP408と切り合っているが、明確な前後関係

写真50　Ⅲ区北東部古代建物群（北東から）

第 71 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB05 ～ 08 付近ピット内遺物出土状況

は土層観察上では確認できなかった。

主軸は SB06 と同じ東西に主軸を置くが SB06 とは若干ずれている。構造は梁間 2 間、桁行 3 間であるが、梁間の柱間が SB06 よりやや幅広となっている。規模は梁間 4.3 m、桁行 6.7 mを測る。柱穴はいずれも円形または楕円形で、P453 では柱材が残存していたとともに、土層観察から柱痕が観察できるものもあり（P437、P432）、そこからの復元される柱材の径は 15 ～ 20cm前後である。柱穴の埋土は灰褐色系の粘質土が主体で、上述のように柱痕らしき土層は黒褐色粘質土として観察された。柱穴の深さは深いもので 45cm前後である。

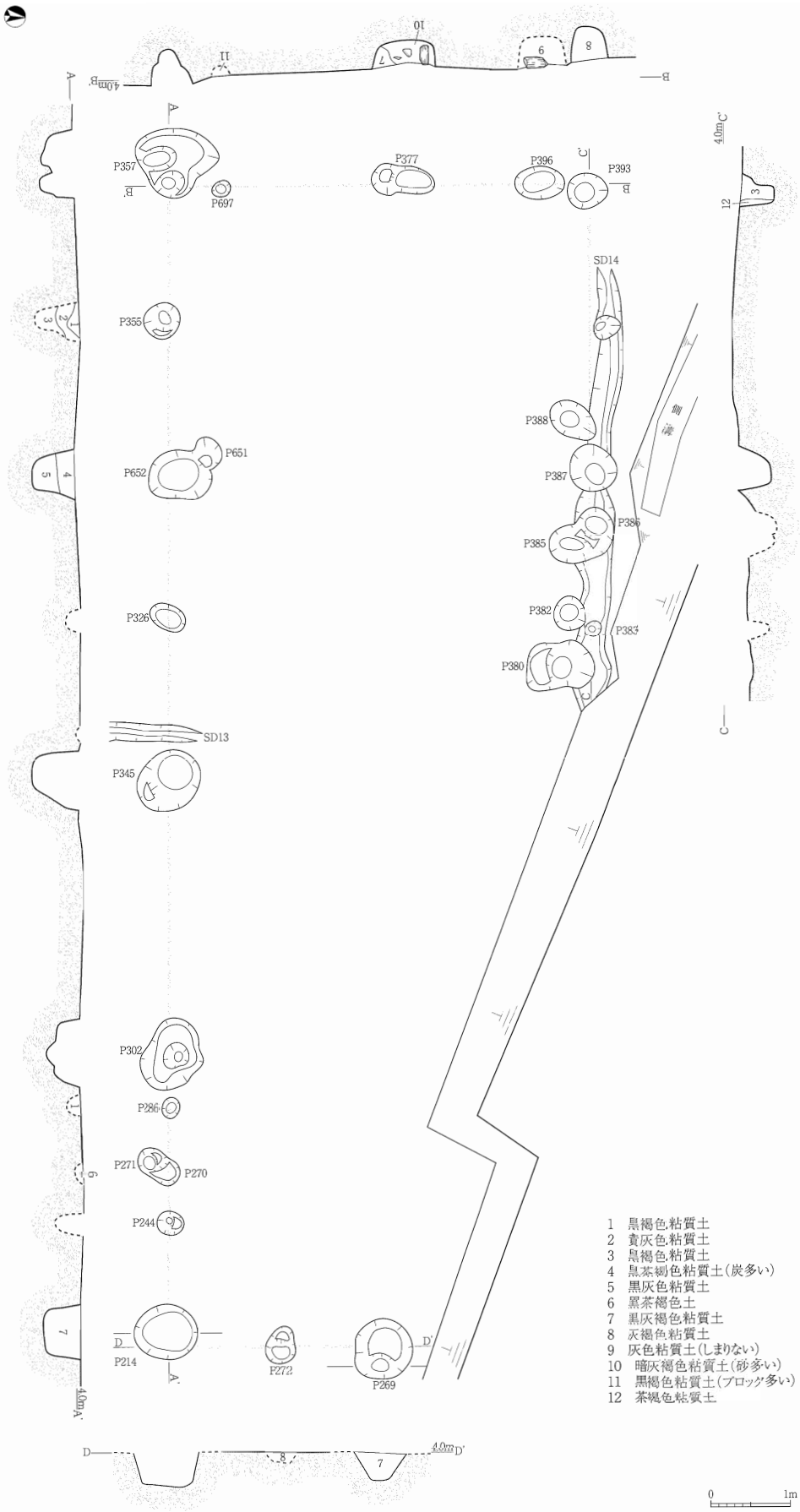
SB07 出土遺物（第 73 図）

P409 から 1 点土師器が出土している（第 70・71 図）。第 73 図 10 は復元径 12.0cm前後を測る赤彩土師器である。体部は底部との屈曲が比較的明瞭で、ほぼ直線的に立ち上がり、わずかにＳ字状のカーブを残している。内外面に赤彩を施すが剥離のため範囲は不明。

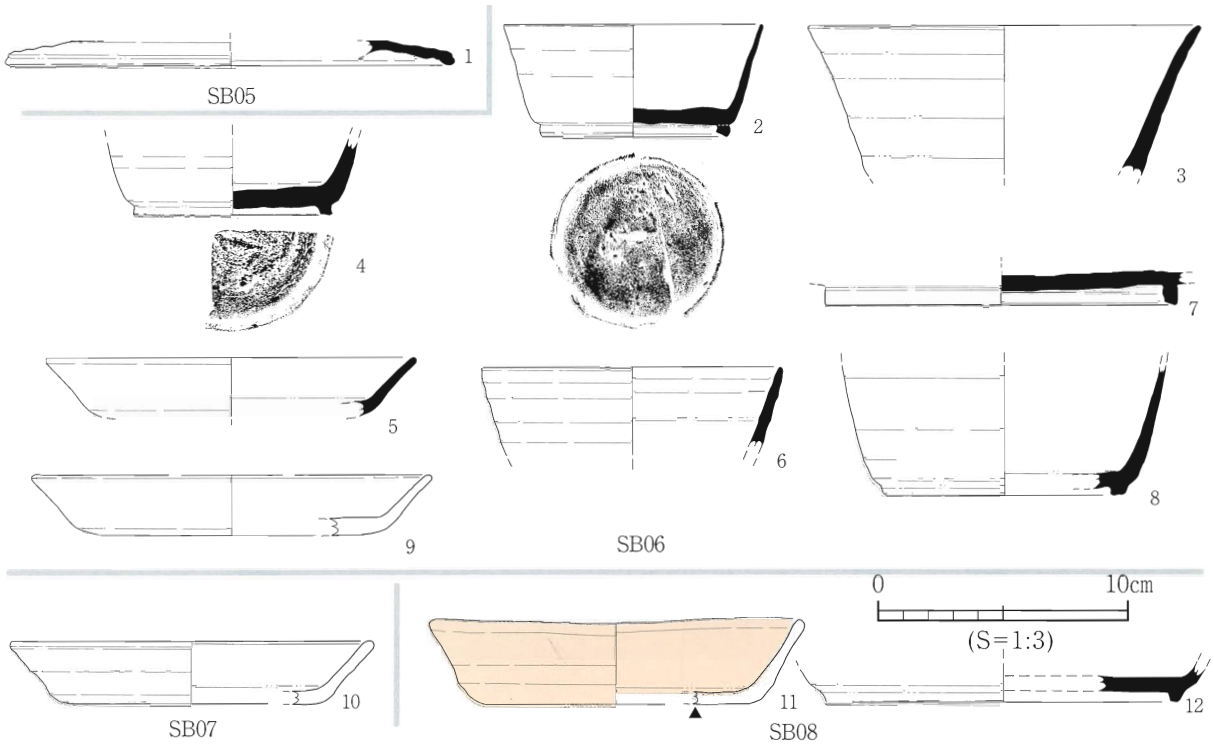
遺構の性格と年代　SB07 は SB06 と重複している点から建物構造や規模はやや異なるものの、SB06 と同様な性格の建物であった可能性が高い。いずれが先行するかは今回の調査では確認できなかったが、出土遺物は SB06 とほぼ同時期である青木Ⅳ期に比定することができ、あまり時期を隔てない時間幅での建て替えであったと推察される。

SB08（第 72 図）

規模と形態　Ⅲ区北西部で検出した建物跡で一部は調査区北側へ延びている。他のⅢ区北東部古代建物群と同じく、東西に主軸をおいた建物である。構造は梁間 2 間、桁行 4 間分を確認したが、梁



第72図　九景川遺跡Ⅲ区 SB08 実測図　S=1/80



第73図　九景川遺跡Ⅲ区SB05～08出土遺物実測図　S=1/3

間については調査区北側が調査区外へ延びている関係から3間以上あった可能性も残されている。

規模は、心々距離で梁間が5.2 m、桁行が14.5 mを測る。柱穴は平面形は円形で比較的大型なものが多く、80cm前後を測る。柱穴の深さは検出面から50cm前後で、覆土は黒褐色～灰褐色系の粘質土が堆積していた。柱材または柱痕らしき痕跡は明確なものは確認できていない。

SB08出土遺物（第73図）

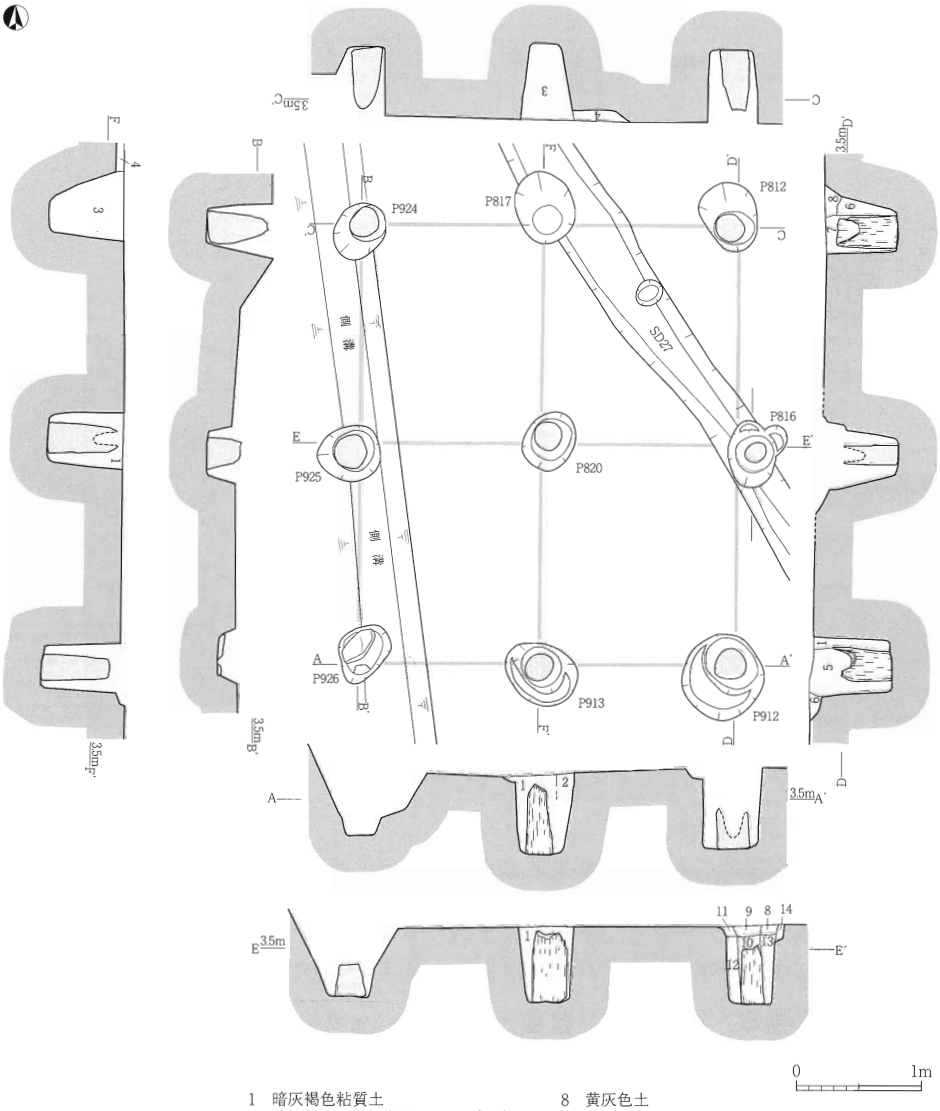
SB08からの出土遺物は、いずれもP357からの出土である（第71・72図）。第73図11は土師器皿で口径14.8cm前後を測る。わずかではあるが内外面に赤彩の痕跡を残し、底面にも赤彩がわずかに観察される。比較的大きな底部から体部が直線的に立ち上がるものの、緩やかなS字状のカーブを残している。口縁部内外面はヨコナデ、底面はユビオサエで仕上げている。12は須恵器高台付皿の底部で、底部外面付近に高台を貼り付ける資料である。底部はなでて仕上げている。

遺構の性格と年代　SB08は桁行が14mを越えるという規模や、Ⅲ区北東部古代建物群の中央付近に存在していたと推定される点からみて、当遺跡の古代集落における中心的施設であった可能性が高い。年代については、11はやや古い様相を残すが、他のⅢ区北東部建物群との関連から青木編年Ⅳ期頃の建物と推察される。

写真51　SB08

SB10（第74図）

規模と形態　Ⅲ区北西部で検出した掘立柱建物跡で、



1 暗灰褐色粘質土
2 暗灰褐色粘質土(黄色ブロック多い)
3 黒灰色粘質土
4 暗黄褐色粘質土
5 暗灰褐色土
6 暗茶褐色粘質土
7 灰褐色粘質土(柱痕)
8 黄灰色土
9 暗褐色土
10 黒灰色粘土
11 暗黄褐色土
12 暗黄灰褐色土
13 灰褐色土
14 黄褐色土

第74図　九景川遺跡Ⅲ区SB10実測図　S=1/60

西側柱穴列の一部は調査区側溝を掘削する際に失われている。また、建物の一部はSD27と切り合っており、土層及び平面観察からSD27が先行する。

建物は2間×2間の総柱建物である。Ⅲ区で検出した建物で確実に総柱建物と断定できるのはこれだけである。建物の平面形はほぼ正方形状を呈し、規模は3.5 m×3.0 mと南北方向がやや長く、建物主軸もほぼ南北軸をとる。平側は柱間隔が1.8 mでほぼ揃っており6尺の設計であった可能性が高い。一方妻側の柱間隔はややはっきりしないが1.5 m前後に集中

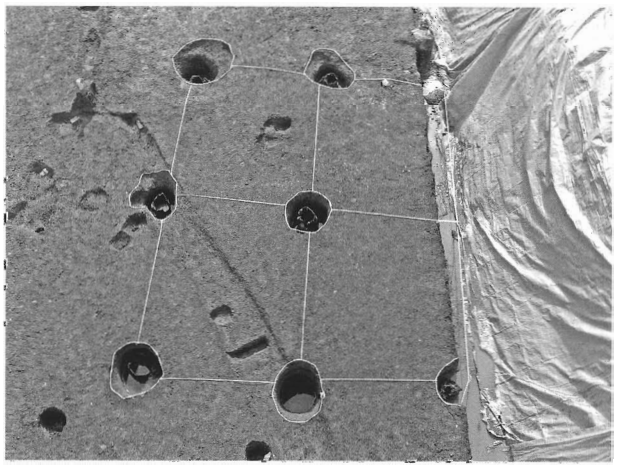


写真52　SB10

することから5尺であった可能性がある。

柱穴は円形及び楕円形を呈し、径60cm前後を測る。覆土は黄色地山ブロックを多く含んだ灰褐色系の粘質土が裏込めとして使用されていた。

当建物で特筆される点は、北側束柱を除くといずれも柱材が残存していた点で、遺存状況は比較的良好であり、ある程度本来の柱材の形状をとどめているものと推定される。柱材は径20～30cmであり、柱材はいずれも底部を平坦に仕上げている。また、建物の柱配置の違いによって柱材の大きさが異なるような様相は現状では認められない。

また顕微鏡観察の結果、柱材はいずれもクリ材が使用されていたことが明らかになっている（第8章第3節参照）。

なお、SB10の柱穴覆土内からは弥生時代後期～古墳時代中期の遺物細片が若干出土しているが、周辺の遺構の様相から混入品である可能性が高い。

遺構の性格と年代　SB10の建築年代を明確に示す出土遺物はないが、遺存していた柱材6点についてAMS年代測定を実施した結果、AD640～870年という結果が得られた。これ以上の年代の限定化は困難であるが、当調査区では7世紀代及び9世紀後半まで降る遺物は僅少なため、現時点では8世紀段階の建物と考えておきたい。

建物の性格としては、総柱建物という構造からみて倉庫または祭祀関連施設である可能性があるが、心柱に特異な造作は認められないことから前者である蓋然性が高い。

SB11（第75図）

規模と形態　SB10より40m南、Ⅲ区南西に位置し、前述のⅢ区南西部中世遺構面を除去し基盤層上面で検出した建物である。

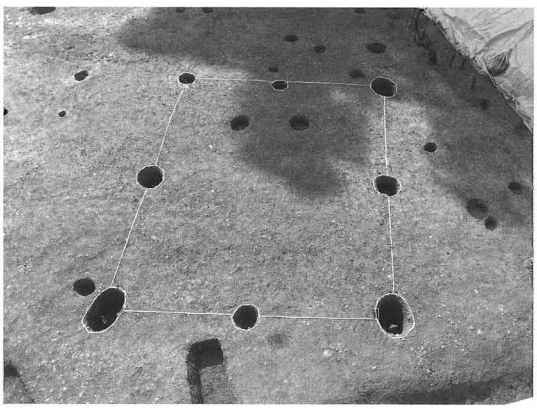


写真53　SB11

建物の主軸は北からやや東にふれた方向に位置しており、これまで述べてきたⅢ区北東部古代建物群とは趣を異にする。建物の構造は梁間2間、桁行2間であり、梁間がやや幅広な点がこれまで述べてきた古代の建物跡と若干異なる点である。

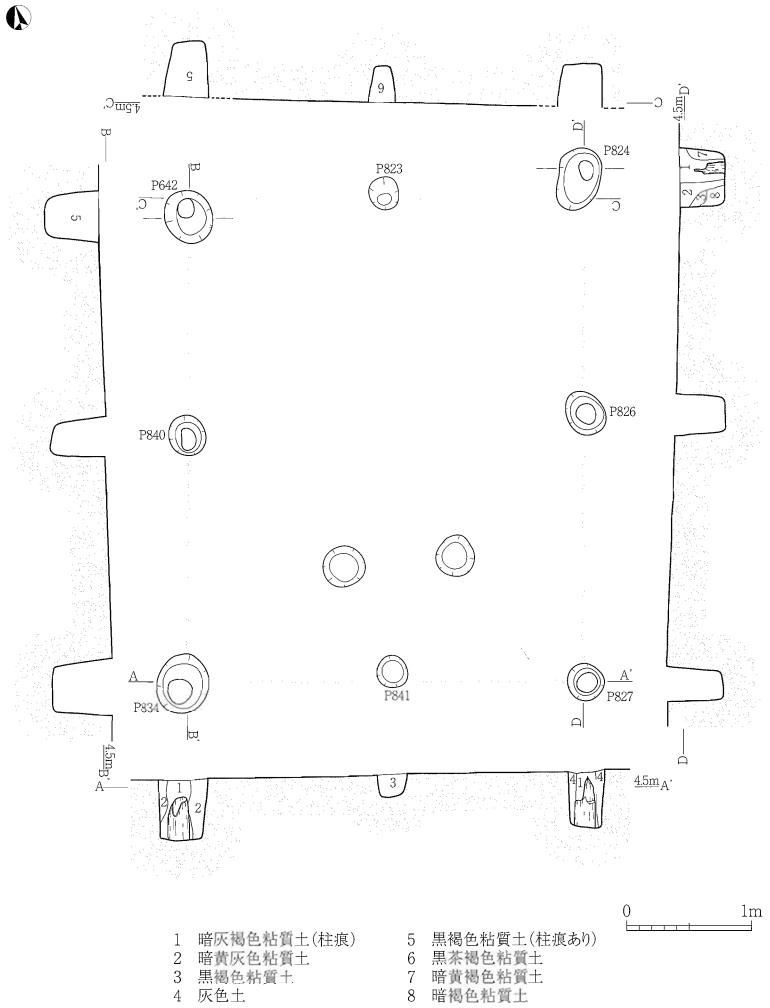
柱穴はいずれもほぼ円形をなし、径40cm前後、深さ45cm前後を測るが、南北両妻側中央の柱のみが、径24cm、深さ20cm前後と小規模で浅くなっており、いわば通常の1×2間の建物の幅を広げ、梁間に束柱を設けたかのような構造をとる。

建物の規模は、桁行4.1m、梁間5.4mで柱間隔は梁間、桁行ともほぼ揃う整った建物である。

SB10と同様に当建物についても柱材が良好に遺存していた。柱材は先に述べた妻側中間柱穴以外では程度の差こそあれ、柱材または柱が腐朽した痕跡が平面的に検出可能な状態であった。

写真54　SB10柱材

柱材は径20cm弱を測り、顕微鏡による樹種鑑定を実施した結果、劣化が著しく断定には至っていない



第75図　九景川遺跡Ⅲ区SB11実測図　S=1/60

ものの、分析した6本の柱材いずれもがヒノキ属であったと推定されている。

SB11出土遺物　図示していないが、P824から大東式の土師器甕の細片が出土している。

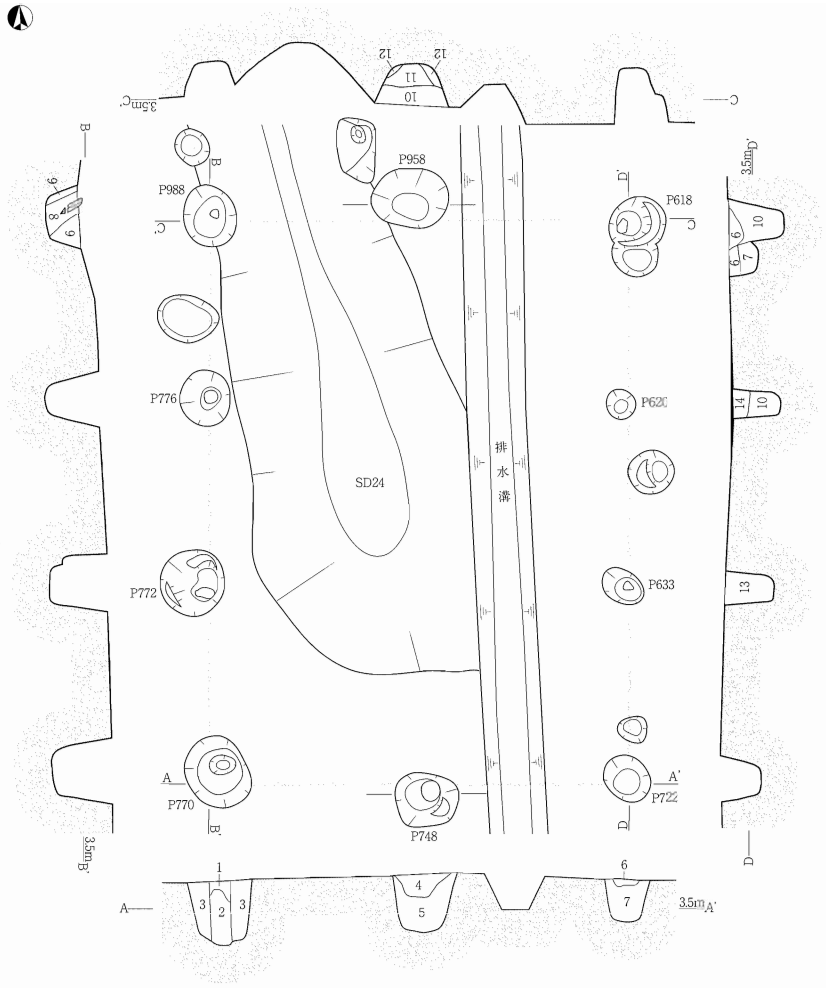
遺構の性格と年代　後述するように、Ⅲ区内の古代に属する遺構はSR04以北に限定される。また、SB11は古墳時代中期前葉の土器が投棄されていたSR03に隣接し、西側30mにはSI02をはじめとする当該期の住居址群が位置し、SR03を隔てた東側にはやはり古墳時代中期前半の加工段2～4が存在する。こうした位置関係からみて当遺構が古墳時代中期に属する遺構である可能性は高く、P824出土の土師器甕の年代も小片ではあるがこれを傍証する資料である。

しかし、柱材のAMS年代測定値ではAD130～250年と、かなり古い値が出ている。確かにSB11の東南15m付近には弥生時代後期末の井戸であるSK14が存在することから、弥生時代後期～古墳時代前期初頭に属する可能性もないわけではない。ただ、当地方における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての掘立柱建物は梁間1間のものがほとんどであり、梁間2間の居住用建物は古墳時代中期から一般化する点からみても（島根県教育委員会1996）、当遺構を弥生時代後期に比定することには若干の躊躇を覚える。ここでは両時期の可能性があり、周辺の遺構の様相からは古墳時代中期前葉の可能性がより高いと考えておく。

SB12（第76図）

規模と形態　Ⅲ区北側ほぼ中央に位置する掘立柱建物で、中世の大溝であるSB12によって中央部をかなり破壊されているが、建物全体の構造を把握することは可能である。建物主軸をほぼ南北方向にむける梁間2間、桁行3間の構造で、SB07をやや細長く小型化した建物である。建物の規模は、梁間3.3m、桁行4.5mを測る。柱間隔は妻側はやや不揃いだが平側は150cm前後（5尺）でほぼ整っている。

柱穴の平面形はほぼ円形状を呈し、径が50cm前後、深さ50cm前後のものが多いが、側柱では径25cm前後の小型の柱穴も含まれる。また大半の柱穴には柱材が残存もしくはまたは柱痕が断面土層上で観察された。柱材は遺存状況が悪く、本来の大きさ・形状は不明であるが、土層観察上では径



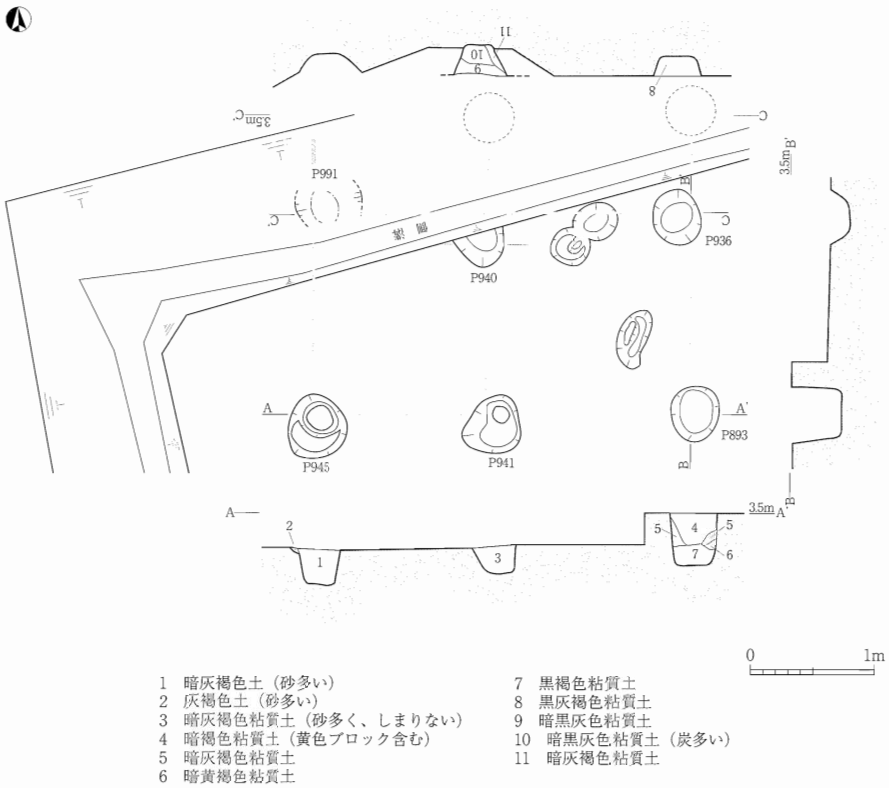
第76図　九景川遺跡Ⅲ区SB12実測図　S=1/60

20cm前後の柱痕が観察されている。柱穴のなかには黒褐色系または灰褐色系の粘質土が堆積していた。柱材の樹種は、P988がサクラ属、P618がノグルミ、P633がケヤキとすべて異なっており、同一樹種であったSB10・11とは対照的なあり方を示している。

SB12出土遺物（第80図）

遺物は各ピットから細片が出土しているが、弥生土器～古墳時代中期の土師器など混入品が多い。第80図7は東側側柱であるP620から出土した土師器皿である。土師器としたが、赤彩痕は全く認められず、器形からみても須恵器の焼成不良品である可能性も否定できない。口縁部はほぼ直線的に開く形状であるが、高台は底部外周のやや内側に取り付いている。青木Ⅲ期に属する資料と思われる。

遺構の性格と年代　出土遺物は青木Ⅲ期前後に位置づけられ、Ⅲ区北東部古代建物群より先行する可能性がある。なお、AMS年代測定ではAD670～775年と、出土土器と整合的な値が出ている。1点だけの土器から建物の年代を論ずることは危険ではあるが、当建物がⅢ区北東部古代建物群から西へやや外れた箇所に位置し、建物主軸も90°違えている点も、他の建物群との間に若干の時期



第 77 図　九景川遺跡Ⅲ区 SB13 実測図　S=1/60

差を考慮するのに好都合な要素ではある。

SB13（第 77 図）

規模と形態　調査区北西隅に位置する建物で、調査区内では梁間 2 間、桁行 1 間分を検出したが、北側はさらに調査区外に広がる可能性がある。現状での規模は梁間 2.9 m を測る。

柱穴は円形もしくは楕円形で径 40 ～ 50cm、深さは深いもので 40cm前後を測る。柱穴の覆土は灰褐色系の土が堆積していた。また、P941、P945 では柱穴床面付近から土壌化した柱腐朽材を検出しており、P941 はクリ材と判定されている。

SB13 出土遺物　SB13 からは、細片のため図化していないが、P945 から弥生時代終末期の薄甕細片が数点、P893 から同じく弥生時代後期の薄甕細片と赤彩土師器 1 点が出土している。この赤彩土師器は底面まで丹塗りが及ぶタイプのものである。

遺構の性格と年代　SB13 柱穴出土遺物は弥生時代後期末と奈良時代の 2 時期が認められ、いずれかの時期に属する可能性が高い。当建物の周辺からは弥生終末期の土器が比較的まとまって出土しており（第 138 図）、この時期に属する可能性も考慮されるが、P941 の AMS 年代測定値は AD660 ～ 780 年であり、クリ材という SB10 と共通する柱材質や P893 出土の赤彩土師器の年代観とも合致している。この点から、赤彩土師器の示す年代観、青木Ⅱ～Ⅲ期前後、8 世紀中～後葉を中心とする時期の建物と考えておきたい。

性格については、建物の全容がわからないため不明といわざるを得ないが、SB10 のほぼ真北に位置し、棟筋がほぼ同一直線上に並んでいる点、梁間規模が SB10 とほぼ一致する点、さらに確認できた柱材が SB10 と同じクリ材であった点から考えて、SB10 と同様な 2 間 × 2 間の総柱建物の南半部である可能性が現段階では最も高いと考えている。

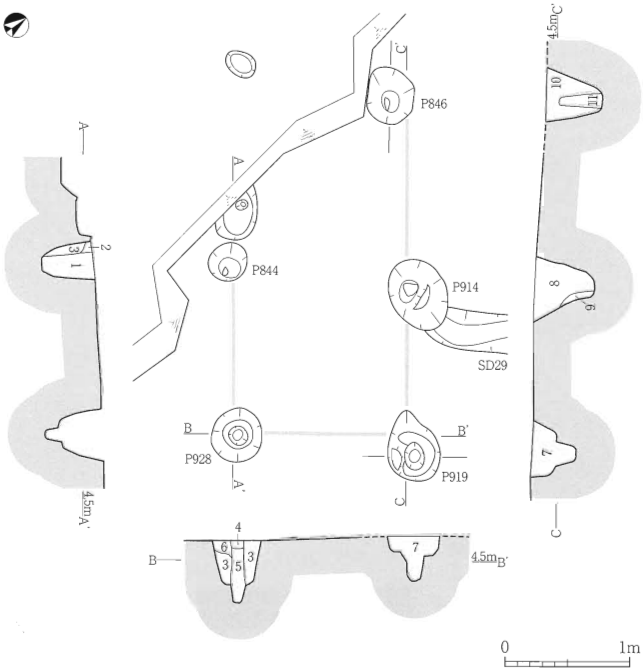
SB14（第 78 図）

規模と形態　Ⅲ区南半部中央で検出した掘立柱建物で、北にはSR04、南には加工段２～４が隣接している。最近の攪乱により西側はかなり失われているが、現状では梁間１間、桁行２間の小規模な建物跡に復元される。

方位は北西から北から約53°西へ振れた方向で古代の建物群とは全く異なり、後述する加工段３・４の主軸とほぼ一致している。建物の規模は梁間1.4ｍ、桁行2.8ｍを測る。

柱穴はいずれも円形で径40cm前後、深さ40～50cmを測る。P844、P928では柱材がわずかに残っており、P846では柱痕が断面土層上で観察できた。

また、P919、P928は二段掘状を呈しており、下段は柱材の大きさを反映しているものと想定される。これらから復元される柱材は径12cm前後とかなり細い材であったと考えられる。



1　暗灰褐色粘質土（柱材あり）
2　暗褐色粘質土
3　暗黄灰色粘質土
4　暗黄灰色粘土（地山ブロック多い）
5　灰色粘土（柱痕木あり）
6　灰色粘質土
7　黒灰色粘質土
8　黒褐色粘質土
9　暗黄灰色土
10　暗黒褐色粘質土
11　暗茶褐色粘質土

第78図　九景川遺跡Ⅲ区SB14実測図　S=1/60

SB14出土遺物　小片のため図化していないが、P914、P919、P928、P844からそれぞれ大東式前後と思われる土師器甕の細片が数点ずつ出土している。

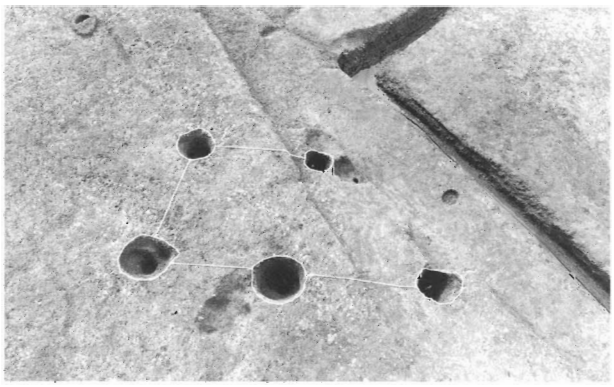


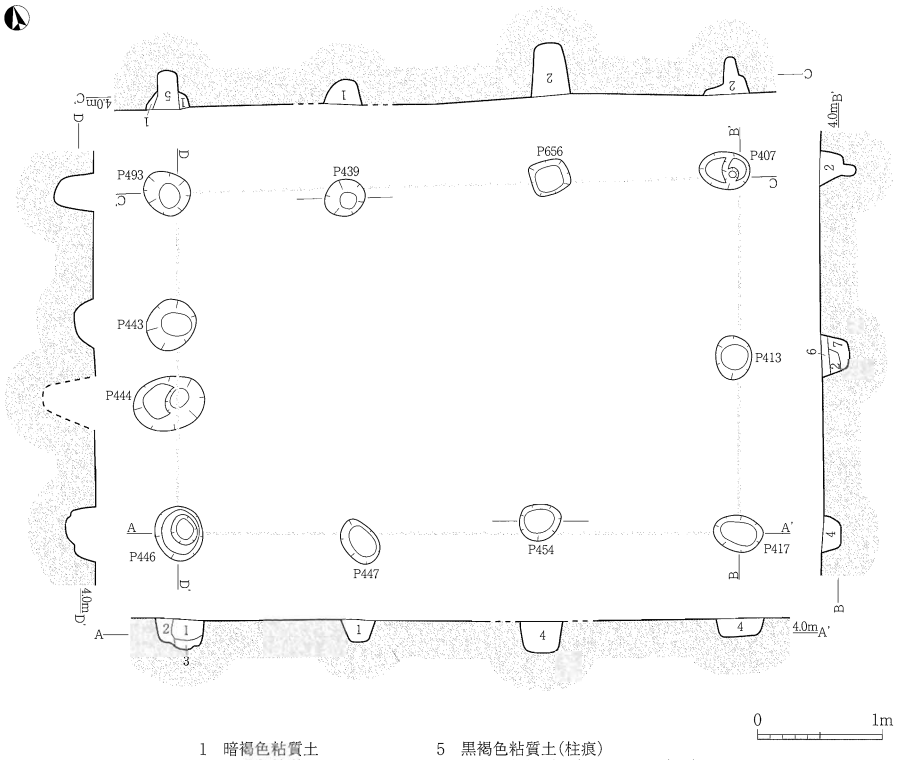
写真55　SB14

遺構の性格と年代　SB14については、出土遺物や周辺の遺構との位置的関係、加工段３・４の主軸と一致する点からみて、古墳時代中期前半に属する建物であった可能性が高い。P928出土の柱材から得られたAMS年代測定値はAD565～650年と、土器から想定される年代より200年近く新しい値が出ており、検討を要するものの、出土土器が古墳時代中期にほぼ限定される点から当該期の建物と理解しておきたい。

なお、建物の性格に関しては、その規模から居住用施設とは想定しがたく、物置などの付属的な施設であったと考えられる。

SB15（第79図）

規模と形態　Ⅲ区北東部古代建物群に属する建物でSR04のすぐ北に位置し、SB07とほぼ重複している。建物の方位は北から西へ約76°振れており、他のⅢ区北東部古代建物群とは主軸がずれ、やや斜交する関係になる。



第79図　九景川遺跡Ⅲ区SB15実測図　S=1/60

やや不確実な部分を残すが、梁間2間、桁行3間の建物と考えられ、規模は梁間が2.7 m、桁行4.5 mを測る比較的小規模な掘立柱建物と想定される。柱間隔は比較的揃っており、梁間、桁行ともが150cm前後を測るが若干ばらつきが認められる。また、西側梁間は東側梁間のような等間隔の2間構造ではなく不均等な柱間となっている。

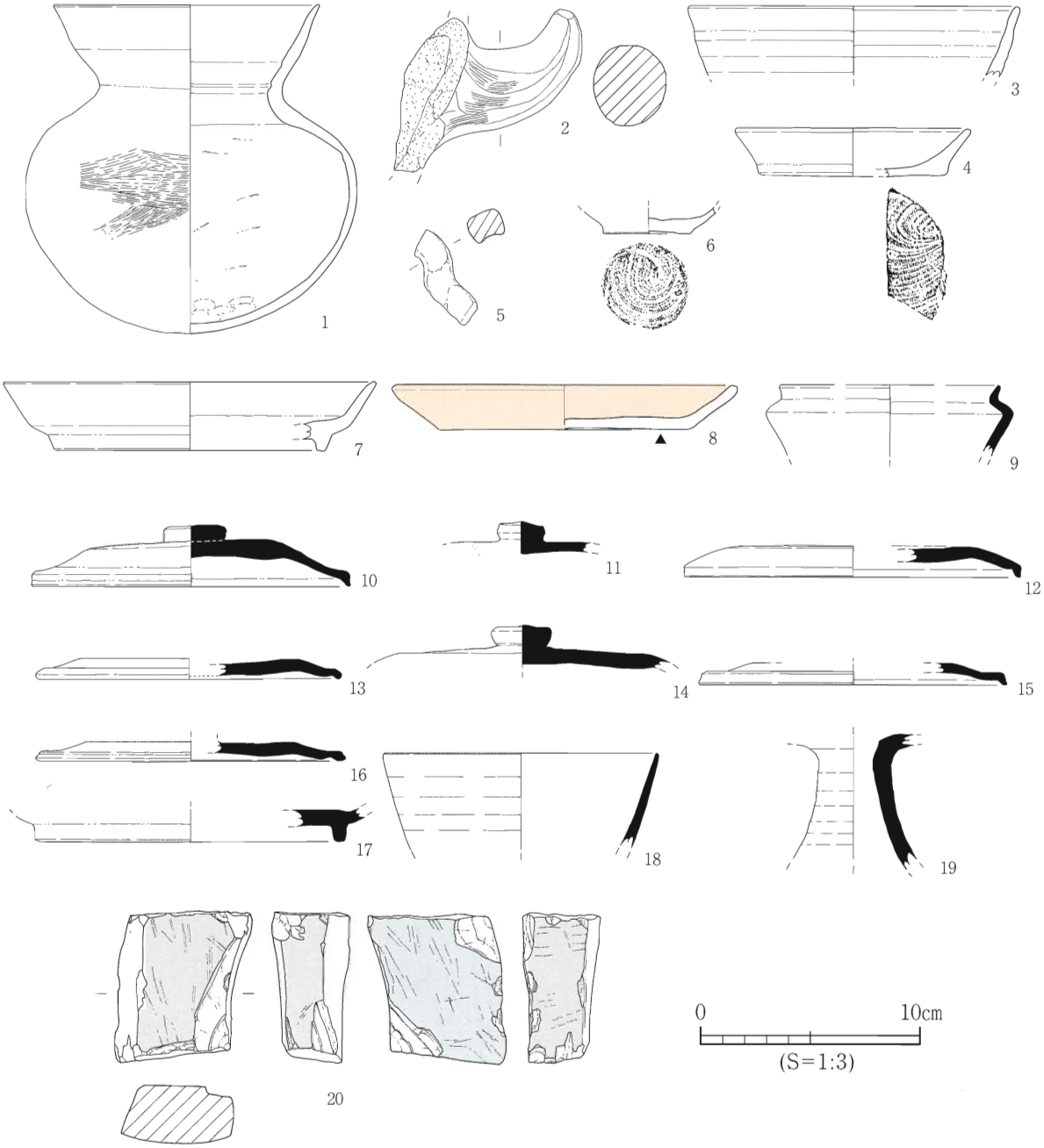
柱穴は円形または楕円形プランで径30～40cm前後を測る。覆土は主として暗褐色系の粘質土が堆積していた。柱根は確認できなかったが、P493では土層観察から柱痕が確認でき、それから復元される柱材の太さは径18cm前後と想定される。

SB15出土遺物　小片のため図化していないが、P413、P446から土師器が出土している。うち1点は有段を呈するタイプの高坏で、古墳時代中期前半に属する資料である。

遺構の性格と年代　前述のとおり、SB15は他のⅢ区北東部古代建物群とは建物を主軸を異にしている点から、これらとは異なる年代の建物である可能性が高い。柱穴からの出土遺物も現状では古墳時代中期に限定され古代に属する遺物は出土していないことからみて、他の古墳時代中期の遺構からやや離れているという問題はあるものの、現時点では古墳時代中期に属する建物である可能性が高いと考えている。

Ⅲ区6層上面ピット内遺物出土状況（第71図）

第71図にはSB05～08をはじめとしたⅢ区北東部古代建物群周辺のピット内から出土した主な遺物の分布状況を示した。その殆どは8～9世紀の遺物によって占められているが、古墳時代中期前半の丸底壺が完形の状態でピット内から出土しており、先のSB15のケースなども勘案すれば、これらの柱穴群に古墳時代中期のものが一定量含まれているものと判断される。しかし、先のSB15以外には明確に当該期の建物を復元するには至っていない。



第 80 図　九景川遺跡Ⅲ区ピット出土遺物実測図　S=1/3

Ⅲ区ピット内出土遺物（第 80 図）

第 80 図 1 はほぼ完形の土師器壺で、SB06 付近の P324 から出土した（第 71 図・写真 56）。口縁部は退化した複合口縁状を呈するが、器壁は比較的薄く、先細り状に仕上げている。胴部はよく張り最大径部位にヨコハケをめぐらせ、底部は完全な丸底で内面に指頭圧痕を残す。

2 は甑把手で外面にハケを残している。3 は土師器坏であるが、赤彩は剥落し現状では確認できない。4、

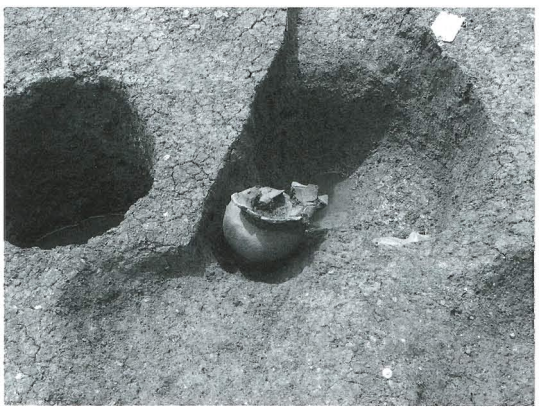


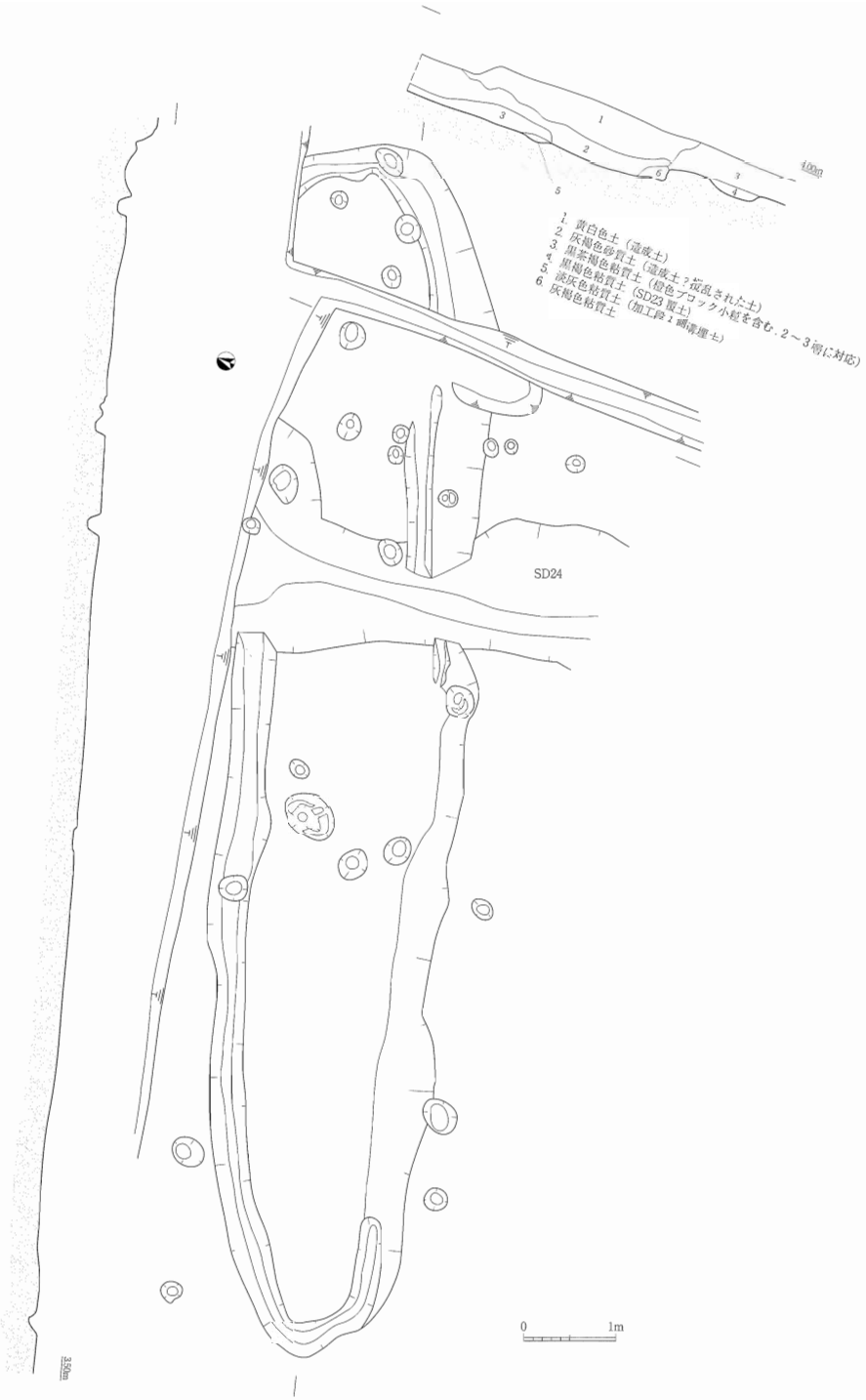
写真 56　Ⅲ区ピット内遺物出土状況

6は土師質土器である。4は小皿で体部は短く外反する。

5は須恵器把手の剥離した資料であるが、器種は不明。8は赤彩土師器皿で、体部はほぼ直線的に短く立ち上がり、赤彩は底部全体までは及んでいない。

9は小形の短頸壺と思われる須恵器で、肩部が稜をなし、口縁部が短く外反する。

10～16は須恵器蓋である。現状で確認できる資料では扁平な宝珠つまみの付くタイプのみで、輪状つまみは確認できない。口縁部端部はいずれも短く屈曲し、16は痕跡的な屈曲となっている。扁平な宝珠つまみの盛行は、後述するSR04や包含層資料を含めたⅢ区出土須恵器蓋の大きな特徴となっている。18の深い坏部を有する坏とほぼ同時期、青木Ⅳ期前後のものと考えられる。20は砂岩製の砥石で4面を使用面として用い、各面とも鉄器による刃先痕が顕著に認められる。



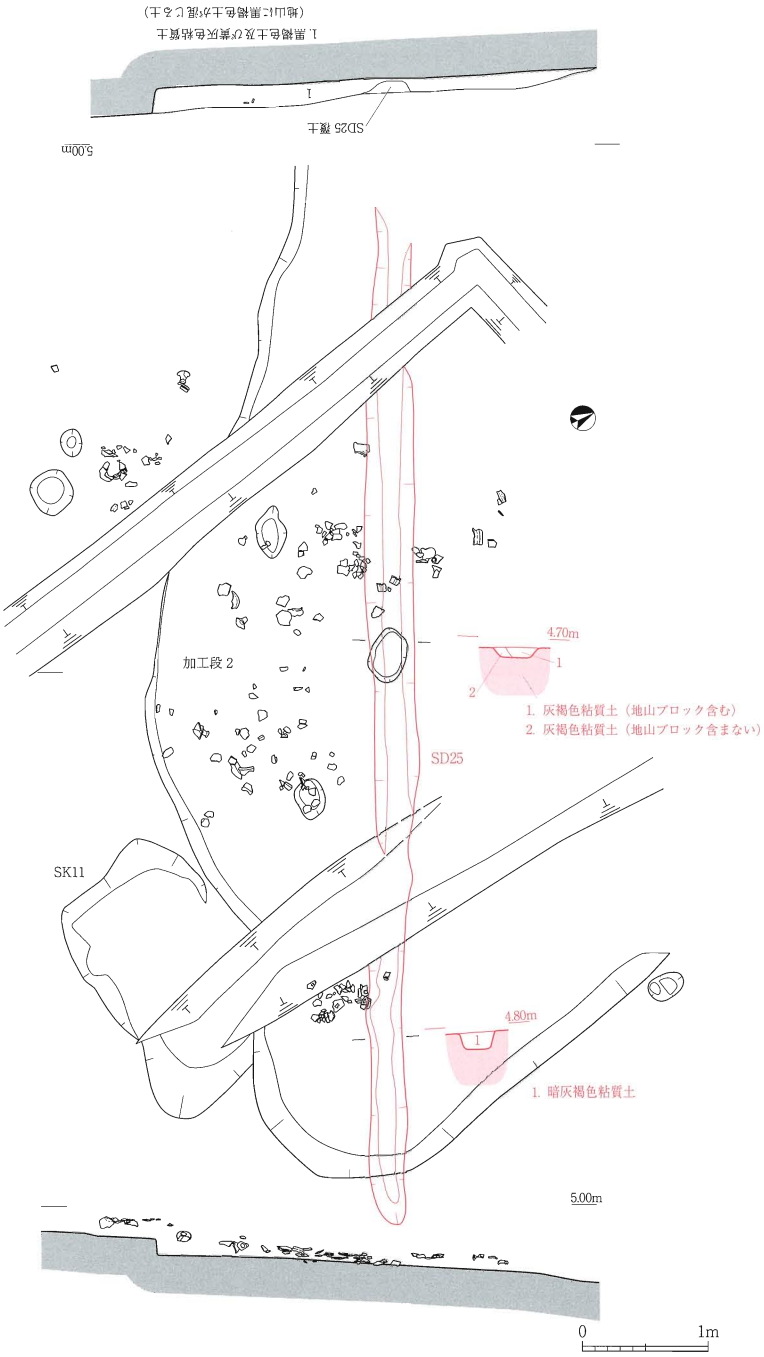
第81図　九景川遺跡Ⅲ区加工段1実測図　S=1/80

(2) 加工段

加工段1（第81図）

規模と形態　調査区北西部で検出した遺構で、SB13の東側に隣接し、中央部を中世の溝であるSD24により切られている。

加工段としたが、実際は特異な形態の溝状遺構であり、現状での規模は長さ13.1 m、幅2.0 m、深さ20cm前後を測る。溝の下場には幅30～40cmの籌が一部途切れつつも壁帯溝状にめぐっている。



第82図　九景川遺跡Ⅲ区加工段2実測図　S=1/60

溝底面はほぼ平坦で径20cm前後の浅いピットを多く検出したが、建物が復元できるような状況ではない。溝内の覆土は淡灰色の比較的締まった粘質土が堆積していた。

加工段1出土遺物　小片のため図化していないが、弥生後期土器、古墳時代中期の土師器、古代の須恵器小片が若干出土している。

遺構の性格と年代　SD24との切り合い関係から中世以前の遺構であることは確実であるが、出土遺物は弥生後期～古代と幅があり、かついずれも小片で特定できない。また性格についても類似する遺構は寡聞にして知らない。

加工段2（第82図）

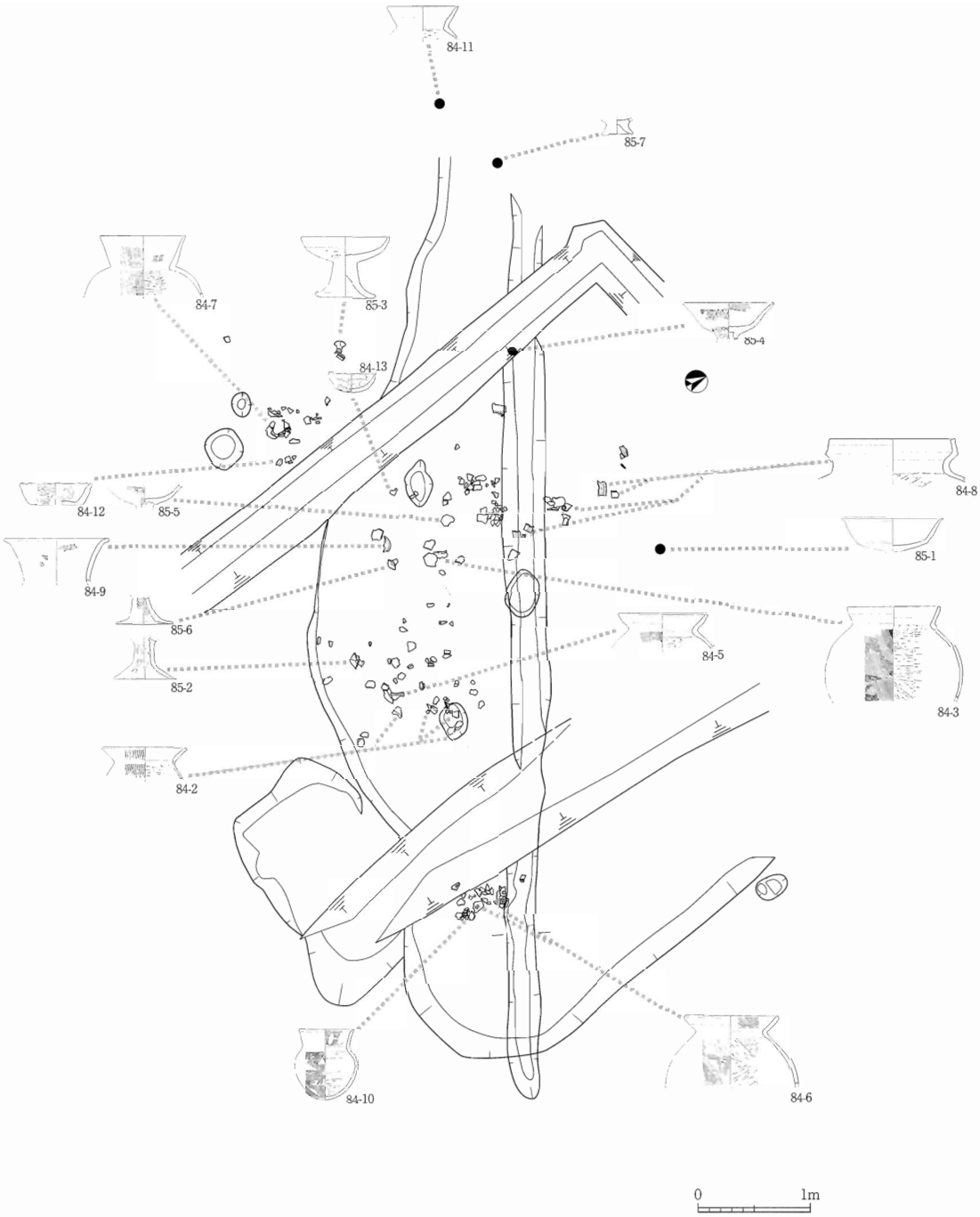
規模と形態　Ⅲ区南側で検出した遺構で、SK11、SD25と切り合っており、SK11→加工段2→SD25の順となる。平面形はかなり不整形な長方形状を呈し、コーナーも鋭角気味となっている。ただし、蛇行はしているものの加工段南壁の主軸は後述する加工段3・4とほぼ同一方向を指向している。西側は後世の攪乱により失われているが、現状での規模は、長さ8.0 m、幅3.4 m、深さ約20cmを測る。

壁帯溝等は一切認められず、テラス面はほぼ平坦であるが、若干北側に向けて傾斜している。覆土は黒色土混じりの黄灰色粘質土で後述するように多くの遺物が含まれていた。

加工段2遺物出土状況（第83図）

加工段2からは比較的まとまって古墳時代中期の遺物が出土している。その多くは加工段内の床面付近から出土しているが、加工段外からも完形品に近い遺物が出土している。遺物の多くは破片であるが、完形品に近い遺物も幾つか認められた。器種は甕、壺、高坏、坏などがあり、特定器種に限定されるような様相はなく、出土地点による器種の偏在は認め難い状況であった。

加工段2出土遺物（第84・85図）

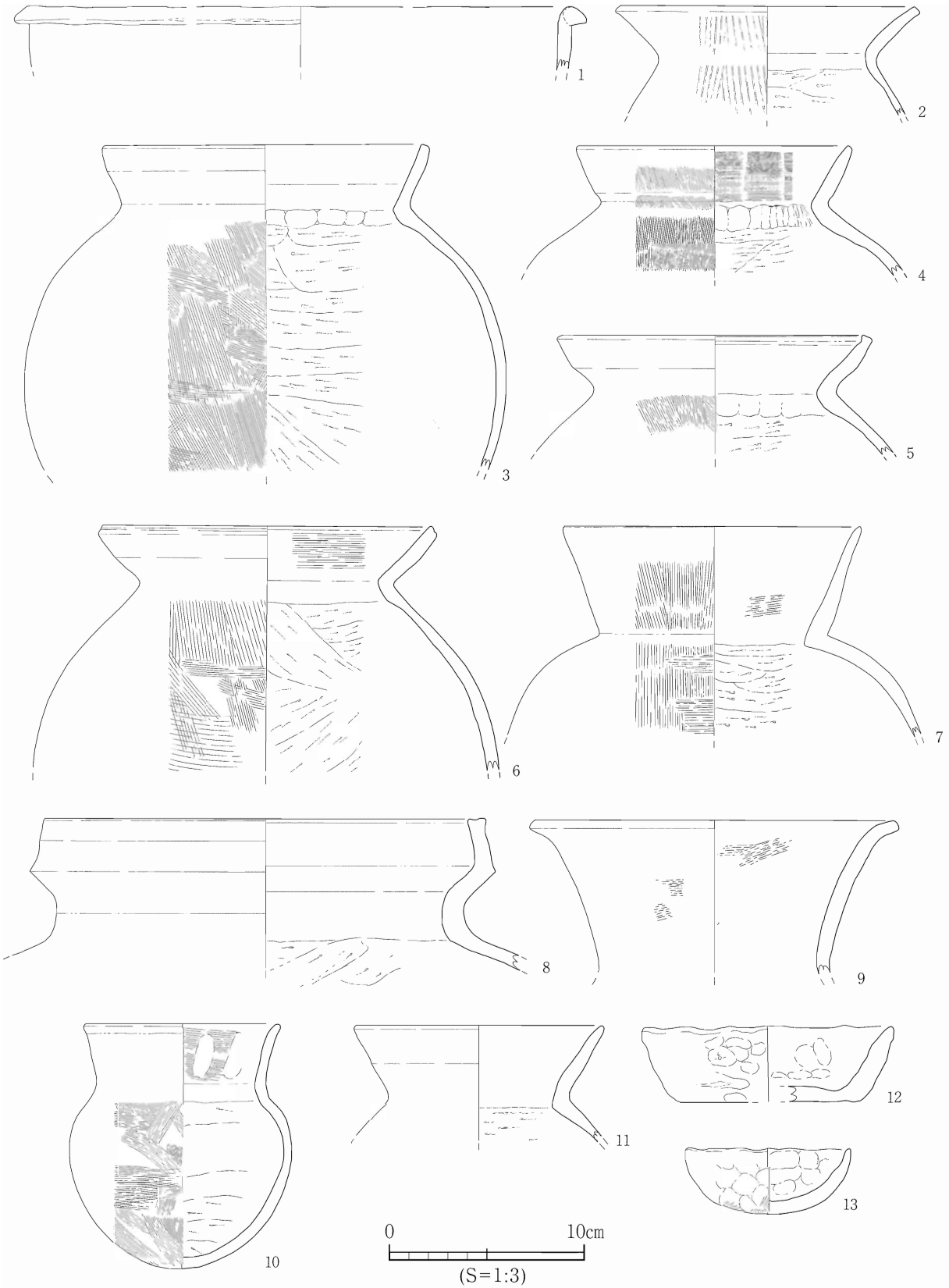


第83図　九景川遺跡Ⅲ区加工段2遺物出土状況　遺構：S=1/60、遺物：S=1/12

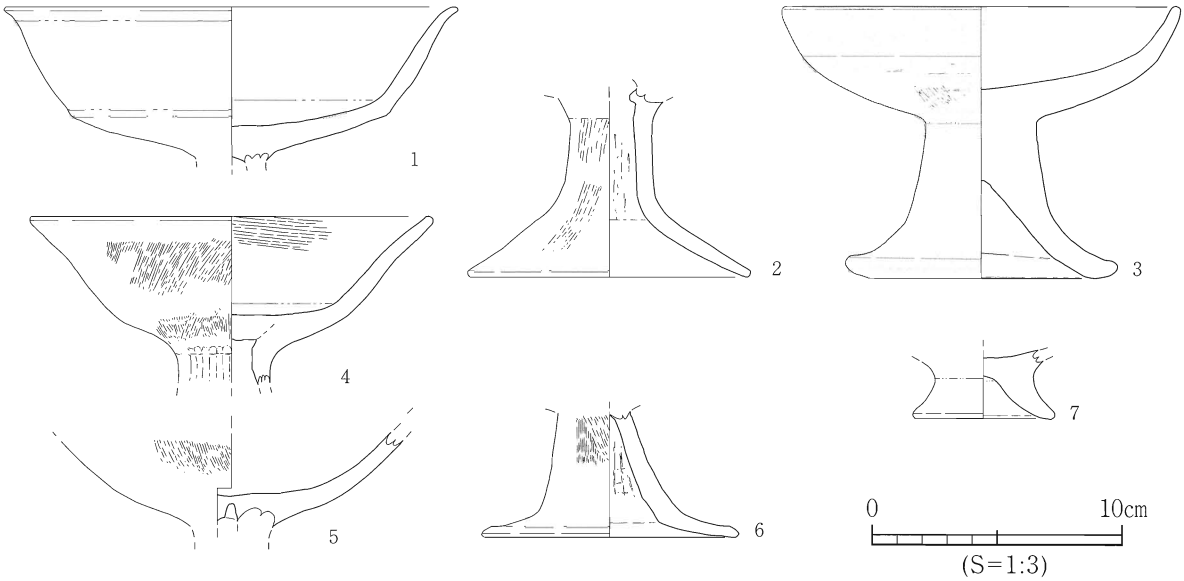
第84図1は突帯文系の土器で、小片だが口縁部端部外面に断面三角形の突帯を貼り付けている。内外面はナデで灰白色を呈し砂粒を多く含んでいる。下層からの混入品と思われる。

2～6は甕である。2は単純口縁甕で口縁部はほぼ直線的に開き、端部に平坦面を有する。口縁部まで粗いタテハケが残り、浅黄橙色で白色砂粒を若干含む、当該期に特有の胎土･色調を呈する。3はやや内湾気味の口縁部を有する甕で、体部はよく張るが肩部のヨコハケは認められない。4は3とよく似た形状を呈する甕で、頸部のしまりが甘く稜を形成しない。色調は橙色を呈する。

5は比較的頸部がよくしまって口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁部端部内面をわずかにつまみ出している。色調は灰白色を呈する。前期的な布留系甕の系譜を引く甕と考えられる。6も「く」の字口縁甕だがは頸部がよくしまり布留甕的なプロポーションを残す甕で、色調も小谷式的な灰白色



第 84 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 2 出土遺物実測図 (1)　S=1/3



第85図　九景川遺跡Ⅲ区加工段2出土遺物実測図(2)　S=1/3

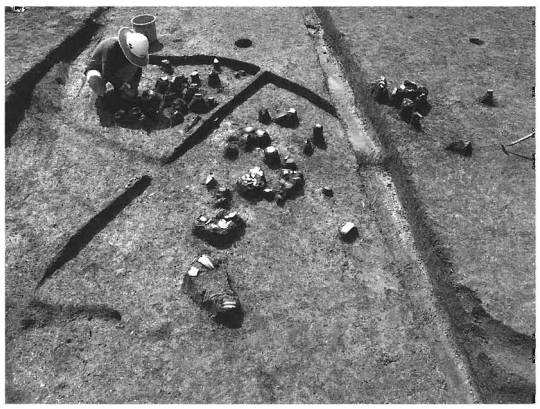


写真57　加工段2遺物出土状況

を呈し、ハケ目は粗いが肩部ヨコハケを残す。

7～11は壺である。7は直口壺で、頸部がよくしまり、口縁部はほぼ直線的に長く立ち上がる。肩部がよく張り色調は灰白色を呈する。8は大形の複合口縁壺で口径22.3cmを測る。短い頸部を有し口縁部はやや内傾し口縁部端部上面を強くなでて凹面を形成している。器壁は厚いが灰白色を呈する小谷式系列の器種である。9も直口壺の口縁部と思われる資料であるが、頸部からラッパ状に広がり口縁部付近はさらに外反する形態を呈する。色調は浅黄橙色である。10は小形丸底壺で色調は灰白色を呈する。頸部のしまりがなく直口壺のように口縁部が上方へ立ち上がる。

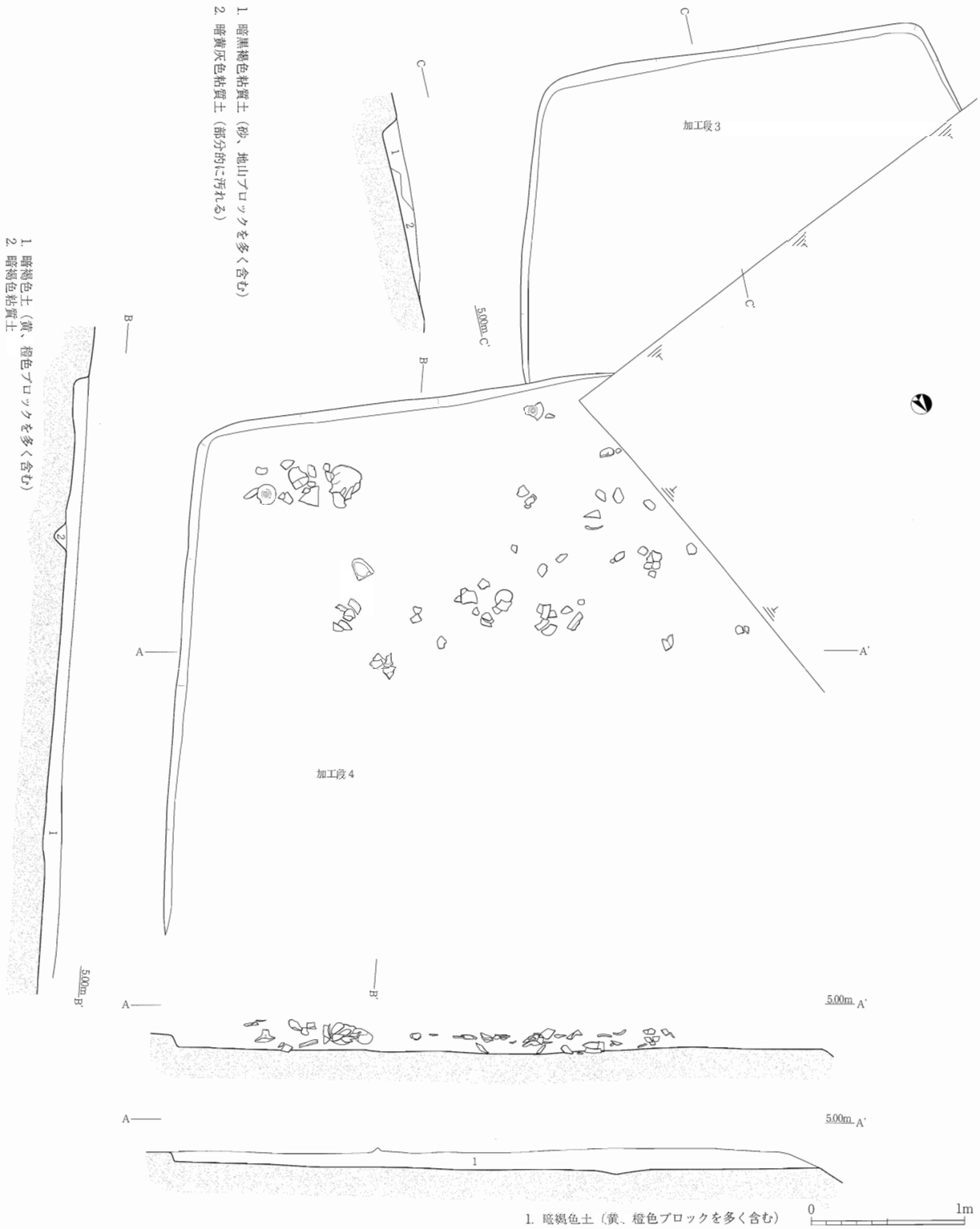
12は粗製坏で口径12.8cmを測る。大きな平底を有し、全面に指頭圧痕が著しい。13は小形の坏である。手捏ね成形で全体的に指頭圧痕が顕著に残る。丸底で口縁部は内傾しない。

第85図1～6は高坏である。1は有段口縁タイプの高坏で橙色を呈するティピカルな大東式タイプの高坏である。内外面橙色を呈する。3はやや異形の高坏で、口縁部は浅い椀状を呈し、脚は太く裾にむけて緩やかに外反し、端部は斜上方へ反る。脚部は中実で坏部外面にはケズリ・ミガキが認められる。当該期には珍しく内外面に赤彩を施す大東式でもやや異質な高坏である。4は口径16.0cmを測る高坏坏部で、プロポーション的には小谷式の系列下に属するタイプであるが、接合は大東式的なβ技法によるものである（松山1991）。色調は灰白色を呈する。5は高坏坏部の小片であるが坏部底面に径5mmのやや深い刺突痕を有する。6は比較的短脚タイプの高坏脚部で、脚部下半部で強く屈折し、脚部内面に稜を形成する。色調は浅黄橙色の大東式タイプの器種である。7は低脚坏脚部である。脚部は強く外反し、灰白色を呈する点は小谷式的であるが、前期の通常の低脚

坏と比較すると器壁がかなり厚い。

遺構の性格と年代　床面出土の土器は、従来の大東式、松山Ⅱ期の特徴を有し、古墳時代中期前葉に比定される。遺構の性格については不明であるが、構造からみて少なくとも日常的な居住用施設とは考え難い。

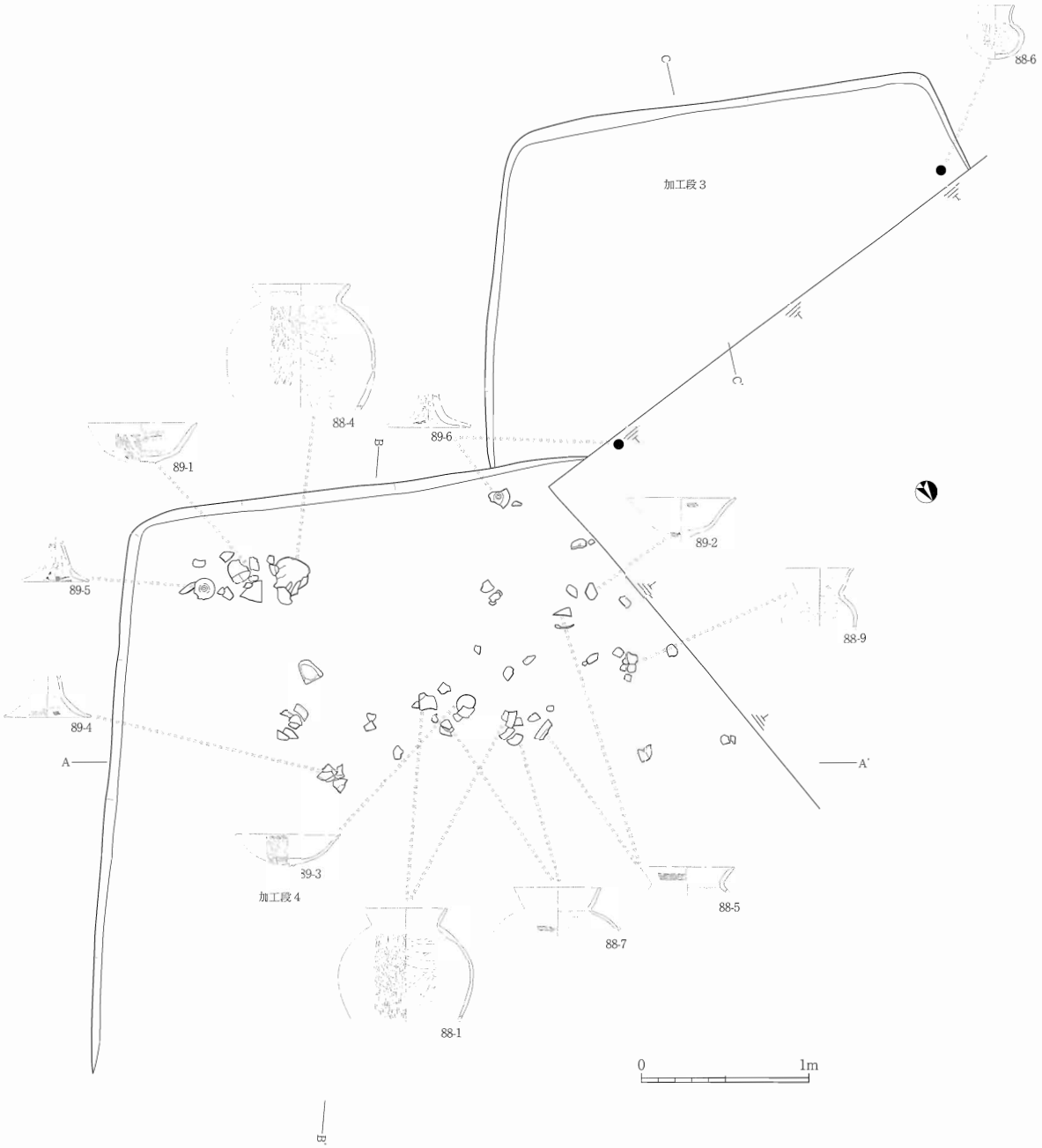
加工段3（第86図）



第86図　九景川遺跡Ⅲ区加工段3・4実測図　S=1/40

規模と形態　Ⅲ区南側で検出した遺構で、加工段２の東側に位置する。後述する加工段４と一部重複しており、切り合い関係から加工段３→加工段４の順で営まれたと考えられる。平面形は不整形な方形状を呈し、南側壁の軸は加工段４のそれとほぼ平行しており、比較的近い時期に営まれた遺構と想定される。加工段３は試掘調査の際に錯誤があり、床面のかなりの部分が失われてしまったため正確な規模は不明であるが、現状では一辺 2.5m 程度を測る。現状での深さは 10cm前後とかなり浅く、後世に上半部を削平されてしまったものと考えられる。遺構内からは壁帯溝やピット、焼土面などは一切検出されていない。

加工段３出土遺物（第 88 図）　第 88 図６は加工段３から出土した小形丸底壺で、床面西端から検出した（第 87 図）。口径 6.8cm、器高 9.7cmを測り、口縁部は直口壺状にほぼ上方へ長く立ち上がる。胴部はよく張り最大径付近外面にヨコハケをめぐらせる。色調は灰白色を呈する。



第 87 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段３・４遺物出土状況　遺構：S=1/40、遺物：S=1/12

遺構の性格と年代　出土土器や加工段４との関係から古墳時代中期前半の遺構と考えられる。当遺構は加工段２よりも平面形が整っているものの、壁帯溝や柱穴の欠落からみてやはり居住用施設とは考え難く、性格については不明と言わざるを得ない。

写真 58　加工段３・４遺物出土状況

加工段４（第 86 図）

規模と形態　加工段３の一部を切って造成された加工段で、加工段３と同様に試掘調査時の錯誤により床面の一部が失われている。プランは比較的整った正方形状を呈し、現状での規模は南北 3.4 m、東西 2.8 mを測る。深さは 10cm前後と浅く、加工段３と同じく上半部を削平されているものと思われる。覆土は地山ブロックを多く含む暗褐色土が堆積していた。

加工段４遺物出土状況（第 87 図）

加工段４内からは比較的まとまって土器が出土している。土器群はほぼ床面付近に集中し、若干浮いている遺物もあるものの、一括廃棄に伴うものである可能性が高い。土器は加工段南東部及び中央部付近に比較的まとまって認められたが、加工段外からの遺物も若干認められた。

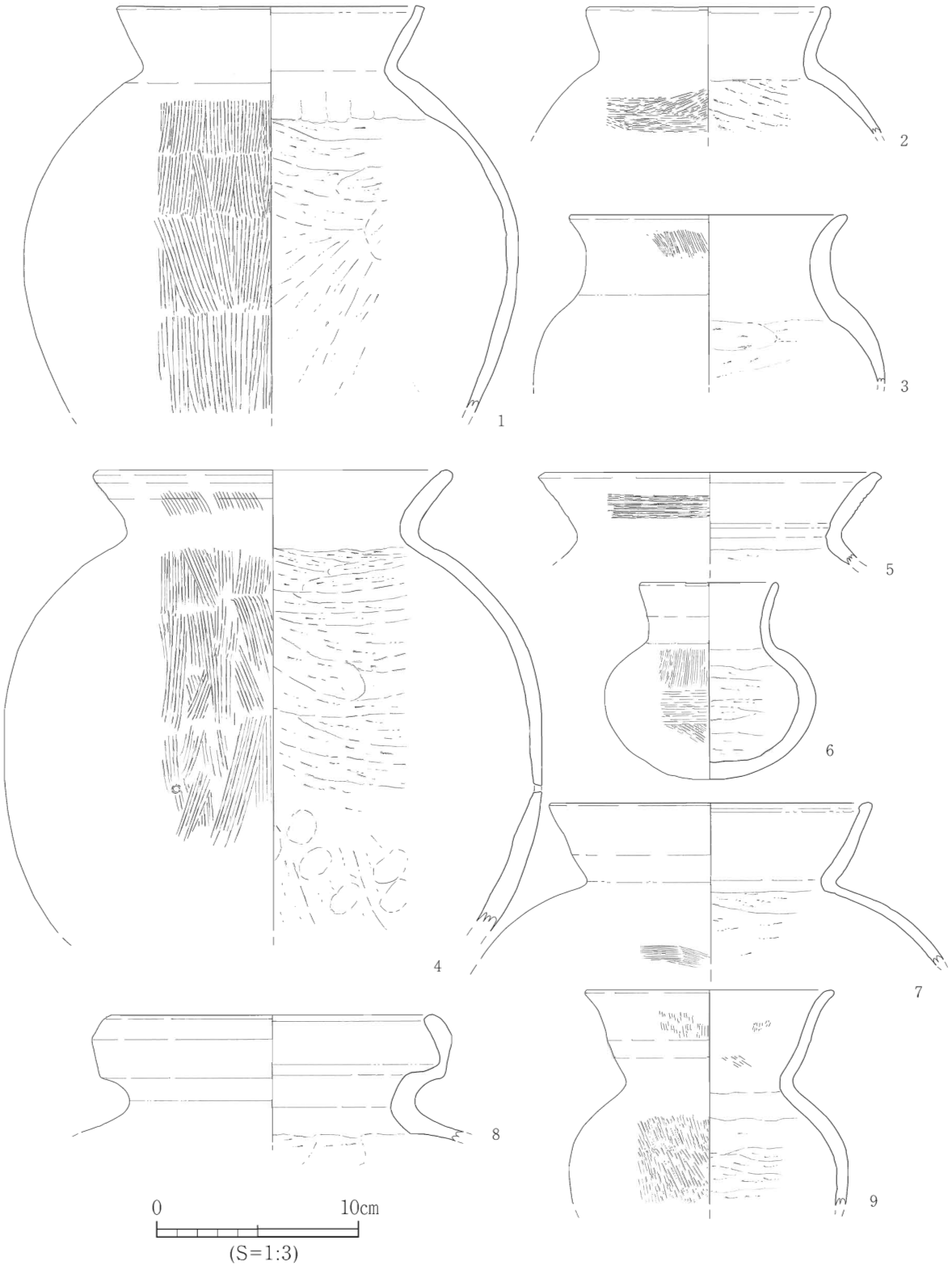
加工段４出土遺物（第 88・89 図）

第 88 図１～５は甕である。１は口縁部から胴部下半部までが残る資料で、口径 15.0cmを測る。頸部はよくしまり、口縁部はやや上方へ立ち上がって端部に面を形成しわずかに内面に肥厚する。胴部はよく張るがタテハケ調整のみで肩部ヨコハケが消失している。内面ケズリの位置は頸部からかなり下へ下がっている。色調は大東式特有の浅黄橙色を呈する。２は小形の甕で頸部のしまりがあまく、口縁部がやや長く直線的に上方へ立ち上がる。色調は灰色を呈する。３は頸部のしまりがあまく口縁部が上方へ長く立ち上がる点は２に似るが、２と異なり口縁部が緩やかに外反するタイプの甕（壺）である。橙色を呈するティピカルな大東式段階の資料である。

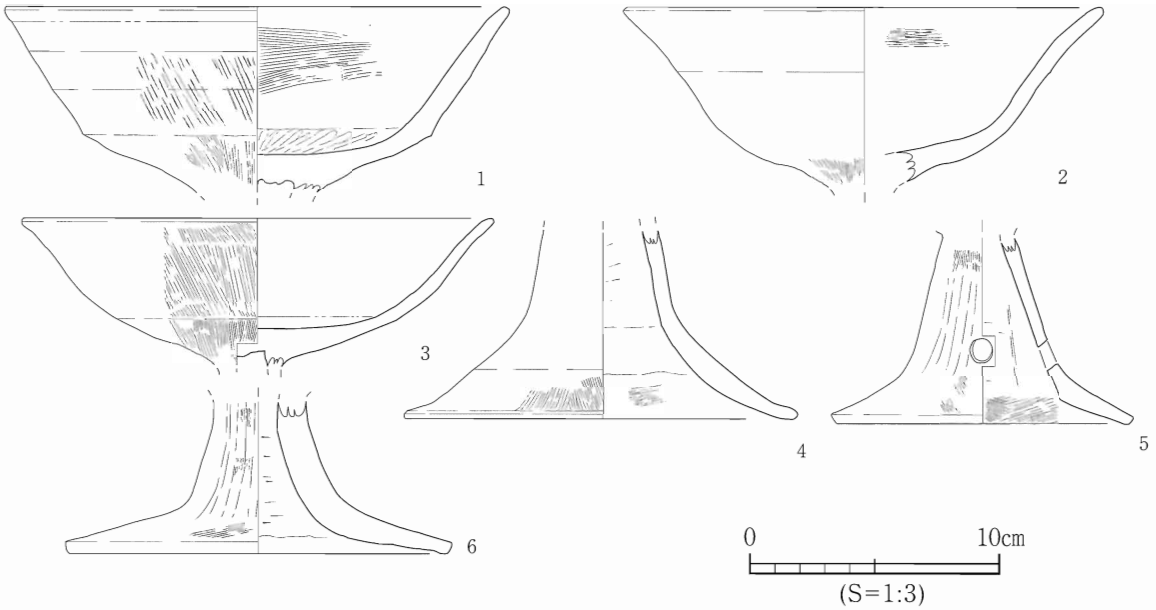
４は１と同様な単純口縁タイプの甕であるが、口縁部が厚く外反気味に立ち上がる点でより後出的な要素を備える。１と同様に胴部がよく張るが、胴部最大径付近が長い寸胴状のプロポーションを呈し、タテハケ調整のみで仕上げ、肩部ヨコハケは認められない。胴部中央付近には径 3mm前後の焼成後穿孔が認められる。色調は淡黄色を呈する。５はやはり厚手で外反する単純口縁タイプの甕で、口縁部外面にヨコハケを残す。７は布留甕の系譜を引く甕で、頸部がよくしまって口縁部が内湾気味に立ち上がり端部内面が肥厚する。肩部はよく張りヨコハケを若干残す。色調は灰白色を呈する。

８・９は壺である。８は複合口縁壺で口縁部が内傾するタイプであるが、口縁部は厚手・粗雑で形態も小谷式的な本来の内傾する複合口縁壺の形状からの逸脱が著しい。９は直口壺で、頸部のしまりがあまく、口縁部はわずかに複合口縁段部の痕跡を残す。色調は淡黄色を呈する。

第 89 図は高坏である。１は有段高坏で坏部は段部からほぼ直線的に立ち上がる。内外面はハケのちナデ調整で、やや原体の粗いハケ調整をよく残している。色調は橙色を呈する。２は小谷式的な坏部形態を有する高坏であるが、坏部がかなり深くなっている。赤彩痕は確認できないが、内外



第 88 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 3・4 出土遺物実測図 (1)　S=1/3
6：加工段 3、3・8：加工段 4 付近、その他は加工段 4



第 89 図　九景川遺跡Ⅲ区加工段 3・4 出土遺物実測図 (2)　S=1/3

面とも橙色化が著しい一方、断面は淡黄色を呈しており、形態は小谷式的であるが、色調・胎土は大東式的な特徴を有している。3 は 1 と 2 の中間的な坏部形状を呈する高坏で、外面にタテハケ調整を顕著に残している。

4 ～ 6 は高坏脚部である。4 はやや大形の高坏脚部で、脚柱部がやや太く、裾にむけて緩やかに外反し端部を丸く収めている。5 は脚柱部がややふくらみつつ脚部下半で強く屈曲し、内面に平坦面及び稜を形成する。脚部下半部に円形スカシを 3 方向に穿つ。調整は外面が縦方向にハケのちミガキ、内面は屈曲部以上は横方向のヘラケズリ、下半はヨコハケで調整で仕上げる。6 は低脚タイプの高坏で脚裾部が大きく広がる。器壁は厚く浅黄橙色を呈する。

遺構の性格と年代　加工段 2 に比べるとやや新しい要素が見受けられるものの、ほぼ同時期の古墳時代中期前葉の遺構として差し支えないと考える。加工段 2・3 と同様に、当遺構についても壁帯溝や柱穴、焼土面などが一切認められないことから居住用施設とは考えにくい。

(3) 土坑

SK07（第 90 図）

規模と形態　調査区北東隅で検出した土坑で、多くのピットや溝と重複している（写真 59）。SD11 をはじめ柱穴の多くは SK07 埋没後に掘り込まれた遺構である。後述するように SD11 は SB06 などのⅢ区北東部古代建物群の雨落溝と想定される遺構であることから、当遺構はこれらに先行して営まれていた可能性が高い。

平面形態はやや寸詰まりの長方形を呈し、長さ 150cm、幅 145cmを測る。深さは 10cm前後と浅く、後述する土器の出土状況からみてかなりの部分は削平されているものと考えられる。

床面には後世の掘り込み以外にはピットなどは検出されていない。覆土は淡灰色の細砂が充填されており、粘質土系の土が堆積している他の柱穴とは全く様相を異にする。

SK07 遺物出土状況（第 90 図）　SK07 からは東側床面から土師器甕が出土している。甕は上方の大半を後世の削平により掻き取られたかの様相を呈しており、詳細は不明であるが、少なくとも 1

個体がほぼ倒立した状態で据えてあったと思われる。その下には内面を上に向けた別の甕片が敷かれていた。これらは直接的な接合関係にはなく同一個体であるかどうかは不明である。

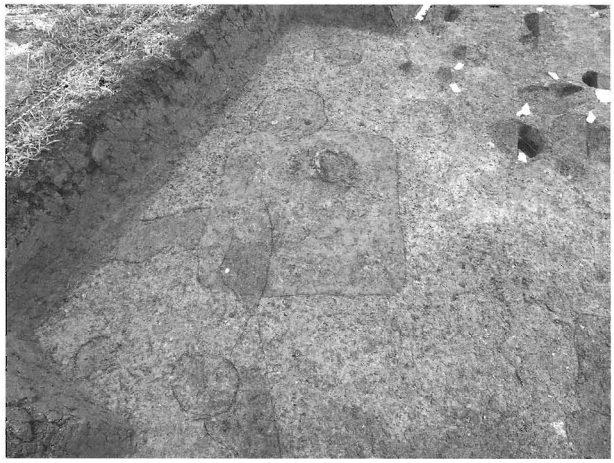
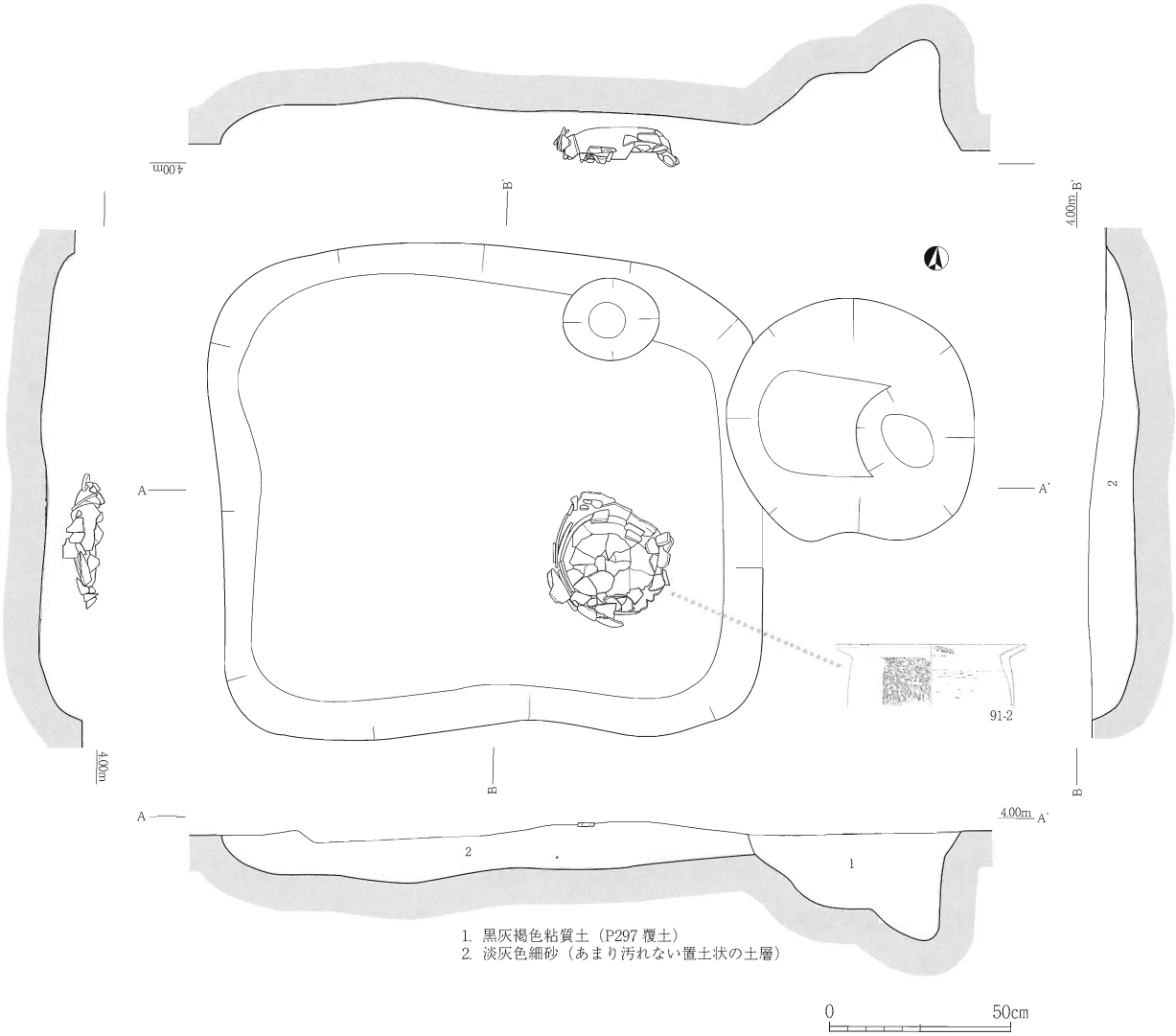


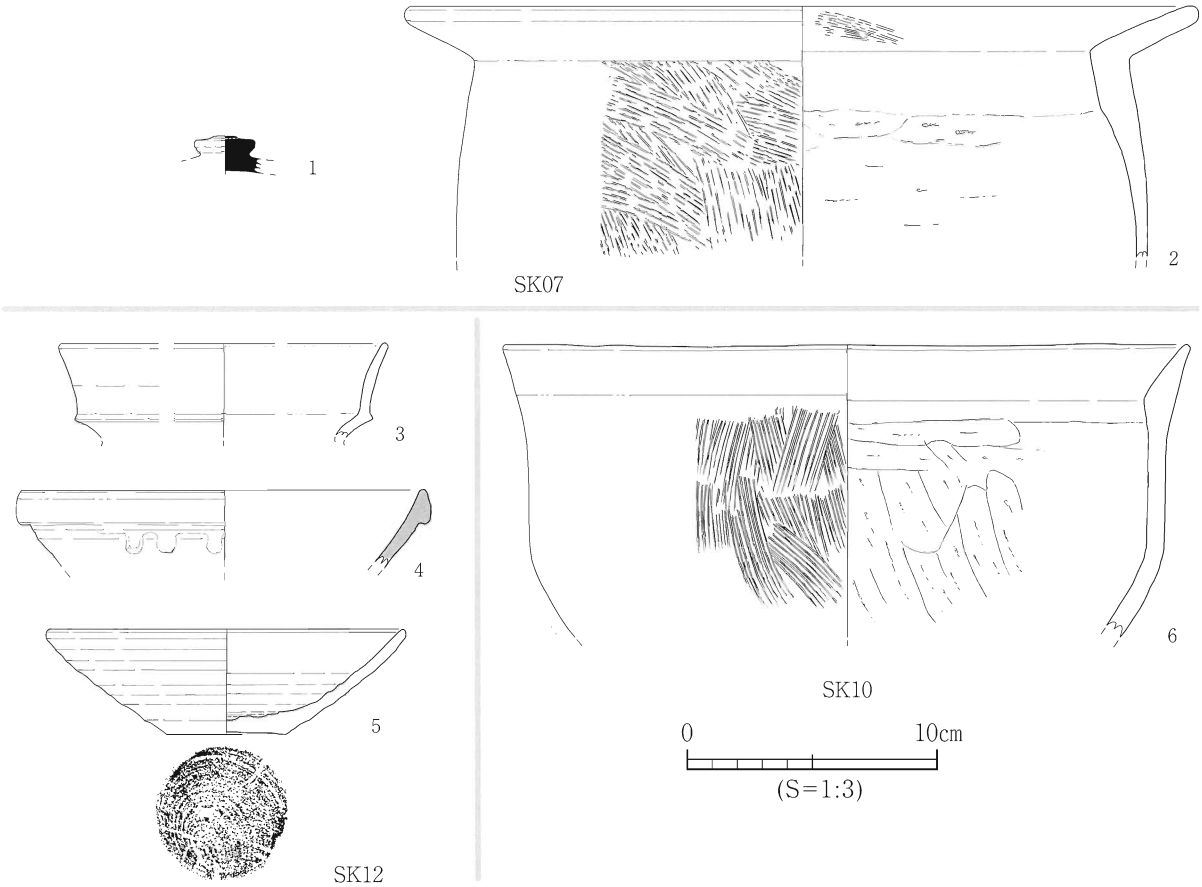
写真 59　SK07 検出時

SK07 出土遺物（第 91 図）　第 91 図 1 は須恵器蓋の宝珠つまみである。SK07 出土遺物であることは明らかだが、出土地点は明らかでなく、SD11 など他の遺構からの混入である可能性もある。2 は床面に据えてあった土師器甕である。口径 31.4cmを測る大形の甕で、先述のように後世の削平により胴部以下は失われている。器壁は厚く、口縁部は頸部から鋭く「く」の字状に強く外反している。胴部の張りは弱く、粗い縦・斜方向のハケを施している。

遺構の性格と年代　SK07 は、先述の SD11 との切り合い関係から、Ⅲ区北東古代建物群の時期である 9 世紀前葉より先行する遺構であると考えられる。出土遺物のうち当遺構に伴うのが確実な 2



第 90 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK07 実測図　遺構：S=1/20、遺物：S=1/12



第91図　九景川遺跡Ⅲ区SK07・10・12出土遺物実測図　S=1/12

の甕は、その形態からみて7～8世紀に属するものと考えられるが、それ以上の年代の限定は現状では難しい。

遺構の性格については、プランが比較的整った方形を呈する点や床面に砂を敷く点、甕を床面に意図的に配置している点から土壙墓または木棺墓である可能性が高い。

SK10（第92図）

規模と形態　Ⅲ区中央南壁際で検出した土坑で、加工段2の南側に位置する。南半は調査区側溝により失われている。平面形は楕円形状を呈し、径1.1 m、深さ50cmを測り、壁は比較的急角度に掘り込まれている。覆土は上層に灰褐色粘質土、下層に灰色粘土が堆積していた。

SK10遺物出土状況（第92図）　土坑床面付近から土師器が1点出土している。

SK10出土遺物（第91図）

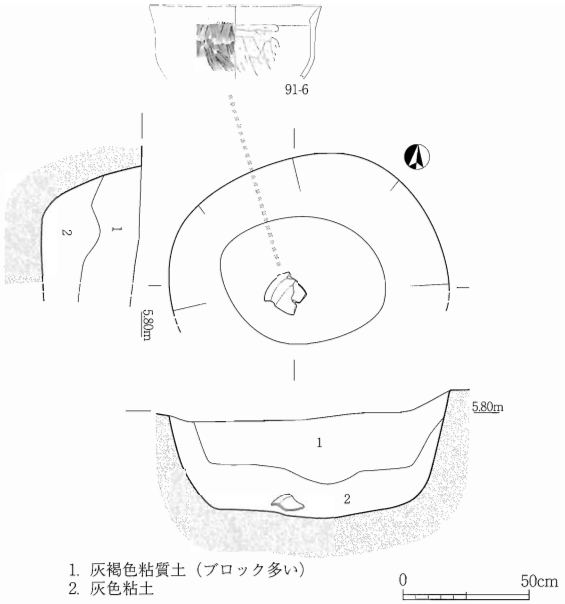
第91図6はSK10の床面付近から出土した土師器

写真60　SK07土師器甕出土状況

写真61　SK10土師器甕出土状況

甕または甑である。頸部のくびれはほとんどなく、口縁部はわずかに外反する。胴部の張りは弱く、外面に粗いタテハケを施す。

遺構の性格と年代　出土した土師器甕から細かな年代の特定することは困難であるが、甕であれば8世紀以降の遺構となる。ただし、当遺構周辺には古代の遺構は全く存在せず古墳時代中期の遺構しか存在しないことから古墳時代中期に属する可能性も残る。性格については明確にし得ないものの、現在でも湧水がある地点に営まれていることから井戸である可能性が高い。



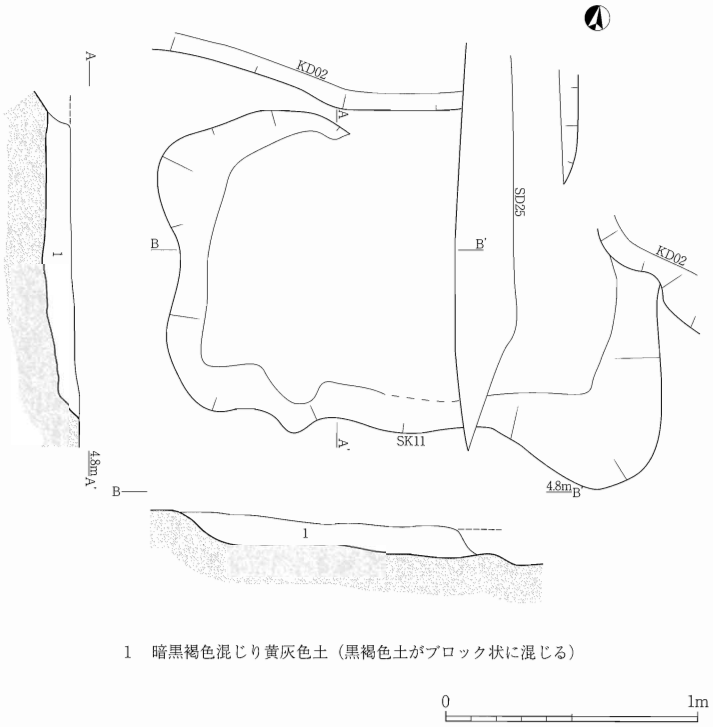
第92図　九景川遺跡Ⅲ区SK10実測図
遺構：S=1/30、遺物：S=1/12

SK11（第93図）

規模と形態　調査区中央南に位置する土坑で、加工段2に沿うように位置しており、切り合い関係からSK11が先行する。

プランは不整形な長方形状を呈し、長さ1.95 m、幅1.2 m、深さ12cmを測る。土坑内には暗黒褐色土が堆積していた。遺物は出土していない。

遺構の性格と年代　遺物は出土していないが、周辺の遺構の様相からみて、古墳時代中期に属する可能性が高い。

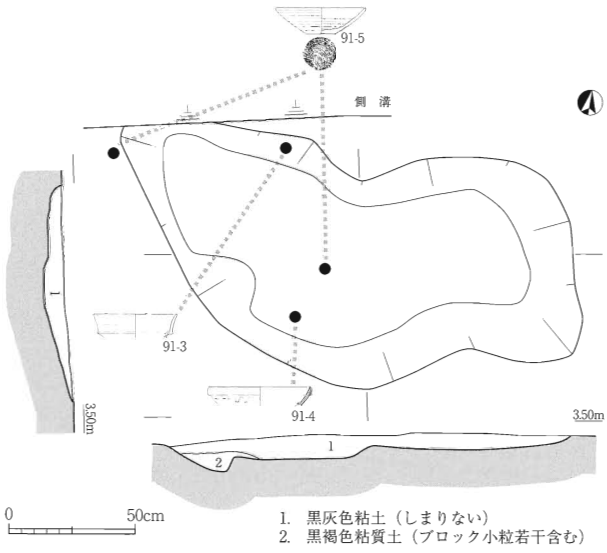


第93図　九景川遺跡Ⅲ区SK11実測図　S=1/30

SK12（第94図）

規模と形態　調査区北西部で検出した土坑で、SB13及び加工段1に隣接するが、層位的にはこれらの検出面より上の4層上面で検出した土坑で、これらより先行することは明らかである。平面形態は不整形な楕円形状を呈し、北側の一部は調査区側溝により失われている。現状での規模は、長さ2.0 m、幅80cm前後を測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ10cm前後を測る。土坑内には3層と同様な黒褐色系の粘質土が堆積していた。土坑内からは遺物が若干出土している（第94図）。

SK12出土遺物（第91図）　第91図3～5はSK12出土遺物である。3は弥生土器甕で、灰白色を呈し、口縁部はややカーブを描きながら外反し、端部を丸く収める。草田5期前後（赤澤1992）の資料



第 94 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK12 実測図　遺構：S=1/30、遺物：S=1/12

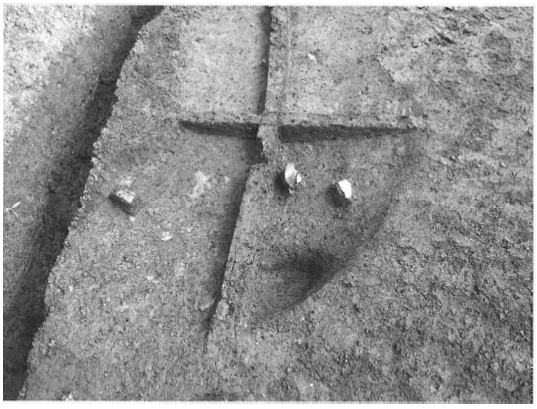
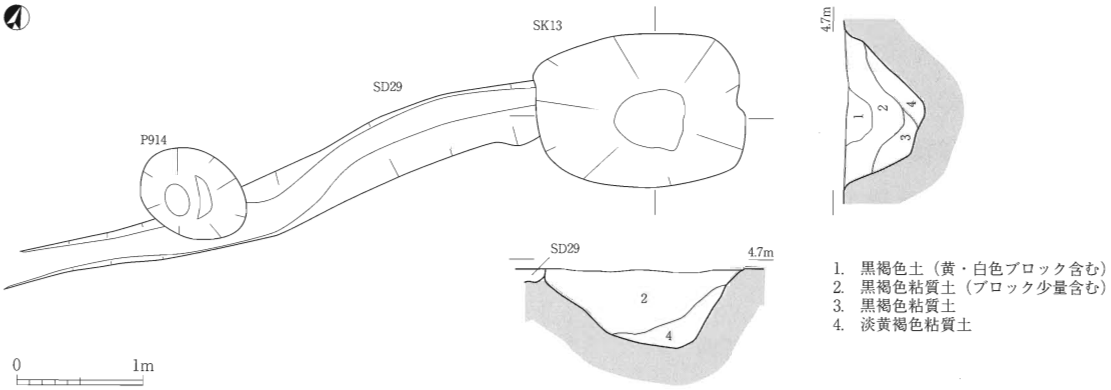


写真 62　SK12



第 95 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK13・SD29 実測図　S=1/60

であり、下層からの混入品である。4 は白磁で口縁部は玉縁状を呈するⅣ類椀で釉が厚い。5 は土師質土器坏で、底部は比較的小さく、体部は若干内湾気味に立ち上がる。

遺構の性格と年代　4 層上面から掘り込まれた遺構である点、出土遺物からみて 12 ～ 13 世紀の遺構と考えられる。

SK13（第 95 図）

規模と形態　調査区中央部やや南寄りに位置する遺構で、SB14 の北に隣接する。土坑西側には平面長方形状の小規模な土坑で、長さ 4.4 m、幅 50cm程の小規模な溝である SD29 が取り付いている。土坑の規模は、長さ 1.6 m、幅 1.2 m、深さ 60cm前後を測り、断面形は逆台形状を呈する。覆土は上層の黒褐色土が、下層は黄褐色系の土が堆積していた。遺物は出土していない。

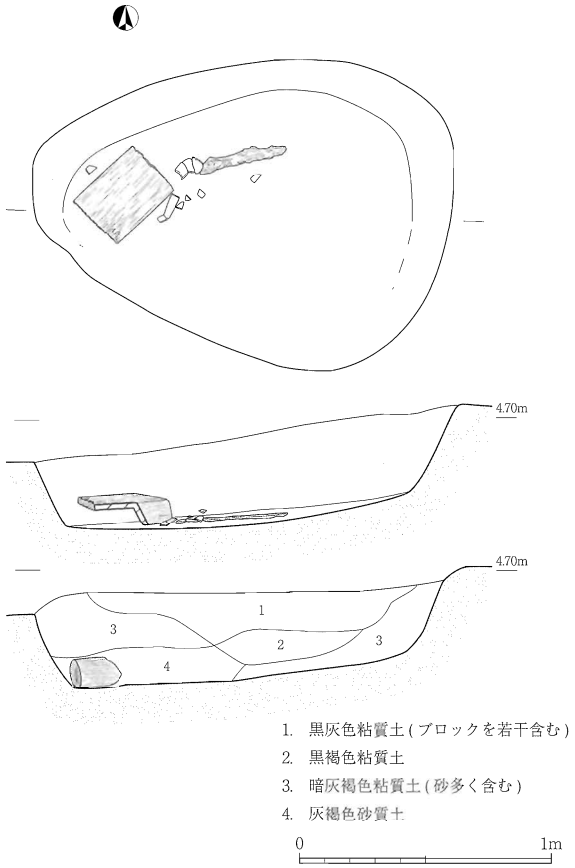
遺構の性格と年代　明確な共伴遺物はないが、周辺の遺構配置から考えて古墳時代中期に属する遺構である可能性が高い。性格は不明だが、溝が取り付いている点から、小規模な溜井状の施設であった可能性が考えられる。

SK14（第 96 図）

規模と形態　調査区南西部で検出した土坑で、中世の貝塚であるSX02を完掘したのち、その床面で検出した遺構である。

平面形は三角形に近い楕円形状を呈し、長径1.7 m、短径1.25 m、深さ35cmを測るが、上方はSX02により破壊されており、本来はより深かったものと推測される。断面形は北壁は比較的急傾斜に掘り込まれているが、南側はやや緩やかな傾斜を呈している。なお、底部南半部は調査時の錯誤により失われ、本来の形状は不明である。

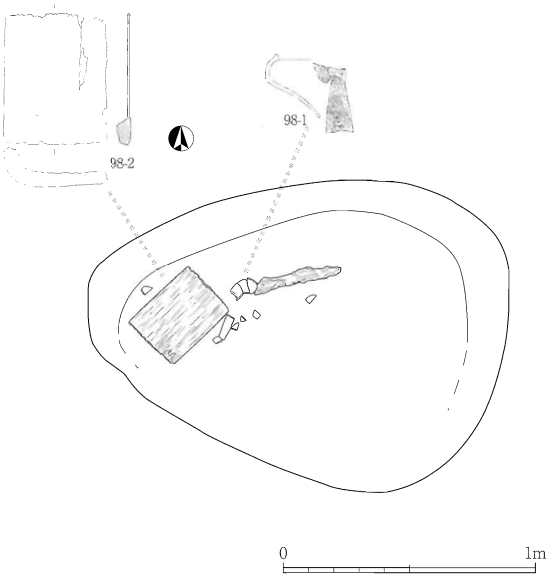
覆土は上層は黒褐色系の粘質土が堆積しており、下層になるにつれ砂を多く含み灰色を帯びるように変化し、最下層には灰褐色の砂質土が堆積していた。最下層付近は湧水が著しく、刳物桶が比較的良好な状態で遺存していた。



第96図　九景川遺跡Ⅲ区SK14実測図　S=1/30

SK14遺物出土状況（第97図）

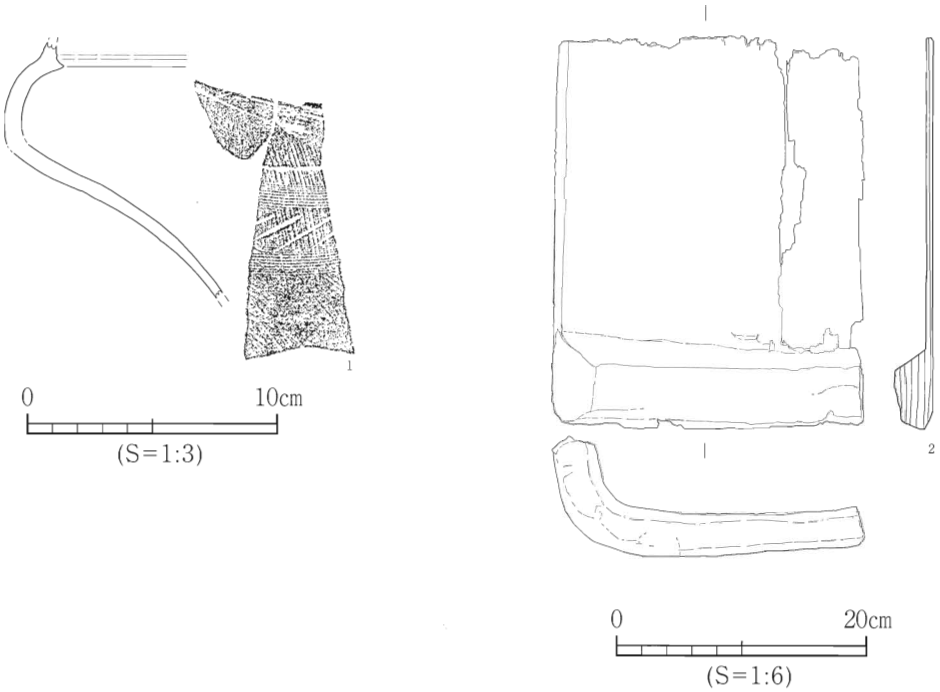
上述のとおり床面付近からは刳物桶、部材、弥生土器片が出土しており、これらは土坑床面北西部付近から比較的まとまった状態で検出された（写真63）。刳物桶は全体の1/4程度の部材が外面を上に向けて横倒しの状況で出土している。



第97図　九景川遺跡Ⅲ区SK14遺物出土状況
遺構：S=1/30、遺物：S=1/12、1/18

SK14出土遺物（第98図）

第98図1は床面付近から出土した弥生土器壺の頸部から肩部にかけての資料である。同一個体であるが直接接合しないため、図上で復元している。器壁は薄く、色調は灰白色を呈する。頸部には長い矢羽根状の羽状文の下半部と思われる連続斜線が描かれ、肩部にはヨコハケと鋭利な工具による連続ノ字刺突文が施文されている。羽状文



第98図　九景川遺跡Ⅲ区SK14出土遺物実測図　1：S=1/3、2：S=1/6

的モチーフは新しい様相だが、全体の質感からみて草田5期前後まで遡る可能性が高い。

2は刳物桶である。杉材で約1/4が残存していた。平面形はかなり扁平な楕円形状を呈し、器高30.8cmを測る。現状では内面に漆痕や木釘は認められない。

写真63　SK14遺物出土状況

遺構の性格と年代　土器の年代観から当土坑は弥生時代終末期前後に位置づけられるが、当該期の遺構はSK14以外には当遺跡では存在しない。SX02による削平によって本来の形状が不明なため遺構の性格については明らかにし難いものの、湧水地点に掘り込まれている点、刳物桶の出土などから井戸の可能性が考えられる。

SK15（第99図）

規模と形態　調査区南西部に位置する土坑で、調査区を南東から北西へ縦断する自然河道SR03内に掘り込まれている土坑である。土坑の平面形態は長楕円形状を呈し、北側にはステップ状の平坦面を設け、二段に掘り込まれており、床面には径7cm、長さ60cm程の杭材が打ち込まれていた。規模は長さ2.8 m、幅1.3 m、深さ40cm前後を測る。

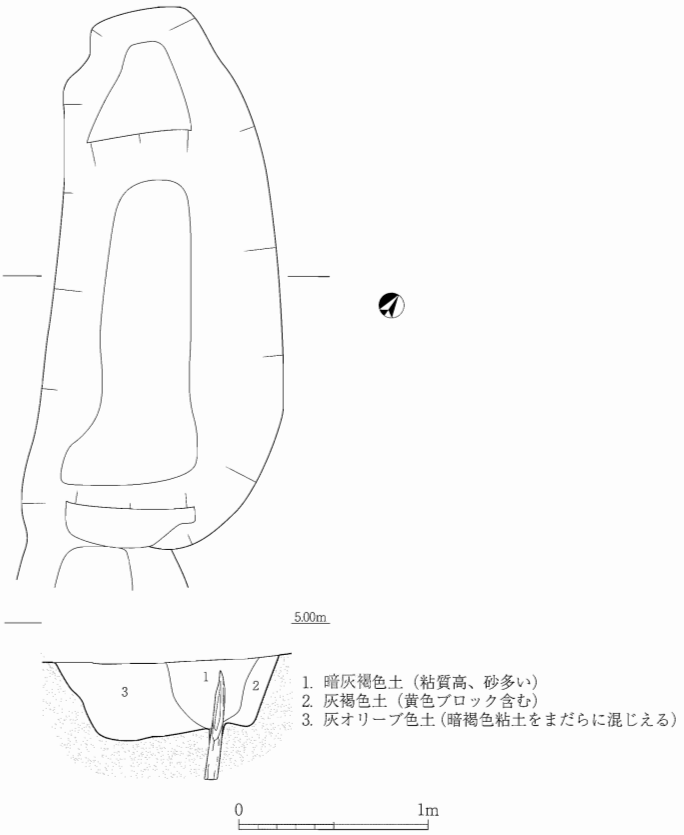
覆土は土坑中央部上層にに暗灰褐色土、下層に灰褐色・灰オリーブ色系の土が堆積していた。遺物は出土していない。

遺構の性格と年代　遺物が出土していないため詳細は不明だが、SR03が古墳時代中期にほぼ埋没する河道であることを勘案すれば、当該期に比定するのが妥当と考えられる。性格は不明だが、自然河道中に掘り込まれていることから、水利に関わる遺構であった可能性が高い。

SK16（第100図）

規模と形態　調査区東南部に位置する遺構で、調査区を東から西へ横断する自然河道SR04の下層で検出した小規模な土坑である。

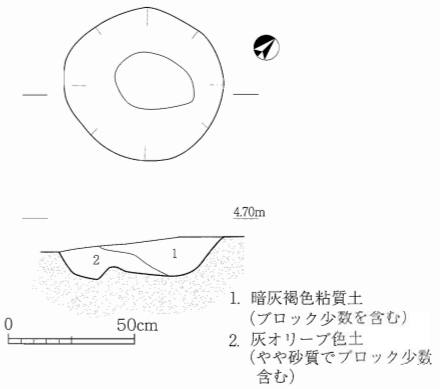
平面形はほぼ円形で、断面は浅い皿状を呈しているが、SR04により上半部を削られているため本来の深さは不明である。現状での土坑の規模は、径60～65cm、深さ15cmを測る。覆土は上層がブロック小粒を含む暗灰褐色粘質土、下層が灰オリーブ色土で、他のピット・土坑覆土とは大きく様相が異なる。



第99図　九景川遺跡Ⅲ区SK15実測図　S=1/40

遺物は当土坑内からは出土していないが、付近より突帯文土器が数点出土している。

遺構の性格と年代　土坑内からの出土遺物はないが、すぐ近くから突帯文土器が出土したことや覆土が後述する縄文時代包含層である6層に類似する点から縄文時代晩期の遺構である可能性が考えられる。



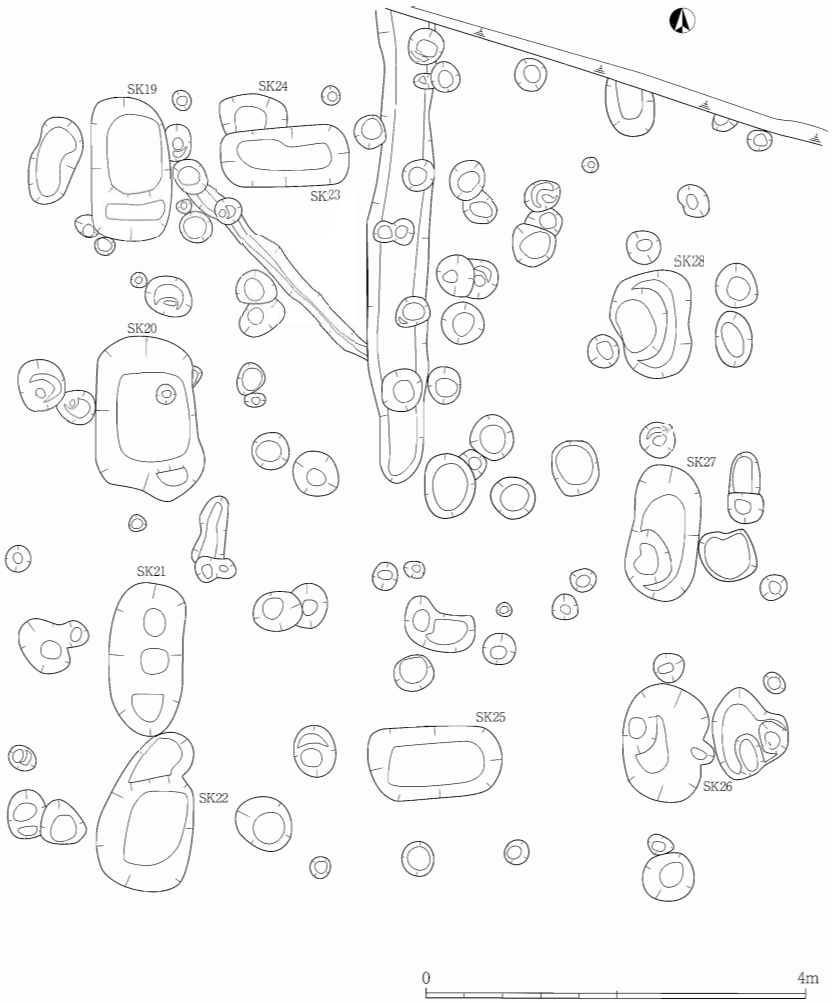
第100図　九景川遺跡Ⅲ区SK16実測図
S=1/30

SK19～28（第101～103図）

規模と形態　Ⅲ区北側中央付近で検出した土坑群で、ほぼ南北に長楕円形の土坑が2列に整然と並んでおり、さらにその南北端には同様な形態の土坑がこれに直交するように配置されていた。こうした配置状況から、当初は大形建物の柱穴群とも考えたが、現状の配置では建物が復元できる状況にはなり得ないことから、一定の規則性をもって配置された土坑群と判断した。

土坑の平面形態は長楕円形もしくは隅丸長方形状を呈するものが多いが、SK22やSK28のようなやや不整形な形態をなす土坑も含まれる。構造は段のない単純な形態のものが多いが、SK22やSK26のようにステップ状の平坦面や2段掘の形態を呈するタイプも含まれる。壁面は各土坑とも比較的急傾斜に掘り込まれている。床面は平坦なものが多いが、やや凹凸状をなすタイプ（SK19・21）も含まれる。また東列の一群は2段掘状をなす点で共通しており、西列の一群とは対照的なあり方を示している。土坑の規模は表4のとおりであるが、概して長さ1.2～1.4m、幅60～100cm前後、深さ60～70cm前後のものが多い。

当土坑群の最大の特徴は、土坑内の埋土がしまりのない灰色粘土である点で、多少の程度の差こ



第 101 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK19 ～ 28 遺構配置図　S=1/80

そあれ各土坑ともこの点では共通しており、その計画的な配置とともに築造年代の近さを物語るものと言える。

また、通常の柱穴・土坑群とに幾つか切り合い関係が認められるが、現状ではいずれの場合においても当土坑群が後出する。また SK23 と SK24 は唯一当類の土坑間で切り合い関係を持ち、SK23 が SK24 を切っている。

遺物はいずれも細片のため図化していないが、SK19 から土師器片、SK26 から土師器・土師質土器片、SK28 から土師器片が若干出土している。

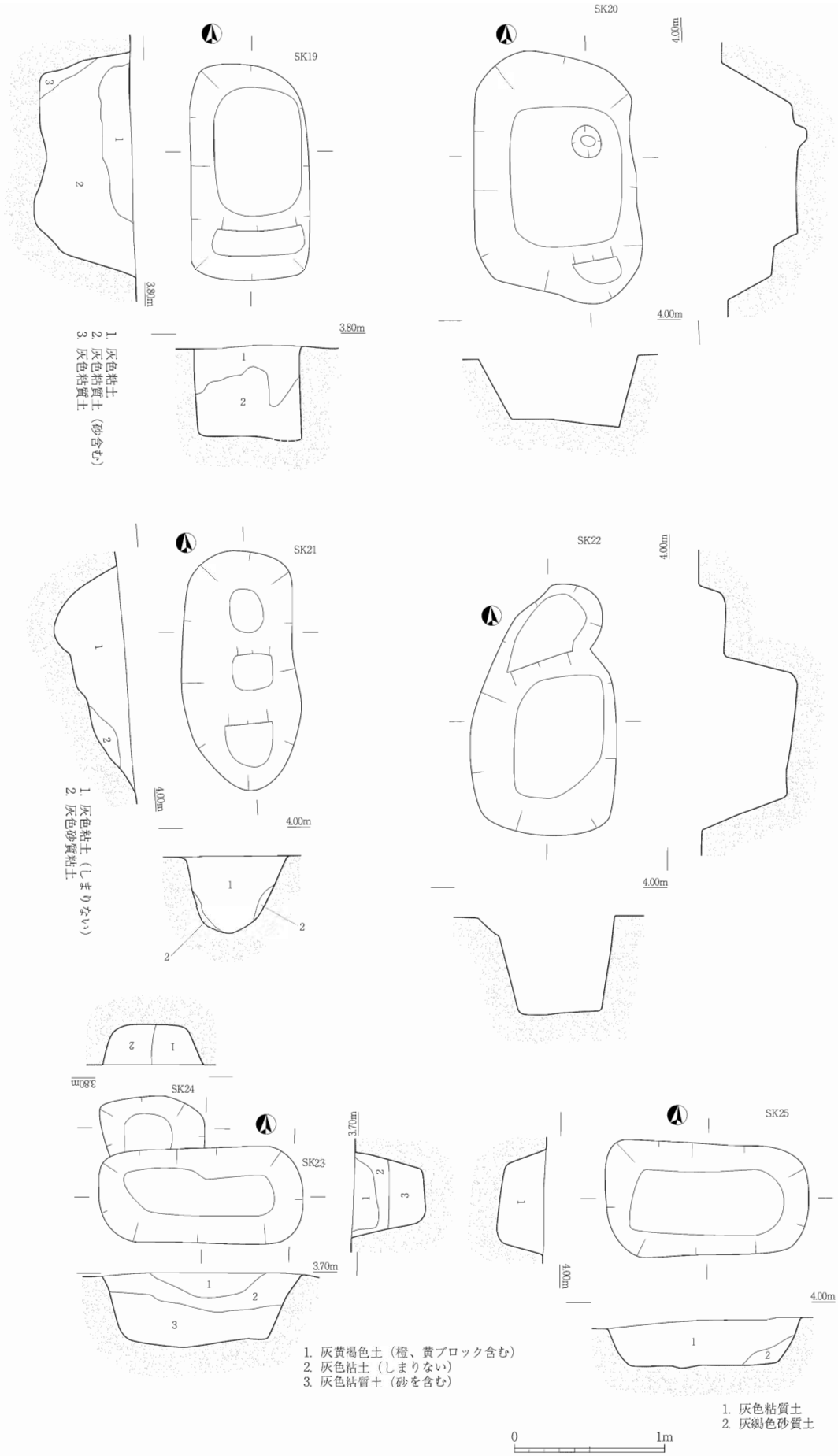
遺構の性格と年代　幾つかの土坑からわずかながら土器が出土しているが、いずれも検出面付近からの出土であり、年代決定の根拠とはなりにくく、現状では切り合い関係から古代の柱穴群より後出する遺構群であると言えるのみである。性格についても不明といわざるを得ない。

(4) 溝

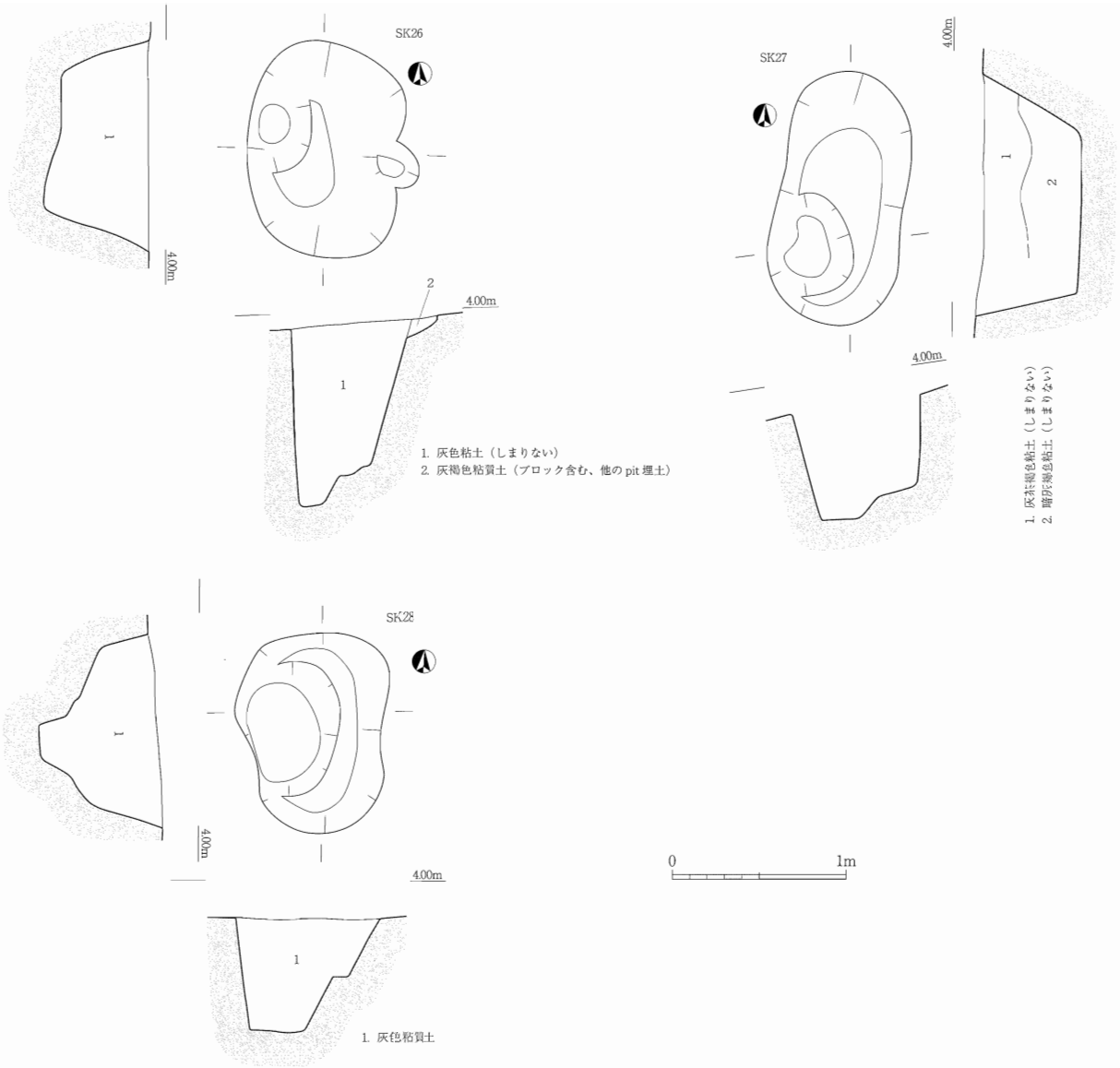
Ⅲ区では溝状遺構を多数検出したが、ここでは遺物が出土した溝を中心に報告する。

SD11（第 104 図）

規模と形態　調査区北東の、Ⅲ区北東古代建物群の北側に位置する溝で、SB06 の北側柱から約 2.3 m離れた箇所に SB06 主軸とほぼ並行して走っている。遺存状況はあまり良好でなく、部分的に途切れているが、東端は前述のように SK07 と切り合い関係にあり、SK07 より後出する。



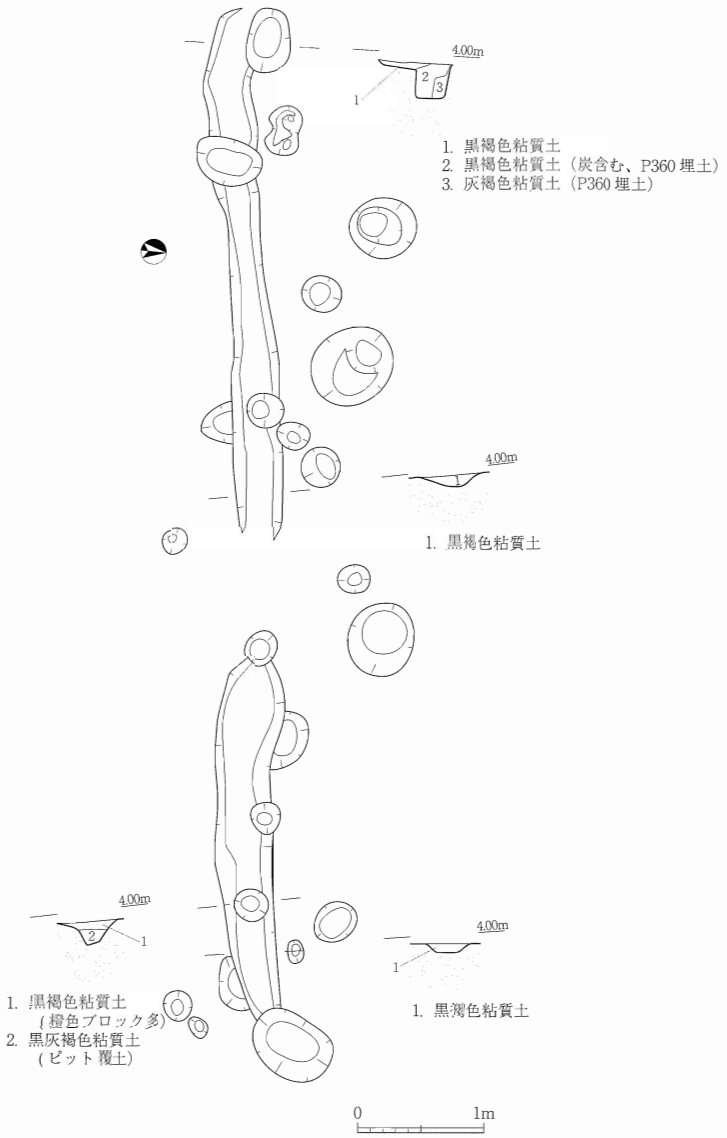
第 102 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK19 ～ 25 実測図　S=1/40



第 103 図　九景川遺跡Ⅲ区 SK26 ～ 28 実測図　S=1/40

表 4　九景川遺跡Ⅲ区 SK19 ～ 28 一覧表

遺構名	長さ	規模（cm）幅	深さ	主軸の配置	平面形態	構造	床面形態	出土遺物
SK19	142	76	66	南北	長方形	1 段掘	凹凸面	土師器
SK20	170	104	48	南北	長方形	片側 2 段掘	ピット有	
SK21	160	76	47	南北	長楕円形	1 段掘	凹凸面	
SK22	165	94	65	南北	長楕円形	片側 2 段掘	平坦	
SK23	134	64	50	東西	長方形	1 段掘	ほぼ平坦	
SK24	－	－	－	南北	－	－	－	
SK25	134	76	31	東西	長方形	1 段掘	平坦	
SK26	124	90	102	南北	長楕円形	2 段掘	凹凸面	土師器、土師質土器
SK27	142	73	58	南北	長楕円形	2 段掘	平坦	
SK28	103	87	68	南北	長楕円形	2 段掘	平坦	土師器



第 104 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD11 実測図　S=1/60

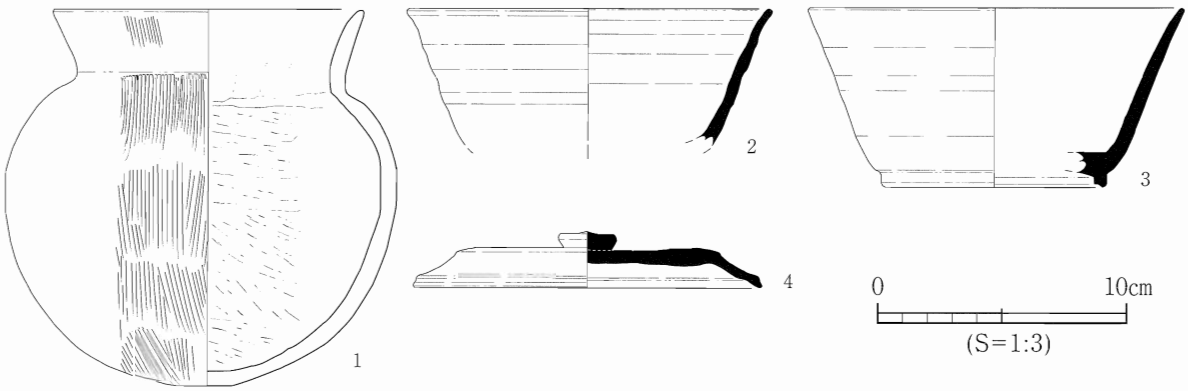
現状での規模は、長さ 9.7 m、幅は広い箇所で 50cm前後、深さ 10cm前後を測る。覆土は古代建物群の柱穴埋土と同様な黒褐色系の粘質土が堆積していた。

SD11 出土遺物（第 105 図）

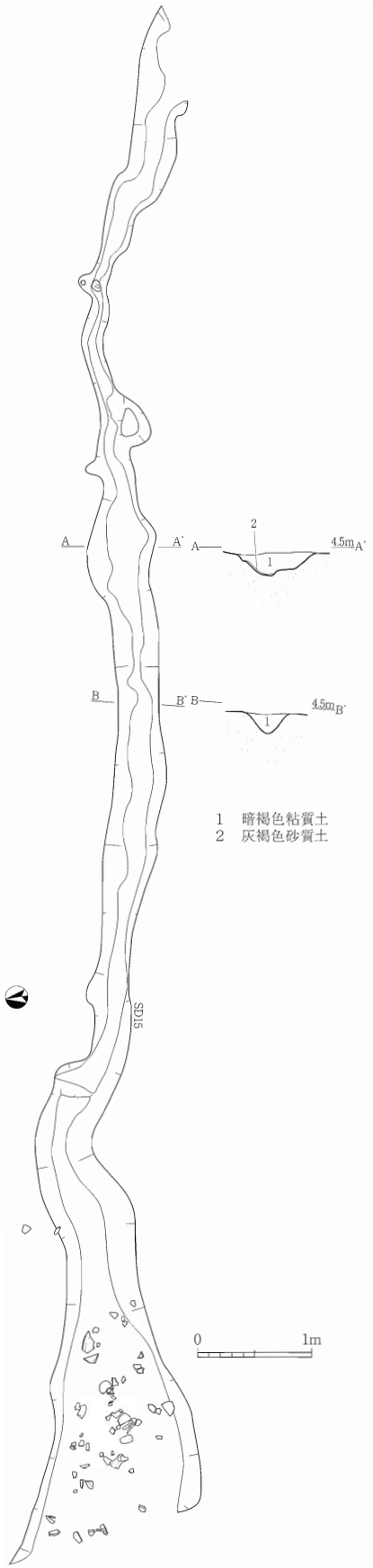
第 105 図 1 は小型の土師器甕で、口径 12.2cm、器高 15.0cmを測る。口縁部は単純口縁で外反気味にやや上方へむけて立ち上がり、器壁はやや厚い。胴部はよく張り外面はタテハケで仕上げる。底部は完全な丸底をなす。周辺からの混入と思われる。

2・3 は須恵器坏である。両者ともほぼ同様なタイプで、高台は底部外周近くに取り付き、体部が直線的に長く立ち上がる。4 は須恵器蓋で扁平な宝珠形つまみを持ちやや器高が高いタイプのもので、口縁部端部はわずかに下方へ屈折する。

遺構の性格と年代　SD11 内出土遺物は明らかな混入品である 1 を除けば、青木Ⅳ期の特徴を呈する資料であり、Ⅲ区北東部古代建物群の年代とほぼ同時期の遺構と考えられる。遺構の性格については、



第 105 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD11 出土遺物実測図　S=1/3



第 106 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD15 実測図
S=1/60

SB06 の建物主軸とほぼ並行し、その範囲もそれとほぼ一致していることからみてSB06の雨落溝であった可能性が高い。

SD15（第 106 図）

規模と形態　調査区中央部で検出した溝状遺構で、西側は後世の削平により失われている。当遺構は後述する SR04 と完全に重複している。すなわち、SR04 が埋め立てられたのち掘り込まれた溝で、その北岸は SR04 のそれとほぼ一致する。SR04 覆土の一部である可能性もあるが、SD15 とした溝状遺構の覆土は SR04 のそれと明らかに区別されるため、埋没後改めて掘り込まれた遺構であると理解した。

溝は蛇行状を呈しており、現状での規模は長さ 13.6 m、幅 30 ～ 140cmを測り、西側に向けて広がっている。覆土は暗褐色系の粘質土が堆積していた。

SD15 遺物出土状況（第 106・107 図）　遺物は東側からも出土しているが、幅が広くなった西側から比較的まとまって出土している。他の遺構と比べると、土師器甕や須恵器甕が比較的まとまって出土しているのが特徴である。

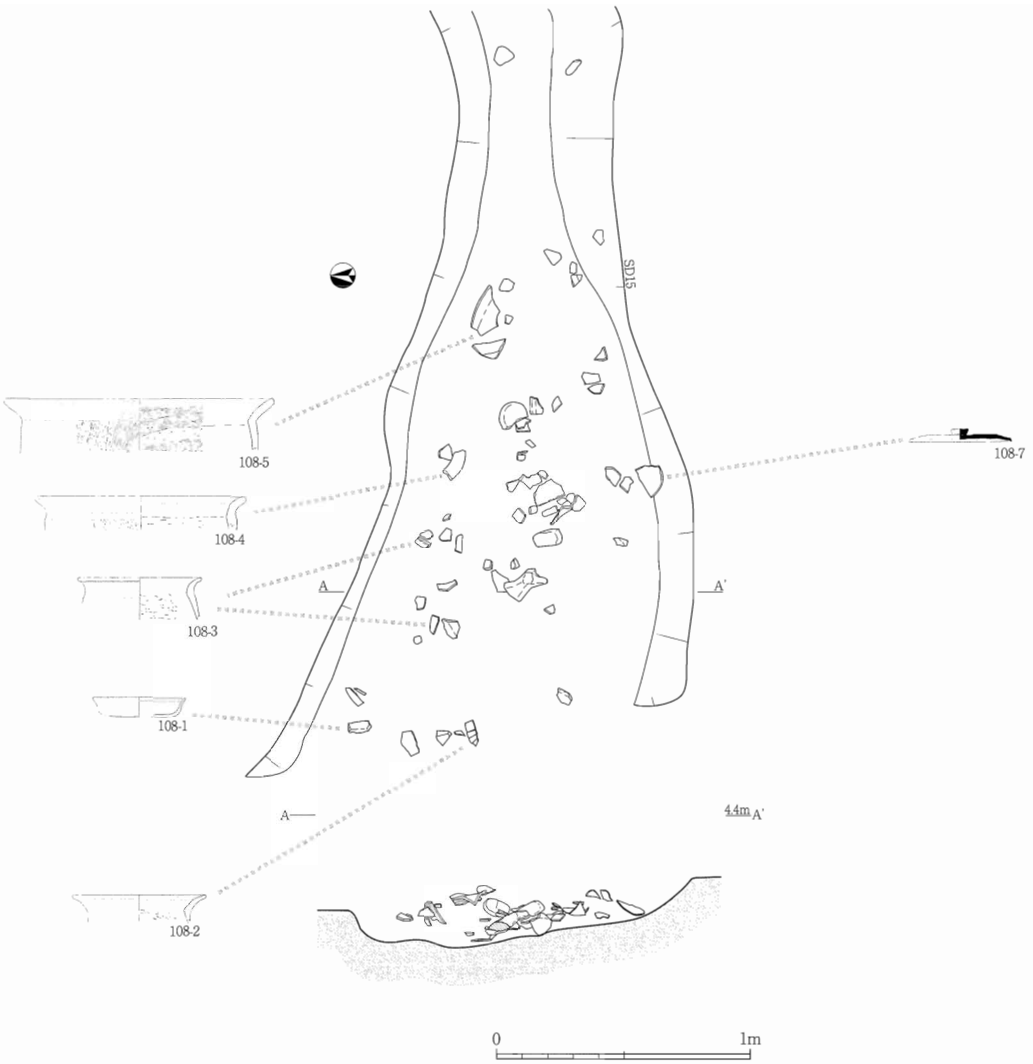
SD15 出土遺物（第 108 図）

第 108 図 1 は赤彩土師器である。底部から体部への立ち上がりは丸みを帯び、口縁部は緩やかに外反する。赤彩は内外面だけでなく底部まで及んでいることから 8 世紀前半に属するものと考えられる。2・3 は中形の土師器甕である。2 は口縁部が長く緩やかに外反する。3 は頸部に強いヨコナデを加え、肩部に稜を形成する。肩の張りは弱い。7 ～ 8 世紀に属すると考えられる。4・5 は口径 30cm以上の大型の甕で、4 は 3 と同様に肩部にヨコナデによる稜を形成している。5 は口径 42.6cmを測り、口縁部はくの字に強く外反する。肩の張りは弱く、外面にはタテハケ、内面にはヨコハケのち部分的にヘラケズリを施す。

6・7 は須恵器蓋で、いずれも扁平な宝珠つまみを備え、口縁部端部が下方へわずかに屈折し、端部外面にヨコナデによる面を形成する。6 は墨書土器で天井部に不明瞭であるが「中」という文字が判読できる。

8 は無高台の須恵器坏で、口縁部はやや外反気味に立ち上がり、底部はヘラ切りのちナデで仕上げている。酸化焼成で淡黄色を呈している。9 は土製支脚で背部から斜め上方に円孔が穿たれている。

遺構の性格と年代　出土遺物は、1 の赤彩土師器は 8 世紀前



第107図　九景川遺跡Ⅲ区SD15遺物出土状況　遺構：S=1/30、遺物：S=12

半まで遡る資料である一方、8の須恵器坏は確実に9世紀代まで降る資料であり、現状ではかなりの時間幅が認められる。しかし当遺構の下限の時期がⅢ区北東部古代建物群の時期と一致し、さらに当遺構を境にその北側においてのみ当該期の建物群が認められるという位置関係を考慮すれば、Ⅲ区北東部古代建物群の時期の遺構である可能性が高い。

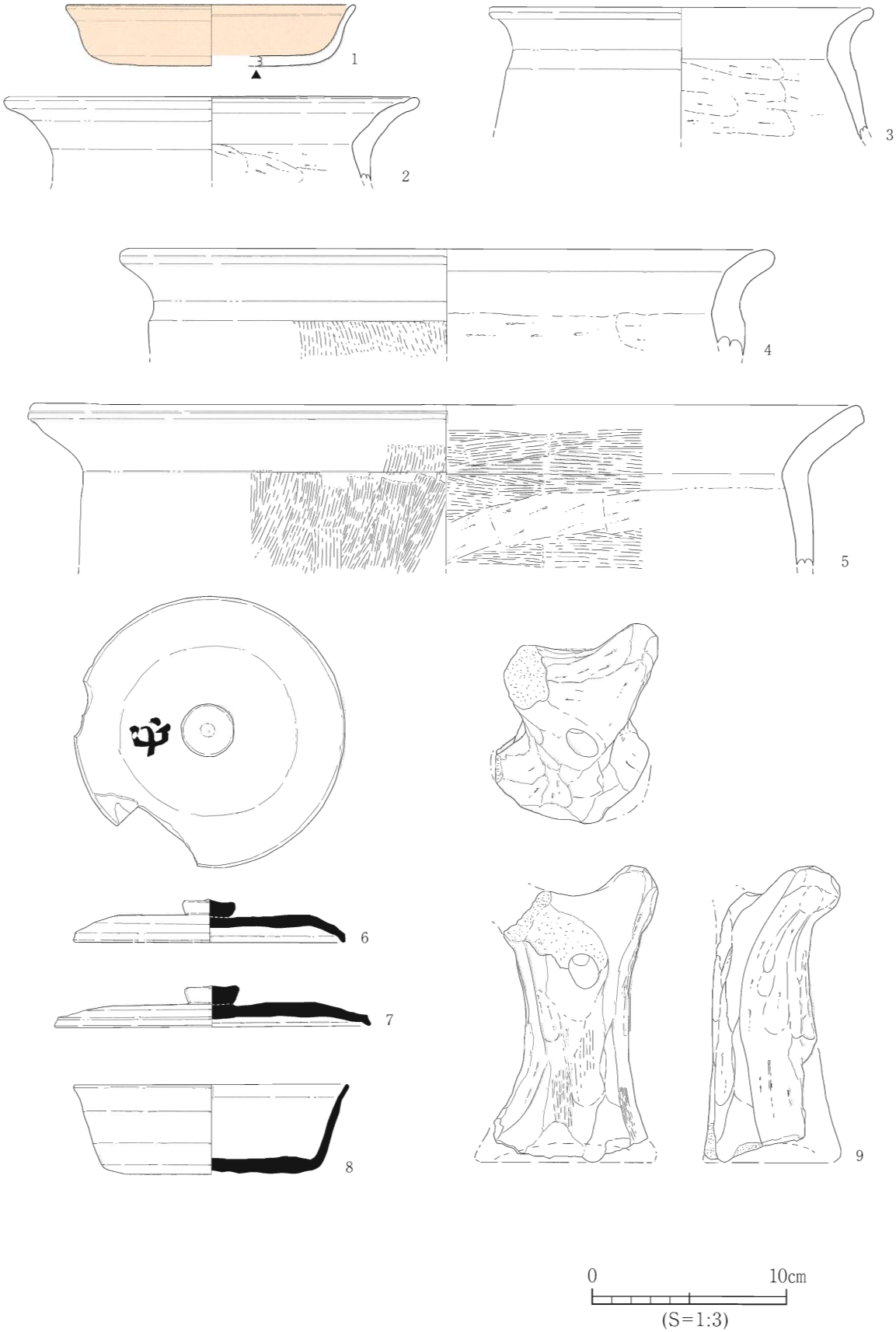
SD24（第109図）

規模と形態　調査区北西部に南北方向に走る溝で、北側は調査区外へと延びている。周辺に位置する他の遺構と異なり、当遺構は中世包含層である3層を除去した4層上面で検出した遺構であり、SB12や加工段1の一部を切っている。

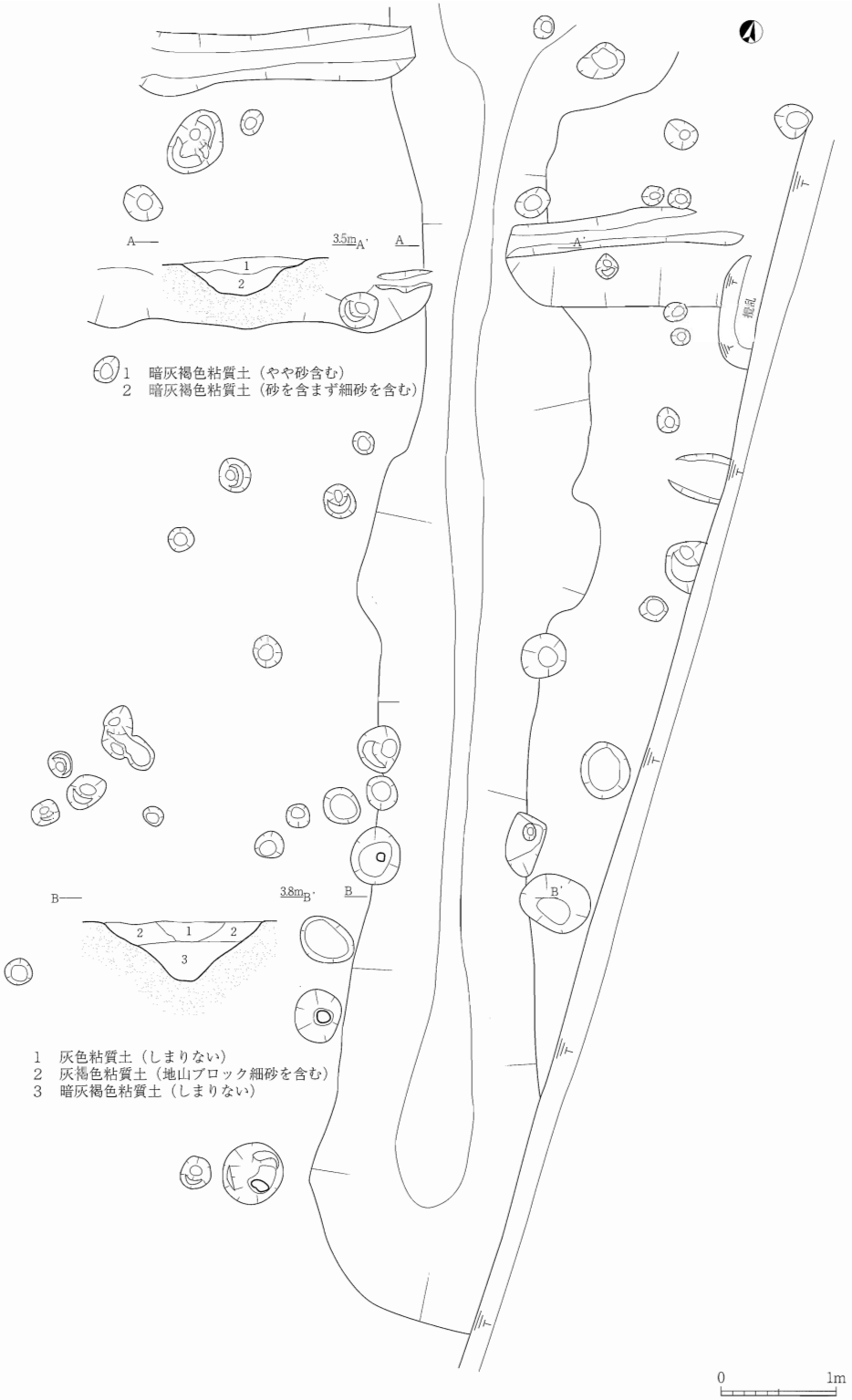
溝は北からやや西へ振れた方向に直線的に延びており、現状での規模は長さ11.4 m、幅1.4～2.1 m、深さ50cm前後を測る。溝の断面形はやや緩いV字状に近い台形状を呈している。溝内の覆土は比較的しまりのない暗灰褐色～灰色系の粘質土が堆積していた。

SD24遺物出土状況（第110図）　SD24内からの出土遺物は比較的少なく、その多くは北側に集中していた。また溝の中央北側西肩付近では古銭がまとまって出土している。また、溝の南端付近の底面では馬の中手骨が単独で出土している（写真64）。

SD24出土遺物（第61図・第111図）



第 108 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD15 出土遺物実測図　S=1/3

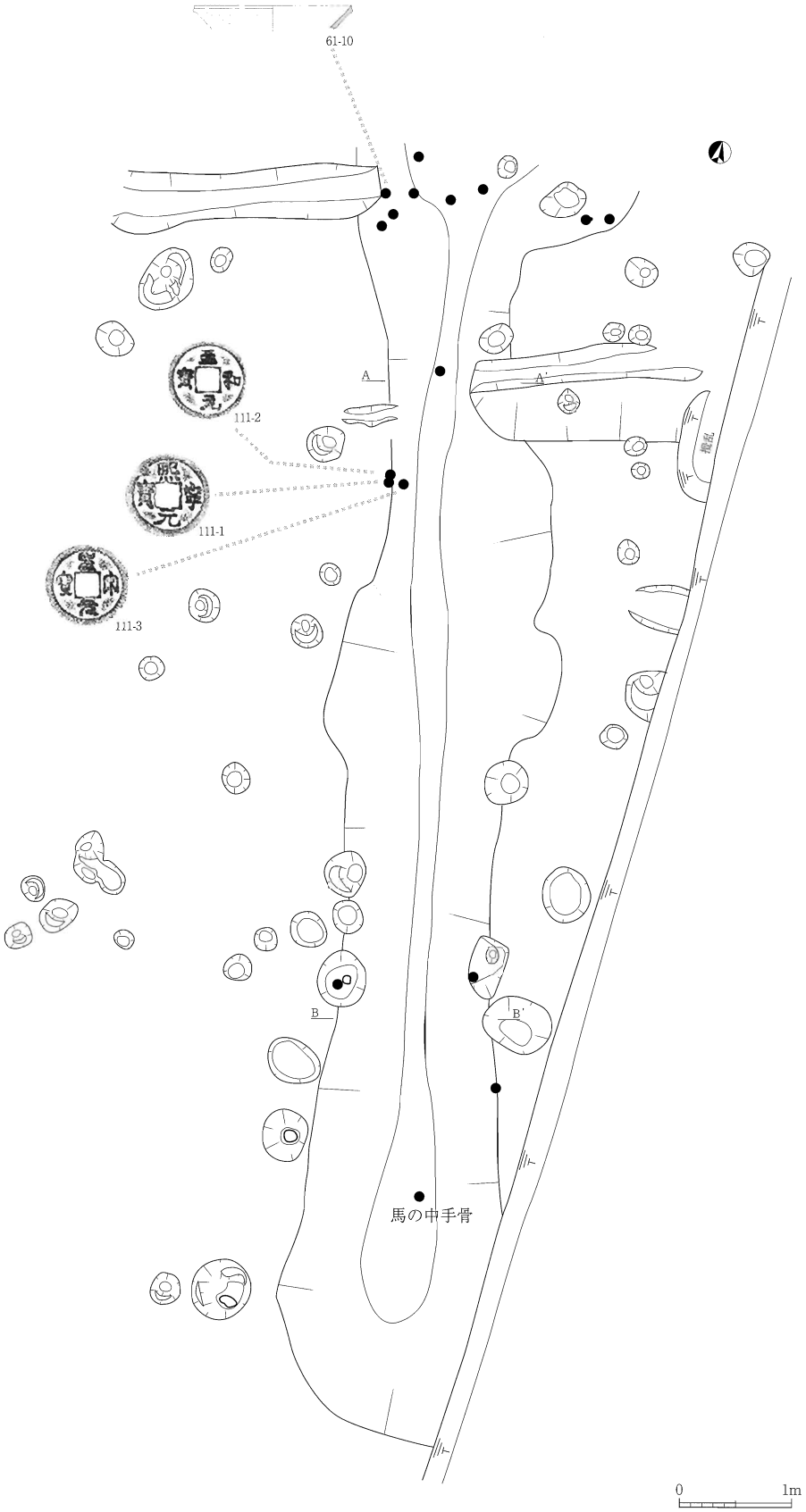


第109図　九景川遺跡Ⅲ区SD24実測図　S=1/60

第61図10は器形や胎土からみて、東播系須恵器鉢と考えられる。小片であり、口径の復元は正確なものではない。11は土師質土器坏の底部で底面に回転糸切痕を残す。12は土師器甕で口縁部は強く外反する。8～9世紀頃の遺物であり混入品と考えられる。

第111図は銭貨である。詳細は表5に示した。いずれも北宋銭に属し初鋳年は1054～1101年であり、Ⅰ区SK01の銭貨と比較すると遺存状態は比較的良好である。

遺構の性格と年代　層位的関係や出土遺物から、SD24の年代は12～13世紀頃と考えられる。性

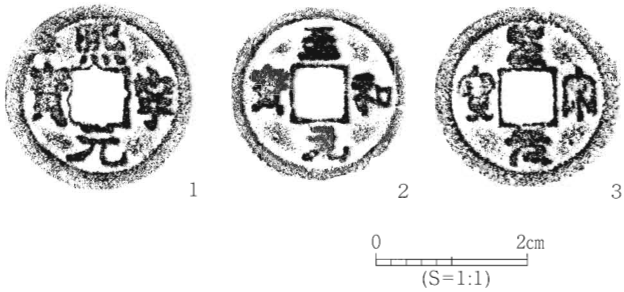


第 110 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD24 遺物出土状況　遺構：S=1/60、遺物：S=1/12、1/2

格については比較的整った形態から屋敷地の区画溝的な性格が想定されるが、周辺に明確な当該期の建物は確認できず、詳細は不明である。

SD25（第 82 図）

写真 64　SD24 馬中手骨出土状況



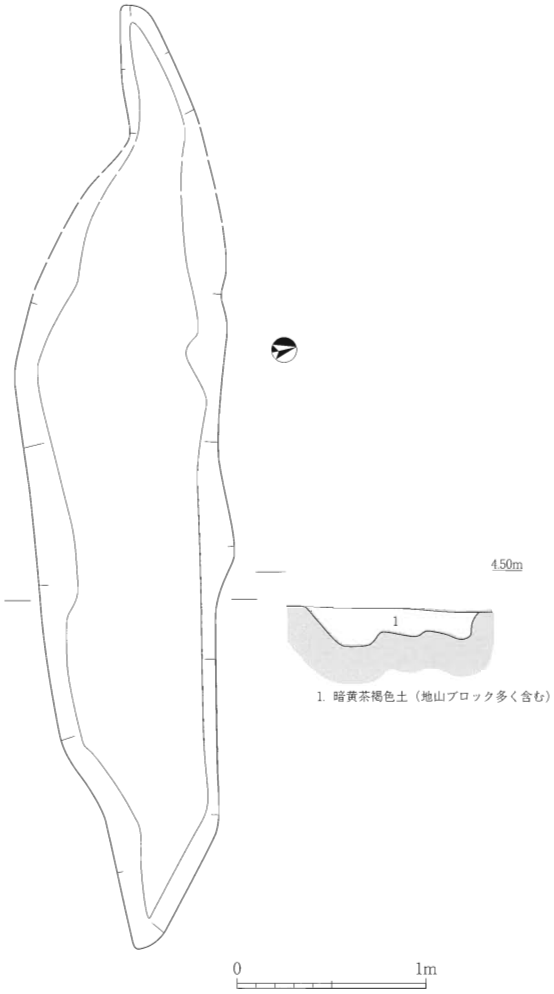
第 111 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD24 出土遺物実測図　S=1/1

規模と形態　Ⅲ区南側で検出した遺構で、北西－南東方向に走る溝である。加工段 2 と切り合っており、これに先行する。形態はほぼ直線状を呈し、長さ 8.0 m、幅 30cm、深さ約 12cmを測る。溝内には灰褐色系の粘質土が堆積していた。当遺構に伴う遺物は出土していない。

遺構の性格と年代　年代については加工段 2 との切り合い関係から古墳時代中期前葉以降に降ることは確実だが、出土遺物は同じ古墳時代中期前半の土師器細片が若干出土していることからあまりかわらない時期のものと考えられる。

SD26（第 112 図）

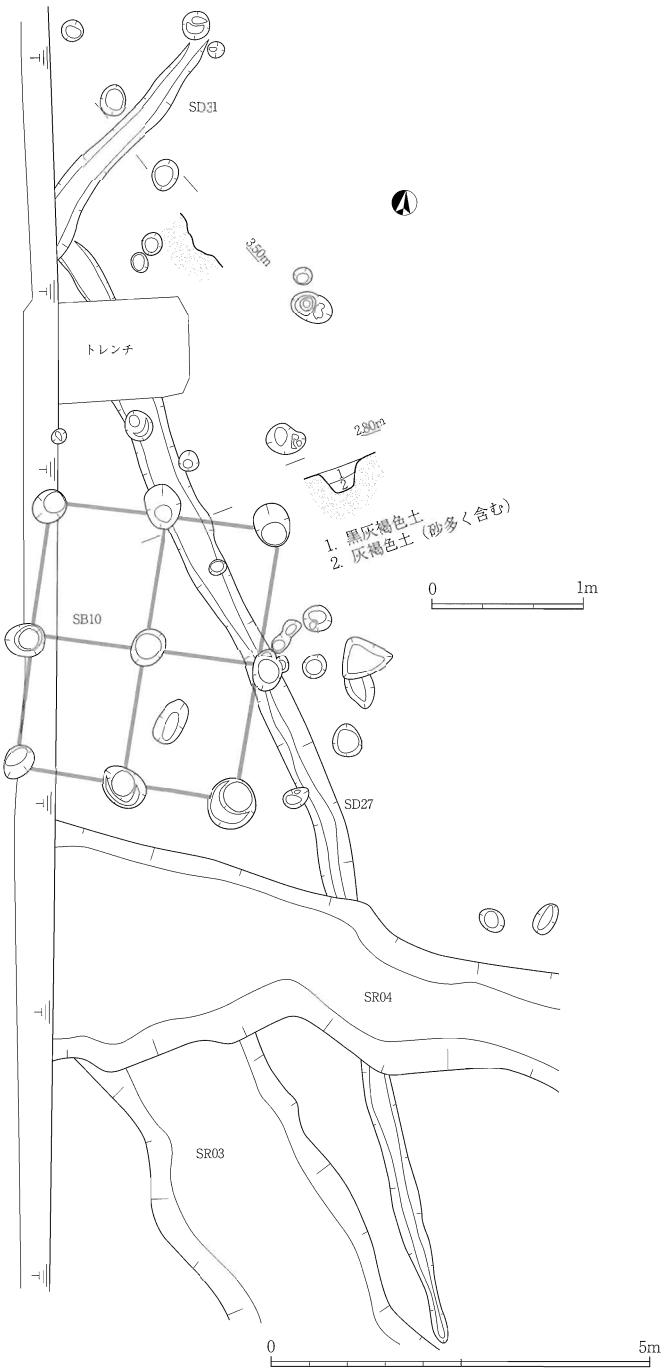
規模と形態　調査区のほぼ中央、SD15 の南にほぼ並行して東西に走る溝で、SD15 と同様に SR04 の埋没後に営まれた溝である。平面形態はやや不整形で、床面は凹凸が著しい。溝の規模は 5.0 m、幅 1.0 m、深さ 20cmを測る。溝の埋土は地山ブロックを含む暗黄褐色土が堆積していた。



第 112 図　九景川遺跡Ⅲ区 SD26 実測図　S=1/40

表 5　SD24 出土銭貨計測表

図版番号	名称	初鋳年	銭径（A）	／銭径（B）	内径（C）	／内径（D）	銭厚	量目
第 111 図 1	熙寧元寶（北宋）	1068 年（暦）	24.60㎜	24.90㎜	6.75㎜	6.50㎜	1.00㎜	3.36g
第 111 図 2	至和元寶（北宋）	1054 年（暦）	23.15㎜	23.50㎜	6.25㎜	6.55㎜	0.80 ～ 1.00㎜	2.59g
第 111 図 3	聖宋元寶（北宋）	1101 年（暦）	24.20㎜	25.60㎜	6.80㎜	6.80㎜	1.10 ～ 1.20㎜	3.13g



第113図　九景川遺跡Ⅲ区SD27・31実測図　S=1/100、1/50

SD26出土遺物（第61図）

第61図13は弥生土器甕で口径16.0cmを測る。口縁部は複合口縁状を呈し、外面には貝殻腹縁による擬凹線文を施文後ナデ消している。草田3～4期に属する資料である。

14は須恵器坏の底部で底径9.4cmを測る。高台は底面外縁付近に取り付き、底面はナデ調整を施す。青木Ⅳ～Ⅴ期に属する。

遺構の性格と年代　当遺構はSD15と同様、SR04より後出することは明らかであり、13は混入品と考えられる。したがって、遺構の時期は14の年代、すなわち9世紀代にまで降るものと考えられる。

SD27（第113図）

規模と形態　調査区北西部で検出した溝で、南東から北西にむけて走り、北側は調査区外へと続いている。SB10、SD31及びSR04と切り合い関係にある。これらの遺構との前後関係は、SD27→SB10・SR04・SD31となる。検出した範囲での規模は、長さ15.1m、幅30cm前後、深さ35cm前後を測る。溝内の埋土は、上層に黒灰褐色土、下層に砂混じりの灰褐色土が堆積していた。遺物は古墳時代中期に属すると思われる土師器細片が出土している。

遺構の性格と年代　SB10・SR04との切り合い関係から8世紀後葉以前の遺構であることは間違いないが、古墳時代中期の土師器細片は混入と思われ、詳細な時期については不明である。

SD31（第113図）

規模と形態　Ⅲ区北西部で検出した南西から北東に延びる溝で、南西側は調査区外へ延びている。SD27と切り合い関係にあり、SD27より後出する。検出した範囲での規模は、長さ3.5m、幅50cm、深さ8cm前後である。遺物は出土していない。

遺構の性格と年代　SD27より後出するということ以外に現状では年代を決定する手掛かりはない。

(5) 土器だまり

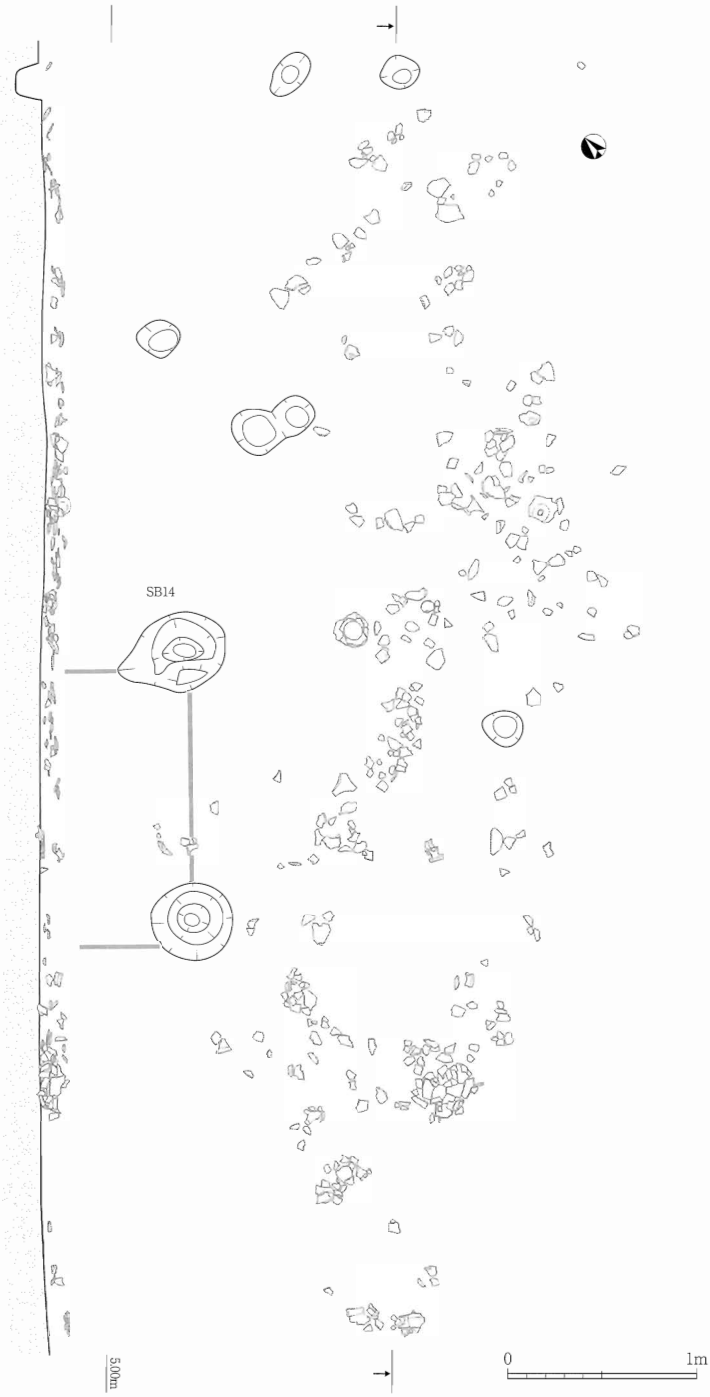
土器だまり（第 114 図）

規模と形態　調査区中央付近、SB14 の東側付近で検出した土器群である。土器だまりは南北方向に 6.4 m × 1.6 m の範囲で長く拡がっており、地山のほぼ直上で検出した。周辺では SB14 以外には小規模なピットを数基確認したのみである。

遺物の出土状況（第 115 図）　土器だまりは幾つかの小グループに分かれているが、器種ごとの偏りなどは認められない。器種は甕が最も多く、高坏がその次を占めており、当該期の一般的土器組成とに大きな違いは認められず、この点で後述する SR03 出土土器群の土器組成とは大きく異なっている。

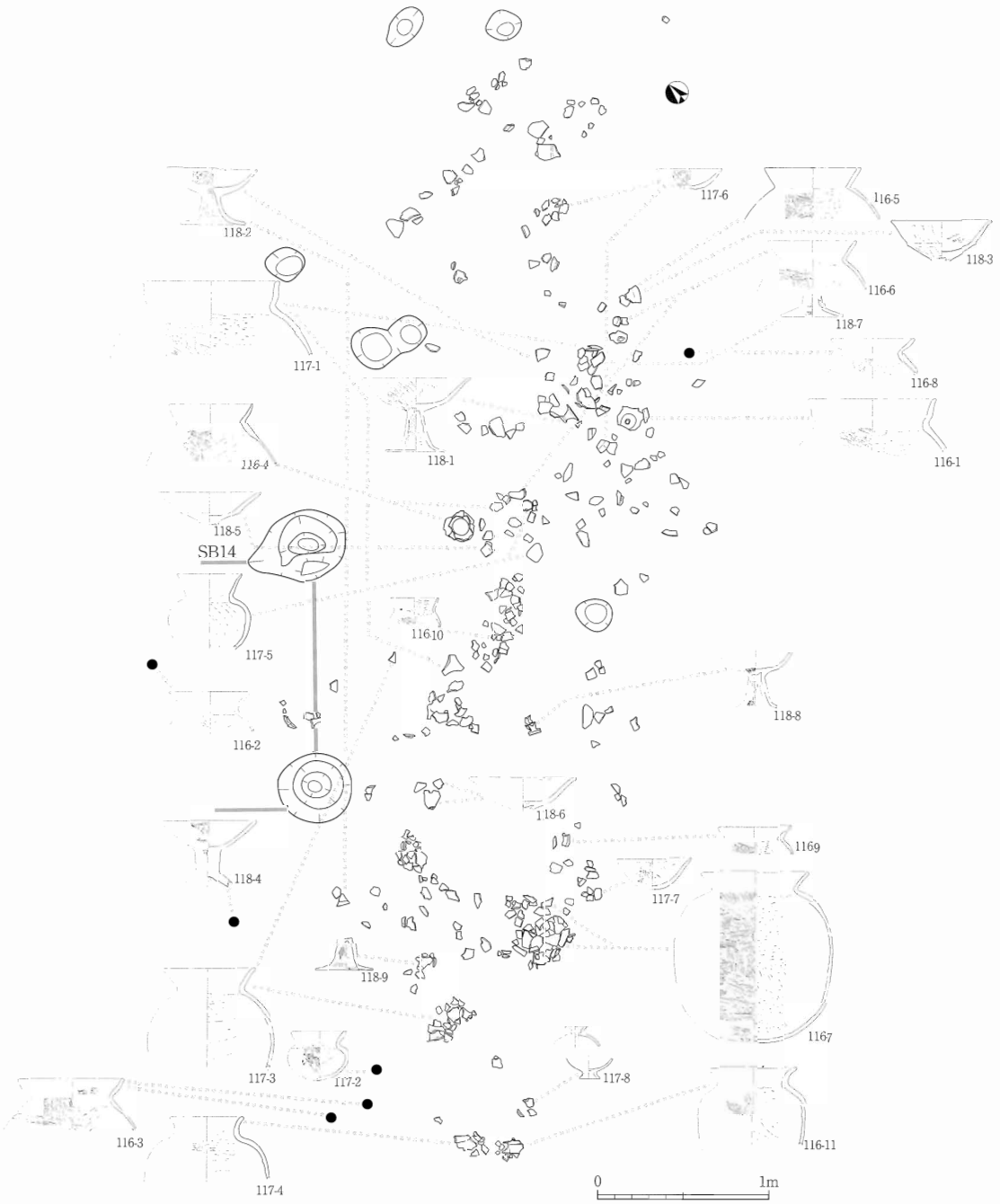
土器だまり出土遺物（第 116 ～第 118 図）

第 116 図、第 117 図 1、3、4 は甕である。第 116 図 1 は退化した複合口縁を有する甕で、口縁部外面に痕跡的な稜を残し、やや厚手のつくりのものである。2 はやや小形の甕で口縁部は単純口縁で長く外反気味に立ち上がる。3 は口縁部が内湾気味に立ち上がるが、端面は内側に肥厚せず、外方にやや肥厚する。肩部にヨコハケを施す。4 は布留甕的な内湾口縁タイプで、端面を上方に若干丸く肥厚させている。5 は内面肥厚の認められる布留系甕で灰白色を呈する。6 も同様なタイプで肩部にヨコハケを施す。



第 114 図　九景川遺跡Ⅲ区土器だまり実測図　S=1/40

7 はほぼ完形に復元できる甕で、肩部及び胴部下半がよく張り、胴部最大径付近が直線状をなす、ずんぐりとした器形の甕である。胴部下半の屈曲点と内面の指頭圧痕の範囲、外面ハケ目の転換点がほぼ一致していることから、型作りによる製作であった可能性が高い。色調は灰白色を呈する。9 は小形の甕で退化した複合口縁状を呈し、肩部にヨコハケのちヘラ状工具によるランダムな単線が認められる。11 は頸部のしまりが弱く、口縁部が厚く外反する甕で、肩部ヨコハケは消失している。色調は橙色で胎土はやや器壁のざらついた感じで砂粒が少ない大東式によくみられる特徴的



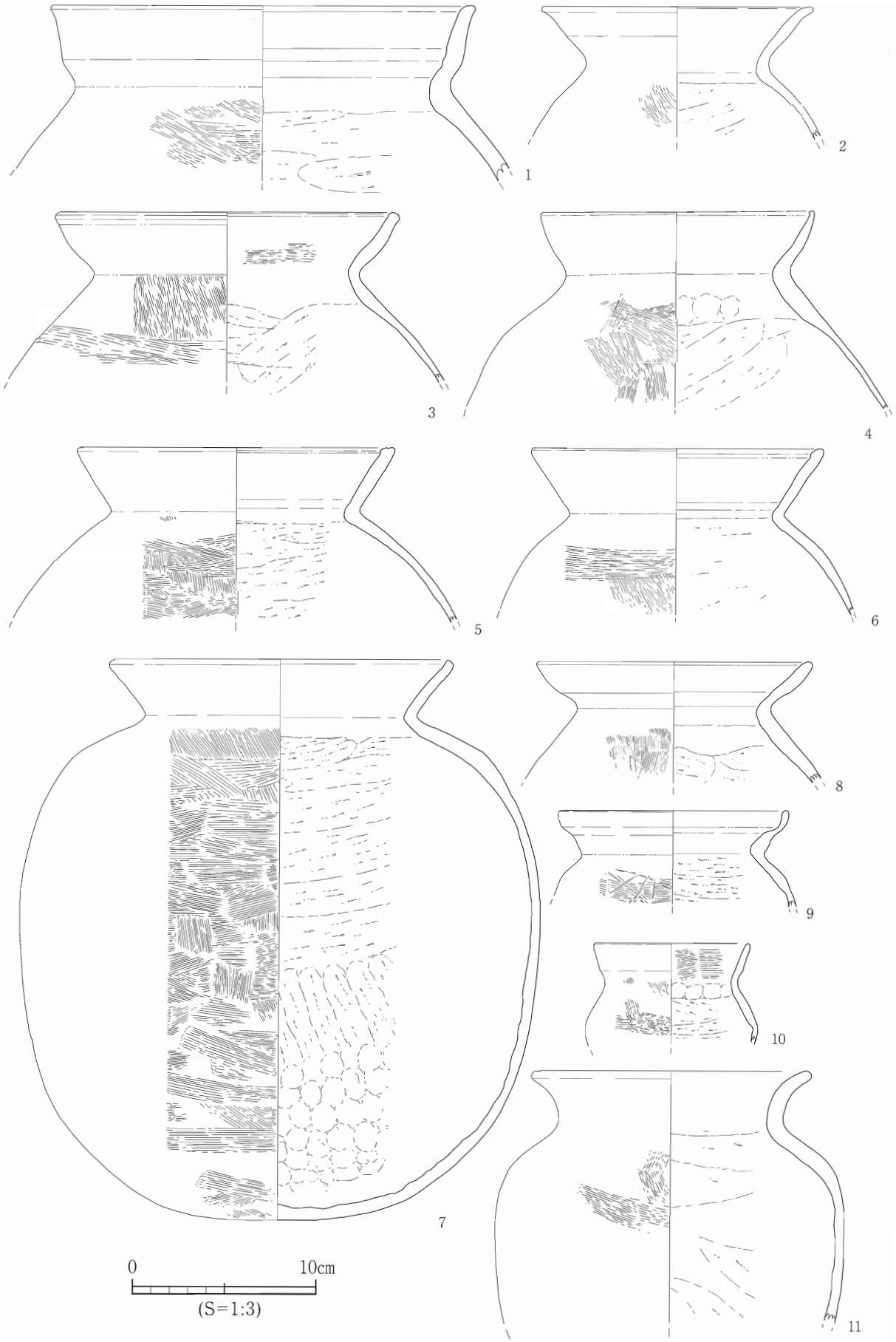
第115図　九景川遺跡Ⅲ区土器だまり遺物出土状況　遺構：S=1/40、遺物：S=1/12

な胎土･色調を呈する甕である。第117図4もほぼ同様な器形ないしは胎土･色調を呈する甕である。

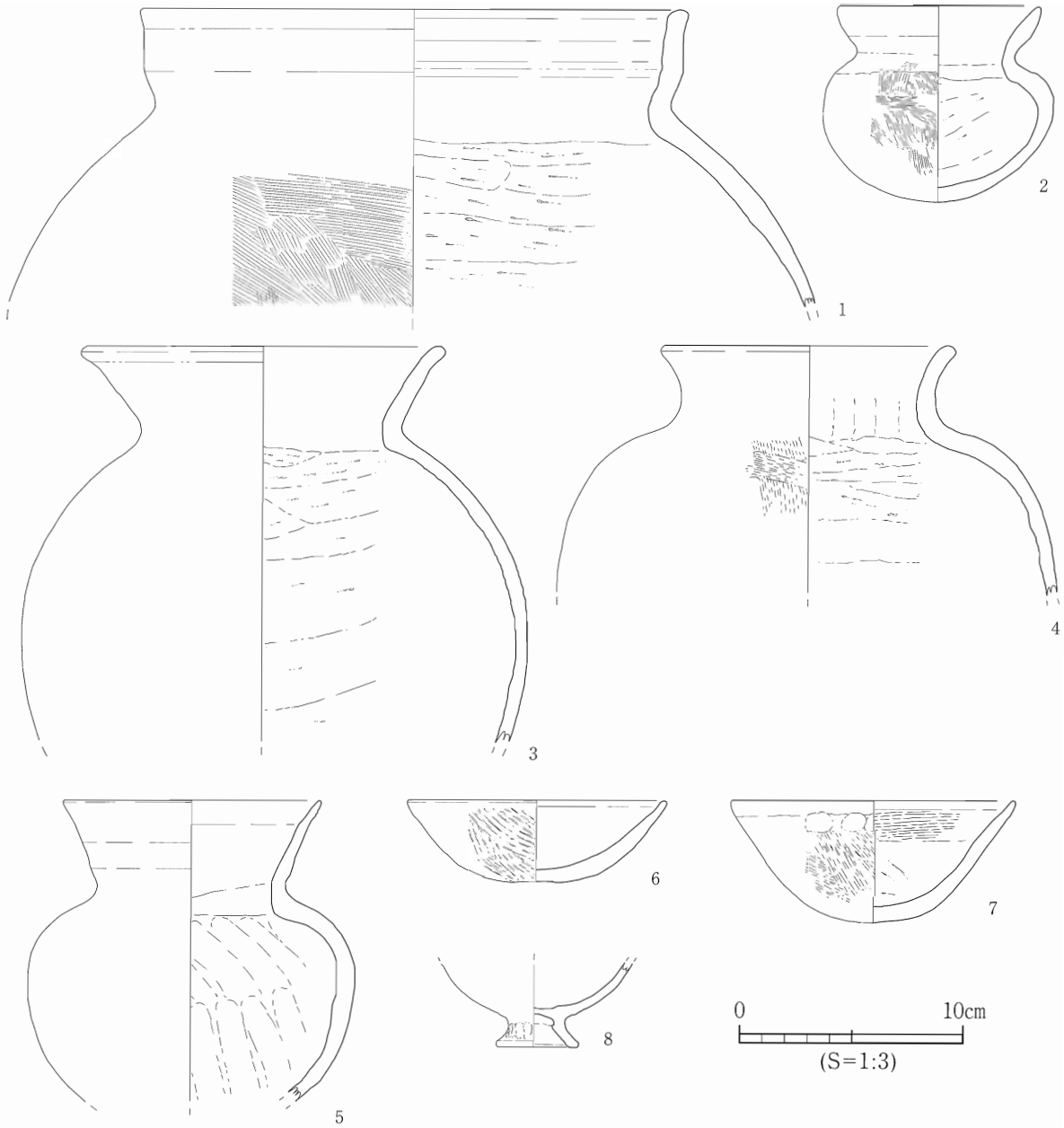
第117図2は小形丸底壺で、大東式的な胎土・色調のもので、口縁部が退化した複合口縁状を呈する。土器だまりでは小形丸底壺はこれと第116図10のみであり、SR03とは対照的なあり方を示す。第117図5は直口壺で小形丸底壺を大形化した形状を呈している。

6・7は坏である。いずれも丸底で口縁部が内湾気味に大きく開くプロポーションをなし、このタイプの杯としては古相に属する。7は外面に指頭圧痕を残す。8は低脚坏または蓋と考えられるが、低脚坏とすれば、内湾状の器形や脚部内面に段を有する形状など、小谷式的な低脚坏とはかなり様相を異にする資料である。ただし、色調は小谷式的な灰白色を呈している。

第118図は高坏である。1は完形に近い高坏で、坏部はわずかに外面に稜を備える。脚部等の形



第116図　九景川遺跡Ⅲ区土器だまり出土遺物実測図(1)　S=1/3

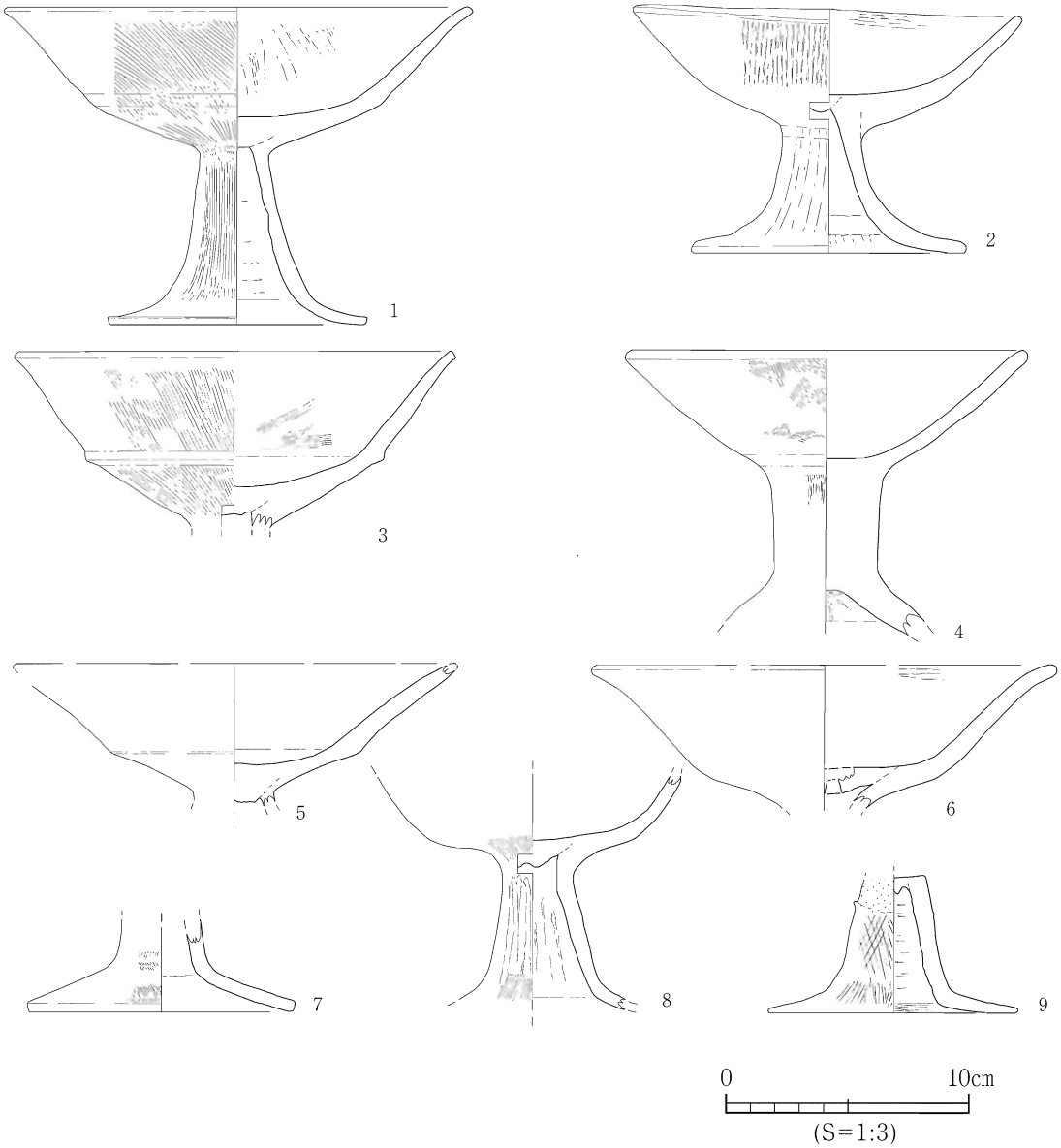


第 117 図　九景川遺跡Ⅲ区土器だまり出土遺物実測図 (2)　S=1/3

状は小谷式に近いが小谷式に特有の坏部下半の刺突痕 a は認められない。

2 は坏部がやや内湾しつつ直線的に伸びる坏部を呈し、比較的短脚の高坏である。脚部外面に縦方向のヘラミガキが認められる。3 は坏部に段を有する高坏で外面のハケを顕著に残す。色調・胎土は大東式的な特徴を示すものの、坏部下半部がやや長く上方へ立ち上がるなど、定型化していない印象を受ける。4 は坏部がほぼ直線状に開き、脚部が中実を呈する、珍しいタイプの高坏である。6 は口径がやや萎縮し坏部が深くなった小谷式的なプロポーションを呈する高坏の坏部である。色調は小谷式的な灰白色に近い淡黄色を呈する。

7 ～ 9 は高坏脚部である。8 は坏部下半の円盤が分厚く、やや径が大きく浅い刺突痕が認められる。9 は脚部下半が強く屈折する特徴を有する高坏脚部で、坏部との接合の際の剥離痕が明瞭に観察される。



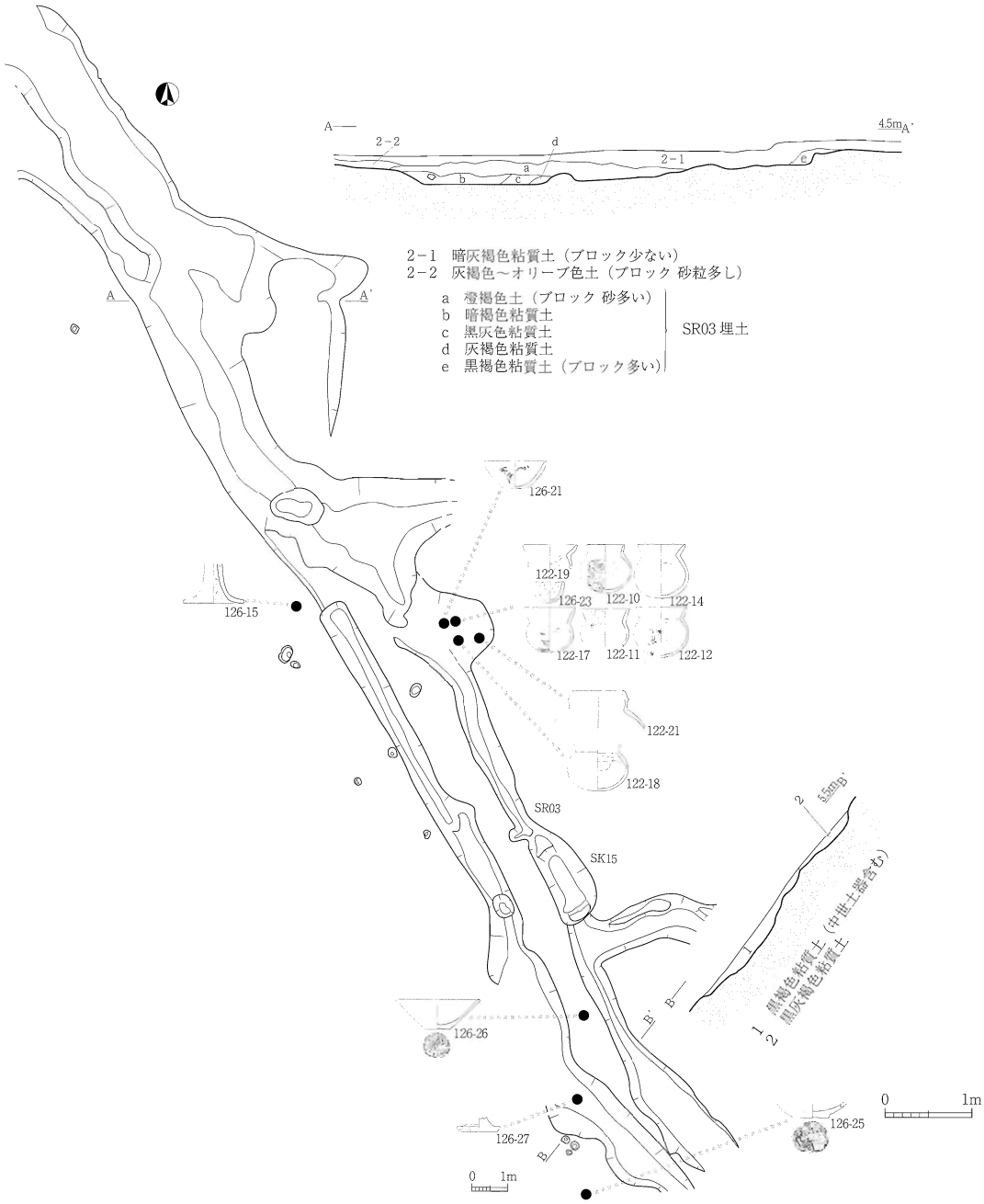
第 118 図　九景川遺跡Ⅲ区土器だまり出土遺物実測図 (3)　S=1/3

遺構の性格と年代　当土器だまり資料は、小谷式、大東式の両者の特徴を備える土器が共存しているが、出土状況は地山直上付近から比較的まとまって出土していることから、その一括性はかなり高く、比較的短期間に形成された土器だまりである可能性が高い。この点から当資料は両時期の過渡的な様相を呈する資料と考えられ、現状では古墳時代中期前葉頃と考えておきたい。出土位置からみて、SB14 と密接な関連を持った土器群であると考えられる。

(6) 自然河道

SR03（第 119 図）

規模と形態　Ⅲ区を南東から北西へ縦断して北流する自然河道である。調査区内で検出した範囲内での規模は、長さ 38.4 m、幅 3.2 ～ 6.6 mを測る。河道はかなり不整形な形状を呈し、下流側の北へ行くにつれ、幅広となる。深さは場所によってまちまちであり、特に北半は後世の削平により本来の深さは不明であるが、現状では 25cm前後を測る。南側は河道が二股状に分かれており、先述した SK15 は河道東岸に掘り込まれている。その対岸に相当する箇所には長さ 7.4 mに渡る細長い



第 119 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 実測図　遺構：S=1/200、1/80、遺物：S=1/12

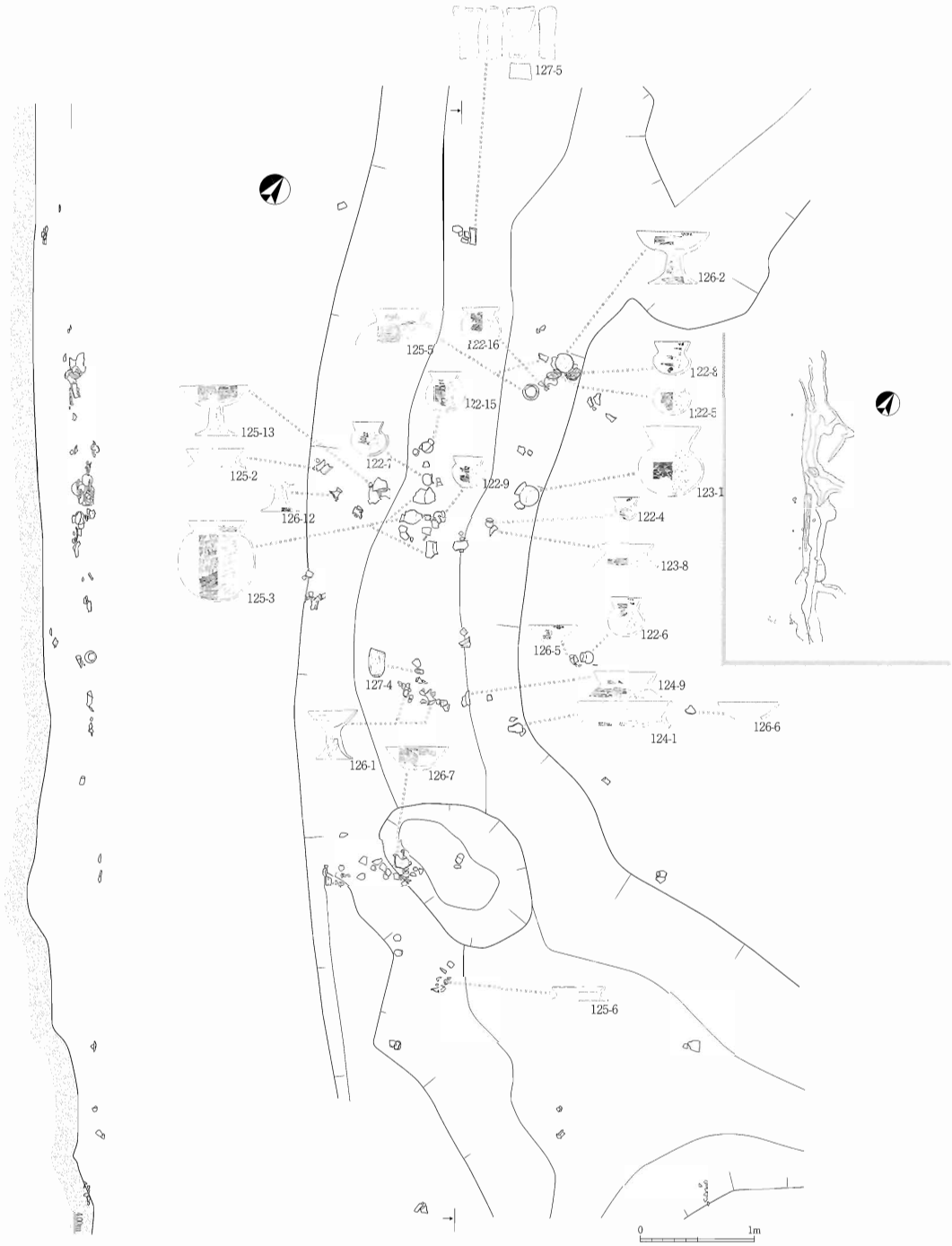
溝状の落ち込みが認められた。遺構名称はつけていないが、人為的な掘り込みである可能性が高い。

河道内の覆土は場所によって異なるが、南側は中世包含層と類似する黒褐色粘質土が、北側の古墳時代中期の土器群が多量に出土した付近の覆土は橙褐色、暗褐色系の粘質土が堆積していた。

SR03 遺物出土状況（第 119 ～ 121 図）

SR03 の規模は長さ 40 m近くにも及び、遺物の出土状況は地点によってかなり異なっている。よって、ここでは南側から順に遺物の出土状況について述べていきたい。

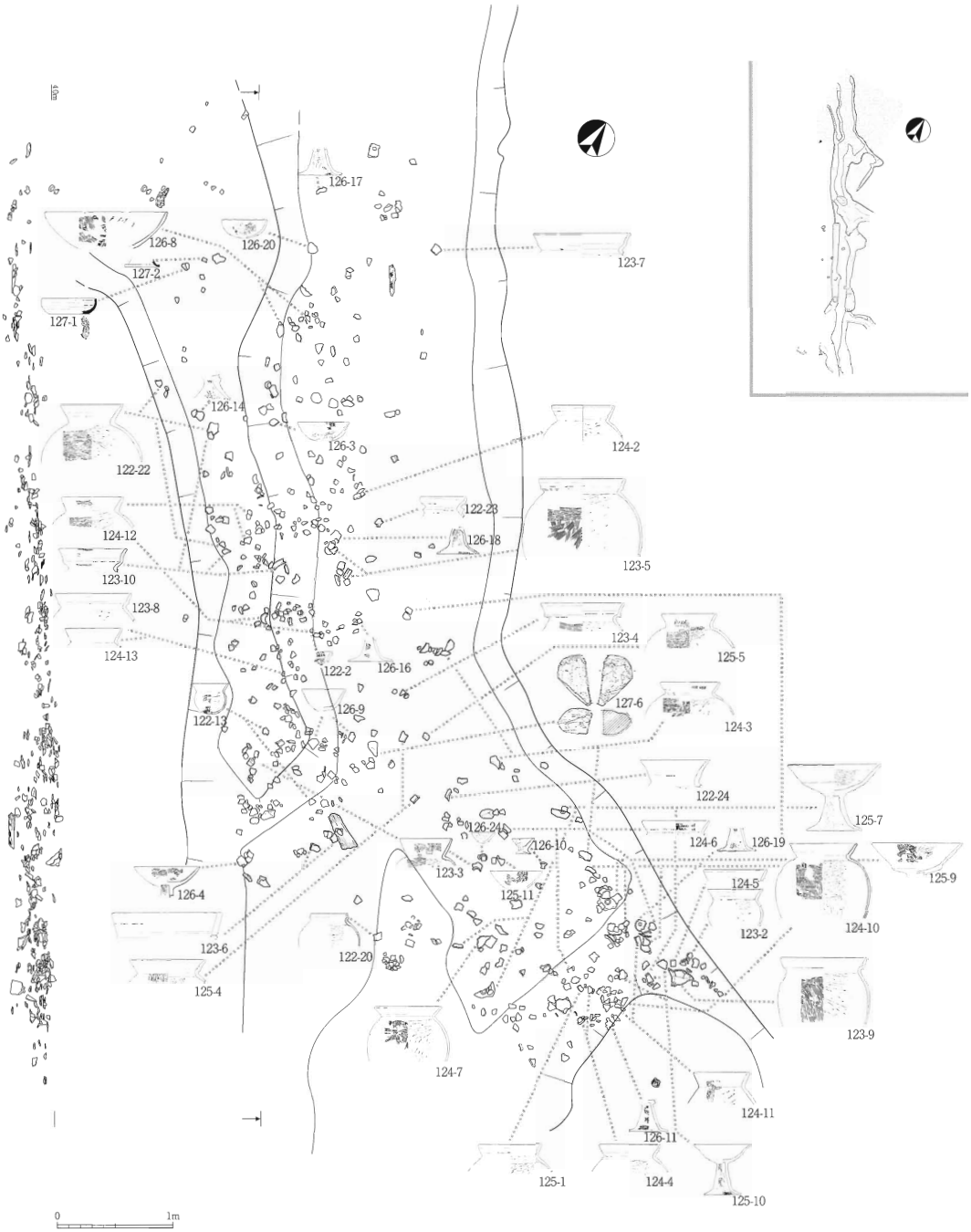
SR03 の最も南側に相当する H7 グリッド付近は SR03 が浅い二股状に分かれており、遺物の出土量は乏しい。流路中及びその周辺からは土師質土器が若干出土しているのみである。これらは上層である中世造成土である 4 層中からの混入品であると考えられる（第 119 図下）。



第 120 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 遺物出土状況（G5 グリッド付近）　遺構：S=1/60、遺物：S=1/18

その北側、SK15 や流路中に溝状の掘り込みが行われた箇所付近においても遺物の出土は僅少である。ただし、SK15 の約 6m 下流の淀み状の窪地から小形丸底壺 7 点、手捏ね土器 1 点などが集中して出土している（第 119 図上）。後述するように SR03 出土土器群は通常の土器群に比べて、小形丸底壺及び高坏、坏の組成比が非常に高い点が注目されるが、特にこの箇所に集中的に小形丸底壺が投棄されている様相は、何らかの祭祀的行為を窺わせるのに十分な出土様態であろう。

これらの小形丸底壺集中出土点の北側、G5 グリッド付近の出土状況を示したのが第 120 図である。この辺りは後世の削平がかなり及んでいた箇所であったが、SR03 内の土器群の遺存状況は比較的良好であった。遺物の出土密度はそれほど高くはないが、完形品に近い資料が多い点、高坏や小形丸底壺の比率が高く、甕が比較的少ない点が注意される。また、遺物は河床床面から若干浮い

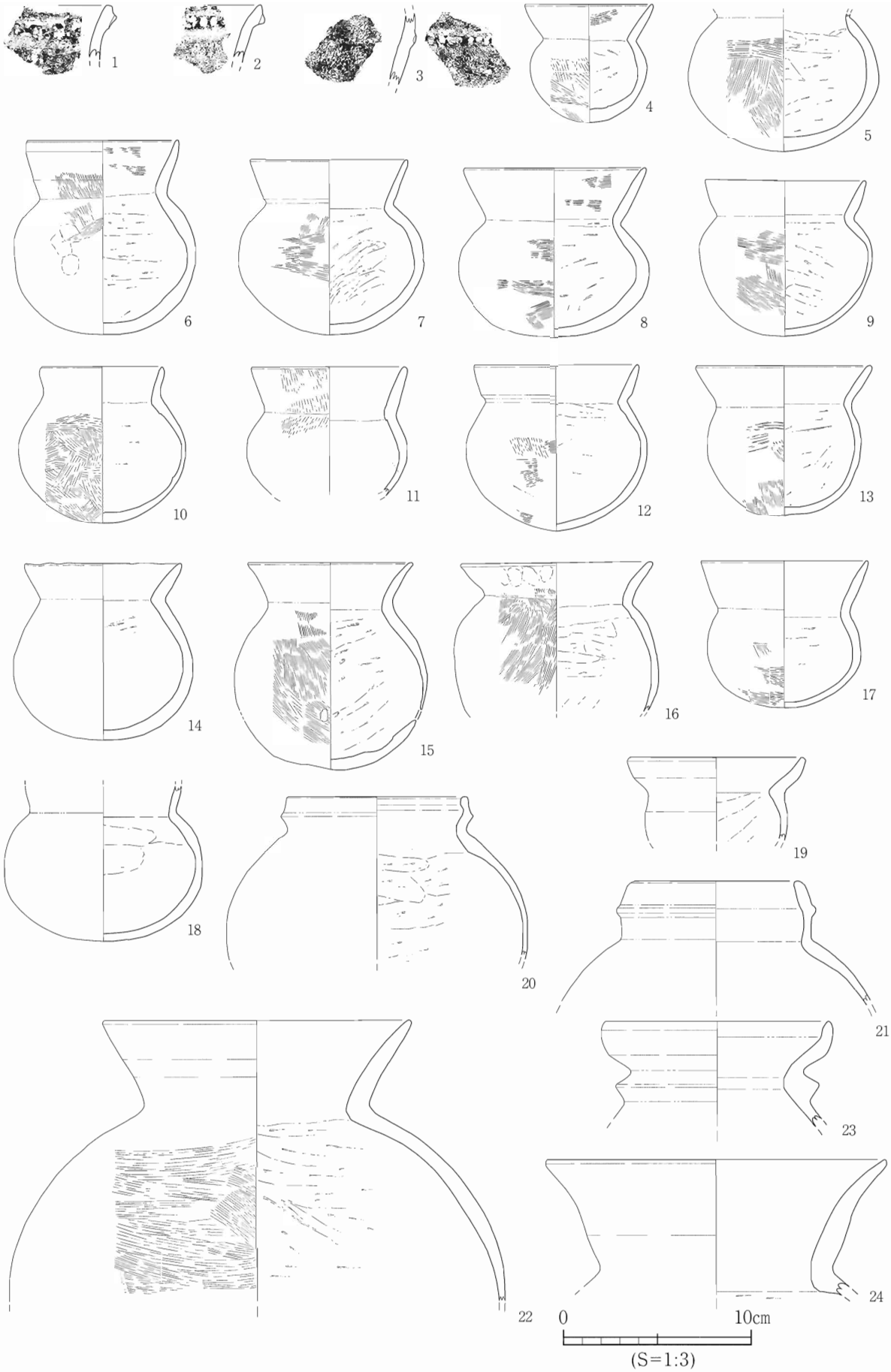


第121図　九景川遺跡Ⅲ区SR03遺物出土状況（F4・G4グリッド付近）　遺構：S=1/60、遺物：S=1/18他

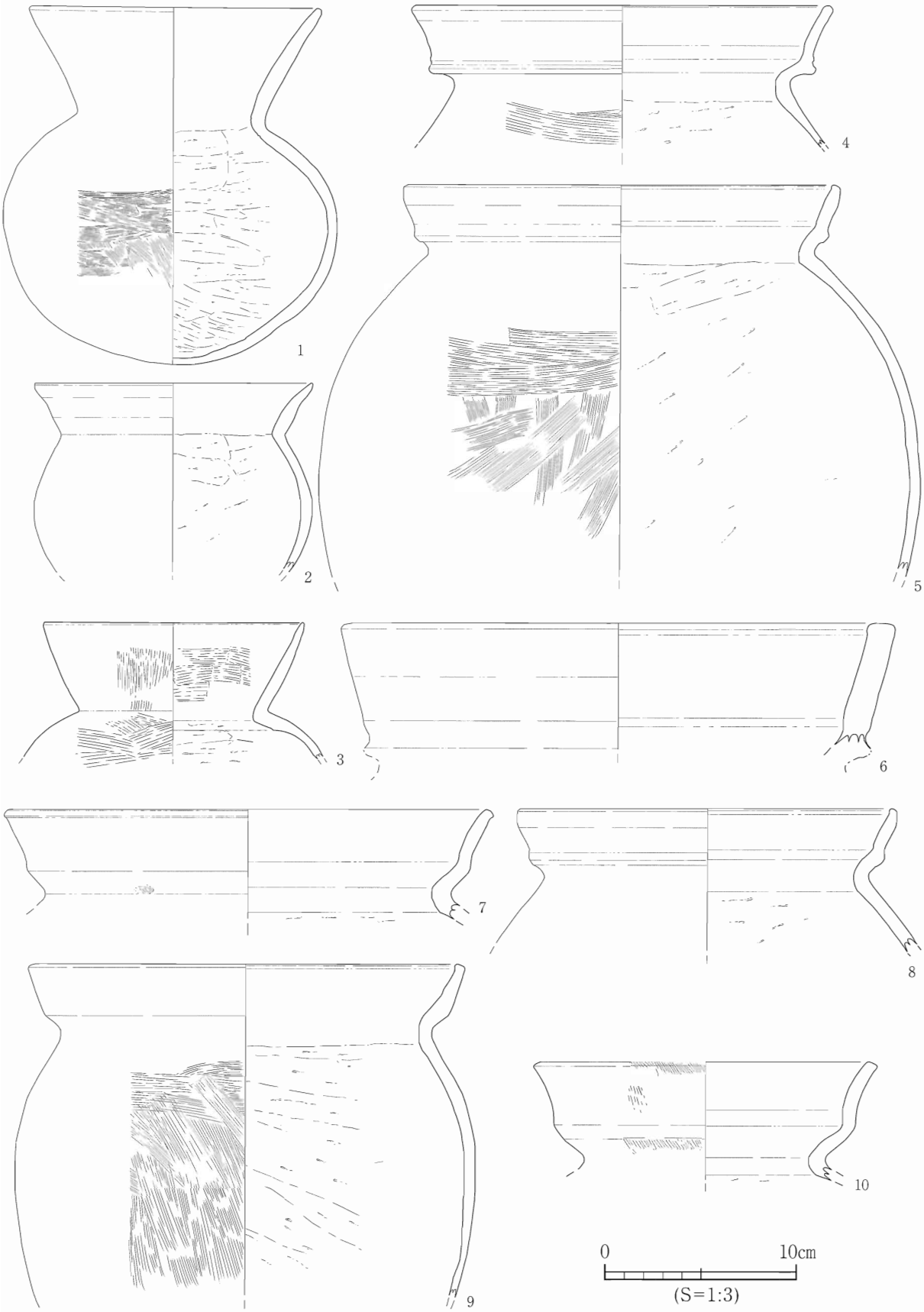
てはいるもののほぼ同レベルで比較的まとまって出土していることからみて、河床が若干堆積した段階に一括して投棄された遺物群である可能性が高いと想定される。

写真65　SR03土器出土状況（G5グリッド付近）

第121図はその北側のF4・G4グリッド付近の遺物出土状況を示したものである。G5グリッド付近とは対照的に完形品は比較的乏しく破片資料が大半であるが、遺物の出土密度はG5グリッド付近よりも高い。北端付近は後述するSR04と切り合い関係にあり、須恵器はSR04からの混入品である。組成比はG5グ



第 122 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (1)　S=1/3



第 123 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (2)　S=1/3

第 124 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (3)　S=1/3

リッド付近と比較すると、甕の比率が高くて高坏や小形丸底壺の比率が低く、通常の集落における土器組成比に比較的近いと言える。また、出土レベルに幅があり、小破片が多くを占める点からみて、G5グリッド付近のような一括性の高い集中的な投棄行為による形成ではなく、数度にわたる投棄行為の結果、形成された遺物群である可能性が高い。ただし、後述するように時期幅については現段階では明確にその差を指摘することは難しい。

SR03出土遺物（第122図～127図）

SR03からの出土遺物は古墳時代中期前半に属する土師器が大半であるが、このほか、縄文土器や須恵器、鉄器、石器も若干ではあるが出土している。以下、各種別･器種ごとにその概要を述べる。

A．縄文土器（第122図）

第122図1～3は縄文土器片で、いずれも突帯文土器深鉢の小片である。1・2は口縁部端部からやや下がった箇所に刻目突帯を貼り付け、1は口縁部端部上面をなで、2は先細り状に仕上げている。3は屈曲部付近の資料と思われ、屈曲部付近に刻目を施す。

B．土師器（第122～126図）

土師器は当遺構出土量の99％以上を占めており、先述のように器種構成比に際だった特徴を備える。

壺（第122図～123図）

第122図4～19は小形丸底壺である。法量は4や19のような小型品もあるが、器高9cm前後の比較的まとまった法量を示す。

口縁部はほとんどが単純口縁を呈し、12・19が退化した複合口縁状の形状を若干残している。口縁部長は若干長いものも存在するが、萎縮化がかなり目立っている。形態はやや内湾気味にハの字状に開くのを基調とするが、若干外反するもの(15)や直立状を呈するもの（10）も存在する。

頸部はなおよく締まる形状を残しているが、ややだれたタイプ（10・15）も若干含まれる。体部は胴部中央部付近に最大径がありやや扁平状のプロポーションを呈するタイプが多い。一方14、15のような下膨れ状の形態を呈するタイプも一定量含まれている。外面調整はハケが主体で肩部ヨコハケの資料は8などがあるものの乏しい。器壁は比較的厚く、成形はやや粗雑でヨコナデが不十分で凹凸感のある資料が多い。

胎土・色調は、なお小谷式的な灰白色系のものが多いが、同じ灰白色系でも小谷式段階の胎土とはやや異なるざらつき感を呈する資料が多い。一方大東式的な橙色系のものは9・11・18・19などであるがティピカルな大東式とは若干異なる印象を受ける。また、6及び15は焼成後穿孔らしき痕跡が認められる。

20は口縁部が短く内傾する形態の壺で、胴部がよく張る形状を呈する。前期段階のそれと比べ、口縁部は萎縮し短くなっており、丸みを帯びる。色調は橙色を呈し、胎土は白色砂粒を多く含む。21も同様な口縁部が内傾する壺であるが、便化が著しい。22・24は大形の直口壺である。22は頸部がよくしまり口縁部が長くハの字状に開き、端部を先細り状に収めている。肩部にはヨコハケを巡らせ、淡黄色で石英の多い前期的な色調・胎土の特徴を示す。

23は異形の複合口縁壺で口縁部は袋状口縁のように内湾し頸部に大型の断面三角形の突帯を貼り付けている。管見の限り類例を知らない。胎土・色調は淡黄褐色で砂粒を多く含み、在地に通有の特徴を呈する。第123図1は中形の直口壺である。形態的には大型品と大きく変わらない。胎土･

色調は小谷式的だが、口縁部及び肩部付近の器壁がやや厚い。肩部に細かな原体によるヨコハケを施している。3は口縁部がやや短く内湾する形態の直口壺で、灰白色を呈する。

甕（第123～125図）

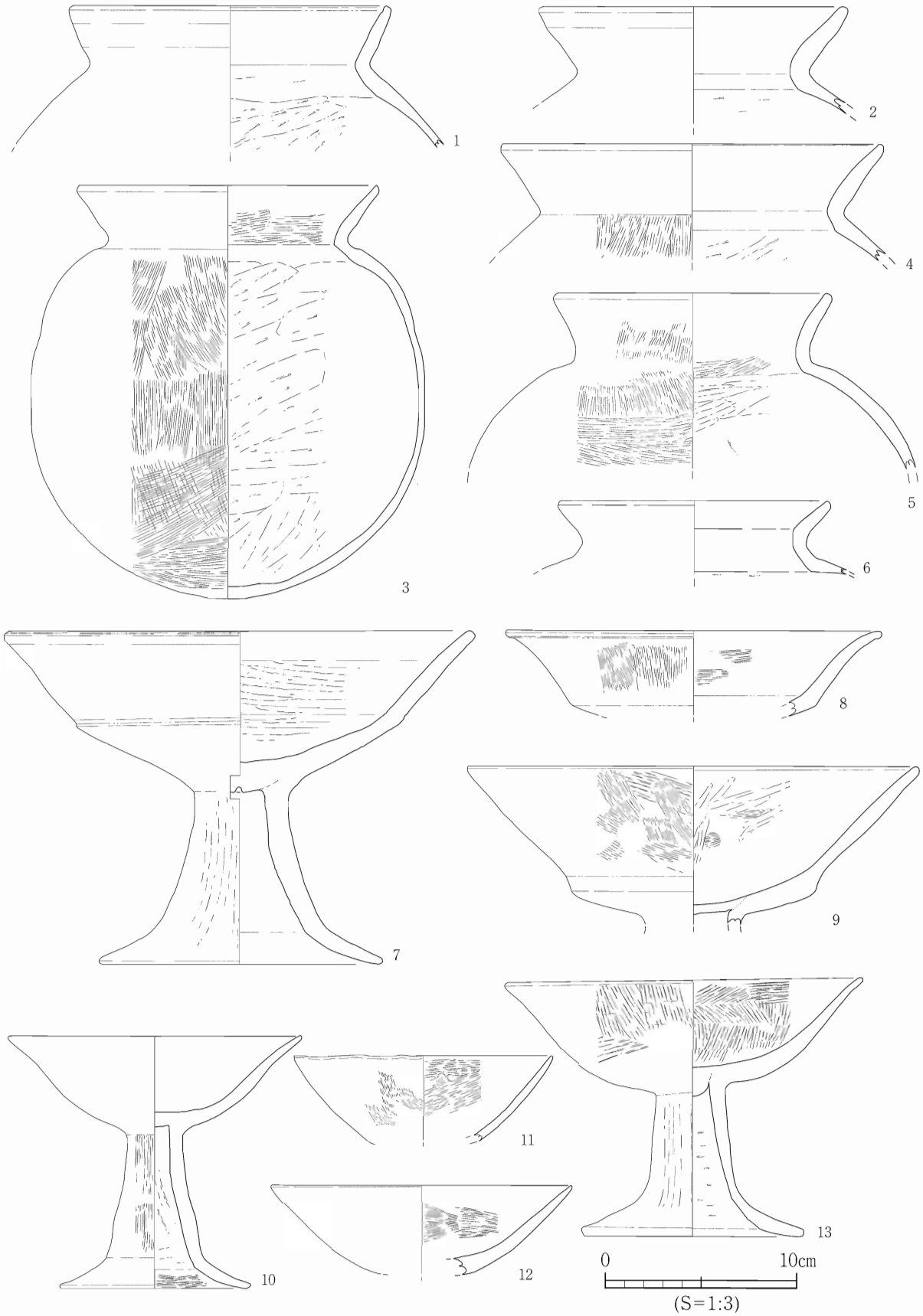
甕は大雑把に分けて四つに分類できる。一つは小谷式的な複合口縁甕であり、第123図4がこれに相当し、甕Aとする。4はしっかりした複合口縁状を呈した甕で、口縁部端部は丸く収める。口縁部段部付近に沈線を巡らせ、内面へラケズリは頸部からやや下がった位置から行われている。色調は灰白色を呈する小谷3～4式段階の甕である。

次に口縁部段部の突出がほぼ消失し、退化した複合口縁甕を甕Bとする。5～10、第124図1がこれに相当する。5は口縁部が短くかつ厚く、段部の稜も鈍いが、肩部にはなお細かなヨコハケを施し、色調は灰白色で石英を多く含む小谷式的な胎土の資料である。6は大形の壺または甕の口縁部資料である。非常に分厚い作りで端面に平坦面を有す。7は口縁部端部が外方に肥厚するが、口縁部段部は鈍い痕跡的な稜となっている。色調・胎土は小谷式的な特徴を備える。

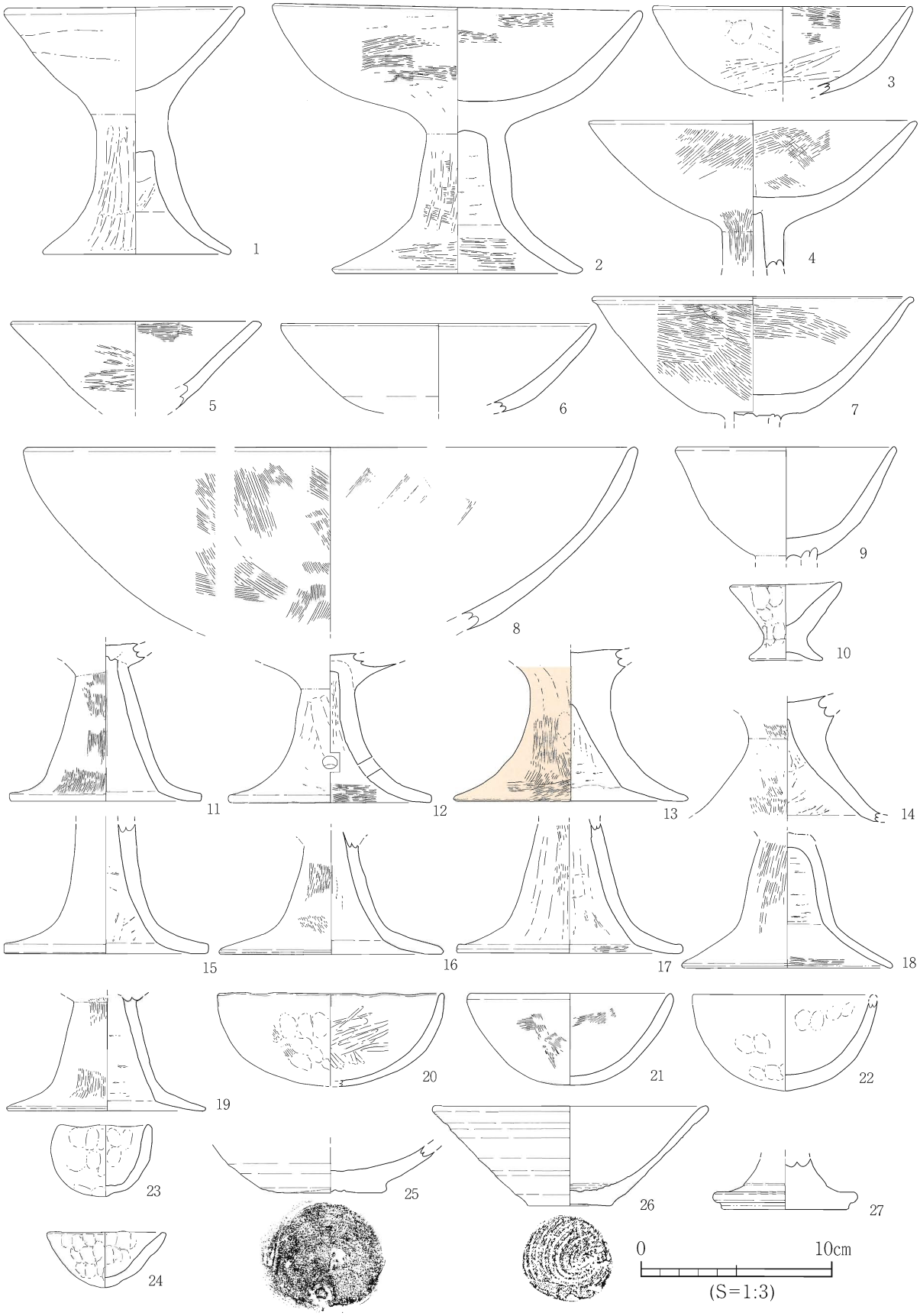
9は口縁部が短く段部も鈍い稜となっている。色調はにぶい橙色で胎土は表面がややざらついた、おそらく長石と思われる白色微砂粒を含み石英が目立たない大東式的な胎土の特徴を示す。10は口縁部がゆるやかに外反し端部に平坦面を持つ。色調は灰白色を呈する。

甕Cは口縁部が内湾気味に立ち上がる一群で、口縁部端部に何らかの造作を加えた資料が多い。第124図2～10、第125図1、3、4がこれに相当する。色調・胎土は甕Aと同じものが多く、布留式系甕の在地化した小谷式系列下の単純口縁甕と考えられる。第124図2は頸部から鋭く屈曲し、口縁部がほぼ直線的に立ち上がる甕で、口縁部端部を内面に折り曲げ厚く肥厚させる。色調は灰白色である。3は口縁部が内湾気味に立ち上がって端部は上方につまみ上げている。肩部に顕著なヨコハケを施す。色調は淡黄色である。4も3とほぼ同様な資料で口縁部端部を上方につまみ出す。淡赤橙色を呈するが強い火を受けたかのような色調で大東式的なものではない。7は胴部上半まで残る資料で、頸部は鋭く屈曲し口縁部は直線状に立ち上がり、端部を上方につまみ出す。色調は淡黄色である。8はやや小形の甕で、頸部がよくしまり口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部端部は断面三角形状に若干肥厚する。2～6に比べて器壁が厚く、ハケ原体が粗い。灰黄色を呈す。9はやはり内湾状の単純口縁を呈するタイプであるが、端部を肥厚させない。口縁部にヨコハケが残り、灰白色に近い淡黄色を呈する。10は単純口縁系の甕というよりも、複合口縁が退化したタイプとしてとらえるのが適切かもしれない。内湾気味に立ち上がる口縁部端部は外反気味に収めている。淡黄橙色を呈し、大東式に近い様相を呈す。第125図3は底部まで判明する資料で、やや下膨れ状の形状を呈し、口縁部はほぼ直線的に開くが端部は肥厚しない。肩部のヨコハケは既に消失している。

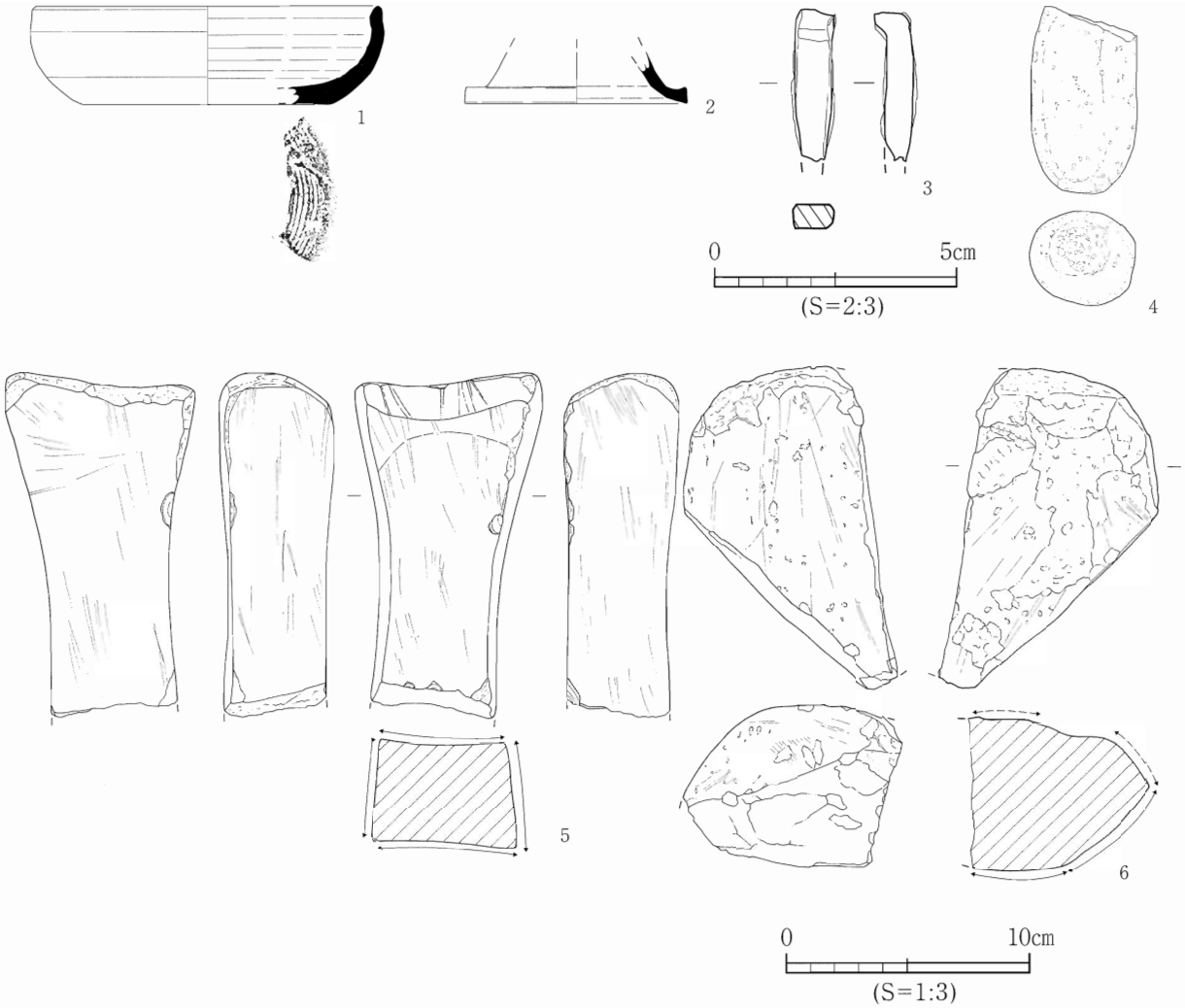
甕Dは橙色・黄橙色系の色調を呈し、厚手で口縁部が直線気味または外反気味に立ち上がる中期的な甕の一群で、第124図11～15、第125図5、6などが該当する。第124図11は小形の甕で肩が張らず口縁部は厚手で上方へ直線的に立ち上がる。色調は橙色を呈す。12はやはり口縁部が厚くやや上方へ立ち上がるが、肩部にはヨコハケを残し、浅黄橙色を呈す。14・15は頸部の屈曲があまく、口縁部が強く外反する。色調は橙色・灰黄色を呈す。第125図2は口縁部がほぼ直線的に立ち上がるが中途でやや屈折しており複合口縁の退化した可能性があるかもしれない。5は壺に近い形状の甕で肩部がよく張り、口縁部は上方へやや長く立ち上がる。色調は灰白色を呈する。



第 125 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (4)　S=1/3



第 126 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (5)　S=1/3



第 127 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR03 出土遺物実測図 (6)　S=1/3

高坏（第 125・126 図）

高坏は大きくみて坏部が段・稜をもって外反するタイプと小谷式以来の坏部が段を持たずに口縁がゆるやかに外反するタイプがあり、法量や脚部の形態や脚部の接合法、色調や胎土でさらに幾つかに細別が可能である。

第 125 図 7 は有段タイプの高坏で、坏部下半が水平でなくやや上方に立ち上がる点に特徴がある。坏部円盤下半に刺突痕 a（松山 1991）を備え、脚部は脚部下半が屈曲せずゆるやかに立ち上がる。外面の調整は不明だが坏部内面にはミガキ痕が観察される。色調は強い被熱を受けたかのような淡赤橙色を呈す。9 も有段高坏であるが、坏部下半が短くかつ水平に広がり、坏部上半が長く直線的に立ち上がる大東式タイプの高坏である。坏部下半は円盤充填であるが刺突痕は認められない。橙色を呈する。

10 は坏部に稜を有しない小谷式的タイプの高坏で、坏部が矮小化し脚部が長い小谷式の最末期的な形状を呈する。色調は二次焼成による淡赤橙色を呈するが基調は灰白色である。11・12 は直口口縁で浅い皿状の坏部を呈するが、11 は調整が粗く坏の可能性がある。13 は無段タイプで色調は橙色を呈する。内外面にハケを顕著に残し、坏部下半の接合部は脚部側に分厚く張り出している。色調は橙色だが胎土は砂粒を多く含んだ小谷式的な胎土である。

第126図1は異形タイプの高坏で、坏部は口径が小さく深い椀状を呈する。脚は上半部は中実で外面にヘラミガキを施す。色調はにぶい橙色を呈す。2は坏部が浅い椀形の形状をなす高坏である。坏部と脚部の接合部は厚く、脚は下半がゆるやかに広く広がる。坏部外面は軽くケズリを加えたのちハケをかけている。3は高坏坏部または坏で外面下半にヘラケズリ痕が認められる。にぶい橙色を呈す。4はにぶい橙色を呈する直口口縁状の坏部を備えるタイプで、接合部には刺突痕は認められない。7は無段タイプだがプロポーションは大東式に近い。灰白色を呈し、接合部にやや径が大きく浅い刺突痕を有する。

8は大形の直口口縁タイプの高坏坏部と考えられる資料で、橙色を呈し砂粒が少なくざらついた地肌の大東式的な胎土の特徴を有する。5、9は小形化したミニチュア状の高坏で、9は深い椀形の坏部を呈す。色調は橙色で胎土は緻密で砂粒が少なく、大東式に典型的な胎土類型の一つである。10はミニチュア状の低脚坏で外面に指頭圧痕を顕著に残す。

11～19は高坏脚部の資料である。11は裾にむけて直線状に開き強く屈曲する形状をなす。12は脚がゆるやかに広がるタイプで円形スカシを三方に穿つ。接合は脚部を坏部に差し込む手法のものである。13・14は厚手で脚がゆるやかに開く中実タイプのもので、13は外面に赤彩を残す。18は差し込みタイプの脚部で脚部上半がエンタシス状を呈する。19は脚が短く脚裾が強く屈曲して開くタイプで、内面に稜を形成している。

坏（第126図）

第126図20～22は坏である。いずれも口径11cm前後でボウル状の形状を呈す。20・22は外面に指頭圧痕が顕著に残っている。

手捏ね土器（第126図）

第126図23・24は手捏ね土器で坏または鉢のミニチュア品である。内外面に指頭圧痕を顕著に残し、凹凸が著しい。

C．須恵器（第127図）

須恵器はいずれもSR03北端の、SR04と交差する地点からの出土であり、SR04からの混入品である。第127図1は無蓋の坏で、口縁部は内湾気味でやや屈曲する。2は高坏脚部で脚端部に直立する平坦面を形成する。

D．土師質土器（第126図）

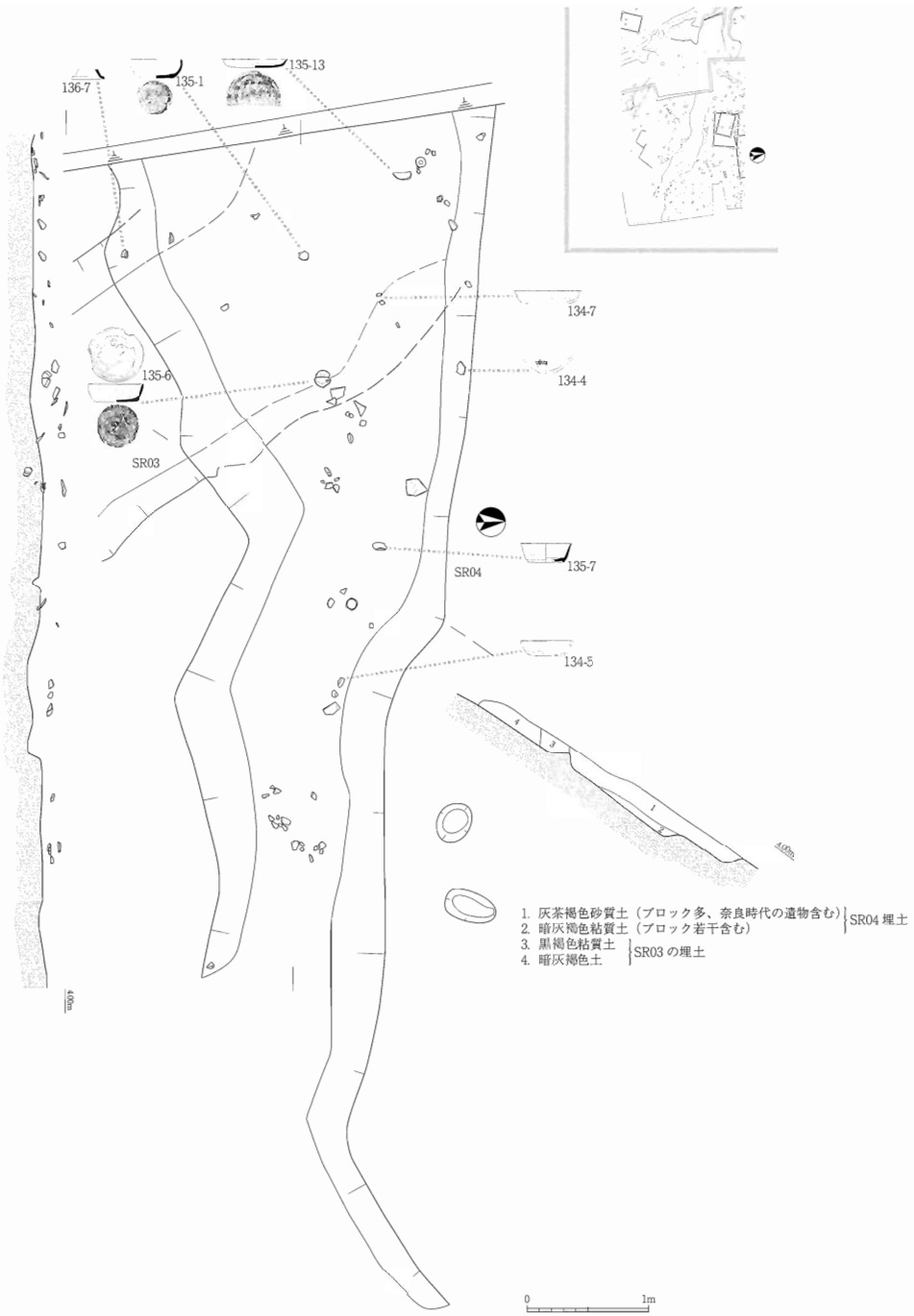
いずれもSR03南部から出土しており、上層からの混入品と考えられる。第126図26は坏で、口径14.3cmを測る。底部は比較的小さく、体部はほぼ直線状に開く形状をなす。27は高台付坏で脚端部は丸く外方へ突出する。

E．鉄器（第127図）

釘が1点出土している。F4グリッドからの出土であり、おそらくSR04からの混入品と思われる。先端部を欠損しているが断面形は矩形を呈し、一端をL字状に折り曲げ頭部を形成する。

F．石器（第127図）

第127図4はG5グリッドから出土した流紋岩製の敲石で、長楕円形の円礫端面に敲打痕が顕著に認められる。5はG5グリッドから出土した砥石で、他の遺物の共伴関係から古墳時代中期に属する資料と考えられる。砂岩製で平面鼓状を呈し、小口以外の4面を使用面として用いている。各面とも平滑で、鉄器の刃先痕が顕著に残る。6は流紋岩質凝灰岩製の砥石で、出土状況から古墳時



第 128 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 遺物出土状況 (1)　遺構：S=1/60、遺物：S=1/18

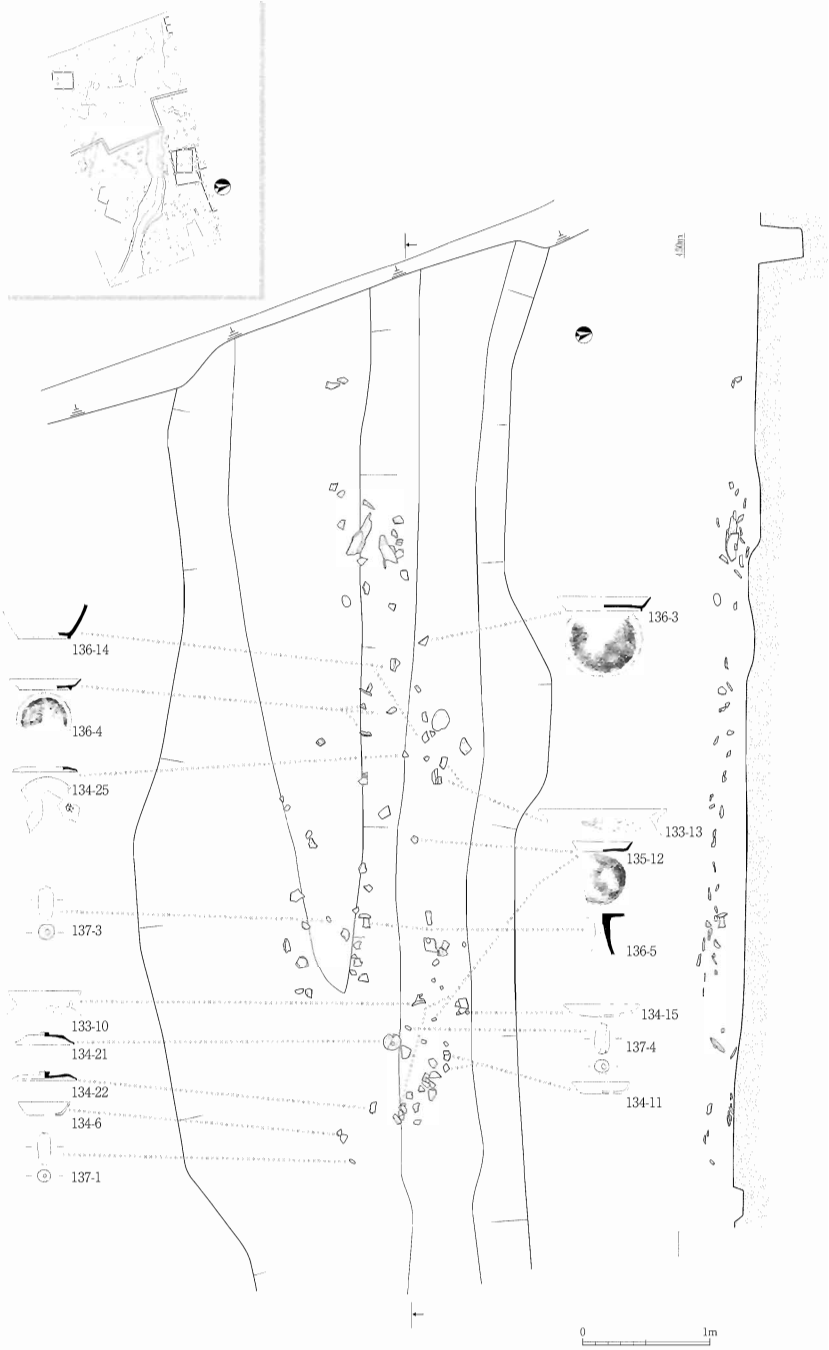
代中期に属するものと考えられる。かなりの部分を欠損しており本来の形状は不明だが、やや不整形な板状を呈し、現状では表裏 2 面に使用痕が認められるが、一面は表面が平滑でなく使用頻度は低い。

遺構の性格と年代

SR03 内の出土遺物は、SR04 や上層からの若干の夾雑物を除くと、ほぼ古墳時代中期前半に限定され、この時期に機能・埋没した小河道であると考えられる。土器群の時期幅については第 9 章で再度述べるが、少なくとも G5 グリッド付近出土遺物は完形品が多く、廃棄時の一括性が比較的高い土器群であると考えられ、小谷式的な土器群を一定量含んでいる点、大東式系土器群も高坏など

になお定型化していない要素が認められる点からみて、中期前半でも比較的古い段階の資料である可能性が高いと考える。

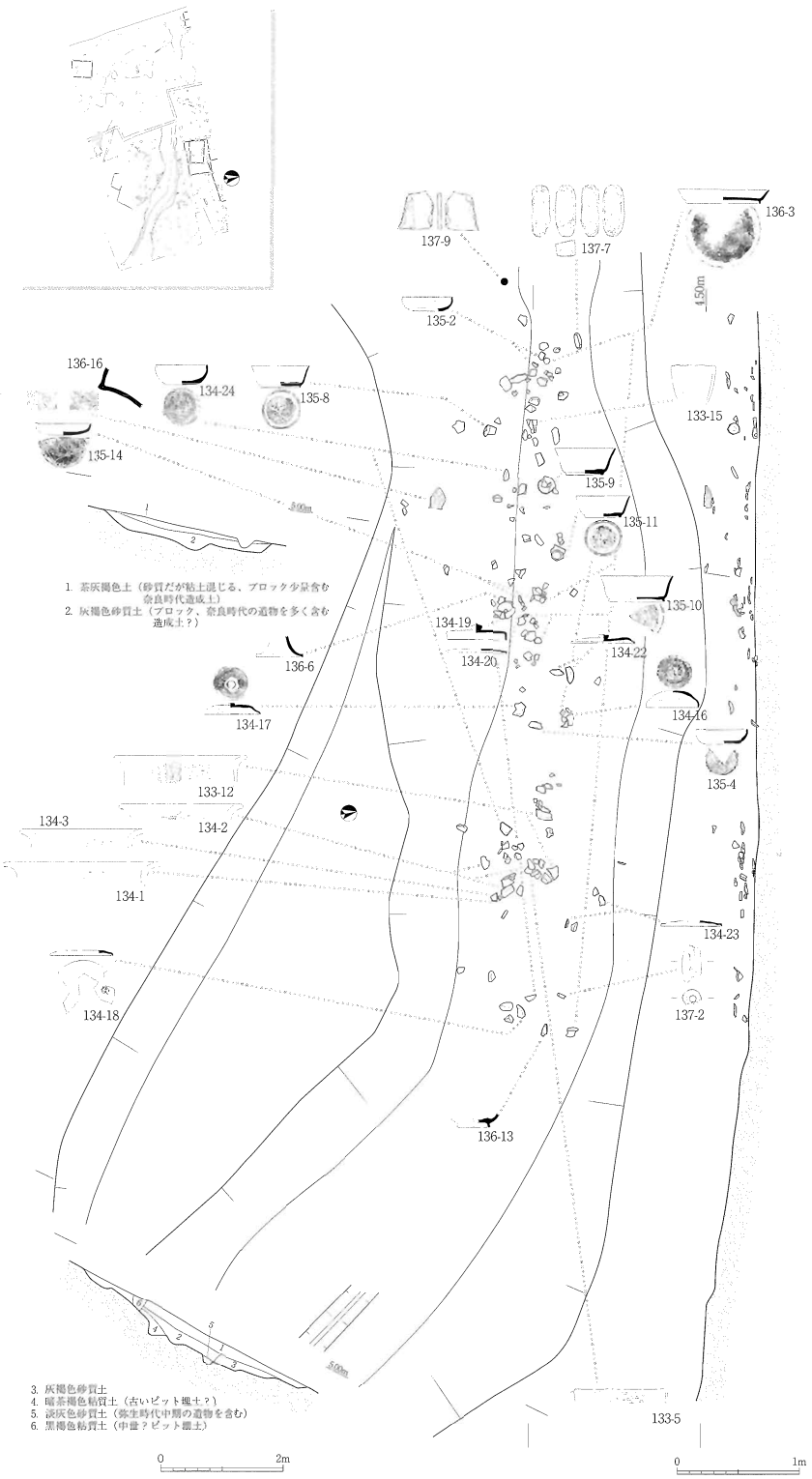
SR03はその形状から自然河道であることは間違いないが、SK15やその対岸に営まれた溝状の掘り込みなどからみて、かなり人為的に手が加えられていることは明白である。当河道は古墳時代中期集落の中心をほぼ縦断するように北流しており、そこでの生活と極めて密接に関わっていた河道であったと理解される。SR03出土土器群のすべてが祭祀的行為によるものとは考えにくいものの、少なくとも小形丸底壺を中心とする一括投棄土器群やG5グリッド付近の土器群はその土器組成からみて水辺の祭祀に関わる土器群であった可能性が高い。こうした水辺の祭祀行為も、先に述べた集落の経営・生活と密接な関連のもつ当河道の重要性に基づいて行われた行為であったことは想像に難くない。



第129図　九景川遺跡Ⅲ区SR04遺物出土状況(2)　遺構：S=1/60、遺物：S=1/18

SR04（第54図）

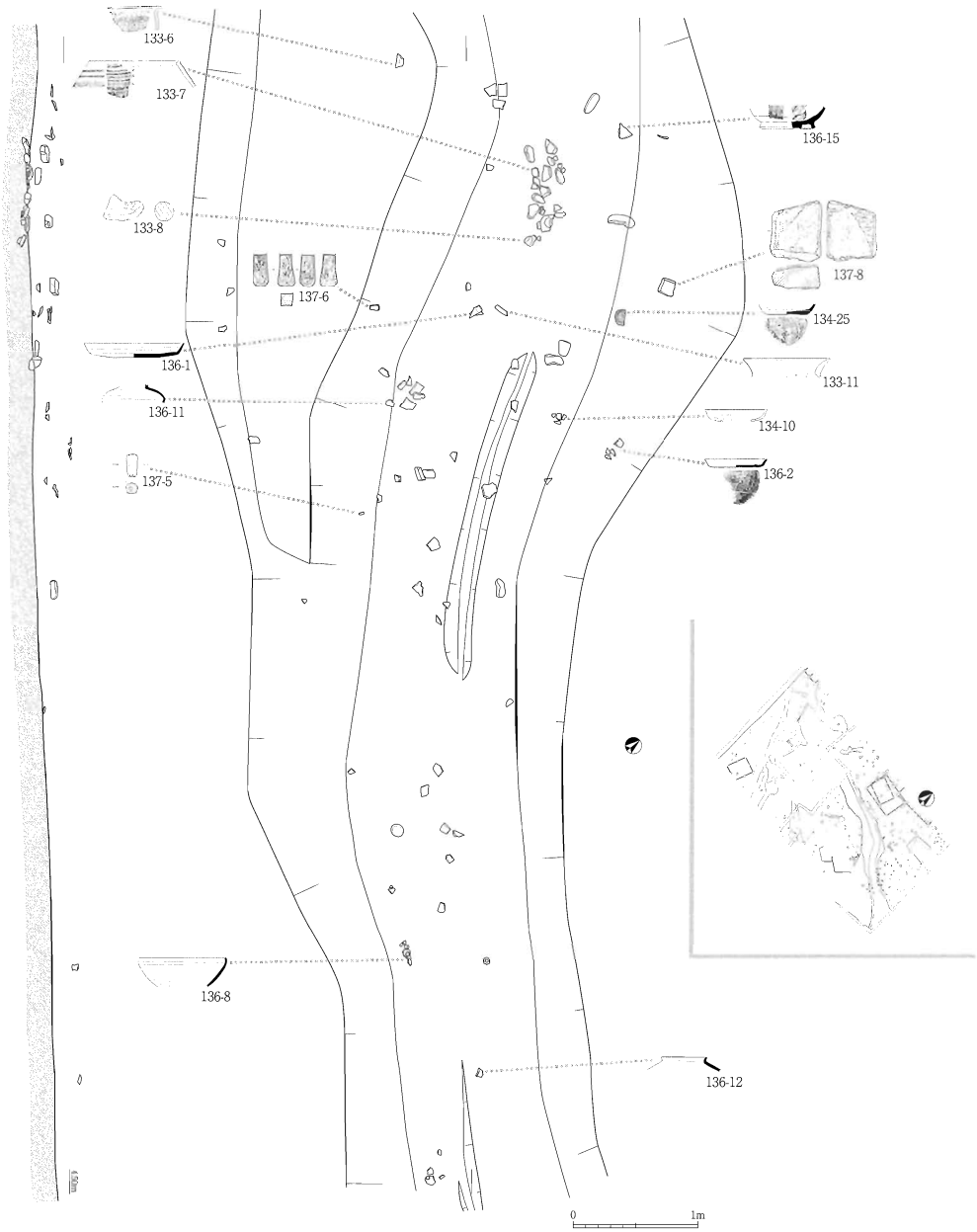
規模と形態　南東から北西にかけて西流する自然河道である。途中、H4グリッド付近は後世の削平によって失われているが、調査区をほぼ横断する状態で検出された。河道の形状はS字状にゆるやかに蛇行し、川幅や深さは場所によりかなり異なる。また、上流の東側では河床中央に細い溝状の掘り込みが認められた。調査区内で検出した規模は、長さ53 m、幅は広い箇所で4m程、深さ20cm前後を測る。西端ではSR03と重複し、土層観察からSR03が先行する。また、先述のように



第 130 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 遺物出土状況 (3)　遺構：S=1/60 他、遺物：S=1/18

SD15・26 は SR04 の埋没後にほぼ重複して営まれた遺構である。

河道内の覆土は場所によって異なるが、遺物を多量に含む調査区中央及び西側の覆土は地山ブロックを多く含む灰褐色系の砂質土及び粘質土であり、通常の水性堆積の様相とは大きく異なる。古代を中心とする多量の遺物が出土している点からみても、8 ～ 9 世紀のある段階に人為的に埋め立て・造成された土層である可能性が高い。



第 131 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 遺物出土状況 (4)　遺構：S=1/60、遺物：S=1/18

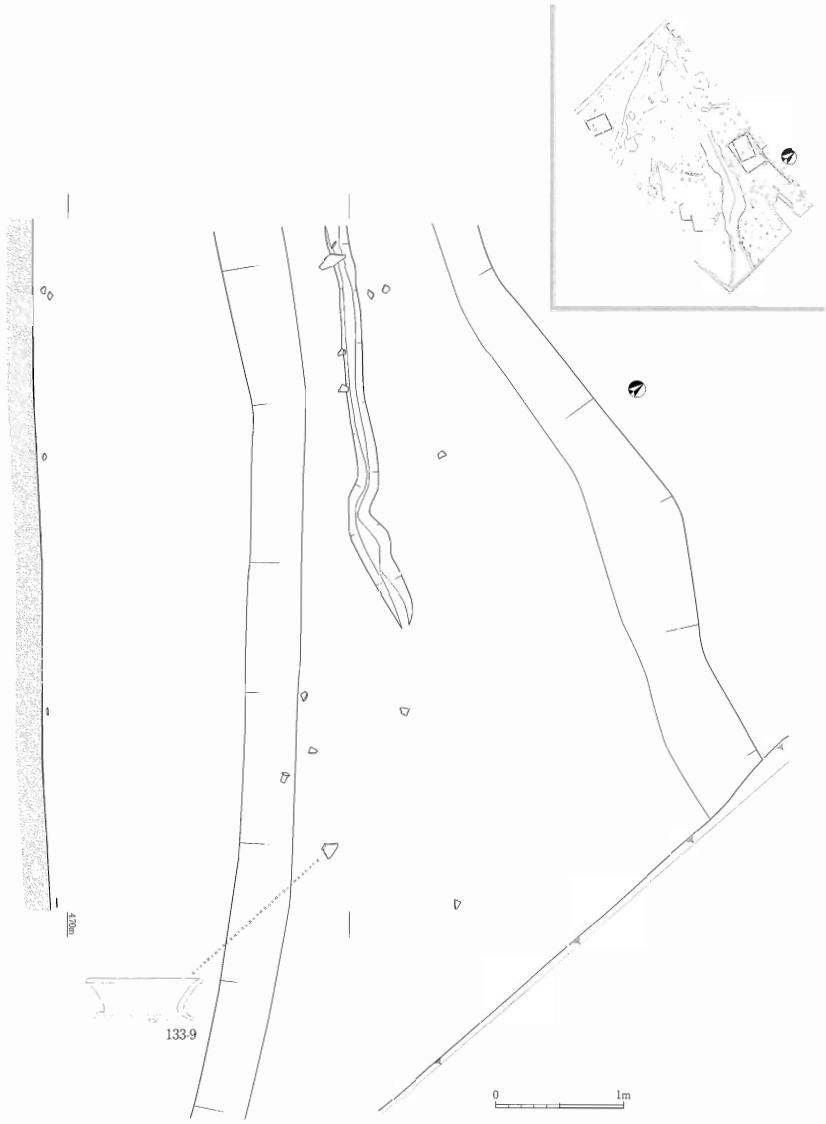
SR04 遺物出土状況（第 128 図～ 132 図）

SR04 は 50m 近くに及ぶ遺構であるため、遺物の出土状況については SR03 と同様に幾つかに分け、西から順にその概略を述べる。

Ⅲ区西端付近（第 128 図） SR03 と重複する箇所であり、覆土の区別ができず部分的に SR03 に伴う遺物を当遺構出土遺物として取り上げたところがある。概して遺物の出土状況は散漫であり、まとまった廃棄単位などは確認できる状況にはない。遺物は古代の遺物にほぼ限定されるが、須恵器はやや新しい様相を示すのに対し、赤彩土師器は青木編年Ⅰ～Ⅱ期に属するもので、やや年代差が認められる。特徴的な遺物では、内面漆付着土器が 1 点出土している。

H4 グリッド付近（第 129 図）

床面からやや浮いた状態であるが、比較的まとまった状態で須恵器・土師器が出土している。須恵器は青木Ⅲ～Ⅳ期のものが中心だが、赤彩土師器はやはり古いものを含んでおり、一括性は低い。墨書土器が 1 点出土したほか、土錘が 2 点出土している。



第 132 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 遺物出土状況 (5)　遺構：S=1/60、遺物：S=1/18

I4・5 グリッド付近（第 130 図）　SR04 内では古代の遺物が最もまとまって出土している。層位的には河道中央の床面付近およびやや浮いた場所から出土している。遺物組成は須恵器が大半で、SR04 西側で目立って出土した赤彩土師器は少なく、煮炊き用の甕がややまとまって出土している。須恵器は一部 7 世紀に属するものを除けば青木Ⅲ～Ⅳ期が中心である。特徴的な遺物としては、墨書土器の他、土錘や砥石が出土している。

J5 付近（第 131 図）　遺物の出土量は西側に比べて減少する。東側から鉄鉢形土器が出土しているが分布は散漫である。古代の遺物が減少する一方、河道床面付近からは若干ではあるが弥生時代前期～中期に属する遺物が出土している。

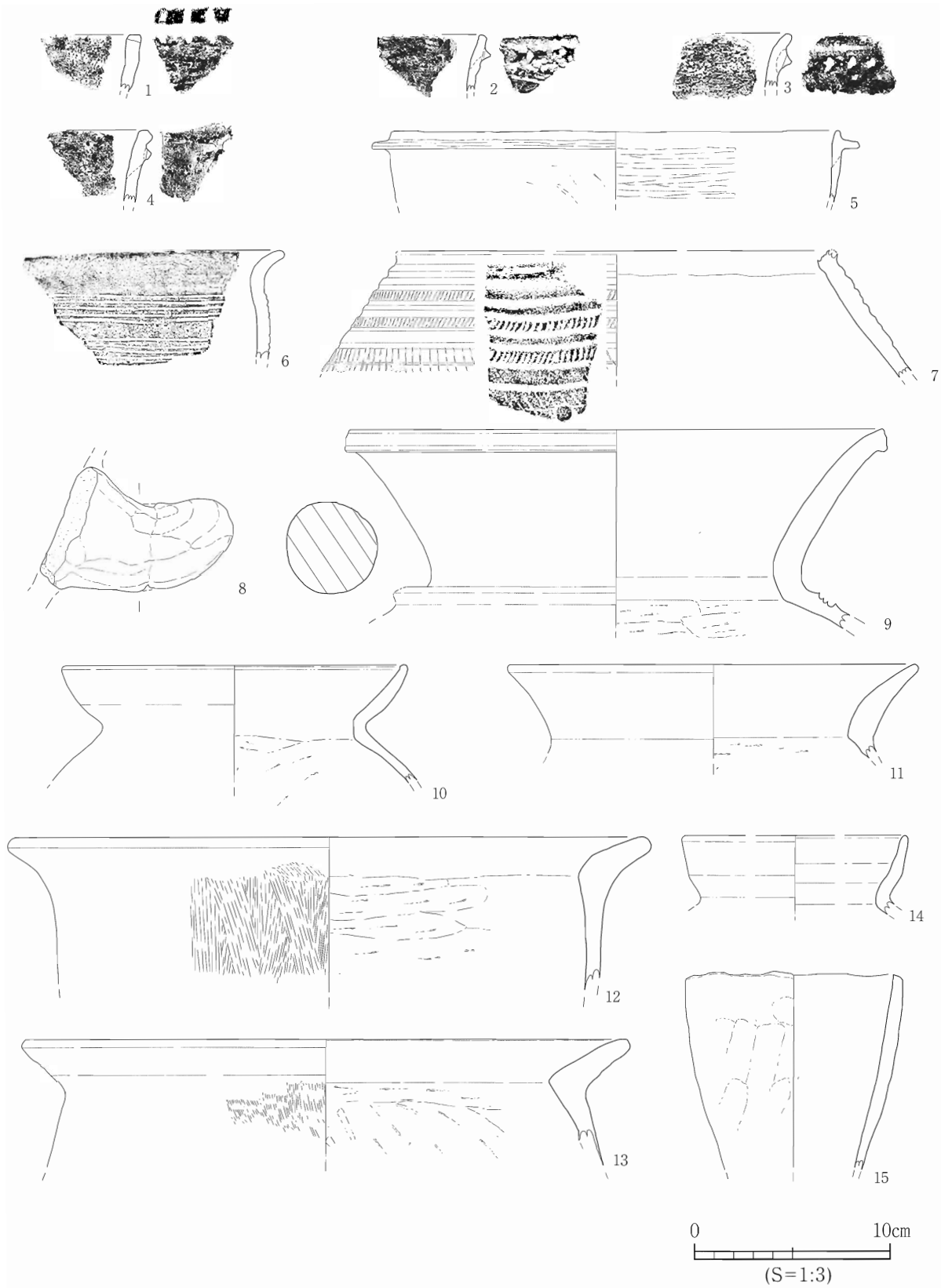
Ⅲ区東端付近（第 132 図）　古代の遺物は殆ど無く、弥生土器・土師器が若干出土しているのみである。

SR04 出土遺物（第 133 図～ 137 図）

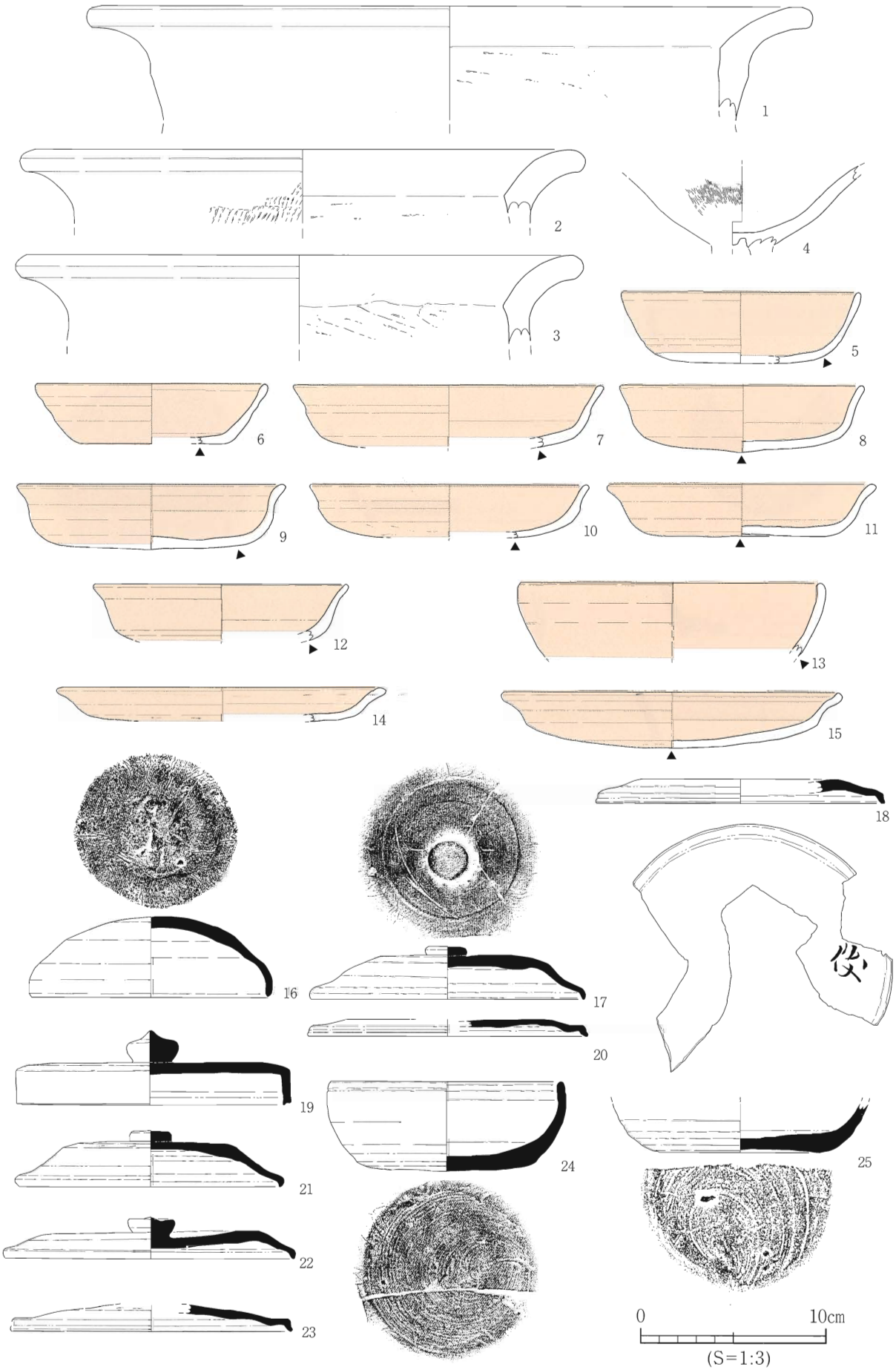
SR04 からの出土遺物は 8 世紀後半～ 9 世紀前葉の遺物がその大半を占めている。このほか、縄文土器や弥生土器、土師器、土錘、砥石が出土している。以下、各種別・器種ごとにその概要を述べる。

A．縄文土器（第 133 図）

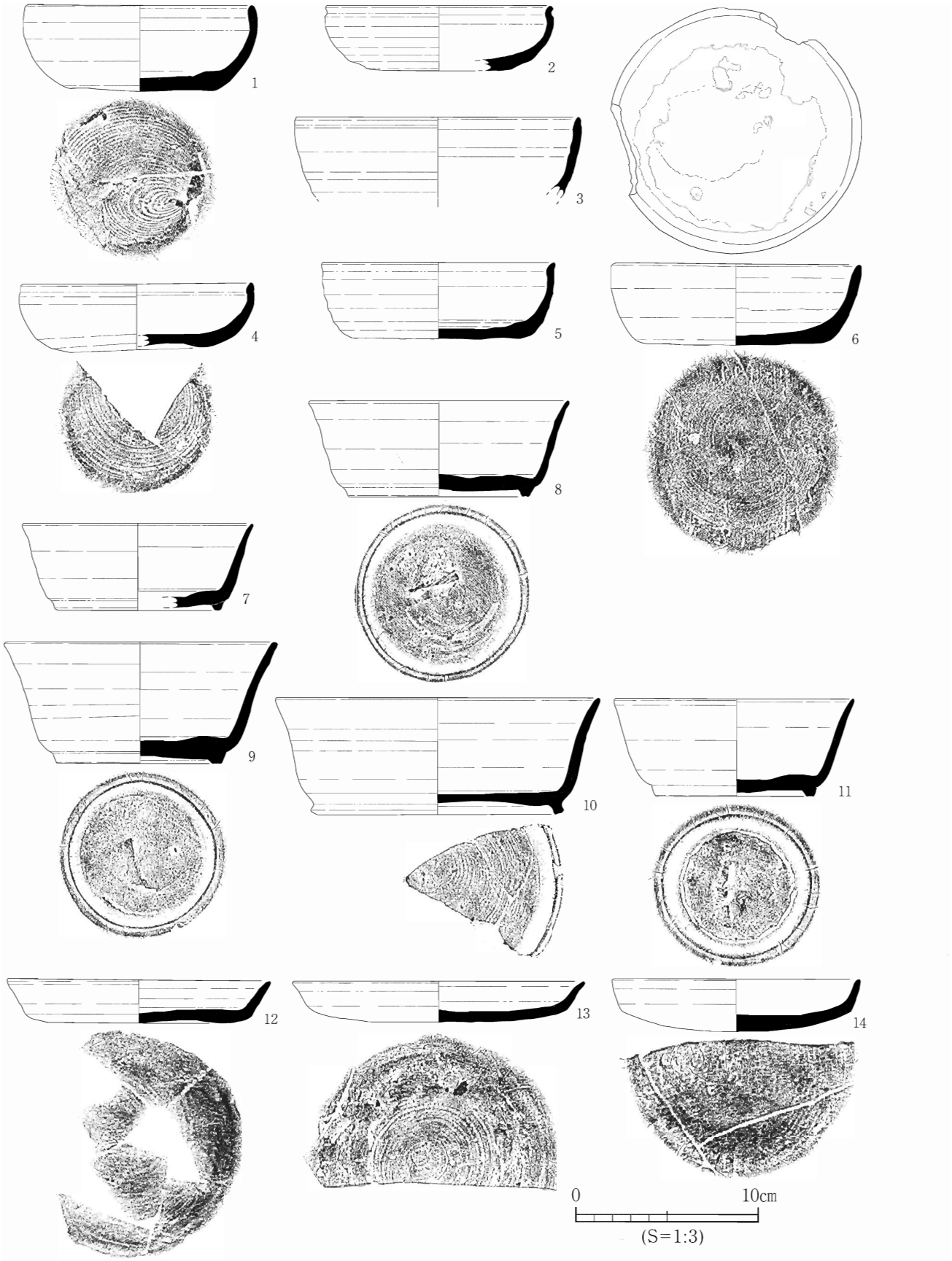
第 133 図 1 ～ 5 は縄文土器片で、いずれも突帯文土器深鉢の小片である。1 は突帯を有さない深鉢口縁部で上面を刻んでいる。2 ～ 4 は一条突帯でいずれも口縁端部は刻まない。2 は突帯下に弧状の沈線が認められる。5 は薄手で突帯の非常に高い深鉢で、おそらく砲弾型の形状をなすと考えられる。突帯上は刻まず、外面は板ナデ、内面はミガキ状の調整が認められる。色調は灰白色を呈し、突帯文土器としてはやや異質な資料である。



第 133 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 出土遺物実測図 (1)　S=1/3



第 134 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 出土遺物実測図 (2)　S=1/3



第 135 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 出土遺物実測図 (3)　S=1/3

B．弥生土器（第 133 図）

第 133 図 6 は弥生時代前期の甕で、胴部がやや張り口縁部下に 5 本単位の沈線帯が二段にわたって施文されている。7 は弥生時代中期の鉢で、上半部に幅広の凹線文と連続刺突文を施し、その下におそらく綾杉文と円形浮文による文様帯が認められる。Ⅳ－ 1 ～ 2 の資料であろう。

C．土師器（第 133・134 図）

第 133 図 9 ～ 11、14、第 134 図 4 は古墳時代中期前半に属する土師器と考えられる。9 は頸部に突帯を備える壺で、口縁部端部はやや肥厚し平坦面を形成する。色調はにぶい橙色を呈する。10 は内湾口縁の甕で口縁部端部内面がわずかに肥厚する。11 は厚手の単純口縁の甕で口縁部は外反する。14 は退化した複合口縁を備える甕で、やはり中期前半の資料であろう。

第 133 図 12・13、第 134 図 1 ～ 3 は古代の須恵器と共伴する段階の甕である。いずれも比較的大形で口縁部が非常に分厚く、強く外反し端部を丸く収めるものが多い。調整は口縁部はヨコナデ、胴部外面は粗いタテハケ、内面ヘラケズリを施す。肩の張らない器形が主流だが、第 133 図 13 のようにやや肩が張り口縁部端部を面取りするものも存在し、若干の時期差がある可能性がある。第 134 図 1 は頸部を強く撫でた際に形成された稜が認められる。

第 134 図 5 ～ 15 は赤彩土師器であるが、赤彩が既に剥落し認められない資料も含む。坏の形態は底部と体部との境界が丸みを帯び、口縁部が緩やかに外反する形状を呈する資料が多い（7 ～ 12）。8 は底部まで赤彩が及んでおり、9 は体部内外面は赤彩だが底部は意図的に炭素を吸着させ黒色にした可能性がある。こうした特徴は青木Ⅰ～Ⅱ期の特徴であり、先述したように須恵器の主体的な時期とはやや年代差が認められる。この点、古い赤彩土師器が SR04 でも西側に集中し、古代の掘立柱建物も SB12 など西側にやや古い遺構があるのと整合的である点は注意される。

一方、5、6 は底部と体部との境が比較的明瞭で、口縁部がやや内湾気味に立ち上がる点は、先の資料よりやや後出的な要素を備えるものと考えられる。14、15 は赤彩の皿で、15 は底部が丸く、底部まで赤彩が及んでおり、やはり青木Ⅱ期以前に属する資料と考えられる。

第 133 図 15 は製塩土器である。口径 11.0㎝を測り、外面にユビオサエの痕跡を顕著に残す。

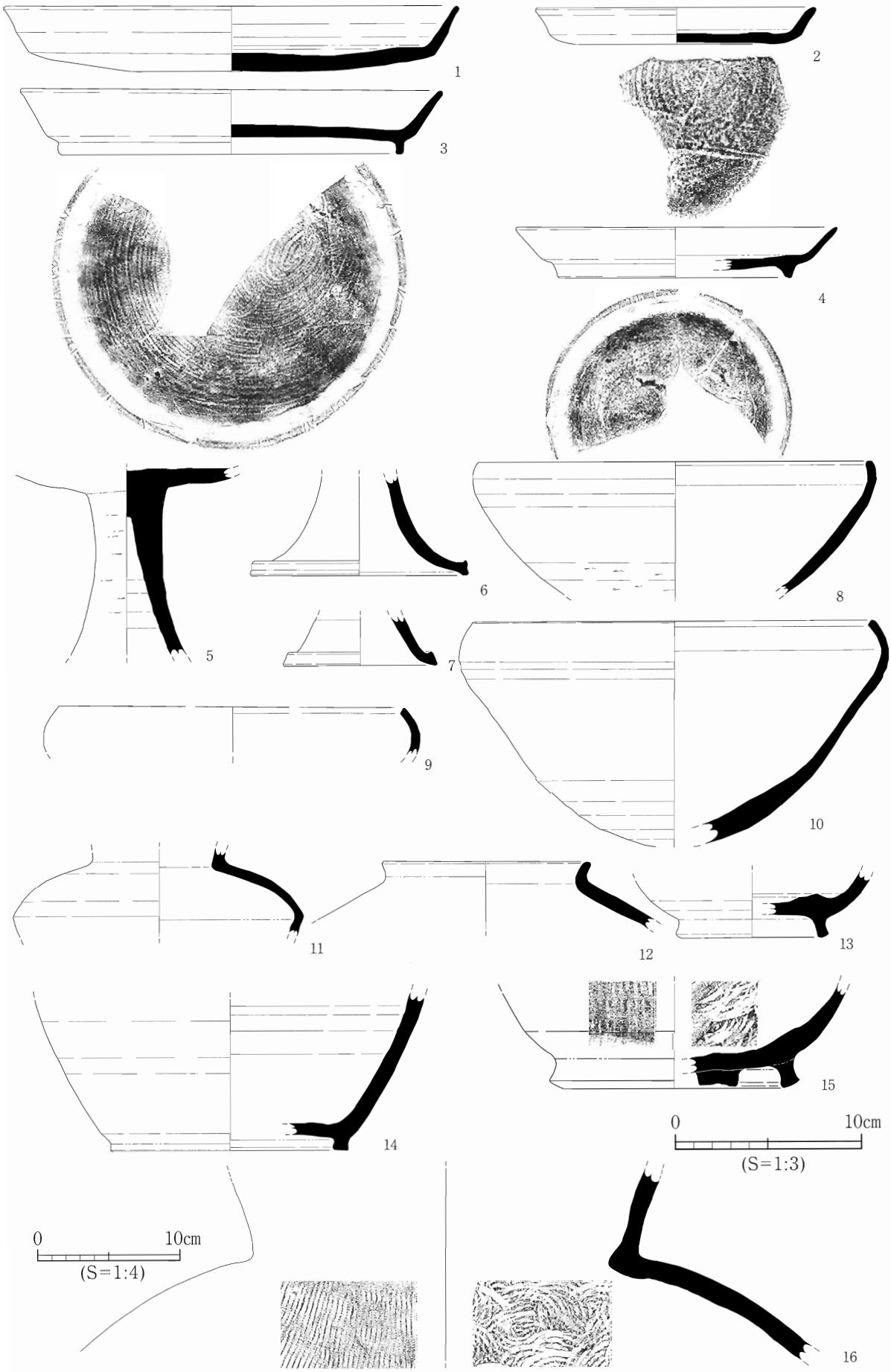
D．須恵器（第 134 図～ 136 図）

蓋（第 134 図）

第 134 図 16 は坏蓋で口径 12.6㎝を測る。天井部はヘラ切り未調整で段部の沈線は消失しており、大谷 5 期（大谷 1994）に属する。17 ～ 23 はつまみの付くタイプの蓋であるが、つまみが確認できる資料はいずれも扁平な宝珠状ないしはボタン状のもので、輪状つまみはない。器形は扁平なものと天井部が平坦で口縁部にむけて屈曲する器高のあるタイプが認められる。口縁部はやや下方へ折り曲げている資料が中心で、概ね青木Ⅲ期前後の資料と思われる。17 は天井部につまみ貼付時用の割付線が認められる。18 は墨書土器で内面に「伎」と思われる文字が判読できる。19 は通常の坏に伴う蓋ではなく短頸壺などの蓋と想定されるものである。口径 13.9㎝を測り、扁平な天井部から口縁部がほぼ垂直に長く屈曲し、端部は凹面を形成する。つまみも他の扁平な宝珠形ではなく器高の高いしっかりした形状の精美な宝珠形を呈するものである。

坏（第 134・135 図）

第 134 図 24･25、第 135 図 1 ～ 6 は無蓋タイプの坏である。型式的にはやや幅があり、第 135 図 2、4 のように底部がやや小さく口縁部が内湾し屈曲するタイプ、口縁部が内湾するがくびれが顕著で



第 136 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR04 出土遺物実測図 (4)　1 ～ 15：S=1/3、16：S=1/4

ないタイプ（134 － 24、135 － 1）、底径が大きく、体部が直線ないしはやや内湾気味に立ち上がるタイプ（135 － 5・6）が認められる。前者は青木Ⅱ期、後二者は青木Ⅲ～Ⅳ期に属する資料と思われる。6 は内面に赤漆が付着しており、漆紙状のものも一部認められる。

第 135 図 7 ～ 11 は高台のあるタイプの坏である。坏部はやや深く体部が直線的に延び、高台は底部外縁付近に取り付く資料が主体を占める。底部は無蓋タイプと異なりヘラ切りのちナデ調整のものが多く、回転糸切痕を残すものは少ない。これらの資料は青木Ⅲ～Ⅳ期に属するものと考えられる。

皿（第 135・136 図）

第 135 図 12 ～ 14、第 136 図 1・2 は無高台の皿である。135 － 13・14、136 － 1 は底部が丸みを帯びている点で赤彩土師器の古い段階の資料に器形が類似する。底部は回転糸切のものとヘラ切りのちナデ調整のもの（136 － 1）の両者が認められる。

第 136 図 3・4 は高台皿である。3 は大形品、4 は通常の大きさのものだが、器形はほぼ相同である。3 は内面に墨状の黒色物が付着し、転用硯の可能性がある。青木Ⅲ期前後の資料と思われる。

高坏（第 136 図）

高坏は量的に乏しく、3 点しか確認できていない。5 は柱状の脚部を呈するタイプで、外面にヘラケズリ痕を残す。坏部を欠損するが浅い皿状のタイプになると思われる。6・7 は脚端部の資料でいずれも端部に面を形成する。

鉢（第 136 図）

第 136 図 8 ～ 10 はいわゆる鉄鉢形土器で、口縁部が強く内湾し体部外面下半にヘラケズリを施す。10 は直接接合しない 2 個体を図上で合成したもので、本来の形状はやや異なる可能性がある。

壺（第 136 図）

11 は長頸壺の肩部資料である。肩はよく張り稜を形成する。12 は短頸壺の口縁部で、口縁部はごく短く外反し胴部がよく張る器形を呈する。13 ～ 15 は壺の底部資料でいずれも高台が取り付く。15 の底部には焼台に使用したと思われる甕片が融着しており、底部内面に自然釉が認められることから蓋がない状態で正立して焼成された資料と考えられる。

甕（第 136 図）

大甕片は多数出土しているが、形態の復元できるものは乏しい。16 は頸部から肩部にかけての大甕片である。残存する範囲では頸部には沈線等は認められない。

E．土製品（第 137 図）

第 137 図 1 ～ 5 は土錘である。1 ～ 4 は紡錘状を呈しやや大振りなタイプで、灰白色を呈し重量が 20 ～ 40 g 前後を測る。出土状況から 8 ～ 9 世紀に属するものと考えて問題ない。4 は片面に平滑な部分が認められ、縄との接地痕である可能性がある。5 は円筒状の土錘で棒に粘土を巻き付けた後両端を裁断して成形したもので、色調や胎土が 1 ～ 4 と異なり、別の時期に属する可能性が高い。

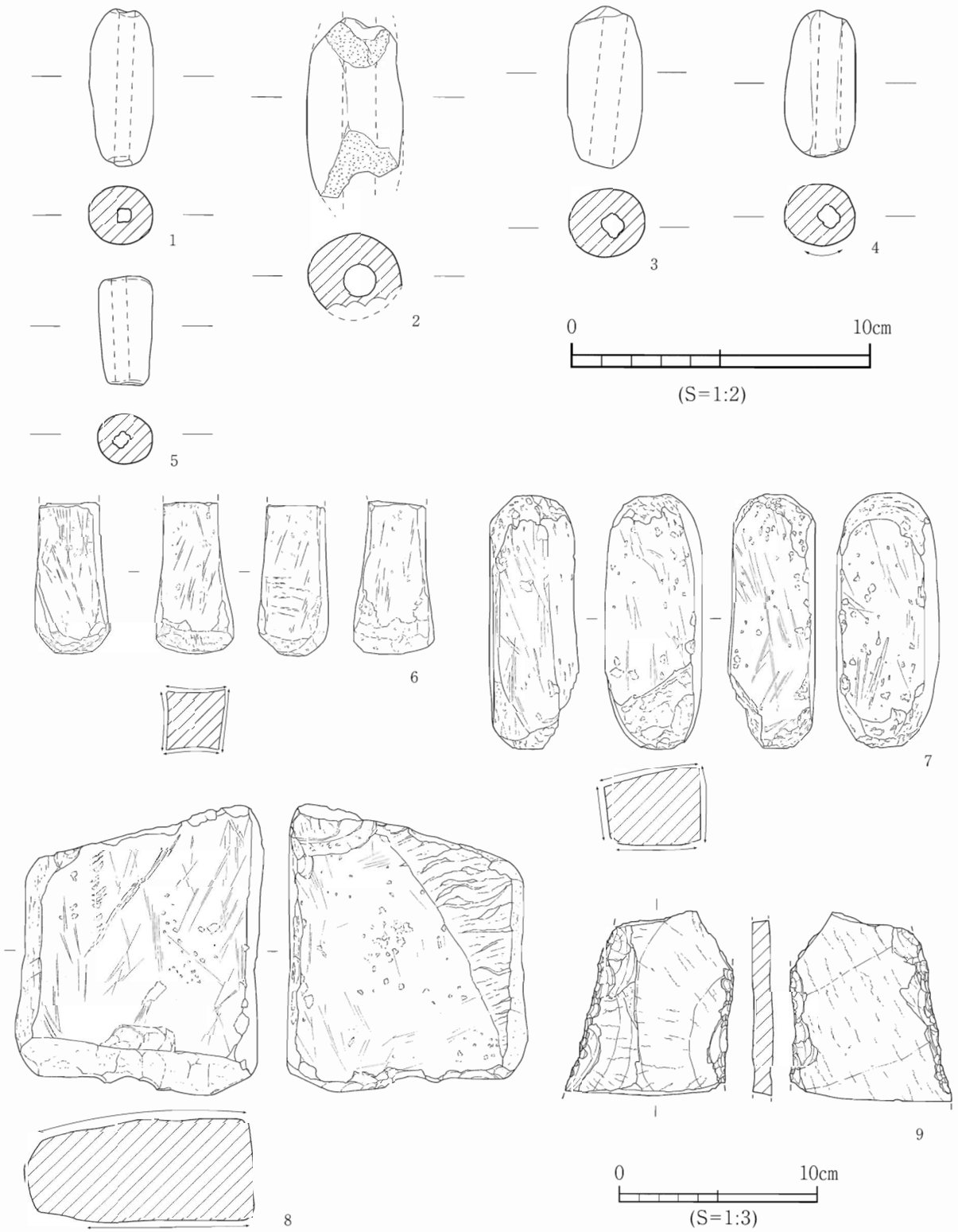
石器（第 137 図）

第 137 図 6 ～ 8 は砥石である。6 は凝灰岩製の砥石で直方体状をなし、4 面の使用面が認められる。7 も凝灰岩製の直方体状の砥石で 4 面を使用面として用い、鉄器による刃先痕が顕著に残る。8 は緑色凝灰岩製の大形の砥石で、形態は厚手の板状をなす。表裏 2 面を使用している。これらは共伴土器から 8 ～ 9 世紀に属するものと考えられる。

9は流紋岩または安山岩製の打製石斧状の石器である。扁平な板状を呈し両端を欠損する。後述する下層の6層からの混入品と考えられる。

遺構の性格と年代

SR04は既に述べたように堆積土の様相や遺物の出土状況からみてある段階に埋め立てられた可能性が高いと考えられる。遺物は若干の夾雑物を除けば8～9世紀の遺物がその大半を占めるが、



第137図　九景川遺跡Ⅲ区SR04出土遺物実測図(5)　S=1/3

現状では青木Ⅱ～Ⅳ期とかなり幅が認められる。先述したⅢ区北東部古代建物群の年代が青木Ⅳ期に営まれた可能性が高い点を考慮すれば、この建物群を造営する際に埋め立て・整地された可能性が高い。これはSR04埋没後に区画溝的なSD15が存在し、それより南に古代に属する遺構が全く認められない事実と矛盾しない。

(7) Ⅲ区包含層出土遺物

A．Ⅲ区包含層遺物出土状況（第138図）

第138図には第67図に示した南西部3層出土遺物を除く、Ⅲ区包含層遺物（6層出土遺物を除く）のうち、主なものの分布状況を示した。

Ⅲ区において弥生時代後期～古墳時代前期に属する遺構はSK14のみであるが、その周辺では当該期の遺物はほとんど認められない。調査区北西部のSB13周辺から当該期の遺物がややまとまっ

第138図　九景川遺跡Ⅲ区包含層遺物出土状況（南西部中世遺構面を除く）　遺構：S=1/400、遺物：S=1/24

て出土しているものの、これに伴う明確な遺構は確認できなかった。

古墳時代中期前半の遺物は、土器だまりやSR03を除けば、量的には多くはない。ただしこれも当該期の包含層が後世の削平により失われたことによるところが大きく、Ⅲ区北東部ピット群中からも当該期の遺物が一定量出土していることからみて、この時期の集落域はⅢ区全体に広がっていた可能性が高い。

一方、古代の遺物は、先述のように包含層が削平されている関係でそう多くはないが、Ⅲ区北東部古代建物群周辺にはピット出土遺物と同様に、青木Ⅲ～Ⅳ期の遺物が若干出土している。しかしその一方で、SR04以南においては古代の遺物は殆ど確認できず、SR04及びその埋没後に営まれたSD15が古代集落領域の明示に何らかの意味を持っていた可能性を示唆する。

中世の遺物は先述のとおり、Ⅲ区南西部に集中するが、調査区中央付近においても当該期の遺物が若干出土していることから、Ⅲ区の大部分は当該期に何らかの利用が行われていたものと推測される。

B．Ⅲ区1～2層出土遺物（第139図～142図）

ここで1～2層出土遺物としたものは、一部調査区南西部のものも含まれるが、その大半は後世の大きく削平を受けた調査区北半部からの出土遺物である。これらは古墳時代中期～古代の遺構上面に直接堆積していた土層からの出土遺物であり、従って各時代の遺物が混在している。

縄文土器（第139図） 第139図1、2は突帯文土器である。1は口縁部のやや下に刻目突帯を貼り付け、口縁部端部も横方向から刻んでいる資料である。2は口縁端部にほぼ接するように刻目突帯を貼り付けている資料で、外面に二枚貝条痕調整が認められる。

弥生土器（第139図） 第139図3は弥生時代中期の広口壺の口縁部で、口縁部端部はやや下方に垂下して文様帯を形成し、斜格子文を充填する。4は出土地点から3と同一個体と思われる壺の頸部資料で、頸部に断面台形の突帯を貼り付け、その上面に同様な文様を施している。Ⅲ－1～2様式に属する資料と思われる（松本1992）。

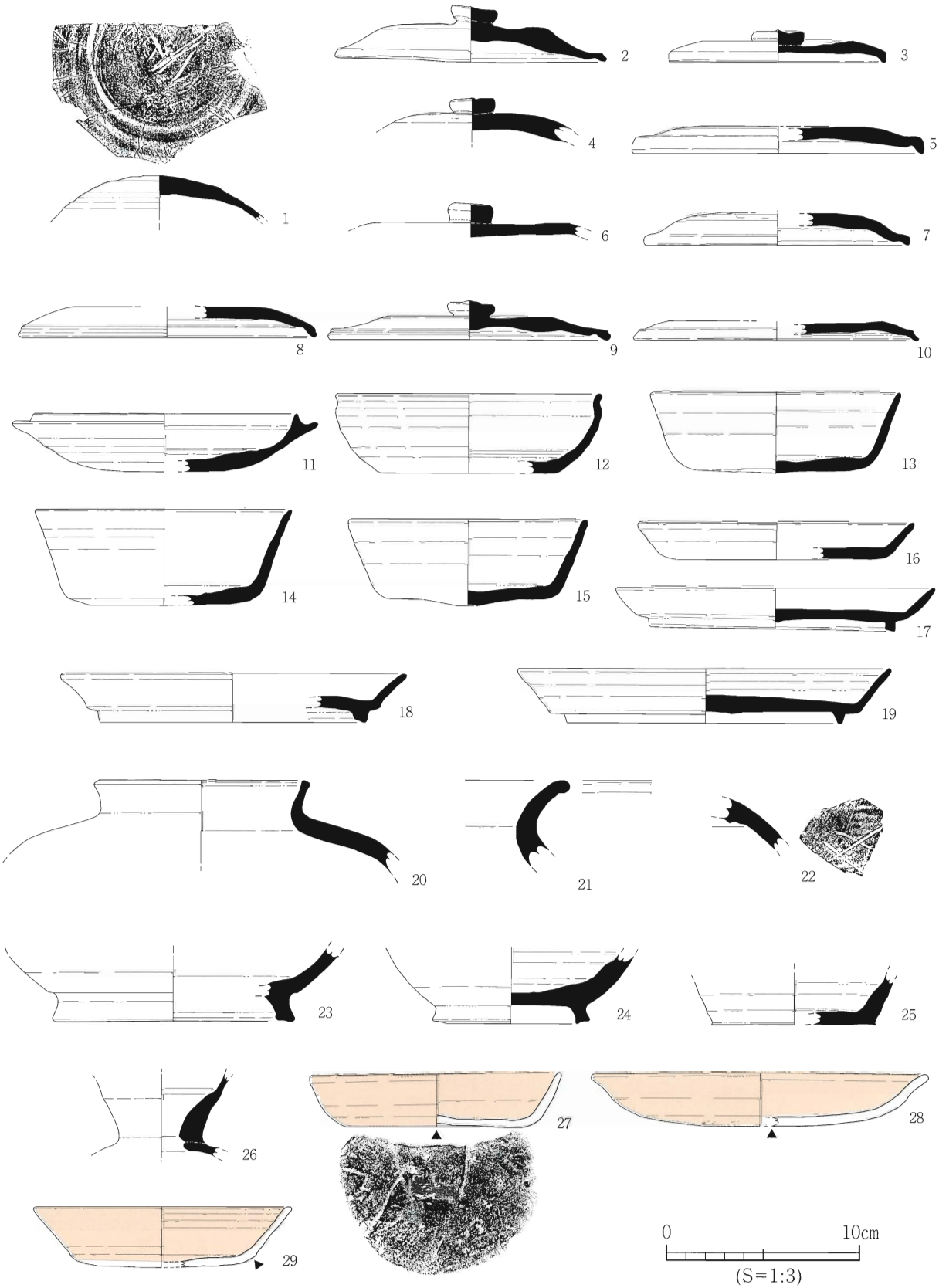
土師器（第139図）

第139図5～10は甕で、うち5～8は古墳時代中期前半の資料である。5は口縁部がやや内湾気味を呈し、外面に痕跡的稜線を残す。色調は黄橙色を呈する。6は小形の甕で、口縁部は複合口縁の退化した袋状口縁を呈している。肩部はタテ後横方向のハケを施した後、線刻状モチーフが描かれている。灰白色で胎土は小谷式的な様相を呈する。8は肩が張らず下膨れのプロポーションをなす当該期では異形の甕である。口縁部は退化した複合口縁状をなし、口縁部端部は外方にややくびれ丸く収める。外面はタテハケのみの調整で淡橙色を呈する。

9・10は古代に属する煮炊具で、接合しないが同一個体の可能性がある。器壁が非常に厚く、口縁部は短く外反する。胴部は張りが弱く、外面及び口縁部内面に粗いハケメを残す。頸部には一条の沈線が認められる。

11・12は古墳時代中期前半の小形丸底壺・鉢で、11はやや下膨れ状のプロポーションを呈する。12は鉢状の小形丸底土器で、頸部のしまりが弱く短く直線的に外反する。いずれも淡黄橙色を呈する。13～15は同じく古墳時代中期前半の高坏である。13は有段高坏で坏部外面にタテハケを顕著に残す。14は坏部が浅い椀状を呈する無段高坏でやはり内外面のハケ調整を顕著に残している。浅黄橙色を呈し、やや砂粒をまじえた大東式特有の胎土パターンの一つの特徴を備える。15は高

第 139 図　九景川遺跡Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物実測図 (1)　S=1/3



第 140 図　九景川遺跡Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物実測図 (2)　S=1/3

坏脚部で脚裾は緩やかに開き、三方向に円形スカシを穿つ。脚部外面は縦方向のミガキ調整で仕上げる。16は鉢で、口縁部のヨコナデ調整が不十分であり口縁部が波打つ。外面にはハケの他ケズリ調整が一部認められる。

18は移動式竈の庇部で、本体との剥離痕が観察される。19は甑の取手である。両者とも8世紀代に属する資料と思われる。

須恵器・赤彩土師器（第140図）

第140図1～10は蓋である。1は天井部周辺にヘラケズリを施し、中央付近はヘラ切りのちなでている。大谷5期に属する。

2～10はつまみの付く蓋である。つまみの形状が確認できる資料はいずれも扁平な宝珠状ないしはボタン状のもので輪状はない。器形も扁平なタイプとやや器高が高いタイプの二種類が存在する。口縁部は下方に明確に屈折する資料が多いが、2・9はわずかに痕跡的に屈折する。

11～15は坏である。11は口径13.4cmを測り、立ち上がりは低く内傾し底部は周辺ヘラケズリを施す。12～15は無蓋の坏である。12は内湾気味に立ち上がり、口縁部は明確にくびれる青木Ⅱ期の資料である。13～15は底径がやや大きく体部が直線的に延びる。底部はいずれもヘラ切り後なでている。青木Ⅳ期に属する資料と思われる。

16～19は皿である。16は体部が直線的に延びる浅い皿で底部はヘラ切りのちなでている。17～19は高台皿で、底縁のやや内側に高台が取り付く。器形は17が体部がやや内湾し古い様相を残すが、18・19は体部が外反気味に立ち上がる。底部調整が判明する17・19はいずれもヘラ切りのちナデ・軽いケズリを施している。18は内面に火襷痕が認められる。青木Ⅲ～Ⅳ期に属すると考えられる。

20～26は壺である。20は短頸壺で口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁部外面に釉が付着する。22は壺の肩部でヘラ記号が認められる。23・24は高台付壺の底部で、24は壺内面底部に自然釉が付着している。26は装飾付須恵器の子壺で親壺に円孔を穿った後底抜けの子壺を接合している。

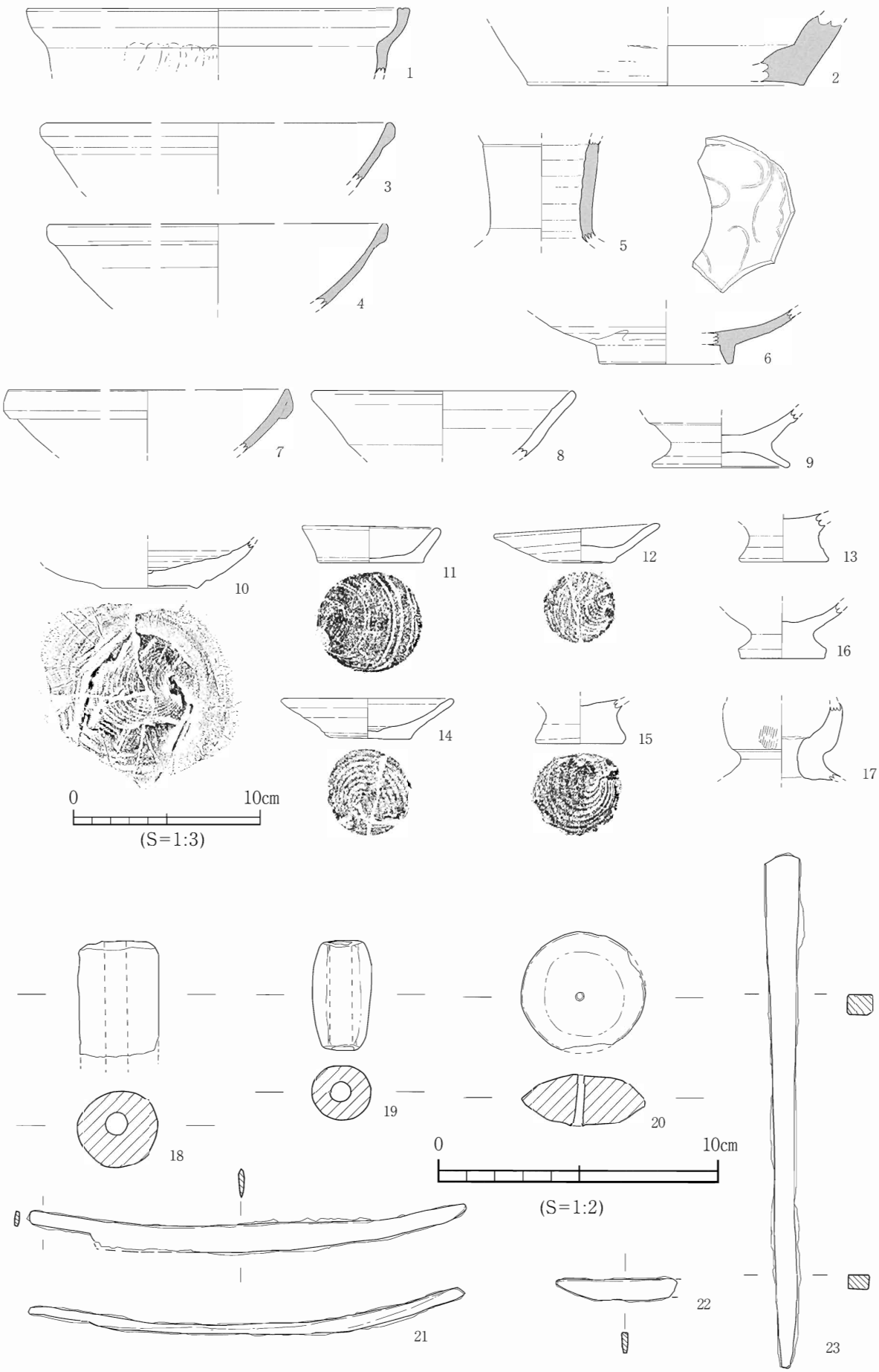
27～29及び第139図17は赤彩土師器である。28は皿で底部は丸みを帯び、口縁部はゆるやかに外反する。赤彩は底部まで及んでおり、青木Ⅱ期以前の資料である。29は体部が直線ないしはやや外反する坏で、底部に赤彩が及ばない点から青木Ⅲ～Ⅳ期の資料と考えられる。第139図17は坏部が深く口縁部がやや外反する器形の赤彩土師器であまり例のないタイプである。

陶磁器（第141図）

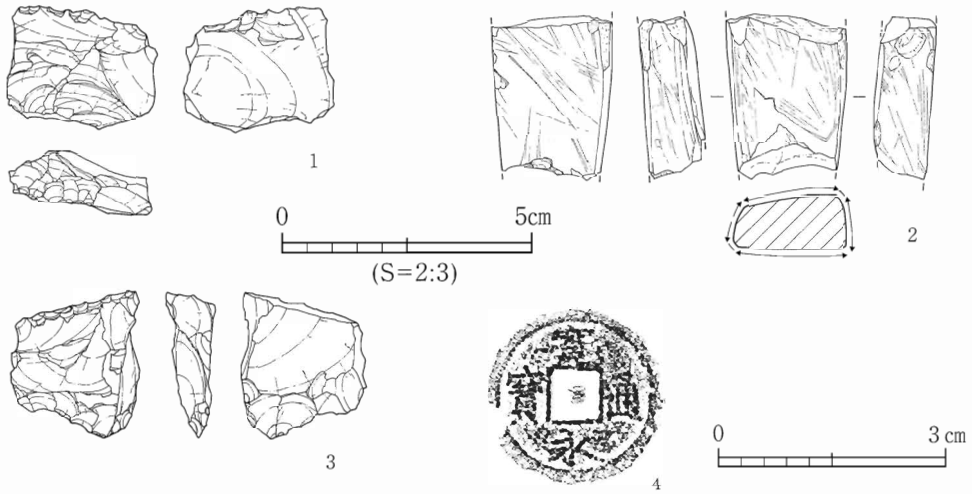
第141図1はH7グリッドから出土した在地系の瓦質土鍋である。口縁部は受口状に内湾し内面にヨコハケ状の調整を施す。2は中世須恵器壺の底部で底部内面に白色付着物が認められる。3、4、7は太宰府分類Ⅳ類の白磁椀で、G3、G4、I5グリッドといった当該期の遺構が比較的希薄な場所から出土している。5は灰釉系の瓶で内外面に自然釉が付着する。内面には粘土紐の輪積痕が認められる。6は太宰府分類の白磁椀XⅢ類に属するもので、見込みに渦紋状の沈線文が認められる。これらの遺物は概ね12～13世紀に属する資料と考えられる。

土師質土器（第141図）

第141図8～16は土師質土器である。8は坏で口縁部がややゆるやかに外反する。9はハの字状に開く高台を備える坏、10は無高台の坏で概ね上記の陶磁器に伴うものと考えられる。11、12、14は小皿である。12・14は底径が小さく口縁部が長く開く小皿で、12～13世紀頃のものと考え



第 141 図　九景川遺跡Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物実測図 (3)　S=1/3、1/2



第 142 図　九景川遺跡Ⅲ区 1 ～ 2 層出土遺物実測図 (4)　S=2/3、1/1

表 6　九景川遺跡Ⅲ区 1 ～ 2 層出土銭貨計測表

図版番号	名称	初鋳年	銭径（A）/ 銭径（B）	内径（C）/ 内径（D）	銭厚	量目
第 142 図 1	寛永通寶	1636 年（暦）	23.30㎜　23.40㎜	6.50㎜　5.60㎜	0.80 ～ 0.90㎜	2.08 g

られる。11 は底径が大きく口縁部が短く立ち上がるタイプで、底部に静止糸切痕を残す。白枝本郷遺跡 3 層上面 1 号溝資料に類似し、17 世紀後半以降に属する資料と考えられる（島根県教育委員会 2006）。13、15、16 は高台付坏の脚部である。脚部形態はかなりバラエティに富む。17 は子壺状の資料であるが、胎土や色調は土師質土器と酷似している。

土製品（第 141 図）

第 141 図 18、19 は土錘である。18 は G5 グリッド 2 層から出土した円筒形の土錘で、砂粒を多く含む極めて粗い胎土のもので、新しい時期の遺物である可能性が高い。19 は紡錘形のやや大型の土錘で重量 17 g を測る。時期は不明。

20 は紡錘車状の資料で、G5 グリッドの SR03 に隣接する箇所から出土した（第 138 図）。径 4.4 cmの正円形を呈し、断面形は算盤玉状を呈する点でやや特異な資料である。出土地点からみて古墳時代中期の遺物である可能性が高い。

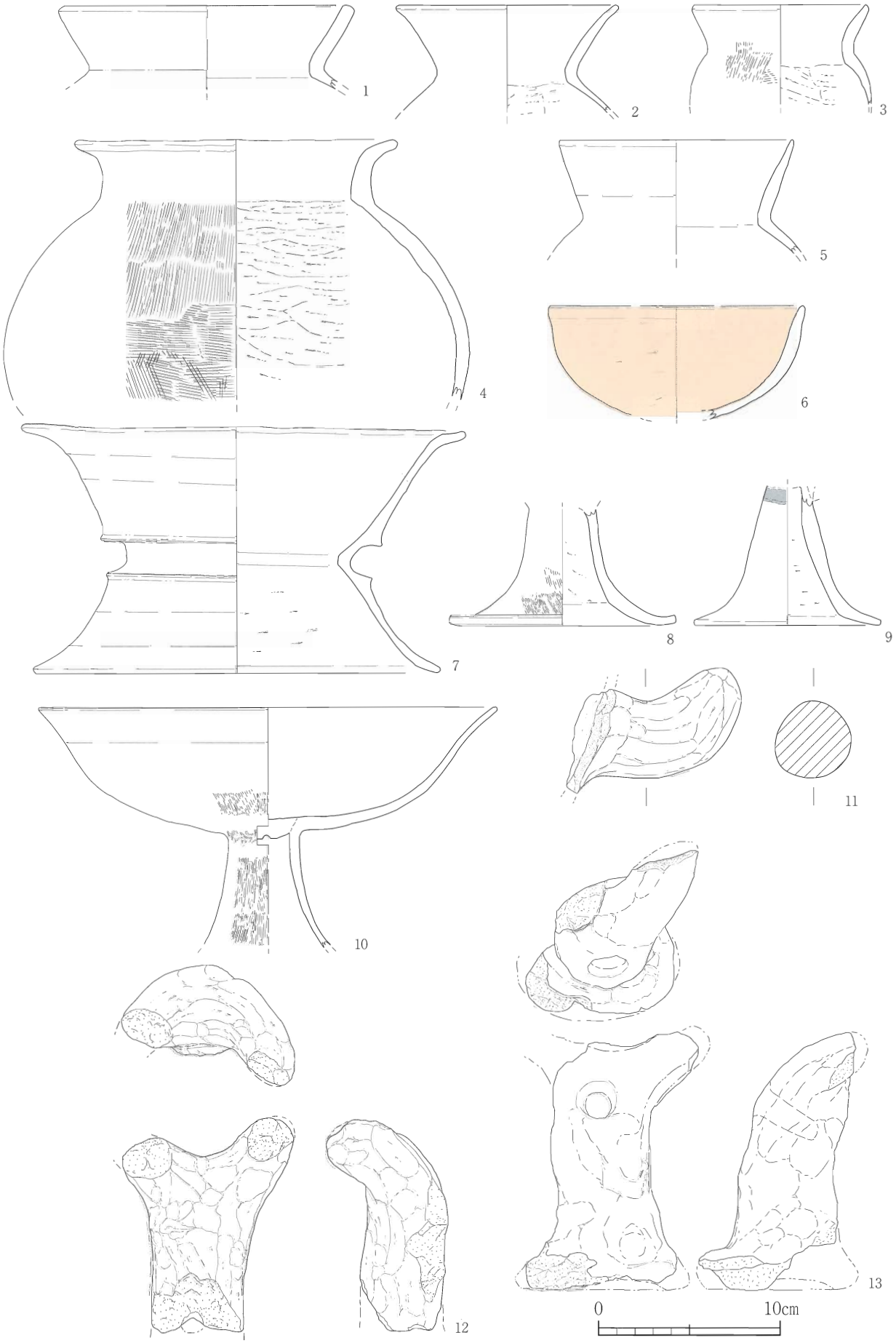
金属器（第 141 図）

第 141 図 21 ～ 23 は鉄器である。21、22 は刀子である。21 はほぼ完形品で全長 15.4cm、幅 1.0cm の細身の刀子で、土圧により大きく曲がっている。片関で茎は細く短い。年代は不明。22 は刀子の切先部の破片であり、21 と同様な小形品と考えられる。23 はほぼ完形の大形釘で、全長 19.3cm を測る。G4 グリッド中の出土で、質感からみて新しい時期のものである可能性が高い。第 142 図 4 は表土中から出土した寛永通宝で、字体から新寛永と思われる。計測値は表 6 に示した。

石器（第 142 図）

第 142 図 1 は黒曜石製の楔形石器で長さ 2.3cm、幅 3.0cm、厚さ 1.1cmを測る。3 も 1 と同様に黒曜石製の楔形石器で G3 グリッドから出土した。上下からの打撃による剥離が顕著に認められる。

2 は緑色凝灰岩製の砥石で両端を欠損している。やや厚い板状を呈し四面を使用面として用いて



第143図　九景川遺跡Ⅲ区3層出土遺物実測図(1)　S=1/3

おり、鉄器による刃先痕が各面に顕著に認められる。

C．Ⅲ区3層出土遺物（第143図～146図）

3層は中世前半期の遺物包含層であるが、安定して存在していたのは調査区南西部のみで、北西部は上下層との混在が著しく、調査区東側は削平のため存在しない。Ⅲ区南西部における遺物出土状況については既に述べているので（第67図）、ここでは混在する前後の資料も含み、遺物の概略について述べる。

弥生土器（第143図）

第143図7は10の高坏とともにF2グリッド内から出土した鼓形器台である。取り上げ時には3層として取り上げたが、下層との区別が難しく4層に伴う遺物を誤って取り上げを行った可能性が高い。筒部はかなり縮約しているものの、受部と脚部とのバランスも崩れておらず、草田5期に属するものと思われる。10はほぼ同地点から出土した高坏である。坏部が大振りで深い特徴からみて7と同時期の資料と考えられる。

土師器（第143図）

第143図1～6、8、9、11～13は土師器で、いずれも古墳時代中期前半の資料である。

1はF4グリッドから出土した単純口縁甕である。やや内湾気味に立ち上がり灰白色を呈し石英小粒を多く含む。古墳時代中期前半に属する。SR03からの混入品である。2は中形で橙色を呈する大東式の壺である。3はG5グリッド出土の小形丸底壺で、頸部にしまりがなく口縁部も短い。色調･胎土は小谷式的な資料である。SR03からの混入品と考えられる。4は大東式の単純口縁甕で、口縁部はやや厚く、ほぼ直立気味に立ち上がった後強く外反し、端部は丸く収める。胴部はよく張り最大径は中央付近まで下がっている。

5は中形の直口壺で橙色を呈している。4、5はG7グリッド出土で下層からの混入品であろう。6は坏でやや深いボウル状を呈し、外面を軽いケズリで仕上げ、内外面に赤彩を施している。8、9は高坏である。9は坏部との接合が差し込み式で坏部との剥離痕が認められる。

11～13は古墳時代後期～奈良時代に属する土師器である。11は甑取手、12、13は土製支脚である。土製支脚は両者とも背面から貫通しない円孔を斜め上方から穿つタイプであるが、穿孔位置はかなり異なっている。

須恵器（第144図）

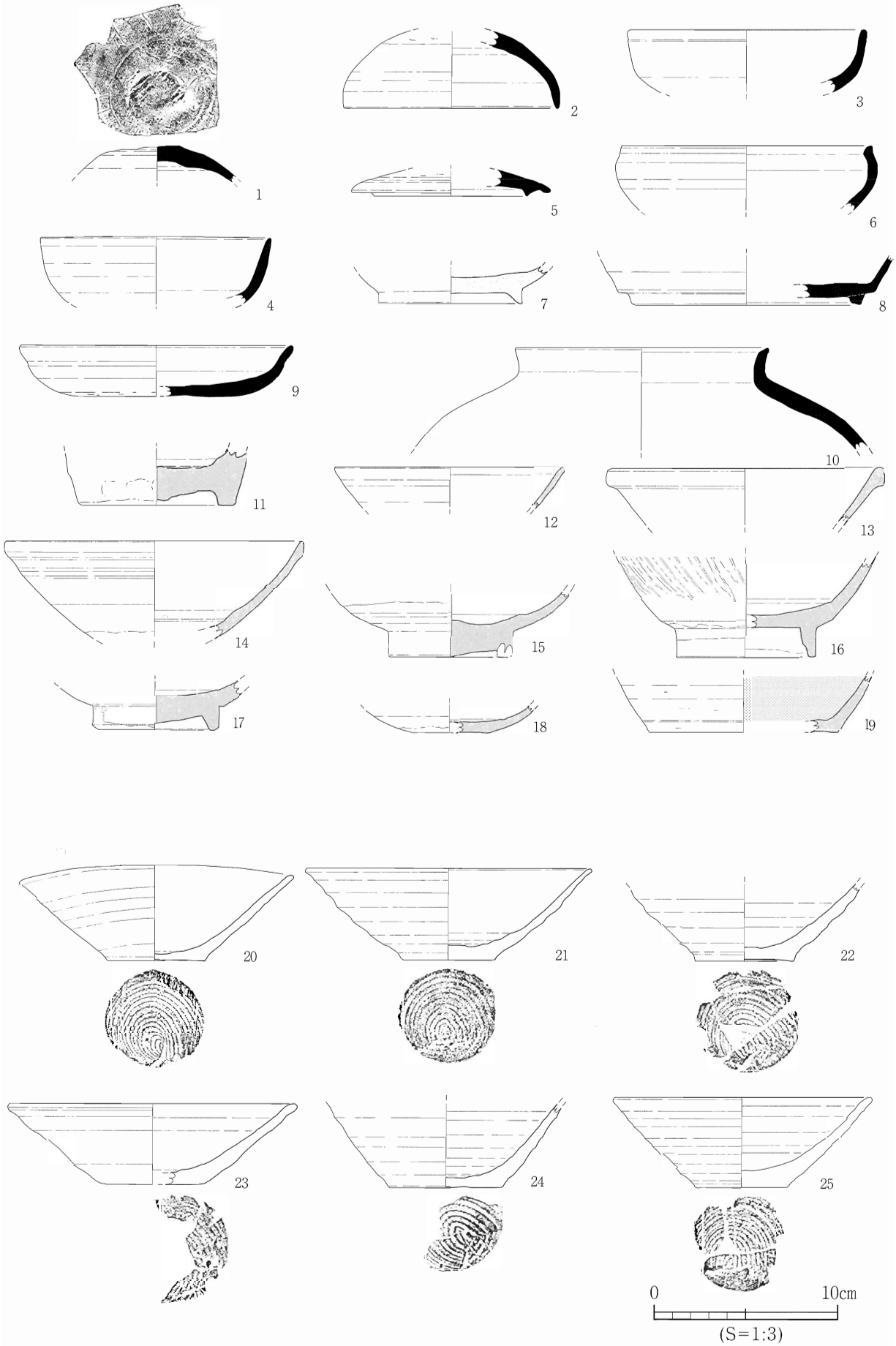
1・2は坏蓋である。1は天井部がヘラ切り未調整で当具痕を残す。2は段部の表現が消失し、天井部周辺に浅いヘラケズリを施す。大谷5～6期の資料であろう。5はかえりの付くつまみ付の蓋で当遺跡では当該期の遺物は非常に稀である。G7グリッドからの出土。

3、4、6は無蓋の坏である。6は口縁部が明確にくびれる。8は高台坏、9は皿である。8はかなり大形の資料で高台付皿の可能性がある。10は短頸壺で肩がよく張り、口縁部は短く直立し端部は内傾する面を備える。

陶磁器（第144図）

7は灰釉系山茶碗の底部で、灰白色を呈し断面三角形の高台が取り付く。内面には重ね焼きの痕跡があり見込以外に自然釉が付着する。12世紀代に属する資料と考えられ、県内では出雲国府跡等でしか類例のない稀少例である[1]。11は中国産の陶器壺の底部で高台状をなす。

(1) （財）京都市埋蔵文化財研究所　平尾政幸氏のご教示による。



第 144 図　九景川遺跡Ⅲ区 3 層出土遺物実測図 (2)　S=1/3

12～18は白磁である。12はⅢで二次焼成を受けている。13、14はⅣ類椀の口縁部である。15はⅤ類椀の底部と思われる。16は椀ⅩⅡ類で外面に縦篦花弁文が描かれている。17は椀Ⅴ類の底部である。18はⅢⅥ－1類である。19は中国産の陶器盤で内面に褐釉が認められる。出土地点は、白磁は15がG5グリッドの出土、7がH6及びH2グリッド、11がH7グリッド、19はG5グリッドの出土、その他はすべてG6グリッドの出土で、Ⅲ区南西部調査区に集中する。

これらの陶磁器は概ね12～13世紀頃のものと考えられる。

土師質土器（第144・145図）

第144図20～25、第145図は土師質土器である。第67図で示したとおり、その多くはⅢ区南西部からの出土である。

第144図20～25、第145図1～3は坏である。いずれもほぼ同様な形態で、口径14～15cm前後で底径が比較的小さく、体部はほぼ直線的に延びる。外面には成形時の強いヨコナデによる稜を顕著に残す。第145図1は器高がやや低く底部が突出気味となるタイプである。

第145図4～7、10～12は脚付の坏である。ハの字状に短く外反する脚部に直線的に大きく開く浅い坏部を備えている。13、14は高台付坏の脚部である。

15～28は小皿である。底径が比較的小さく口縁部が大きくハの字状に開くタイプと底径が大きく口縁部が短く直立するタイプの大きく二つに分かれるが、細かな作りでは幾つかのバリエーションが認められる。これらの土師質土器は一部を除き、陶磁器と同様に12世紀を中心とする時期のものと考えられる。

土製品（第146図）

第146図1～6は土錘である。平面形態はいずれも紡錘形を呈し、大きさは長さ4.8cm～7.0cm、重量9.9～32.6ｇとかなり幅があるが、全般的に大形品が多い。5、6は片面に網紐の擦痕と思われる平滑面が認められる。これらは出土地点や層位から12～13世紀に属するものと考えられる。

鉄製品（第146図）

第146図7･8、10～13は鉄製品である。7は円環状を呈する不明鉄製品である。径3.5cmを測り、Ｘ線写真では鍛接状の痕跡が観察される。8は棒状の鉄器で両端を欠損しているが、比較的大形の釘と思われる。断面は矩形を呈し長さ9.2cmを測る。

10・11は鉄鏃である。いずれも長頸鏃の茎部の資料で、篦被と茎の段差が平面・側面の両者とも明瞭に観察される。その製作技法は、11のＸ線写真観察によれば、棒状の芯金に篦被部となる部分を巻き付け、鍛打により成形したように見受けられる。12・13は比較的小形の釘で、12は一端を折り曲げ頭部を作出しており、長さ5.0cmを測る。

これらの鉄器の多くは前述の陶磁器・土師質土器に伴うものと考えられる。

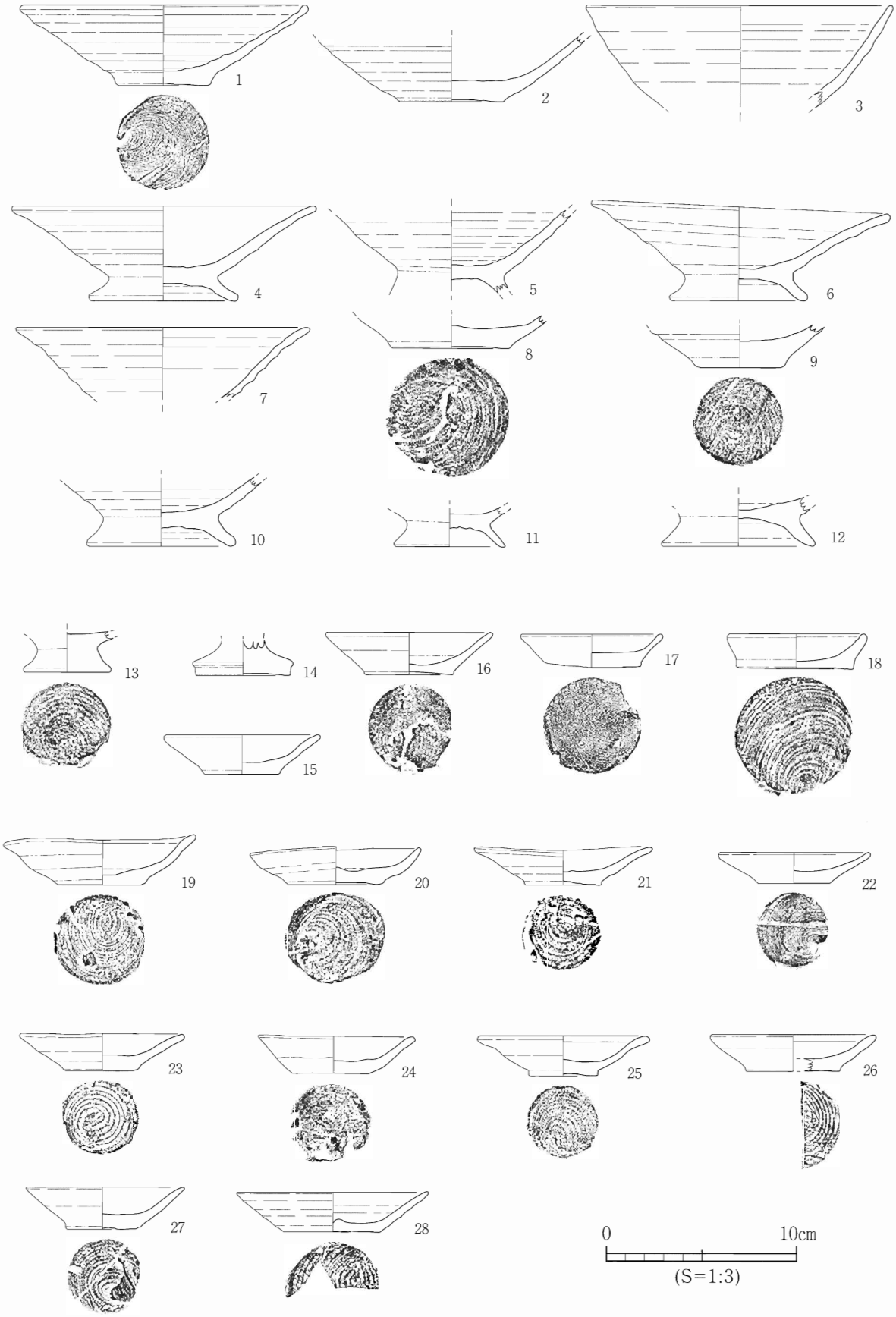
石器（第146図）

第146図9は砥石である。凝灰岩製でかなりの部分を欠損しているが、楕円状の平面形を呈し、2面の使用面が認められ、鉄器による刃先痕が顕著に残る。

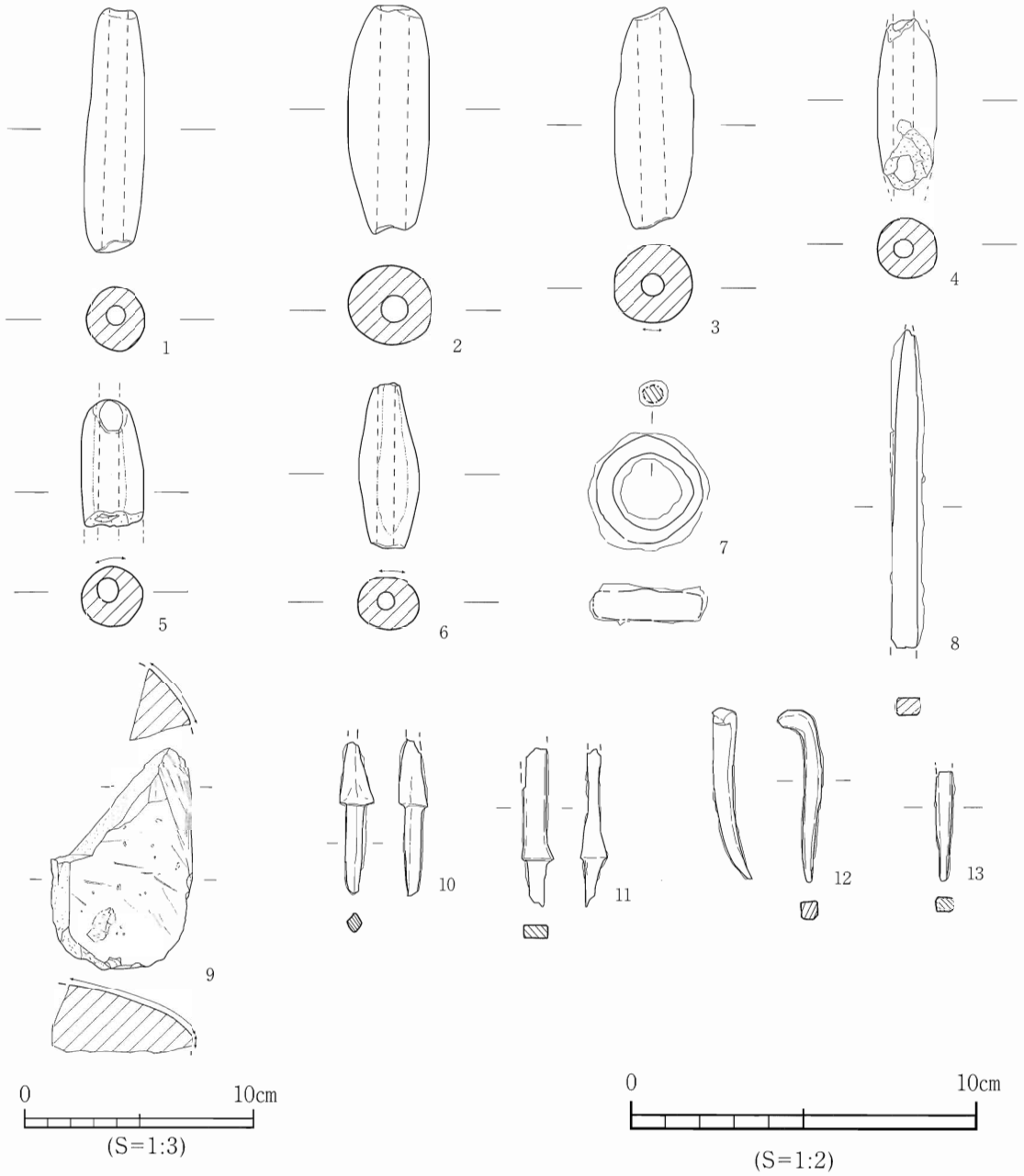
D．Ⅲ区4～5層出土遺物（第147図）

4・5層は中世包含層下で検出した中世遺構面を形成する造成土及びその下層の黒色土包含層である。遺物量は多くはないが、Ⅲ区南西部を中心に若干の遺物を検出した。

縄文土器　1はG5グリッド出土の1条突帯文土器で、刻目突帯がほぼ口縁部端部に接して貼り付



第145図　九景川遺跡Ⅲ区3層出土遺物実測図(3)　S=1/3

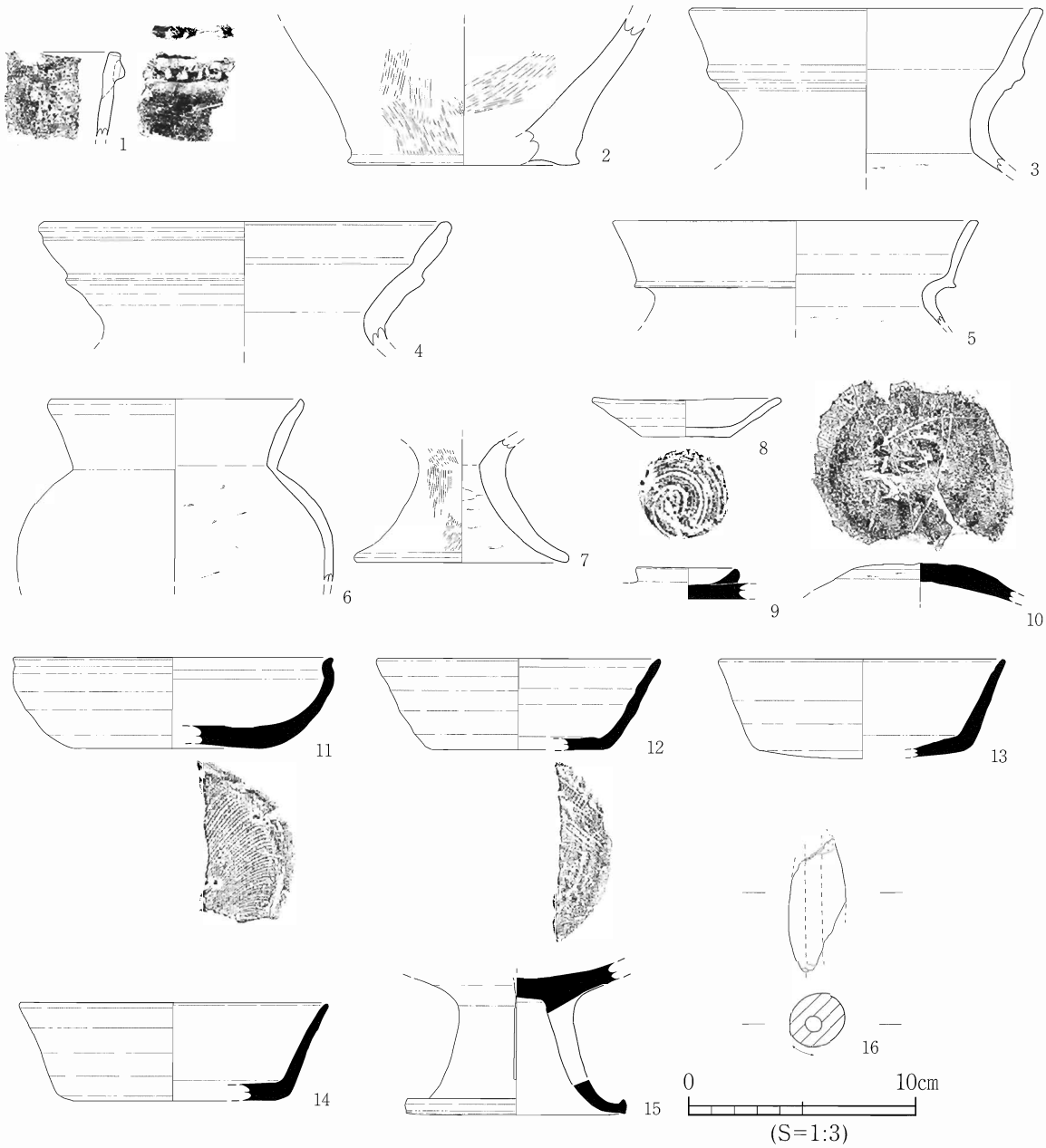


第146図　九景川遺跡Ⅲ区3層出土遺物実測図(4)　S=1/2、1/3

けられ、口縁部上端も刻んでいる資料である。

弥生土器　2は弥生時代前期土器の底部である。しっかりした平底で内外面をハケ調整を行い、胎土は大形の石英・長石を多量に含んでいる。

土師器　3～7は土師器である。3は複合口縁壺で口径15.5cmを測る。形態は前期とほぼ同じであるが、器壁が厚く、口縁部段部が複数の沈線・段により形成されている点が前期のものと異なる。4は同じ複合口縁壺であるが、口縁部段部の形骸化や頸部と口縁部との一体化が一層進行している。3・4は古墳時代中期前半に属する。5は古式土師器で口縁部端部に明確な平坦面を形成し、色調は灰白色を呈する。当遺跡では稀有な古墳時代前期の資料である。6は中形の壺で、口縁部は直線的に長く立ち上がり、端部はやや受口状をなしている。7は厚手の作りの高坏脚部である。いずれも古墳時代中期前半の資料である。



第147図　九景川遺跡Ⅲ区4～5層出土遺物実測図　S=1/3

須恵器　9～15は須恵器である。9は輪状つまみの付く蓋で、Ⅲ区で確認できた輪状つまみはこの1点しかない。10は周辺へラケズリを施す大谷5期の蓋で天井部に「×」印のヘラ記号が認められる。11～14は無蓋の坏である。12、13は外面に火だすき痕が認められる。12～14は青木Ⅳ期以降の新しい時期に属するものである。15は高坏脚部で2方向の切れ込み状スカシが認められるもので、大谷6期頃の資料と考えられる。

土製品　16は土錘で紡錘形を呈し、重量24.97 gを測る。所属時期は不明。

第4節　縄文時代遺構面の調査

(1) 調査の概要（第148図）

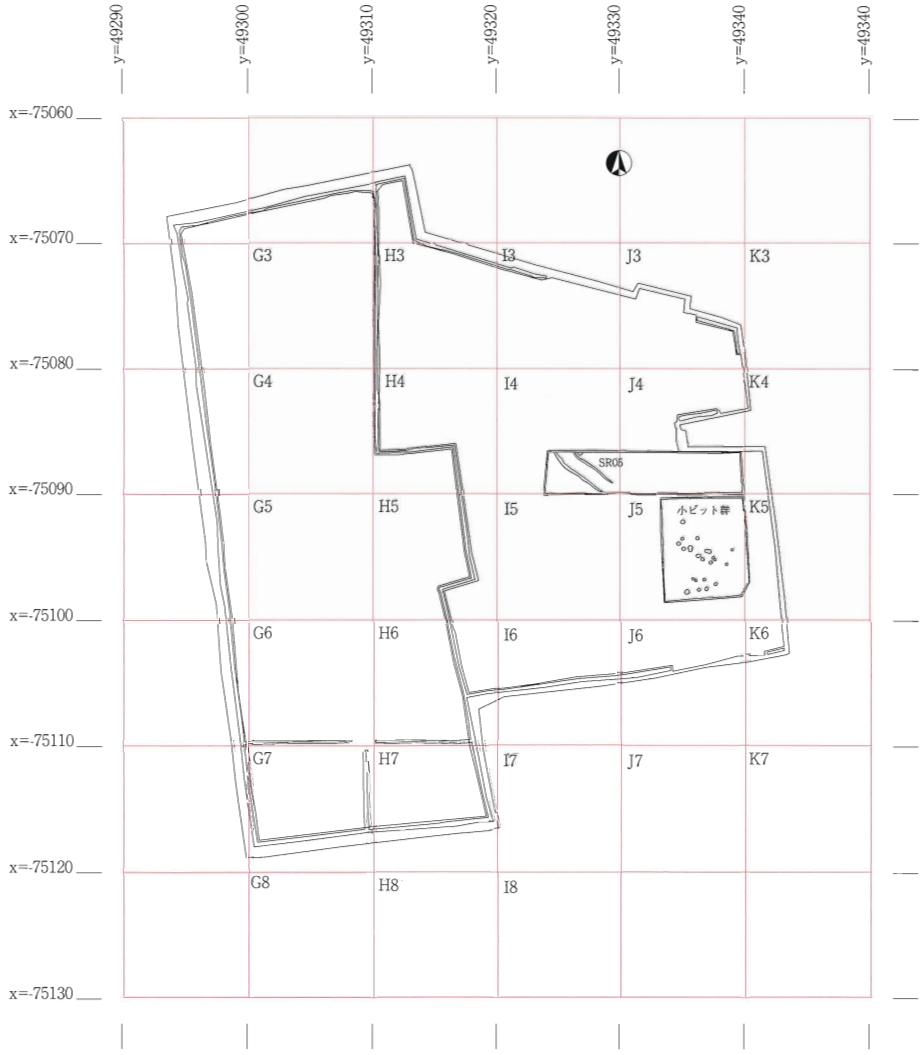
Ⅲ区については、当初6層を基盤層と認識し調査を進めていたが、調査を進めるにつれ調査区東側では、基盤層付近からの突帯文土器・弥生時代前期土器が散見されるようになった。よって調査区東側の5ライン沿いに断ち割りトレンチを設定し掘り下げたところ、縄文時代晩期の若干の遺物とともにピットなどの遺構を検出した。このため、6層上面の調査終了後、断ち割り調査時に遺構・遺物が検出された範囲について面的な調査を実施した。調査箇所はI4・J4・J5グリッドの約110㎡である。調査の結果、自然河道1、小ピット群及びこれに伴う若干の遺物を検出した。

(2) 遺構の分布と概要（第149図）

調査区は南東から北西にむけて緩やかに傾斜している。調査区北西部に浅い自然河道状の落ち込みであるSR05を検出したほか、南西部から20基以上のピット群が比較的狭い範囲からまとまって検出された。

(3) 層位（第151図）

弥生時代後期以降の基盤層となっていた6層は3層に分層できる。最上層の灰オリーブ色土は部分的に黒色土が混じる土層である。その下層には黒灰褐色～暗褐色土が堆積しており、これが縄文時代晩期の遺物包含層となっている。その下層には黄灰オリーブ色土が存在し、ここからは遺物は一切出土していない。



第148図　九景川遺跡Ⅲ区縄文時代遺構面調査区配置図 S=1/600

(4) ピット群（第149図）

調査区南東部で検出したピット群で、23基を検出した。ピットは前述のSK16のようなやや大型のものも含むが、比較的小さくかつ浅いものが多い。覆土は6－b層と同様な黒灰褐色系の土が堆積していた。

これらのピット群は比較的狭い範囲でまとまって検出されたものの、現状では建物が復元できるような規則的な配列は認めがたい。

写真66　Ⅲ区縄文時代遺構面

(5) 自然河道

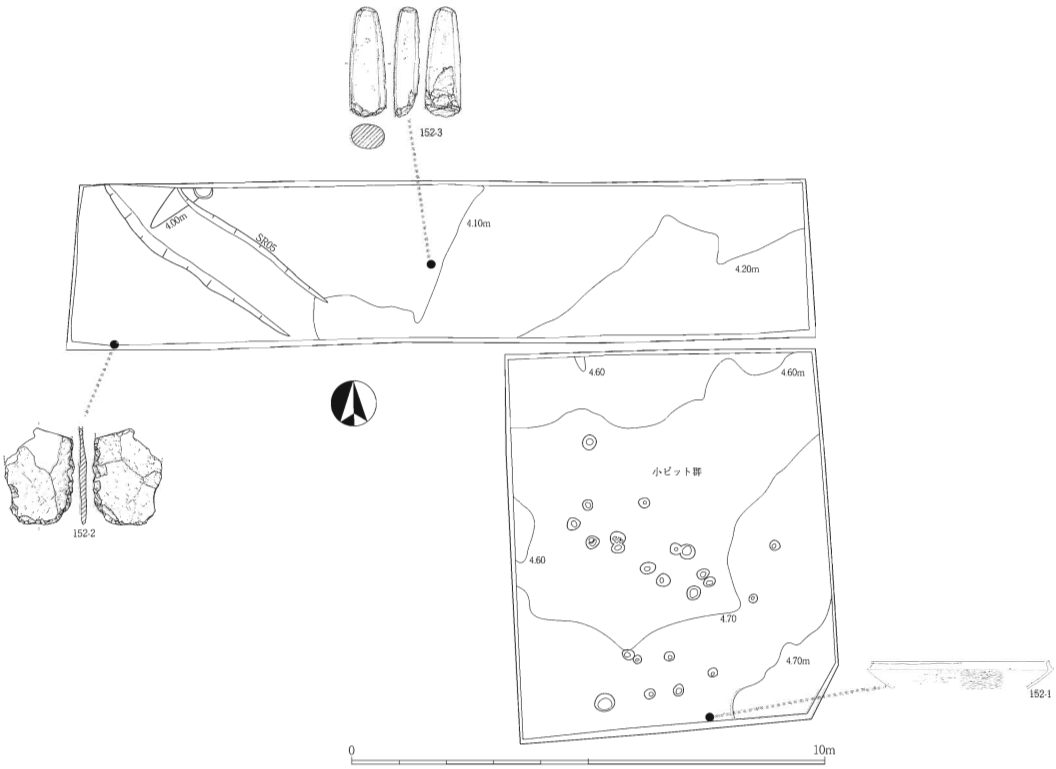
SR05（第150図）

規模と形態　断ち割り調査区北西部で検出した自然河道状の落ち込みである。調査区内で検出した範囲での規模は、長さ5.2 m、幅1.4 m、深さ12cm前後を測る。河道の断面形は浅い皿状を呈している。

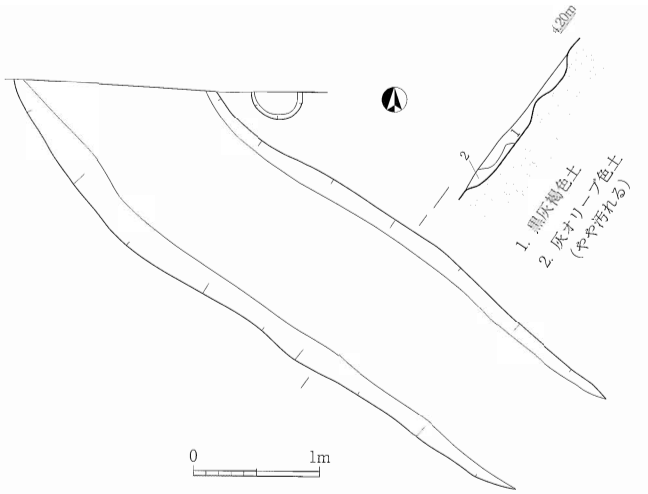
河道内の覆土は上層に黒灰褐色土、下層に灰オリーブ色土が堆積していた。河道内からは遺物は出土していない。

写真67　Ⅲ区縄文時代包含層堆積状況

遺構の性格と年代　遺物は出土していないが、縄文時代晩期包含層下で検出した遺構である



第149図　九景川遺跡Ⅲ区　縄文時代遺構面平面図　S=1/160



第 150 図　九景川遺跡Ⅲ区 SR05 実測図　S=1/60

ことから当該期に属する蓋然性が高い。

遺構の性格については明言できないものの、緩やかに蛇行している点や、遺構の位置や方向が上層の SR04 とほぼ一致している点からみて、縄文時代晩期の自然河道であると考えられる。

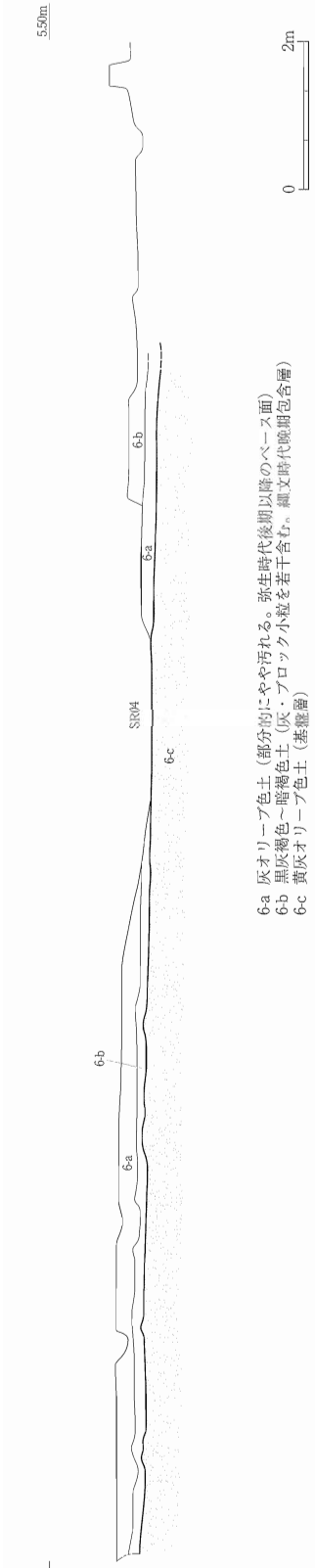
(6)6 層出土遺物（第 152 図）

6 － a・b 層中からは若干ではあるが縄文時代晩期の遺物が出土している。このほか、SR04 で紹介した突帯文土器も当該層からの混入品である可能性が高い。出土遺物は土器の他、石器が 2 点出土しており、その出土位置は第 149 図に示した。

第 152 図 1 は浅鉢である。小片であるが口径を復元すると径 37cm前後となる。色調は灰白色を呈し、砂粒を多く含んでいる。口縁部は「く」字状に屈曲し外反する。口縁部外面には 1 条の沈線を施した後なでている。調整は胴部外面が横方向の板ナデまたは軽いヘラケズリ、内面は口縁部が巻貝状工具によるナデ、胴部には横方向のミガキが認められる。突帯文土器に伴う浅鉢と考えられる。

2 ～ 4 は石器である。2 は流紋岩質安山岩製の板状の石器で上半部を欠損している。石材は当地の縄文時代晩期の打製石斧によく使用されるものであるが、厚みがなくかつ幅広であり、横刃状の刃器である可能性もある。

3 は塩基性片岩製の磨製石斧である。刃部を欠損し



第 151 図　九景川遺跡Ⅲ区縄文時代遺構面調査区付近土層図　S=1/100

ており、使用時の打撃による破損によるものと考えられる。平面形は基部にむかって若干すぼまる撥形を呈し、断面は楕円形で厚く重厚な作りのもので、重量646.25 gを測る。表面に敲打痕が若干認められる。

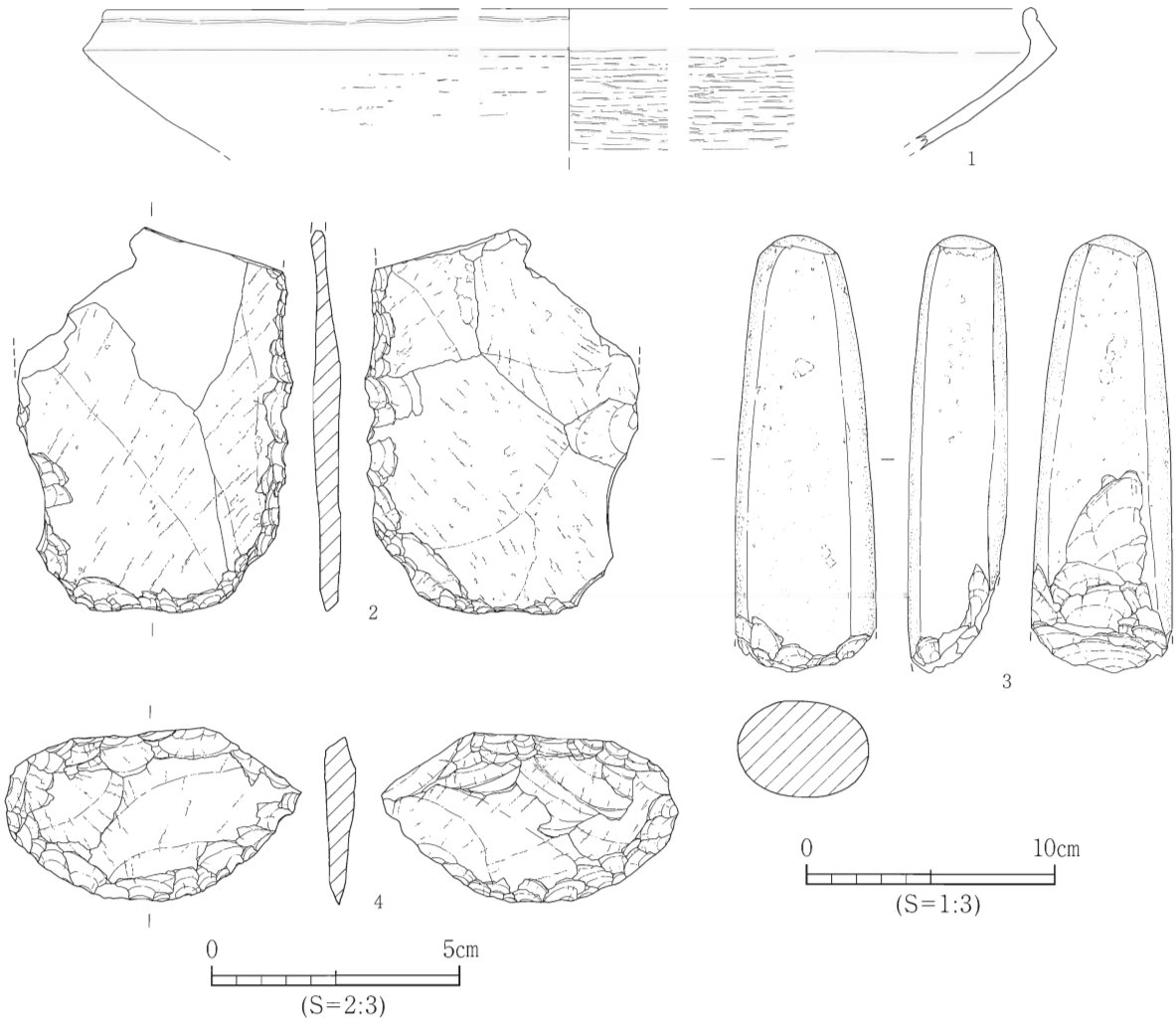
4は安山岩製のスクレーパーで、長さ3.4cm、幅5.9cm、厚さ0.6cmを測る。石材は肉眼上の観察では金山産に似る。横長の板状剥片の四周を両面から押圧剥離を行い、半月状の平面形態を作出している。

写真68　Ⅲ区縄文時代遺構面ピット群

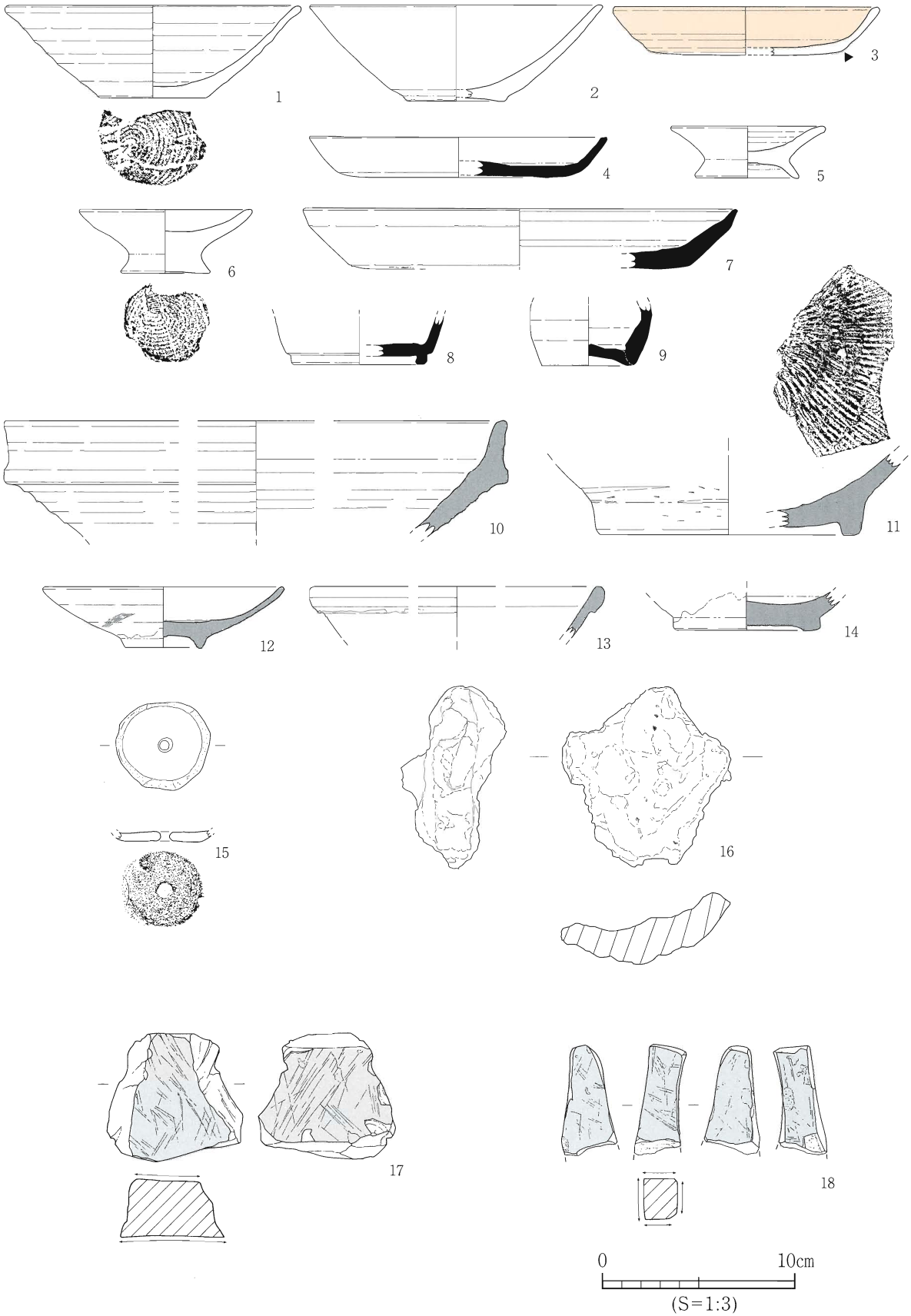
第5節　その他の遺物

第153図には表土掘削時や調査区側溝掘削時における所属時期不明の遺物のうち、代表的なものを掲げた。

土師器　3は赤彩土師器で体部はやや内湾気味に立ち上がり、底部に赤彩は及んでいない。青木Ⅲ



第152図　九景川遺跡Ⅲ区6～7層出土遺物　S=1/3、2/3



第 153 図　九景川遺跡Ⅲ区遺構外出土遺物実測図　S=1/3

期前後に属すると考えられる。

須恵器　4、7～9は須恵器である。4・7は皿で7は底部に回転糸切り痕を残す。8は高台の付く坏であるが底径7.0cmとかなり小形のものである。9は小壺ないしは瓻と考えられる資料で、外面に黒色付着物が認められる。

土師質土器　第153図1・2・5・6は土師質土器である。1・2は坏で、底部が比較的小さく体部がやや内湾気味に立ち上がり口縁部が若干外反する、当遺跡出土の中世土師質土器坏の典型的なタイプである。5は脚のつく小皿で、第145図4の小型化した形状のものである。6は高台付坏である。高台が比較的低く、皿状の坏部をもつタイプである。

陶磁器　10～14は陶磁器である。10は備前の擂鉢で口縁部は直立気味に大きく拡張させ色調は灰色を呈する。17世紀前半頃に属すると考えられる。11は肥前系擂鉢である。12は肥前系磁器皿でで外面にハケ目状の文様が認められる。10～12は調査区南西部の南側側溝から出土した遺物で、SK08やSD18と近い時期の遺物と考えられる。13は白磁の椀Ⅳ類の口縁部、14は同じく椀Ⅳ類の底部である。

土製品　15は土師質土器皿を再加工した紡錘車状の資料で長径4.9cmを測る。

鉄滓　16は椀形滓で一部に酸化した土砂が付着し、炭を若干噛み込んでいる。分析の結果、塊鉱石起源の鍛錬鍛冶滓と判定されている（第8章第1節参照）。

石器　17・18は砥石である。17はやや粗い砂岩製砥石で平面正方形状を呈し、2面に使用痕が認められる。18は流紋岩または流紋岩質凝灰岩製のやや小形の砥石で一部を欠損している。4面を使用し、研ぎ減りによる凹面化が著しい。

第７章　Ⅳ区の調査

Ⅳ区はⅠ区の南に隣接し、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出したが、主たる時期は中世と古墳時代中期の二時期である。中世の遺構面では掘立柱建物３棟を検出したほか、多数の溝、ピット及び貝層を検出した。古墳時代中期遺構面においては竪穴住居３棟、掘立柱建物１棟の他、多数の溝、土坑を検出している。遺構密度や遺物量からみて、当調査区周辺が古墳時代中期と中世の２時期における集落の中核域に相当する地区と判断される。集落自体は一般的なものと言えるが、居住域とその周辺領域とが良好なセットとして確認できた事例は両時期とも県内では少なく、特に古墳時代中期前半の竪穴住居群がまとまって検出された事例は出雲平野では初めてであり、良好な土器一括資料とともに注目される。

第１節　基本層位

Ⅳ区はⅠ区南側に隣接する調査区で、丘陵裾から谷部沖積地に至るまでの緩斜面上に立地している。調査前までは宅地として利用されていて、その際の攪乱が著しく、南側では一部地山岩盤まで達していた。

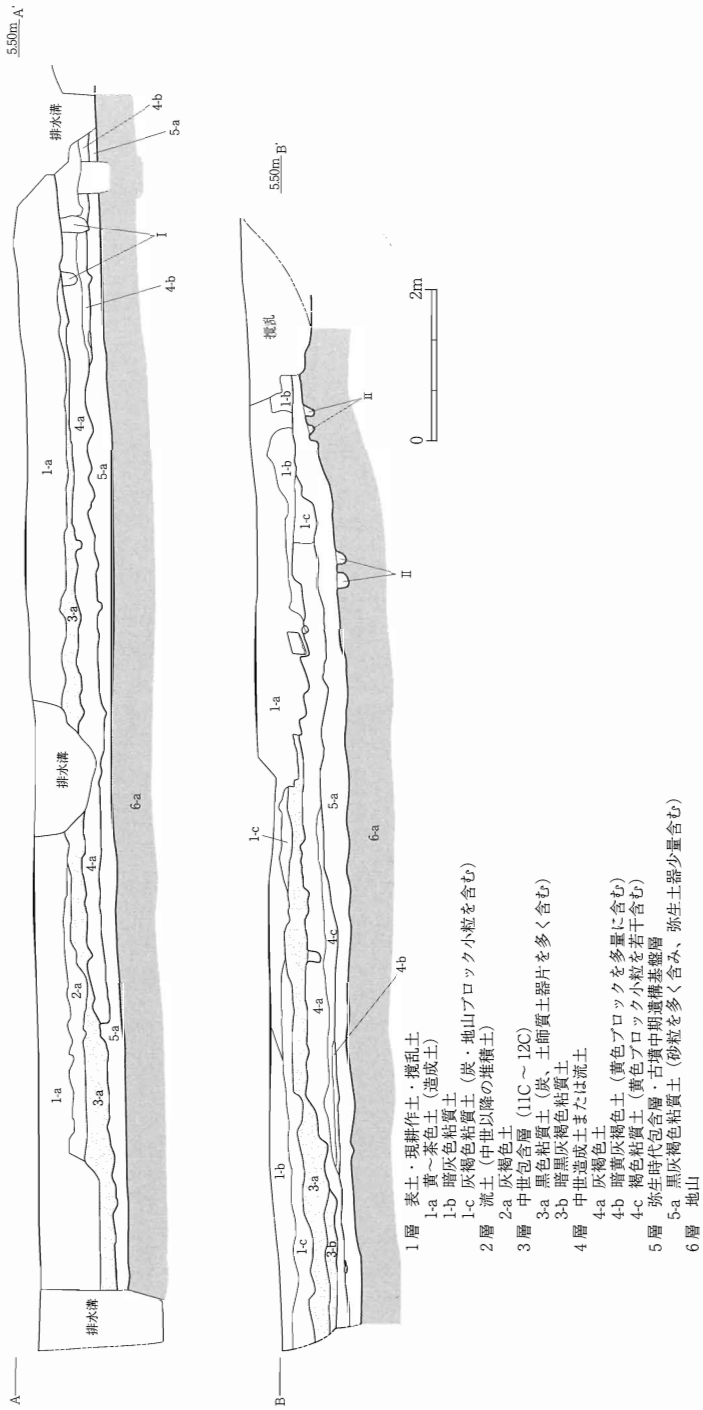
第155図にⅣ区の土層を掲載した。Ⅳ区は前述のとおりⅠ区南側に隣接する調査区で基本的な層

第154図　九景川遺跡Ⅳ区４層上面（中世遺構面）遺構配置図　S=1/250

位関係はⅠ区とほぼ同じであるが、基盤層で検出された主な遺構群の時期はⅠ区とは異なっている。Ⅰ区で検出した古代の遺構面が別に存在する可能性も想定されたが、調査時には面的に確認し得なかった。

1層は近現代の造成土・耕作である。2層は中世以降の堆積と考えられる灰褐色土であるが、Ⅰ区のような造成土状の締まった土ではなく自然堆積の流土である可能性が高い。

3層は黒褐色系の粘質土で中世の包含層である。粘性が高く炭を多く含む土質で、その特徴はⅠ区やⅢ区のそれと全く同じであり、出土遺物からも同時期に形成されたものと判断される。土師質土器や白磁が比較的まとまって出土しており、12世紀頃を中心に形成された層と考えられる。

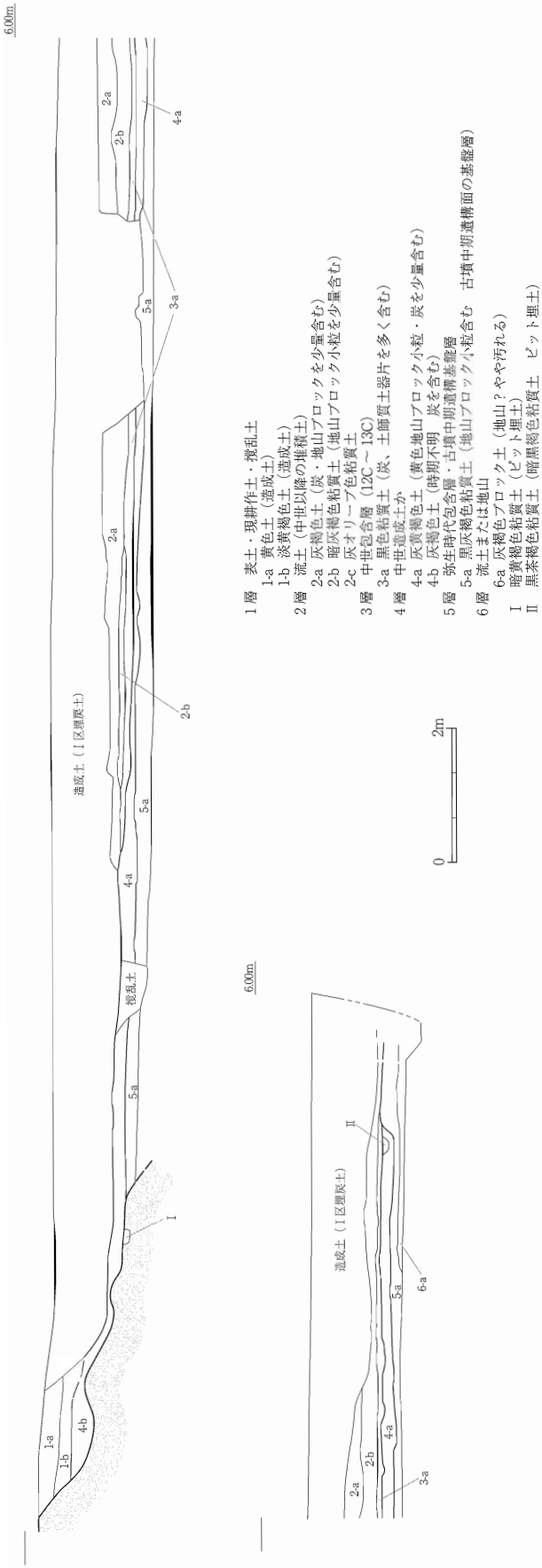


第155図　九景川遺跡Ⅳ区東壁土層図　S=1/100

4層は灰褐色または暗黄灰褐色系の土で黄色地山ブロックを含む土層である。中世前半期の遺構はこの上面から掘り込まれている。地山ブロックを多く含んでいる点から自然堆積による流土ではなく当該期の造成土である可能性がある。

5層は黒灰褐色系の粘質土で、砂粒を多く含んでいる。竪穴住居をはじめとする古墳時代中期の遺構はこの上面から掘り込まれている。丘陵に近い調査区南側においては黄褐色土ブロックを多く含んでいたため遺構覆土との識別は比較的容易であったが、調査区北半部では黄褐色土ブロックを殆ど含まず遺構覆土に近い土色であったため、遺構検出にやや時間を要した。

なお、5層中からは弥生時代前～中期の土器とともに古墳時代中期の遺物も若干含まれているが混



第 156 図　九景川遺跡Ⅳ区北壁土層図　S=1/100

入または取り上げ時のミスによるものと考えられる。

5 層下の 6 層は灰褐色ブロック土の基盤層で遺物を含まない。6 層上面については、遺物の出土状況から調査区北半部の一部についてのみ面的調査を実施し、若干のピットを確認した。

第 2 節　4 層上面検出遺構の調査

(1) 遺構の分布と概要（第 154 図）

Ⅳ区の調査面積は約 770㎡である。南側には近現代の宅地造成時のものと思われる大規模な攪乱坑が数カ所存在しており、一部の遺構が破壊されてはいたものの、安定した遺物包含層に保護され遺構の遺存状況は比較的良好であった。

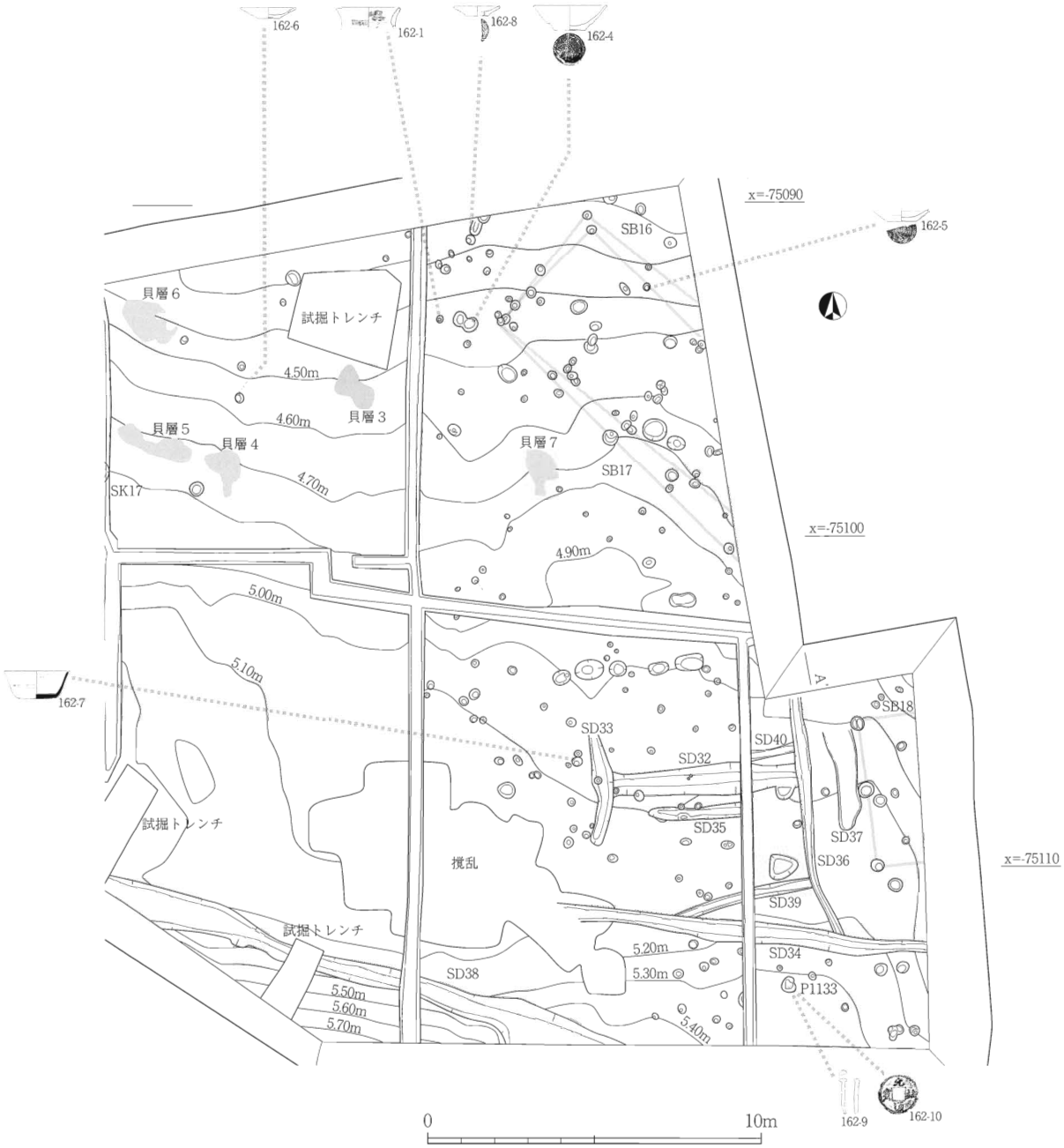
調査区内は丘陵縁辺部に当たる調査区南側から北側に向けて緩やかに傾斜し、遺構面の高さは海抜 4.3 m～5.4 m を測る。遺構の多くは調査区東側に集中しており、特にピット群は北東部に集中している。一方の西側においては遺構密度は薄いものの、北西部には小規模な貝層が点在しているほか、土師質土器及び砥石が一括出土した SK17 が存在する。南西部は後世の攪乱・削平の影響もあり遺構は全く検出されていない。

以上の点から当該期の主たる居住域はⅣ区東側であったと推測され、その西側については貝層の存在からみて、廃棄場としての土地利用が行われていたと想定される。これはⅠ区における当該期の遺構分布状況から導かれた所見とも矛盾しない。

(2) 掘立柱建物

SB16（第 158 図）

規模と形態　調査区北東部で検出した建物跡で、後述する SB17 とほぼ同じ位置で重複しており、建て替えられたものである可能性が高い。建物の南東側は調査区外へと続いている。



第157図　九景川遺跡Ⅳ区4層上面ピット・溝遺物出土状況　遺構：S=1/200、遺物：S=1/12他

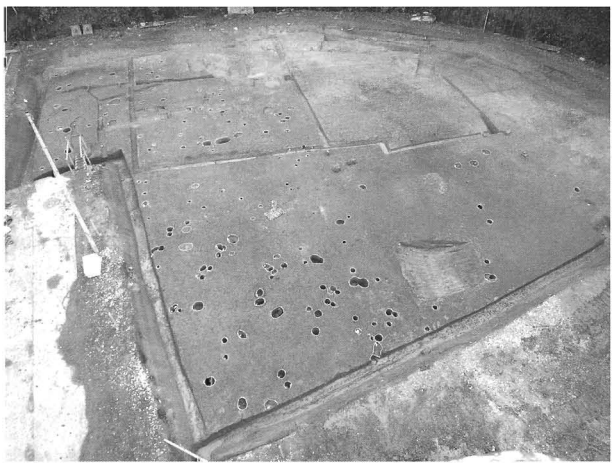


写真69　Ⅳ区中世遺構面（北から）

建物主軸はほぼ南東－北西方向、N－48°－Wであり、Ⅰ区で検出したSB01及びSA01とほぼ同一主軸をなす。建物の構造は梁間2間、桁行は全容は不明だが現状では4間分が確認できる。建物規模は梁間4.0m、桁行7.4mを測る。柱間距離は梁間で1.8～2.2m、桁行で2.4～2.6m前後とやや不揃いである。

柱穴は径20～30cmと小規模なものであるが、深さは35～40cm前後と比較的深くしっかりしている。覆土は3層と同様な黒褐色系の粘質

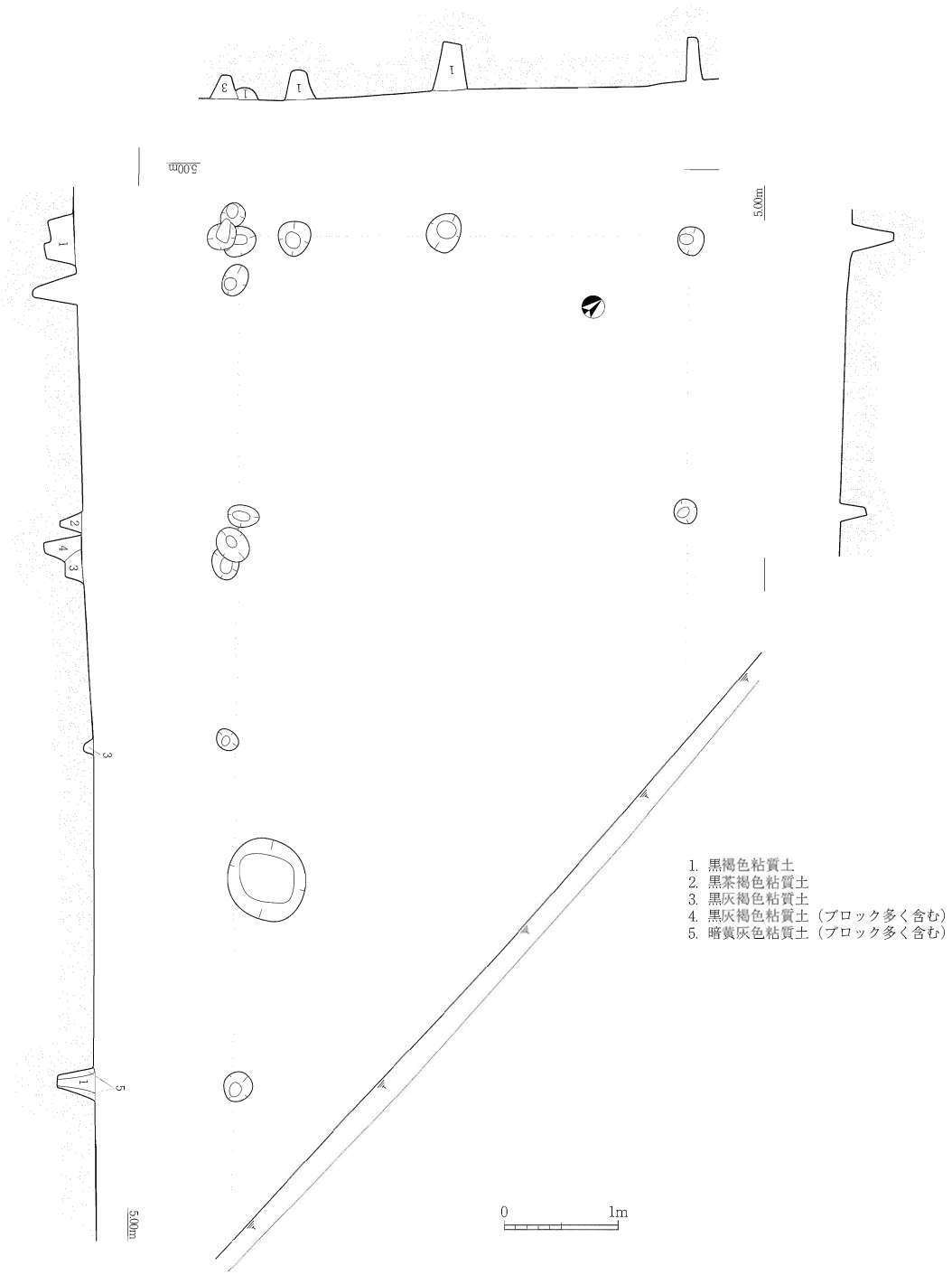
土が堆積していた。

SB16 出土遺物　小片のため図化していないが、各柱穴内から土師器、土師質土器が出土している。

遺構の性格と年代　当遺構に直接伴う若干の遺物と、4 層上面で検出されたという層位的所見から 12 ～ 13 世紀の遺構と考えられる。

SB17（第 159 図）

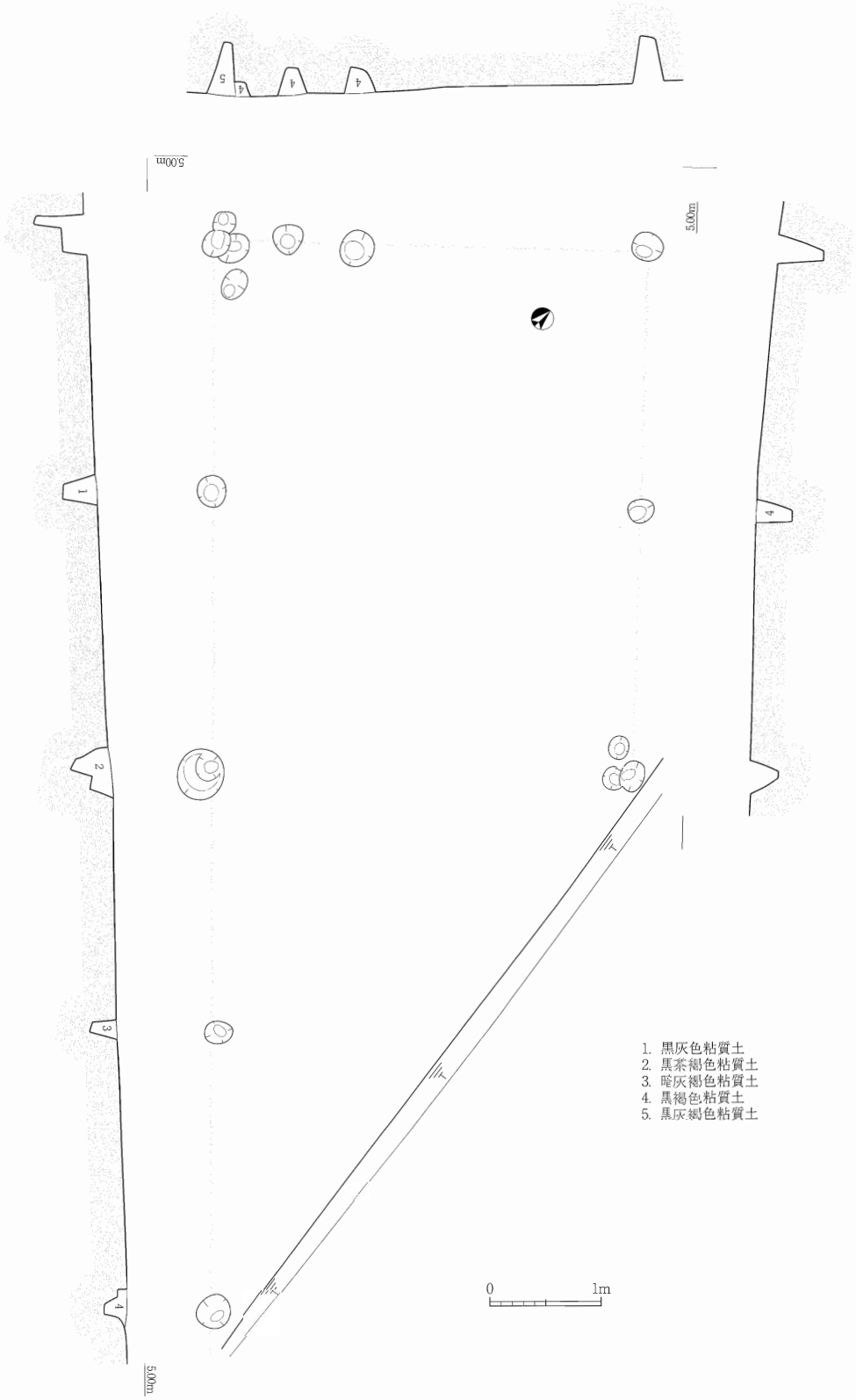
規模と形態　調査区北東部で検出した建物跡で、先述したように SB16 とほぼ重複しており、北西隅柱穴の切り合い関係から当建物が後で建てられたものと考えられる。SB16 と同様に建物南東側は調査区外へ延びているため全容は不明であるが、梁間 2 間、桁行 4 間以上の、SB16 とほぼ同様



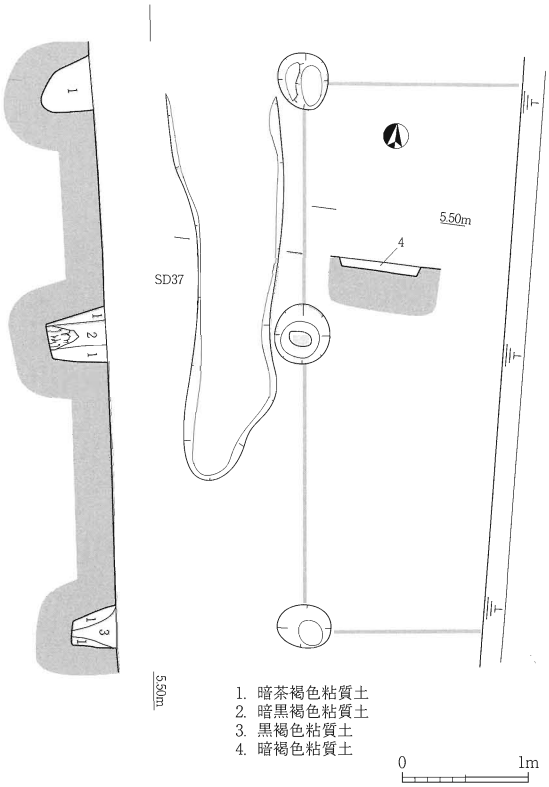
第 158 図　九景川遺跡Ⅳ区 SB16 実測図　S=1/60

な規模・構造の建物である。建物主軸はN－43°－Wであり、SB16に比べ若干時計回りに振れている。

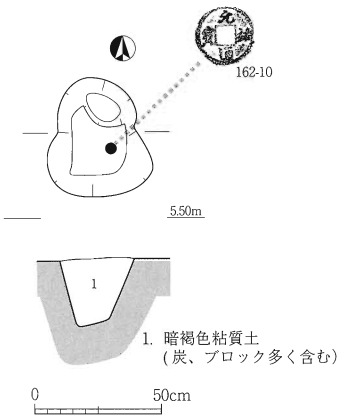
建物規模は梁間3.9 m、桁行4間分で9.7 m分を測る。柱間距離は桁行が2.3～2.5 mとほぼ8間で揃っているのに対し、梁間は1.2 mと2.6 mと著しく不均等な間隔をなしている。柱穴は径25～30cm前後と比較的小規模であるが、深さは深いものでは40cm近くあり比較的しっかりしている点



第159図　九景川遺跡Ⅳ区SB17実測図　S=1/60



第160図　九景川遺跡Ⅳ区SB18実測図　S=1/60



第161図　九景川遺跡Ⅳ区P1133実測図　S=1/30

写真71　Ⅳ区P1133銭貨出土状況

写真70　SB16・17（南東から）

もSB16と同様である。

ピットの覆土は3層系の黒褐色～黒灰色系の粘質土が堆積しており、北西側ではSB16柱穴との切り合い関係が認められた。

SB17遺物出土状況（第157図）　建物各柱穴内から土師質土器及び土師器片が若干出土している。

SB17出土遺物（第162図）　第162図5はSB17柱穴内から出土した土師質土器坏の底部である。底径5.4cmを測り、底部に回転糸切痕を残す。

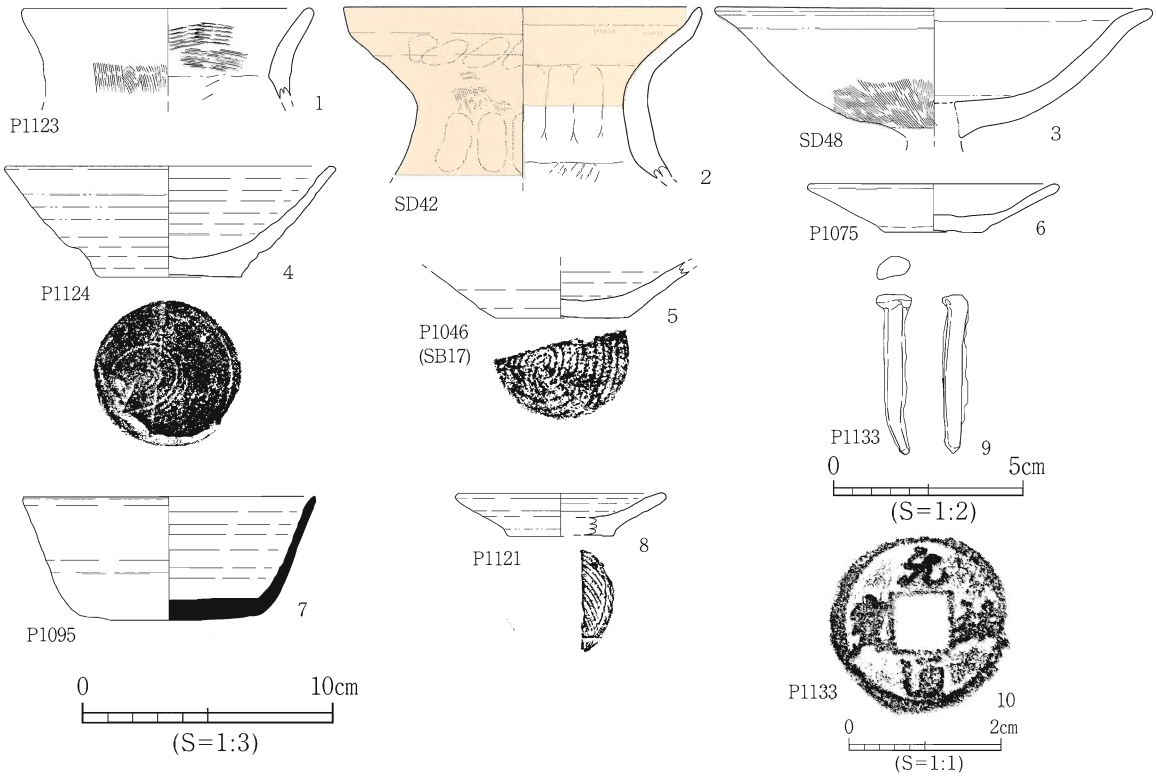
遺構の性格と年代　出土遺物や層位的所見から12～13世紀の遺構と考えられる。SB16との類似性から、同建物と同様な性格の建物と想定できるが、その性格を具体的に特定することは難しい。

SB18（第160図）

規模と形態　調査区南東部で検出した建物跡である。検出したのは建物西側の梁間部分のみで大半は調査区外に存在している。

建物の構造は梁間2間で長さ4.3mを測る。柱穴は円形で径40～45cmと、SB16・17と比べるとかなり大型のものである。柱穴内の覆土は3層と共通する黒褐色粘質土である。梁間中央の柱穴には柱根が残存しており、長径18cmを測る。

SB18出土遺物　小片であるが、柱穴内より土師器・土師質土器が若干出土している。



第 162 図　九景川遺跡Ⅳ区ピット・溝出土遺物実測図　1 ～ 8：S=1/3、9：S=1/2、10：S=1/1

表 7　九景川遺跡Ⅳ区 P1133 出土銭貨計測表

図版番号	名称	初鋳年	銭径（A）/ 銭径（B）	内径（C）/ 内径（D）	銭厚	量目
第 142 図 1	元祐通寶（北宋）	1086 年（暦）	23.60㎜　23.60㎜	6.80㎜　6.70㎜	1.20 ～ 1.25㎜	2.02 g

遺構の性格と年代　SB11 や SB16・17 とは柱穴の様相が異なっている点から他の年代に属する可能性も考慮されるものの、梁間中央の柱穴から比較的まとまって土師質土器が出土している点から考えて、中世前半期の遺構である可能性が高い。

(3) 祭祀ピット

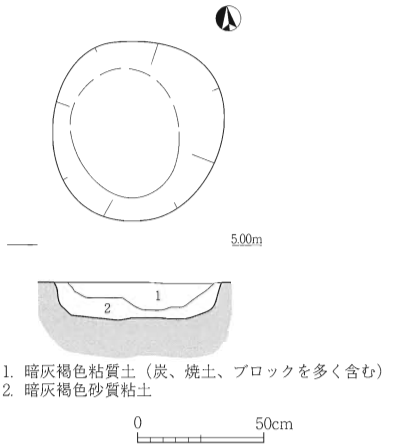
P1133（第 161 図）

規模と形態　Ⅳ区南東部で検出したピットである。平面形は不整形な瓢箪状で二段掘状を呈しているが断面観察から単独の柱穴と判断される。規模は長径 47cm、短径 40cm、深さ 33cmを測る。覆土は炭・地山ブロックを含む暗褐色粘質土が堆積しており、柱痕などは確認できていない。

P1133 遺物出土状況（第 161 図・写真 71）　ピット床面から銭貨が 1 点出土した。床面に貼り付いた出土状況からみて、流れ込みではなく意図的な配置によるものと考えられる。銭貨以外の遺物は覆土中から釘が 1 点出土している。

P1133 出土遺物（第 162 図）　第 162 図 9 は釘である。完形品で長さ 4.2cmを測り頭部に上方からの単打による潰れが認められる。10 は元祐通寶（北宋）で計測値を表 7 に示した。遺存状況は比較的良好である。

遺構の性格と年代と年代　銭貨の出土状況から、建物を建てる際の地鎮的祭祀を執り行ったものと



第 163 図　九景川遺跡Ⅳ区 SK17 実測図　S=1/30

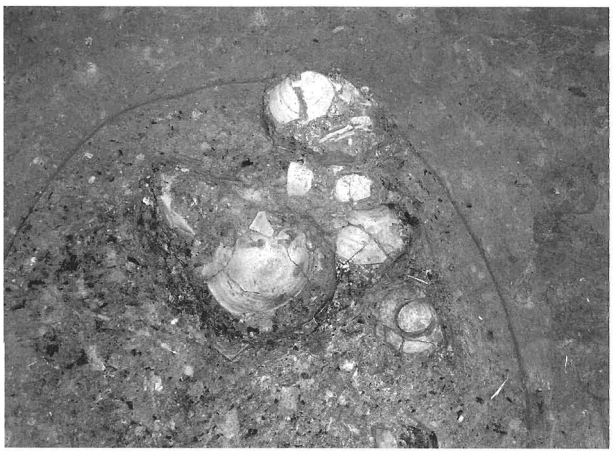
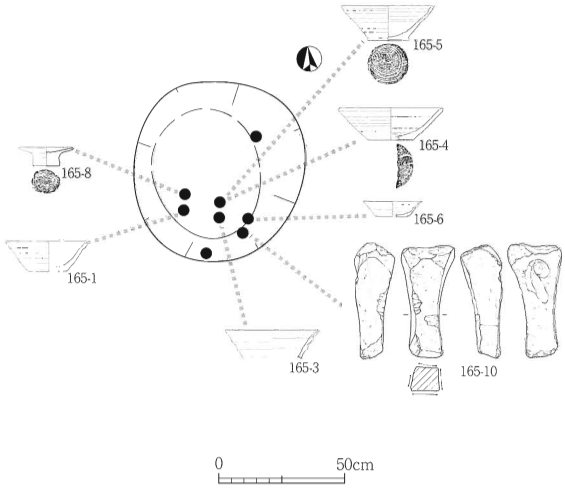


写真 72　SK17 遺物出土状況



第 164 図　九景川遺跡Ⅳ区 SK17 遺物出土状況　遺構：S=1/30、遺物：S=1/12/・1/8

考えられるが、この柱穴を含む建物跡は当調査区内では復元し得なかった。ピット内から地鎮用と思われる銭貨が出土する事例としては、県内では出雲市渡橋沖遺跡 SB01、松江市黒田館遺跡、同福富Ⅰ遺跡、浜田市古市遺跡、津和野町高田遺跡などで同様な事例がある（西尾 2002）。

(4) 土坑

SK17（第 163 図）

規模と形態　調査区西側で検出した土坑で当遺構は 4 層上面遺構群の西端に位置する。サブトレンチを兼ねた排水溝掘削中に検出したため床面の一部を欠いているが、現状では径 65cmのほぼ円形状を呈し、断面形は皿形で深さ 14cmを測る。覆土は上層に炭・焼土ブロックを多量に含んだ暗灰褐色粘質土が（写真 72）、下層に暗灰褐色砂質粘土が堆積していた。

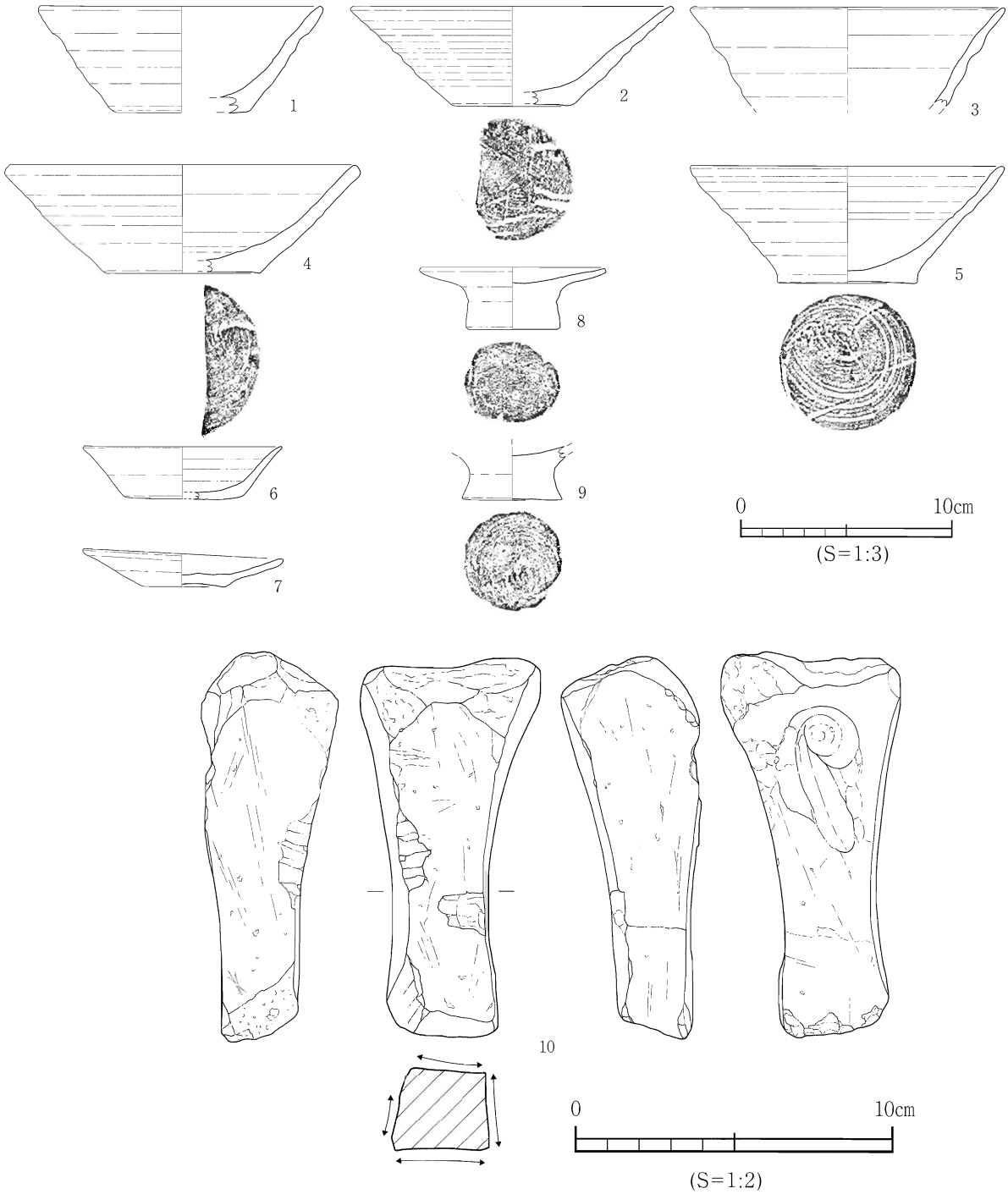
遺物の出土状況（第 164 図）　遺物は上層から出土し、平面的には南半部からまとまって出土している。

SK17 出土遺物（第 165 図）　SK17 から出土した遺物は土師質土器と砥石である。第 165 図 1 ～ 5 は坏である。2、4、5 はほぼ全容が判明する資料で、口径 14.5 ～ 16cm前後を測り、底部が比較的小さく体部が直線的ないしはやや内湾気味に立ち上がる。6・7 は小皿である。6 はやや深めの皿で小形の坏といった方が適切かもしれない。7 は浅い当該期によく見られるタイプの小皿である。

8・9 は高台付坏である。8 は高台が筒状を呈し、同タイプによく見られるような裾広がりのタイ

プとは異なる。坏部は非常に浅く小皿状を呈する。10は砥石であり、出土時は2片に割れた状態で出土した。凝灰岩製で平面形鼓形、断面方形をした典型的な砥石で、4面を使用面としている。研ぎ減りによる変形・凹面化が著しいが、自然面もかなり残っている。各面とも鉄器の刃先痕を顕著に残す。

遺構の性格と年代　遺構の年代は土師質土器から12～13世紀と考えられる。遺構の性格については、遺物の出土状況や中世遺構分布の縁辺に位置するという立地上の特徴からみて廃棄土坑的性格の可能性が高い。しかし、中世遺構面においては、当遺構以外ではこうした炭や焼土が詰まった柱穴・土坑はなく、何らかの祭祀的な意味合いをもった土坑である可能性も考慮される。



第165図　九景川遺跡Ⅳ区SK17出土遺物実測図　S=1/3、1/2

(5) 溝

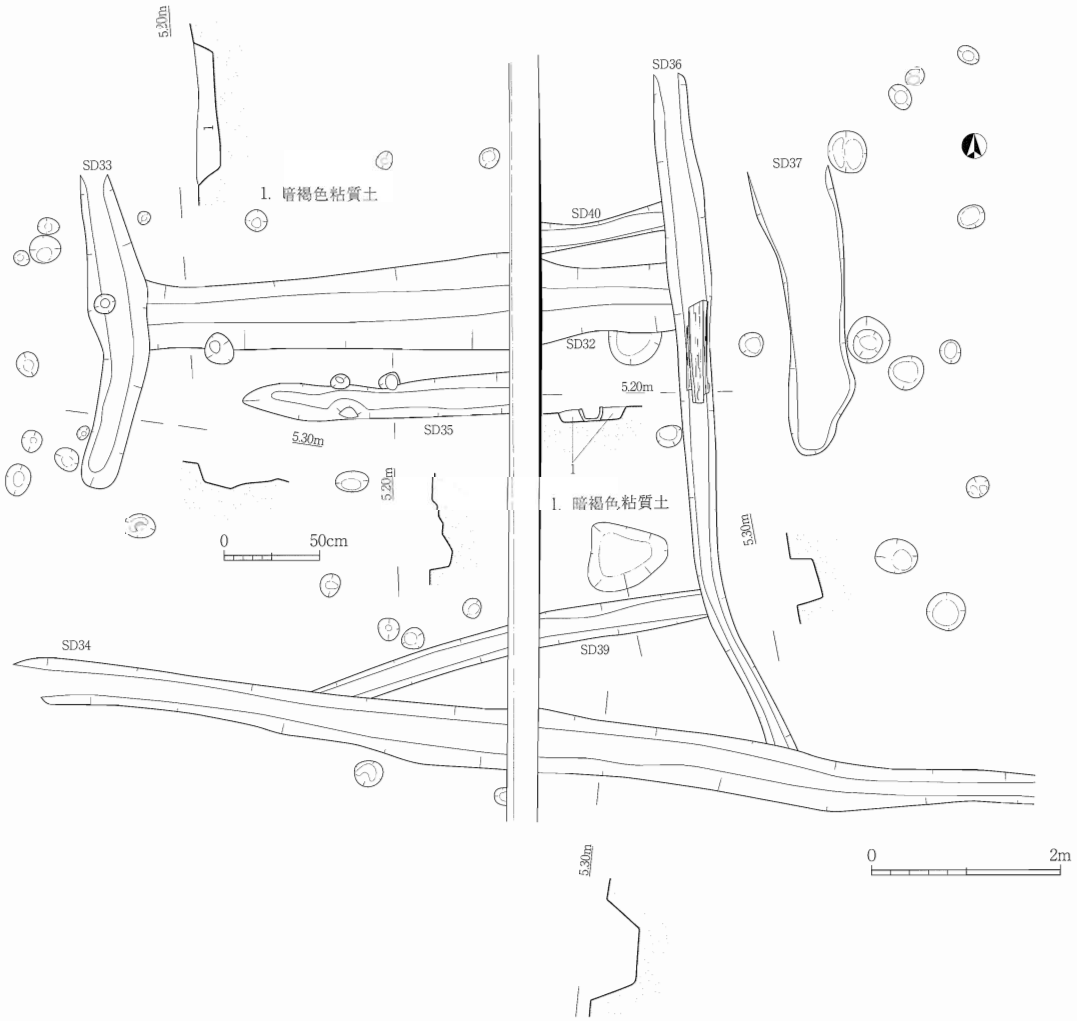
SD32 ～ 37・39・40（第 166 図）

規模と形態　調査区南西部で検出された小溝群である。概ね南北方向に走る溝と東西方向に走る溝の両者が存在する。

SD32 は東西に走る長さ 5.5 ｍのやや幅広の溝で、SD33・SD36 と切り合い、両者に先行する。SD33 は SD32 の西端を切って営まれた南北に走る小規模な溝で長さ 3.3 ｍを測る。SD34 は溝群の最も南に位置する東西方向に走る溝で長さ 10.9 ｍを測る。切り合い関係から最も後出する溝である。SD35 は SD32 の南にこれに平行して走る溝で長さ 2.8 ｍを測る。

SD36 は溝群東側を南北に走る溝で、切り合い関係から SD34 に先行し SD32・39・40 に後出する。長さ 7.1 ｍを測り、南側は東へ振れている。溝内には樋状の木材が一部残存していた。SD37 は溝群東端に位置し南北に走る浅い幅広の溝である。長さ 3.0 ｍ、幅 90cm前後を測る。SD39 は溝群南側を東西に走る溝で両端を SD36・34 に切られている。長さ 4.3 ｍ、幅 30cm前後を測る。

SD32 ～ 37・39・40 出土遺物　SD32 から須恵器、土師器、土師質土器、SD34 から須恵器、土師器、土師質土器、SD35 から土師器、SD36・37・39 から近世陶磁器、SD40 から土師器がいずれも細片であるが出土している。



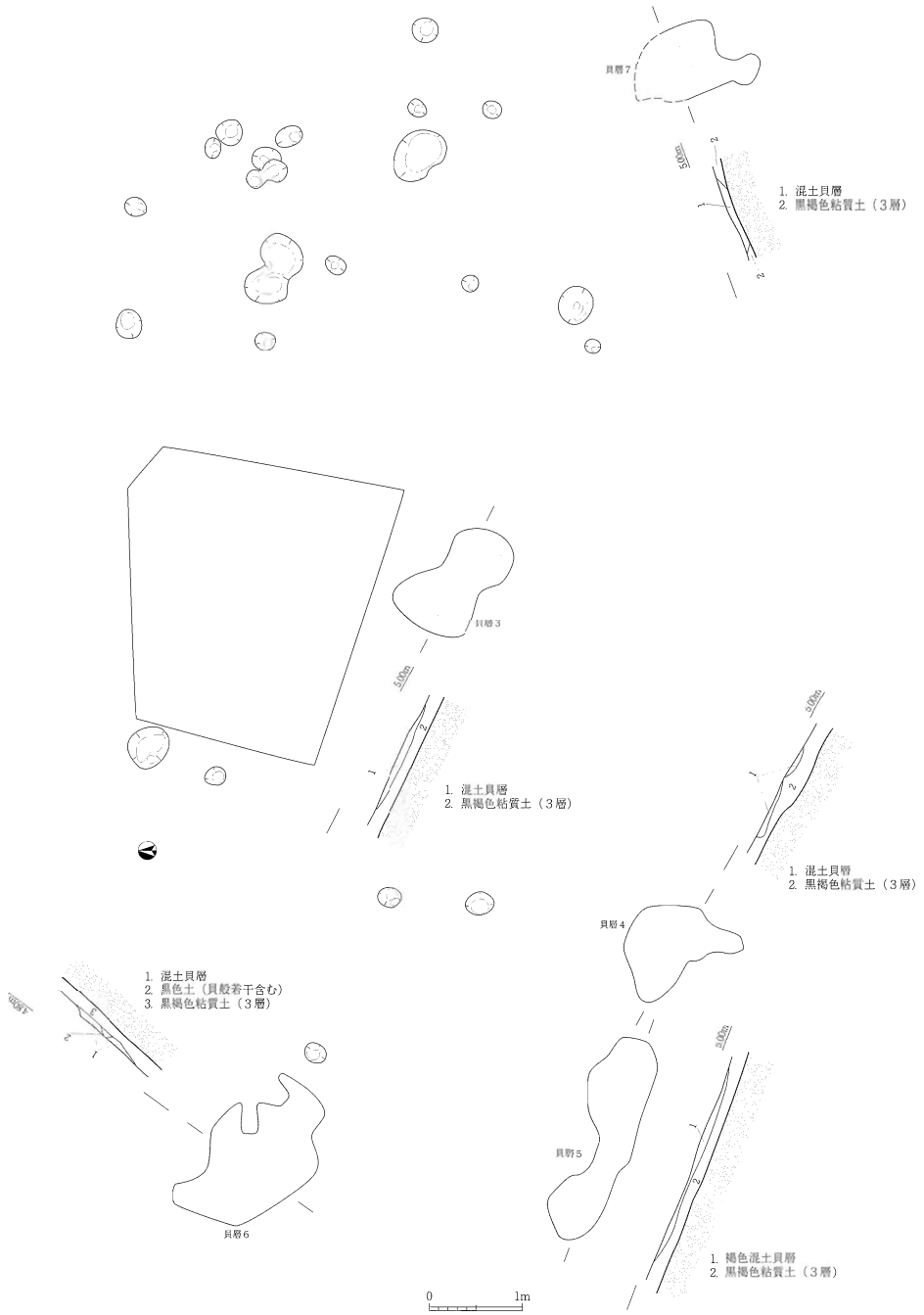
第 166 図　九景川遺跡Ⅳ区 SD32 ～ 37・39・40 実測図　S=1/80、S=1/40

遺構の性格と年代　出土遺物や切り合いからSD32・34・36・37・39は近世に位置づけられる。SD35・40は出土遺物からこれより遡る可能性はあるが他の溝との配置から同時期である可能性が高い。SD36では樋が残っていたことから近世屋敷地の排水溝・雨落溝的なものと想定される。

SD38（第157図）

規模と形態　調査区南端の丘陵裾を東西に走る溝で東西両端とも調査区外へと延びている。調査区内での規模は、長さ16.4 m、幅は広い箇所で1.2 mを測る。図示していないが、溝内からは18世紀以降の陶磁器が多数出土している。

遺構の性格と年代　丘陵裾を切るように走る溝の配置状況からみて、近世屋敷地において南側丘陵部からの雨水を遮断するための排水溝的施設であったと考えられる。



第167図　九景川遺跡Ⅳ区貝層3～7実測図　S=1/80

(6) 貝層

貝層 3 ～ 7（第 167 図）

規模と形態　調査区北西部で検出した貝だまりである。貝層は若干規模に違いはあるが、径 1.4 m ～ 2.5 m前後、厚さ 5cm弱の小規模で不整形な貝だまりとして検出された。その規模からみて、それぞれが個別の一括廃棄単位に相当している可能性が高い。

貝類はⅢ区 SX02 と同じく、その 99％がヤマトシジミによって構成されている。また、これらはすべて 4 層直上ではなく 3 層がある程度堆積した段階に投棄されており、SB16・17 などの掘立柱建物群より若干後出するものである可能性も考慮される。

遺構の性格と年代　先述のように 3 層中に形成されていることから 3 層出土遺物の示す年代、12 ～ 13 世紀に形成されたものと考えられる。

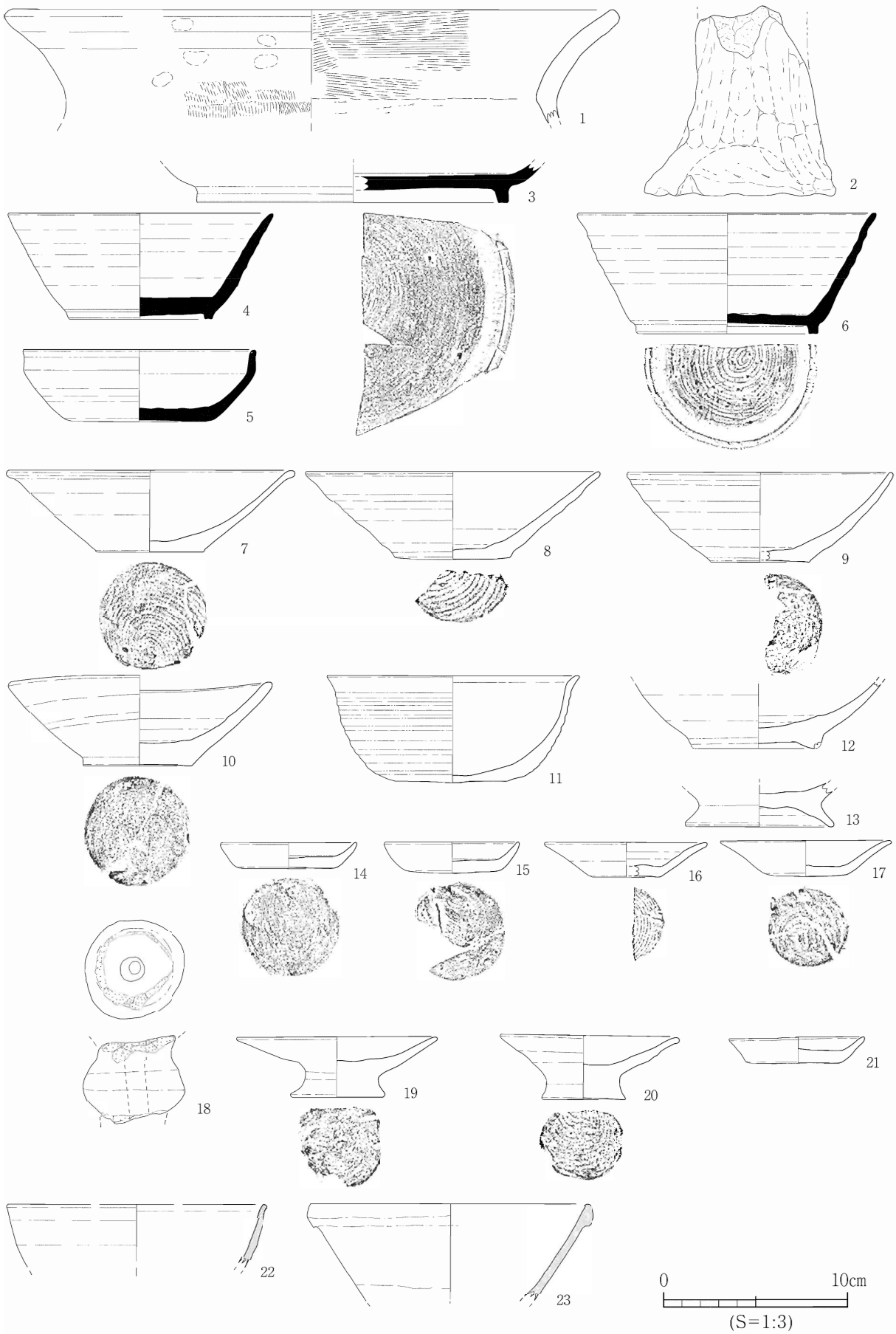
(7) 4 層上面遺構出土遺物 (第 162 図）

第 157 図に 4 層上面遺構から出土した遺物の分布状況を示した。先に述べた P1133 を除けばピット内出土遺物は調査区北半部に集中している。

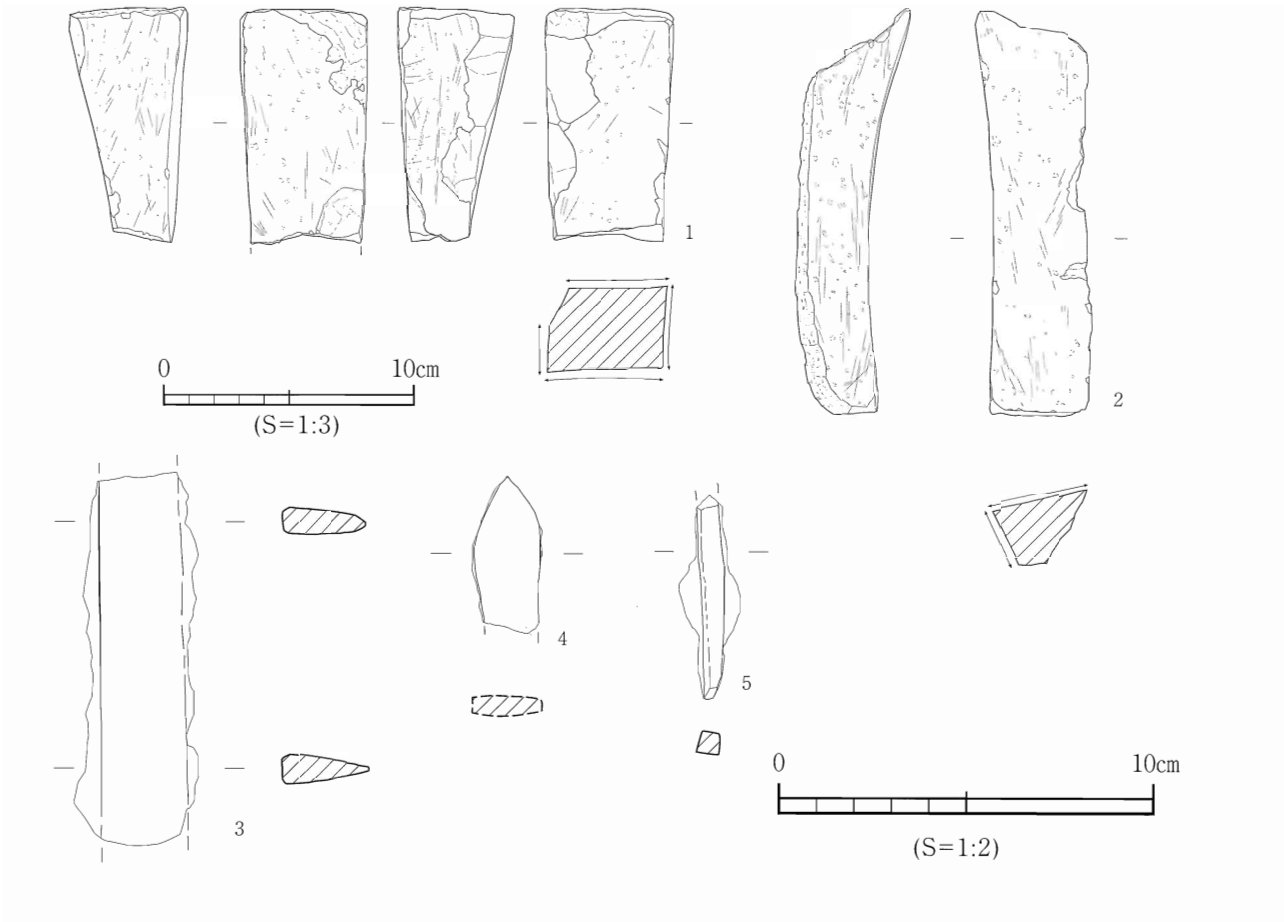
第 162 図 1 は調査区北西部のピット内から出土した土師器壺である。頸部は締まりなく上方へ立ち上がる。古墳時代中期前半のもので下層からの混入であろう。4 は SB16・17 付近のピットから出土した土師質土器坏である。6・8 は土師質土器小皿である。6 は調査区西のやや離れた箇所から出土している。

7 は須恵器坏で調査区南の SD33 付近のピットから出土した。底部が大きく体部が直線的に立ち

第 168 図　九景川遺跡Ⅳ区 2 ～ 3 層遺物出土状況　遺構：S=1/80



第 169 図　九景川遺跡Ⅳ区 2 ～ 3 層出土遺物実測図 (1)　S=1/3



第 170 図　九景川遺跡Ⅳ区 2 ～ 3 層出土遺物実測図 (2)　1・2：S=1/3、3 ～ 5：S=1/2

上がるタイプで、青木Ⅳ期以降に属する資料と思われる。当遺跡出土の須恵器では最も後出的な資料の一つであるが、当該期の遺構の様相は不明といわざるを得ない。これも下層からの混入品であると考えられる。

(7) Ⅳ区 2 ～ 3 層出土遺物 (第 169・170 図)

第 168 図にはⅣ区 2・3 層から出土した主たる遺物の分布状況を示した。3 層包含層の主たる遺物は 12 ～ 13 世紀の土師質土器であり、これらが調査区北半部に集中して出土する様相はⅣ層上面遺構群の遺物出土状況とほぼ同様であるが、分布の中心はやや西側へずれている。一方、古代に属する遺物が調査区北東部付近に点在している様相は注目される。これらは明らかに下層からの混入品ではあるが、その周辺に古代の遺構が存在した可能性を示唆するものと想定される。

土師器（第 169 図）　第 169 図 1 は土師器甕である。形態や調整の特徴などから 7 ～ 8 世紀のものと考えられる。

須恵器（第 169 図）　3 ～ 5 は須恵器坏・盤である。5 はやや古い様相を呈するが、3、6 は高台の位置や長く直線的に延びる体部から青木Ⅳ～Ⅴ期の資料と思われる。前述のとおりⅢ区の古代集落より後出的な遺物群が当調査区に散見される点は注目される。

土師質土器（第 169 図）　7 ～ 12 は土師質土器坏である。7 ～ 10 は当遺跡出土坏の典型的なタイプであるが、口縁端部の処理や体部の立ち上がりに若干の個体差が認められる。一方 11 は深い椀形を呈し底部にユビオサエを行う坏で、当遺跡では稀なタイプに属する。14 ～ 17、21 は小皿である。2 層出土の 14、15、21 は形態や調査区南西部という出土地点からみて、近世に属するもので

ある可能性が高い。18は異形の子壺でⅢ区1～2層から出土した141－17と同類のものと考えられるが、中実に円形孔を穿孔する点で異なる。19・20は高台付坏で、坏部が比較的浅く皿状を呈し脚端があまり張り出さない。

陶磁器（第169図） 22・23は白磁である。22はⅤ～Ⅶ類の椀、23はⅣ類椀である。

石器（第170図） 第170図1・2は砥石でいずれも凝灰岩製である。1は直方体状のもので4面の使用面、2はやや細長く反るタイプで2面に使用面が認められる。

鉄器（第170図） 3点出土している。3は刀子または刀の刀身部片、5は釘の先端部である。

第3節　5層上面検出遺構の調査

(1) 遺構の分布と概要（第171図）

第171図は5層上面検出遺構配置図である。前述のとおり5層は黒灰褐色系の粘質土で、弥生時代の遺物を若干含んでいた。調査区内は南西から北東へ向けて緩やかに傾斜する緩斜面上に竪穴住居3、掘立柱建物1、溝、土坑、ピット等が立地する。竪穴住居や掘立柱建物、溝は同時期併存でないことは明らかであるが、建物主軸が北東－南西でほぼ統一されている点が注意される。

調査区北東部は当該期の遺構が存在しなかったため、調査日程の都合上、その他の部分と平行してその下の6層上面まで掘り下げている。この部分に等高線が存在しないのは上記の理由による。

※赤は4層中で検出した遺構を示す

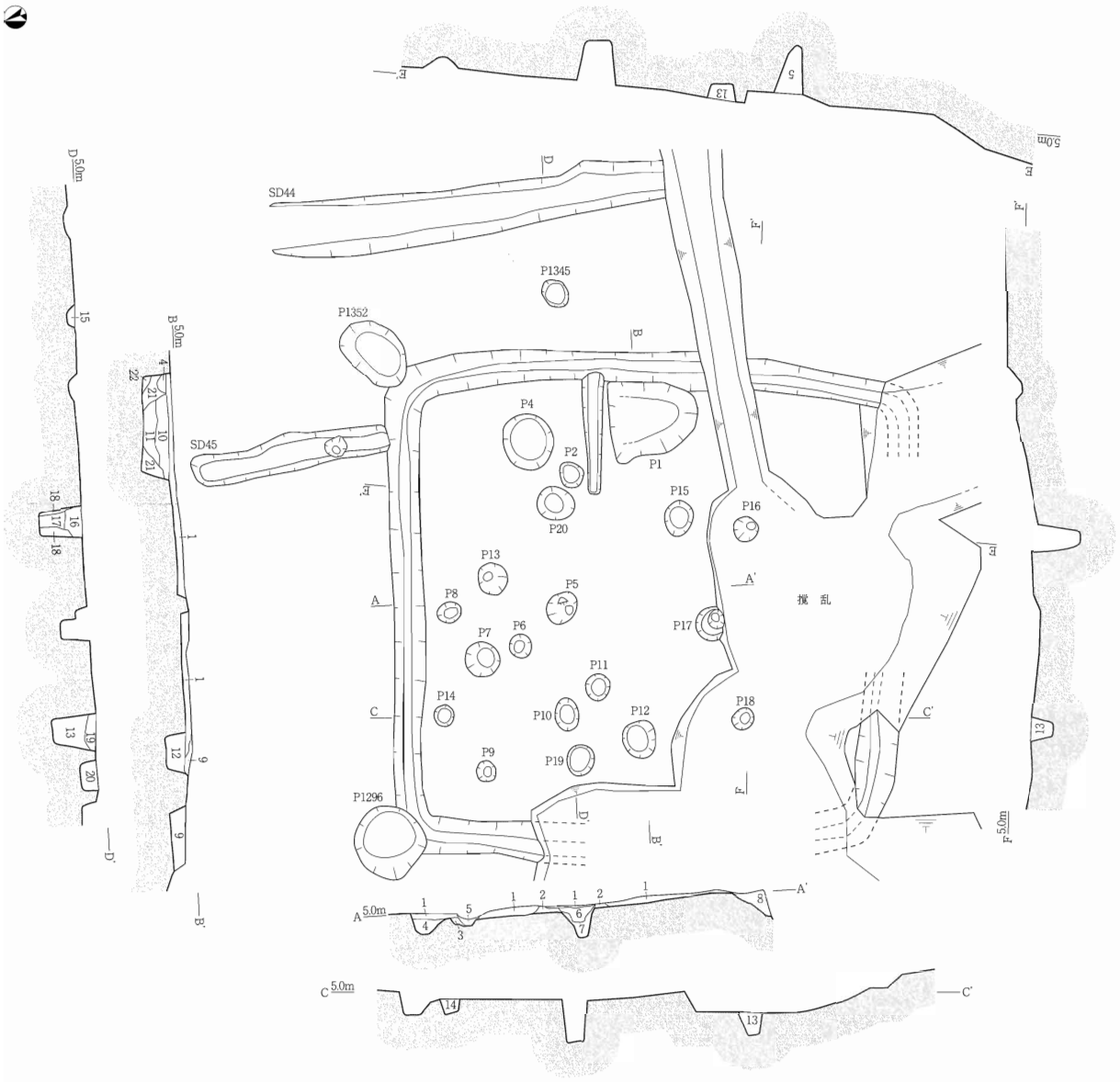
第171図　九景川遺跡Ⅳ区5層上面遺構配置図　S=1/250

また、調査区中央のSI03付近は若干谷状に入り込んでおり、SI03はちょうどその谷底に立地するという特異な立地状況を呈している。また、このSI03の位置する谷底を覆う黒褐色土の上面からも多数のピットを検出しており、それらも第171図に掲載している。これらのピット群からは明確な建物等を復元できないが、層位的関係から古墳時代後期～古代に属するものと考えられる。

(2) 竪穴住居

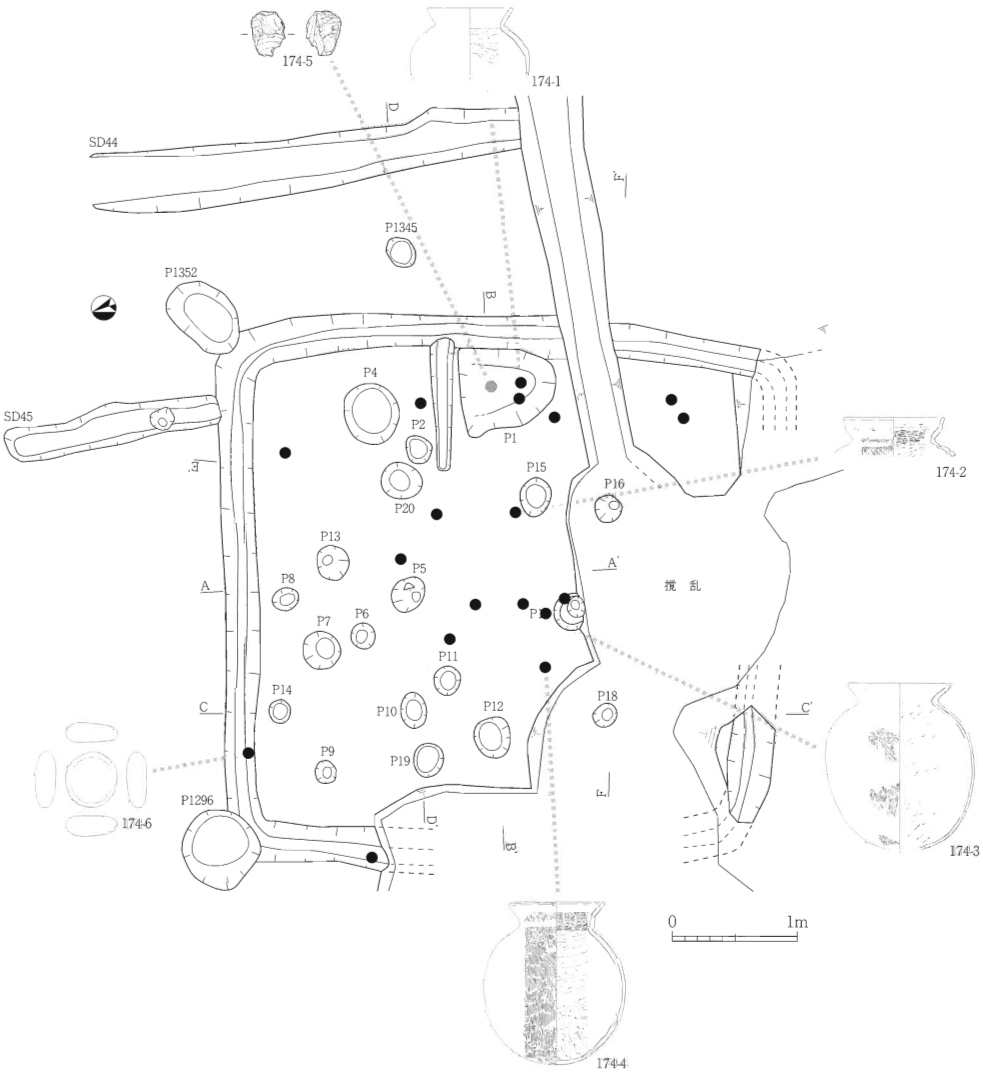
SI01（第172図）

規模と形態　調査区南東部で検出した平面プラン方形の住居跡である。後世の削平により壁がほと



1　茶褐色粘質土(炭･黄ブロック含む)
2　暗黄褐色ブロック土(ブロック多い)
3　黄灰褐色粘質土
4　暗茶褐色粘質土(黄色ブロック多く含む)
5　灰褐色粘質土(上からの掘り込み)
6　黒茶褐色粘質土
7　暗黄茶褐色粘質土(黄ブロック多い)
8　黒灰褐色粘質土
9　黄灰褐色ブロック土(粘性高･しまりない･撹乱土)
10　黄茶褐色砂質粘土(細砂)
11　黒茶褐色粘質土(炭･細砂を含む)
12　黒褐色粘質土
13　黒褐色粘質土
14　灰褐色粘質土
15　暗茶褐色粘質土
16　暗灰褐色粘質土(ブロック含む)
17　暗黒褐色粘質土(ブロック含む)
18　黒褐色粘質土(ブロック少量含む)
20　暗茶褐色粘質土(細砂含む)
19　灰褐色粘質土(黄色ブロック多い)
21　黒茶褐色粘質土
22　灰オリーブ色砂質土

第172図　九景川遺跡Ⅳ区SI01実測図　S=1/60



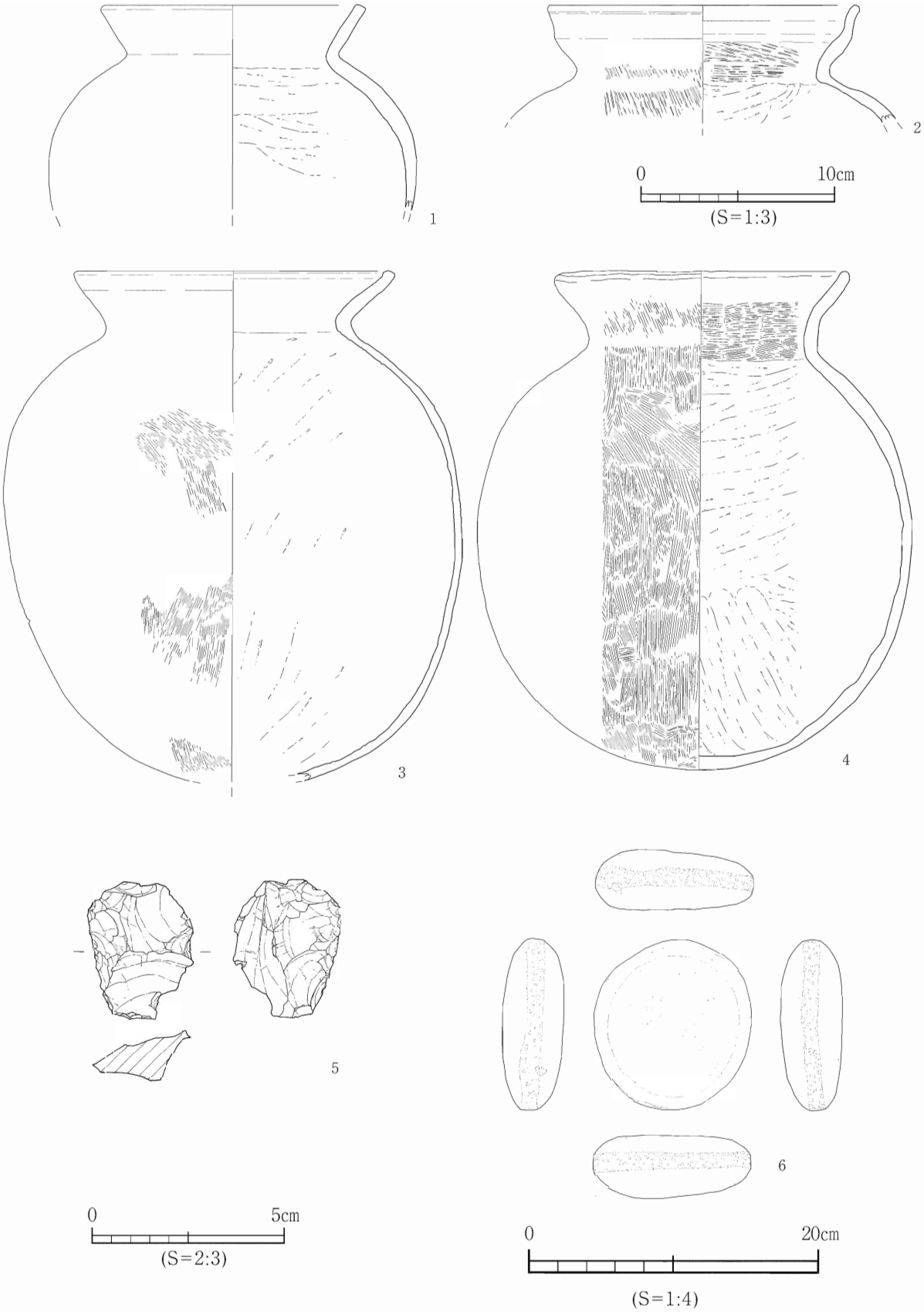
第173図　九景川遺跡Ⅳ区SI01遺物出土状況　遺構：S=1/60、遺物：S=1/12、1/6

写真73　SI01検出時

んど残っておらず、壁帯溝及びピットが残っているにすぎない。また床面の約1/3は攪乱により失われてはいたが、北東部には壁帯溝がわずかに残っており、おおよその規模が復元できる。平面形はほぼ正方形プランで一辺4.3mを測る。

床面からは多数の柱穴が検出されたが、これらの多くは後世の上面からの掘り込みによるもので、主柱穴はP16、P18、P20、P10の4本柱構造であったと推察される。

壁際土坑は東側壁に据え付けられており、斜面上方に位置する通常の場合と異なる。平面不整楕円形を呈し規模は78×72cm、深さ25cm前後を測る。土坑北側には当該期によく見られる間仕切り溝が土坑と接するように存在するが、南側は攪乱のため不明である。壁帯溝は確認できる範囲では全周をめぐっている。住居東側約1.2mには

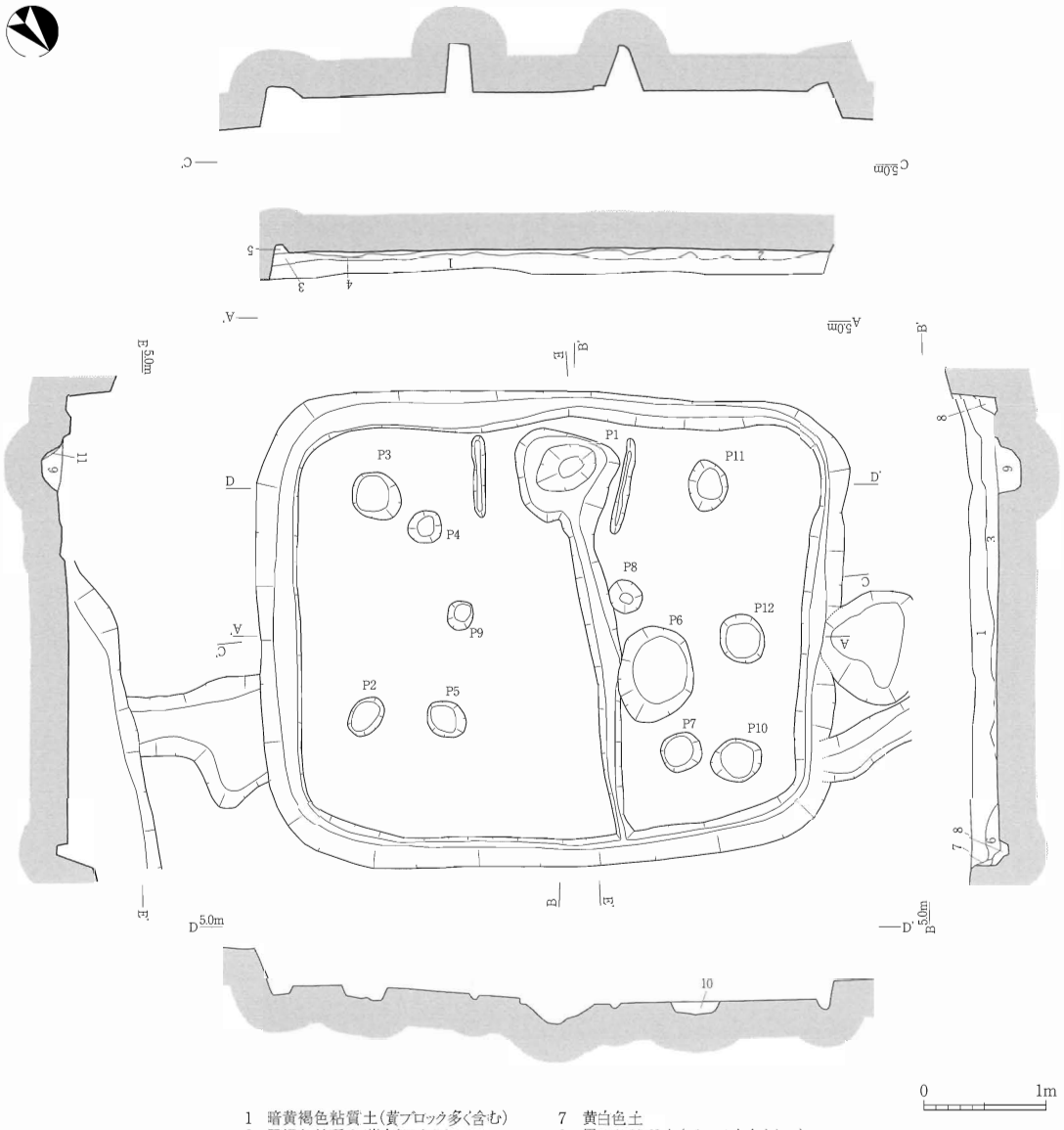


第 174 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI01 出土遺物実測図　1 ～ 4：S=1/3、5：S=2/3、6：S=1/4

住居址と平行するように南北方向の溝（SD44）が走っており、住居址の外周溝である可能性がある。

SI01 遺物出土状況（第 173 図） 住居址の大半は削平されていたものの、床面付近またはやや浮いた状態で土師器・石器などの遺物が比較的まとまって出土しており、なかには完形に復元可能な個体も存在した。土器組成は甕が大半であり、後述する SI02・03 とはやや異なる。

SI01 出土遺物（第 174 図） 第 174 図 1 ～ 4 は土師器でいずれも甕である。1 は単純口縁の甕で口径 13.6cmを測る。口縁部はほぼ直線的に延び、端部は肥厚しない。色調は淡橙色を呈する。2 は複合口縁甕で器壁は厚く段部は退化が進行し、口縁部端部はやや外反する。3 はほぼ完形の単純口縁甕である。口縁部は強く屈曲しつつ外反し内面にやや肥厚する布留系甕である。胴部は丸みを帯び下半部もよく張る。調整は風化のため不明瞭だが外面肩部のヨコハケは確認できない。色調は淡橙色の大東式的だが胎土は小谷式的な特徴を有す。4 も完形の単純口縁甕であるが、3 とは異なり頸



第 175 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI02 実測図　S=1/60

部のしまりが甘く口縁部が強く屈曲しないタイプで、胎土・色調も大東式タイプに近い。外面調整はタテハケのみで肩部ヨコハケは認められない。

5は頁岩系の石材剥片で壁際土坑内から出土した。玉作関連遺物の可能性があるが断定できない。6は敲石で壁帯溝内から出土した。円礫側面の四周につぶれ痕が顕著に認められる。

遺構の性格と年代　出土した土師器は甕のみで詳細な位置づけは困難であるが、2・4のようなやや新しい資料がある一方、3のようなやや古相を呈する資料も含まれることから古墳時代中期前葉に属する住居址と考えられる。

SI02（第175図）

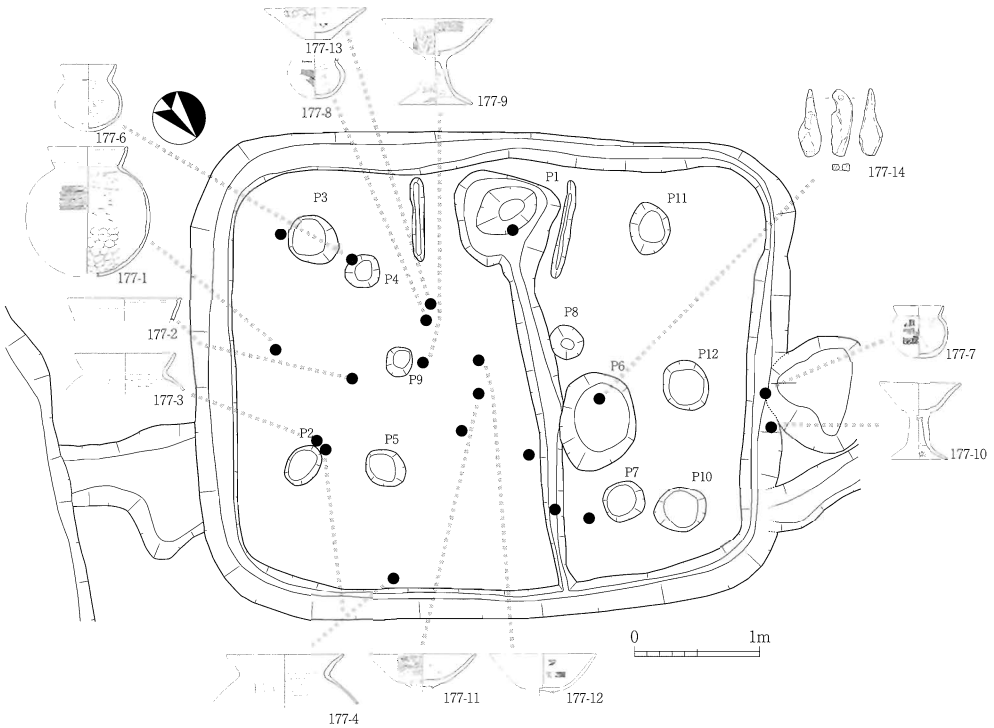
規模と形態　SI01の約3m北側で検出した竪穴住居で、SI01とほぼ主軸を一にして位置している。平面形は隅がやや丸い長方形状を呈し、東西3.8m、南北4.7mを測る。壁は斜面上方の南西側で高さ36cm前後を測る。

床面には多数のピットが検出されたが、P10など別の建物の柱穴も含まれる。主柱穴はP8、P9の二本柱構造で、これらの柱穴は径30cm弱と小振りだが、深さは40cm前後を測り比較的しっかりしている。床面壁際には壁帯溝が四周にめぐっている。

斜面上方の南西壁中央付近には壁際土坑が位置する。壁際土坑は二段掘で上段は一辺84cmの不整方形、下段は不整楕円形を呈し、深さ18cmと比較的浅い。土坑内の覆土は地山ブロックを含む黒灰色粘質土が堆積していた。また、壁際土坑からは反対側の壁に向けて床面をほぼ二分する間仕切り溝が認められた。壁際土坑の左右には短い小溝が平行して配置されており、火処空間を区画する間仕切溝と考えられる。

覆土は床面付近に炭を多く含む黒褐色粘質土が薄く堆積し、その上に黄ブロックを含む暗黄褐色粘質土が堆積しており、遺物は主として上層から出土した。

また、SI02の周辺には幾つかの溝が存在するが、その多くはSI02と明確な前後関係を持つもの



第176図　九景川遺跡Ⅳ区SI02遺物出土状況　遺構：S=1/60、遺物：S=1/12、1/8

である。ただし住居址南東壁に取り付く溝は住居内への入口になる可能性も考慮される。

SI02 遺物出土状況（第 176 図） SI02 では床面からやや浮いた状態ではあるが、比較的まとまって遺物が出土している。特に集中地点は認められないが、仕切溝の南側に比較的集中している。

遺物組成は SI01 のような甕だけの組成ではなく、小形丸底壺、高坏の比率が比較的高い。また、土製勾玉の未製品（第 177 図 14）は住居址北側の P6 内から出土している。

写真 74　SI02 土層堆積状況

写真 75　SI02 遺物出土状況

SI02 出土遺物（第 177 図） 1 ～ 4 は甕である。1 はほぼ完形に復元できる甕で、口縁部はやや内湾気味に上方へ立ち上がり口縁部端部内面は厚く肥厚する。胴部は下半部が膨らみ、それに対応するよう内面に指頭圧痕が明瞭に認められる。肩部外面にヨコハケを施す。2 も 1 と同様な布留系甕の口縁部で灰白色を呈する。

3 は単純口縁甕で内湾するが口縁内面は肥厚しない。4 は口縁部ににぶい段部を有し外反する資料で、浅黄橙色を呈する大東式的色調・胎土を有する。

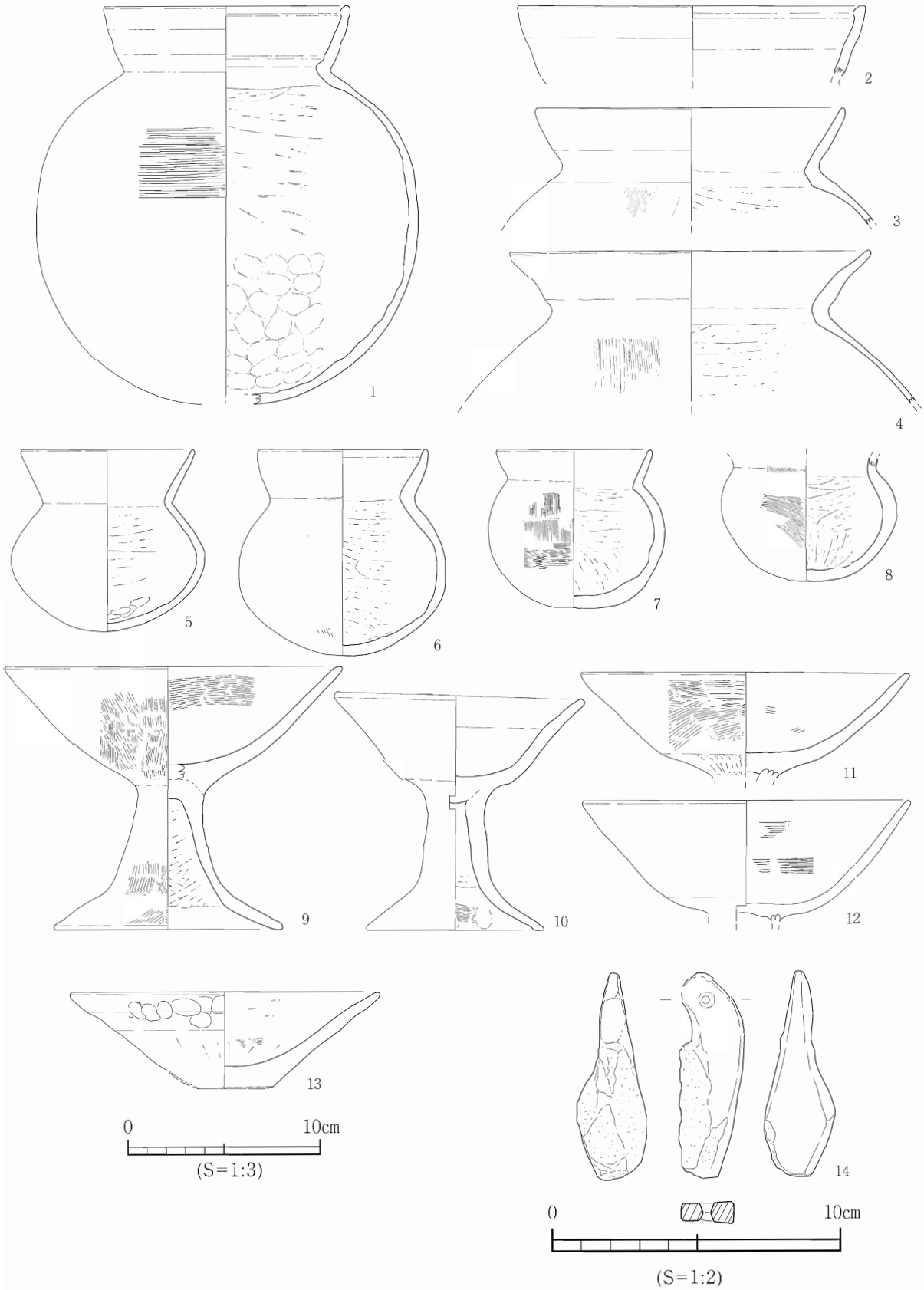
5 ～ 8 は小形丸底壺である。口縁部長や胴部のプロポーション、内外面の調整に若干のバリエーションが認められる。色調は 5 が浅黄橙色である他は灰白色を呈する。

9 ～ 12 は高坏である。9 は直口口縁タイプの高坏、10 は小谷式的な系列の流れをくむタイプと思われる。9 は内外面のハケ調整が顕著に残り、接合は差し込み式である。10 は坏部が深く口径が縮小し、脚が長い小谷式の最も退化した形態を呈している。色調は淡橙色を呈する。11、12 はやや坏部外面にわずかに稜をもつタイプである。11 は坏部下半に線刻状の刺突を施し、12 は坏部下半刺突痕が認められない。11 は灰白色、12 は浅黄橙色を呈する。

13 は坏（鉢）である。口径 16.0cmを測り、体部はほぼ直線状に開く。底部は比較的小さいが表面には剥離した痕跡が認められる。口縁部外面には指頭圧痕及び軽いケズリが認められる。底部の剥離痕から高坏坏部の可能性も考慮されるが、調整からみて坏である可能性が高い。あまり類例のないタイプである。

14 は異形土製品であるが、土製勾玉未製品と考えた。長さ 7.1cm、幅 2.0cmを測る。土器片の研磨は左右前後の 4 方向から行われ、勾玉頭部付近を作出しているものの、尾部付近は研磨が十分には行われず厚みを残し、また研磨が行われていない土器の剥離面を残している。頭部には両面穿孔による径 2.5mmの円孔が認められる。

遺構の性格と年代　当住居址内出土土器は、甕や高坏などに小谷式的な特徴をとどめる資料が多



第 177 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI02 出土遺物実測図　S=1/3、1/2

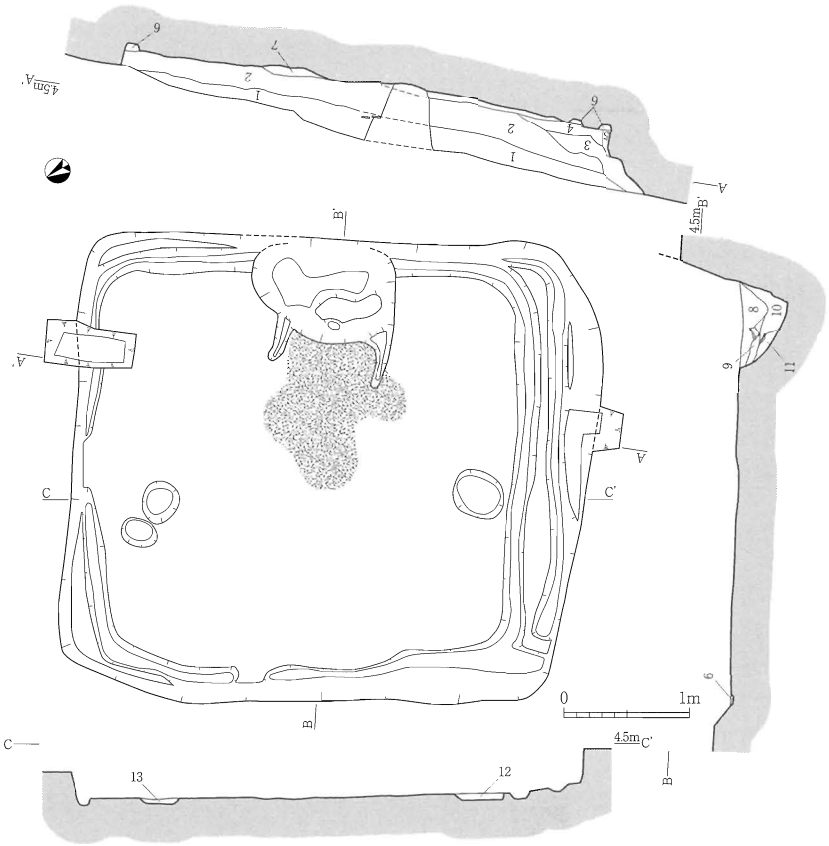
い点からみて、古墳時代中期前葉に位置づけられる。

SI03（第178図）

規模と形態　調査区の中央付近、前述のように浅い谷状地形の谷底部に立地する住居址である。主軸方向はSI01・02とほぼ平行している。

平面形は方形で、南北4.1 m、東西3.7mを測る。ベースの土がややわかりづらかったため、北東部は上半部を若干掘りすぎているが、残りのよい東側での壁の残存する高さは約50cmを測る。

覆土は下層に炭を若干含む暗灰褐色粘質土が堆積し、その上層に炭を多量に含む暗黒灰褐色粘質土が堆積していた。後述する土器群の多くは、上層（1層）に含まれるものである。

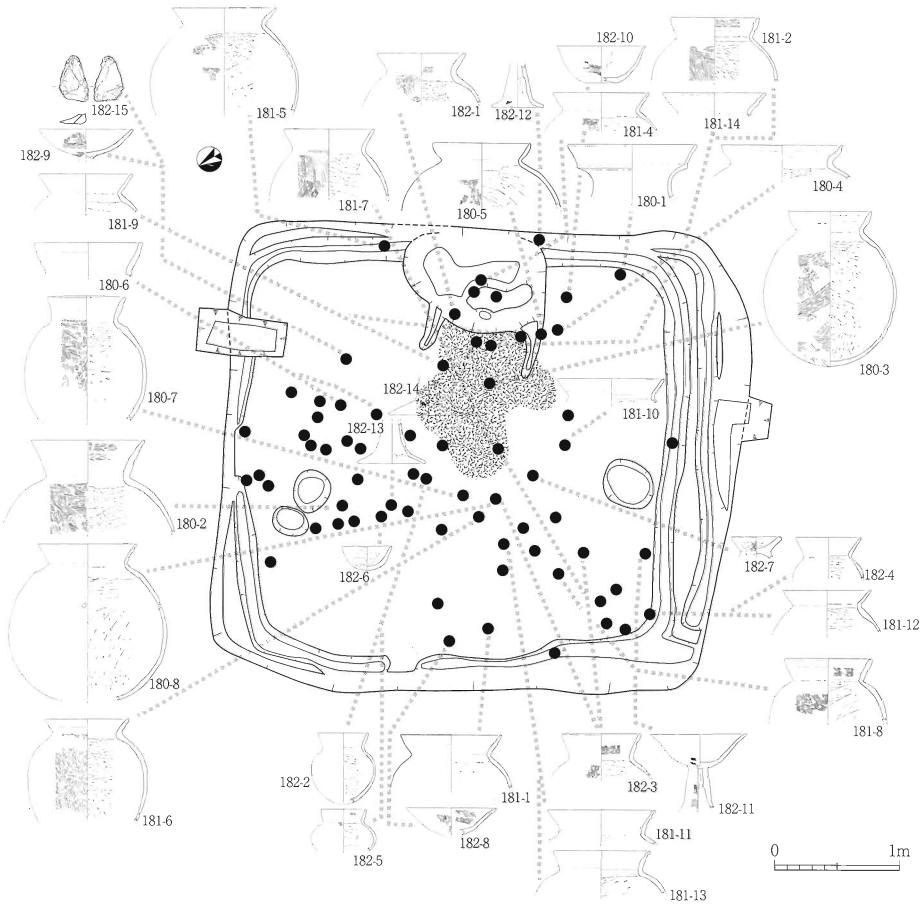


第178図　九景川遺跡Ⅳ区SI03実測図　S=1/60

床面では3基のピットを確認したがいずれも浅く主柱穴となりうるものではない。壁帯溝は南西壁付近においては二重にめぐっていることから建て替えがあったものと想定される。拡張か縮小かは土層観察上では確認できなかった。

壁際土坑は東壁中央部に設置されている。平面形は不整形な楕円形を呈し、長径1.1 m、短径84cm、深さ65cmのやや大型の土坑である。土坑内の覆土は炭を多量に含む黒灰褐色～黒褐色系の粘質土が堆積していた。また、壁際土坑からは2条の細い溝が西壁方向に若干延びているが、壁際土坑と接している点が、当該期に普遍的に認められる壁際土坑を挟んで位置する仕切溝とは大きく異なっている。また、壁際土坑の西側では1.1 m × 1.1 mの範囲で焼土面が広がっている状況が観察された。

SI03遺物出土状況（第179図）　SI03内からは多量の土器を検出した。一部は床面付近から出土しているが、その大半は住居址覆土上層から土器だまり状を呈した状況で検出された。土器だまりは住居主軸と斜交するように東西に長く延びるように分布し、西が高く東に向けて徐々に低くなっている（写真76）。このことから住居址が放棄され、ある程度埋没が進行した段階に住居址西側より一括投棄されたものと判断される。土器組成は甕が大半を占め、高坏、小形丸底壺がこれに次ぐ。なお、床面付近から出土した土器と土器だまり中の土器との間には明確な時期差は認められない。



第179図　九景川遺跡Ⅳ区SI03遺物出土状況　遺構：S=1/60、遺物：S=1/12、1/6

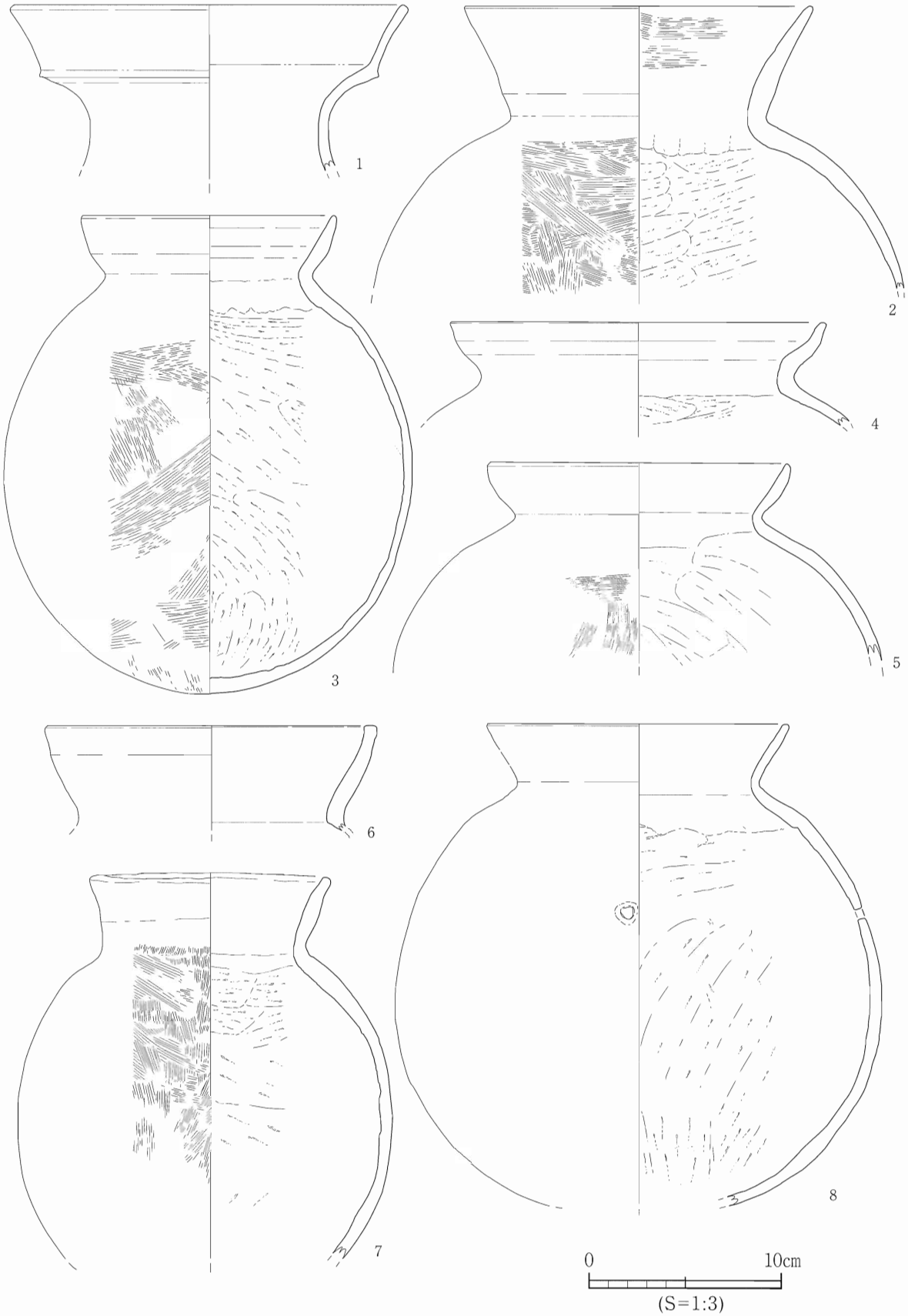
SI03出土遺物（第180～182図）　第180図1･2、第182図3は壺である。1は複合口縁壺である。口縁部は比較的薄く直線的に外反し、口縁部段部も比較的明瞭である。胎土も石英を多く含む小谷式的な胎土の特徴を呈す。

2は大形の直口壺で口径18.0cmを測る。口縁部は直線的に延びるがわずかに痕跡的な稜が認められる。第182図3は直口壺で口縁部が斜め上方に直線的にやや長く立ち上がり、口縁部内面にヨコハケ痕を残す。色調は大東式に近いが胎土は小谷式に近い。

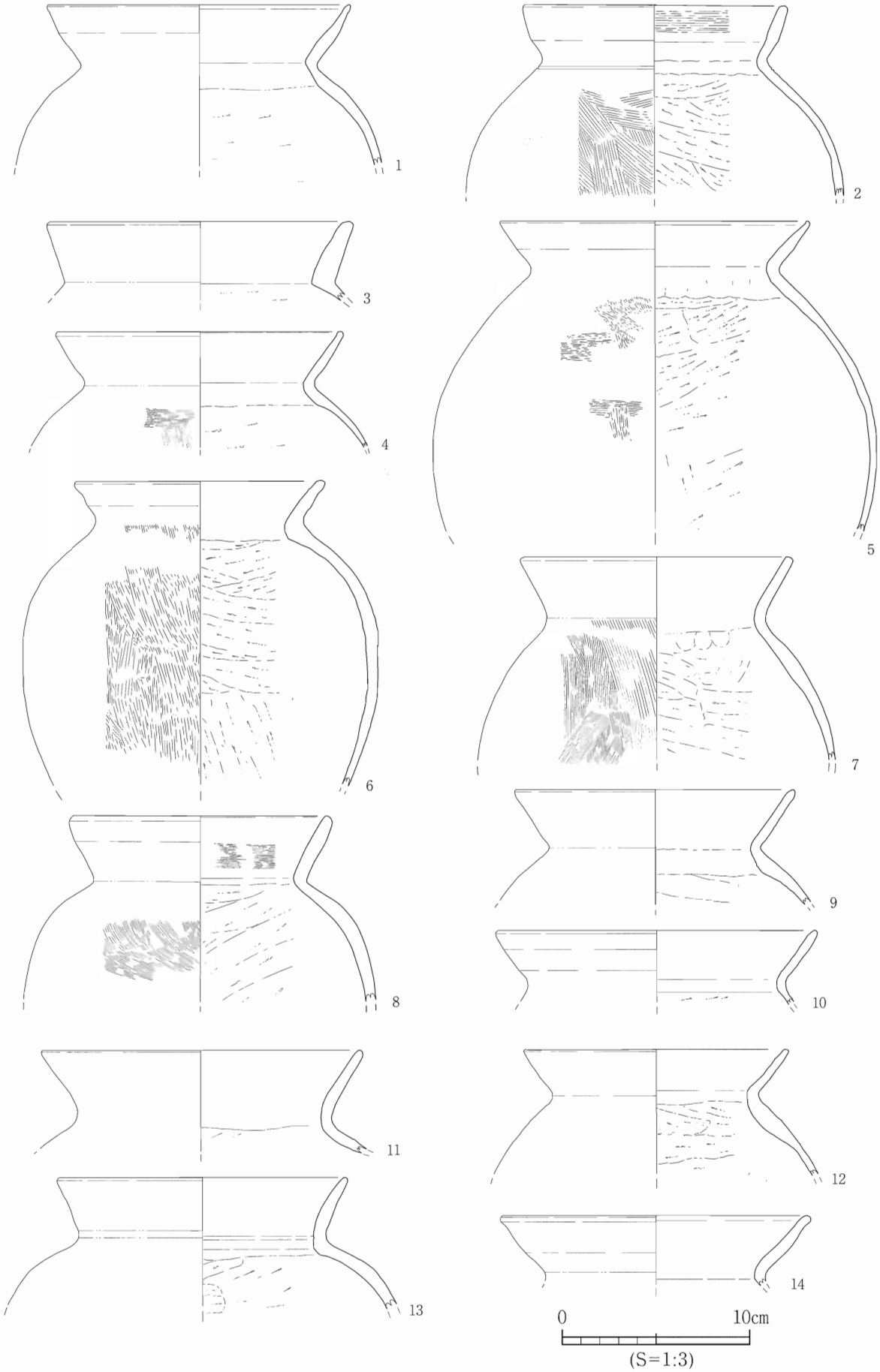
写真76　SI03土器だまり検出状況

第180図3～8、第181図、第182図1は甕である。第180図3はほぼ完形に復元される甕で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、外面ににぶい稜が認められる。体部は下膨れ状をなし、色調・胎土は大東式特有のものに近い。4は退化した複合口縁を呈する甕で口縁部はかなり厚いつくりをなしている。5は器形は布留系甕的な、頸部から強く屈曲し内湾する口縁を呈するが、端部の内面肥厚はない。肩部にかすかにヨコハケが認められ、色調は灰白色系だが胎土は大東式に近い。

7は甕としたが壺の方が適切かもしれない。頸部のしまりが甘く口縁部は上方へ長く立ち上がり、外面に指頭圧痕を残す。8は単純口縁甕で、口縁部はほぼ直線的に開き端部肥厚はない。胴部はや



第 180 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI03 出土遺物実測図 (1)　　S=1/3



第 181 図　九景川遺跡Ⅳ区 SI03 出土遺物実測図 (2)　S=1/3

写真77　SI03調査風景

や下膨れ状で肩部に径5㎜の焼成後穿孔が認められる。

第181図1は口縁部に痕跡的な稜を残す甕で色調は橙色、胎土は石英・長石など砂粒を多く含んでいる。3は口縁部が短く上方に立ち上がりかつ厚手の大東式甕である。4は色調は大東式であるが、胎土は小谷式に近く、器壁が比較的薄くかつ口縁部端部がわずかに肥厚する。5は布留系甕の流れを汲むタイプで口縁部端をわずかに上方につまみ上げ、肩部にヨコハケを一部残す。6は頸部のしまりがやや甘く口縁部は退化した複合口縁状を呈し、また器壁が厚い特徴をなす。肩部ヨコハケは認められず、色調・胎土は大東式タイプのものである。7も頸部のしまりが弱く口縁部が長く上方に延びる大東式によくあるタイプの甕である。8は器壁が厚く口縁部がやや長く若干内湾気味に立ち上がり、内面にヨコハケ痕を残す。色調はにぶい褐色を呈する。

9～14は単純口縁甕の口縁部資料である。形態的には幾つかのバリエーションが認められるが基本的には口縁端部の処理を単純に収め、橙色～浅黄橙色系の色調をなす資料群で、大東式の範疇に収まるものである。

第182図2・4・5は小形丸底壺である。2はやや大形で器高が高いタイプで、口縁部は短く直立気味に立ち上がる。4は退化があまり進行していないもので、口縁部はやや長くハの字状に直線的に立ち上がる。5は口縁部が直立状に短く内湾して立ち上がるもので、胴部は偏平でよく張る形状をなす。胎土・色調は、2が小谷式的、4が大東式的な特徴を示す。

6は手捏ね土器または小形の坏で口径8.0㎝を測る。丸底でボウル状に開く形状をなし、内外面に指頭圧痕を顕著に残す。7は蓋または低脚坏と思われるが当該期に同様な事例は稀で断言できない。厚手で外面にハケ、ユビオサエの痕跡を残す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

8～14は高坏または坏である。8・9は坏部の浅い直口口縁タイプである。8は色調・胎土は大東式タイプである一方、9は小谷式的な特徴を示す。内外面にハケが顕著に認められる。なお、8は床面出土資料である。10は坏と思われるが器形は大東式的な高坏に類似する。11は床面出土資料で坏部に段を有さず緩やかに外反する小谷式系高坏の最終形態である。坏部口径は小形化しやや深く、接合法は円盤充填である。色調は灰白色であるが、一部二次焼成により赤変している箇所が認められる。

12～14は高坏脚部である。12は脚が長く脚径が小さいもので小谷式的なタイプの退化形式と思われる。13は緩やかに脚裾が広がるもので、最終のヨコナデを省略し端部の処理を雑に仕上げている。14は脚部下半が強く屈曲し広がるタイプであるが、内面に稜を形成する。

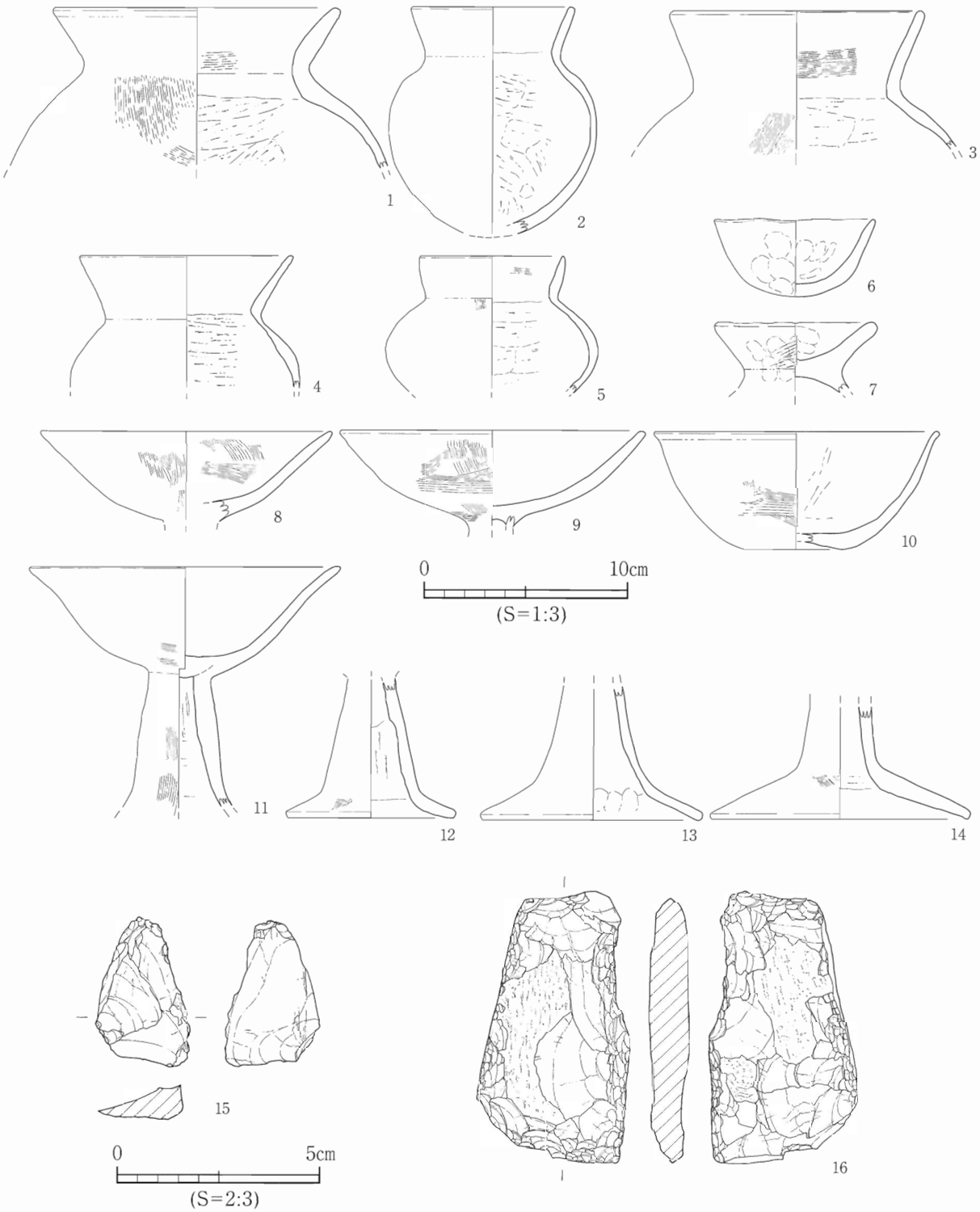
第182図15・16は石器である。15は碧玉製の剥片で、分析の結果花仙山産と判定されている。横長の剥片で玉作関連遺物と考えられる。

16は流紋岩製の打製石斧で、長さ13.3㎝、幅7.2㎝、厚さ1.9㎝を測る。平面形は四周を加工することにより撥状に整えており、両面に自然面を残す。住居址に直接伴うものではなく、下層から

の混入品である。

遺構の性格と年代　住居址内土器溜まり資料は小谷式的な資料と大東式な資料の両者が含まれるが、量的には後者が圧倒的に多い。SI01・02よりは若干後出的な様相もあるが、現状では大きな時期差は考えにくく、古墳時代中期前葉に属すると考えられる。

また、当住居址はSI01・02とは異なり主柱穴のないタイプで壁際土坑とその周辺の溝の配置も当該期の典型的なものとはやや異なっており、何らかの性格の違いといったことも考慮されるが現



第182図　九景川遺跡Ⅳ区SI03出土遺物実測図(3)　S=1/3、2/3

状では明らかにし得ない。

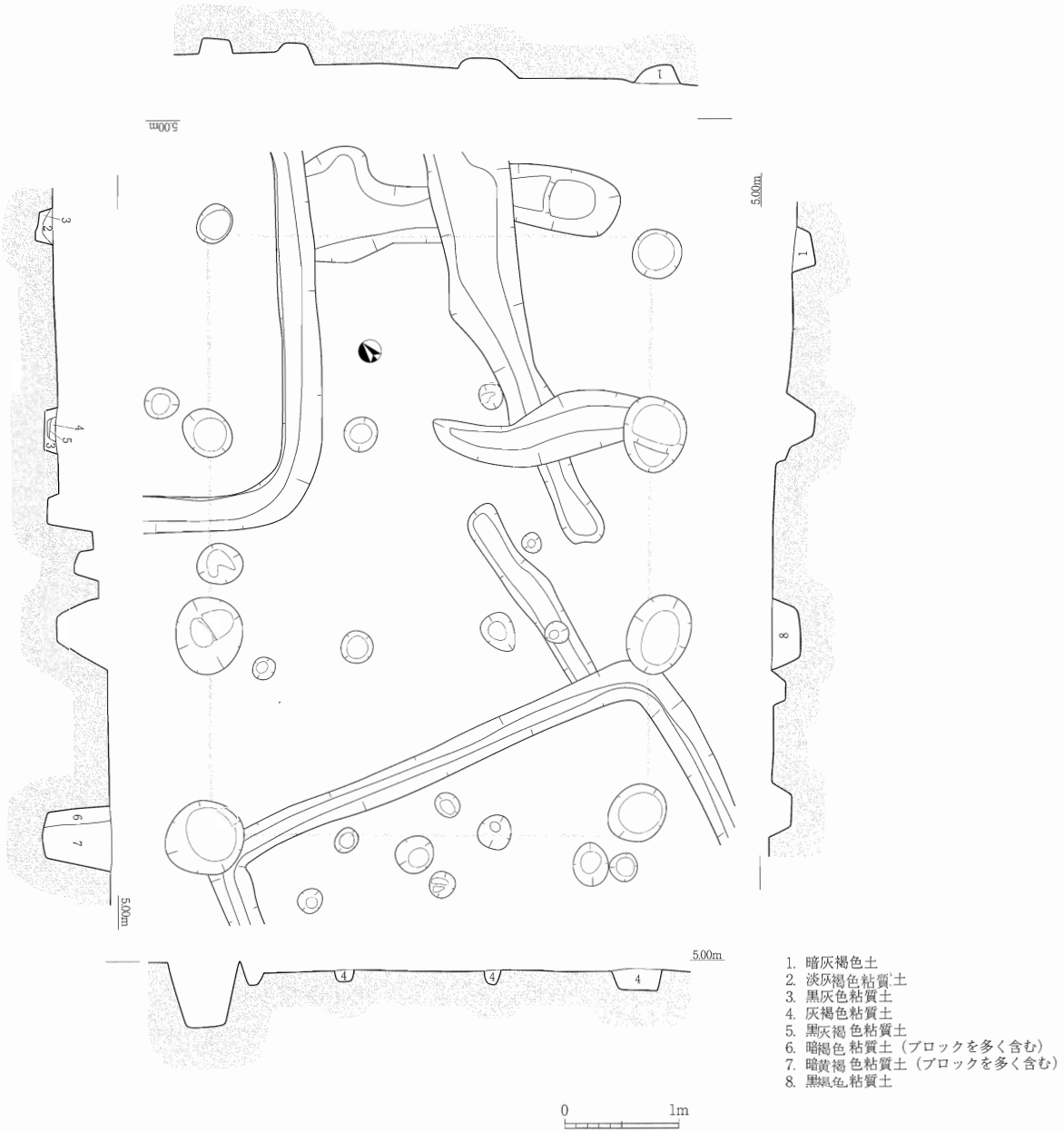
(3) 掘立柱建物

SB19（第 183 図）

規模と形態　調査区南東に位置し、SI01・02 と切り合っている。SI01 との前後関係は、プラン検出時の観察から SB19 が後出することは明らかである（写真 73）。一方 SI02 との前後関係については、調査当初の段階では当遺構の存在を意識していなかったため、SI02 プラン検出時には確認できていない。しかし SI02 は出土遺物や配置関係から SI01 と同時併存であった可能性が高く、その仮定に基づけば SB19 が後出することになる。

建物構造は梁間 1 間、桁行 3 間で、梁間がやや幅広い点はⅢ区の SB11 と類似する。建物規模は、梁間が心々距離で梁間 3.8m、桁行 5.2 m を測る。また、建物主軸は N － 42° － E で SI02 の主軸とほぼ一致している。

柱穴は円形または楕円形を呈し、径 60cm前後を測る。柱穴の覆土は黒褐色～灰褐色系の粘質土

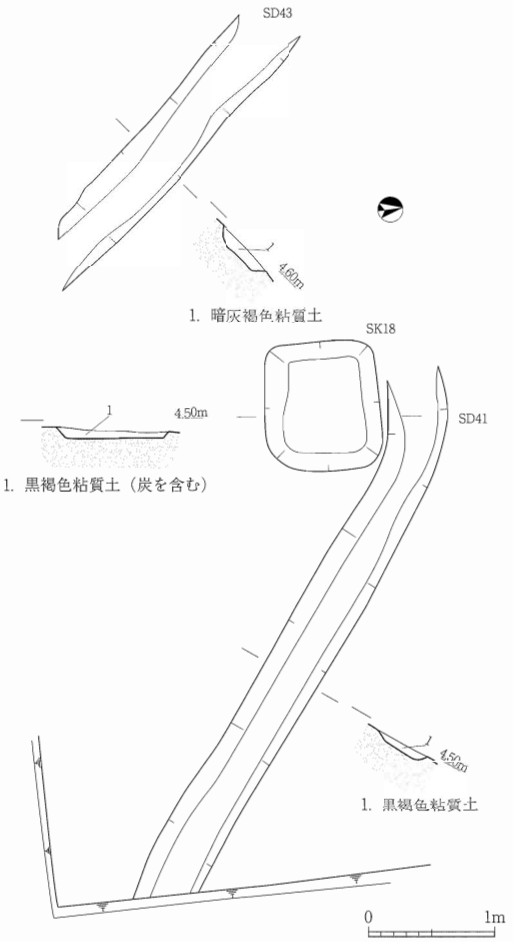


第 183 図　九景川遺跡Ⅳ区 SB19 実測図　S=1/60

が堆積しており、一部のピットでは柱痕らしき土層も確認できた。土層観察から想定される柱の径は20cm弱程度であったと考えられる。

SB19 出土遺物　細片のため図化していないが、各柱穴から若干ながら土師器細片が出土している。詳細な年代は不明であるが、胎土の特徴は大東式に特有なタイプのものを含むことから古墳時代中期前半頃に属するものと考えられる。

遺構の性格と年代　SI01との切り合い関係から古墳時代中期前半以降であることは確実であるが、建物主軸がSI01・02とほぼ同一方向を指向する点からみて、竪穴住居群とあまり時期を隔てない時期に営まれたものと推測される。



第184図　九景川遺跡Ⅳ区SK18、SD41、43実測図
S=1/60

(4) 土坑

SK18（第184図）

規模と形態　調査区中央部付近に位置する土坑でSI03と重複している。SI03検出面よりも上層の、後述するSD41・43と同一面において検出した。形態はほぼ正方形プランで、1.0m × 0.9 mを測る。断面形は浅い皿形で深さ10cmを測り、炭を含む黒褐色粘質土が堆積していた。遺物は出土していない。

遺構の性格と年代　遺構の年代は、SI03より上層、4層上面より下層で検出したことから、古墳時代中期前半以降古代末までの幅で押さえられるが、遺物がないためそれ以上の特定は困難である。性格は不明であるが、後述するSD41・43と有機的な関係を持った土坑である可能性が高い。

(5) 溝

SD41・43（第184図）

規模と形態　調査区のほぼ中央、SI03検出面の上層で検出した溝群で、先述のSK18と隣接している。両溝は約2.8 m離れて南東から北西の方向に平行して位置しており、SD41南壁はSI03北西壁とほぼ一致している（第171図）。SD41東側はトレンチにより失われているが、現状での規模はSD41が長さ4.8 m、幅45cm、深さ6cm、SD43が長さ2.7 m、幅48cm、深さ12cmを測る。覆土は黒褐色～暗灰褐色系の粘質土が堆積していた。遺物は出土していない。

遺構の性格と年代　遺物が出土していないため、詳細な年代は不明であるが、SK18とほぼ同時期の遺構と考えられる。

(6) Ⅳ区4層・4層上面遺構出土遺物（186・187図）

Ⅳ区4層遺物出土状況（第185図）　第185図にⅣ区4層及び4層上面遺構（上記遺構を除く）出土遺物のうち、主なものの出土位置を示した。4層出土遺物は量的には多くはないが、古墳時代中

第185図　九景川遺跡Ⅳ区4層・4層上面ピット遺物出土状況　遺構：S=1/300

期前半の資料は竪穴住居及び掘立柱建物周辺を中心に出土している。その一方、上層の7～8世紀に属する遺物は、SI03の位置する小さな谷部を中心にとして分布しており、先述したSI03上層遺構群の年代の一端を示している可能性がある。

土師器（第186・187図）　第186図、第187図10・11は4層出土の土師器で、大半は竪穴住居群と同じ古墳時代中期前葉に属する遺物である。1～4は甕である。1は口縁部外面に痕跡化した稜を残す甕である。体部外面に粗いタテハケを施すのみで肩部ヨコハケは認められない。2は口縁部がやや上方へ直線的に延びる甕で、口縁部内面にヨコハケを残す。色調・胎土とも大東式タイプのものである。3は大形の甕で全般的に器壁が厚く、肩部が張らない。口縁部は中途で強く屈曲して端部を丸く収め、内面にヨコハケ痕を顕著に残す。他の土師器とは異なり7～8世紀に属するものと考えられる。

5は小形丸底壺で口縁部の萎縮化が進行している資料である。色調は浅黄橙色で胎土は白色粒子を微量含む大東式に特有な胎土・色調を呈する。6はほぼ完形の手捏ね土器で口径4.4cmを測る。

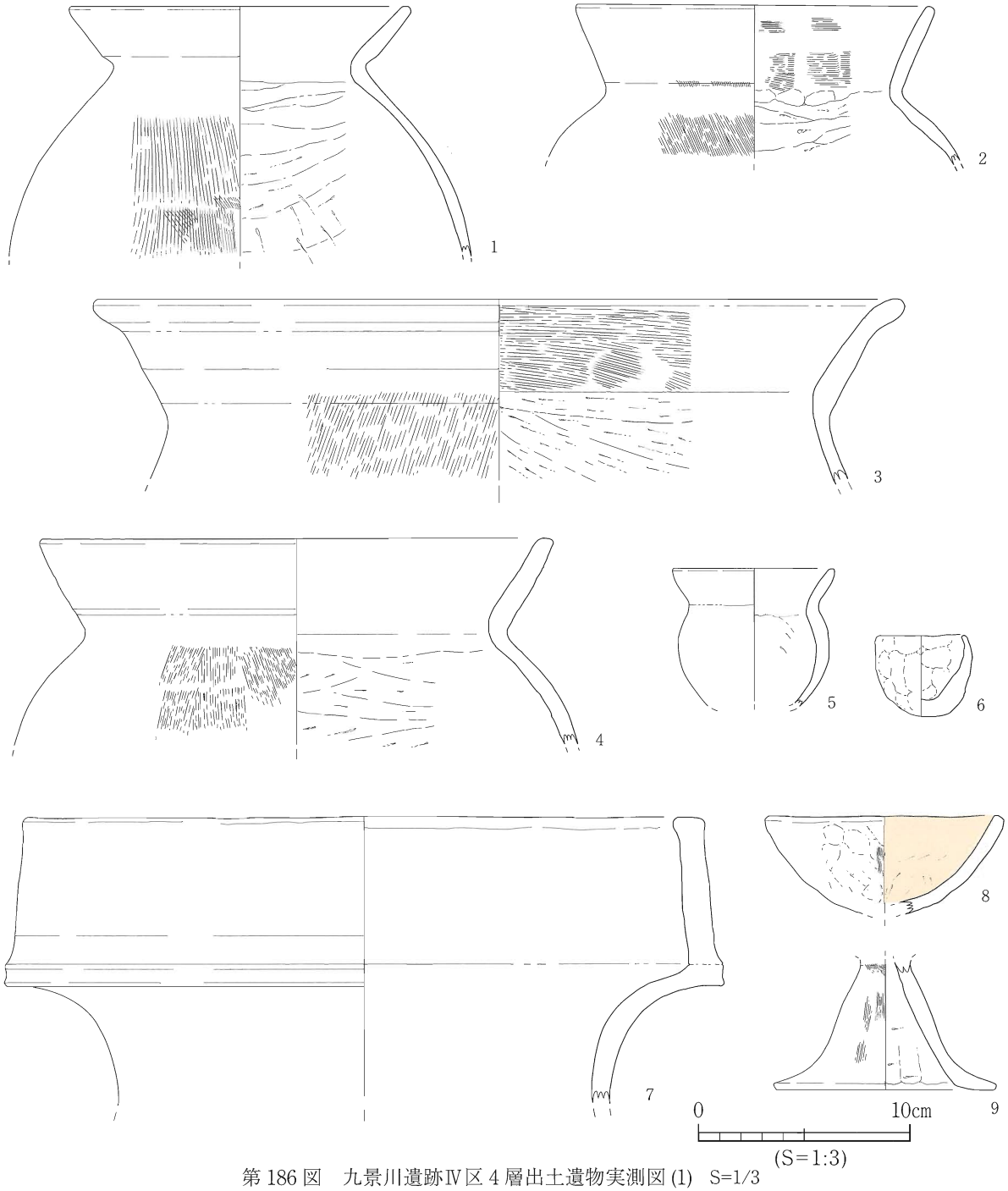
7は大形の複合口縁壺である。器壁はかなり厚く。擬口縁上に直線的に内傾する口縁を接合し、端部上面に平坦面を有する。胎土・色調は小谷式的な特徴を有する。8は坏である。口径11.2cmのやや小形のもので、口縁部は凹凸が著しい。外面はハケのちナデ・ユビオサエにより仕上げ、内面には赤彩が全体に認められる。9は高坏で脚柱部がやや膨らみ脚裾が強く外反する。色調は灰白色であるが胎土は石英・長石が少なく表面がざらついた大東式に近い特徴を有する。第187図10は

移動式竈の庇部、11は土製支脚である。

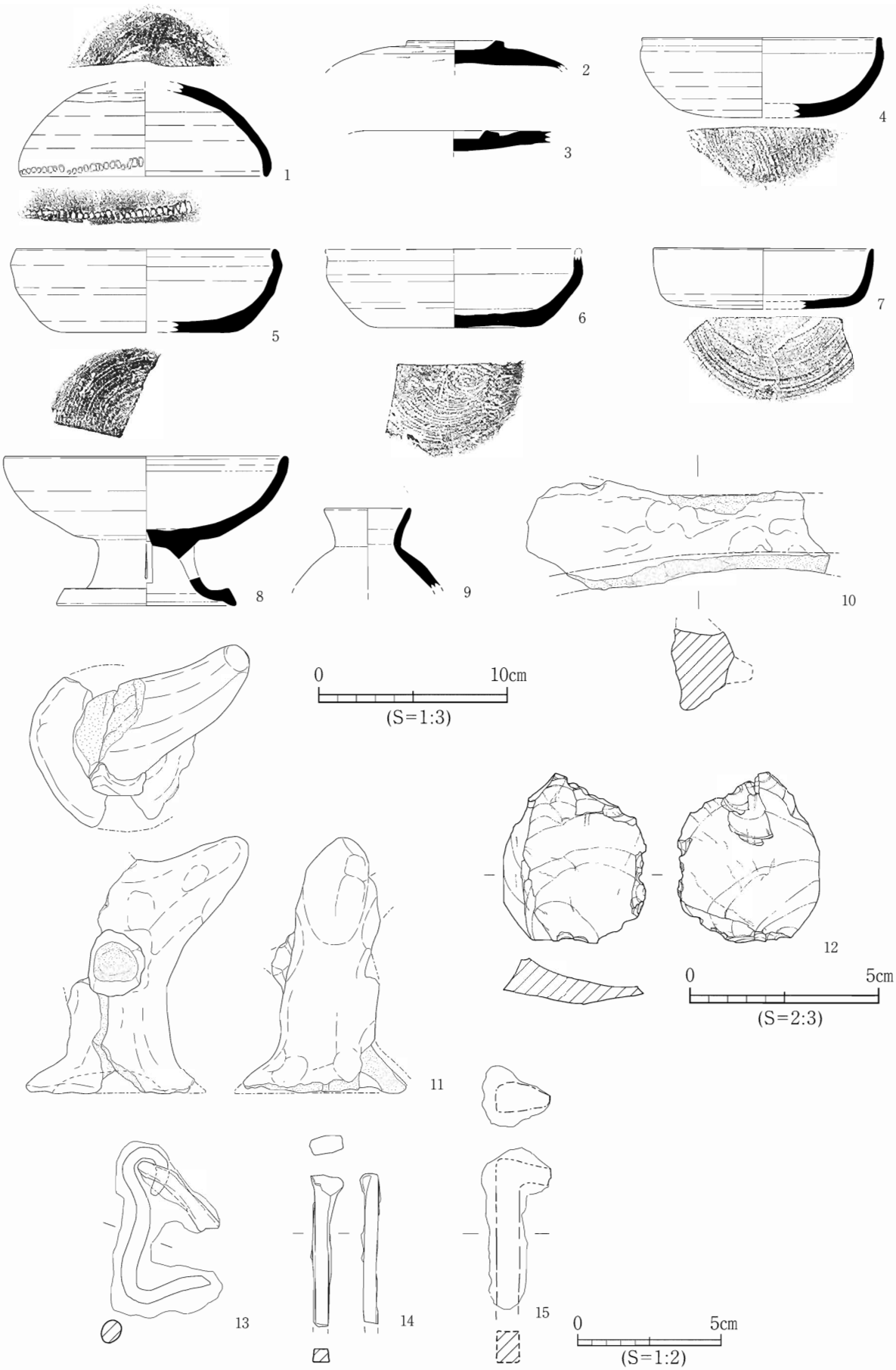
須恵器（第187図） 第187図1～9は須恵器である。1は坏蓋で口径13.0cmを測り、天井部と口縁部間の段がなく、天井部に周辺へラケズリを施す。口縁部外面に何らかの当具痕を残す。2・3は蓋で偏平な器形で輪状つまみを持つ。輪状つまみはⅢ区では極めて稀な存在であり、少量ながら当調査区内で一定量散見される点は注意される。

4～7は坏である。5・6は口縁部が内湾かつやや屈曲する点から青木Ⅱ期、7は底径が大きく体部がやや直線的に立ち上がる点から青木Ⅳ期に属すると考えられる。

8は高坏である。坏部は稜を持たず椀形を呈し、脚部は短脚化が著しく、2方に切れ込み状のスカシを穿つ。大谷6期の資料と考えられる。9は徳利状の小形の壺で口径4.6cmを測る。



第186図　九景川遺跡Ⅳ区4層出土遺物実測図(1)　S=1/3



第 187 図　九景川遺跡Ⅳ区 4 層出土遺物実測図 (2)　1 ～ 11：S=1/3、12：S=2/3、13 ～ 15：S=1/2

石器（第187図） 第187図12はSI03周辺から出土した瑪瑙製の剥片で、縦長剥片の側縁に細かな加工を施す。蛍光X線分析の結果花仙山産と判定されており、古墳時代中期前半に属する玉作関連遺物である可能性が高い。

鉄器（第187図） 第187図13は錆化が著しいが、引手状の鉄製品である。2本の鉄棒端部を円環状に折り曲げ連結しているが、反対側の形状は折り曲げているのみで円環を形成していない。

14・15は釘で、いずれも先端部が欠損している。14は頭部を鍛打し撥状に拡げたのちに折り曲げることによって頭部を形成しており、製作工程がよくわかる資料である。これらの鉄器は共伴する土器の様相から古代に属する資料と思われる。

第4節　6層上面検出遺構の調査

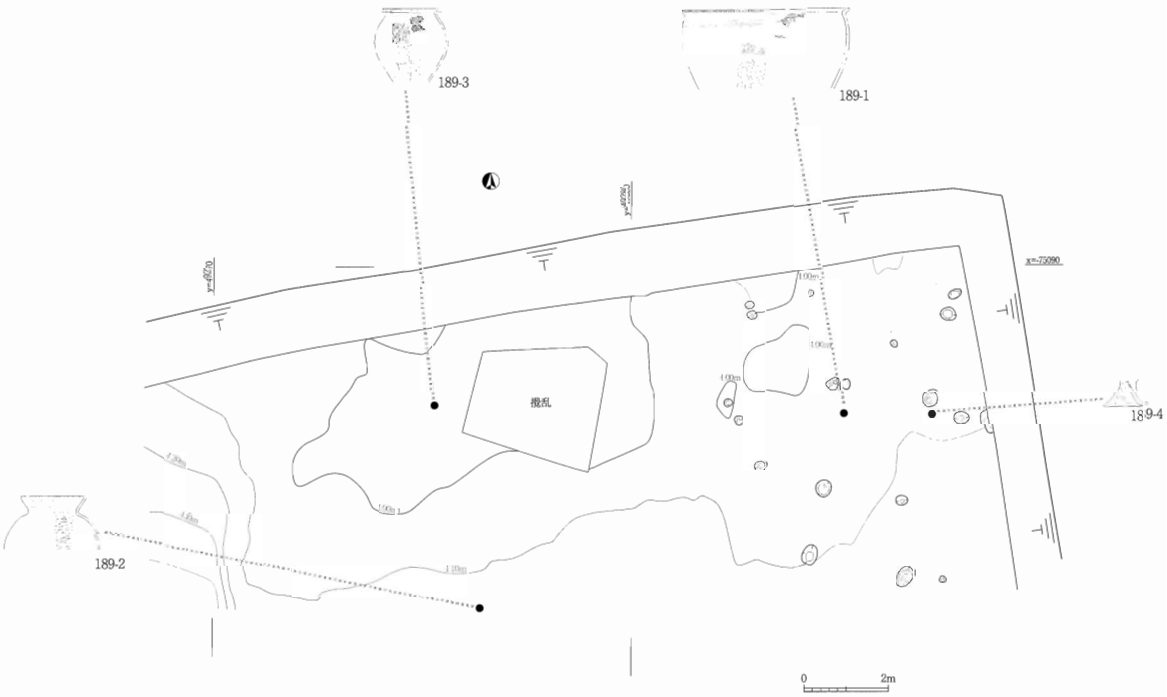
(1) 遺構の分布と概要（第188図）

前述のとおりⅣ区北東部においては5層上面において遺構が検出されなかったため、5層上面遺構群の調査と平行して基盤層である6層上面まで掘り下げ、精査を行った。その調査範囲内での遺構・遺物分布状況が第188図である。

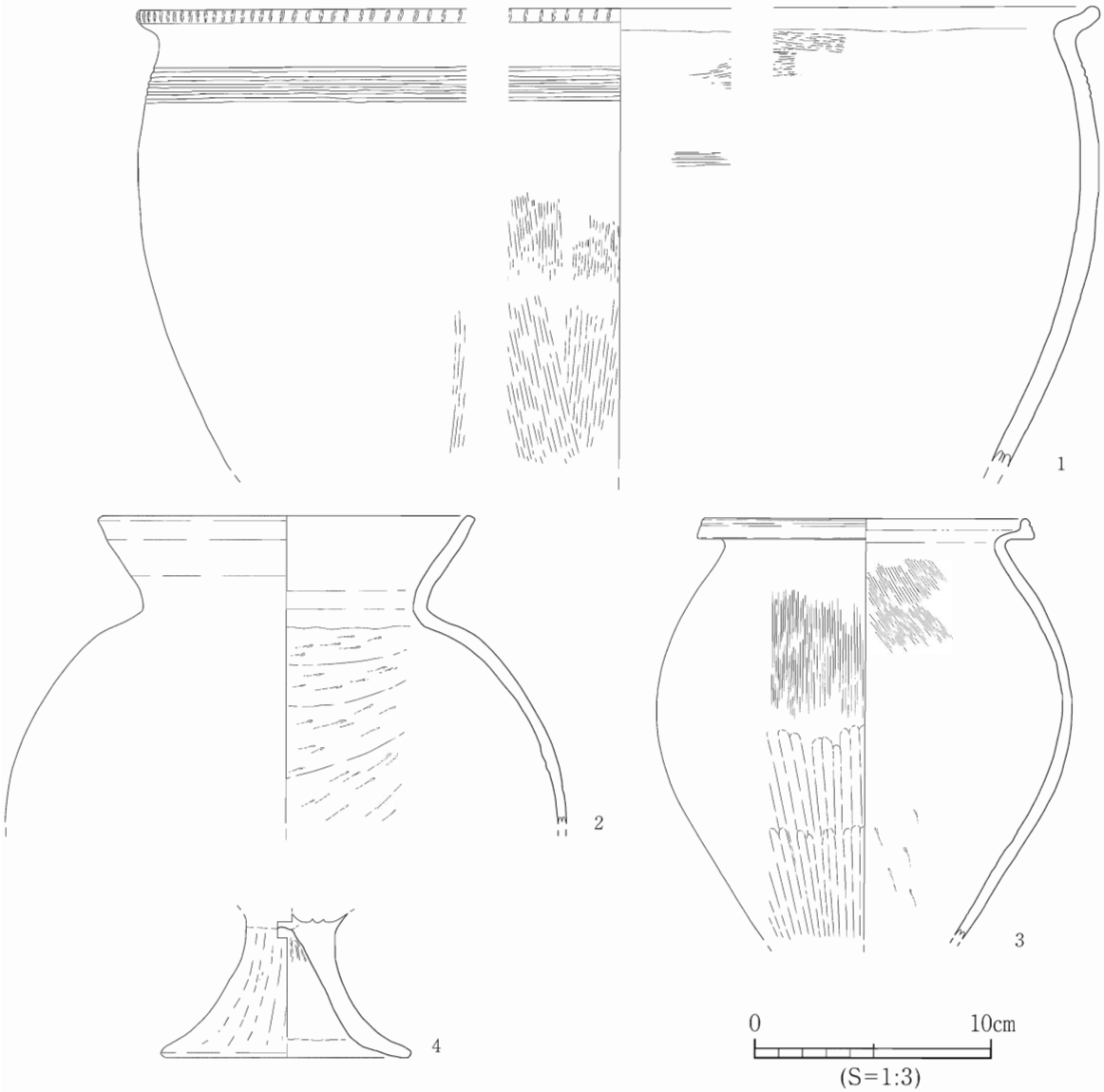
6層上面は南から北へ緩く傾斜しており、調査区北東部からピットが集中して検出された。ピットは21基を検出したが、調査範囲内では明確な建物等を復元するには至っていない。

(2) Ⅳ区5層出土遺物（第189図） 5層中からは少量ではあるが、弥生土器・土師器が出土している（第188図）。

第189図1は弥生時代前期の甕である。小片のため正確ではないが、口径40cm前後の大型品と考えられる。胴部は口径と同程度まで張り、口縁部はやや内湾気味に短く立ち上がって端部に刻目を施す。頸部には4条のヘラ描沈線文を施文する。内外面はハケ調整で仕上げ、胎土は石英・長石等の大形砂粒を多量に含んでいる。松本編年のⅠ－4様式に属する（松本1992）。



第188図　九景川遺跡Ⅳ区北側6層上面平面図・5層遺物出土状況　遺構：S=1/180、遺物：S=1/18

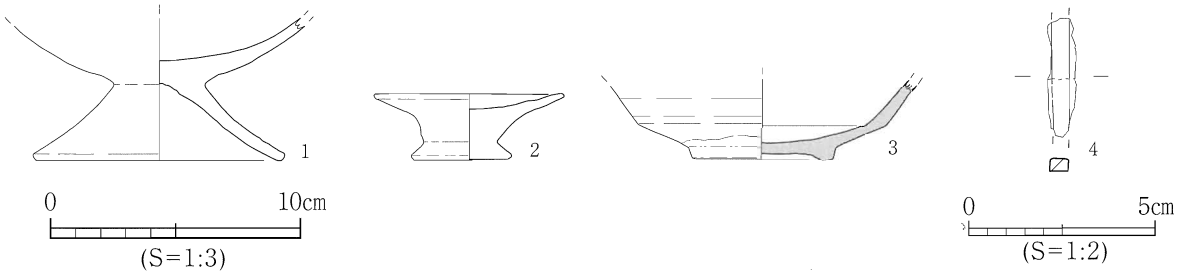


第189図　九景川遺跡Ⅳ区5層出土遺物実測図　S=1/3

2は土師器甕で口径15.6cmを測る。頸部がよくしまり口縁部は比較的長く、やや内湾気味に立ち上がる。色調・胎土は小谷式的な特徴を示す。出土位置はSI03北壁付近に相当する場所で、本来5層に伴うものではなく混入品か、または取り上げ時のミスによるものである可能性が高い。

3は弥生時代中期の甕でピット群よりも西側から出土した。口縁部は繰り上げ状にやや内傾して短く立ち上がる。口縁部外面には凹線文を施文しているようにも見えるが風化のため定かではない。体部は胴部中央部がよく張った均整のとれたプロポーションを呈する。調整は外面が上半部がタテハケ、下半が縦方向のヘラミガキを施し、内面は上半部がタテハケ、底部付近には軽いヘラケズリを施す。松本編年Ⅲ－2～Ⅳ－1様式に属する資料であり、当該期の資料はすぐ北側に隣接するⅠ区から一定量出土している。

4は調査区東壁付近で出土した土師器高坏の脚部である。比較的脚が短く裾に向けて緩やかに広がり、最終のヨコナデ調整が顕著でなく表面の凹凸が顕著である。砂粒をほとんど含まない精緻な胎土で、大東式精製品の典型的な胎土である。器壁はざらつき被熱による赤変が顕著に認められる。



第 190 図　九景川遺跡Ⅳ区遺構外出土遺物実測図　S=1/3、1/2

古墳時代中期前半に属する資料であり、2 と同様に本来は 5 層に伴うものではなく、混入品と考えられる。

第 5 節　その他の遺物

第 190 図はⅣ区側溝・ベルト中等から出土した層位の不明な遺物である。1 は短脚の土師器高坏で底径 10.0cmを測る。坏部は椀状を呈し、脚部はハの字状に広がる。2 は土師質土器の高台付坏・小皿である。坏部は非常に浅い皿状を呈し、脚部は中実で底部に回転糸切痕がかすかに認められる。3 は白磁椀の底部である。削り出し高台で内面に円圏が認められ、太宰府分類の椀Ⅳ類に属する。4 は 3 層中で検出した貝層のいずれかから出土したと思われる棒状鉄器で、両端を欠損した鉄釘である可能性が高い。12 ～ 13 世紀に属する遺物と考えられる。

引用・参考文献

赤澤秀則 1992「出土遺物・時期」『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会
大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集
島根県教育委員会 1996『柳Ⅱ遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡』
島根県教育委員会 1998『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』
島根県教育委員会 2006『白枝本郷遺跡・中野清水遺跡 (3)』
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』
西尾克己 2002「島根県」『中世の地鎮と銭貨』出土銭貨研究会
広江耕史 1992「島根県における中世土器について」『松江考古』第 8 号
松尾充晶 2006「奈良・平安時代の青木遺跡」『青木遺跡Ⅱ』島根県教育委員会
松本岩雄 1992「出雲・隠岐」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社
松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』第 8 集
松山智弘 2000「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第 17 集
横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館 研究論集』4

表８　九景川遺跡出土遺物観察表

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
9	1	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	完形	10.5 cm	5.1 cm	3.4 cm	外；黄色　2.5Y 8/6	1 mm以下 黒色粒子　微量含む	良好	
9	2	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	完形	10.2 cm	5.2 cm	3.2 cm	外；黄色　2.5Y 8/6	1 mm以上 黒色粒子　微量含む	良好	
9	3	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	完形	10.6 cm	4.9 cm	3.2 cm	外；浅黄橙色　10YR8/4	1 mm以下 白色粒子　微量含む	良好	
9	4	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	完形	10.5 cm	5.1 cm	3.6 cm	外；浅黄橙色　10YR8/4	1 mm以下 黒色粒子　微量含む	良好	外；黒斑あり 内；黒斑あり
9	5	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	完形	10.3 cm	5.1 ～ 5.4 cm	3.0 cm	外；黄橙色　10YR8/6	1 mm以下 白色粒子　微量含む	良好	
9	6	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	完形	10.5 cm	5.3 cm	3.0 cm	外；にぶい黄橙色 10YR7/2	1 mm以下 黒色粒子　微量含む	良好	外；黒斑あり 内；黒斑あり
9	7	Ⅰ区 SK01	土師質土器	杯	1/2 以上	10.4 cm	5.0 cm	3.1 cm	外；浅黄橙色　10YR8/3	1 mm以下 白色粒子　微量含む	良好	外；黒斑あり 内；黒斑あり
9	8	Ⅰ区 SK01	土師質土器	杯	1/2 以上	10.6 cm	5.0 cm	3.6 cm	外；浅黄橙色　10YR8/4	精良	良好	
9	9	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	1/2 以上	10.1 cm	(5.0) cm	3.1 cm	外；浅黄橙色　10YR8/3	精良	良好	
9	10	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	1/2 以上	(9.8) cm	5.0 cm	(3.1) cm	外；浅黄橙色　10YR8/4	精良	やや不良	
9	11	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	1/2 以上	10.1 cm	5.2 cm	3.2 cm	外；黄橙色　10YR8/6	精良	良好	
9	12	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	1/2 以上	10.4 cm	5.0 cm	3.3 cm	外；浅黄橙色　10YR8/4	1 mm以下 白色粒子　微量含む	良好	外；黒斑あり
9	13	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	1/4 以上	9.4 cm	4.5 cm	3.0 cm	外；にぶい黄橙色 10YR7/2	1 mm以下 白色粒子　微量含む	やや不良	外；黒斑？
9	14	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	1/2 以上	11.0 cm	5.4 cm	3.2 cm	外；灰白色　10YR7/1	精良	やや不良	
9	15	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	1/6 以上	(10.3) cm	5.0 cm	2.7 cm	外；浅黄橙色　10YR8/4	1 mm以下 白色粒子　微量含む	良好	
9	16	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	1/2 以上	10.0 cm	5.2 cm	3.1 cm	外；灰白色　10YR7/1	精良	やや不良	
9	17	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	1/4 以上	(10.7) cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/2	精良	やや不良	
9	18	Ⅰ区 SK01	土師質土器	坏	1/2 以上	(10.6) cm			外；浅黄橙色　10YR8/4	精良	良好	
17	1	Ⅰ区 SK03　5 層	青磁	皿	1/2 以下			4.9cm	釉；明オリーブ灰色　N7/1	精良	良好	太宰府分類 皿Ⅰ-1 b
17	2	Ⅰ区 SK02	土師質土器	坏	1/2 以上			5.8 cm	外；淡橙色　5YR8/3	1 mm以下 白色粒子　微量含む	良好	
17	3	Ⅰ区 SK02	土製品	土錘	1/2 以上	長；2.3 cm　巾；2.4 cm	厚；2.4 cm		外；黒褐色　2.5Y3/1	1 mm以下 白色粒子　微量含む	やや不良	重量；10.55g
17	4	Ⅰ区 SK02	弥生土器	壺	小片	(27.8) cm			外；灰白色　10YR	1 mm以下 石英　長石　若干含む	良好	口縁部；凹線文
17	5	Ⅰ区 SD06	弥生土器	壺・甕底部	小片			(7.3) cm	外；浅黄橙色　7.5YR8/4	4 mm以下 石英　長石　多く含む	良好	外；煤痕（一部）
17	6	Ⅰ区 SK03	土師質土器	坏	底部完形			5.4 cm	外；淡橙色　5YR8/4	1 mm以下 石英　若干含む		
17	7	Ⅰ区 SD05	弥生土器	甕	小片				外；灰白色　10YR8/2	4 mm以下 石英　長石　多く含む	やや不良	
17	8	Ⅰ区 Pit　85	弥生土器	甕	小片	(26.6) cm			外；浅黄橙色　7.5YR8/6	1 mm以下 石英　長石　多く含む	良好	口縁；凹線文
20	1	Ⅰ区 SE　3 層	弥生土器	甕	小片	(17.8) cm			外；明褐灰色　7.5YR7/2	1 mm以下 石英　長石　若干含む	良好	
20	2	Ⅰ区 NE　3 層	土師器	甕	小片	(16.0) cm			外；明褐灰色　7.5YR7/1	2 mm以下 石英　長石　若干含む	良好	
20	3	Ⅰ区 SE　3 層	土師器	小形丸底壺	小片	9.4 cm			外；浅黄橙色　7.5YR8/4	1 mm以下 石英　長石　若干含む	良好	
20	4	Ⅰ区 SW　3 層	須恵器	蓋	1/6 以上	12.3 cm			外；明紫灰色　5P7/1	精良	良好	大谷５期
20	5	Ⅰ区 SE　3 層	弥生土器	蓋	ほぼ完形	5.2 cm			外；灰白色　7.5YR8/2	2 mm以下　石英　長石 白色粒子　多く含む	やや不良	弥生前期か
20	6	Ⅰ区 NW　3 層	土師器	甑把手	小片				外；明褐灰色　7.5YR7/2	1 mm以下　石英　長石 やや多く含む	良好	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
20	7	I区 SE 3層	白磁	椀	小片	(17.4) cm			外；灰白色 5Y8/2	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外面釉 太宰府分類Ⅳ類
20	8	I区 3層	白磁	椀	小片	(18.0) cm			外；灰白色 5Y8/2	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外面釉 太宰府分類Ⅳ類
20	9	I区 SE 3層	白磁	椀	小片	(12.2) cm			外；灰白色 5Y8/1	精良	良好	外；釉（全体） 内；釉（全体）
20	10	I区 NE 3層	白磁	椀	小片	(16.6) cm			外；灰白色 2.5Y8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	外；草花文 内外面釉 Ⅴ・Ⅶ類
20	11	I区 NE 3層	白磁	椀	小片			(7.9) cm	外；灰白色 5Y8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	外；釉（一部） 内；釉（全体） 太宰府分類Ⅳ類
20	12	I区 NW 3層	白磁	椀	1/4 以上			(6.2) cm	外；灰白色 5Y8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内；櫛目文 外；釉（一部） 内；釉（全体） 太宰府分類Ⅴ類
20	13	I区 NE 3層	白磁	椀	1/4 以上			(7.5) cm	外；灰白色 5Y8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	外；釉（一部） 内；釉（全体） 太宰府分類Ⅳ類
20	14	I区 SE 3層	青白磁	皿	底 1/4 以上			(4.4) cm	外；白色 該当なし	精良	良好	外；釉（一部） 内；釉（全体）
20	15	I区 SE 3層	土師質土器	坏	1/4 以上	15.9 cm	5.4 cm	7.6 cm	外；灰白色 10YR8/1	精良	やや不良	
20	16	I区 NE 3層	土師質土器	坏	底ほぼ完形		6.5 cm		外；淡橙色 5YR6/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
20	17	I区 SE 3層	土師質土器	坏	底 1/2 以上	17.2 cm	6.7 cm	4.1 cm	外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
20	18	I区 SE 3層	土師質土器	坏	1/6 以上	16.0 cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/4	1 mm 石英 長石 若干含む	良好	
20	19	I区 SE 3層	土師質土器	坏	底 1/2 以上		6.5 cm		外；浅黄橙色 10YR8/4	1 mm以下 長石 若干含む	良好	
20	20	I区 SE 3層	土師質土器	坏	底完形		6.4 cm		外；浅黄橙色 7.5YR7/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
20	21	I区 W 3層	土師質土器	坏	底 1/6 以上		8.7 cm		外；浅黄橙色 10YR8/4	2 mm 石英 長石 若干含む	良好	
20	22	I区 SW 3層	土師質土器	坏	底完形		5.8 cm		外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
20	23	I区 NE 3層	土師質土器	坏	底完形		5.6 cm		外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
20	24	I区 NE 3層	土師質土器	高台付坏	小片			(4.6) cm	外；灰白色 7.5YR8/1	1 mm 石英 若干含む	良好	
20	25	I区 SE 3層	土師質土器	皿	底 1/2 以上			4.5 cm	外；浅黄橙色 7YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
20	26	I区 SW 3層	土師質土器	高台付坏	底完形			4.3 cm	外；浅黄橙色 7.5YK8/4	1 mm 石英 若干含む	良好	
20	27	I区 SE 3層	土師質土器	高台付坏	底 1/2 以上			4.4 cm	外；にぶい橙色 5YR7/4	1 mm 石英 長石 若干含む	良好	
20	28	I区 W 3層	土師質土器	小皿	1/2 以上	8.7 cm	3.9 cm	2.1 cm	外；明褐灰色 5YR7/6	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
20	29	I区 E 3層	土師質土器	高台付皿	底 1/4 以上				外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
20	30	I区 NE 3層	土師質土器	坏	底 1/2 以上			4.4 cm	外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
21	1	I区 NW 3層	鉄器	釘	1/2 以上	長；(4.7) cm巾；1.0cm 厚；0.75 cm						
21	2	I区 SE 3層	鉄器	釘	小片	長；(5.2) cm巾；0.8 cm 厚；0.7 cm						
21	3	I区 SW 3層	鉄器	釘	完形	長；3.5 cm 巾；1.0 cm 厚；0.2 cm						
21	4	I区 SE 3層	鉄器	釘		長；(4.2) cm巾；0.9cm 厚；0.45 cm						
21	5	I区 SE 3層	鉄器	不明鉄片	完形	長；8.3 cm 巾；2.0cm 厚；0.35 cm						
21	6	I区 S 3層	鉄滓	鍛冶滓		長；5.3 cm 巾；5.4cm 厚；1.9 cm						鍛錬鍛冶滓
21	7	I区 NE 3層	鉄滓	粒状滓	完形	長；2.5 cm 巾；2.7cm 厚；1.8 cm						鍛錬鍛冶滓

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
21	8	Ⅰ区 SE 3層	土製品	土錘	1/4以上	長；(2.4) cm	巾；1.8 cm	厚；1.6 cm	外；灰黄色 2.5Y6/2	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	重量；4.25g
21	9	Ⅰ区 NE 3層	土製品	土錘	1/4以上	長；(3.4) cm	巾；1.6 cm	厚；1.6 cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/4	1 mm以下 長石 白色粒子 微量含む	良好	重量；4.77g
21	10	Ⅰ区 NE 3層	石器	石核 楔形石器	完形	長；2.0 cm	巾；2.6 cm	厚；2.0 cm	外；赤色 10R4/8			チャートまたは玉髓
21	11	Ⅰ区3層	石器	剥片	完形	長；4.3 cm	巾；2.2 cm	厚；1.6 cm	外；暗オリーブ色 5Y4/4			珪質岩 玉作関連資料
29	1	Ⅰ区 SD07	弥生土器	甕	1/6以上	33.4 cm			外；灰白色 10YR8/1	2 mm以下 雲母 石英 長石 若干含む	良好	凹線文 頸部刻目突帯
29	2	Ⅰ区 SD07	土師器	甕	1/6以上	33.4 cm			外；浅黄色 2.5YR8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
29	3	Ⅰ区 SD07	土師器	甕	1/4以上	35.6 cm			外；浅黄橙色 10YR8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑（一部）
29	4	Ⅰ区 SD07	土師器	甕	小片	(16.3) cm			外；灰黄褐色 10YR6/2	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
29	5	Ⅰ区 SD07	土師器	甕	小片	(31.8) cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/4	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	
29	6	Ⅰ区 SD07	土師器	甕	1/4以上	16.8 cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/2	2 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；煤痕
29	7	Ⅰ区 SD07	土師器	土製支脚	1/4以上			8.0 cm	外；浅黄橙色 10YR8/3	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	
29	8	Ⅰ区 SD07・北溝	土師器	皿	1/4以上	13.4 cm	2.7 cm		外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；赤彩（一部） 内；赤彩（一部）
29	9	Ⅰ区 SD07	土師器	高坏	小片				外；浅黄橙色 10YR8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内；赤彩（一部）
29	10	Ⅰ区 SD07	須恵器	坏	ほぼ完形	12.3 cm	8.5 cm	4.9 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 若干含む	良好	
29	11	Ⅰ区 SD07	須恵器	坏	1/4以上	13.4 cm	8.4 cm	4.3 cm	外；明青灰色 5PB7/1	2 mm 長石 若干含む	良好	
29	12	Ⅰ区 SD07	須恵器	坏	1/2以上	14.3 cm	7.6 cm	4.4 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 長石 若干含む	良好	
29	13	Ⅰ区 SD07	須恵器	横瓶	小片	(13.0) cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	カキメ
29	14	Ⅰ区 SD07	須恵器	坏	小片	(11.6cm)			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	大谷5期前後
29	15	Ⅰ区 SD07	鉄器	刀子	1/4以上	長；(7.5) cm	巾；1.8cm	厚；0.45 cm				
29	16	Ⅰ区 SD07	鉄器	鎌	小片	長；(5.5) cm	巾；2.7 cm	厚；0.4 cm				
31	1	Ⅰ区 SE 4層	縄文土器	深鉢	小片				外；灰黄褐色 10YR5/2	3 mm以下 長石 白色粒子 多く含む	やや不良	縁帯文土器
31	2	Ⅰ区 NE 4層	弥生土器	底部	1/6以上			15.8 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/4	5 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	弥生前期
31	3	Ⅰ区 SE 4層	弥生土器	壺	小片				外；黄橙色 7.5YR8/8	3 mm以下 白色粒子 多く含む	良好	羽状文 弥生前期
31	4	Ⅰ区 NE 4層	弥生土器	壺	小片				外；灰白色 7.5YR8/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；黒斑
31	5	Ⅰ区 5層	弥生土器	底部	1/4以上			9.8 cm	外；黄橙色 7.5YR8/8	3 mm以下 石英 長石 多く含む	やや不良	弥生前期
31	6	Ⅰ区 NW 4層	弥生土器	甕	小片	(17.8) cm			外；灰白色 10YR8/2	4 mm以下 石英 長石 多く含む	やや不良	
31	7	Ⅰ区 NW 4層	弥生土器	甕	小片	(17.5) cm			外；浅黄橙色 10YR8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；凹線文
31	8	Ⅰ区 NE 4層	弥生土器	甕	1/6以上	23.7 cm			外；灰白色 7.5YR8/1	1 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	外；凹線文
31	9	Ⅰ区 SE 4層	弥生土器	甕	1/2以上	15.2 cm			外；明灰褐色 5YR7/2	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	外；煤痕（一部）
31	10	Ⅰ区4層	弥生土器	高坏	1/4以上			10.6 cm	外；灰白色 7.5YR8/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む		凹線文・沈線文 刺突文
31	11	Ⅰ区 NW 4層	弥生土器	把手	小片				外；浅黄色 2.5YR5/3	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	
31	12	Ⅰ区 NW 4層	土師器	甕	小片	(17.7) cm			外；明褐灰色 5YR7/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
31	13	Ⅰ区 NW 4層	土師器	甕	1/4以上	14.7 cm			外；にぶい橙色 5YR7/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑一部
31	14	Ⅰ区 SW 4層	土師器	高坏					外；橙色 5YR7/6	精良	やや不良	胎土；大東A類
31	15	Ⅰ区 SE 4層	土師器	高坏	1/6以上			11.6 cm	外；浅黄橙色 10YR8/4	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東B類？
31	16	Ⅰ区 SE 4層	弥生土器？	壺	小片	(12.8) cm			外；灰白色 10YR8/1	3 mm以下 石英 長石 多く含む	やや不良	
31	17	Ⅰ区 SE 4層	石製品	有孔円盤	完形	長；3.1 cm	巾；3.1 cm	厚さ；0.45 cm	外；暗青灰色 5YB4/1			全面研磨 絹雲母製
32	1	Ⅰ区	土師器	高坏	坏 1/4 以上	19.0 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東B類
32	2	Ⅰ区 壁	土師質土器	坏	底完形			6.2 cm	外；黄橙色 7.5YR8/8	精良	やや不良	
32	3	Ⅰ区 壁	土師質土器	坏	底完形			5.4 cm	外；浅黄橙色 10YR8/4	精良		
32	4	南溝	土師質土器	皿	ほぼ完形	8.2 cm	5.1 cm	2.8 cm	外；にぶい橙色 5YR7/4	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	赤褐色粒子含む マーブル状胎土
32	5	注記なし	土師質土器	坏？	底 1/2 以上			4.6 cm	外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
32	6	Ⅰ区 壁	土師質土器	坏	1/2以上			7.4 cm	外；淡黄色 2.5Y8/3	精良	やや不良	
32	7	Ⅰ区表土 掘削時	白磁	椀	1/6以上			(6.4) cm	外；灰白色 7.5YR8/2	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	外；釉（一部） 内；釉（全体）
32	8	Ⅰ区 表土掘削時	白磁	椀	1/6以上	15.5 cm			外；灰白色 7.5YR8/2	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外面釉 太宰府分類Ⅳ類
32	9	Ⅰ区 東溝	白磁	椀	小片	(16.0) cm			外；灰白色 2.5Y8/1	精良	良好	内外面釉 太宰府分類Ⅳ類
32	10	Ⅰ区表土 掘削時	白磁	椀	小片	(13.6) cm			外；灰白色 5Y8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む		内外面釉 太宰府分類 Ⅱ-1a類
35	1	Ⅱ区 J10 2層	土製品	土製支脚	1/2以上		16.1 cm		外；淡黄色 2.5Y7/4	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	
35	2	Ⅱ区 J10 2層	土師器	甕	1/4以上	19.5 cm			外；明褐灰色 7.5YR7/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕 内；煤痕
35	3	Ⅱ区 J10 2層	土師器	甕	小片	(14.9) cm			外；灰白色 7.5Y8/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
35	4	Ⅱ区 J10 2層	土師器	土製支脚					外；淡黄色 2.5Y8/4	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	
40	1	Ⅱ区 SK05	弥生土器	壺	底完形			8.9 cm	外；灰白色 5Y8/2	5 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	外；黒斑（一部） 黒色付着物
43	1	Ⅱ区 SD09	弥生土器	甕	1/6以上	18.0 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	3 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	凹線文・刺突文 外；煤痕（全体）
43	2	Ⅱ区 SD09	弥生土器	甕	小片	(18.0) cm			外；灰白色 2.5Y7/1	2 mm以下 雲母 石英 長石 やや多く含む	良好	凹線文・刺突文 外；煤痕（一部）
43	3	Ⅱ区 SD10 1層	弥生土器	壺	1/6以上	11.6 cm			外；灰白色 N	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	口縁部蓋綴孔あり
48	1	Ⅱ区 SR02	土師器	甕	小片	(32.0) cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
48	2	Ⅱ区 SR02	土師器	甕	小片 1/6以下	(30.0) cm			外；にぶい黄色 10YR7/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
48	3	Ⅱ区 SR02	土師器	高坏	1/4以上			10.3 cm	外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；一部赤彩
48	4	Ⅱ区 SR02	土師器	高坏	底 1/2 以上			8.8 cm	外；淡黄色 2.5Y8/4	1 mm以下 石英 長石 若干含む	やや不良	外；赤彩（一部） 内；赤彩（一部）
48	5	Ⅱ区 SR02	土師器	高坏	1/2以上	16.4 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；赤彩（全体） 内；赤彩（全体）
48	6	Ⅱ区 SR02	土師器	高坏	1/4以上			8.4 cm	外；淡黄色 2.5Y6/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
48	7	Ⅱ区 SR02	土師器	高坏	1/4以上			10.5 cm	外；にぶい黄橙色 10YR7/2	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
48	8	Ⅱ区 SR02	土製品	手捏ね土器	ほぼ完形	5.4 cm	5.0 cm	4.0 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/6	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	外；黒斑
48	9	Ⅱ区 L10 3層	須恵器	蓋	1/6以上	14.7 cm			外；明青灰色 5PB7/1	精良	やや不良	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
48	10	Ⅱ区 SR02	須恵器	坏身	ほぼ完形	12.1 cm	5.6 cm		外；灰白色 7.5Y8/1	2 mm以下 石英 長石 微量含む	やや不良	大谷2期
48	11	Ⅱ区 SR02	土師器	坏	小片	(14.0) cm			外；灰白色 2.5YR7/1	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；赤彩（全体） 内；赤彩（全体）
48	12	Ⅱ区 SR02 4層	土師器	坏	1/6 以上	14.3 cm			外；灰白色 10YR8/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
50	1	Ⅱ区 L10 3層	弥生土器	底部	1/6 以上			6.6 cm	外；灰白色 2.5Y8/2	5 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	弥生前期
50	2	Ⅱ区 K11 3層	土師器	甕	1/6 以上	19.5 cm			外；灰白色 2.5Y8/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
50	3	Ⅱ区 J10 3層	土師器	甕	1/4 以上	11.8 cm			外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕
50	4	Ⅱ区 K10 3層	土師器	甕	1/6 以上	18.4 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東B類
50	5	Ⅱ区 K10 3層	土師器	小形丸底壺	1/2 以上	8.6 cm	8.2 cm		外；灰白色 7.5YR8/1	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
50	6	Ⅱ区 K10 3層	土師器	甕	小片	(20.5) cm			外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕（一部） 胎土；大東Ｂ類
50	7	Ⅱ区 K10 3層	土師器	甑把手	小片				外；淡黄色 2.5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
50	8	Ⅱ区 K10 3層	土師器	甑	小片	(27.4) cm			外；灰白色 10YR8/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑
50	9	Ⅱ区 L10,11 3層	土師器	高坏	1/4 以上				外；橙色 5YR7/6	精良	やや不良	胎土；大東A類
50	10	Ⅱ区 K10 3層	土師器	高坏	小片				外；淡黄色 2.5Y7/4	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
50	11	Ⅱ区 K11 3層	土師器	高坏	小片				外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；赤彩（全体）
50	12	Ⅱ区 L10 3層	土師器	坏	小片	(10.6) cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；赤彩（一部） 内；赤彩（一部）
50	13	Ⅱ区 L10 3層	土師器	高坏	小片				外；灰白色 7.5YR8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；赤彩（全体） 内；赤彩（一部） 胎土；小谷式的
50	14	Ⅱ区 J10 3層	須恵器	坏	1/6 以上	10.7 cm			外；明青灰色 5PB7/1	精良	良好	大谷1期
50	15	Ⅱ区 K10 3層	須恵器	坏	小片	(11.8) cm			外；明青灰色 5B7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
50	16	Ⅱ区 L10・11 3層	須恵器	坏	1/4 以上	11.8 cm	4.5 cm	4.5 cm	外；青灰色 5B6/1	2 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	大谷６期
50	17	Ⅱ区 K10 3層	須恵器	高坏	1/4 以上	14.7 cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 長石 若干含む	やや不良	2方向スカシ
50	18	Ⅱ区 L10・11 3層	須恵器	高坏	1/4 以上			9.7 cm	外；青灰色 5B6/1	精良	やや不良	4方向方形スカシ
51	1	Ⅲ区 K10 3層	土製品	土製支脚	1/2 以上				外；浅黄橙色 10YR8/4	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	外；煤痕（一部）
51	2	Ⅱ区 K10 3層	土製品	土製支脚	1/4 以上				外；灰黄色 2.5Y7/2	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	
51	3	Ⅱ区 K10 3層	土製品	土錘	1/2 以上	長；3.5 cm	径；2.0 × 1.6 cm		薄黄白色	微砂粒含む（含くされ砂粒）	良好	孔径；0.5 cm 重量；14.03 g
52	1	Ⅱ区 北溝 5層	縄文土器	深鉢	小片				外；浅黄橙色 7.5YR8/3	2 mm以下 長石 多く含む	やや不良	突帯文土器
52	2	Ⅱ区 K10 4層	弥生土器	甕	小片	(12.0) cm			外；灰白色 10YR8/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
52	3	Ⅱ区 K10 4層	土師器	甕	1/6 以上	22.0 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
52	4	Ⅱ区 K10 4層	土師器	高坏	1/4 以上	16.8 cm			外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；赤彩（一部）
52	5	Ⅱ区 K11 4層	土師器	高坏	小片				外；褐灰色 10YR6/1	1 mm以下 白色粒子 やや多く含む	良好	刺突痕 a
52	6	Ⅱ区 K10 4層	石器	砥石	1/2 以上	長；(6.1) cm 巾；5.0 cm 厚；3.9 cm						砂岩製粗砥 重量；133.0 g
53	1	Ⅱ区 北溝	縄文土器	深鉢	小片				外；灰白色 2.5Y8/2	3 mm以下 長石 白色粒子 やや多く含む	良好	突帯文土器 内外；煤痕（一部）
53	2	Ⅱ区 K10 ベルト	土師器	高坏	1/4 以上			8.8 cm	外；にぶい黄橙色 10YR7/2	精良	やや不良	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
53	3	Ⅱ区 東壁	土師器	甕	1/4 以上	14.8 cm			外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕（一部）
53	4	Ⅱ区 東壁	土師質土器	坏	底 1/2 以上			5.2 cm	外；灰白色 2.5Y8/1	精良	やや不良	
53	5	Ⅱ区 北溝	土師質土器	坏	底完形			4.0 cm	外；灰白色 2.5Y8/1	精良	良好	
53	6	Ⅱ区 表土	須恵器	坏	1/4 以上			8.6 cm	外；青灰色 5B5/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
53	7	Ⅱ区 トレンチ 1	須恵器	蓋	小片	(18.4) cm			外；灰白色 7.5Y8/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	やや不良	
53	8	Ⅱ区 南壁	土師器	甑把手	小片				外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
53	9	Ⅱ区 北溝	土製品	土錘	完形	長；8.0 cm	巾；2.5 cm	厚；2.7 cm	外；浅黄色 2.5Y7/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	重量；50.62g
61	1	Ⅲ区 SD17	須恵器	蓋	1/2 以上	12.0 cm	4.0 cm		外；青灰色 5PB6/1	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒色付着物 大谷5期
61	2	Ⅲ区 SD18	土師器	高坏	小片				外；灰黄色 2.5Y7/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
61	3	Ⅲ区 SD18	土師器	甕	小片				外；浅黄橙色 7.5YR8/4	2 mm以下 石英 長石 若干含む	やや不良	胎土；赤褐色粒子を含む大東B類
61	4	Ⅲ区 SD18	土師質土器	坏	小片			(6.0) cm	外；橙色 5YR7/6	精良 茶褐色粒子 多く含む	良好	
61	5	Ⅲ区 SD21	土師器	甕	1/6 以上	15.1 cm			外；淡黄色 2.5Y8/4	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
61	6	Ⅲ区 SD21	白磁	椀	底 1/4 以上			7.6 cm	外；灰白色 2.5GY8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉（一部） 太宰府分類Ⅳ類
61	7	Ⅲ区 SD21	土師質土器	坏	小片				外；浅黄色 2.5Y7/3	1 mm以下 石英 若干含む	良好	
61	8	Ⅲ区 SD21	土師質土器	坏？	底 1/4 以上			5.6 cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/4	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 微量含む	良好	
61	10	Ⅲ区 SD24	陶磁器	鉢	小片	(27.8) cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	東播系須恵器
61	11	Ⅲ区 SD24	土師質土器	坏	底 1/2 以上			6.1 cm	外；灰白色 7.5YR8/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む		
61	12	Ⅲ区 SD24	土師器	甕	1/6 以上	20.4 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕（一部）
61	13	Ⅲ区 SD26	弥生土器	甕	1/6 以上	16.0 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	擬凹線文（貝）ナデ消し 外；煤痕（一部）
61	14	Ⅲ区 SD26	須恵器	坏	底 1/6 以上			9.4 cm	外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
66	1	Ⅲ区 SX02 貝層	須恵器	甕	1/6 以上				外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	沈線間刺突文
66	2	Ⅲ区 SX02	製塩土器	製塩土器	小片	(10.0) cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
66	3	Ⅲ区 SX02 1 層	土師質土器	坏・皿	底 1/2 以上			6.8 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	底部焼成前穿孔
66	4	Ⅲ区 SX02 貝層 トレンチ	土師質土器	坏	底 1/2 以上			5.2 cm	外；橙色 5YR7/6	精良	良好	外；黒色付着物
66	5	Ⅲ区 SX02	土師質土器	坏	1/4 以上	15.2 cm	4.0 cm	6.4 cm	外；にぶい黄橙色 10YR7/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；黒斑（一部） 内；煤痕（一部）
66	6	Ⅲ区 SX02	土師質土器	坏	底 1/2 以上	12.8 cm		6.6 cm	外；浅黄橙色 10YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
66	7	Ⅲ区 SX02	土師質土器	坏	底ほぼ 完形	14.1 cm	5.0 cm	7.4 cm	外；淡黄色 2.5Y8/4	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
66	8	Ⅲ区 SX02 H7	土師質土器	坏	底完形			4.5 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 黒色粒子 茶色粒子 若干含む	良好	
66	9	Ⅲ区 SX02	土師質土器	坏	ほぼ完形	9.1 cm	3.3 cm	4.6 cm	外；黄橙色 7.5YR7/8	2 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内；黒斑（一部）
66	10	Ⅲ区 SX02	土師質土器	皿	1/6 以上	8.1 cm	1.8 cm	4.3 cm	外；黄橙色 7.5YR7/8	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
66	11	Ⅲ区 SX02	土師質土器	皿	完形	9.2 cm	2.0 cm	5.0 cm	外；浅黄橙色 10YR8/4	3 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑（一部） 内；黒斑（一部）
66	12	Ⅲ区 SX02	土師質土器	皿	完形	9.1 cm	1.7 cm	3.7 cm	外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 微量含む		

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
66	13	Ⅲ区 SX02	土師質土器	高台付坏	底 1/2 以上			4.9 cm	外；浅黄橙色 10YR8/3	精良	良好	
66	14	Ⅲ区 SX02	土師質土器	高台付坏	底完形			4.4 cm	外；黄橙色 10YR8/6	2 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
66	15	Ⅲ区 SX02	陶磁器	鉢	小片				外；明青灰色 5PB7/1	2 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	東濃系須恵器
66	16	Ⅲ区 SX02 ベルト	白磁	椀	小片				外；灰白色 5GY8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	花弁文 内外；釉 太宰府分類XII類
66	17	Ⅲ区 SX02 KA	白磁	椀・皿	小片				外；明緑灰色 7.5GY7/1	黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉
66	18	Ⅲ区 SX02	白磁	椀	小片				外；明オリーブ灰 5GY7/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉
66	19	Ⅲ区 貝層上	白磁	椀	1/6 以上	15.4 cm			外；明緑灰色 7.5GY8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉 太宰府分類Ⅳ類
66	20	Ⅲ区 SX02 1層	白磁	椀	底 1/4 以上			7.2 cm	外；明オリーブ灰 5GY7/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	外；釉（底部以外） 内；釉（全体） 太宰府分類Ⅳ類
66	21	Ⅲ区 SX02 1層	白磁	椀	底完形			7.2 cm	外；明オリーブ灰 5GY7/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	外；釉（底部以外） 内；釉（全体） 太宰府分類Ⅳ類
66	22	Ⅲ区 SX02	土製品	土錘	完形	長；5.9 cm	巾；1.85 cm	厚；1.85 cm	外；灰白色 10YR8/1	石英 長石 やや多く 含む	良好	重量；14.87g
66	23	Ⅲ区 SX02 貝層 トレンチ	土製品	土錘	完形	長；5.25 cm	巾；1.8 cm	厚；1.7 cm	外；にぶい黄橙色 10YR7/2	石英 長石 やや多く 含む	良好	重量；14.27g
66	24	Ⅲ区 SX02	鉄器	刀子？	1/2 以上	長；(6.0) cm	巾；0.8 cm	厚；0.4 cm				
66	25	Ⅳ区 SX02 貝層	鉄器	釘	1/2 以上	長；(2.9) cm	巾；0.8 cm	厚；0.4 cm				
73	1	Ⅲ区 SB05 Pit195	須恵器	蓋	1/6 以上	17.8 cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
73	2	Ⅲ区 SB06 Pit405	須恵器	坏	底完形	10.3 cm	4.5 cm	7.3 cm	外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 微量含む	良好	
73	3	Ⅲ区 SB06 Pit350	須恵器	坏	1/6 以上	15.6 cm			外；にぶい橙色 7.5YR7/3	1 mm以下 石英 長石 微量含む	不良 酸化焼成	
73	4	Ⅲ区 SB06 Pit321	須恵器	坏	1/4 以上			7.9 cm	外；青灰色 5B7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
73	5	Ⅲ区 SB06 Pit321	須恵器	皿	1/6 以上	14.7 cm			外；灰白色 2.5GY8/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	やや不良 酸化焼成	
73	6	Ⅲ区 SB06 Pit327	須恵器	坏	1/6 以上	12.0 cm			外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
73	7	Ⅲ区 SB06 Pit361	須恵器	皿・盤	底 1/2 以上			14.0 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
73	8	Ⅲ区 SB06 Pit361	須恵器	坏	1/6 以上			9.6 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
73	9	Ⅲ区 Pit321	土師器	皿	小片	(15.8) cm	2.4 cm	(12.2) cm	外；にぶい橙 7.5YR7/3	1 mm以下 石英 長石 微量含む	やや不良	
73	10	Ⅲ区 SB07 Pit409	土師器	皿	1/6 以上	12.0 cm	2.5 cm	8.0 cm	外；灰白色 7.5YR8/2	1 mm 白色粒子 微量含む	やや不良	内外面赤彩？
73	11	Ⅲ区 SB08 Pit357	土師器	皿	小片	(14.8) cm	3.4 cm	(10.5) cm	外；明褐灰色 7.5YR7/1	1 mm 石英 長石 若干含む	やや不良	外；赤彩（一部） 内；赤彩（一部）
73	12	Ⅲ区 SB08 Pit357	須恵器	皿・盤	底 1/6 以上			14.0 cm	外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；火襷（一部） 内；火襷（一部）
80	1	Ⅲ区 Pit324	土師器	壺	ほぼ完形	12.4 cm	15.0 cm		外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑（一部） 胎土；大東B類
80	2	Ⅲ区 J4 P292	土師器	甑把手	小片				外；灰白色 19YR8/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
80	3	Ⅲ区 Pit384	土師器	坏	1/6 以上	15.0 cm			外；明褐灰色 7.5YR7/1	1 mm 雲母 白色粒子 微量含む	不良	赤彩？
80	4	Ⅲ区 Pit462	土師質土器	皿	1/4 以上	10.6 cm	2.2 cm	8.6 cm	外；褐灰色 7.5YR4/1	精良	良好	外；煤痕（一部） 内；煤痕・黒色付 着物
80	5	Ⅲ区 Pit920	須恵器	把手	小片				外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 若干含む	良好	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
80	6	Ⅲ区 Pit501	土師質土器	坏	底完形			3.9 cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/4	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
80	7	Ⅲ区 Pit620	土師器	皿	小片	(16.8) cm	3.1 cm	(12.2) cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/3	1 mm以下 石英 長石 微量含む	不良 酸化焼成	内；煤痕（一部）
80	8	Ⅲ区 Pit555	土師器	皿	1/6 以上	15.6 cm	2.0 cm	11.3 cm	外；褐灰色 7.5YR6/1	1 mm 雲母 白色粒子 微量含む	酸化焼成	内外；赤彩（一部）
80	9	Ⅲ区 Pit199	須恵器	短頸壺	小片	(10.0) cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
80	10	Ⅲ区 Pit508	須恵器	蓋	1/4 以上	14.4 cm	2.8 cm		外；灰白色 5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	不良 酸化焼成	
80	11	Ⅲ区 Pit328	須恵器	蓋	小片				外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
80	12	Ⅲ区 Pit372	須恵器	蓋	1/6 以上	15.2 cm			外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
80	13	Ⅲ区 Pit335	須恵器	蓋	1/4 以上	13.8 cm			外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
80	14	Ⅲ区 Pit394	須恵器	蓋	小片				外；明青灰色 5PB7/1	2 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
80	15	Ⅲ区 Pit335	須恵器	蓋	1/6 以上	14.0 cm			外；明青灰色 5B7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
80	16	Ⅲ区 Pit283	須恵器	蓋	1/6 以上	14.0 cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 微量含む	良好	
80	17	Ⅲ区 Pit525	須恵器	坏	小片			(14.0) cm	外；明褐灰色 7.5YR7/2	1 mm以下 石英 長石 微量含む	不良 酸化焼成	
80	18	Ⅲ区 Pit404	須恵器	坏	1/6 以上	12.4 cm			外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 石英 白色粒子 微量含む	やや不良	
80	19	Ⅲ区 Pit426	須恵器	高坏	小片				外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
80	20	Ⅲ区 P314	石器	砥石	完形	長；6.6 cm	巾；5.7 cm	厚；2.6 cm	外；灰色 7.5Y4/1			砂岩製 重量 190.42 g
84	1	Ⅲ区 加工段 2 1 層	縄文土器	深鉢	小片	(29.1) cm			外；灰白色 2.5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 白色粒子 やや多く含む	良好	内外；煤痕 突帯文土器
84	2	Ⅲ区 加工段 2	土師器	甕	1/2 以上	15.4 cm			外；浅黄橙色 10YR8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；赤褐色粒子を含む大東B類
84	3	Ⅲ区 加工段 2	土師器	甕	胴 1/4 以上	16.6 cm			外；灰白色 2.5Y8/2 内；にぶい黄橙色 10YR7/4	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	外；黒斑・ 煤痕 内；煤痕（一部） 胎土；小谷式的
84	4	Ⅲ区 加工段 2	土師器	甕	1/4 以上	14.0 cm			外;にぶい黄橙色 7.5YR7/4	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	胎土；大東B類？
84	5	Ⅲ区 加工段 2	土師器	甕	1/6 以上	(16.0) cm			外；灰白色 5Y8/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土：小谷式的
84	6	Ⅲ区 加工段 2	土師器	甕	1/6 以上	17.2 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕 胎土；小谷式的
84	7	Ⅲ区 加工段 2	土師器	壺	頸部完形	15.2 cm			外；灰白色 10YR8/1	2 mm以下 雲母 石英 長石 若干含む	良好	胎土；赤褐色粒子を含むが小谷式的
84	8	Ⅲ区 加工段 2	土師器	甕	口縁部 完形	22.3 cm			外；灰白色 2.5Y8/1	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	内外面；煤痕 胎土；小谷式的
84	9	Ⅲ区 加工段 2	土師器	壺	1/4 以上	18.8 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
84	10	Ⅲ区 加工段 2	土師器	小形丸底壺	1/6 以上	10.0 cm	12.5 cm		外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；黒斑 色調は小谷式的だが胎土は大東A類
84	11	Ⅲ区 加工段 2	土師器	壺	1/4 以上	12.8 cm			外；淡黄色 5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	内；煤痕？（一部） 胎土；小谷式的
84	12	Ⅲ区 加工段 2	土師器	坏	1/6 以上	(12.8) cm	3.8 cm	(9.2) cm	外；淡黄色 2.5Y8/3 内；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；黒斑
84	13	Ⅲ区 加工段 2	土製品	坏	1/4 以上	8.4 cm	3.3 cm		外；灰白色 2.5Y8/2 内；にぶい黄橙色 10YR7/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；黒斑 胎土；赤褐色粒子はないが大東A類的
85	1	Ⅲ区 加工段 2	土師器	高坏	1/2 以上	18.0 cm			外；橙色 5YR7/8 内；同	2 mm以下 石英 白色粒子 多く含む	良好	外；黒斑（一部） 胎土；大東E類
85	2	Ⅲ区 加工段 2	土師器	高坏	1/4 以上			11.2 cm	外；灰白色 7.5Y8/2	1 mm以下 石英 白色粒子若干含む	やや不良	胎土；小谷式的
85	3	Ⅲ区 加工段 2	土師器	高坏	底完形	15.8 cm	11.8 cm	10.8 cm	外；明褐灰色 7.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む		外；赤彩（一部） 内；赤彩（全体）
85	4	Ⅲ区 加工段 2 H5 2 層	土師器	高坏	1/6 以上	16.0 cm			外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 若干含む	良好	内；煤痕（一部） 胎土；小谷式的

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
85	5	Ⅲ区 加工段２	土師器	高坏	小片				外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1㎜以下 白色粒子 若干含む	良好	胎土；大東B類
85	6	Ⅲ区 加工段２	土師器	高坏	底 1/6 以上			10.2 ㎝	外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1㎜以下 石英 長石 若干含む	良好	内；黒斑（一部） 胎土；小谷式的
85	7	Ⅲ区 加工段２ H5 ２層	土師器	低脚坏	底完形			5.7 ㎝	外；灰白色 2.5Y8/2	1㎜以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
88	1	Ⅲ区 加工段4	土師器	甕	胴 1/4 以上	15.0 ㎝			外；浅黄橙色 10YR8/3	2㎜以下 白色粒子 若干含む	良好	外；煤痕（一部） 胎土；大東B類
88	2	Ⅲ区 加工段4	土師器	甕	1/6 以上	12.0 ㎝			外；灰色 10YR8/7 内；灰色 10YR8/7	2㎜以下 白色粒子 若干含む	良好	胎土；大東B類
88	3	Ⅲ区 加工段4	土師器	甕	1/6 以上	13.6 ㎝			外；橙色 2.5YR6/8	3㎜以下 長石 若干含む	良好	外；黒斑（一部） 胎土；大東A類
88	4	Ⅲ区 加工段4	土師器	甕	1/2 以上	17.6 ㎝			外；淡黄色 2.5Y8/3	2㎜以下 石英 白色 粒子 多く含む	良好	外；煤痕（一部） 焼成後穿孔 胎土；大東B類
88	5	Ⅲ区 加工段4	土師器	甕	1/4 以上	16.8 ㎝			外；にぶい黄橙色 10YR7/2	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	内外；煤痕
88	6	Ⅲ区 加工段3	土師器	小形丸底壺	1/4 以上	6.8 ㎝	9.7 ㎝		外；灰白色 10YR8/2	1㎜以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑（一部） 胎土；大東B類
88	7	Ⅲ区 加工段4	土師器	甕	1/2 以上	(15.8) ㎝			外；灰白色 2.5Y8/1	1㎜以下 白色粒子 若干含む	良好	胎土；小谷式的
88	8	Ⅲ区 加工段4	土師器	壺	1/6 以上	15.6 ㎝			外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1㎜以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東B類
88	9	Ⅲ区 加工段4	土師器	壺	1/6 以上	12.2 ㎝			外；淡黄色 2.5Y8/3 内；灰白色 2.5Y8/2	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	外；煤痕（一部）
89	1	Ⅲ区 加工段4	土師器	高坏	1/4 以上	20.0 ㎝			外；橙色 5YR7/6 内；浅黄橙色 7.5YR8/3	2㎜以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；大東B類
89	2	Ⅲ区 加工段4	土師器	高坏	1/6 以上	19.0 ㎝			外；橙色 7.5YR7/6	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	胎土；大東B類
89	3	Ⅲ区 加工段4	土師器	高坏	坏段部 1/2 以上	18.2 ㎝			外；灰黄色 2.5Y7/2 内；淡黄色 5Y8/3	1㎜以下 石英 長石 若干含む	良好	
89	4	Ⅲ区 加工段4	土師器	高坏	1/6 以上			16.4 ㎝	外；浅黄橙色 7.5YR8/4 内；浅黄橙色 7.5YR8/3	1㎜以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；大東B類
89	5	Ⅲ区 加工段4	土師器	高坏	1/2 以上			12.0 ㎝	外；浅黄橙色 7.5YR8/3 内；浅黄橙色 7.5YR8/4	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	円形スカシ３ 胎土；大東A類
89	6	Ⅲ区 加工段4	土師器	高坏	1/2 以上			15.4 ㎝	外；浅黄橙色 7.5YR8/3 内；浅黄橙色 7.5YR8/4	1㎜以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；大東B類
91	1	Ⅲ区 SK07	須恵器	蓋	小片				外；明青灰色 5B7/1	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	宝珠つまみ
91	2	Ⅲ区 SK07	土師器	甕	1/2 以上	31.4 ㎝			外；灰白色 2.5Y8/2	3㎜以下 長石 やや多く含む	良好	
91	3	Ⅲ区 SK12	弥生土器	甕	小片	(12.8) ㎝			外；灰白色 5Y8/1	2㎜以下 石英 長石 若干含む	良好	
91	4	Ⅲ区 SK12	白磁	椀	1/6 以上	16.0 ㎝			外；灰白色 10Y8/1	1㎜以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉 太宰府分類Ⅳ類
91	5	Ⅲ区 SK12	土師質土器	坏	1/4 以上	14.0 ㎝	4.2 ㎝	4.8 ㎝	外；灰黄色 2.5Y6/2	1㎜以下 雲母 石英 長石 若干含む	良好	内；煤痕（一部）
91	6	Ⅲ区 SK10	土師器	甑・甕	1/4 以上	27.4 ㎝			外；灰白色 2.5Y8/2	1㎜以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；煤痕（全体）
98	1	Ⅲ区 SK14	弥生土器	壺	小片				外；灰白色 2.5Y8/1	2㎜以下 雲母 石英 長石 若干含む	良好	外；羽状文 ノ字刺突文
98	2	Ⅲ区 SK14	木製品 (容器)	刳物桶	1/4 以上 長；31.0 ㎝ 巾；24.5 ㎝ 厚；3.7 ㎝							スギ材
105	1	Ⅲ区 SD11	土師器	甕	1/2 以上	(12.2) ㎝	15.0 ㎝		外；灰白色 2.5Y8/2	1㎜以下 石英 長石 若干含む	良好	
105	2	Ⅲ区 SD11	須恵器	坏	1/4 以上	14.6 ㎝			外；青灰色 5PB6/1	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	
105	3	Ⅲ区 SD11	須恵器	高台付坏	1/4 以上	15.0 ㎝	7.1 ㎝	9.0 ㎝	外；青灰色 5PB6/1	1㎜以下 白色粒子 若干含む	良好	
105	4	Ⅲ区 SD11	須恵器	蓋	1/6 以上	13.8 ㎝	2.2 ㎝		外；青灰色 5PB6/1	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	
108	1	Ⅲ区 SD15	土師器	坏	1/4 以上	14.7 ㎝	3.1 ㎝	10.0 ㎝	外；灰白色 7.5YR8/2	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	外；赤彩（全体） 内；赤彩（全体）
108	2	Ⅲ区 SD15	土師器	甕	1/6 以上	21.2 ㎝			外；淡黄色 2.5Y7/3	2㎜以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；煤痕（一部）

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
108	3	Ⅲ区 SD15	土師器	甕	1/6 以上	19.6 cm			外；灰黄色 2.5Y7/2	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	
108	4	Ⅲ区 SD15	土師器	甕	1/6 以上	33.4 cm			外；灰黄色 2.5Y8/4	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	
108	5	Ⅲ区 SD15	土師器	甕	1/6 以上	42.6 cm			外；淡黄色 2.5Y8/4	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	
108	6	Ⅲ区 SD15	須恵器	蓋	ほぼ完形	14.0 cm	2.2 cm		外；青灰色 5PB6/1	2 mm以下 長石 白色 粒子 若干含む	良好	墨書「中」
108	7	Ⅲ区 SD15	須恵器	蓋	1/4 以上	16.2 cm	2.1 cm		外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
108	8	Ⅲ区 SD15	須恵器	坏	底 1/2 以上	14.2 cm	4.6 cm	11.2 cm	外；淡黄色 5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 微量含む	不良	
108	9	Ⅲ区 SD15	土師器	土製支脚	1/2 以上				外；淡黄色 2.5Y8/4	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	黒斑
116	1	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/6 以上	22.3 cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/2	2 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	外；煤痕（一部） 胎土；大東B類
116	2	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/6 以上	14.6 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
116	3	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/2 以上	18.4 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	内外；煤痕（一部） 胎土；小谷式に近い
116	4	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/2 以上	14.4 cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/2	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	内；煤痕（一部） 胎土；小谷式的
116	5	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/6 以上	17.0 cm			外；灰色 2.5Y8/2 内；灰色 2.5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
116	6	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/4 以上	15.6 cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
116	7	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/2 以上	18.4 cm	30.0 cm		外；灰白色 2.5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；煤痕・黒斑 内；煤痕 胎土；小谷式的
116	8	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/6 以上	14.8 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；煤痕（一部） 内；煤痕（一部）
116	9	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/4 以上	12.4 cm			外；淡黄色 2.5YR8/3 内；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 白色 粒子若干含む	良好	肩部沈線 胎土；小谷式的
116	10	Ⅲ区 土器だまり	土師器	小形丸底壺	1/6 以上	8.4 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3 内；同	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	胎土；小谷式的
116	11	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/4 以上	15.0 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/6 内；橙色 5YR7/6	2 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；煤痕（一部） 胎土；大東A類
117	1	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	頸 1/4 以上	24.0 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/3 内；灰白色 10YR8/2	2 mm以下 石英 白色 粒子 微量含む	良好	胎土；大東B類
117	2	Ⅲ区 土器だまり	土師器	小形丸底壺	ほぼ完形	9.0 cm	8.7 cm		外；浅黄橙色 7.5YR8/6 内；浅黄橙色 10YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む		外；赤彩？ 胎土；大東A類
117	3	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	口縁 ほぼ完形	15.4 cm			外；浅黄橙色 10YR8/3 内；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕（一部） 胎土；小谷式的
117	4	Ⅲ区 土器だまり	土師器	甕	1/2 以上	13.0 cm			外；橙色 5YR7/8 内；同	1 mm以下 石英 長石 白色粒子 微量含む	良好	外；黒斑 胎土；大東A類
117	5	Ⅲ区 土器だまり	土師器	直口壺	1/6 以上	11.4 cm			外；橙色 5YR6/8 内；同	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；煤痕？ 胎土；大東B類
117	6	Ⅲ区 土器だまり	土師器	坏	小片	(11.4) cm			外；灰白色 2.5Y8/2 内；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 若干含む	良好	外；黒斑
117	7	Ⅲ区 土器だまり	土師器	坏	1/2 以上	12.6 cm	5.4 cm	約 3.0 cm	外；灰白色 2.5Y8/2 内；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
117	8	Ⅲ区 土器だまり	土師器	低脚坏	小片			(3.5) cm	外；灰白色 2.5Y8/2 内；同	1 mm以下 石英 白色 粒子若干含む	良好	胎土；小谷式的
118	1	Ⅲ区 土器だまり	土師器	高坏	1/4 以上	19.0 cm	13.1 cm	10.6 cm	外；灰色 2.5YR8/2 内；同	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	内；黒斑 胎土；小谷式的
118	2	Ⅲ区 土器だまり	土師器	高坏	1/2 以上	15.8 cm	10.2 cm	11.2 cm	外；橙色 2.5YR7/6 内；同	1 mm以下 石英 白色 粒子 若干含む	良好	内外；黒斑 胎土；大東B類？
118	3	Ⅲ区 土器だまり	土師器	高坏	1/6 以上	18.0 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/4 内；にぶい橙色 7.5YR7/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内外；黒斑？ 胎土；大東B類
118	4	Ⅲ区 土器だまり	土師器	高坏	1/2 以上	16.4 cm			外；黄橙色 7.5YR7/8	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東A類 (砂粒やや多)
118	5	Ⅲ区 土器だまり	土師器	高坏					外；橙色 5YR7/8 内；同	2 mm以下 石英 白色 粒子若干含む	良好	胎土；大東B類
118	6	Ⅲ区 土器だまり	土師器	高坏	小片	(19.0) cm			外；淡黄色 2.5Y8/3 内；同	1 mm以下 石英 若干含む	良好	刺突痕 a 胎土；小谷式的

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
118	7	Ⅲ区 土器だまり	土師器	高坏（脚部）	小片			(11.0) cm	外；橙色 5YR6/8 内；同	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	胎土；大東A類
118	8	Ⅲ区 土器だまり	土師器	高坏					外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 白色粒子 若干含む	良好	胎土；小谷式的
118	9	Ⅲ区 土器だまり	土師器	高坏	1/6 以上			10.2 cm	外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
122	1	Ⅲ区 SR03 G4	縄文土器	深鉢	小片				外；灰黄色 2.5Y7/2	3 mm以下 雲母 石英 長石 多く含む	不良	突帯文土器
122	2	Ⅲ区 SR03	縄文土器	深鉢	小片				外；灰黄色 2.5Y6/2	石英 長石 多く含む	不良	突帯文土器
122	3	Ⅲ区 SR03 G4	縄文土器	深鉢	小片				外；灰白色 2.5Y7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；煤痕（全体） 突帯文土器
122	4	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	ほぼ完形	6.2 cm	6.3 cm		外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
122	5	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	胴 1/4 以上				外；橙色 7.5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
122	6	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	完形	7.9 cm	10.3 cm		外；にぶい橙色 5YR7/4	1 mm以下 石英 長石 若干含む		胎土；小谷式的
122	7	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	ほぼ完形	8.3 cm	9.3 cm		外；浅黄橙色 7.5YR8/4	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	内外；黒斑 胎土；小谷式的
122	8	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	ほぼ完形	9.5 cm	9.0 cm		外；にぶい橙色 5YR7/4	2 mm以下 白色粒子 多く含む	良好	胎土；小谷式的
122	9	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	1/4 以上	8.4 cm	8.3 cm		外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東B類
122	10	Ⅲ区 SR03 G5	土師器	小形丸底壺	1/2 以上	6.6 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東A類
122	11	Ⅲ区 SR03 G6	土師器	小形丸底壺	ほぼ完形	8.3 cm			外；黄橙色 7.5YR7/8	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；大東A類
122	12	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	ほぼ完形	8.7 cm	8.9 cm		外；灰白色 10Y8/2	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；大東B類
122	13	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	1/6 以上	9.1 cm	8.0 cm		外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む		外；黒斑 胎土；大東A類
122	14	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	胴 1/2 以上	8.3 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；大東A類
122	15	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	胴 1/2 以上	8.6 cm	11.0 cm		外；浅黄橙色 7.5YR5/4	3 mm以下 長石 石英 若干含む	良好	焼成後穿孔 胎土；小谷式的
122	16	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	1/2 以上	10.0 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；大東A類
122	17	Ⅲ区 SR03 G5	土師器	小形丸底壺	1/2 以上	8.8 cm	7.8 cm		外；浅黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；大東A類
122	18	Ⅲ区 SR03	土師器	小形丸底壺	1/2 以上				外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東A類
122	19	Ⅲ区 SR03 G5	土師器	小形丸底壺	1/2 以上	9.4 cm			外；橙色 5YR7/8	精良	良好	胎土；大東A類
122	20	Ⅲ区 SR03 F4	土師器	壺	1/6 以上	9.6 cm			外；橙色 5YR7/6	石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東A類
122	21	Ⅲ区 SR03 H5	土師器	壺	1/6 以上	9.0 cm			外；橙色 7.5YR6/6	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	内外；煤痕 胎土；大東B類
122	22	Ⅲ区 SR03 F4	土師器	壺	1/6 以上	16.4 cm			外；淡黄色 5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	胎土；小谷式的
122	23	Ⅲ区 SR03	土師器	壺	1/6 以上	12.2 cm			外；黄灰色 2.5Y5/1 内；浅黄橙色 7.5YR8/5	3 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；黒斑 胎土；大東B類
122	24	Ⅲ区 SR03	土師器	壺	小片	(18.0) cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
123	1	Ⅲ区 SR03	土師器	壺	ほぼ完形	15.1 cm	18.7 cm		外；淡黄色 2.5Y8/4	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
123	2	Ⅲ区 SR03	土師器	壺	1/4 以上	14.4 cm			外；橙色 5YR6/0	1 mm以下 長石 やや多く含む	良好	胎土；大東B類
123	3	Ⅲ区 SR03 G5	土師器	壺	1/6 以上	13.4 cm			外；灰白色 7.5YR8/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む		外；煤痕？（一部） 胎土；小谷式的
123	4	Ⅲ区 SR03	土師器	壺	1/4 以上	21.8 cm			外；灰白色 2.5Y8/1	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
123	5	Ⅲ区 SR03	土師器	壺	1/6 以上	22.6 cm			外；灰黄色 2.5YR7/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；黒斑 胎土；小谷式的

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
123	6	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/6 以上	28.7 cm			外；灰黄色 2.5Y6/2	3 mm以下 雲母 長石 やや多く含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
123	7	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/6 以上	25.3 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
123	8	Ⅲ区 SR03 G4・G5・ F4	土師器	甕	1/6 以上	19.6 cm			外；橙色 5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的 被熱顕著
123	9	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	22.6 cm			外；にぶい橙色 7.5YR7/4	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕 胎土；大東B類
123	10	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	17.8 cm			外；浅黄色 2.5Y7/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕 胎土；小谷式的
124	1	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	頸 1/6 以上	25.0 cm			外；灰白色 2.5Y7/1	3 mm以下 白色微粒 微量含む	良好	内外；煤痕 胎土；大東B類
124	2	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	16.1 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；煤痕 胎土；小谷式的
124	3	Ⅲ区 SR03 G4	土師器	甕	1/2 以上	15.6 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；煤痕 胎土；小谷式的
124	4	Ⅲ区 SR03 G4	土師器	甕	1/2 以上	15.8 cm			外；淡赤橙色 2.5YR7/4	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；煤痕 胎土；小谷式的 被熱痕顕著
124	5	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	16.6 cm			外；灰白色 2.5Y7/1	1 mm以下 石英 長石 含む	良好	胎土；小谷式的
124	6	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	17.6 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；黒斑 胎土；小谷式的
124	7	Ⅲ区 SR03 G4	土師器	甕	胴 1/6 以上	17.2 cm			外；淡黄色 2.5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
124	8	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	小片	(14.8) cm			外；灰黄色 2.5Y7/2	1 mm以下 雲母 白色 粒子 微量含む	良好	外；煤痕 胎土；小谷式的
124	9	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	16.9 cm			外；淡黄 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む		胎土；小谷式的
124	10	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/2 以上	17.4 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/6 内；浅黄橙色 7.5YR8/6	2 mm以下 石英 白色 粒子 若干含む	良好	内外；煤痕 胎土；大東B類
124	11	Ⅲ区 SR03 G4	土師器	甕	1/2 以上	14.6 cm			外；橙色 5YR7/8	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	外；煤痕 胎土；大東A類
124	12	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/2 以上	16.2 cm			外；浅黄橙色 7.5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
124	13	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/6 以上	15.0 cm			外；淡黄 2.5Y8/4	1 mm以下 長石 若干含む	良好	
124	14	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	13.4 cm			外；橙色 2.5YR6/6	砂粒含まず精良	良好	胎土；大東A類
124	15	Ⅲ区 SR03	土師器	壺	1/4 以上	14.4 cm			外；灰黄 2.5Y7/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；煤痕 胎土；大東A類
125	1	Ⅲ区 SR03 G4・F4	土師器	甕	1/6 以上	16.6 cm			外；灰白色 2.5Y7/1	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	外；煤痕 胎土；小谷式的
125	2	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	16.0 cm			外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；煤痕 胎土；大東B類
125	3	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/2 以上	15.6 cm	21.5 cm		外；灰白色 5YR8/2	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；煤痕 胎土；小谷式的
125	4	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	19.8 cm			外；灰白色 5YR8/1	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；小谷式的
125	5	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	14.4 cm			外；灰白色 5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	外；煤痕 胎土；小谷式的
125	6	Ⅲ区 SR03	土師器	甕	1/4 以上	14.1 cm			外；淡黄 2.5YB8/3	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；煤痕
125	7	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	完形	24.2 cm	17.4 cm	14.6 cm	外；淡赤橙色 2.5YR7/4 内；淡赤橙色 2.5YR7/4	1 mm以下 石英 白色 粒子 若干含む	良好	内外；黒斑 胎土；大東B類 被熱痕顕著
125	8	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	小片	(19.4) cm			外；にぶい橙色 7.5YR7/4	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
125	9	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/6 以上	23.4 cm			外；橙色 5YR6/6 内；黒色 7.5YB2/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑、 内；黒色 胎土；大東B類 円盤充填
125	10	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/4 以上	15.2 cm	13.2 cm	9.8 cm	外；淡赤橙色 2.5YR7/4	3 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的 被熱痕顕著

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
125	11	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/4 以上	13.4 cm			外；橙色 5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 微量含む	やや不良	胎土；大東B類
125	12	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/6 以上	15.6 cm			外；橙色 5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	やや不良	胎土；大東B類
125	13	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	ほぼ完形	18.5 cm	13.5 cm	11.5 cm	外；橙色 5YR6/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内；黒斑 胎土；小谷式的
126	1	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	ほぼ完形	12.4 cm	12.9 cm	9.6 cm	外；にぶい橙色 5YR6/4	精良	良好	内外；黒斑 胎土；大東A類 被熱痕顕著
126	2	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	ほぼ完形	19.2 cm	14.3 cm	12.5 cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
126	3	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/6 以上	13.5 cm			外；にぶい橙色 7.5YR7/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
126	4	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/4 以上	17.0 cm			外；にぶい橙色 5YR7/4	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；黒斑 胎土；小谷式的
126	5	Ⅲ区 SR03 G5 5 層	土師器	高坏？	1/4 以上	13.0 cm			外；橙色 7.5YR6/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東A類
126	6	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/6 以上	16.3 cm			外；橙色 5YR7/8	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；小谷式的
126	7	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/4 以上	16.6 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	刺突痕 a 胎土；小谷式的
126	8	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/6 以上	32.0 cm			外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	胎土；大東A類
126	9	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/4 以上	11.4 cm			外；橙色 2.5YR7/6	精良	やや不良	胎土；大東A類
126	10	Ⅲ区 SR03	土師器	低脚坏 (ミニチュア)	完形	5.8 cm	4.1 cm	3.6 cm	外；橙色 5YR6/8	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	胎土；大東A類
126	11	Ⅲ区 SR03 G4	土師器	高坏	底 1/4 以上			9.8 cm	外；橙色 2.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	刺突痕 胎土；大東B類
126	12	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/2 以上			10.4 cm	外；明青灰色 2.5YR7/1	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 微量含む	良好	内外；黒斑 3 方円形スカシ 胎土；小谷式的
126	13	Ⅲ区 SR03 1 層	土師器	高坏	1/4 以上			12.2 cm	外；灰白色 2.5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；赤彩 胎土；小谷式的
126	14	Ⅲ区 SR03 1 層	土師器	高坏	小片				外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
126	15	Ⅲ区 SR03 G6	土師器	高坏	1/4 以上			10.6 cm	外；黄橙色 10YR8/4	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
126	16	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	小片			(11.5) cm	外；橙色 7.5YR6/6	1 mm以下 白色粒子 若干含む	やや不良	胎土；大東A類
126	17	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	小片			(11.6) cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/3	2 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；小谷式的
126	18	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	小片			(10.8) cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；黒斑 胎土；大東B類
126	19	Ⅲ区 SR03	土師器	高坏	1/4 以上			10.2 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 白色・赤褐色粒子 微量含む		胎土；大東A類
126	20	Ⅲ区 SR03	土師器	坏	1/2 以上	(11.7) cm			外；淡橙色 5YR8/4	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	内；黒斑 胎土；大東A類
126	21	Ⅲ区 SR03 G5	土師器	坏	1/4 以上	10.7 cm			外；灰白色 7.5Y8/7	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	胎土；小谷式的
126	22	Ⅲ区 SR03	土師器	坏	ほぼ完形	9.6 cm			外；灰白色 7.5YR8/2	1 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
126	23	Ⅲ区 SR03 G5	土師器	手捏ね土器	完形	4.8 cm	3.7 cm		外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内外；黒斑 胎土；大東A類
126	24	Ⅲ区 SR03	土師器	手捏ね土器	ほぼ完形	6.4 cm	3.7 cm		外；浅黄橙色 7.5YR8/3	精良	良好	外；黒斑 胎土；大東A類
126	25	Ⅲ区 SR03	土師質土器	坏	底完形			5.8 cm	外；橙色 5YR7/6	1 mm以下 石英 白色粒子 微量含む	良好	
126	26	Ⅲ区 SR03 1 層	土師質土器	坏	1/4 以上	14.3 cm	5.2 cm	4.4 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 石英 微量含む	やや不良	
126	27	Ⅲ区 SR03	土師質土器	高台付坏	1/4 以上			7.5 cm	外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
127	1	Ⅲ区 SR03	須恵器	坏	1/6 以上	14.2 cm	4.1 cm	10.1 cm	外；オリーブ灰色 2.5GY6/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	
127	2	Ⅲ区 SR03	須恵器	高坏	1/6 以上			9.0 cm	外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
127	3	Ⅲ区 SR03 F4	鉄器	釘	1/4 以上	長；(3.1) cm	巾；0.8cm	厚；0.6 cm				
127	4	Ⅲ区 SR03	石器	敲石	1/2 以上	長；(7.6) cm	巾；4.4 cm	厚；3.9 cm	外；灰白色 N8/1			流紋岩 重量 156.68 g
127	5	Ⅲ区 SR03	石器	砥石	1/2 以上	長；(14.1) cm	巾；7.7 cm	厚；4.7 cm	外；明褐灰色 5YR7/1			砂岩 重量 675.05 g
127	6	Ⅲ区 SR03	石器	砥石	1/2 以上	長；(13.6) cm	巾；7.8 cm	厚；6.7 cm	外；灰白色 7.5Y8/1			外；煤痕 流紋岩質凝灰岩 重量 655.02 g
133	1	Ⅲ区 SR04 J5	縄文土器	深鉢	小片				外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	口唇刻目
133	2	Ⅲ区 SR04 J5	縄文土器	深鉢	小片				外；灰白色 2.5Y7/1	2 mm以下 長石 多く含む	良好	一条刻目突帯文
133	3	Ⅲ区 SR04 I4	縄文土器	深鉢	小片				外；灰白色 10YR8/2	2 mm以下 石英 長石 多く含む	やや不良	一条刻目突帯文
133	4	Ⅲ区 SR04 J4	縄文土器	深鉢	小片				外；灰白色 10YR8/1	2 mm以下 石英 長石 白色粒子 若干含む	やや不良	二条突帯文土器
133	5	Ⅲ区 SR04	縄文土器	深鉢	小片	(22.6) cm			外；灰白色 2.5Y8/2	3 mm以下 長石 若干含む	良好	突帯文土器
133	6	Ⅲ区 SR04	弥生土器	甕	小片				外；灰色 2.5Y8/2	3 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	多条沈線文
133	7	Ⅲ区 SR04	弥生土器	鉢	小片	(22.2) cm			外；淡黄色 2.5YR8/1	1 mm以下 白色粒子 やや多く含む		綾杉文・刺突文・ 円形浮文
133	8	Ⅲ区 SR04	土師器	甑把手	小片				外；淡黄色 2.5Y8/3	3 mm 石英 長石 多く含む		
133	9	Ⅲ区 SR04	土師器	壺	1/4 以上	27.2 cm			外；にぶい橙色 5YR7/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
133	10	Ⅲ区 SR04	土師器	甕	1/6 以上	17.4 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
133	11	Ⅲ区 SR04	土師器	甕	小片	(20.6) cm			外；灰白色 7YR8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
133	12	Ⅲ区 SR04	土師器	甕	1/4 以上	32.2 cm			外；橙色 7.5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕
133	13	Ⅲ区 SR04	土師器	甕	1/2 以上	30.6 cm			外；にぶい橙色 7.5YR7/3	2 mm以下 白色粒子 やや多く含む	良好	外；煤痕
133	14	Ⅲ区 SR04	土師器	甕	小片	(11.2) cm			外；灰黄色 2.5Y7/2	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
133	15	Ⅲ区 SR04	土師器	製塩土器	1/4 以上	11.0 cm			外；橙色 7.5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内；煤痕
134	1	Ⅲ区 SR04	土師器	甕	1/6 以上	38.8 cm			外；淡橙色 5YR8/3	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	
134	2	Ⅲ区 SR04	土師器	甕	1/6 以上	30.2 cm			外；灰白色 5YR8/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
134	3	Ⅲ区 SR04	土師器	甕	1/6 以上	30.4 cm			外；灰白色 7.5YR8/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
134	4	Ⅲ区 SR04	土師器	高坏	小片				外；浅黄橙色 10YR8/3	5 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	刺突痕 a 胎土；大東B類
134	5	Ⅲ区 SR04	土師器	坏	1/6 以上	12.6 cm	3.8 cm	9.2 cm	外；灰白色 2.5Y8/1	精良	良好	内外；赤彩
134	6	Ⅲ区 SR04	土師器	坏	1/4 以上	12.2 cm	3.2 cm	8.2 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/4	精良	良好	内外；赤彩
134	7	Ⅲ区 SR04	土師器	皿	1/6 以上	16.4 cm			外；灰白色 2.5Y8/1	精良	良好	内外；赤彩
134	8	Ⅲ区 SR04	土師器	坏	1/4 以上	12.8 cm	3.6 cm	10.5 cm	外；灰白色 2.5Y8/1	精良	やや不良	内外；赤彩
134	9	Ⅲ区 SR04	土師器	坏	1/6 以上	14.0 cm	3.5 cm		外；灰白色 2.5Y8/1	精良	やや不良	内外；赤彩 底部黒斑
134	10	Ⅲ区 SR04	土師器	皿	1/6 以上	14.7 cm			外；灰白色 2.5Y8/1	精良	やや不良	内外；赤彩
134	11	Ⅲ区 SR04	土師器	皿	1/6 以上	14.2 cm	2.8 cm	10.4 cm	外；灰白色 2.5Y8/1	精良	良好	内外；赤彩
134	12	Ⅲ区 SR04	土師器	坏	1/6 以上	13.4 cm			外；灰白色 2.5Y8/1	精良	良好	内外；赤彩
134	13	Ⅲ区 SR04	土師器	坏	1/6 以上	16.6 cm			外；灰白色 2.5Y8/1	精良	良好	内外；赤彩

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
134	14	Ⅲ区 SR04 J4	土師器	皿	1/6 以上	17.4 cm			外；灰白色 2.5Y8/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	内；赤彩（一部）
134	15	Ⅲ区 SR04 I4	土師器	皿	1/4 以上	17.8 cm	3.0 cm		外；灰白色 7.5YR8/1	精良	良好	内外；赤彩
134	16	Ⅲ区 SR04	須恵器	蓋	1/4 以上	12.6 cm	4.3 cm		外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	やや不良	大谷 5 期
134	17	Ⅲ区 SR04	須恵器	蓋	1/6 以上	14.6 cm	2.8 cm		外；黄橙色 10YR8/6	2 mm以下 石英 長石 若干含む	不良 酸化焼成	天井部つまみ接合部割付ライン
134	18	Ⅲ区 SR04 J4	須恵器	蓋	1/6 以上	15.4 cm			外；灰色 2.5GY8/1	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内；墨書「伎」
134	19	Ⅲ区 SR04	須恵器	蓋	ほぼ完形	13.9 cm	4.0 cm		外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	短頸壺用蓋
134	20	Ⅲ区 SR04	須恵器	蓋	1/4 以上	14.9 cm			外；明青灰色 5PB7/1	2 mm以下 石英 長石 若干含む	やや不良	
134	21	Ⅲ区 SR04	須恵器	蓋	ほぼ完形	13.9 cm	3.0 cm		外；黄橙色 10YR8/0	2 mm以下 石英 長石 若干含む	不良	酸化焼成
134	22	Ⅲ区 SR04	須恵器	蓋	ほぼ完形	15.4 cm	2.3 cm		外；青灰色 5PB6/1	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	天井部墨書？判読不能
134	23	Ⅲ区 SR04	須恵器	蓋	1/2 以上	14.9 cm			外；明オリーブ灰色 2.5GY7/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	不良	
134	24	Ⅲ区 SR04 J4・I4	須恵器	坏	1/4 以上	12.4 cm	4.8 cm	8.7 cm	外；淡黄色 7.5Y8/3	1 mm以下 白色粒子 若干含む	不良 一部酸化焼成	
134	25	Ⅲ区 SR04	須恵器	坏	底 1/2 以上			9.4 cm	外；青灰色 5PB5/1	1 mm以下 石英 長石 微量含む	やや不良	
135	1	Ⅲ区 SR04	須恵器	坏	1/2 以上	12.3 cm	4.7 cm	7.8 cm	外；明緑灰 10G7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	
135	2	Ⅲ区 SR04 J4・I5	須恵器	坏	1/6 以上	12.3 cm	4.6 cm	7.8 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 石英 白色粒子 微量含む	良好	
135	3	Ⅲ区 SR04 K5	須恵器	坏	1/4 以上	15.3 cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
135	4	Ⅲ区 SR04	須恵器	坏	1/2 以上	12.4 cm	3.7 cm	7.4 cm	外；にぶい赤褐色 7.5R4/3	2 mm以下 白色粒子 若干含む	やや不良	
135	5	Ⅲ区 SR04 I4・J4	須恵器	坏	1/4 以上	12.6 cm	4.2 cm	9.0 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	不良	
135	6	Ⅲ区 SR04	須恵器	坏	ほぼ完形	13.6 cm	4.5 cm	10.6 cm	外；青灰色 5PB5/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	やや不良	内面漆痕
135	7	Ⅲ区 SR04	須恵器	坏	1/4 以上	12.5 cm	4.8 cm	8.9 cm	外；明青灰色 5PB7/1	2 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
135	8	Ⅲ区 SR04 I4	須恵器	坏	1/4 以上	14.1 cm	5.2 cm	9.8 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
135	9	Ⅲ区 SR04	須恵器	坏	1/2 以上	14.9 cm	6.7 cm	8.9 cm	外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
135	10	Ⅲ区 SR04	須恵器	坏	1/4 以上	17.6 cm	6.4 cm	12.8 cm	外；青灰色 5PB5/1	2 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
135	11	Ⅲ区 SR04	須恵器	坏	完形	13.1 cm	5.3 cm	8.6 cm	外；青灰色 5B6/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
135	12	Ⅲ区 SR04 H4	須恵器	皿	1/4 以上	14.6 cm	2.4 cm	10.0 cm	外；明青灰色 5B7/1 青灰色 5B6/1（一部）	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
135	13	Ⅲ区 SR04	須恵器	皿	1/4 以上	16.0 cm	2.2 cm	12.4 cm	外；明青灰色 5BG7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内外；火襷痕
135	14	Ⅲ区 SR04	須恵器	皿	1/6 以上	13.4 cm	2.9 cm	12.4 cm	底部；灰黄色 2.5Y7/2 側面；青灰色 5BG6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	不良 酸化焼成	
136	1	Ⅲ区 SR04	須恵器	皿	1/6 以上	24.0 cm	3.6 cm	21.4 cm	外；灰白色 N7/	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
136	2	Ⅲ区 SR04	須恵器	皿	小片	(15.0) cm	2.0 cm	(11.0) cm	外；明青灰色 5B7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
136	3	Ⅲ区 SR04	須恵器	皿	1/2 以上	22.2 cm	3.4 cm	13.2 cm	外；明青灰色 5PB7/1 内；明青灰色 5B7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内；墨状黒色物付着 外；火襷痕
136	4	Ⅲ区 SR04	須恵器	皿	底 1/2 以上	17.1 cm	2.7 cm	12.6 cm	外；灰白色 2.5Y8/1 内；明青灰色 5B7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内外；火襷痕
136	5	Ⅲ区 SR04	須恵器	高坏	小片				外；灰色 7.5Y8/1	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
136	6	Ⅲ区 SR04 J4	須恵器	高坏	1/6 以上			11.6 cm	外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
136	7	Ⅲ区 SR04	須恵器	高坏	1/4 以上			8.2 cm	外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
136	8	Ⅲ区 SR04	須恵器	鉢	1/6 以上	21.0 cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子若干含む	良好	鉄鉢形土器
136	9	Ⅲ区 SR04	須恵器	鉢	小片	(18.4) cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
136	10	Ⅲ区 SD28 G4	須恵器	鉢	小片	(21.4) cm			外；青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	鉄鉢形土器
136	11	Ⅲ区 SR04	須恵器	長頸壺	肩 1/4 以上				外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
136	12	Ⅲ区 SR04	須恵器	壺	1/4 以上	10.8 cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	自然釉
136	13	Ⅲ区 SR04	須恵器	壺	底 1/4 以上			8.2 cm	外；明青灰色 PBG7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
136	14	Ⅲ区 SR04	須恵器	壺	1/4 以上			12.6 cm	外；明青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 多く含む	良好	
136	15	Ⅲ区 SR04	須恵器	壺	底 1/2 以上			11.8 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	内面底自然釉 底部焼台付着
136	16	Ⅲ区 SR04	須恵器	甕	小片				外；青灰色 5PB5/1	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
137	1	Ⅲ区 SR04	土製品	土錘	完形	長；5.3 cm	巾；2.1 cm	厚；2.0 cm	外；灰白色 7.5YR8/1	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	重量；22.78g
137	2	Ⅲ区 SR04	土製品	土錘	1/2 以上	長；(6.6) cm	巾；3.2 cm	厚；(2.9) cm	外；灰白色 2.5Y8/1	1 mm以下 雲母 石英 長石 若干含む	良好	重量；40.17g
137	3	Ⅲ区 SR04	土製品	土錘	完形	長；5.4 cm	巾；2.5 cm	厚；2.2 cm	外；灰白色 7.5YR8/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	重量；31.06g
137	4	Ⅲ区 SR04	土製品	土錘	完形	長；4.9 cm	巾；2.3 cm	厚；2.1 cm	外；灰白色 7.5YR8/2	2 mm以下 雲母 石英 長石 若干含む	良好	重量；23.75g 外；煤痕
137	5	Ⅲ区 SR04	土製品	土錘	完形	長；3.7 cm	巾；1.8 cm	厚；1.7 cm	外；灰色 5Y5/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	重量；13.13g
137	6	Ⅲ区 SR04	石器	砥石	1/2 以上	長；(7.6) cm	巾；3.9 cm	厚；3.5 cm	外；灰白色 N8/1			凝灰岩 重量 148.77g
137	7	Ⅲ区 SR04	石器	砥石	完形	長；12.3 cm	巾；4.9 cm	厚；4.3 cm	外；灰白色 N8/1			凝灰岩 重量 350.84g
137	8	Ⅲ区 SR04	石器	砥石	完形	長；14.5 cm	巾；12.0 cm	厚；5.1 cm	外；灰白色 N8/1			緑色凝灰岩 重量 1395.12g
137	9	Ⅲ区 SR04	石器	打製石斧	1/2 前後	長；(8.1) cm	巾；8.0 cm	厚；1.0 cm	外；緑灰色 10G6/1			流紋岩～安山岩 重量 122.35g
139	1	Ⅲ区 F4 2 層	縄文土器	深鉢	小片				外；暗灰黄色 2.5Y5/2	2 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	一条刻目突帯文
139	2	Ⅲ区 I4 2 層	縄文土器	深鉢	小片				外；灰白色 2.5Y8/2 内；淡黄色 2.5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	一条刻目突帯文
139	3	Ⅲ区 H5 2 層	弥生土器	壺	小片	(22.2) cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む		口縁部；斜格子文
139	4	Ⅲ区 H5 2 層	弥生土器	壺	小片				外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む		頸部；斜格子文 突帯 内外；煤痕
139	5	Ⅲ区 H5 2 層	土師器	甕	1/4 以上	15.8 cm			外；黄橙色 7.5YR8/8	3 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	内外；煤痕
139	6	Ⅲ区 I5 2 層	土師器	甕	小片	(11.6) cm			外；灰白色 2.5Y8/2 内；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	肩部；線刻 胎土；小谷式的
139	7	Ⅲ区 G5 2 層	土師器	甕	1/2 以上	15.1 cm			外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
139	8	Ⅲ区 H5 2 層	土師器	甕	胴；1/6 以上	14.2 cm			外；淡橙色 5YR8/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
139	9	Ⅲ区 G4 2 層	土師器	甕	1/6 以上	24.0 cm			外；灰黄色 2.5YR7/2	2 mm以下 石英 長石 若干多く含む	良好	
139	10	Ⅲ区 G4 2 層	土師器	甕	1/4 以上	24.0 cm			外；灰黄色 2.5YR7/2	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	
139	11	Ⅲ区 H4 2 層	土師器	小形丸底壺	1/2 以上	8.4 cm	8.7 cm		外；浅黄橙色 7.5YR8/3 内；同	2 mm以下 石英 白色粒子 多く含む	良好	胎土；大東E類
139	12	Ⅲ区 H5 2 層	土師器	小形壺	1/4 以上	11.0 cm			外；浅黄橙色 10YR8/3 内；同	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 含む	良好	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
139	13	Ⅲ区 G5 2層	土師器	高坏	1/4以上	18.6 cm			外；明褐色 7.5YR5/6	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；大東A類
139	14	Ⅲ区 I6 2層	土師器	高坏	1/6以上	17.4 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/3 内；灰白色 7.5YR8/2	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；大東B類
139	15	Ⅲ区 H5 2層	土師器	高坏	1/4以上			13.4 cm	外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 白色粒子 若干含む	良好	脚部；3方円孔スカシ 胎土；小谷式的
139	16	Ⅲ区 F4 2層	土師器	鉢	1/4以上	14.8 cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/4	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	胎土；小谷式的
139	17	Ⅲ区 H5 2層	土師器	坏	1/6以上	(16.6) cm	5.6 cm	(13.4) cm	外；灰白色 7.5YR8/1	2 mm以下 石英 長石 微量含む	やや不良	内外面赤彩
139	18	Ⅲ区 I4 2層	土師器	竈	小片				外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	庇部分
139	19	Ⅲ区 I4 2層	土師器	甑把手	小片				外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
140	1	Ⅲ区 I4 2層	須恵器	蓋	小片				外；明褐灰色 5PR7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	大谷5期
140	2	Ⅲ区 I2・I3	須恵器	蓋	1/4以上	13.8 cm	2.9 cm		外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
140	3	Ⅲ区 I2 2層	須恵器	蓋	小片	(11.2) cm			外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；火襷痕？
140	4	Ⅲ区 J4 2層	須恵器	蓋					外；明緑灰色 10G7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	やや不良	
140	5	Ⅲ区 I3 2層	須恵器	蓋	1/6以上	14.9 cm			外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
140	6	Ⅲ区 I4 2層	須恵器	蓋	小片				外；明緑灰色 10G7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
140	7	Ⅲ区 2層	須恵器	蓋	1/4以上	13.5 cm			外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
140	8	Ⅲ区 2層 H4・H5	須恵器	蓋	1/6以上	15.0 cm			外；灰白色 N8/1	2 mm以下 白色粒子 若干含む	やや不良	
140	9	Ⅲ区 2層 H2・H3	須恵器	蓋	小片	14.2 cm	2.0 cm		外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
140	10	Ⅲ区 I3・I2	須恵器	蓋	1/4以上	14.4 cm			外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
140	11	Ⅲ区 H5 2層	須恵器	坏	小片	(13.4) cm	(3.0) cm	(6.0) cm	外；明青灰色 5PB7/1	2 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
140	12	Ⅲ区 G2 2層	須恵器	坏	1/6以上	13.4 cm	4.1 cm	9.1 cm	外；明青灰色 5PB6/1	2 mm以下 長石 微量含む	良好	
140	13	Ⅲ区 H4 2層	須恵器	坏	1/2以上	12.6 cm	4.2 cm	8.0 cm	外；明緑灰色 5G7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	不良	
140	14	Ⅲ区 K5 4層	須恵器	坏	小片	(11.7) cm	4.9 cm	(8.0) cm	外；灰白色 N8/1	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子若干含む	やや不良	外；火襷痕
140	15	Ⅲ区 I4 2層	須恵器	坏	1/4以上	12.0 cm	4.5 cm	8.6 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；火襷痕
140	16	Ⅲ区 I2 2層	須恵器	皿	1/6以上	14.0 cm	1.9 cm	11.5 cm	外；明青灰色 5PB7/1	2 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；火襷痕 内；煤痕？
140	17	Ⅲ区 I4 2層	須恵器	皿	1/2以上	16.2 cm	2.3 cm	12.6 cm	外；明青灰色 5PB7/1	6 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内；火襷痕
140	18	Ⅲ区 J5 2層	須恵器	皿	小片	(17.7) cm	2.5 cm	13.6 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内；火襷痕
140	19	Ⅲ区 H4 2層	須恵器	皿	底1/2以上	19.0 cm	2.8 cm	14.0 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	内外；火襷痕
140	20	Ⅲ区 H3 2層	須恵器	壺	小片	(10.4) cm			外；灰白色 N8/1	精良	良好	外；自然釉
140	21	Ⅲ区 H3 2層	須恵器	壺	小片				外；明緑灰 7.5GY8/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；自然釉
140	22	Ⅲ区 I4 2層	須恵器	壺	小片				外；青灰色 5PB6/2	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；ヘラ記号
140	23	Ⅲ区 H3 2層	須恵器	壺	小片			(12.4) cm	外；暗青灰色 5PB4/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	
140	24	Ⅲ区 I5 2層	須恵器	壺	1/4以上			8.0 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内面底；自然釉
140	25	Ⅲ区 H3 2層	須恵器	壺	1/6以上			8.4 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
140	26	Ⅲ区 J4 2層	須恵器	小壺	小片				外；明青灰色 5PB7/1	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	
140	27	Ⅲ区 I4 2層	土師器	坏	1/2以上	12.4㎝	2.8㎝	9.2㎝	外；浅黄橙色 7.5YR8/3 内；橙色 5YR6/6	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	内外；赤彩
140	28	Ⅲ区 G3・G4	土師器	皿	1/2以上	17.2㎝	2.8㎝		外；灰白色 5Y8/1（素地）	1㎜以下 白色粒子 若干含む	良好	内外；赤彩
140	29	Ⅲ区 H4 2層	土師器	坏	1/6以上	13.1㎝	3.0㎝	8.5㎝	外；灰白色 7.5YR8/1	1㎜以下 白色粒子 微量含む	やや不良	内外；赤彩（範囲不明確）
141	1	Ⅲ区 H7 2層	瓦質土器	鍋	小片	(20.2)㎝			外；灰色 N6/1		やや不良	在地系
141	2	Ⅲ区 H3 2層 H4 2層	中世須恵器	壺	1/4以上			14.8㎝	外；青灰色 5PB5/1	1㎜以下 白色粒子 若干含む	良好	
141	3	Ⅲ区 G3 2層	白磁	椀	小片	(18.8)㎝			外；灰白色 7.5Y8/1	1㎜以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉 太宰府分類Ⅳ類
141	4	Ⅲ区 I5 2層	白磁	椀	小片	(18.1)㎝			外；灰白色 10Y8/1		良好	内外；釉 太宰府分類Ⅳ類
141	5	Ⅲ区 I2 2層	灰釉系陶器	瓶	頸1/4以上				外；灰白色 7.5Y7/2 内；灰白色 N8/		良好	
141	6	Ⅲ区 I4 2層	白磁	椀	底1/4以上			7.2㎝	外；灰白色 10Y8/1		良好	内；渦文 太宰府分類XⅢ類
141	7	Ⅲ区 G4 2層	白磁	椀	小片	(14.8)㎝			外；明オリーブ灰色 5GY7/1	1㎜以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉 太宰府分類Ⅳ類
141	8	Ⅲ区 H7 1.2層	土師質土器	坏	1/4以上	14.0㎝			外；橙色 5YR7/6	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	
141	9	Ⅲ区 H7 2層	土師質土器	坏	1/6以上			7.2㎝	外；浅橙色 7.5YR8/6	精良	良好	
141	10	Ⅲ区 H7 2層	土師質土器	坏	底完形			5.1㎝	外；灰白色 2.5Y8/2	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	外；黒斑
141	11	Ⅲ区 H7 1・2層	土師質土器	小皿	ほぼ完形	7.8㎝	2.0㎝	5.6㎝	外；浅黄色 2.5Y8/4	精良	良好	
141	12	Ⅲ区 H7 2層	土師質土器	小皿	1/2以上	8.7㎝	2.2㎝	3.9㎝	外；浅黄橙色 10YR8/4	3㎜以下 長石 微量含む	良好	
141	13	Ⅲ区 H7 2層	土師質土器	高台付坏	底完形			4.8㎝	外；灰白色	1㎜以下 白色粒子 微量含む	やや不良	
141	14	Ⅲ区 F5 2層	土師器	小皿	1/2以上	9.2㎝	2.2㎝	4.3㎝	外；淡黄色 2.5Y8/4	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	
141	15	Ⅲ区 G5 2層	土師質土器	高台付坏	底完形			4.8㎝	外；淡黄色 2.5Y8/3	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	
141	16	Ⅲ区 J4 2層	土師質土器	高台付坏	底1/2以上			4.8㎝	外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1㎜以下 石英 長石 微量含む	やや不良	
141	17	Ⅲ区 I5 2層	土師質土器	小壺					外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1㎜以下 白色粒子 微量含む	良好	子持壺の子壺に類似
141	18	Ⅲ区 G5 2層	土製品	土錘	ほぼ完形	長；(4.1)㎝	巾；2.9㎝	厚；2.7㎝	外；黒褐色 7.5YR3/2	3㎜以下 黒色粒子 きわめて多く含む	やや不良	重量；48.24g 近現代か？
141	19	Ⅲ区 I5 2層	土製品	土錘	完形	長；4.4㎝	巾；2.1㎝	厚；1.9㎝	外；灰黄色 2.5Y7/2	1㎜以下 白色粒子 若干含む	良好	重量；17.01g
141	20	Ⅲ区 G5 2層	土製品	紡錘車形土製品	ほぼ完形	長；4.4㎝	巾；4.3㎝	厚；1.8㎝	外；淡黄色 2.5Y8/3	精良	良好	外；煤痕 重量；26.05g
141	21	Ⅲ区 H5 2層	鉄器	刀子	ほぼ完形	長；15.4㎝	巾；1.0㎝	厚；0.2㎝				
141	22	Ⅲ区 H4 2層	鉄器	刀子	1/2以下	長；(4.3)㎝	巾；0.85㎝	厚；0.2㎝				
141	23	Ⅲ区 G4 2層	鉄器	釘	完形	長；18.3㎝	巾；1.3㎝	厚；1.1㎝				
142	1	Ⅲ区 I4 2層	石器	楔形石器	完形	長；2.3㎝	巾；3.0㎝	厚；1.1㎝				黒曜石製 重量7.95g
142	2	Ⅲ区 G7 1・2層	石器	砥石	1/2以上	長；(6.5)㎝	巾；4.7㎝	厚；2.1㎝	外；明オリーブ灰色 2.5GY7/1			緑色凝灰岩製 重量103.64g
142	3	Ⅲ区 G3 2層	石器	楔形石器	完形	長；3.0㎝	巾；2.5㎝	厚；1.0㎝	外；黒色			黒曜石製 重量5.58g
143	1	Ⅲ区 F4 3層	土師器	甕	1/6以上	16.2㎝			外；灰白色 2.5Y8/2	1㎜以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕 胎土；小谷式的
143	2	Ⅲ区 G7 3層	土師器	甕	1/6以上	12.2㎝			外；橙色 7.5YR7/6	2㎜以下 石英 長石 若干含む	やや不良	胎土；大東B類

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
143	3	Ⅲ区 G5 2・3層	土師器	小形丸底壺	1/4 以上	9.6 cm			外；灰白色 7.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
143	4	Ⅲ区 G7 3層	土師器	甕	1/2 以上	17.6 cm			外；浅黄橙色 10YR8/3	2 mm以下 石英 長石 白色粒子 多く含む	良好	外；煤痕
143	5	Ⅲ区 G7 3層	土師器	壺	1/4 以上	12.8 cm			外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
143	6	Ⅲ区 H6 3層	土師器	坏	小片	(13.3) cm	4.3 cm	(8.0) cm	外；にぶい黄橙色 10YR7/3	2 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	内外；赤彩
143	7	Ⅲ区 F2 3層	弥生土器	器台	1/2 以上	24.2 cm	13.8 cm	22.2 cm	外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	内外；煤痕 草田 5 期
143	8	Ⅲ区 G7 3層	土師器	高坏	1/2 以上			12.3 cm	外；淡黄色 2.5Y7/4	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
143	9	Ⅲ区 F4 3層	土師器	高坏	脚部 1/4 以上			10.2 cm	外；浅黄橙色 10YR8/4	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
143	10	Ⅲ区 F2 3層	弥生土器	高坏	小片	(25.0) cm			外；灰白色 2.5Y8/2 内；同	1 mm以下 雲母 石英 長石 若干含む	良好	刺突痕 a 草田 5 期
143	11	Ⅲ区 H7 3層	土師器	甑把手	小片				外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
143	12	Ⅲ区 H7 3層	土師器	土製支脚	1/2 以上				外；淡黄色 2.5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕
143	13	Ⅲ区 G7 3層	土師器	土製支脚	1/2 以上		高；14.1 cm		外；にぶい橙色 10YR7/4	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	
144	1	Ⅲ区 G7 3層	須恵器	蓋	小片				外；青灰色 5PB6/1	3 mm以下 白色微粒 微量含む	良好	天井；当具痕
144	2	Ⅲ区 G6 3層	須恵器	蓋	1/4 以上	11.5 cm			外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	大谷 5 期前後
144	3	Ⅲ区 F4 3層	須恵器	坏	1/6 以上	13.0 cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	やや不良	
144	4	Ⅲ区 G7 3層	須恵器	坏	1/6 以上	13.5 cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
144	5	Ⅲ区 G7 3層	須恵器	蓋	1/4 以上	10.8 cm			外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	大谷 6 期
144	6	Ⅲ区 G4 3層	須恵器	坏	1/4 以上	12.4 cm			外；明緑灰 10G7/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
144	7	Ⅲ区 H6 3層 H2 2層	灰釉系陶器	山茶碗	底 1/2 以上			7.7 cm	外；明青灰色 5PB7/1	精良	良好	内；見込以外釉 12 世紀
144	8	Ⅲ区 G3 3層	須恵器	坏	底 1/6 以上			12.4 cm	外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 石英 若干含む	良好	
144	9	Ⅲ区 3層 H7	須恵器	皿	1/6 以上	14.6 cm	3.8 cm	9.6 cm	外；明オリーブ灰色 5GY7/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	
144	10	Ⅲ区 G6 3層	須恵器	壺	1/4 以上	13.8 cm			外；明青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；自然釉
144	11	Ⅲ区 H7 3層	陶磁器	壺	底 1/2 以上			8.4 cm	外；赤灰色 7.5R6/1	2 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	中国製陶器壺 12 ～ 14 世紀
144	12	Ⅲ区 G6 3層	白磁	皿	小片	(12.4) cm			外；灰白色 N8/	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	表面二次焼成痕
144	13	Ⅲ区 G6 3層	白磁	椀	1/6 以上	15.0 cm			外；灰白色 10Y8/2	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉 太宰府分類Ⅳ類
144	14	Ⅲ区 G6 3層	白磁	椀	1/6 以上	16.2 cm			外；灰白色 2.5GY8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉 太宰府分類Ⅳ類
144	15	Ⅲ区 G5 3層	白磁	椀	底完形			6.6 cm	外；浅黄色 7.5Y7/3	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉 太宰府分類Ⅴ類か
144	16	Ⅲ区 G6 3層	白磁	椀	底 1/4 以上			7.4 cm	外；灰白色 N8/1	精良	良好	内外；釉 外；縦篭花弁文 太宰府分類XII類
144	17	Ⅲ区 G6 3層	白磁	椀	底 1/2 以上			6.8 cm	外；灰白色 2.5GY8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	外；釉（一部） 内；釉（全体） 太宰府分類Ⅴ類
144	18	Ⅲ区 G6 3層	白磁	皿	底 1/4 以上			4.0 cm	外；灰白色 2.5GY8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	外；釉（一部） 内；釉（全体） 太宰府分類皿VI -1
144	19	Ⅲ区 G5 3層	陶磁器	壺	底 1/6 以上			10.2 cm	外；明緑灰色 7.5GY8/1	1 mm以下 黒色粒子 若干含む	良好	内；褐釉 中国産陶器盤
144	20	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	1/4 以上	14.8 cm	5.2 cm	5.2 cm	外；橙色 5YR7/8	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
144	21	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	1/2 以上	15.4 cm	5.0 cm	4.9 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；黒斑
144	22	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	底完形			5.3 cm	外；橙色 5YR7/6	精良	良好	
144	23	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	1/2 以上	15.6 cm	4.4 cm	5.8 cm	外；橙色 5YR7/8	精良	良好	
144	24	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	底 1/4 以上			6.0 cm	外；浅黄橙色 10YR8/3 内；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内外；黒斑
144	25	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	1/2 以上	14.0 cm	5.0 cm	5.1 cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
145	1	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	底完形	15.0 cm	4.3 cm	5.0 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；煤痕
145	2	Ⅲ区 H6 3層	土師質土器	坏	底 1/4 以上			5.4 cm	外；浅橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 石英 長石 微量含む	やや不良	
145	3	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	1/6 以上	16.0 cm			外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 微量含む	良好	
145	4	Ⅲ区 G7 3層	土師質土器	坏	1/6 以上	15.8 cm	5.0 cm	7.6 cm	外；浅黄橙色 10YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内外；黒斑
145	5	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	高台付坏	小片				外；淡橙色 5YR8/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
145	6	Ⅲ区 G5 3層	土師質土器	坏	1/2 以上	15.6 cm	5.3 cm	6.9 cm	外；橙色 5YR6/8	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
145	7	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	皿	1/6 以上	15.4 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
145	8	Ⅲ区 H7 3層	土師質土器	坏	底完形			6.2 cm	外；灰白色 2.5Y8/2	精良	やや不良	
145	9	Ⅲ区 H7 3層	土師質土器	坏	底完形			4.4 cm	外；灰白色 7.5YR8/3	1 mm以下 長石 微量含む	良好	
145	10	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	小片			7.8 cm	外；淡橙色 5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
145	11	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	底 1/2 以上			5.8 cm	外；淡橙色 5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 微量含む	良好	
145	12	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	坏	底 1/2 以上			8.0 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
145	13	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	高台付坏	底 1/2 以上			4.6 cm	外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；黒斑
145	14	Ⅲ区 H7 3層	土師質土器	高台付坏	底完形			4.9 cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
145	15	Ⅲ区 H7 3層	土師質土器	小皿	底完形	8.1 cm	2.1 cm	3.9 cm	外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
145	16	Ⅲ区 H6 3層	土師質土器	小皿	1/2 以上	8.7 cm	2.2 cm	4.5 cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	
145	17	Ⅲ区 G7 3層	土師質土器	小皿	1/2 以上	7.4 cm	1.8 cm	5.0 cm	外；明褐灰色 7.5YR7/1	精良		
145	18	Ⅲ区 H7 3層	土師質土器	小皿	完形	7.1 cm	1.9 cm	6.1 cm	外；浅橙色 7.5YR8/6	精良	良好	
145	19	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	小皿	完形	10.1 cm	2.5 cm	4.5 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 石英 微量含む	良好	
145	20	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	小皿	ほぼ完形	8.8 cm	2.0 cm	4.9 cm	外；黄橙色 7.5YR8/8	1 mm以下 雲母 石英 長石 微量含む	良好	外；煤痕
145	21	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	小皿	1/2 以上	9.3 cm	2.0 cm	4.0 cm	外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
145	22	Ⅲ区 H7 3層	土師質土器	小皿	1/2 以上	8.9 cm	1.7 cm	3.8 cm	外；浅橙色 7.5YR7/6	精良		
145	23	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	小皿	完形	8.6 cm	2.0 cm	3.8 cm	外；橙色 5YR7/6	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
145	24	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	小皿	完形	8.1 cm	2.0 cm	3.9 cm	外；黄橙色 7.5YR7/8	1 mm以下 雲母 白色粒子 微量含む	良好	
145	25	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	小皿	完形	9.0 cm	2.1 cm	3.6 cm	外；橙色 5YR7/8	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
145	26	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	小皿	1/4 以上	8.7 cm	1.9 cm	4.8 cm	外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 白色粒子 ごく微量含む	良好	内外；煤痕
145	27	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	小皿	底完形	8.3 cm		3.8 cm	外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
145	28	Ⅲ区 G6 3層	土師質土器	小皿	1/2以上	10.0 cm	2.1 cm	3.8 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
146	1	Ⅲ区 F4 3層	土製品	土錘	完形	長；7.0 cm	巾；1.8 cm	厚；1.8 cm	外；灰白色 2.5Y7/1	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	重量；21.41g
146	2	Ⅲ区 F4 3層	土製品	土錘	完形	長；6.6 cm	巾；2.4 cm	厚；2.3 cm	外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	重量；32.64g
146	3	Ⅲ区 G6 3層	土製品	土錘	完形	長；6.4 cm	巾；2.3 cm	厚；3.3 cm	外；灰黄色 2.5Y7/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；紐擦痕 重量；30.78g
146	4	Ⅲ区 G6 3層	土製品	土錘	ほぼ完形	長；(5.0) cm	巾；1.7 cm	厚；1.7 cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/4	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 微量含む	良好	重量；12.99g
146	5	Ⅲ区 G6 3層	土製品	土錘	1/4以上	長；(3.7) cm	巾；1.8 cm	厚；1.7 cm	外；浅黄橙色 10YR8/3	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	外；紐擦痕 重量；10.97g
146	6	Ⅲ区 G6 3層	土製品	土錘	完形	長；4.8 cm	巾；1.7 cm	厚；1.5 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 石英 微量含む	良好	外；紐擦痕 重量；9.94g
146	7	Ⅲ区 H7 3層	鉄器	環状鉄製品	完形	長；3.5 cm	巾；11cm	厚；1.0 cm				
146	8	Ⅲ区 F4 3層	鉄器	釘？	1/2以上	長；(9.2) cm	巾；1.0cm	厚；0.4 cm				
146	9	Ⅲ区 F3 3層	石器	砥石	小片	長；(9.5) cm	巾；6.0 cm	厚;(2.85)cm	外；灰白色 N8/1			凝灰岩製 刃先痕 重量159.68 g
146	10	Ⅲ区 G3 3層	鉄器	鉄鏃	1/4以上	長；(4.5) cm	巾；1.0cm	厚；0.9 cm				
146	11	Ⅲ区 G3 3層	鉄器	鉄鏃	1/4以上	長；(4.7) cm	巾；1.05cm	厚；0.8 cm				
146	12	Ⅲ区 F4 3層	鉄器	釘	完形	長；5.0 cm	巾；0.5cm	厚；0.5 cm				
146	13	Ⅲ区 F4 3層	鉄器	釘	小片	長；(3.1) cm	巾；0.5cm	厚；0.4 cm				
147	1	Ⅲ区 G5 5層	縄文土器	深鉢	小片				外；灰白色 2.5Y8/2 内；灰白色 2.5Y8/1	長石 若干含む	良好	内；煤痕 突帯文土器
147	2	Ⅲ区 F2 5層	弥生土器	甕	1/6以上			10.2 cm	外；灰白色 2.5Y8/1	3 mm以下 石英 長石 多く含む	やや不良	弥生前期
147	3	Ⅲ区 G5 5層	土師器	壺	1/2以上	15.5 cm			外；黄橙色 10YR7/8	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
147	4	Ⅲ区 H7 4・5層	土師器	壺	1/4以上	18.0 cm			外；淡黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
147	5	Ⅲ区 H7 4・5層	土師器	甕	1/6以上	16.0 cm			外；灰白色 10YR8/1	1 mm以下 雲母 石英 長石 微量含む	良好	胎土；小谷式的
147	6	Ⅲ区 G4 5層	土師器	壺	1/6以上	11.2 cm			外；明赤褐色 5YR5/8	2 mm以下 石英 長石 多く含む	やや不良	胎土；大東B類
147	7	Ⅲ区 G5 5層	土師器	高坏	1/6以上			9.4 cm	外；淡黄色 2.5Y7/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
147	8	Ⅲ区 G5 5層	土師質土器	小皿	1/2以上	8.2 cm	1.7 cm	3.8 cm	外；にぶい褐色 7.5YR6/3	2 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
147	9	Ⅲ区 I4	須恵器	蓋	小片				外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
147	10	Ⅲ区 G6 4・5層	須恵器	蓋	小片				外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；ヘラ記号「×」 大谷5期
147	11	Ⅲ区 G6 4・5層	須恵器	坏	1/6以上	13.9 cm	4.0 cm	8.5 cm	外；明青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
147	12	Ⅲ区 G7 5層	須恵器	坏	1/4以上	12.4 cm	4.0 cm	7.5 cm	外；橙色 7.5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 若干含む	不良 酸化焼成	内外；火襷痕
147	13	Ⅲ区 I4 4層	須恵器	坏	1/6以上	12.4 cm			外；明青灰色 5PB7/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	外；火襷痕
147	14	Ⅲ区 G6 4・5層	須恵器	坏	底1/6以上	13.4 cm	4.3 cm	9.0 cm	外；明青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 若干含む	やや不良	
147	15	Ⅲ区 G6 4・5層	須恵器	高坏	1/4以上			9.6 cm	外；青灰色 5PB6/1	2 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	二方スリット状スカシ
147	16	Ⅲ区 G6 5層	土製品	土錘	1/2以上	長；(5.8) cm	巾；2.5 cm	厚；2.3 cm	外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	外；擦痕？ 重量；24.97g
152	1	Ⅲ区 J6 6層	縄文土器	浅鉢	小片	(37.2) cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 長石 多く含む	良好	突帯文期浅鉢
152	2	Ⅲ区 I4 6層	石器	打製石斧	1/2以上	長;(15.2)cm	巾；10.8 cm	厚；1.1 cm	外；明オリーブ灰色 5GY7/1			流紋岩質安山岩製 重量237.54 g

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
152	3	Ⅲ区 I4 7層	石器	磨製石斧	1/2以上	長；(17.4)cm	巾；5.6 cm	厚；3.8 cm	外；明青灰色 5BG7/1			塩基性片岩製 重量646.25 g
152	4	Ⅲ区 H3 6層	石器	スクレーパー	完形	長；3.4 cm	巾；5.9 cm	厚；0.6 cm	外；青灰色 5PB5/1			サヌカイト製 重量13.85 g
153	1	Ⅲ区 G.H6 EWトレンチ	土師質土器	坏	底完形	15.2 cm	4.8 cm	5.4 cm	外；橙色 5YR7/8	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
153	2	Ⅲ区 D6 EWトレンチ	土師質土器	坏	1/4以上	15.1 cm	5.0 cm	5.0 cm	外；黄橙色 10YR8/6	1 mm以下 石英 長石 微量含む	やや不良	外；黒斑
153	3	Ⅲ区 H4 排水溝	土師器	皿	1/2以上	13.6 cm	2.5 cm	9.8 cm	外；灰白色 7.5YR8/1	1 mm以下 白色粒子 黒色粒子 微量含む	やや不良	内外；赤彩（底部除く）
153	4	Ⅲ区 H4 排水溝	須恵器	皿	1/4以上	15.3 cm	2.1 cm	12.5 cm	外；灰白色 N8/	3 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	
153	5	Ⅲ区 南溝	土師質土器	皿	底完形	7.7 cm	2.7 cm	5.2 cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内；煤痕
153	6	Ⅲ区 西溝	土師質土器	高台付坏	1/2以上	9.0 cm	3.3 cm	4.6 cm	外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	
153	7	Ⅲ区 北溝	須恵器	皿	1/6以上	22.2 cm	3.1 cm	17.6 cm	外；明青灰色 5PB6/1	3 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
153	8	Ⅲ区 I4	須恵器	坏	1/2以上			7.0 cm	外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
153	9	Ⅲ区 南溝	須恵器	壺	1/2以上			4.7 cm	外；青灰色 5PB5/1	1 mm以下 精良	良好	外；黒色付着物
153	10	Ⅲ区 南溝	陶磁器	擂鉢	小片	(26.0) cm			外；灰色 N6/	1 mm以下 白色粒子 微量含む		備前 17世紀前半～
153	11	Ⅲ区 南溝	陶磁器	擂鉢	底1/4 以上			13.6 cm	外；にぶい赤褐色 2.5Y5/3	白色粒子 若干含む	良好	肥前系擂鉢 17世紀前半～
153	12	Ⅲ区 南溝	陶磁器	皿	底部 1/2以上	12.4 cm	3.1 cm	4.0 cm	外；灰白色 N8/1	黒色粒子 微量含む	良好	肥前系磁器皿 17世紀後半～
153	13	Ⅲ区 I5-J5ベルト	白磁	椀	小片	(15.3) cm			外；灰白色 10Y8/1	黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉 太宰府分類Ⅳ類
153	14	Ⅲ区 表土掘削後	白磁	椀	底1/2 以上			7.6 cm	外；灰白色 7.5Y8/1 内；灰白色 5Y8/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	外；釉（一部） 内；釉（全体） 太宰府分類Ⅳ類
153	15	Ⅲ区 南溝	土製品	有孔円盤	完形	長径 4.9 cm	短径 4.6 cm	厚；0.4 cm	外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	土師質土器の 再加工品 重量14.11 g
153	16	Ⅲ区 F4 西側溝	鉄滓	椀形滓	完形	長；9.3 cm	巾；8.7cm	厚；2.0 cm				椀形鍛冶滓 重量269.4 g
153	17	Ⅲ区 J5	石器	砥石	1/4以上	長；(6.6) cm	巾；7.0 cm	厚；3.0 cm	外；灰白色 N8/1			凝灰岩製 重量180.69 g
153	18	Ⅲ区 H6	石器	砥石	1/2以上	長；(5.5) cm	巾；2.9 cm	厚；2.4 cm	外；灰白色 10Y8/1			流紋岩又は流紋岩質凝灰岩製 4面使用 重量40.98 g
162	1	Ⅳ区 P1123	土師器	甕	小片	(11.6) cm			外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	内外；煤痕
162	2	Ⅳ区 SD42	土師器	壺	1/2以上	14.2 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；赤彩
162	3	Ⅳ区 SD48	土師器	高坏	1/6以上	17.3 cm			外；にぶい橙色 7.5YR7/4	2 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；小谷式的
162	4	Ⅳ区 P1124	土師質土器	坏	底完形	13.2 cm	4.3 cm	5.8 cm	外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
162	5	Ⅳ区 P1046	土師質土器	坏	1/2以上			5.4 cm	外；灰白色 7.5YR8/2 内；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；煤痕
162	6	Ⅳ区 P1075	土師質土器	皿	底完形	10.0 cm	1.9 cm	4.0 cm	外；にぶい橙色 7.5YR7/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
162	7	Ⅳ区 P1095	須恵器	坏	底1/2 以上	10.8 cm	4.9 cm	6.6 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 石英 長石 微量含む	不良	変化焼成
162	8	Ⅳ区 P1121	土師質土器	小皿	小片	(8.4) cm	1.7 cm	(4.2) cm	外；淡橙色 5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
162	9	Ⅳ区 P1133	鉄器	釘	完形	長；4.2 cm	巾；0.7cm	厚；0.5 cm				
165	1	Ⅳ区 SK17	土師質土器	坏	底1/4 以上	12.2 cm	5.6 cm	7.2 cm	外；淡橙色 5YR8/4	2 mm以下 白色粒子 微量含む	不良	
165	2	Ⅳ区 SK17	土師質土器	坏	底1/2 以上	15.0 cm	4.7 cm	5.8 cm	外；淡橙色 5YR8/3	2 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
165	3	Ⅳ区 SK17	土師質土器	坏	1/4 以上	14.6 cm			外；にぶい橙色 5YR7/4	1 mm以下 石英 長石 微量含む	不良	
165	4	Ⅳ区 SK17	土師質土器	坏	底 1/4 以上	16.2 cm	5.1 cm	7.2 cm	外；にぶい橙色 5YR7/4	1 mm以下 石英 長石 微量含む	やや不良	
165	5	Ⅳ区 SK17	土師質土器	坏	1/2 以上	14.6 cm	5.5 cm	6.6 cm	外；橙色 5YR7/6	2 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	内；煤痕
165	6	Ⅳ区 SK17	土師質土器	小皿	1/6 以上	9.3 cm	2.5 cm	5.6 cm	外；橙色 5YR7/6	2 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	
165	7	Ⅳ区 SK17	土師質土器	小皿	底完形	9.4 cm	1.8 cm	4.0 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/6 内；淡橙色 5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
165	8	Ⅳ区 SK17	土師質土器	高台付坏	1/2 以上	8.6 cm	2.9 cm	4.5 cm	外；淡橙色 5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	不良	
165	9	Ⅳ区 SK17	土師質土器	高台付坏	底完形			4.7 cm	外；にぶい橙色 5YR7/4	2 mm以下 白色粒子 微量含む	不良	
165	10	Ⅳ区 SK17	石器	砥石	ほぼ完形	長；12.1cm	巾；5.7cm	厚；4.3cm	外；にぶい黄橙色 10YR6/4			凝灰岩製 重量；222g
169	1	Ⅳ区 E5 3層	土師器	甕	1/6 以上	32.8 cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/3 内；同	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；煤痕
169	2	Ⅳ区 E6 3層	土製品	土製支脚	1/4 以上				外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 白色粒子 若干含む	良好	
169	3	Ⅳ区 E5 3層	須恵器	鉢	底 1/6 以上			16.6 cm	外；青灰色 5PB6/1	2 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	
169	4	Ⅳ区 E5 3層	須恵器	坏	1/2 以上	14.2 cm	4.7 cm	7.8 cm	外；橙色 2.5YR7/6 内；同	2 mm以下 石英 長石 若干含む	不良	黒斑 酸化焼成
169	5	Ⅳ区 E5 3層	須恵器	坏	底 1/2 以上	12.3 cm	3.9 cm	8.1 cm	外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
169	6	Ⅳ区 E5 3層	須恵器	坏	1/4 以上	15.9 cm	6.5 cm	(9.8) cm	外；青灰色 5PB6/1	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
169	7	Ⅳ区 D5 3層	土師質土器	坏	底完形	15.1 cm	5.4 cm	5.8 cm	外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 白色粒子 微量含む マーブル胎土	やや不良	
169	8	Ⅳ区 E5 3層	土師質土器	坏	底 1/6 以上	15.6 cm	4.8 cm	6.2 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	
169	9	Ⅳ区 D5 3層	土師質土器	坏	1/4 以上	14.2 cm	4.9 cm	5.3 cm	外；橙色 7.5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 微量含む	不良	
169	10	Ⅳ区 D5 3層	土師質土器	坏	ほぼ完形	13.9 cm	4.9 cm	5.9 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 石英 長石 微量含む	やや不良	
169	11	Ⅳ区 E6 3層	土師質土器	坏	ほぼ完形	13.4 cm	5.8 cm	6.0 cm	外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	
169	12	Ⅳ区 E6 3層	土師質土器	坏	底 1/4 以上			7.0 cm	外；淡黄色 5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	やや不良	
169	13	Ⅳ区 C5 2層	土師質土器	坏	底完形			7.8 cm	外；淡黄色 2.5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑
169	14	Ⅳ区 C6 2層	土師質土器	小皿	1/2 以上	7.2 cm	1.4 cm	5.4 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/6	1 mm以下 雲母 石英 長石 微量含む	良好	
169	15	Ⅳ区 C6 2層	土師質土器	小皿	1/2 以上	7.2 cm	1.7 cm	5.0 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/6	精良	やや不良	
169	16	Ⅳ区 E5 2・3層	土師質土器	小皿	1/4 以上	8.6 cm	1.9 cm	3.9 cm	外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
169	17	Ⅳ区 E6 3層	土師質土器	小皿	1/2 以上	9.2 cm	2.0 cm	4.5 cm	外；淡橙色 5YR8/4	2 mm以下 石英 微量含む	やや不良	
169	18	Ⅳ区 D5 3層	土師質土器？	小壺	小片				外；浅黄橙色 7.5YR8/6	精良	不良	
169	19	Ⅳ区 D5 3層	土師質土器	高台付坏	1/4 以上	10.5 cm	3.3 cm	4.8 cm	外；橙色 5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 若干含む	やや不良	
169	20	Ⅳ区 D5 3層	土師質土器	高台付坏	完形	9.3 cm	3.5 cm	4.4 cm	外；にぶい黄橙色 10YR7/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	やや不良	
169	21	Ⅳ区 C6 2層	土師質土器	小皿	ほぼ完形	7.3 cm	1.4 cm	5.3 cm	外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	
169	22	Ⅳ区 D5 3層	白磁	椀	小片	(14.0) cm			外；灰白色 10Y8/1 内；灰白色 7.5Y8/1		良好	内外；釉 太宰府分類Ⅴ～Ⅶ類
169	23	Ⅳ区 D5 3層	白磁	椀	小片	(14.0) cm			外；灰白色 10Y8/1	1 mm以下 黒色粒子 微量含む	良好	内外；釉 太宰府分類Ⅳ類
170	1	Ⅳ区 C5 2層	石器	砥石	1/2 以上	長；(9.4) cm	巾；5.0 cm	厚；3.2 cm	外；灰白色 N8/			凝灰岩製 重量 304.29 g

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
170	2	Ⅳ区 E6 3層	石器	砥石	完形	長；16.0 cm 巾；4.0 cm 厚；2.5 cm			外；明オリーブ灰 2.5GY7/1			凝灰岩製 重量 257.20 g
170	3	Ⅳ区 D5 3層	鉄器	刀子・刀	小片	長；(9.8) cm 巾；2.2 cm 厚；0.7 cm						
170	4	Ⅳ区 D5 3層	鉄器	不明鉄器	小片	長；(4.1) cm 巾；1.8 cm 厚；(0.7) cm						刃部の有無は不明
170	5	Ⅳ区 D6 2・3層	鉄器	釘	小片	長；(5.4) cm 巾；0.6 cm 厚；0.6 cm						
174	1	Ⅳ区 SI01 1層	土師器	甕	1/4 以上	13.6 cm			外；淡橙色 5YR8/4 内；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
174	2	Ⅳ区 SI01 1層	土師器	甕	1/2 以上	16.0 cm			外；橙色 5YR7/6 内；橙色 5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；煤痕 胎土；大東B類
174	3	Ⅳ区 SI01 1層	土師器	甕	ほぼ完形	16.4 cm			外；淡橙色 5YR8/4 内；浅黄橙色 7.5YR8/3	2 mm以下 石英 長石 白色粒子 多く含む	良好	外；黒斑・煤痕 胎土；小谷式的 被熱痕顕著
174	4	Ⅳ区 SI01 1層	土師器	甕	完形	15.2 cm	25.6 cm		外；にぶい橙色 5YR7/4 内；橙色 5YR7/6	2 mm以下 石英 白色 粒子 多く含む	良好	外；煤痕 胎土；大東B類？
174	5	Ⅳ区 SI01 P1	玉作 関連遺物？	剥片	完形	長；3.6 cm 巾；2.4 cm 厚；1.1 cm			外；灰白色 7.5Y8/1			頁岩系石材 重量 7.50 g
174	6	Ⅳ区 SI01	石器	敲石	完形	長；11.6 cm 巾；10.8 cm 厚；4.4 cm			外；灰白色 N			花崗岩製 重量 779.02 g
177	1	Ⅳ区 SI02	土師器	甕	1/2 以上	12.6 cm	20.8 cm		外；淡黄色 2.5Y8/4	2 mm以下 石英 長石 白色粒子 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
177	2	Ⅳ区 SI02	土師器	甕	1/6 以上	18.0 cm			外；灰白色 10YR8/2 内；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
177	3	Ⅳ区 SI02	土師器	甕	小片	(16.0) cm			外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 雲母 石英 長石 若干含む	良好	内；煤痕
177	4	Ⅳ区 SI02 床直上	土師器	甕	1/4 以上	18.6 cm			外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；大東B類
177	5	Ⅳ区 SI02 1層	土師器	小形丸底壺	胴 1/2 以上	9.0 cm	9.5 cm		外；浅黄橙色 10YR8/3	2 mm以下 石英 長石 白色粒子 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；大東B類
177	6	Ⅳ区 SI02	土師器	小形丸底壺	1/4 以上	8.8 cm	10.7 cm		外；灰白色 10YR8/2	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	胎土；小谷式的
177	7	Ⅳ区 SI02	土師器	小形丸底壺	完形	8.0 cm	8.2 cm	2.0 cm	外；灰白色 10YR8/2	2 mm以下 石英 長石 白色粒子 微量含む	良好	内外；黒斑 胎土；大東B類？
177	8	Ⅳ区 SI02	土師器	小形丸底壺	胴 1/2 以上				外；灰白色 2.5Y8/1	2 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	内外；黒斑 胎土；小谷式的
177	9	Ⅳ区 SI02	土師器	高坏	脚完形	17.4 cm	13.7 cm	11.8 cm	外；灰白色 2.5Y8/2 内；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	胎土；小谷式的
177	10	Ⅳ区 SI02	土師器	高坏	ほぼ完形	13.0 cm	12.4 cm	9.2 cm	外；淡橙色 5YR8/4 内；同	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；大東B類
177	11	Ⅳ区 SI02	土師器	高坏	ほぼ完形	17.0 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	内外；黒斑 胎土；小谷式的
177	12	Ⅳ区 SI02	土師器	高坏	1/4 以上	18.0 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/3 内；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	胎土；小谷式的
177	13	Ⅳ区 SI02 床面付近	土師器	鉢	1/2 以上	16.0 cm	5.0 cm		外；浅黄橙色 10YR8/3 内；浅黄橙色 10YR8/4	1 mm以下 白色粒子 微量含む	良好	
177	14	Ⅳ区 SI02	土製品	土製勾玉	完形	長；7.1 cm 巾；2.0 cm 厚；2.4 cm			外；淡黄色 7.5Y8/4	1 mm以下 雲母 石英 長石 若干含む	良好	未製品
180	1	Ⅳ区 SI03 1層	土師器	壺	1/6 以上	20.6 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/3	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；黒斑 胎土；小谷式的
180	2	Ⅳ区 SI03	土師器	壺	1/2 以上	18.0 cm			外；淡黄色 2.5Y8/4	2 mm以下 石英 長石 白色粒子 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；大東B類
180	3	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/2 以上	13.2 cm	24.6 cm		外；にぶい橙色 7.5Y7/4 内；同	3 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；黒斑・煤痕 胎土；大東B類
180	4	Ⅳ区 SI03 床面直上	土師器	甕	1/4 以上	19.4 cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/3 内；淡黄色 2.5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	内外；煤痕 胎土；小谷式的
180	5	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/6 以上	15.6 cm			外；にぶい橙色 7.5YR7/3	2 mm以下 石英 長石 多く含む	やや不良	内外；煤痕 胎土；大東B類？
180	6	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/4 以上	17.6 cm			外；橙色 7.5YR7/6	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	やや不良	胎土；大東B類
180	7	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/2 以上	12.4 cm			外；灰黄色 2.5Y7/2 内；浅黄色 2.5Y7/2	2 mm以下 白色粒子 多く含む	良好	内外；煤痕 胎土；大東B類
180	8	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/4 以上	15.6 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/6 内；同	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；煤痕・大東B類 焼成後穿孔

Fig	番号	出土地点	種別	器種	遺存	口径	器高	底径	色調	胎土	焼成	備考
181	1	Ⅳ区 SI03 床面直上	土師器	甕	1/4 以上	16.0 cm			外；橙色 7.5YR6/8	2 mm以下 石英 長石 多く含む	やや不良	外；煤痕 胎土；大東B類
181	2	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/6 以上	14.0 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 石英 白色粒子 若干含む	良好	内外；煤痕
181	3	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/2 以上	16.2 cm			外；明黄褐色 10YR7/6	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	やや不良	胎土；大東B類
181	4	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/6 以上	15.2 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/6	2 mm以下 石英 長石 多く含む	やや不良	外；黒斑
181	5	Ⅳ区 SI03 1 層	土師器	甕	頸 1/2 以上	16.4 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3 内；淡黄色 2.5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；黒斑 胎土；大東B類
181	6	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/2 以上	13.2 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/3 内；浅黄橙色 7.5YR8/3	1 mm以下 石英 長石 白色粒子 若干含む	良好	外；黒斑 胎土；大東B類
181	7	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/6 以上	14.4 cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/3	2 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；黒斑
181	8	Ⅳ区 SI03 1 層	土師器	甕	1/4 以上	14.0 cm			外；にぶい褐色 7.5YR6/3	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	外；煤痕
181	9	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/6 以上	14.8 cm			外；淡黄色 7.5Y8/4 内；淡黄色 7.5Y8/4	3 mm以下 石英 長石 白色粒子 若干含む	良好	胎土；大東B類
181	10	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/4 以上	17.0 cm			外；にぶい橙色 7.5YR7/4 内；にぶい橙色 7.5YR7/4	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	内外；煤痕 胎土；大東B類
181	11	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/2 以上	16.8 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/4	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	胎土；大東B類
181	12	Ⅳ区 SI03 1 層	土師器	甕	1/6 以上	14.0 cm			外；橙色 7.5YR7/6 内；橙色 7.5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 白色粒子 若干含む	やや不良	外；煤痕 胎土；大東B類
181	13	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/6 以上	15.4 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/4	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	内外；黒斑 胎土；小谷式的
181	14	Ⅳ区 SI03	土師器	甕	1/4 以上	16.4 cm			外；橙色 7.5YR6/6	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	やや不良	胎土；大東B類？
182	1	Ⅳ区 SI03 P1	土師器	甕	1/2 以上	12.0 cm			外；灰白色 2.5Y8/2 内；同	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	外；煤痕 胎土；小谷式的
182	2	Ⅳ区 SI03	土師器	小形丸底壺	1/2 以上	8.0 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	胎土；小谷式的
182	3	Ⅳ区 SI03	土師器	壺	1/4 以上	12.6 cm			外；橙色 7.5YR6/6	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	外；煤痕
182	4	Ⅳ区 SI03 1 層	土師器	壺	ほぼ完形	10.4 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/6	2 mm以下 石英 長石 白色粒子 若干含む	良好	胎土；大東B類
182	5	Ⅳ区 SI03	土師器	小形丸底壺	1/2 以上	7.2 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 微量含む	良好	内外；煤痕・黒斑
182	6	Ⅳ区 SI03	土師器	手捏ね土器	ほぼ完形	8.0 cm	3.8 cm		外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	
182	7	Ⅳ区 SI03	土師器	低脚坏？	脚 1/2 以上	8.0 cm			外；にぶい黄橙色 10YR7/4	2 mm以下 白色粒子 若干含む	良好	内外；煤痕 胎土；大東B類
182	8	Ⅳ区 SI03 床面直上	土師器	高坏	1/2 以上	14.4 cm			外；橙色 5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 やや多く 含む	良好	内外；煤痕・黒斑 胎土；大東B類 被熱痕顕著
182	9	Ⅳ区 SI03	土師器	高坏	1/4 以上	14.8 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3 内；灰白色 2.5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 若干含む		胎土；小谷式的
182	10	Ⅳ区 SI03 1 層	土師器	坏	小片	(14.0) cm			外；淡黄色 2.5Y8/3 内；灰白色 2.5Y8/2	1 mm以下 石英 長石 白色粒子 やや多く含 む	良好	内外；黒斑
182	11	Ⅳ区 SI03 床面直上	土師器	高坏	1/4 以上	15.2 cm			外；灰白色 2.5Y8/2	2 mm以下 石英 長石 やや多く 含む	良好	胎土；小谷式的 被熱により赤変
182	12	Ⅳ区 SI03 1 層	土師器	高坏	脚 1/2 以上			8.4 cm	外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 石英 長石 白色粒子 微量含む	良好	胎土；大東B類
182	13	Ⅳ区 SI03	土師器	高坏	脚 1/2 以上			10.8 cm	外；淡黄色 2.5Y8/3	2 mm以下 石英 長石 多く含む	良好	被熱により赤変
182	14	Ⅳ区 SI03	土師器	高坏	脚 1/2 以上			12.8 cm	外；浅黄橙色 10YR8/3	1 mm以下 石英 長石 若干含む	良好	胎土；小谷式的
182	15	Ⅳ区 SI03	玉作関連遺物	碧玉製剥片	完形	長；3.6 cm	巾；2.4 cm	厚；0.8 cm	外；暗緑灰色 10G4/1			花仙山産碧玉 重量 7.03 g
182	16	Ⅳ区 SI03	石器	打製石斧	完形	長；13.3 cm	巾；7.2 cm	厚；1.9 cm	外；灰白色 10Y8/1			流紋岩製 重量 281.18 g
186	1	Ⅳ区 F7 4 層	土師器	甕	1/6 以上	16.0 cm			外；浅黄橙色 7.5YR8/4 内；橙色 5YR7/6	2 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	胎土；大東B類
186	2	Ⅳ区 E5 4 層	土師器	甕	1/4 以上	16.8 cm			外；淡黄色 2.5Y8/3	1 mm以下 石英 長石 やや多く含む	良好	